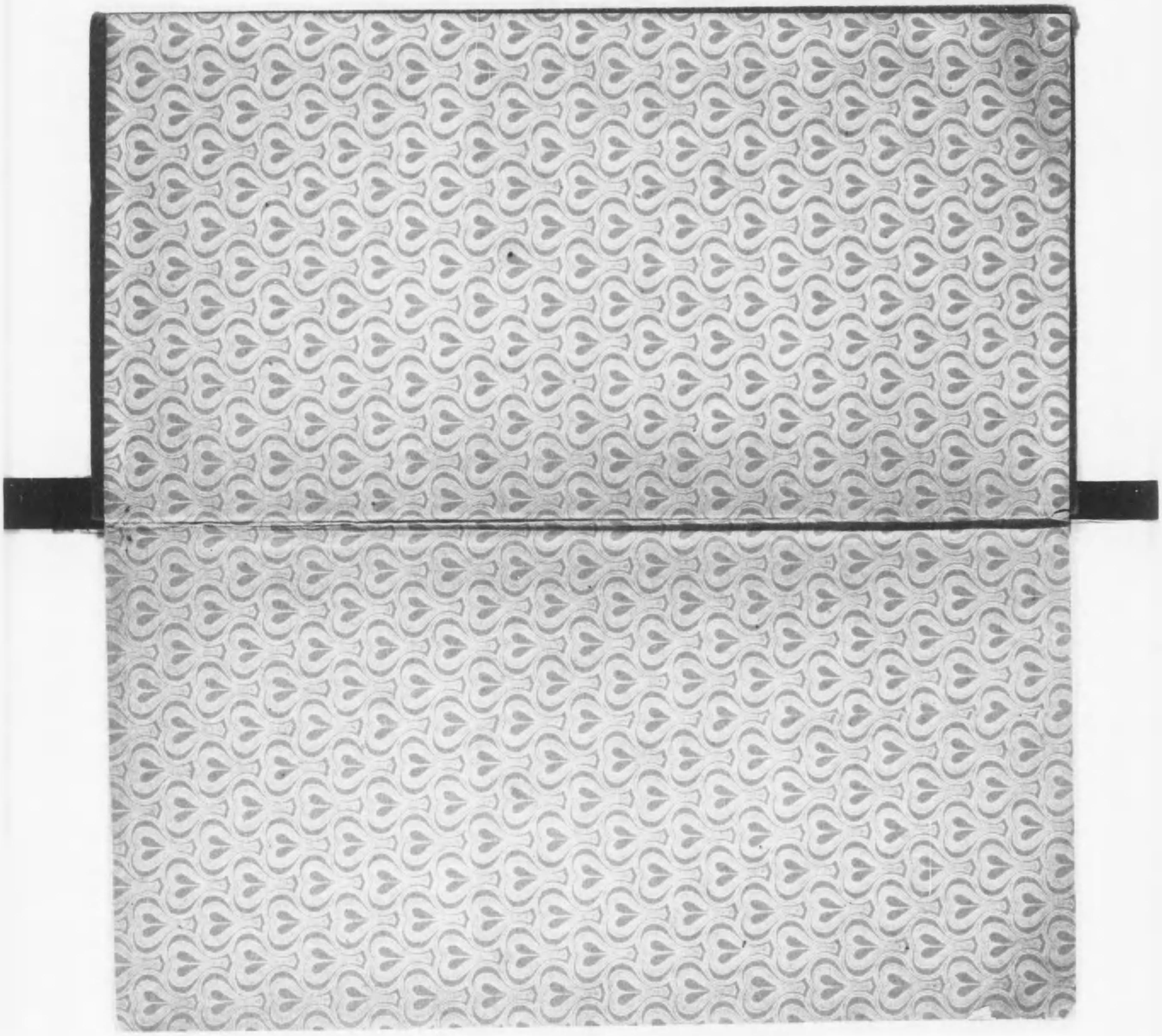
377-47
1200601182251

始



文学士 佐野保太郎著

增鏡新釋

東京

有精堂書店

377
47

凡例

一、本書の本文は、主として國史大系本によつた。但し讀み易い爲、假名を漢字に直し、又文字・假名遣等の誤謬は正してをいた。引用文に於ても同樣である。

二、註釋の中、冠頭のものは、比較的簡單なもの、本文の間に挿んだのは、長い句に亙るもの、或は引用を要するものなど、比較的複雜なものである。但し解釋は、なるべく多くの語に亙つて、遺漏のないやうにと思つた結果、誤解の恐のない限り、各語句の說明は、出來るだけ簡潔にした。

三、欄外上下に(1)(2)等の數字を附して、順序を示したのは、他の多くの註釋書類に見る如く、本文と註釋とが別々になつて、往々檢索に迷ふやうなことのない爲である。

四、本文中、所々右側に七號活字で、人名を記入したのは、そこの記事の行爲者を

I種
W
1200601182251

示したのである。其の他、七號活字で記したものは、皆說明を助けるもので、古い本にはないものである。

五、卷頭の略年表は、この書に必要な年代順を示したのである。極めて簡單なものではあるが、本文を讀むに當つて、之を參照せられれば、多少の便利はあらうと思ふ。

大正七年三月

著者

解題

一

古く朝廷で出來た歷史の本には、日本書紀以下所謂六國史がある。これは皆漢文で書いたもので、立派なものだが、後世假名文の發達した時代には、むづかしくもあり、面白くもなくなつたので、遂に又假名文を以て小說風に歷史を書くやうになつた。かくて第一に現はれたのは「大鏡」である。そして之に倣つて「今鏡」が出來、「水鏡」が出來、次で又この「增鏡」が出來たのである。

さて「大鏡」の發端を見ると、左の如くある。

先頃（さいつころ）雲林院の菩提講に詣でて侍りしかば、例の人より（い）は、こよなう年老い、うたてげなる翁ふたり逢ひ行きあひて、同じ所に居ぬめり。あはれに同じやうなるもののさまかな、と見侍りしに、此等うち笑ひ見かはして、いふやう、「年頃、昔の人に對面して、いかで世の中の見聞く事どもを聞えあはせむ、この只今の入道殿下（道長）の御有樣をも申しあはせばやと思ひしに、あはれに嬉しくも逢ひ申したるかな。

今ぞ心安く黄泉路もまかるべき。おぼしき事いはぬは、げにぞ腹ふくるゝ心地しける。かゝればこそ、昔の人は、ものいはまほしくなれば、穴を掘りては言ひ入れ侍りけめ、とおぼえ侍る。かへすがへす嬉しく對面したるかな。さても幾歳にかなり給ひぬる」と云々。

かうして名乘る所を見ると、一人は公の世繼といつて百五十歳、今一人は夏山の繁樹といつて、百四十歳、嫗はその後妻である。そして此等の老人は、講師待つ間の徒然に、いで、さうざうしきに、いざ給へ、昔物語して、このおはさう人々に、さは古への世は、かくこそありけれと、聞かせ奉らむ」と言つて、自分の見聞した昔の話をすることになる。卽ちかうして、歷史の話を書いたのである。

ところが、「今鏡」は此の體裁を襲いで、

> 霜生の十日あまりの頃、同じ心なる友だち、數多誘ひて、初瀬に詣で侍りし序に、よき便に寺めぐりせむとて、大和の方に旅ありき日頃するに、路遠くて、日もあつければ、木蔭に立ちよりて、休むとて、むれゐる程に、みづ歯さしたる女の、杖にかゝりたるが、女の童の、花筐に、早蕨折り入れて脇にかけたる一人具して、その木の下に至りぬ。遠き程にはあられど、苦しくなりて侍れば、おはしあへる所はばからしけれど、都の方よりものし給ふにや、昔も戀しければ、暫もなづさひ奉らむ」といふ氣色も、

口すげみわなゝくやうなれど、年よりたる程よりも、昔おぼえて、憎げもせず。云々。（傍は本文六頁を見よ

次に出た「水鏡」の發端も、先づは此等と大同小異である。隨つてこの「增鏡」も、その發端の體裁は、前三者を摸倣したものである。但し全篇の體裁からいへば、前三者は列傳體で、後者は編年體である。又內容の年代によつて分つと、四書は左の順序となる。

水　鏡　神武天皇——仁明天皇

大　鏡　文德天皇——後一條天皇

今　鏡　後一條天皇——高倉天皇

增　鏡　後鳥羽天皇——後醍醐天皇

以上の四書を合せて、世に「四鏡」といふ。又右の中から「今鏡」だけを拔いて、「三鏡」ともいふ。但し「鏡」とは、漢語の龜鑑などいふと同意で、手本のこと、卽

ち過去における成敗の跡を以て、將來の手本としようといふ意味である。

二

「増鏡」の作者及びその年代については、まだ確説と認むべきものはないが、伴信友の言つて居る所は、大に耳を傾けるに足るものである。

或人の藏てる増鏡古寫本の奥書に、

永和二年卯月十五日

この本女房の寫し書きにて侍るを、其まゝ寫し侍る程に、如法不審なることども侍り。いとゞ餝書も多く侍らむ。よき本をたづねて、靜かに直し侍るべし。(應永九年六月三日寫し畢りぬ)。

此本は、永和二年に云々と奥書せる女房の寫し書きの本を、應永九年に寫し畢りたるものにして、めでたき本なり。筆者は詳かならず。さて此増鏡の撰者、慥かなる書に見あたらず。俗には、一條冬良公の撰なりと言傳ふめれど、公卿補任を按ずるに、公は永正十一年三月廿七日五十一歳にて薨じ給へれば、永和二年よりは八十餘年、應永九年よりは六十餘年の後に當りて、寛正五年に生れ給ひたるべければ、時世更に合はざれば、信ずべからず。さて此書を撰び給へる頃は、かの古本の奥書に記せる永和二年は、此書に書きとぢめたる正慶二年の後四十八年に當れり。その間に出來たる書なることは決し。かくてなほ考ふるに、此書の終の「くめのさら山」の巻に、正慶二年、後醍醐天皇の隱岐國より還幸の事まで書

てゝ、「むかしだに沈む恨を隱岐の海に波立ちかへる今ぞかしこき」といひ、又大塔宮還俗して、將軍の宣旨を蒙り給ひ、四條中納言隆資卿の剃髪して、身を隱し給ひしも、髪を生し給へる由をいひて、「墨染の色ともかへつつき草のうつれば變る花の衣に」といふ歌にて筆をとぢめたる趣、卽ちその御世にありつる人の心しらひして書けるものと見えたり。北朝と定まりて後、書きたらむには、云々の事にて筆をとどむべきにあらず。(比古婆衣巻六)

三

本書の記事は、壽永二年、後鳥羽天皇卽位に始まり、元弘三年、後醍醐天皇の京都還幸に終つて居る。その間百五十餘年、之を二十章に分つて、年代順に記したのである。卽ち、

一 おどろの下　後鳥羽壽永二年——順徳建保四年(三十九年間)
二 新島守　順徳建保五年——仲恭承久二年(三年間)
三 ふぢ衣　後堀河貞應元年——四條仁治元年(十八年間)
四 三神山　四條仁治二年——後嵯峨仁治三年(二年間)
五 内野の雪　後嵯峨寛元年——後深草寶治元年(五年間)
六 煙の末々　後深草寶治二年——同建長七年(八年間)

七 おりゐる雲　後深草康元元年——同正嘉二年（四年間）
八 山のもみぢ葉　龜山正元元年——同文永二年（七年間）
九 北野の雪　龜山文永三年——同四年（二年間）
一〇 あすか川　龜山文永五年——同十年（六年間）
一一 草まくら　後宇多文永十一年——同建治二年（三年間）
一二 老のなみ　後宇多建治三年——同弘安十年（十一年間）
一三 今日の日影　伏見正應元年——同三年（三年間）
一四 つげの小櫛　伏見正應四年——後二條德治元年（十六年間）
一五 うら千鳥　後二條德治二年——花園文保二年（十一年間）
一六 秋のみ山　後醍醐文保二年——同正中元年（七年間）
一七 春のわかれ　後醍醐正中九年——同嘉暦二年（四年間）
一八 村時雨　後醍醐嘉暦二年——同元弘元年（五年間）
一九 久米のさら山　後醍醐元弘二年（一年間）
二〇 月草の花　後醍醐元弘三年（一年間）

各章の題は、皆その中の歌によつて、つけたのである。ところで、この書の内容が、承久の亂に始まつて、建武中興に終つて居ることは、

たとひ、それが、作者自身の言ふ如く（本文九頁參照）「いや世繼」に對する關係上から來たこととはいへ、何となく其の間には、本書の作者が、武家に對する反感や南朝に對する同情のひそんで居るやうに思はれる。

併し皇室に關する事でも、時には隨分露骨な書き方をした所がある。かういふ事は今日の目から見れば、隨分不敬なやうであるが、昔の人は、今日の人のやうに、さうむづかしくは考へなかつたのである。

四

この書の文章は、當時からいへば、矢張り一種の擬古文である。勿論知らずの間に、當時代の特色は出て居るけれども、作者自身の理想としては、矢張り平安朝の名文を摸倣しようとしたのであらう。隨つて之に對する苦心の痕は、歷々として見えるけれども、時には又餘り凝り過ぎた結果「網代に氷魚のよるもさながらのゝしり明してかへらせ給ふ」（本文一九四頁）などいふやうな所もある。

かうして一方には、可なり餘計な修飾もあり、冗漫な所もあるが、時には又語を省いた爲、誰がどうしたのか、どういふ事を描いて居るのか、甚だ曖昧な所がある（勿論これは、古いものには有り勝ちのことであるが）。殊に一句の中に自他の呼應を誤つたものが少くない。是は大抵その度毎に注意はしたが、うつかりすると意味を誤る。係結の誤なども少くはない。

尙ほ此の書には、大きな缺點として、記事の重複がある。單に事實の重複といふばかりでなく、文章も殆ど同じ所がある。文章そのものについて見れば、別人の手になつたものとも思はれないから、或は作者の下書などが紛れ込んで、そのまゝ傳はつたものかも知れない。いづれにしても、嚴密にいへば、何れかを省くべきだが、こゝには妄りに刪除せず、元のまゝを存しておいた。

其の他小さい事實の誤は幾何（いくら）もあるが、其等については、一々註釋に記しておいた。

五

此の書は比較的廣く讀まれるものであるが、註釋書は極めて少い。否殆どないといつてもよい位である。卽ち明治以前には一つもなく、明治になつて、始めて和田・佐藤兩氏の「增鏡詳解」が出來た位である。勿論その後、一二出たものがないではないが、要するに、この「詳解」によつたものである。この「新釋」を撰むについても、勿論かの「詳解」には、負ふ所が極めて多い。併し只かの書の註釋をそのまゝ寫したものでないことだけは斷つておく。

最後に、歷史上の事實について多少くはしく研究しようとする人の爲、手近に得られる參考書を紹介しておく。

先づ人によつて事實を調べ、更に他の參考書を見ようとするには、「大日本史」が一番便利である。次に歷史的事實を年代順に見ようとするには、「百練抄」と「續史愚抄」とがある。共に經濟雜誌社の國史大系（「續史愚抄」は續國史大系）に收めてあ

るものである。次に人物の年齢・任官の年代などを調べるには、「公卿補任」といふものがある。これも國史大系の中にあるから、その時代の所を開いて、所要の人物を索めればよい。

略年表

紀元	年號	天皇
一八四二	壽永元	安德
一八四三	二	
一八四四	三	
一八四五	四	後鳥羽
一八四六	文治二	
一八四七	三	
一八四八	四	
一八四九	五	
一八五〇	建久元	
一八五一	二	
一八五二	三	
一八五三	四	
一八五四	五	
一八五五	六	
一八五六	七	
一八五七	八	
一八五八	九	土御門
一八五九	正治元	
一八六〇	二	
一八六一	建仁元	
一八六二	二	
一八六三	三	
一八六四	元久元	
一八六五	二	
一八六六	建永元	
一八六七	承元元	
一八六八	二	
一八六九	三	順德
一八七〇	四	
一八七一	建曆元	
一八七二	二	
一八七三	建保元	
一八七四	二	
一八七五	三	
一八七六	四	
一八七七	五	
一八七八	六	仲恭
一八七九	承久元	
一八八〇	二	
一八八一	三	後堀河
一八八二	貞應元	
一八八三	二	
一八八四	元仁元	
一八八五	二	
一八八六	嘉祿元	
一八八七	二	
一八八八	安貞元	
一八八九	二	
一八九〇	寬喜元	
一八九一	二	
一八九二	三	
一八九三	貞永元	
一八九四	天福元	
一八九五	文曆元	
一八九六	嘉禎元	
一八九七	二	
一八九八	三	

| | | |

いづれにもあれ、古書の注釋を作らんと、早く心がくべし。物の注釋をするは、すべて大に學問のためになることなり。――書をよむに、たゞ何となくてよむときは、いかほど委しく見んと思ひても、限りあるものなるに、自ら物の注釋をものせんと、心がけて見るときには、何れの書にても、格別に心のとまりて、見やうのくはしくなるものにて、それにつきて、又外にも得る事の多きものなり。（本居宣長）

增鏡新釋目次

序……一
第一　おどろの下……一三
第二　新島守……六四
第三　ふぢ衣……一〇九
第四　三神山……一三九
第五　內野の雪……一五五
第六　煙の末々……一九五
第七　おりゐる雲……二四一
第八　山のもみぢ葉……二六四
第九　北野の雪……二九二
第十　あすか川……三一五
第十一　草まくら……三六〇
第十二　老のなみ……三九一
第十三　今日の日影……四四九
第十四　つげの小櫛……四八二
第十五　うら千鳥……五一七
第十六　秋のみ山……五三四
第十七　春の別れ……五七一
第十八　むら時雨……五九七
第十九　久米のさら山……六四二

第二十　月草の花……六九七

狩衣……一九三
寢殿造の圖……二〇〇
女の正裝……二四六
鞠のかゝり……二五七

立涌……二五〇
京都の圖……二七二
内裏の圖……二七三

●中の五日　十五日。○薪盡きにし日　釋迦入滅の日ないふ。○むつまじさに　なつかしさに。○嵯峨　山城葛野郡　○詣でて　この書の作者自らが。○かゝりて　寄りすがつて。○とばかりあいて　暫くして。○たけく思ひ立ちつれど　心強くも參詣を思ひ立つて來たけれども。○局　部屋

增鏡新釋

陸軍教授
文學士　佐野保太郎著

序

二月の中の五日は、鶴の林に薪盡きにし日なれば、かの如來二傳の御かたみのむつまじさに、心の中に唱へて拜み奉る。傍に八十「常在靈鷲山」など、にもや餘りぬらむと見ゆる尼ひとり、鳩の杖にかゝりて參れり。とばかりありて、「尼」たけく思ひ立ちつれど、いと腰痛くて堪へ難し。今宵はこの局にうち休みなむ。坊へ行きて、

清涼寺の中にあるもの。○坊　僧の住む所。○具したる　供につれた。○つきづきしき　似つかはしい。

御燈明の事などいへ」とて、具したる若き女房の、つきづきしき程なるをば返しぬめり。

【鶴の林】　印度拘尸那迦羅城（Kushinagara）、跋提（Hiraṇyavatī）河畔にあつた沙羅樹の林。釋迦がこゝで死んだ時、樹が枯れて、忽ち白鶴のやうになつたといふよりいふ。

【如來二傳の御かたみ】　「如來」は梵語 Tathāgata の譯、「眞如より來生する」意。佛陀のこと。「二傳」は印度より支那を經て日本に傳つたこと。「かたみ」はすべて思ひ出の種となるもの。齋然が入宋して持つて歸つた佛像をいふ。

【鳩の杖】　後漢書禮儀志に「民年七十者。授ㇾ之以ㇾ玉杖。以ㇾ鳩鳥ㇾ爲ㇾ飾。欲ㇾ老人如ㇾ鳩不ㇾ噎也。」噎は食の氣をふさいで通ぜぬこと。つまり老人の健康を祈る爲の杖である。

【返しぬめり】　返したやうだ。メリはミエアリの約。事物の情態がさう見えると推量していふ助動詞。と見える、様子である、らしいなどの意。

●花やか　パッとして美しきをいふ。○差し入りたる　堂の中へ。○うち見やりて　ウチは接頭語。見やるは遠くのものを眺める。○寄り居たる氣色　片隅に寄り添つて居る樣子。○なまめかしく　上品で。○心あらむかし　物の趣を解するらしい。カシは意味を強める助詞。○近く寄りて　記者がその尼の傍へ近く寄つて。○ありつる人　そこに居た人。連れて來て居た女房を指す。○歸り來む程　歸つて來るまでの間　○御伽

【常在靈鷲山】　法華經壽量品に「於ㇾ阿僧祇劫。常在ㇾ靈鷲山及諸餘住處。衆生見ㇾ劫盡大火所ㇾ燒時。我此土安穩天人常充滿。」とあるもの。「靈鷲山」は印度にある山、佛の法華經を說いた所。佛の肉身は死滅しても、その實體は永久にこの山にあつて、說法するといふ意。

「釋迦牟尼佛」と度々申して、夕日の花やかに差入りたるを（尼）うち見やりて、「あはれにも山の端近く傾きぬめる日影かな。我が身の上の心地こそすれ」とて、寄り居たる氣色、何となくなまめかしく、心あらむかしと見ゆれば、近くよりて、「何處より詣で給へるぞ。ありつる人の歸り來む程、（尼）（尼）御伽せむはいかゞ」などいへば、「このわたり近く侍れど、年の積りにや、いと遙けき心地し侍る、あはれになむ」といふ。「さても、いくつにかなり給ふらむ」と問へば、「いさ、よくも我ながら思ひ給へわかれぬ程になむ。百歳にもこよ

なく餘り侍りぬらむ。來し方行く先例もありがたかりし世のさわぎにも、この御寺ばかりは恙なくおはします。猶ほやむごとなき如來の御光なりかし」などいふも、古代にみやびかなり。

【釋迦牟尼佛】「釋迦」は梵語 Śākya。印度迦毗羅伐窣堵(Kapilavastu)國に住した種族の名。「牟尼」(Muni)は寂默・仙人・智者等と譯す。即ち釋迦種族の智者の意である。西紀前五五八年生。幼名悉達多(Siddhārtha)。耶輸陀羅(Yaśodharā)といふ姫を娶つて、一子羅睺羅多(Rāhula)を生んだが、十九歳(或は二十九歳といふ)感ずる所あつて、世を逃れ、雪山に入り、苦行數年、後又山を出て、遂に尼連禪河畔の菩提樹の下に廓然大悟し、それからは衆生濟度の爲、諸所を遊歴して佛教を說くこと四十年、西紀前四七九年、壽八十を以て入滅。

【あはれにも山の端近く云々】「傾きぬめる」は傾いたらしい。あゝもう日影が山の端近く傾いたらしい。丁度自分の身の上のやうな氣がする。夕日の傾きかけたのを我が身の年老い、死に近づいたのに比したのである。

話の相手などとして退屈を慰めること。○このわたり　この邊。○年の積りにや　「積り」は年の多くなる意。年のよつたせぬか。○思ひ給へわかれぬ　ハッキリとは分らない。○こよなく　よほど。○猶ほ　矢張り。○やむごとなき　ありがたく尊い。○御光　御德。○古代　古めかしく上品なこと　○みやびか　みやびやか。上品。

●まめやかに　しみ〴〵と。

ある。

【いさ】「いや、どうだか」などの意。大抵下に「知らず」の語が來る爲、萬葉集に「不知代經浪」など**イサ**と讀ませた所がある。こゝは「いや、我ながら分らぬ位だ」などの意。

【思ひ給へわかれぬ】「わかれぬ」(わかる。う、下二)は分らない。「給ふ」は今日普通用ひるものとは違つて、下二段に活き「乘る」などいふと同じく、自己の動作を表はす動詞につけて、他を尊敬する意を表はす。但し大抵「見る」「思ふ」「聞く」の三語につき、こゝのやうに二語から出來た熟語に附く場合には、その二語の下に附かず、中間に入る習慣である。

【ありがたかりし世のさわぎ】「ありがたし」は稀なる意。即ち文字通りに有りにくい意で、今日用ふる感謝すべきの意ではない。「さわぎ」は騷動。古今に稀な大騷動の意。即ち以下の本文に出て來る元弘の亂などを指す。

年の程など聞くも、珍しき心地して、かゝる人こそ昔物語

もすなれと、思ひ出でられて、まめやかに語らひつゝ、「昔の事の聞かまほしきまゝに、年の積りたらむ人もがなと思ひ給ふるに、嬉しきわざかな。少しのたまはせよ。自ら古き歌など書きおきたるものの片端見るだに、その世にあへる心地するぞかし」といへば、すげみたる口うちほゝゑみて、「いかでか聞えむ。若かりし世に見聞き侍りしことは、こゝら の年頃に、うば玉の夢ばかりだになく、おぼほれて、何の辨へか侍らむ」とはいひながら、けしうはあらず、あへなむと思へる氣色なれば、愈〻いひはやして、「かの雲林院の菩提講に參りあへりし翁の言の葉をこそ、假名の日本紀にはすめれ。又かの世繼がうまごとかいひしつくも髪の物語も、人のもてあつかひぐさになれるは、御有樣のやう

○人もがな　人があればよい　○思ひ給ふるに　思つて居ましたところが。○嬉しきわざかな　あなたに逢つたのは實に嬉しいことである。○のたまはせよ　お話下さい。○すげみたる　すげむ（マ、四）は老人の齒が拔けた口つきないふ。○いかでか聞えむ　どうして申上げることが出來よう　○こゝら　多く。○うば玉の　夢にかゝる枕詞。○おぼほれて　おぼほる（ラ、下二）。ぼけて。ぼんやりして。○辨へ　分別。○けしうはあらず　嫌でもない。○あへなむ「あへ」は敢ふ（ハ、下二）。構はない。差支ない。話してもよいの意。○氣色　樣子。○いひはやして　おだてて。

○雲林院　山城葛野郡。○菩提講　後生の　果報を　祈願する爲、法華經を講說し、佛名を稱する法會。○參りあへり　參りあつた。○うまごの孫。○つくも髪　老女の白髪の江浦草（つくも）に似たるをいふより、轉じて白髪の老女をいふ。○もてあつかひぐさ　愛讀書の意。○御有樣のやうなる人　あなたのやうな人　○猶ほのたまへ　矢張り（そんな遠慮などせずに）お話し下さい。○すかせば　うまくだまして機嫌を取れば。○さは心得べかめれど　サハは然は。卽ちすかされるのだとは思つて居ろらしいけれども。○愈〻口すげみがちにて　益〻讒通する樣をいふ。○その

なる人にこそ侍りけめ。猶ほのたまへ」などすかせば、さは心得べかめれど、愈〻口すげみがちにて、「そのかみは、實に人の齡も高く、膽強かりければ、それに隨ひて、魂も明かにてや、しか聞えつくしけむ。あさましき身は、徒らなる年のみ積れるばかりにて、昨日・今日といふばかりの事をだに、目も耳もおぼろになりにて侍れば、ましていと怪しき僻事どもにこそは侍らめ。そもさやうに御覽じ集めける古事どもはいかにぞ」と問ふ。

【自ら古き歌など書きたるものの片端云々】何となく、歌などを書いた古い物の片端を見てさへ、その時代に逢つたやうな氣のするものだ。まして生きた人から實際の話を聞いたら、どんなに面白いことであらうかの意。「自ら」は「見る」にかゝり、「古き」は「書きたるもの」にかゝる。「その世」は、その古い歌を書いた當時。

かみ　昔。○齢も高く　高齢に達する意で、長命するをいふ。○聟強がりければ　氣力が盛であつたから。○魂も明か　精神もハツキリして居る。○しかさういふ風に。○聞え盡してむ　長い物語をすつかり話し得たのであらう　○あさましき身　つまらぬ身　○昨日今日　極近い事の意。○まして　そんなに古い事を話すとなれば。○僻事　間違つた事。○古事　古書をいふ

●いさ　いや、よくは知らな

【雲林院の菩提講に參りあへりし翁の言の葉】　大鏡を指す。同書の初に「先頃雲林院の菩提講に詣でて侍りしかば、例の人よりはこよなく年老い、うたてげなる翁二人嫗と來あひて、同じ所に居ぬめり云々」とあり、その翁の一人を世繼、他を繁樹といふ。大鏡は此等の人の話を筆記したのであるから、こゝの翁はこの世繼を指す。

【假名の日本紀】　假名で書いた歷史の意。日本書紀は國史の代表物のやうに考へられて居たので、こゝはその名を只歷史の意に用ひたのである。但し日本書紀（日本紀といふも同じ）は漢文で書いてあるから、特に「假名の」といつたのである。

【かの世繼がうまごとかいひしつくも髮の物語】　今鏡を指す。同書の初に「つくも髮はまだ下し侍られど、佛の五つのいむ事を受けて侍れば、いかゞ浮きたる事は申さむ。云々。祖父はむげに暗しき者に侍りき。后の宮になむ仕へまつり侍りける。名は世繼と申しき」とあるによる。猶は解題を見よ。

「いさ、只おろ〳〵見及びしものどもは、『水鏡』といふに

いけれどもの意。○おろ〳〵　少々。不十分ながら。○水鏡　解題を見よ。○世繼　榮花物語をいふ。○あらゝかザッと。○大鏡　解題を見よ　○草子　廣く書籍の意。○延喜　醍醐天皇朝の年號。○堀河の先帝　先帝堀河の意。○今鏡　解題を見よ。○いや世繼　今傳らず。○隆信朝臣　藤原爲隆の子。歌をよくしまた書をよくす。○御程　御頃。○おぼつかなく　ハツキリしない。○おぼえ給へらむ所々　御記憶になつて居る所々。○御契　因緣。○いみじう　甚だ。○たど〳〵し　確かでない。○事のつゞき　事の來歷。○聞えざらむも　話さないのも。○おぼつかな

や。神武天皇の御代より、いとあらゝかに記せり。その次には『大鏡』、文德の古へより後一條の御門まで侍りしにや。又『世繼』とか四十帖の草子にぞ、延喜より堀河の先帝までは少しこまやかなる。又某の大臣の書き給へると聞き侍りし『今鏡』には、後一條より高倉院までありしなめり。まことや『いや世繼』は、隆信朝臣の、後鳥羽院の御位の御程までを記したりとぞ見え侍りし。その後の事なむ、いとおぼつかなくなりにける。おぼえ給へらむ所々にても、のたまへ。今宵誰も御伽せむ。かゝる人にあひ奉れるも、然るべき御契あらむものぞ」など語らへば、「そのかみの事は、いみじうたど〳〵しけれど、誠に事の續きを聞えざらむも、おぼつかなかるべければ、たえだえに少しなむ。僻事ども

かるべければ　分りにくからうからの意。○たえだえに少しなむ　きれぎれに少しづつ話しませう。**ナム**は下に「聞ゆべき」などの語があると見る。○さし直し給へ　**サシ**は接頭語。直し給へ。○かたはらいたきわざ　傍の人が氣の毒に思ふ程のこと。○かの古き事ども　前に掲げた昔の歴史を指す。○わなゝかし出でたるも　聲をふるはせながらいひ出したのも。○にくからず　愛嬌がある。○古代　古風でゆかしい所がある。

多からむかし。そはさし直し給へ。いとかたはらいたきわざにも侍るべきかな。かの古き事どもには、なぞらへ給ふまじうなむ」とて、

愚かなる心や見えむ増鏡

古き姿に立ちは及ばで

とわなゝかし出でたるも、にくからず、いと古代なり。「さらば、今のたまはむ事をも又書き記して、かの昔の面影に等しからむとこそはおぼすめれ」と答へて、

今もまた昔を書けば増鏡

古りぬる代々の跡に重ねむ

【世繼】　榮花物語をいふ。宇多天皇に筆を起し、堀河天皇寛治六年に至る間の歴史を書いたもの。著者は書籍目錄に藤原爲業とあり、又赤染衛門といふ説もある。○「世繼」とは歴史の意。「榮花物語」といふは主として藤原道長の榮華の樣を寫したから、後の人の名づけた名であらう。

【愚かなる心や見えむ云々】　「増鏡」は「十寸鏡」などとも書くが　**マスミカガミ**の略で、よくすんだ鏡の意である。今かうして増鏡に向つて見ると、昔の立派な姿、即ち大鏡や水鏡などには及ばず、却つて自分の愚かな心が映つて見えようの意。この書の名「増鏡」はこの歌から出たのである。

【今もまた昔を書けば云々】　今亦昔の事を書き記せば、其の時代の有樣が明かに鏡に映ることであらう。然らばそれを前代の諸種の歴史の跡に重れて世に殘さうの意。

第一　おどろのした

御門(みかど)始まり給ひてより、八十二代に當りて、後鳥羽院と申すおはしまししき。御諱は尊成(たかひら)、これは高倉院第四の御子、御母は七條院と申しき。修理大夫信隆のぬしの女(なすめ)なり。高倉院御位の御時、后の宮の御方に、兵衛督(ひやうゑのかん)の君とて仕うまつられしほどに、忍びて御覽じ放たずやありけむ、治承四年七月十五日に生れさせ給ふ。

【後鳥羽院】　高倉天皇第四の御子。

高倉
- 1 安徳　母建禮門院。文治元年平家滅亡と共に壇浦に於て崩御、御年八。
- 2 守貞　母七條院。建暦二年出家。御子後堀河踐祚の際太政天皇の尊號を受け、後高倉と稱す。貞應二年崩御、御年四十五。

(1)

●御門始まり給ひてより　神武天皇以來の意。○第四の御子　四男である皇子。○七條院　藤原殖子(たねこ)。後落飾して眞如智と號す。安貞二年薨ず。○修理大夫　修理職(しゅりしき)の長官。役所は大宮の東、陽明門大路の南にあつて、宮城の造營及び修繕を掌る所。○ぬし　氏などの意。ノウシの約であるから、嚴密にいへばノは入らないわけである。○后の宮　建禮門院のこと。○兵衛督の君　宮女の呼名。七條院がもとから呼ばれて居たのである。

●其の年の春の頃　治承四年二月十一日のこと。○建禮門院　名は德子。平清盛の女。承安元年十二月廿六日女御、同二年二月十日中宮、養和元年二月廿一日のこと。○建禮門院　名は德子。平清盛の女。承安元年十二月廿六日女御、同二年二月十日中宮、養和元

【后の宮の御方に云々】　「兵衛督の君」は七條院が女房として仕へて居た頃の呼名。父が兵衛督であるからいつたのである。「仕うまつる」は后の宮、即ち建禮門院に仕へる。「忍びて御覽じ放たず」は高倉院がひそかに御寵愛になり、側をはなすまいとせられた程であつたといふ。「生れさせ給ふ」は後鳥羽院が。即ち全體の意は、七條院が兵衛督の君といつて建禮門院に仕へて居た頃、ひそかに高倉院の御寵愛を得て後鳥羽院を生んだといふこと。

- 3 惟明　母少將局(平義範女)。出家して聖圓と稱す。承久三年薨去、御年四十三。
- 4 後鳥羽　母七條院。壽永二年踐祚、元暦元年卽位。承久亂後隱岐に流され、延應元年崩御、御年六十三。

其の年の春の頃、建禮門院后の宮と聞えし御腹の第一の御子　安德天皇三になり給ふに位を讓りて、御門(みかど)(高倉)はおり給ひにしかば、平家の一族(やから)のみ、愈〻時の花をかざし添へて、花やか

(2)

年十一月二十五日院號。○おり給ひ　御讓位になり。○時の花をかざし添へて　時運に際會して時めくをいふ。○揭焉　いちじるしく目に立つを。○もてなされ給はず　後鳥羽院は七條院の御腹で、平家と關係がないから、餘り大切にされなかつた。○又の年　翌年。○院さへ　頼みにされた父君の高倉院さへなくなられたので。○位などの御望　天位に卽かうなどいふ御希望。○さすらへ　流浪する。（サスラフは四段又は下二段）。○わたし聞えて　呼び寄せて。○次第のまゝに　順序の通りに。卽ち上からの順序の通りに惟明の親王を位にするようと思はれたところがの意。○

なりし世なれば、揭焉にももてなされ給はず。又の年、養和元年正月十四日に院（高倉）さへかくれさせ給ひにしかば、愈〻位などの御望あるべくもおはしまさざりしを、かの新帝（安德）平家の人々にひかされて、遙かなる西の海にさすらへ給ひにし後、後白河の法皇、御孫の宮たちわたし聞えて見奉り給ふ時、三の宮（惟明）を次第のまゝに思されけるに、法皇をいといたう嫌ひ奉りて、泣き給ひければ、「あなむづかし」とて、ゐてはなち給ひて、「四の宮（後鳥羽）こゝにいませ」との給ふに、やがて御膝の上に抱かれ奉りて、いとむつましげなる御氣色なれば、「これこそ、まことの孫におましけれ。故院（高倉）の兒おひにも、まみなどおぼえ給へり。いとらうたし」とて、壽永二年八月二十日、御年四にて位に卽か

いといたう　イトイタクの音便。非常に。○あなむづかし　あゝうるさい。○ゐてはなち　井テは「ゐる」（上一）。連れる意。連れてのける。○こゝにいませ　こゝへ御出で。○いとむつましげなる御氣色　非常に親しさうな御樣子。○兒おひ　幼年時代。○まみ　目つき。○おぼえ給へり　似通ふやうに思はれるの意。○らうたし　可愛らし。○內侍所　神鏡を安置する所、轉じて神鏡。○神璽　八阪瓊曲玉。○寶劍　草薙劍。○ゐておはし　持つて行かれた。○こたみ　こたび。今度。○しるし　神璽。○のぼりにけれど　一旦海へ沈んだのが、上つたけれども。○口惜し

せ給ひけり。內侍所・神璽・寶劍は、讓位の時、かならずわたる事なれど、先帝（安德）筑紫へゐておはしにければ、こたみ始めて三種の神器なくて、珍しきためしになりぬべし。後にぞ、內侍所・しるしの御箱ばかりかへりのぼりにけれど、寶劍は、終に、先帝の海に入り給ふ時、御身にそへて沈み給ひけるこそ、いと口惜しけれ。

【建禮門院后の宮と聞えし御腹の第一の御子】　建禮門院がまだ中宮といつて居られた頃出來た第一皇子。

【かの新帝平家の人々に引かされて云々】　壽永二年七月二十五日、平宗盛等に連れられて、西海に赴かれたことをいふ。

【三の宮を次第のまゝに】　眞の順序からいへば二の宮なる守貞親王が卽かれるべきであるが、親王はもと高倉天皇の命によつて、平知盛が養育し奉り、この時には、既に平家と共に西海に行かれて居たのである。

かくてこの御門（後鳥羽）、元曆元年七月廿八日御卽位、その程

の事、常のまゝなるべし。平家の人々、未だ筑紫に漂ひて、先帝(安徳)と聞ゆるも、御このかみなれば、かしこに傳へ聞く人々の心地、上下さこそはありけめと、思ひやられて、いとかたじけなし。同年の十月廿五日に御禊、十一月十八日大嘗會なり。主基方の御屏風の歌、兼光の中納言といふ人、

丹波の國長田村とかやを、

神代より今日のためとや八束穂に

長田の稲のしなひそめけむ

【先帝と聞ゆるも云々】「先帝」は今度新しく即位せられた後鳥羽帝に對して、前の安徳帝をいふ。今はかうして先帝と申し奉るが、今上に對して申せば、實は御兄上樣のことであるからの意。

【主基方の御屏風】大嘗會の行はれる時には、先づ祭に用ふべき稲を作る齋國を卜定せられる。これが所謂「悠紀」「主基」の二國である。(中

十二。○八束穂　束は四指を合せて握つた長さ。ヤはイヤの約で、數の多き意。よく稔つた長い穂。○しなひ　しなふ(ハ、四)。しなやかに曲る。しなゝ〳〵する。よく稔つて撓み垂れるをいふ。

●およすけて　およすく(カ、下二)。年の割にませる。○うつくし　かはゆし。○御書始　始めて書を讀まれる儀式。○女御　女官の一種。天皇の御寢に侍するもの。○參り給ふ　入内せられた。○后立

世以後は單に都のみを卜して國は卜せず、常に近江を悠紀とし、丹波と備中を交代に主基とせられた)。そして愈〻大嘗會の行はれる前に至れば、宮城の北野を卜定して、東西に悠紀・主基の兩齋場を設けられ、その齋場には、各その國の名所及びそに關する和歌を書いた新調の屏風をおかれる。こゝは卽ちその主基殿の方の御屏風である。

【神代よりけふのためとや云々】新古今集(賀)に「仁安元年、大嘗會主基方、稲春歌、丹波國長田村をよめる。權中納言兼光」とあるもの。一首の意は、今日のめでたい儀式の爲に、長田の稲は神代から長々と幾握もあるほどよく稔つて垂れ始めたのであらう。但し日本書紀(神代)に「定二天邑君一。卽以二其稲種一。始殖二于天狹田及長田一。其秋垂穎。八握莫々然甚快也。」の意を取つたのであらう。

御門(桓武)いとおよずけて、賢くおはしませば、法皇(光孝)も、いみじううつくしとおぼさる。文治二年十二月一日御書始せさせ給ふ。御年七なり。同六年女御まゐり給ふ。月輪關白殿の御むすめなり。后立ありき。後には宜秋門院と聞え

皇后又は中宮に冊立し給ふこと。○月輪關白殿　藤原兼實忠通の子。家を九條といふ。文治二年攝政、五年太政大臣建久二年關白となり、建仁二年出家、承元元年薨ず。○宜秋門院　名任子（たへこ）。曆仁元年崩御。○御事　御方といふに同じ。○春花門院　名昇子。建曆元年薨去。年十七○元服　少年が始めて加冠し一人前となる儀式。

●かくれさせ給ひにし後　崩御になつた後。○世をしろしめす　天下を治められる。○うつくしみ、仁慈。○萬の道道　學問・技藝、何の道にもの意。○ざえ　學問・技藝などをいふ。○昔に恥ぢぬ　昔の聖代にも劣らぬほど立派な

給ひし御事（みこと）なり。この御腹（みはら）に春花門院と聞えたまひし姫宮ばかりおはしましき。建久元年正月三日、御年十一にて御元服したまふ。

同じき三年三月十三日に、法皇（河後白）かくれさせ給ひにし後は、御門（後鳥羽）ひとへに世をしろしめして、四方の海波靜かに、吹く風も枝を鳴さず。世治り民安くして、あまねき御うつくしみの浪、秋津島の外まで流れ、しげき御惠、筑波山の蔭よりも深し。萬の道々に明らけくおはしませば、國に才ある人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。中にも、敷島の道なむすぐれさせたまひける。御歌數しらず人の口にある中にも、

奥山のおどろの下もふみわけて

御代。○敷島の道　和歌の道○人の口にある中にも　人口に膾炙せる名歌の多い中にも○と侍るこそ　といふ歌のあるはなどの意。○しるく聞えて　しるく（形）は著し。政事を大切と思つて居られた程度がよく分つて。○いみじく結構な。○やむごとなく　畏れ多い。

と侍るこそ、まつりごと大事と思はれけるほど、しるく聞えて、いといみじく、やむごとなくは侍れ。

道ある世ぞと人に知らせむ

【四方の海波靜かに云々】「四方の海」は漢語の四海と同じく天下の意。「波靜か」は海の縁語で、只天下に何の事變もなく、おだやかに治まること。「吹く風も枝を鳴さず」は風も極めておだやかなの意。二句ともつまり同じことをいつたものである。

【あまねき御うつくしみの浪云々】廣い仁德は海外にも及び、深い恩惠は筑波山の蔭よりも深いといふ意。これは古今集の序に「あまねきおほんうつくしみの波やしまのほかまで流れ、廣きおほん惠みのかげ筑波山の麓よりも繁くおはしまして云々」とあるを取つたのである。なほこの筑波山の歌は古今集東歌に「筑波ねのこのもかのもに蔭はあれど君がみかげにますかげはなし」とあるを取つたので、「蔭」は木のしげつた蔭とおかげの意とを兼ねたのである。

【奥山のおどろの下もふみわけて云々】「おどろ」は荊棘などの亂れ繁つ

●正月　十一日。○第一の御子　母承明門院源在子。○下りゐ給ふ　天子の位を去り給ふ。御年十九。　○今日明日　昨今。漸くの意。○まだしまだ早や過ぎる。○所せき御有樣　窮屈な御境遇、天子の御位にあらせられゝば、何かにつけて窮屈なよりいふ。○なか〳〵　却つて。○安らかに　氣樂に。○御幸　上皇・法皇の　御出まし。○世をた所。「道」は人の歩く道と人のふみ行ふべき無形の道と、この二つの意を兼ねて居る。奥山の荊棘生ひ茂つたひどい所も踏み分けて行つて、かういふ所にも人の歩むべき道はあるものだといふことを世の中の人に知らせよう。卽ち不義不正がはびこつて居る亂れた世をもよく治めて、正義正道のあることを天下の人に知らせようの意。但し下には北條氏の專横を憤つて、之を懲らさうといふ意があるのであらう。

建久九年正月、第一の御子（土御門院）四になり給ふに、御位讓り申させ給ひて下りゐ給ふ。位におはします事十五年なりき。今日・明日、二十ばかりの御齡にて、いとまだしかるべき御事なれども、よろづ所せき御有樣よりは、なか〳〵安らかに、御幸など御心のまゝならむとにや。世をしろしめす事は今も變らねば、いとめでたし。

鳥羽殿・白河殿なども修理せさせ給ひて、常に渡り住まは

しろしめす事は　御讓位の後にも、院中に政を聽かれるをいふ。○めでたし　結構。●鳥羽殿　山城紀伊郡上鳥羽村にあつた離宮。應德二年、白河帝が始めて御造營になつたもので、御讓位の後、こゝに遷御、天永三年まで仙洞御所として、こゝで院政を行はれた。後鳥羽院は、之を繼承せられたのである。○白河殿　同國愛宕郡二條通りの北にあつた、もと藤原良房の居つた所。○修理　修繕。○渡り住まはせ　行つて住まれた。○水無瀨　攝津三島郡。○えもいはず　いふにいはれぬ程。○院づくり　院御所の御造營○心ゆく限り　思ふ存分。○世を響かして　世間を驚かす

せ給へど、猶ほまた水無瀨といふ所に、えもいはずおもしろき院づくりして、屢〻通ひおはしましつゝ、春秋の花・紅葉につけても、御心ゆく限り、世をひゞかして、あそびをのみぞしたまふ。所がらも、はるばると川にのぞめる眺望、いとおもしろくなむ。元久の頃、詩に歌を合せられしにも、とりわきてこそは、

見渡せば山もとかすむ水無瀨川
夕べは秋となに思ひけむ

【御幸など御心のまゝならむとにや】　御幸なども御自由になさらうといふ爲であらう。○「にや」の次に「あらむ」を入れ、その次に「されど」と入れゝば、次の句との關係は明かになる。

【詩に歌を合せられし】　所謂詩歌合せのことで、同じ題について詩と歌とを作らせ、その優劣を鬪はすをいふ。この時のは「元久詩歌合」（一

ほど盛んに。○所がら　所の様子。場所がら。○元久の頃　土御門天皇の朝。○とりわきてこそは　就中左の歌こそは格別にすぐれたなどの意。

●廊渡殿　二語ともに同じもので、建物と建物との間に聯絡をとる廊下をいふ。○遙々と艶にをかしう　その廊が遠くつゞいて、花やかに趣深く。○御前の山　その御殿の前にある山。○石のたゝずまひ　石の有様。○苔深き山木　久しく深山にあつて苔の深くつゐた老木をいふ。○千世をこめたる霞の洞なり　千代の榮をこめた、即ち永久に榮ゆべき仙洞御所（上皇の御所）の有様である。○前栽庭の植込。○つくろはせ給へる　手入せられた。○定家の中納言　藤原定家。後成の子。文治元年殿上で源雅行と忿爭して暴行に及び、一日籍を削られたが、その後、後白河法皇の憐憫によつて本位に復し、遂に正二位權中納言となる。○仁治二年薨ず、年八十。○下臈　官位の低い身分。

○能圓法印といふ人の女　能圓は少納言藤原顯憲の子。法勝寺の執行。法印は僧位。女、名を源在子（ありこ）といふ。○内大臣　源通親の事。

巻）といつて、群書類從の中に收めてある。

【見渡せば山もとかすむ云々】　春の夕暮、水無瀬川の邊を見渡すに、彼方の麓はかすかに霞んで、實に何ともいへぬ趣がある。春の夕べはこんなに趣のあるものである。それをどうして自分は是まで夕べの趣は秋に限ると思つたのであらう。

かやぶきの廊・渡殿など、はるばると艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より瀧おとされたる石のたゝずまひ、苔深きみ山木に枝さしかはしたる庭の小松も、げに〳〵千世をこめたる霞の洞なり。前栽つくろはせ給へる頃、人々數多召して、御遊などありける後、定家の中納言、いまだ下臈なりける時に奉られける、

あり經けむもとの千年に古りもせで
わが君ちぎる峯の若松

【あり經けむもとの千年に云々】「あり經けむ」は是まで經て來たであらう。「もとの千年」は過去の千年。「古りもせで」は古びもしないで。是までに既に多くの年月を經たであらうに、その爲別に古びもせず、猶ほ若々しい峯の松は、今又更に吾が君の爲に千年の榮を契るとの意。

君が代にせき入るゝ庭をゆく水の
岩こす數は千世も見えけり

【君が代にせき入るゝ庭を云々】「せき入るゝ庭をゆく水」とは、庭にせき入れた水の流をいふ。「岩こす數」は、水の岩を越して飛び散る時に散亂する水玉の數。庭にせき入れた水の岩を越す時に飛び散る玉の無數なるに見ても、君が千年を經給ふ瑞相が見えるの意。

今の御門（上皇）の御諱は爲仁と申しき。御母は能圓法印といふ人の女、宰相の君とて仕うまつられける程に、この御門生れさせ給ひて、後には内大臣通親の御子になり給ひて、末には

雅通の子。後白河帝以下七朝に歴仕し、内大臣となる。建仁二年薨ず、年五十四。○御子になり給ひて　在子が後には通親の養女となつたの意。○北の方　大臣・大將・公卿等の奥方をいふ。○腹　その人の腹に出來た子の意。○御幸さへ引き出で給ひ　皇子御降誕をいふ。○かの殿　通親の邸。○御即位　土御門が。○御禊　一六頁を見よ。○十一月　二十二日。○大嘗會　一六頁を見よ。○御冠し給ひ　御元服の事。○なまめかしく　うつくしげに　上品で可愛らしく。○御本性　御性質。○ゆゑく　ゆるやか。○物のあはれ　悲喜とも人の感情を動かすもの。○聞し召しすぐさず　聞き外さない。即ちよそごととはしないの意。

承明門院ときこえき。かの**大臣**の北の方の腹にておはしければ、もとより後の親なるに、御幸さへ引き出で給ひしかば、まことの御女にかはらず。この御門（土御門）もやがて、かの殿にぞ養ひ奉らせ給ひける。かくて建久九年三月三日御**即位**、十月二十七日に御**禊**、十一月は例の大嘗會なり。元久二年正月三日御**冠**し給ひて、いとなまめかしく、うつくしげにぞおはしまします。御**本性**も父御門（後鳥羽）よりは、少しぬるくおはしましけれど、御情ふかう、物のあはれなど、聞し召しすぐさずぞありける。

【宰相の君とて云々】「宰相の君」は宮女としての呼名。「つかうまつる」の音便。在子が宰相の君といつて、仕へて居る中に、かの大臣の北の方の腹にて云々】在子は能圓の女であるが、かの通親の寵を得て、この土御門帝を生んだとの意。

●**攝政**　天皇の幼少の時、又は女帝の時、天子に代つて萬機の政を掌る職。○**關白**　天子を輔佐し、萬機の政を行ふ職。天下の萬機を關（あづか）り白（まを）すの意。○**基通**　攝政藤原基實の子。後白河法皇に寵ぜられ、内大臣關白となる。安德帝即位後、攝政となり從一位に陞る。其の後一旦職をやめたが、土御門帝の時、復元の職につた。天福元年薨ず、年四十七。

の北の方の腹に出來たものであるから、通親は固より後の親、即ち繼父であるが、かうして皇子降誕といふめでたいことさへあつたので、實子と同じやうにもてなされたといふ意。○この北の方は刑部卿藤原範兼の女で、名を範子といふ。もと能圓の妻であつたが、能圓が平氏の一族と共に西海に奔つて後、又通親に嫁いだのである。

今の**攝政**は、**院**（後鳥羽）の御時の關白**基通**の**大臣**、その後は、後**京極殿**良經ときこえたまひし、いと久しくおはしき。この**大臣**（基通）は、いみじき歌の聖にて、院の上（後鳥羽）おなじ御心に、和歌の道をぞ申し行はせ給ひける。文治の頃、千載集あり しかど、院（後鳥羽）未だきびはにおはしましゝかばにや、御製も見えざめるを、當代（土御門）位の御程に、又集めさせ給ふ。土御門の内の大臣（通親）の二郎君右衞門督通具といふ人を始めにて、有家の三位・定家の中將・家隆・雅經などにの給はせ

て、昔より今までの歌をひろく集められる。各〻奉れる歌を院（後鳥羽）の御前にて自らみがきとゝのへさせ給ふさま、いとめづらしくおもしろし。この時も、先に聞えつる攝政殿（良經）とりもちて行はせ給ふ。

【御製も見えざめるを】「ざ」は「ざる」の略。「める」は推量の助動詞メリ。見えなかつたやうだがなどの意。

【又集めさせ給ふ】千載集の外に又新古今集を集められた。○「新古今」は土御門天皇建仁元年、後鳥羽院の院宣によつて撰集、同三年奏覽、元久元年竟宴を行はれた。初め撰者は通具・有家・定家・家隆・雅經の五人の外に僧寂蓮も居たが、これは建仁二年、その完成を見るに至らず没した。

大方古へ奈良の御門の御代に、始めて左大臣橘の朝臣勅をうけたまはりて萬葉集を撰びしよりこのかた、延喜のひじりの御時の古今集、友則・貫之・躬恒・忠岑。天暦のかしこか

○良經　關白藤原兼實の子。正治元年左大臣、建仁二年攝政となる。建永元年薨ず、年三十八。○聞え給ひし　と申した方が。○いみじき　非常に勝れた。○歌の聖　特に歌道に勝れた人。○院の上　上は今日陛下などいふに當る。○同じ御心に　良經と一緒に○文治　後鳥羽天皇の朝。○千載集ありしかど　千載集は壽永二年藤原俊成、後白河院の院宣によつて撰集、後鳥羽帝文治三年奏覽。千載集の撰があつたがの意。○さびは幼少。○又集めさせ給ふ　新古今のこと。下註を見よ。○內大臣　○二郎君　次男。○通具　源通具。○有家　藤原有家。○家隆

藤原俊成の子。世に壬生二品といふ。○雅經　藤原賴經の子。家を飛鳥井といふ。○自らみがきとゝのへさせ給ふ御手づから補選し給ふ。○とりもちて　身に引き受けて。

●奈良の御門の御代　奈良朝○橘の朝臣　美努王の子。天平八年橘姓を賜り臣下に列し元明・元正・聖武・孝謙の四朝に歷仕し、左大臣に至り、天平寶字元年薨ず、年七十四。○延喜のひじり　ひじりは聖帝。醍醐帝をいふ。○古今集　勅撰集の第一。延喜五年撰集。「古今集は」の意。○友則　紀有友の子。○貫之　紀貫之。土佐日記の著者。○躬恒　凡河內躬恒。○忠岑

りし御代にも、一條攝政殿謙德公未だ藏人の少將など聞えける頃、和歌所の別當とかやにて、梨壺の五人におほせられて、後撰集は集められけるとぞ。ひがぎきにや侍らむ。その後、拾遺集は花山の法皇の自ら撰ばせ給へるとぞ。白河院位の御時は、後拾遺集、通俊治部卿うけたまはる。崇德院の詞花集は、顯輔三位撰ぶ。又白河の院おりゐさせ給ひて後、金葉集、重ねて俊賴の朝臣におほせて撰ばせ給ひしこそ、初め奏したりけるに、輔仁の親王の御名のりを書きたる、惡しとてかへされ、又奉れるにも、何事とかやありて、三度奏して後こそをさまりにけれ。斯樣の例も自らの事なり。おしなべては撰者のまゝにて侍るなれど、此度は院の上（後鳥羽）、自ら和歌の浦におりたちあさらせ給へば、まこ

壬生忠岑。○天暦　村上帝の朝。○かしこかりし御代　勝れて立派であつた御代。○一條攝政殿　藤原伊尹（これたゞ）。右大臣師輔の子。天祿元年右大臣、尋で攝政太政大臣正二位に進み、同三年薨ず年四十九。諡謙徳公。○藏人の少將　藏人で近衞少將なること。○など聞えける頃　などと申した頃。○和歌所の別當　和歌所は今日の御歌所に當るもの。和歌を講修し、若しくは撰集のことを掌る所。別當はその長官。○梨壺の五人　梨壺は大内裏五舍の一。昭陽舍のこと。温明殿の北、麗景殿の東にある。こゝで後撰集を撰したのである。五人は大中臣能宣・清原元輔・源順・

とに心異なるべし。

【萬葉集】古來萬葉集を勅撰とする説があつて、こゝにもさう書いてあるが、恐らく勅撰ではあるまい。思ふに、諸兄が大體集めておいたものを、後に大伴家持が增補整理したものであらう。どうしても勅撰の體裁ではない。

【初め奏したりけるに云々】金葉集は白河院御讓位の後、俊頼が院宣を奉じて撰んだもので、天治二年に奉つたが、認可せられなかつた。その理由は明かには分らないが、この書に輔仁親王の御名のりを書いたからだといつて居るのである。即ち親王は法皇の御弟に當る人であるから、御名のりをそのまゝ書くのは不敬だといふのである。かくて訂正の上奉つたのが、又認可せられず、大治二年三度目に奉つて、漸く嘉納せられた。

【自ら和歌の浦に云々】和歌を撰ぶを和歌の浦に下り立つて、漁するとにに譬へたのである。「あさる」は漁すること、之を和歌を撰びぬくことにいつたのである。

この撰集（金葉）より先に、千五百番の歌合せさせ給ひしにも、

紀時文・坂上望城。○ひがぎき　聞き違ひ。○後拾遺集　白河院の應徳三年撰進。○通俊治部卿　藤原通俊。治部卿は治部省の長官。○詞花集　天養元年撰、仁平中奏覽。○顯輔三位　藤原、正三位左京大夫皇后宮亮に至る。○俊頼　源經信の子。堀河以下三朝に歷仕し、左近衞少將兼木工權頭、左京權大夫となる。○輔仁の親王　後三條帝の皇子。○御名のり　御實名。即ち輔仁といふ名。○何事とかやありて　どうとかいふので○斯樣の例も云々　かういふ事も自然に起つたことで、仕方がないの意。○おしなべては　一般には。○撰者のまゝ　選者の意見通り。○心異な

勝れたる限りを撰ばせ給ひて、その道のひじりたち判じけるに、やがて、院（羽束島）も加はらせ給ひながら、なほこのなみには立ち及びがたしと卑下させ給ひて、判の詞をば記されず。御歌にて、優り劣れる志ばかりを表はし給へる、なかなか、いと艶に侍りけり。上のその道を得給へれば、下も自ら時を知るならひにや。男も女も、この御代に當りて、よき歌よみ多く聞え侍りし中に、宮内卿の君といひしは、村上の御門の御後に、俊房の左の大臣と聞えし人の御末なれば、はやうはあて人なれど、つかさあさくて、うち續き四位ばかりにて失せにし人（師）の子なり。まだいと若き齢にて、底ひもなく深き心ばへをのみよみしこそ、いとありがた く侍りけれ。

る　趣が違ふ。

●勝れたる限り　勝れた歌人ばかり。○その道の名人たち。○判じ　歌の優劣を批判する。○このなみ　此の列にかゝる名人の仲間の意。○卑下　謙遜。○判の詞　優劣を判定する詞○優り劣れる志ばかりを　優劣の意だけを。○なか〳〵いと艶に　判の詞よりは却つて風流に。○宮内卿の君　女官の呼名。○御後　御子孫。○俊房　源師房の子。左大臣となり、左近衛大将を兼ぬ。○左の大臣　左大臣。○御末　御子孫。○はやうは　早くは　の音便。以前は。○あて人　貴い人。貴族。○つかさ浅く　官職卑く。○四位ばかりに

【千五百番の歌合】「歌合」は人數を左右に分け、左右各一同じ題で詠んだ歌を判者があつて、優劣を定める遊戯。「千五百番」はその勝負の回數である。○こゝにいふは建仁元年に行はれたもの。後鳥羽院御製を始め、後京極攝政以下男女三十人に各百首の歌を奉らしめて、合はせたのである。

【御歌にて優り劣れる志ばかりを表はし給へる】普通は只どちらが優つて居るとだけいふべき所を、この時は三十一文字の歌にしていはれたのである。

【上のその道を得給へれば云々】上に立つ人が正しい道を行へば、下に立つ人民も自然時代の風に感化せられて、正しくなるといふ意。但しこゝは上の人が歌なら歌といふ道に達せられると、下の者も自然それに感化せられて歌が上手になるの意である。孟子滕文公上に「上有二好者一下必有二甚レ焉者一。君子之德風也。小人之德草也。草尚二之風一。必偃。」

○「ならひにや」は……といふ習はしであらうか、この御代には……の意。

【俊房の左の大臣と聞えし人の御末】系圖を示すと、

て　父師光は正四位下右京大夫であつた。○底ひもなく云云　底の知れぬほど深い思想○ありがたく　珍しく。類稀に。

●世にゆりたる云々　ゆる（ラ、上二）は許さる。名人と許されたるの意。世に定評のある歌道の古參者。○まだしまだ早すぎる。○けしうは　あらず　悪くはない。○見ゆめればなむ　と思はれるから加へたのであるの意。○かまへて　其の積りで。○まろ　私。こゝは朕の意。○面おこすばかり　面目を立てる程の○つかうまつれ　詠み出せ。○候ひけるけしき　居つた樣子。○限りなきすきの程　すきは嗜好。この上もなく歌道

村上——具平親王——師房——俊房——師頼——師光——宮内卿

この千五百番の歌合の時、院の上（後鳥羽）宣ふやう、「此度は、皆世にゆりたる古き道のものどもなり。宮内卿は、まだしかるべけれども、けしうはあらずと見ゆめればなむ。かまへて、まろが面おこすばかり、よき歌つかうまつれ」と仰せらるゝに、面うち赤めて、涙ぐみて候ひけるけしき、限りなきすきの程も、哀れにぞ見えける。さてその御百首の歌、いづれもとりどりなる中に、

うすくこき野邊の綠の若草に
　跡まで見ゆる雪のむらぎえ

草の綠のこきうすき色にて、去年のふる雪の遅く疾く消えけるほどを推し量りたる心ばへなど、まだしからむ人は、

に熱心な程度。○その御百首　この時は各人百首づつを詠んだからである。○とりどりなる中に　思ひ〳〵に趣ある中に。○ふる雪　古い雪。○遅く疾く消えける　遅く消えたのと早く消えたのと。○心ばへ　心のおもむき。○まだしからむ人　未熟な人。○思ひよりがたくや　思ひつきがたい・とであらう。○年つもるまで　年のゆくまで。○あらましかば　あつたならば。○いとほし　ふびん。○あたらし　惜しい。

●競宴　敕撰集編纂の業が竟つた時に行ふ祝宴。日本紀・物語等の進講が終つた時に行ふものをもいふ。○春日殿　一條の北。○いみじき　大いと思ひよりがたくや。この人、年つもるまであらましかば、げにいかばかり、目に見えぬ鬼神をも動かしなましに、若くて失せにし、いといとほしく、あたらしくなむ。

【うすくこき野邊の綠の云々】　野邊の若草に色の濃い所と薄い所とのあるによつて、去年の雪の一度に消えず、むら〳〵に消えた跡がよく分るの意。卽ち早く雪の消えた所は若草が早く萌えて、隨つて綠も濃いといふ意である。

【目に見えぬ鬼神をも動かしなましに】　古今集の序に「目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」とあるによる。

かくてこの度撰ばれたるをば、「新古今」といふなり。元久二年三月廿六日競宴といふ事、春日殿にて行はせたまふ。いみじき世のひじきなり。かの延喜の昔おぼしよそへられて、院（後鳥羽）の御製、

變な。○世のひじき　世間の評判。○延喜の昔　醍醐帝の朝、古今集撰集の當時を指す。○おぼしよそへられて　よそふ（ハ、下二）はなぞらふ。準ずる。思ひくらべられて。○いそのかみ　「ふる」にかゝる枕詞。○ずん流るめりしかど　ズン は順。「ずん流る」は順次に行はれる。右の歌の外、次々順次に歌があつたであらうがの意。○さのみは　そんなには。○うるさくてなむ　煩はしいから一々は擧げないの意。**ナム**の下に「省きつる」などの語を入れいゝば、よく分る。

いそのかみ古きを今にならべこし
　昔の跡をまたたづねつゝ

攝政殿眞經の大臣

敷島や倭（やまと）ことばの海にして
　拾ひし玉はみがかれにけり

次々（つぎ〳〵）ずん流るめりしかど、さのみはうるさくてなむ。

【いそのかみ古きを今にならべこし　昔の跡をまたたづねつゝ】　古い歌を集め、今の新しい歌に並べて、後世に殘した古今集の昔の跡を尋ねて、こゝにこの新古今集を撰したの意。「ふるきを今に」といふ所に「古今集」の意を含めたのである。

【敷島や倭ことばの云々】　「敷島や」は「やまと」にかゝる枕詞。但し本來は「敷島の」とあるべきものだが、「松島やをしまの磯にあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか」（後拾遺戀）「川上やあらふの池のうきぬなはうきことあれやくる人もなし」（同雜）などの句法から、いつか轉じて「やくる人もなし」（同雜）などの句法から、いつか轉じてといふやうになつたものであらう。同樣の例は「さゝなみ」にも「さゝ

●何となく　別段の事もなく　○二の宮　第二皇子。○御冠　御元服。○修明門院　藤原重子（しげこ）。式部少輔範季の女。建久九年從三位、尋で從二位。承元元年三宮に準ず承久三年順德帝の薙髮と共に尼となり、文永元年薨ず、年八十三。○かなしきものかはゆいもの。○思ひ聞えさせ給へれば　思つて居られたから。○になく　似るものなく。非常に。○清らを盡し

浪や志賀の浦風いかばかり心の中の涼しかりけむ」（拾遺哀傷）是も「志賀」の枕詞は、本來「さゝなみの」で、それから轉じたものであらう。「倭ことば」は和歌。「海にしては」海に於て。言葉の多く廣きを海にたとへて、その中から拾ひ採つた玉は立派に磨かれて、光り輝くやうになつた。卽ち和歌の精粹を集めて、立派な集が出來たの意である。

何となく明け暮れて、承元二年にもなりぬ。十二月廿五日二の宮（眞德）御冠（かうぶり）し給ふ。修明門院（重子）の御腹なり。この御子を院（後鳥羽）限りなくかなしきものに思ひ聞えさせ給へれば、になく清（きよ）らを盡し、いつくしうもてかしづき奉り給ふ事なのめならず。遂に同じき四年十一月に御位につけ奉り給ふ。もとの御門（上御門）、今年こそ十六にならせ給へば、未だ遙かなるべき御盛りに、かゝるを、いと飽かずあはれと思されたり。永治の昔、鳥羽の法皇、崇德院の御心もゆかぬ

善美を盡し。○いつくしう　鄭重に。○もてかしづき　附き添うて大切に護る。大事に養育する。○なのめならず　一通りでない。○遙かなるべき御盛りに　まだ行末長く春秋に富ませ給ふ御年に。○いと飽かず　非常に物足らず。○あはれと　悲しいと。○永治　近衞帝の朝。○御心もゆかぬに　御得心もないのに。○おろし聞えて　御位から下し奉つて。○しぶらせ　いやがる。○勅使を　崇德より法皇へ。○內侍所　神鏡。○劔　草薙劔。○璽　八坂瓊の曲玉。○渡しかねさせ　容易に渡さうとされなかつた。○引き出で　引き起し。○あてに　貴く上品に。○おほどか

におろし聞えて、近衞院をすゑ奉り給ひし時は、御門（崇德）いみじうしぶらせ給ひて、その夜になるまで、勅使を度々奉らせ給ひつゝ、內侍所（ないしどころ）・劔（けん）・璽（じ）などをも渡しかねさせ給へりしぞかし。さて、その御憤（いきどほり）のすゑにてこそ保元の亂（みだれ）も引き出で給へりしを、この御門（上御門）はいとあてに、おほどかなる御本性にて、思しむすぼほれぬにはあらねども、氣色（けしき）にも漏らし給はず。世にもいとあへなき事に思ひ申しけり。承明門院（上御門御母在子）などは、まいていと胸痛くおぼされけり。

【二の宮】　百練鈔・一代要記・六代勝事記等は第二子とし、神皇正統記・皇帝紀鈔・皇年代略記・明月記等は第三子として居る。建久八年九月降誕。

【保元の亂】　鳥羽法皇、近衞帝を愛し、之を位につけむが爲に崇德帝をして强ひて位を讓らしめられた。之が爲崇德院は大に不平で、鳥羽院を怨んで居られる。ところが偶、近衞帝がなくなつたので、崇德院

おほやう。○思しむすぼほれぬには云々　面白からず思はれないでもなかつたが。○氣色。樣子。顏色。○あへなき事　張合ひのない事。○思ひ申しけり　世の人々が。○胸痛く　悲しさの爲、胸に苦痛をおぼえるをいふ。

●太上天皇　讓位の天皇に對する尊號。略して上皇といふ　○新院と聞ゆれば　新たに院即ち上皇になられたので、後鳥羽に對し、土御門を新院といつたのである。○御政は變らず　以前の如く政事は後鳥羽院が執り給うたの意。○資實　藤原兼光の子。正二位權中納言となり太宰權帥を兼れた。○長等山　近江滋賀郡。

その年の十二月に、太上天皇の尊號あり。新院と聞ゆれば、父の御門（後鳥羽）をば、今は本院と申す。猶ほ御政事は變らず。今の御門（後堀）は十四にぞなり給ふ。御諱守成と聞えしにや。建曆二年十一月十三日大嘗會なり。新院（土御門）の御時も仕うまつられたりし資實の中納言に、この度も、悠紀方の御屏風の歌めさる。

すがのねの長等の山のみねの松

○すがのねの　「ながし」にかゝる枕詞。○かやうの事　こんな大嘗會の歌の事など。○こととあたらしく　今更珍しさうに。○聞えなす　申し上げる　○老のひがごと　ひがごとは間違つたこと。老人の惡い癖などの意。讓遜していつたのである。

●揭焉　目立つこと。○好ましき樣　面白さうな樣子。○春日の社　奈良にあるもの。この行幸は三月二十六日のこと。○ありがたきほど　例のないほど。○いどみつくし　華美の限りを競つて。○また の年　翌年。卽ち三年のこと　十月二十四日のことであつた　○去年の事　去年の行幸のこと。○内　天皇。○彌生　三

かやうの事は、皆人のしろしめしたらむ、ことあたらしく聞えなすこそ、老のひがごとならめ。

【すがのねの長等の山の云々】　長等の山の峯の松に吹いて來る風の音も君が代の萬歳を祝する聲と聞えるの意。

吹きくる風もよろづ代の聲

この御代（後堀）には、いと揭焉なる事多く、所々の行幸しげく、好ましき樣なり。建保二年、春日の社に行幸ありしこそ、ありがたき程いどみつくし、面白うも侍りけれ。さて、その また の年、御百首の御歌よませ給ひけるに、去年の事おぼしいでて、内（後堀）の御製、

春日山去年の彌生の花の香に
染めし心は神ぞ知るらむ

月。

●心ばへ　心だて。氣性。○かどめいて　才氣があつて。○あざやか　ハキ〳〵して居ること。○ざえ　學問。○大和唐土兼ねて　和漢を兼備して。○やむごとなく　すぐれて。○ものし給ふ　あらせられる。○御いとなみ　御仕事○末の世　晩年。○八雲　八雲御抄といふ本。和歌の事を記されたもの。○攝政殿の姫君　藤原立子(たつこ)。東一條院と號す。○まゐり給ひて　入内せられて。○めでたし　美しい。○一ゐの御子　第一皇子。○ものあひたる　物の

【春日山去年の彌生の云々】　去年の三月、春日山に詣でて、御祈りしたその眞心は神も納受し給ふことであらうの意。三月(今でいへば四月に當る)花の盛りであるから、「花の香にそめし心」といふ。只修飾である。

御心ばへは、新院(土御門)よりも、少しかどめいて、あざやかにぞおはしましける。御ざえも大和・唐土兼ねて、いとやむごとなくものし給ふ。朝夕の御いとなみは、和歌の道にてぞ侍りける。末の世に、八雲などいふもの作らせたまへるも、この御門(順徳)の御事なり。攝政殿(良經)の姫君まゐり給ひて、いと花やかにめでたし。この御腹に、建保六年十月十日、一の御子(仲恭)生れ給へり。愈〻ものあひたる心地して、世の中ゆすり滿ちたり。十一月廿一日、やがて親王になし奉り給ひて、同じき廿六日、坊に居給ふ。未だ御五十日だに

よく整ふ。卽ち萬事都合よくゆくこと。○ゆすり滿ちたり　ゆり動くほど盛んに祝しあつたの意。○親王になし奉り　宮坊(とうぐうばう)。東宮とならせたまいふ。○御五十日　産後五十日目の儀式。○聞しめさぬに　いちはやき　忙しく早い。○御もてなし　御待遇。東宮とせられたこと。○めづらか　珍しい。○心もとなく　待ち遠に。○今一しほ　今一層。○世の中めでたく定まり果てぬる　世の中の事がチヤンとよく整つた。○いでや　いやもう仕方がないなどの意。●ともすれば　やいもすれば○渡らせ給ひて　おいでにな

聞しめさぬに、いちはやき御もてなし、めづらかなり。心もとなくおぼされければなるべし。今一しほ、世の中めでたく、定まり果てぬる樣なめり。新院(土御門)は、いでやと思さるらむかし。

【今一しほ世の中めでたく云々】　後鳥羽院は自分の思ひ通り、順德帝を立て、めでたく女御の入内もすみ、やがて皇子も生れ、今は又坊も定まつたので、これでもうすつかり世の中のことが定まつてしまつたやうだの意。

【いでや】　土御門院は已むなく讓位されたが、せめて順德帝の後には自分の御子をと思つて居られたのに、今はかうして東宮さへ定まつてしまつたので、あゝもう駄目だと思はれたであらうの意。

かくて院(後鳥羽)の上は、ともすれば水無瀨殿にのみ渡らせ給ひて、琴・笛の音につけ、花・紅葉の折々にふれて、よろづの

つて。○花・紅葉の折々にふれて　春の花・秋の紅葉と四季折々につけて。○盡しつゝ　思ふ存分して。○御心ゆくさま　御滿足の樣。○世もつきすまじき　永久に盡きないつきすまじき（サ變）は「つく」と同意の語。それに助動詞マジがついたのである。○殿上人　昇殿を許される人。四位以上及び六位の藏人。○心のひきびきに　心の向き〳〵に。○いどみ爭はせ　競ひ爭ふ。○小弓　楊弓などのやうに遊戯に用ふる弓。○雙六　目を盛つた盤の上に石を竝べ、二個の賽によつて勝負を爭ふもの。所謂盤双六で、今日のものとは違ふ。○さうどきあへる　さうどく（カ、四）は騒ぎ立てる。爭ひ騒ぐ。○をかしう　面白く。○興ある賭物　面白い賭物。○とうで　取り出で。○修明門院　順徳帝の母。○男どもに賜はせぬべからむ賭物　下賜すべき賭物を下さいの意。○唐櫃　脚の六本ある櫃。今日でも寺や社では使つて居る。○金物したる　金物を打ちつけた。○重らか　重さうな。○うへ人　殿上人。○いぶかしくて　不思議に思つて。○ほのあけて　少し開いて。○心得ず　合點がゆかぬ。○あきまし　とんでもない。○氣色　樣子。○しるき　あきらか。○御覽じおこせて　見やらせ給ひて。○朝臣　人を親しみ呼ぶ語。こゝは中將を

遊わざをのみ盡しつゝ、御心ゆくさまにて過させ給ふ。誠に萬世もつきすまじき御世の榮え、次々今よりいとたのもしげにぞ見えさせ給ふ。御碁うたせ給ふついでに、若き殿上人どもを召して、これかれ心のひきびきにいどみ爭はせさせ給へば、或は小弓・雙六などいふ事まで、思ひ〳〵に勝負をさうどきあへるも、いとをかしう御覽じて、さまざまの興ある賭物ども、とうでさせ給ふとて、某の中將を御使にて、修明門院（子）の御方へ、「何にても男どもに賜はせぬべからむ賭物」と申させ給ひたるに、とりあへず小き唐櫃の金物したるが、いと重らかなるを參らせられたり。この御使のうへ人、何ならむといぶかしくて、片端ほのあけて見るに、錢なり。いと心得ずなりて、さと面うちあかみて、

あさましと思へる氣色しるきを、院（順徳）、御覽じおこせて、「朝臣こそむげに口惜しくはありけれ。かばかりの事知らぬやうやはある。古へより殿上の賭弓といふ事には、これをこそかけ物にはせしか。されば今かけものと聞えたるに、これをしも出されたるなむ、古への事知り給へるこそいたきわざなれ」とほゝゑみてのたまふに、さは惡しく思ひけりと、心地騒ぎておぼゆべし。

【次々今よりいとたのもしげに云々】萬代も盡きすまじき御榮えであるが、それがもう今からだん〳〵實現して來て、いかにもたのもしげに見えるの意。

大かたこの院の上（順徳）は、よろづの事に至り深く、御心もはなやかに、物にくはしうぞおはしましける。夏の頃、水無

瀬殿の釣殿に出でさせ給ひて、氷水めして、水飯やうのものなど若き上達部・殿上人どもにたまはせて、大御酒まゐるついでにも、「（後鳥羽）あはれいにしへの紫式部こそは、いみじくはありけれ。かの源氏物語にも、『近き川の鮎、西川より奉れるいしぶしやうのもの御前にて調じて』と書けるなむ勝れてめでたきぞとよ。只今さやうの料理つかまつりてむや」などのたまふを、秦の某といふ御随身、高欄のもと近く候ひけるが、承りて、池の汀なる笹を少し敷きて、白き米を洗ひて奉れり。「（後鳥羽）拾はば消えなむとにや。これもけしかるわざかな」とて、御衣ぬぎて、かづけさせ給ふ。御かはらけ度度きこしめす。その道にも、いとはしたなうものし給ふ。何事も、愛敬づき、めでたく見えさせ給ふ御ありさま、千

指していはれたのである。○むげに　甚だ。○口惜し　物足らぬ心地せられて歎かはし。○かばかりの事知らぬやうやはある　これ位の事を知らぬ事があらうか、知つて居るべき筈だ。○殿上の賭弓　殿上人に弓を射させて御覧になる臨時の儀式。○いたきわざ　えらい事。○さは　それは。○悪しく思ひけり　悪く思つた。即ち誤解したの意。

●至りふかく　造詣が深い。○釣殿　寝殿造（しんでんづくり）の中、庭の池に臨んだ建物　○氷水　氷を入れた水。○水飯　水づけの飯。○上達部　三位以上の人。但し参議は四位でもこの中に入る。○紫式部　藤原爲時の女。一條天皇の中宮上東門院に仕ふ。源氏物語の著者。○いみじ　甚だすぐれて居る。實にえらい。○近き川　加茂川をいふ。○西川　桂川のこと。○いしぶし　石伏・杜父魚など書く。形はぜに似て、大なるは三四寸頭大きく、體は背部汚灰色、腹部淡色、かじか・かはかじか・ごりなどもいふ。○調じて　料理して。○すぐれて　非常に。○めでたきぞとよ　めでたいといふことだの意「めでたし」は結構。○御随身　護衛のことを掌る近衛の舍人。○高欄　御殿の縁にある欄干。○候ひけるが　侍して居たが。○けしかる　中々面白い。○かづけさせ　かづく（カ、下

年を經とも、飽く世あるまじかめり。

【近き川の鮎云々】　源氏物語（常夏）に「いと暑き日、東の釣殿に出で給ひて、涼み給ふ。中將の君もさぶらひ給ふ。親しき殿上人數多さぶらひて、西川より奉れる鮎、近き川のいしぶしやうのもの、御前にて調じて參らす。」

【拾はば消えなむとにや】　同書（帚木）に「御心のまゝに折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見ゆる玉簾の上の霰などの艶にあえかなるすきずきしさのみこそ、をかしくおぼしつらめ」とあるを取つたので、此の文句の霰に見立てたのである。

また清撰の御歌合とて、限りなくみがかせ給ひしも、水無瀬殿にての事なりしにや。當座の衆議判なれば、人々の心地、いとゞおき所なかりけむかし。建保二年九月の頃、勝れたる限り抜きいで給ふめりしかば、いづれかおろかならむ。中にも、いみじかりしことは、第七番に、左、院の御

二）は人の勞を謝するなどの爲に衣服などを與へるないふ**サセ**は尊敬の意を表はす助動詞。○かはらけ　素燒の酒盃。○きこしめす　酒を飲まれる。○その道　酒の道。○はしたなう　不都合の意。度を過すほど召しあがるないふ。○愛敬づき　愛すべき所がある。○絶く世あるまじかめり　いつまでたつても、これで十分と思ふ時はないだらう。即ち極めて愛敬ありめでたきないふまじかめり」は**マジクアルメリ**の約。●清撰の御歌合　清撰は精選に同じく、特によりすぐつた意。○限りなくみがかせ給ひし　非常に精練された。○當座の衆議判　歌合の席上で、定まつた判者なく、皆がよつて即座に優劣を判定すること。○おき所なかりけむかし　身の置き所もない、即ち恥かしくて堪らなかつたであらうの意。○勝れたる限り　優秀な歌ばかり。○いづれかおろかならむ　一として悪い歌はない。○いみじかりし　特に勝れた。○明石潟　播磨明石郡。○朝なぎ　朝海上の風のをさまり靜かなこと。○北面　北面の武士。上皇の御所を警衛するもの。○藤原秀能　秀宗の子。新古今撰集の時、和歌所の寄人となる。建保中、出羽守正五位上、承久の變、大將軍に任ず。仁治元年卒す、年五十七。○年比も　以前から。○この道　和歌、

明石潟浦路晴れゆく朝なぎに　霧に漕ぎ入るあまのつり舟

とありしに、北面の中に、藤原の秀能とて、年比も、この道にゆりたるすきものなれば、召し加へらるゝ事、常のことなれど、やむごとなき人々の歌だにも、或は一首、二首、三首には過ぎざりしに、この秀能、九首まで召されて、而も院の御片手にまゐれり。さて、ありつる「あまのつり舟」の御歌の右に、

契りおきし山の木の葉の下もみぢ　そめしころもに秋風ぞふく

とよめりしは、その身の上にとりて、ながき世の面目、何

かはあらむとぞきゝ侍りし。

【明石潟浦路晴れゆく云々】明石潟の朝、海上は風波穩かに、今しも霧は次第々々に遠く消えてゆかうとする時、海人の釣舟が又その霧の中に漕ぎ入り消えて行く光景をよんだのである。○古今集（羈旅）の「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく船をしぞ思ふ」などから脱化したものであらう。○この明石潟の歌、玉葉集（秋）には「建保元年八月撰歌合に、後鳥羽院御製」とある。

【契りおきし山の木の葉の云々】秋となつて山の木の葉が下紅葉する頃となつたら、逢ひませうと約束したが、今はもう秋風が吹いて、その人は遂に自分に背いてしまつたの意。「そめし衣」に契つておいた意を含め、頃の語をかけ、「秋風」に飽くの意をかけたのである。

昔の躬恒が御階のもとに召されて、「弓張としもいふ事は」と奏して、御衣賜はりしをこそ、いみじき事にはいひ傳ふめれ。又貫之が家に、枇杷の大臣、魚袋の歌の返しとぶら

歌の道。○ゆりたる　許されたる。上手として許されて居る。○すきもの　熱心家。○やむごとなき人々　貴い人々　○片手　相手。院の御製と番はれたをいふ。○ありつる　前記の。○下もみぢ　下葉の紅葉すること。○面目　名譽　○何かはあらむ　之にすぐるものなしの意。

●御階　御殿のきざはし。○いみじきこと　たいした事などの意。○枇杷の大臣　藤原仲平。基經の子。卽ち師輔の叔父。こゝの記事は誤である下註を見よ。○魚袋　束帶の時、石帶(せきたい)の右に附けるもの。白鮫の皮で四面を張つた匣。長さ三寸、幅一寸で、金(三位・參議以上)又は

ひにおはしたりしをも、道の高名(かうみやう)とこそ、世繼(よつぎ)には書きて侍れ。近き頃は西行法師ぞ北面のものにて、世にいみじき歌の聖(ひじり)なめりしが、今の代の秀能はほと〳〵古きにも立ちまさりてや侍らむ。この度の御歌合、大方いづれとなくうちみだして、優(すぐ)れたる限りをえり出でさせ給ひしかば、各〻むら〳〵にぞ侍りたりける。吉水の僧正と聞えし、亦類ひなき歌の聖にていましき。それだに四首ぞ入り給ひにける。さのみは事長ければ、もらしぬ。

【昔の躬恒が云々】　大鏡(卷八)に「御遊びありし夜、御前の御階の下に躬恒を召して、月を弓張といふ心は何の心ぞ。これが由仕うまつれと仰事ありしかば、照る月を弓張としもいふことは山べをさしていればなりけり、と申したるを、いみじう感ぜさせ給ひて、大袿(おほうちぎ)賜はりて、肩にうちかくるまゝに、白雲のこの肩にしも下りゐるは天つ風こそ吹

銀(四位以下)の魚が表に六つ、背に一つ附いて居る。○魚袋の歌の返し云々　魚袋を借りたについて、喜の意をよんだ歌を返さうと思つて、貫之を訪はれたの意。○道歌道。○高名　てがら。○世繼　大鏡のこと。○西行法師　俗名佐藤義清(のりきよ)。鳥羽院の北面の武士であつたが、二十三歳の時、感ずる所あつて出家し、身を雲水に托して四方を周遊し、建久元年寂す、年七十三。○北面のもの　北面の武士。○いみじきすぐれた。○なめりしがなるめりしが、であつたらしいが。○ほと〳〵　殆んど。○古き　昔の歌聖　○いづれとなくうちみだして　誰

きてきぬらし。」

【魚袋の歌の云々】　大鏡(卷四、師輔)に「事なくおはします殿の、貫之のぬしの家におはしましたりしこそ、猶ほ和歌はめざましき事なりかしとおぼえ侍りしか。正月一日つけさせ給ふべき魚袋の損はれたりければ、繕はせ給ふ程、先づ貞信公(忠平、師輔の父)の御許に參らせ給ひて、かう〳〵の事の侍れば、内に遲く參る由を申させ給ひければ、太政大臣(おほきおとど)(忠平)驚かせ給ひて、年頃持たせ給へりける取出でさせ給ひて、やがて肖物(あえもの)(あやかりもの、父にあやかれの意)にもと奉らせ給ふを、ことうるはしう松の枝につけさせ給へり。その御かしこまりの喜は御心の及ばぬにしもおはしまさざらめど、猶ほ貫之に召さむと思召して渡りおはしましたるを、待ちつけ申しけむ面目(めいはく)、いかゞは愚かなるべきな。吹く風に氷解けたる池の上を千代まで松の蔭にかくれむ。」つまり師輔が魚袋を借りた喜の歌を貫之に作らせる爲にわざ〳〵其の家へ行つたのは、實に和歌の德だといふ話である。但し本文の枇杷の大臣は師輔の誤である。

この僧上(法圓)世にもいと重く、山の座主(やまざす)にてものし給ふ事

彼の區別なく全體を一所にして。○むら〳〵　採られた歌の數が多かつたり少かつたり一定せぬをいふ。○吉水の僧正　僧慈鎭のこと。吉水は其の住所山城愛宕郡大谷の別名藤原忠通の子。初名道快。大僧正に叙せられ、慈圓といふ嘉祿元年寂す。年七十一。慈鎭大師と勅諡せらる。○と聞えし　といつた人もの意。○さのみは　そんなには。まだいろ〳〵話があるが、そんなには。

●世にもいと重く　世に重んぜられるをいふ。○山の座主　延曆寺の座主。座主は一山の寺務を總理する役。○ものし給ふ　只、あられるの意。○年久しかりし　長らくであつも、年久しかりし、その程に、やむごとなき高名數知らずおはせしかば、崇められ給ふさまも、になくものし給ひしかど、猶ほ飽かずおぼす事やありけむ、院(鳥羽)に奉られける長歌、

さてもいかに　鷲の御山の
月の影　鶴の林に
入りしより　經にける年を
數ふれば　二千年をも
過ぎはてて　後の五つの
百年に　なりにけること
悲しけれ　あはれ御法の
水の泡の　消えゆく頃に

た。○その程　座主であつた間。○やむごとなき高名　尊ぶべき手柄。○になく　非常に。似るものなしの意。○飽かずおぼす　不滿に思ふ。○鷲の御山　靈鷲山。釋迦の說法した所。三頁か見よ。○月の影　常住不滅の佛德を月に譬へた語。○鶴の林に入りし　釋迦の死をいふ。二頁を見よ。○二千年をも云々　二千五百年の意。○御法の水の泡云々　末の世となり佛法の衰へたをいふ。○それに　法の水、即ち佛法に。○わが山川　叡山を指す。○沈みゆく　山川の緣語。專心道を學ぶをいふ。○心爭ふ　心のしづまらぬ。○法の師　法師。○吾も〳〵と　爭ひ來る樣をいふ。○靑柳

それに心を
わが山川に
心爭ふ
吾も〳〵と
いと所せく
花も紅葉も
木ずゑ跡なき
道に迷ひて
ひとり心を
甲斐もなぎさの
跡垂れましゝ
神のめぐみを
なりぬれば
すましてぞ
沈みゆく
法の師は
靑柳の
亂れきて
散りゆけば
山べの
過ぎながら
過ぎやむるも
志賀の浦
吉のや
日

の「いと」にかゝる枕詞。○所せく　窮屈に。混みあふ様なをいふ。○木ずゑ　跡なき　花も紅葉も散るといふより言ひ掛けて、人跡の絶えたるをいふ。○甲斐もなきさ　「甲斐も無し」と「渚」との言ひかけ。○跡垂れ　佛が吾が國に神として垂跡するをいふ。○日よしのや　日吉神社の神。ヤは助辭。○みつ川　「願を滿つ」と山城の「美豆川」との言ひかけ。○峯の聖の住家　比叡山の僧の住む堂舍。○苔の下にぞ　頽廢したるをいふ。○あなうの花　「あゝ憂し」の意を「卯の花」の語にかけたのである。○秋の楯　秋樹々の紅葉するをいふ。○跡絶えむと　山門の跡も絶えようかと。○

頼めども　人の願ひを
みつ川の　流れも淺く
なりぬべし　峯のひじりの
住家さへ　苔の下にぞ
埋れゆく　道拂ふべき
人もがな　あなうの花の
世の中や　春の夢路は
空しくて　秋の楯を
思ふより　冬の雪をも
訪ふかな　かくてや今は
誰か訪ふ　と思ふからに
跡絶えむ
くれはとり　あやしきよるの

くれはとり　吳織。「あや」にかゝる枕詞。○わが思ひ　思ひのヒを「火」にかけて、思ひが絶えるを「消ゆ」といふ。○猶ほさりともと　猶ほたとひさうはあつても、又盛んになる時もあらうかと。○つくば山　常陸の筑波山。「心をつくく」と言ひかけ、又次の「しげき」を引き出す。一八頁を見よ。○ね　根源。悲歎すべき賽願の原因。「なげき」のキを木にかけて、根と言つたのである。○昔の靈　古人の靈。○み山の鐘を　下の「つくづく」のツクに言ひかけたのである。○峰の松風長閑にて　山門の隆盛に赴くをいふ。○法のむしろ　法會を行ふこと。○人を渡さむ橋　人を濟度す

わが思ひ　消えぬばかりを
頼みきて　猶ほさりともと
思ひつゝ　しばし都に
やすらひて　殘る御法の
花の香に　強ひて心を
つくばね山　しげき歎きの
つゞねをた　沈む昔の
靈を訪ひ　救ふ心は
深くして　勤めゆくこそ
あはれなれ　み山の鐘を
つくづくと　わが君が代を
思ふにも　峰の松風

るにたとふ。○遂にはいかゞ　遂にはどうなるか分らないがの意。○飛鳥川　「あす」といふ爲の語。○我が立ちし杣　「わが立つ杣」はわが住む山寺の意で、延暦寺のことをいふ。傳教大師が此の山の根本中堂を創建する時、阿耨陀羅三藐三菩提の佛たちわが立つ杣に冥加あらせ給へ」と詠んだによる。○たつき　錘で杣人の使ふ斧。○響より　宗祖傳教大師の遺徳をいふ。○反歌　長歌の意をくりかへし、又はそれに漏れ盡さなかつた思想を詠んだ短歌。○絶えで絶えゆく　まだ絶えてはしまはないが、殆ど絶えむとしつゝあるの意。

長閑にて　千代に千年を
添ふるほど　法のむしろの
花にほひてぞ　野にも山にも
橋となして　人を渡さむ
休むべき　しばし心を
飛鳥川　つひにはいかゞ
我が立ちし　あすより後や
響よりり　杣のたつきの
霧れのきて　峯の朝ぎり
立ちかへるべき　曇らぬ空に

反歌

さりともと思ふ心ぞなほ深き
たえでたえゆく山川の水

【さてもいかに云々】　元來長歌は「五七、五七」の旋調で詠むべきものであるが、平安朝以後、七五調に變つてしまつた。この歌もさうである。さて一首の意は——釋迦入滅後最早や二千五百年を經て、澆季の世となつたのは悲しいことである。かく末法の世となつたので、自分は獨り心を淸まして、この山深く籠り、專心道を行じて居ると、心の靜まらぬ法師達は、吾も〳〵と澤山にやつて來るが、直又去つてしまつて、留まる者もない山門に、吾只一人心を留めて佛法を興隆しようと思つた所で、何の甲斐もない。折角たよる日吉の神さへ、かゝる末世には神威もうすく、願はかなはないであらう。かくて山門の堂舍は益〻荒廢してゆく。誰か之を元の莊嚴に引返す者があればよいが、何と悲しい世であらう。四季折々につけても誰一人訪ひ來る者なく、山門は將に跡が絶えようとする有樣に、夜もろく〳〵寢ず、心配するが、併し又何

とかなるかも知れぬと、僅かに一縷の望を抱いて、都に上り、暫く滞在して、殘る御法の花の香に强ひて心をつけ、この悲歎の本を究め、且は古人の靈を訪うて、山門の衰頽を救はうとして、一心に勤めて居るのは、吾ながら實にあはれである。併しつら〳〵吾が君が代を思ふにつけても、再び山門を興隆して、佛德天下に遍く、天下の萬民を濟度し得たらば、自分の心も休まることであらう。終にはどうなるか知らないけれども、兎に角明日からは又宗祖傳敎大師の遺德によつて、山門の雲霧自ら霽れゆき、元の通り盛んになるであらう。

【二千年云々】 釋迦入滅よりこの元久二年（次の明月記の文參照）までは二千百五十餘年であるから、只大數を擧げたものと見るべきである。

【さりともと思ふ心ぞ云々】 一宗の法水は始と流絕えんとし、山門は今や甚だしく衰頽したが、私はまだ何とかなりはしまいかと一心に思つて居る。陛下におかせられても、どうかこの心をくみ、然るべく御取り計らひありたしの意。

●定家の中將、折ふし御前にさぶらひければ、この返しせよとて、

久方の　天地ともに
限りなき　天つ日嗣を
誓ひてし　神諸共に
護れとて　我が立つ杣を
祈りつゝ　昔の人の
占めてける　峰の杉むら
色變へず　幾年々を
隔つとも　八重の白雲
眺めやる　都の春を
隣にて　御法の花も
衰へず、　匂はむものと

たまはすに、げにいと疾く書きて御覽ぜさせけり。

●折ふし　丁度その時。○さぶらひければ　伺候して居たので。○返し　返歌。○さしたまはす　渡し給ふ。○久方の「あめ」にかゝる枕詞。○天つ日嗣　天子の御位。○誓ひてし　天孫降臨の際、天祖が、寶祚の隆なること天壤と共に窮なかるべしと誓はれたをいふ。○神　天照大神をいふ。○護れ　皇室を。○我が立つ杣を祈りつゝ　我が立つ杣、卽ち延曆寺の繁榮を祈りつゝの意。○昔の人　宗祖傳敎大師を指す。○占めてける　占む（マ、下二）は領する。我が有とする。王城鎭護の爲延曆寺を建てたをいふ。○杉むら　杉の澤山生えた所。○八重の白雲　櫻花の瀰漫と匂へる樣を白雲に譬へ、都の榮えをいひ、兼ねて「隔つ」の緣

語としたのである。○末葉の露　思ひおきし末に言ひかけ末世の意をなす。○もとの心　昔大師の誓ひ給ひし元の心○うき節繁き　憂き事多きの意。「呉竹」の縁語。○古巣は雪に云々　山門の荒廢にたとへいふ。○跡絶えぬべき　山門の跡が絶えんとする意に人跡絶えたる意を兼ねたのであらう。○樵り積む　木を樵り集める。○なげき云々　歎きを木にかけ、更に「椎柴」につづけ、この「椎柴」から又、強ひて」にかけたのである。○しひ柴　椎の木の叢生せる所。○葛の裏葉　葛の葉は裏白く風にひるがへつて見えるものであるから、「かへされぬ」(昔の様に返しえない意)にかけ、

思ひおきし　末葉の露も
定めなき　かやが下葉に
亂れつゝ　もとの心の
それならぬ　うき節しげき
呉竹に　なく音をたつる
うぐひすの　古巣は雪に
荒らしつゝ　跡絶えぬべき
谷がくれ　樵り積むなげき
しひ柴の　しひて昔に
かへされぬ　くずのうら葉は
怨むとも　君は三笠の
山高み　雲居の空に

更に音調上より「怨む」につゞけたのである。○君　慈鎭を指す。○三笠の山高み云々　三笠山は奈良にある山。春日神社のある所。慈鎭は藤原氏であるから、三笠山の高、雲居に聳ゆる如くの意。○雲居の空　宮中をいふ。○照る日　天皇。○星の宿り　太政大臣・左右大臣を三台星にたとへていつた語、○鷲の山　靈鷲山。○深き流に掬ぶてふ　深遠なる法理を究めるをいふ。○沼の葦間に影宿す　澆季の世を葦の繁つた沼にたとへ、その沼に影宿す月の清きを日吉の神威の明かなるにたとへたのである。

交じりつゝ　照る日を代々に
助け來し　星の宿りを
ふり捨てて　獨り出でにし
鷲の山　世にも稀なる
跡とめて　深き流に
掬ぶてふ　法の清水の
底澄みて　濁れる世にも
濁りなし　沼の葦間に
影宿す　秋の半ばの
月なれば　なほ山の端を
行き廻り　空吹く風を
仰ぎても　空しくなさぬ

行末をみつの川浪立ちかへり
晴くべき心の闇を日吉の御かげ
長閑にて君を祈らむ
よろづ代に千世を重ねて翼にならす
松が枝を磨きおくわが道までも
鶴の子の絶えせずば言の葉ごとの
わかきつめて今は玉藻をためしもなみに
かきおくわが道までも
色々に後見む人も

○みつの川浪　「美豆川」に「見つ」をかけた語。○晴く　晴らす。○君を祈らむ　君が代の萬歳を祈る。○翼にならす　翼の練習をする。○譲る齢　鶴がその千年の齢を君に譲るとの意。○わかの浦　「和歌の浦」に「若やぐ」意をかけ、更に和歌の意をも含ませたのである。○かきつめて　掻き集めて。○例もなみに　「例もなし」に「波」をかけた語。○わが道　歌道をいふ。○後見む人も　後世の人も君を仰ぎ慕ふであらうの意。

戀ひざらめかも

反歌

君を祈る心深くは頼むらむ
絶えては更にやま川の水

【久方の云々】　寶祚の隆なること天壌と共に窮まりなかるべしと誓ひ仰せられた天祖と共に吾が皇室を守護し奉れとて、吾が立つ袖に冥加あらせ給へと、諸佛に祈りつゝ、昔傳教大師が創業せられた此の延暦寺は、その山上の杉叢の鬱蒼として生ひ茂る如く、たとひ幾百年を經ても、咲き匂ふ花の都を隣に眺め、佛法益〻興隆すべきものと思ひ定めて居た。然るに澆季の世となつては、丁度萱の下葉におく露の亂れるやうな亂脈となり、開祖の誓とはまるで違つて、憂ふべき事のみ多く、山門將に跡絶えむとするを歎いて、君はいろ〳〵心を碎き、强ひて昔の繁榮にかへさうとする。併し今の所事情は之を許さないが、さればとて怨んでも仕方がない。君は元來藤原氏の出で、禁廷に立ち交り

つゝ、代々天子を輔佐し來つた家柄の人、隨つて在俗ならば、三公の位にも昇るべきに、それを振棄てて、獨り佛門に歸し、深遠微妙の法理を究め、濁惡の世にも只獨り高潔一世にぬきんでて居る。たとひ世は濁つて居ても、日吉の神威は丁度かの沼の葦間に影を宿す秋月のやうに皎々として輝き渡つて居るから、之を祈れば、たとひ一旦は衰へても、又立ちかへり、君が願を聞届けて、將來は益〻盛んとなるべく、山門の荒廢を歎き給ふ心の闇を晴らすべき神の御心は長閑であるから、少しも御心配には及ばぬ、心をとり直して益〻君が代の萬歳を祈り給へ。松が枝に巢くうて常に翼を練習して居る鶴の子は其の千年の齡を君に讓つて、君は益〻若やぎ給ふべく、又君は歌道にも勝れて居られるから、多くの名歌をよまれゝば、吾が歌道も益〻發達して、後世の人も君を仰ぎ慕ふことであらう。

【君を祈る心深くは云々】心をこめて君が代の萬歳を祈り奉り、時節到來して、山門復興の御裁可あるを待ち給へ。山門の跡は決して絶えないだらう。○「やま川の水」の**ヤマ**は「更に止まず」の**ヤマ**にかけたのである。○この歌については定家の日記「明月記」に左のやうにある。「元

●長閑に　心靜かにゆつたりとして。○もていでぬ御本性　テキバキと表立つてはせぬ御性質。○わざとある樣　わざ〳〵するやうなこと。わざわざ歌合をするやうなこと。○いふがひなき兒　いふにも足らぬ、つまらぬ子供。讓遜していはれたのである。

久二年四月廿日、已刻上、小時。家長持二參長歌一大僧正詠進給云々。此歌可二和進一之由。有二仰事一。長歌曾未レ詠レ之。卒事勿論也。但出御以後退出。卽終レ編如レ夕。不レ加レ點。如レ形淸書。又持參。云々。」○又「拾遺愚草」(下)には右の長歌の詞書に「水無瀨殿にさぶらひしに、大僧正の長歌を詠みて奉られたるを、返し只今仕うまつるべき由、仰事ありしかば、やがて書きつけ侍りし」とある。

新院(土御門)も長閑におはしますまゝに、御歌をのみよませ給へど、萬の事もていでぬ御本性にて、人々など集めて、わざとある樣(さま)には好ませ給はず。建保の頃、内々百首の御歌詠み給へりしを、家隆の三位、また定家の治部卿の許(もと)などへ、「いふがひなき兒(ちご)のよめる」とて、遣して見せられ給ひしに、いづれもいでたく、さまざまなる中に、懷舊の御歌に、

○秋の色　秋の景色。○雲の上　禁中。○驚きかしこまりて　驚き恐入つて。○裏書　詠草の裏に書く詞。○あさましく　思ひがけなく。○はかられ　欺かれ。○緣ありて　何かのついで。○いかゞ御心動かすしもおはしまさむ　之を御覽になつては、院も恐らく御心が動くであらう。○忝くなむ　畏れ多いことである。○世の中隔たれる　世の中から疎外されて。○いとほしき氣の毒な。○とぞ　といふ話だ。

秋の色を送り迎へて雲の上に
　馴れにし月もものわすれすな

とある所に、定家の君驚きかしこまりて、裏書に、あさましくはかられ奉りける事など記して、

飽かざりし月もさこそは思ふらめ
　古き涙も忘られぬよを

と奏せられたり。院（後鳥羽）も緣ありて御覽ずべし。げにいかが御心動かすしもおはしまさむと、その世の事忝なくなむ。今もすこし世の中隔たれる樣にてのみおはしますこそ、いといとほしき御有樣なめれとぞ。

【秋の色を送り迎へて云々】　禁中に於て幾秋を送り迎へて見馴れた月も、吾の汝を忘れぬ如く、吾を忘れること勿れの意。卽ちたとひ帝位を去つても、吾を忘れるなの意。

【飽かざりし月もさこそは云々】　御退位の時は、私たちも泣きましたが、その折の悲しみは猶ほ忘れません。長く御馴れ申して、飽かで別れた雲の上の月も、さぞかし悲しく思ひませうの意。

(1)

◉猛き武士　勇猛な武士。○起り　起源。○田村　坂上田村麻呂。屢〻蝦夷を征討して功あり、右近衛大將に至り、侍從兵部卿を兼ね、後又大納言に進む。弘仁二年薨ず、年五十四。○利仁　藤原時長の子。延喜中鎭守府將軍に任ぜらる。下野國高座山の賊を平げて武名を轟かした人。○耳遠ければ　時代のかけはなれたをいふ。○そのかみ　昔。○二流　流は血筋。○大やけ　朝廷。○柏原の御門　陵名によつて申す名。○聞えしより　と申した人から。○平將軍貞盛　國香の子。元慶元

第二　新島守

猛き武士の起りを尋ぬれば、古へ田村・利仁などいひけむ將軍どもの事は、耳遠ければさしおきぬ。そのかみより今まで、源平の二流ぞ、時により折に隨ひて、大やけの御守となりにける。桓武天皇と聞えし御門をば柏原の御門とも申しけり。その御子に、式部卿の御子（葛原親王）と聞えしより五代の末に、平將軍貞盛といふ人、維衡・維時とて、二人の子をもたりけり。ま近く榮えし西八條の淸盛のおとゞは、かの太郎維衡より六代の末なりき。その一門亡びしかば、この頃は僅かにあるかなきかにぞさまよふめる。さてかの維時が名殘は只管に民となりて、平四郎時政といふ者のみぞ伊

(1)

年藤原秀鄕と共に平將門を討ち、功を以て鎭守府將軍に任ぜらる。○維衡　驍勇を以て聞えた人。上野・常陸介、又伊勢・陸奥・出羽・伊豆・下野・佐渡守等となる。伊勢に居た爲その子孫も世に伊勢平氏といふ。○維時　貞盛の二子維將の子。卽ち貞盛の孫に當るから、本文の記事は誤である。○もたりけり　持つて居た。○ま近く　近頃。○西八條　京都八條坊門の南、大宮通の西。淸盛の邸宅のあつた所。○おとゞ　大臣などの尊稱。○太郎維衡　太郎は長男の意。○その一門　平家の一門○あるかなきかにぞ云々　微微として振はず、諸所を流浪して居る。○名殘　子孫。○

豆の國北條の郡とかやにあめる。それも維時には六代の末なるべし。

【維衡より六代の末】

桓武天皇―葛原親王―高棟王―高見王―平高望―
國香―貞盛―維衡―正度―正衡―正盛―忠盛―淸盛
維將―維時―維方―聖範―時方―時家―時政

【維時が名殘】

貞盛―維將―維時―維方―聖範の子時方は祖父に當る維方に養はれ、伊豆介となり、爾來子孫は伊豆北條に住んで北條を氏とした。

又源氏武者といふも、淸和の御門、或は宇多の院などの御後どもなり。二條の院の御時、平治の亂に、伊豆の國蛭が小島へ流されし兵衞の佐賴朝は、淸和の御門より八代の流に、六條の判官爲義といひし者の孫なり。左馬頭義朝が三

(2)

只管に　全く。○民となりて　朝廷に出仕せず、民間に下るをいふ。○平四郎時政　北條時政。

●平治の亂　二條天皇平治元年、藤原信頼、源義朝と共に兵を起し、天皇及び後白河上皇を幽す。併し遂に戰敗れて信頼・義朝共に誅に伏し、義朝の子頼朝は伊豆に流さる、○姪が小島　田方郡韮山村。今は田となつて居る。○流　子孫。○六條判官　爲義の家は六條堀河にあつたから六條といふ。判官は檢非違使尉。○三郎　三男。○然るべき時や至りけむ　丁度運が向いて來たのであらうか。○壽永の秋の木がらしは秋冬の候烈しく吹く風。壽永元年秋七月平家一族の木曾義仲に追はれて西海に奔つたことをいふ。○わたつ海　海。○底の藻屑と　屑となつての意。海底に沈んで死んだことをいふ。時に文治元年三月。○權を施して　權を專らにして。○後見　輔佐すること。○世をば掌の中に　天下を我が自由になるものと思つたの意。○皆人云々　尼の語として中に一寸挿んだのである。○申すも中申なれど　申すも却つて煩しいが。○世のかため　天下を守護するもの、即ち征夷大將軍となつたこと。○二のはし　從二位。「はし」は階。○八島の内の大臣　宗盛のこと　清盛の次子。遂に近江篠原に

郎になむありける。西八條の入道おとゞ(時)やう〳〵榮華衰へむとて、後白河院をなやまし奉りしかば、安からずおぼされて、かの頼朝を召しいでて、軍を起し給ひしに、然るべき時やいたりけむ、平家の人々は壽永の秋の木がらしに散りはてて、遂にわたつ海の底のもくづと沈みにし後、頼朝いよ〳〵權をほどこして、更に君の御後見を仕うまつる。相模の國鎌倉の里といふ所に居りながら、世をば掌の中に思ひき。皆人知り給へることなれば、今更に申すも中申なれど、院の上(法皇)位に卽かせ給ひし初より、世のかためとなりて、文治元年四月、二のはしをのぼりしも、八島の内の大臣宗盛を生捕の賞と聞えき。建久の初つ方都に上る。その勢のいかめしき事、いへば更なり、道すがら遊びもの

ども參る。遠江の國橋本の宿に著きたるに、例の遊女多く、えもいはずさうぞきて參れり。頼朝うちほゝゑみて、

橋本の君に何をかわたすべき
といへば、梶原平三景時といふ武士、とりあへず、
たゞそま山のくれであらばや
いとあいだてなしや。馬鞍・こんくゝりものなど運び出でて引けば、喜び騷ぐ事限りなし。

【清和の御門より八代の流】

清和天皇―貞純親王―源經基―滿仲―頼信―頼義―義家―爲義―義朝―頼朝

【後白河院を惱まし奉り云々】　治承三年、平家を滅さうとした藤原成親等を殺し、後白河法皇を鳥羽殿に移さうとしたことがある。此の時は重盛の諫言によつて中止したが、重盛の薨後、女婿藤原基通の中納言

斬らる。○いかめし　おごそか。○いへば更なり　いふまでもない。○道すがら　道々○遊びもの　遊女。○橋本　遠江敷智郡。○えもいはず　非常に。○さうぞきて　裝束の音を活用した語。よそほひ飾りて。素的にめかしてなどの意。○いとあいだてなしや　何とまア愛想のないことだらう。○ヤは感動の助辭○こんくいり　紺色のしぼり染。○引けば　引出物として與へると。

●喜び申して　朝廷に任官の御禮を申上げること。○つかさをば返し　辭職するをいふ○總追捕使　奸惡の徒を逮捕鎭靜することを掌るもの。この稱は賴朝以前にもあるが賴朝のは全國の追捕使を總管する職の義である。○地頭職　莊園、即ち諸家の私領地のことを掌るもの。○我が家のつはもの　賴朝の家人。○これより　武人が政權を掌握するやうになつたことをいふ。○ぬさ　餞別の贈物。○年比も　以前からズツと。○祈　賴朝の爲に祈ること。○かの長歌の座主　吉水の僧正卽ちかの長歌の座主の意。前に長歌を詠んだ記事があるからである。○のたまひつかはしける　詠んで贈られた。○東路　足柄山邊から東、陸奥に至るまでの路筋をいふ。○勿來の關　常陸多賀郡關本村から磐城石城郡窪田村へ越える山路にある。○御返し　賴朝の返

を望んで許されなかつたことを憤り、關白基房を罷め、法皇を鳥羽殿に幽した。

【橋本の君に云々】　橋本の遊女等に何をやらうかの意。「わたす」は橋の緣語である。

【たかそま山の云々】　「そま山」は材木を採る山。「くれ」は與ふる意の「くれ」に材木の意の「くれ」（榑）をかけたので、何もやらなくてもよいの意である。

その年の十一月九日、（賴朝）權大納言になされて、右近大將を兼ねたり。十二月の朔日頃、喜び申して、同じき四日、やがてつかさをば返し奉る。この時ぞ諸國の總追捕使といふ事うけたまはりて、地頭職に、我が家のつはものどもをなし集めけり。この日本國の衰ふる始は、これよりなるべし。さて（賴朝）あづまに歸り下る頃、上下いろ〳〵のぬさ多かりし中に、

年比も祈などし給ひし吉水僧正（慈圓）、かの長歌の座主のたまひつかはしける。

東路の方になこその關の名は
君を都に住めとなりけり

御返し、賴朝、

都には君に逢坂近ければ
なこその關は遠きとを知れ

その後（賴朝）もまたのぼりて、東大寺の供養にも詣でたりき。新院（土御門）の御位の初つ方、正治元年正月、東にて頭おろして、同じき十三日に、年五十三にてかくれにけり。治承四年より天の下に用ひられて、二十年ばかりや過ぎぬらむ。

【東路の方に勿來の云々】　東路の方に勿來の關といふ地名のあるのは、

君が其方へ行かす、何時までも都に留つて居れといふことだの意ようなこそ」は地名に「來るな」の意をかけ、「關」もせき止める意をきかせたのである。

【都には君に逢坂云々】地名の逢坂を君に逢ふ意にかけ、その中直に又都で君に逢ふのであるから、勿來の關は遠い、即ち長く東國に留まることはないの意。

【東にて頭おろし】百練抄（卷十二）に「正治元年正月十三日。前右大將賴朝薨（年五十三）。依二所勞一去十一日出家。」

朝綱薨（年五十三）。依二所勞一去十一日出家。」

北方（きたのかた）はさきに聞えつる北條四郎時政が女なり。その腹に男二人あり。太郎をば賴家（よりいへ）といふ。弟をば實朝（さねとも）と聞ゆ。大將（頼朝）かくれて後、兄（頼家）はやがて立ち繼ぎて、建仁元年六月廿二日從二位、同日將軍の宣旨（せんじ）をたまはる。また の年左衞門督（かみ）になさる。かゝれども、少しおちゐぬ心ばへなどありて、やう〳〵兵（つはもの）どもそむき〳〵にぞなりにける。時政は遠江守

(4)

○逢坂　近江。今の大谷町の邊。○遠きとを知れ　遠いと知れ。ヲは助辭。○上りて　都に。○東大寺　奈良にある聖武天皇勅願の寺。○供養　佛法僧に物を供へ、回向すること。建久六年三月のこと。○あづま　東國。鎌倉をいふ。○頭おろして　剃髮して。○治承四年　伊豆に旗擧した年。○天の下に用ひられて　天下に勢力を得しをいふ。○北の方　奥方。○さきに聞えつる　前に申した。○時政が女　時政の長女。名は政子。○太郎　長男。○かくれて後　薨じてから。○立ち繼ぎて　相續して。○元年六月　一代要記東鑑等二年七月に作る。○宣旨　任官のみことのり。

○またの年　翌年。○おちゐぬ心ばへ　沈著を缺く性質。○やう〳〵　兵どもが背くやうになつて來た。○ありし時　在世の時。○私の後見　執權職をいふ。公の攝關に對する稱。○まいて　まして。○孫　賴家は時政の孫に當る。○身重く　威望重きをいふ。○うけばりたる　萬事引受けて事らにする、即ち政權を專らにするをいふ。○魂まされる　氣力のすぐれた。○ふさはしからず　將軍としては似合はしくない。○思ひ構ふ　心にたくらむ。計畫する。實朝を將軍としようとしたこと。○督　左衞門督、即ち賴家。○日にそへて　日增しに。○背けら

といひて、故大將（頼朝）のありし時より、私の後見（うしろみ）なりしを、まいて今は孫（うまご）の世なれば、愈〻身重く、勢添ふ事限りなくて、うけばりたる樣なり。子二人あり。太郎は宗時といふ。次郎は義時といへり。次郎は心も猛く、魂まされるものにて、左衞門督（頼家）をば、ふさはしからず思ひて、弟の實朝の君に附き從ひて、思ひ構ふる事などもありけり。督（頼家）は、日にそへて、人にも背（そむ）けられゆくに、いといみじき病をさへして、建仁三年九月十六日、年二十二にて頭（かしら）おろす。世の中殘り多く、何事もあたらしかるべき程なれば、さこそ口惜しかりけめ。幼き子の一萬といふにぞ、世をば讓りけれど、うけひくものなし。入道（頼朝）は、かの病つくろはむとて、鎌倉より伊豆の國へ、いで湯あびに越えたりける程に、

れゆく　人心離反するをいふ　○いみじき病　ひどい病氣。○世の中殘り多く　年なほ若く。○あたらしかるべき程　惜しむべき年齢。○うけひく　承諾する。○病つくろはむ　病を治療しよう。○いで湯　溫泉。○かしこ　伊豆を指す。○一つ心にて云々　心を協せて計略をめぐらしたのであらう。

●官位滯る事なく　官位のずん／＼と進むをいふ。○正二位せしは　正二位に陞つたのは。○閑院の內裏　京都二條の南、西洞院の西にあつたもの。○父にもやゝ立ちまさりて　頼朝は從二位權大納言右大將であつたから、實朝の方

かしこの修善寺（しゆぜんじ）といふ所にて、遂に討たれぬ。一萬もやがて失はれけり。これは實朝と義時と、一つ心にてたばかりけるなるべし。

【修善寺といふ所にて遂に討たれぬ】　愚管抄（卷六）に「さてその年（建仁三年）の十一月三日終に一萬若をば、義時とりておきて、藤馬といふ郎等して刺し殺させて埋みけり。さて次の年は元久元年七月十八日に修禪寺にて又頼家入道をば刺し殺してけり。」○本文に一萬が後に死んだやうにあるのは誤である。

さて今は偏に實朝、故大將（頼朝）の跡をうけつぎて、官位滯（つかさくらゐ）る事なく、よろづ心のまゝなり。建保元年二月廿七日正二位せしは、閑院（かんゐん）の內裏（だいり）造れる賞とぞ聞き侍りし。同じき六年權大納言になりて、左大將を兼ねたり。左馬頭をさへぞつけられける。その年やがて內大臣になりても、猶ほ大將も

が上である。○いみじかりき　えらかつた。○心ばへうるはしく　性質が立派で。○めやすければ　非難すべき點がなかつたから。○あせなむ　あす（自、サ下二）は水が涸れて底が淺くなる。ナムは助動詞ヌに助動詞ムのついたもの。○ふた心　身方すべきものに背く不誠實な心。

とのまゝなり。父にもやゝ立ちまさりていみじかりき。このおとゞ（實朝）は大方心ばへうるはしく、猛くもやさしくも、よろづめやすければ、理りにも過ぎて、武士（もの〻ふ）の靡（なゞ）き從ふ樣も、父（頼朝）にも越えたり。いかなる時にかありけむ、

山はさけ海はあせなむ世なりとも
君にふた心わがあらめやも

とぞよみける。

【閑院の內裏造れる】　閑院の內裏はもと藤原冬嗣の第であつた所。高倉帝の時、皇居となり、壽永二年後鳥羽帝はこゝに踐祚せられた。その後文治元年地震の爲、その一部が破壞したので、頼朝が修造したが、承元二年又火災に罹つたので、建曆二年後鳥羽院が實朝に命じて造營せしめられたのである。かくて建保元年二月竣成した。

【山はさけ海はあせなむ云々】　山は裂け崩れ、海は水が涸れて淺くなつ

てしまふやうな世であつても、私は決して朝廷に對して異心を挾むことはない。

時政は建保三年にかくれにしかば、義時ぞ跡を繼ぎける。故左衛門督(組)の子にて、公曉といふ大德あり。親の討たれにし事を、いかでか安き心あらむ。いかならむ時にかとのみ思ひわたるに、この内大臣(實朝)、また右大臣にあがりて、大饗などゝ、珍しくあづまにて行ふ。京より尊者をはじめ、上達部・殿上人多くとぶらひいましけり。さて鎌倉にうつし奉れる八幡の御社に神拜に詣づる、いといかめしきひゞきなれば、國々の武士は更にもいはず、都の人々も扈從しけり。立ち騒ぎのゝしるもの、見る人も多かる中に、かの大德(脫)うちまぎれて、女のまねをして、白き薄衣ひきを

●公曉　一萬の弟、卽ち頼家の二男。○大德　僧。○いかならむ時にかとのみ　何時かよい時があつたら、復讐しようと。○思ひわたる　思ひつゞけて。○月日を送る。○右大臣にあがりて　建保六年十二月。○大饗　大臣大饗といふ。大臣となつた時、諸大臣以下殿上人を招いて催す祝宴。○珍しく　普通は京都で行はれるのに、此度は。○あづま　關東鎌倉をいふ。○尊者　大饗の上客となる人。この時は坊門大納言忠信。○とぶらひ　訪問の意。鎌倉に下るをいふ。○いかめしきひゞき　大變なさわぎ。行列などの嚴肅なことをいふ。○扈從　お供。○のゝしる　どなる。○女のまね　女裝。○ひきかづく　被つて居る。○あやまたず　うまく。○とよみ騒動。○いみじき　數多。○京にも　朝廷でもの意。○火を消ちたる樣　「消ち」は「消し」に同じ。俄に寂しく物足らぬやうに感ぜられたをいふ。○宰相中將實氏　宰相は參議の唐名。實氏は公經の子。上御門帝以下六朝に仕へ、從一位太政大臣に至る。文永六年薨ず　世に常盤井入道と稱す。○さならぬ人々　扈從でない人々。○上りける　京へ。

り、大臣(實朝)の車より下るゝほどを、さしのぞくやうにぞ見えける。あやまたず首をうち落しぬ。その程のとよみいみじき、思ひやりぬべし。かくいふは承久元年正月二十七日なり。そこら集ひ集れるものども、たゞあきれたるより外のことなし。京にも聞しめし驚く。世の中火を消ちたる樣なり。扈從に西園寺の宰相中將實氏も下り給ひき。さならぬ人々も、泣く〳〵袖をしぼりてぞ上りける。

【鎌倉に遷し奉れる八幡の御社】所謂鶴岡八幡宮。今は國幣中社。冷泉帝の朝、源頼義が安倍貞任を征する時、男山八幡宮を由比ヶ濱に勸請したるに始まり、その後頼朝が今の地に遷したのである。

【車より下るゝ云々】吾妻鏡(卷廿二)に「承久元年正月廿七日。入夜雪降。積二尺餘一。今日將軍右大臣家。爲二拜賀一御二參鶴岳八幡宮一。酉刻(午後六時)御出。云々。路次隨兵一千騎也。及二夜陰一。神拜事終。漸令二退出一

●事鎭まりなむ程とて　騷動が鎭まるまでの間といふので　○母北方　母君。○二位殿　從二位であつたからいふ。○しをれ過す　悲しさに打ちしをれて日を送る。○かくても　さのみはいかゞにて　かうして政子を將軍としても、いつまでもさうしておくのはどうかといふので。○公達　貴族の子弟をいふ。○一所　一人の意。○下し聞えて　鎌倉へお下し申して。○公經　實氏の父。○あへなむ　差支なしさうしてもよい。○九條左大臣　藤原道家、良經の長子。土御門帝以下五朝に歷仕し、

御之處。當宮別當阿闍梨公曉。襲二來于石階之際一。取レ劔奉レ侵二丞相一。爰阿闍梨持二御首一。被レ向二于後見備中阿闍梨之雪下北谷宅一。」

（實朝）未だ子もなければ、立ち繼ぐべき人もなし。事鎭まりなむ程とて、故大臣（實朝）の母北方二位殿政子といふ人、二人の子をも失ひて、涙ほす間もなく、しをれ過すをぞ、將軍に用ひける。かくても、さのみはいかゞにて、「公達一所下し聞えて、將軍になし奉らせ給へ」と、公經の大臣に申し上せければ、あへなむとおぼす所に、九條の左大臣殿（道家）のうへは、このおとゞ（公經）の御女なり。その御腹の若君（賴經）の二つになり給ふを下し聞えむと、九條殿（實家）のたまへば、御孫ならむも同じ事とおぼして、定め給ひぬ。その年の六月に、あづまにゐて奉る。七月十九日におはしましつきぬ。襁褓

攝政、關白となる。建長四年薨ず、年六十。○うへ　奧方　○若君　賴經。道家の二子。○御孫ならむも同じこと云々　公經が思ふに、外孫の賴經が將軍になつても、子がなつたのと同じだと。○ゐて奉る　お連れ申して行つた。○襁褓　產衣（うぶぎ）。○形代　祭の時、神體の代りとしてすゑるもの。○さながら　總て　○一の人　攝政、關白をいふ　○春日大明神　藤原氏の祖天兒屋根命を祀る。

の中の御有樣は、只形代などを祝ひたらむやうにて、萬の事さながら右京權大夫義時朝臣心のまゝなり。一の人の御子の將軍になり給へるは、これぞ初なるべき。かの平家の亡ぶべき世の末に、人の夢に「賴朝が後は、その御太刀あづかるべし」と春日大明神仰せられけるは、この今の若君（賴經）の御事にこそありけめ。

【賴朝が後はその御太刀あづかるべし】　保曆間記に「其の比（平家が都を福原へ遷した時分）源中納言雅賴卿の內侍不思議の夢を見る事あり。大內の神祇官とおぼしき所に、衣冠正しき人々多く着座せらる。末座におはしける人座を追立てられ給ふことあり。何と申せば、太政入道方人嚴島明神と申す。其の後上座し給へる人仰せられけるは、此の程太政入道に預け置く太刀をば源賴朝にたぶべしと仰せらる。中に御座す人、其の後は我が孫に此の太刀をば給はるべしと仰せらる。傍人に問ひければ、上座し給へるは八幡大菩薩、中程に御座すは春日大明神

●世を靡かし　世の中の事を總て自分の思ふやうにするをいふ。○したゝめ行ふ　處理する。○ほと〳〵　殆ど。○まめやかに　忠實に。○目ざましき　目もさめるばかりの。目に立つ。義時が將軍頼經を補佐して政にいそしみ、政令善く行はれるをいふ。○忍びて思し立つ　内々で計畫せられる。北條氏が餘り勢力を得るので、之を滅さうと計られるをいふ。○近く仕うまつる　陛下の御側近く仕へて居る。○北面の下臈　北面には上下の二種あり、四位・五位を上北面、六位を下北面（げほくめん）といふ。下臈は官位の低いもの。こゝは下北面のことであらう。○西おもて　西面（せいめん）。北面（キタオモテともいふ）に對し、院御所の西面に伺候するよりいふ。北面は白河院の時に始まり、西面は後鳥羽院の時に始まる。○この方　上皇の御計畫。○ほのめきたる　内々同意して居るもの。○兵仗　武器。○いとなみ　用意、支度。○劒などを御覽じ知る　刀劒の利鈍を鑑定すること。○いかで習はせ給ひたるにか　どうして稽古遊ばしたのだらうか。○道のもの　專門家。○かしこく　目のきくこと。

と申す。右の夢さめにけり。此の事高野宰相入道成頼聞きて申されけるは、我が孫と春日明神の仰せられけるは、藤氏の末に將軍御座すべきやらむ。又嚴島明神は女體にてこそ渡らせ給ふに、男にて見えさせ給ひけるこそ不審なれと申されけるこ。」

かくて世を靡かし、したゝめ行ふ事も、ほと〳〵古きには超えたり。まめやかにめざましき事も多くなりゆくに、院の上（後鳥羽）忍びて思し立つ事などあるべし。近く仕うまつる上達部・殿上人、まいて北面の下臈・西面などいふも、皆この方にほのめきたるは、あけくれ、弓矢・兵仗のいとなみより外の事なし。（後鳥羽）劒などを御覽じ知ることさへ、いかで習はせ給へるにか、道のものにも稍〻たち勝りて、かしこくおはしませば、御前にて善き惡しきなど定めさせ給ふ。

かやうのまぎれにて、承久も三年になりぬ。四月二十日御

門（順徳）おりさせ給ひ、春宮（仲恭）四にならせ給ふに讓り申させ給ふ。近頃皆この御齢にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならむかし。同じき二十三日、院號のさだめありて、今おりさせ給へる（順徳）を新院と聞ゆれば、御兄の院（土御門）をば中の院と申し、父御門（後鳥羽）をば本院とぞ聞えさする。このほどは家實の大臣（普賢寺殿の御子關白）にておはしつれど、御讓位の時、左大臣道家の大臣（光明峰寺殿）攝政になりたまふ。かの若君（頼經）の御父なり。

【四月二十日御門おりさせ給ふ】北條氏を滅すに、天子としては萬事都合が惡いから、わざと早くお位を下りられたのであらう。

さても院（後鳥羽）の思し構ふる事、忍ぶとすれど、やう〳〵漏れ聞えて、東（あづま）ざまにもその心づかひすべかめり。東の代官

●かやうのまぎれに　こんな事に取り紛れて居る中に。○春宮　仲恭天皇。名は懐成。順徳第四皇子。母は東一條院。○この御齢　四歳ないふ。後鳥羽・土御門共に四歳で受禪せられた。○これもめでたき云々　吉例によりこれも後鳥羽・土御門のやうに行末めでたく御榮えにならうの意○このほど　この頃。○家實　藤原基通の子。攝政關白太政大臣に至り、三宮に准ぜらる。仁治三年薨ず。猪隈殿と稱す。

●さても　「さて」に同じ。○思し構ふ　計畫される。北條氏追討の事。○忍ぶとすれど　内密にしておかうとしても○東ざま　關東がた。○その

にて、伊賀の判官光季といふものあり。かつがつ彼を御かうじのよし仰せらるれば、御方に參る兵ども押し寄せたるに、遁るべきやうなくて、腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ、院（後鳥羽）は思し召しける。

東にもいみじうあわて騒ぐ。「さるべくて、身の失すべき時にこそあなれ」と思ふものから、「討手の攻め來りなむ時に、はかなき樣にて、屍を曝さじ。おほやけと聞ゆとも、自らし給ふことならねば、且は我が身の宿世をも見るばかり」と思ひなりて、弟の時房と、泰時といふ一男と、二人を頭として、雲霞の兵をたなびかせて、都に上す。泰時を前にするていふやう、「おのれをこの度都にまゐらする事は、思ふ所おほし。本意の如く清き死をすべし。人に後見

心づかひ　その用意。○すべかめり　**スベクアルメリ**の約する樣子だ。○東の代官　關東より遣はした京都の守護。○判官　檢非違使の尉。○かつがつ　先づぼつ〳〵と。○御かうじ　勸事。勅勘のこと誅せられるをいふ。○腹切りてけり　承久三年五月。

●いみじう　非常に。○さるべくて　然るべくありて、即ちさうなるべき理由があつての意。○身の失すべき　死ぬべき。○あなれ　あるなれ。○思ふものから　思ふものの。○討手　京都からの。○はかなき樣にて　力なき樣にて。○おめ〳〵と等の意。○おほやけ　朝廷。官軍とは申しても○且は　一つには。○宿世

えなむには、親の顔また見るべからず。今を限りと思へ。賤しけれども、義時君の御爲に後めたき心やはある。されば横ざまの死をせむ事はあるべからず。心を猛く思へ。おのれうち勝つものならば、再びこの足柄箱根山は越ゆべし」など、泣く〳〵いひきかす。（泰時）まことに然なり。又親の顔拜まむ事もいとあやふしと思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに、今や限りと、あはれに心細げなり。

【おほやけと聞ゆとも云々】　たとひ官軍とは申しても、上皇が御親征遊ばすのではないから、何も恐れ入つて、おめ〳〵と犬死をすることはあるまい。又一つは自分の運の善し悪しをためして見るだけのことだと思つての意。

かくてうち出でぬるまたの日、思ひがけぬ程に、泰時只一人鞭を擧げて馳せ來たり。父（義時）胸うち騒ぎて、「いかに」と

前世の宿縁。勝つ・負ける
か、吾が身の運すしなするの
意。○思ひなりて　ういふ
考になる。○時房　初名時連、
五郎と稱す。義時の卒後、執權
連署となり、修理大夫に任じ
仁治の初卒す。○泰時　義時
の長子。初名頼時、江馬太郎
と稱す。義時の卒後執權とな
り、仁治三年卒す。○二人
時房と泰時。○雲霞の兵　雲
霞の棚引いたやうな大軍。○
たなびかせて　率ゐての意。
「雲霞」といつたからの語。○
おのれ　汝。○思ふ所多し
自分にいろ〳〵と考へる所が
ある。○本意の如く　自分の
望む通り。○清き死　潔い戰
死。○人に後見えなむには
「見えなむ」は「見せなむ」に同

じ。逃げて背を見せる意で、
卑怯な振舞をいふ。○親の顔
また見るべからず　生きて歸
るなの意。○後めたき　公明
正大ならざる。うしろ暗い。
不忠の心をいふ。○心やはある　心はない。○横ざまの死
つまらぬ死に方。犬死。○
かたみに　互に。
●うち出でぬる　出發した。
承久三年五月廿二日のこと。
○またの日　翌日。○思ひが
けぬ程に　そんな事があらう
とは思はぬ時に。○軍のあるべきやう　軍の謀など。○大
方のおきて　軍法その他一般
のさだめ。○その心を得侍り
ぬ　承知致しました。○計らざるに　思ひがけなく。○辱
く　晨れ多くも。○鳳輦　陛

問ふに、「軍(義時)のあるべきやう、大方のおきてなどをば、仰の
如くその心を得侍りぬ。もし道のほとりにも、計らざるに、
辱く鳳輦(ほうれん)を先だてて、御旗をあげられ、臨幸(りんかう)の嚴重なる事
も侍らむに參りあへらば、その時の進退、いかゞ侍るべか
らむ。この一事(ひとこと)を尋ね申さむとて一人馳(は)せ侍りき」といふ。
義時、とばかりうち案じて、「かしこくも(義時)問へる男(をのこ)かな。そ
の事なり。まさに君の御輿(ごし)に向ひて、弓を引くことはいか
があらむ。さばかりの時は、兜(かぶと)をぬぎ弓の弦(つる)をきりて、ひ
とへにかしこまりを申して、身をまかせ奉るべし。さはあ
らで、君は都におはしましながら、軍兵(ぐんぴやう)をたまはせば、命
果てぬに急ぎたち(義時)にけり。

都にもおぼしまうけつることなれば、武夫(もののふ)ども召し集へ、
宇治・勢多(せた)の橋もひかせて、敵(かたき)を防ぐべき用意、心ことな
り。公經の大將一人のみなむ、御孫(うそん)(順徳)のこともさる事に
て、北の方、一條中納言能保といふ人の女(むすめ)なり。その母北の
方は、故大將(頼朝)のはらからなれば、一方(かた)ならずあづまを重
くおぼして、さしいらへもせず、院(後鳥羽)の御心の輕き事と、
あぶなげり給ふ。七條院(殖子)の御ゆかりの殿ばら、坊門(ぼうもん)大納
言忠信・尾張中將清經・中御門大納言宗家、又修明門院の御
はらからの、甲斐の宰相中將範茂など、つぎ〳〵あまた聞
ゆれど、さのみは記(しる)しがたし。軍(いくさ)にまじりたつ人々、この
外の上達部にも、殿上人にも數多ありき。

【公經の大將一人のみなむ云々】公經はその孫が將軍となつて關東へ行

下の用ひられる輦(てぐるま)屋形の上に黄金の鳳があるもの。○參りあへらば　行きあひ奉るならば。「あへらば」は動詞「あふ」(ハ、四)に助動詞りの將然形ラがつき、それに更に助詞バのついたもの。○進退　處置。○とばかり　暫時。○かしこくも　よくも。○男　泰時をさしていふ。○さばかりの時は　さういふ時には。○ひとへに　一途に。○かしこまり　恐れ愼しみて罪を請ふこと。○身をまかせ奉る　吾が身は只陛下の思召しのまゝに任せ奉るをいふ。○さはあらで　さうではなくて。上皇が御親征なくて。○軍兵をたまはせば　軍勢のみを遣はし給はば。

つて居るのみならず、その奥方は能保といふ人の女で、その奥方の母親は頼朝の兄弟であるから、非常に關東に同情した。

義朝 ─ 頼朝
　　 ─ 能保室 ─ 良經室 ─ 道家 ─ 頼經
　　　　 ─ 公經室 ─ 道家室

御修法(みずほふ)ども數知らず行はる。やむごとなき顯密(けんみつ)の高僧も、かゝる時こそたのもしきわざならめ。各〻心を致して仕うまつる。御自(後鳥羽)らもいみじう念ぜさせ給ふ。日吉(ひえ)の社に忍びて詣(てう)でさせ給へり。大宮の御前に、夜もすがら御念誦(ねんず)し給ひて、御心の中(うち)に、いかめしき願どもを立てさせ給ふ。夜すこし更(ふ)け靜まりて、御社すごく、燈爐(とうろ)の光かすかなる程に、稚(をさな)き童(わらは)の臥したりけるが、俄かにおびえあがりて、院の御前に、たゞ參りに走り參りて、託宣(たくせん)しけり。「辱(ぢ)くも、かく渡

●おぼしまうけつる　關東勢の攻め上ることは既に豫期して居られた。○橋もひかせ　橋を切り落させて。○心ことなり　格別である。○御孫のこともさる事にて　御孫のことも尤もなことで。孫の公經が關東へ行つて居るので、關東に贔屓するのも尤もだが、その上又などの意。○北の方　公經の奥方。○一條中納言能保　藤原通重の子。頼朝と姻戚關係があつた爲に大に勢力があつた。建久九年薨ず。○一方ならず　上の「大將一人のみなむ」より直につゞけて見れば分る。○さしいらへもせず　上皇の御相談にものらない。○院の御心の輕き事と　院が輕卒に事を起さ

りおはしましてうれへ給へば、聞きすごし難くは侍れど、一年(ひととせ)の御輿(みこし)ぶりの時、情(なさけ)なく防がせ給ひしかば、衆徒(しゅうと)おのれを恨みて、陣(ぢん)の邊(ほと)りにふりすて侍りしかば、空しく馬牛のひづめにかゝりし事は、今にうらめしく思ひ給ふるにより、この度の御方人(おんかたうど)は、え仕うまつり侍るまじ。七社(しちしや)の神殿を金銀に磨きなさむとうけたまはるも、專(もは)らうけ侍らぬなり」と、のゝしりて、息も絶えぬるさまにて臥しぬ。聞し召す御心地、物に似ずあさましう思さるゝに、只御涙のみぞ出で來る。過ぎにし方悔(くや)しう、とりかへさまほし。さまざま怠りかしこまり申させ給ふ。山(やま)の御輿防ぎ奉りけむ事、必ずしも自ら思しよるにもあらざりけめど、「責一人に」といふらむ事にやと、あぢきなし。中院(土御門)は、飽かで位をす

れたといつて。○七條院　後鳥羽院の御母。○ゆかり　姻戚。○坊門大納言忠信　藤原信清の子。七條院は父信清の妹である。又その妹は、實朝の所へ行つて居るから、實朝が大饗を設けた時には、尊者となつて行つたのである。（七四頁を見よ）。○修明門院　順徳院の御母。○甲斐の宰相中將範茂　修明門院と同じく藤原範季の子。○さのみは記しがたし　さう一々は記されない。

●御修法　戰勝の御祈禱をいふ。○やむごとなき　尊い。○顯密　顯は天台宗、密は眞言宗。○心を致して仕うまつる　一所懸命になつて御修法を行ふ。○いみじう念ぜさせ給ふ　非常に祈られた。○日吉の社　近江滋賀郡坂本村。祭神大山咋神。山王權現といひ、延暦寺の鎭守とせられた。○忍びて詣で　かくれてコツソリと參られる。○夜もすがら　夜中。○念誦　經を讀み、祈願すること。○いかめしき願　重大な願。戰勝の御祈願をいふ。○燈盞　みあかし。○おびえあがりて　おぢ驚いて。○たゞ參りに　脇目も振らず走つて來ること。○託宣　神靈が人にかかつて神意を告げ知らすこと。○辱くも　畏れ多くも。○かく渡りおはしまして　かく御幸ありて。○うれへ　愁訴歎願。○聞きすごし難くは侍れど　聞きながら知らぬ顏では

べり給ひしより、言に出でてこそものし給はねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御騷ぎにも、事にまじらひ給はざめり。新院（眞淳）は同じ御心にて、よろづ軍の事などもおきて仰せられけり。

【一年御奧ぶりの時云々】當時よく行はれた所謂强訴である。春日や延曆寺などの神人・僧侶等が己れの意に滿たぬことがあると、神木や神輿を昇いで朝廷に强訴した。大抵は聞かれたが、此の時は武士に命じて追拂はれた。百練抄によると、建保六年九月二十一日のことである。

【責一人に】論語（堯曰）に「朕躬有レ罪。無レ以二萬方一、萬方有レ罪。在二朕一躬。」又「百姓有レ過。在二予一人一。」などあるをいふ。

いつの年（承久三年）よりも五月雨晴間なくて、富士川・天龍など、えもいはず澁り騷ぎて、いかなる龍馬も、うち渡し難ければ、攻め上る武者どもも、まやしく惱めり。かゝれども遂に都

に近づく由聞ゆれば、君の御武者も出で立つ。その勢六萬餘騎とかや、宇治・勢多へ分ち遣す。世の中響きのゝしるさま、言の葉も及ばず、まねびがたし。或は深き山へ逃げ籠り、遠き世界に落ち下り、すべて安げなく騷ぎみちたり。いかゞあらむと、君（羽院）も御心亂れておぼし惑ふ。かねては猛く見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひたるさまども賴もしげなし。六月十日あまりにや、いくばくの戰だになくて、遂にみかたの軍破れぬ。荒磯に高潮などの差し來るやうにて、泰時と時房と、亂れ入りぬれば、いはむ方なくあきれて、上下たゞ物にぞあたりまどふ。

〃吾妻よりいひおこするまゝに、かの二人（義時・時房）の大將軍はか

ふ。○言に出でてこそ云々　口には出していはれないが。○心やましき　面白くない。○かやうの御騒ぎ　承久の亂をいふ。○事にまじらひ給はざめり　御謀には與られなかつたらしい。○同じ御心にて　後鳥羽に御同意ありて。○おきて　おきつ（ダ、下二）。定める。御指圖になる。

●いつの年よりも　今年は。○富士川　身延山麓を過ぎ、駿河に入りて、富士・庵原兩郡界をなし、蒲原町の東に至りて海に入る。○天龍　信濃諏訪湖に發し、遠江磐田郡に入り、掛塚に至りて海に入る川。○えもいはず　非常に○龍馬　駿馬。○あやしく惱めり　非常に苦しんだ。○君

新院（順德）も佐渡國に移らせ給ふ。まことや七月九日御門（仲恭）をもおろし奉りき。この四月かとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にてをり給へるためしも、これや初なるらむ。唐土にぞ四十五日とかや位におはするためしありける。唐の書讀みし人のいひし心地する。それもかやうの亂やありけむ。さて上達部・殿上人、それより下、はた殘るなく、この事に觸れにし類は、重く輕く罪にあたるさま、いみじげなり。

【保元のためしにや】　保元の亂、崇德院を讃岐に遷し奉つた事をいふ。【ものにもがなや】「とりかへすものにもがなや　世の中をありしながらの我が身と思へば」（源氏帚木卷、空蟬の語に「ありしながらの身にて云々」とある引歌）といふ歌の句を取つたのである。「とりかへすものにもがなや」は元の通り取りかへしたいものだの意。

すまされないが。○一年　或年。○御輿ふり　神輿を昇き遷すこと。○衆徒　山法師をいふ。○おのれ　神が自ら呼ぶ語。○陣　六衞府の詰所。○思ひ給ふる　思ひ奉るの意。○御方人　御身方。○七社　日吉山王の七社。○ののしり　聲高に言ふ。罵詈の意ではない。○聞し召す御心地　院の。○物に似ず　非常に。○あさましう　案外なことにあきれて。○忘りがしこまり　過意のいひわけ。○山の御輿　比叡山延曆寺の御輿○責一人に　「一人」は天子。民の過は天子が責任を負ふの意。○あぢきなし　なさけない。○飽かで　不本意ながら○位をすべり　御位を下り給らひおきてつゝ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院・宮々所々に、思し惑ふ事更になり。本院（後鳥羽）は隱岐の國におはしますべければ、先づ鳥羽殿へ、網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日を限りの御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや」と思さるゝもかひなし。その日やがて御髮おろす。御年四十に一二や餘らせ給ふらむ。まだいとほしかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はむとなり。かくて同じき十三日に、御船にたてまつりて、遙かなる浪路をしのぎおはします御心地、この世の同じ御身ともおぼされず。いみじう、いかなりける代々の報いにかと、うらめし。

の御武者　官軍。○宇治　今の宇治町邊一帶の地をいふ。○勢多　近江栗太郡。琵琶湖に臨む。○響きのゝしる　騷動する。○まれびがたし　筆紙に盡し難しの意。○遠き世界　遠國。○安げなく　心が安らかでないやうで。○かれては　平素は。○まことの際になりぬれば　愈〻といふ場合になると。○心あわたゞしく　狼狽して。○みかたの軍　官軍をいふ。○六月十日あまり　十五日のこと。○さし來る　寄せ來る。○亂れ入り　都へ。○物にぞあたり惑ふ　物につきあたる程狼狽するをいふ。

●いひおこする　云つて來る義時より命令の來るをいふ。

【唐土にぞ四十五日とかや】　史記（秦始皇本紀）に「子嬰爲二秦王一四十六日。楚將沛公破二秦軍一入二武關一遂至二霸上一使レ人約二降子嬰一。」子嬰は始皇帝の孫、秦の第三世である。

中院（門土御）は、初よりしろしめさぬ事なれば、東にもとがめ申さねど、父の院（後鳥羽）遙かにうつらせ給ひぬるに、のどかにて都にあらむこと、いとおそれありと思されて、御心もて、その年閏十月十日、土佐の國のはたといふ所に渡らせ給ひぬ。去年の二月ばかりにや、若宮（後鳥羽）いでき給へり。承明門院の御兄に、通宗の宰相中將とて、若くて失せ給ひにし人の女の御腹なり。やがて、かの宰相（通宗）の弟に、通方といふ人の家に留め奉り給ひて、近くさぶらひける北面の不蔭一人・召次などばかりぞ、御供仕うまつりける。いとおこす（サ、下二）はよこす。○はからひおきて　京都の事を處理する。○女院　佛門に入り給へる皇太后又は太皇太后。七條院・承明門院・修明門院等をいふ。○宮々　皇子達雅成親王・頼仁親王達をいふ。○更なり　いふまでもない。○網代車　檜を薄くへいだもの又は竹片などで斜に編んだものを以て屋形と脇とを張つた牛車。○あやしげなる　粗末な。○今日を限りの御ありさま　都の中の御幸は今日が最後との意。○あさましう　驚きあきれる意。○やがて　早速。○いとほしかるべき御程　まだ御剃髪には御いたはしい程の御年。○信實　藤原隆信の子。畫を父に學び、

あやしき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら、雪かきくらし、風吹きあれ、吹雪して、來し方・行く先も見えず、いと堪へがたきに、御袖もいたく凍りて、わりなき事多かるに、

うき世にはかゝれとてこそ生れけめ
ことわり知らぬわが涙かな

せめて近きほどにと、あづまより奏したりければ、後には阿波の國に遷らせ給ひにき。

【土佐の國のはた】　今の幡多郡の中。之について吉田氏大日本地名辭書には次のやうにいつて居る。「中世土佐の畑と稱し、貴顯の流配ぜられ給ふ所なり。承久の亂に土御門上皇土佐の畑へ遷幸の事增鏡に見ゆれど、當郡にその遺跡を傳へず。疑ふらくは香美郡岩本に至り滯留、阿波へ還駕ありしにや。」

【通宗の宰相中將とて云々】

殊に假顔に長じて居た。晩年入道して寂西と稱す。文永二年歿す、年八十九。○御船にたてまつりて　たてまつる（他、ラ四）は召させまぬらす。のせまぬらすなどの意。○いみじう　誠に悲しく、○おろし奉り　廢し奉るをいふ。○この事に觸れにし類　この企に與つた人々。○重く輕く　或は重く或は輕く、○いみじげなり　大變である。●しろしめさぬ　御存じない　○のどかにて　心靜に。安閑として。○御心もて　自ら望んで。○閏十月　舊暦では一ケ月の閏があるから、その第二の十月をいふ。○若宮いでき給へり　若宮（後嵯峨）がお生れになつた。○承明門院

通親―通宗―女（後嵯峨院母）
　　―通方
　　―承明門院

【うき世にはかゝれとてこそ云々】この浮世には、かうしてつらい目にあへよといふので生れたのであらうに、――自分がかうしてつらい目にあふのは、前世の宿緣であらうに――この道理を辨へず、涙は無暗と落ちて來るわい。

【せめて近きほどにと】この天皇は討伐の議に與られず、隨つて北條氏も流されなかつた位であるから、北條氏に於ても同情したのである。

さてもこの度世の有樣、げにいとうたて口惜しきわざなり。或は父の王を失ふ例だに、一萬八千人までありけりとこそ、佛も說き給ひためれ。まして世くだりて後、唐土にも日の本にも、國を爭ひて戰をなす事、數へ盡すべからず。それも皆一ふし二ふしのよせはありけむ。若しは、筋異なる大

土御門の御母。○留め奉り　若宮を。○召次　院中の雜役に任ずるもの。○あやしき　粗末な。○手輿　手で舁く輿。○雪かきくらし　空が暗くなるほど雪がひどく降るをいふ。○吹雪　雪の烈しい風に亂れ降ること。○わりなき事　苦しく堪へがたいこと。○せめて　全く願ふ通りにはならずとも、猶ほ强ひてなどの意。○近きほどにと　京都に近い所にと。●うたて　あまりに。○わざこと。○世くだりて後　太古のよい世の中がだん〳〵と惡くなつた後。○國を爭ひて　國の取りあひをして。○一ふし二ふし　一かど二かど。いくらか。○よせ　よりどこ

臣、さらでもおほやけともなるべきざみの、少しのたがひめに、世に隔たりて、その恨みの末などより、事起るなりけり。今のやうに、むげの民と爭ひて、君の亡び給へる例、この國には、いと數多も聞えざめり。されば、承平の將門、天慶の純友、康和の義親、いづれも皆猛かりけれど、宣旨には勝たざりき。保元に、崇德院の世を亂り給ひしだに、故院（後白河）の御位にて、うち勝ち給ひしかば、天照る御神も、御裳濯川の同じ流と申しながら、猶ほ時の帝を護り給はする事は、强きなめりとぞ、ふるき人々も聞えし。又信賴の衞門督、おほけなく二條の院をおびやかし奉りしも、遂に空しき屍をぞ、道の邊りに捨てられける。かゝればこそ、古りにし事を思ふにも、なほ、さりともいかでか、上

る。○筋異なる大臣　家筋の違つた大臣。○さらでも　さうでなくても。○おほやけ　天子。○きざみ　階級。帝位にも卽くべき階級の人の意。○少しのたがひめに　少しのゆきちがひから。○世に隔たりて　世間に望を得ぬ。卽ち帝位を得ぬなど。○恨みの末　恨みの結果　○むげの民　身分も何もない全くの民。北條氏を指す。○いと數多も聞えざめり　あまりないやうである。○承平　朱雀帝の朝。○將門　鎭守府將軍平良將の第三子。攝政藤原忠平に仕へ、其の縁によつて檢非違使たらむとして得ず、去つて關東に赴き、下總豐田郡に據つて反し、遂に關東の將門と相應じて大に朝廷を憚ましたが天慶四年遂に追捕使小野好古に滅ぼされ、捕へられて斬に處せられた。○康和　堀河帝の朝。○義親　源義家の第二子。康和年中鎭西を橫行し人民を苦しめ　のので、隱岐に流さうとしたが、配所に行かず、又出雲で亂暴をしたに依し天仁元年遂に誅に伏し梟首せられた。○宣旨　みことのり。○故院の御位にて　後白河院が天皇としてあらせられ

皇、今上數多おはしますに、徒らに亡ぶる樣やはあらむと、賴もしくこそおぼえしに、かくいとあやなきわざの出で來ぬるは、この世一つの事にもあらざらめども、迷ひの愚かなる前には、猶ほいとあやしかりし。

【さても】以下記者(尼の語を借りて)の評論である。

【父の王を失ふ例だに云々】觀無量壽經に「劫初以來。有三諸惡王一貪二國位一故。殺二其父一一萬八千人。」

【御裳濯川の同じ流云々】同じ皇統ではあるといつても、矢張り其の時の天皇としてあらせられる方をお讚りになるの意。

【この世一つの事にもあらざらめども云々】こんな事の起るのは、この現世一つだけの事ではなく、過去の宿緣といふものにもよるのであらうが、吾々迷へる凡夫の前には實に不可思議なことである。

四(後鳥羽)にて位に卽き給ひて、十五年おはしましき。下り給ひて後も、土佐院(同上御)十二年、佐渡院(順德)十一年、なほ天の下に

は同じ事なりしかば、すべて三十八年がほど、この國の主として、萬機の政事を、御心一つにをさめ、百の官を從へ給へりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御有樣にて、遠きをあはれび、近きをなで給ふ御めぐみ、雨の脚よりもしげければ、津の國のこやのひまなき政事をきこしめすにも、難波の葦の亂れざらむ事をおぼしき。藐姑射の山の峰の松もやう〳〵枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞の洞の御住ひ、幾春を經ても、空ゆく月日の限り知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、あり〳〵て、よしなき一ふしに、今はかく花の都をさへたち別れ、おのがちりぢりにさすらへ、磯の苫屋に軒を竝べて、自らことゝふものとては、浦に釣する海小舟、鹽燒く煙のなび

營み、百官有司　置くに至つた。併し天慶三年藤原秀鄕・平貞盛等に滅ぼされた。○天慶　同じく朱雀帝の朝。○純友　藤原良範の子。伊豫掾となつて任後、異志を抱いて任地に反し、遂に關東の將門と相應じて大に朝廷を憚ましたが天慶四年遂に追捕使小野好古に滅ぼされ、捕へられて斬に處せられた。○康和　堀河帝の朝。○義親　源義家の第二子。康和年中鎭西を橫行し人民を苦しめ　のので、隱岐に流さうとしたが、配所に行かず、又出雲で亂暴をしたに依し天仁元年遂に誅に伏し梟首せられた。○宣旨　みことのり。○故院の御位にて　後白河院が天皇としてあらせられ

く方をも、我が故郷のしるべかとばかりながめ過ぐさせ給ふ。御住ひどもは、それまでと、月日を限りたらむだに、明日知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいて、何時を果とか、廻り逢ふべき限りだになく、雲の浪・煙の波の、幾重とも知らぬ境に、世を盡し給ふべき御様ども、口惜しといふも愚かなり。

【天の下は同じ事云々】 天下の事は御在位當時と同樣御心のまゝであつたの意。卽ち院政を執られて、勢力のあられた事ないふ。

【遠きをあはれび近きをなで給ふ】 遠近の民を、すべてめぐみ給ふないふ。

【津の國のこやのひまなき】 後拾遺集(戀)に「津の國のこやとも人をいふべきにこそなけれ蘆の八重ぶき」(和泉式部)とあるを採つた語。「こや」は地名に「來よ」の意をかけたので、人に對し、來いといふべきだが、蘆の八重葺のやうに繁き人目の隙がないので、仕方がないといふ意。それを「こや」は政事の多忙なことに使つたのである。但し「津の國のこやの」は、「ひまなき」にかゝる序である。

【雜波の蘆の】 「みだれ」の序。「こや」は攝津の地名で、既に蘆の八重葺といつたに對して、こゝに又同じ名物の雜波の蘆を出したのである。

○つまり萬機の政をみそなはすについても、天下のよく治まり、亂れざらむことを祈られむ意。

【藐姑射の山】 支那で仙人の住んで居るといはれる山。莊子(逍遙遊)に「藐姑射山有二神人一。」之より轉じて、所謂仙洞御所をいつたのである。

【峯の松もやう〳〵枝をつられて云々】 上皇の御繁榮を、藐姑射の山の峯の松が愈〻成長繁茂して、互に枝をつられ、千代八千代に榮えゆくに譬へたのである。

【鹽燒く煙のなびく方をも云々】 海邊で鹽を燒いて居る煙が或方向へ棚引いてゆく。それを吾が故郷を指し示す案内かと思ふの意。

【それまでと月日を限りたらむだに云々】 何時までと期限を切つてさへも、明日をも知らぬ人生の心もとなさの爲、非常に心細いことであらう。

奉つたことを云ふ。○空しき屍を云々 はかなき死をとげたをいふ。○さりともいかでか たとひ東兵が強くても、どうして。(「樣やはあらむ」に係る)。○あやなきわざ 無茶なこと。

●萬機の政事 よろづの政事

○百の官 多くの役人。○そのほど その間。○吹く風の云々 聖德の高かつたことをいふ。○あはれび あはれみ ○なでたまふ 愛撫せられる ○雨の脚 「雨の絲」などいふと同じく降る雨をいふ。こゝは惠みの多いことを降る雨のやうだと譬へたのである。○津の國 攝津國。○こや 昆陽。攝津の名所。○政事をきこしめす 政事を行はれる。

○藐姑射の山　院の御所をいふ。○雲の澗　院の御所をいふ。○空ゆく月日の　空ゆく月日の如くの意。卽ち月日の運行して限りないやうにの意　○のどけく　ゆつたりとしてのんきに。○あり〳〵て　とう〳〵しまひに。○よしなき　一ふしに　つまらないチョッとした事の爲に。○おのがちりぢりに　銘々別れ〳〵に。三上皇の別れ〳〵に流され給ふをいふ。○さすらへ　さすらふ（八、下二）。よるべなくさまよふ。○苫屋　茅などで編んだ苫で屋根を葺いた粗末な家。粗末な漁家をいふ。○軒を並べ　漁夫などと近く住んで居られるをいふ。○自ら　偶〻などの意。○ことととふ

【何時を果とか廻り逢ふべき云々】「果」はその流罪の期限の盡きる時。「廻り逢ふ」は逢にその果の日にゆきあふをいふ。

【口惜しとも愚かなり】口惜しいといつても、猶ほ足りない位である。

このおはしますところは、人離れ里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて、山陰にかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるを便りにて、松の柱に、葦葺ける廊など、けしきばかり、ことそぎたり。誠に、「柴のいほりのたゞしばし」と、かりそめに見えたる御宿りなれど、さる方になまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになむ。はるばると見やらるゝ海の眺望、二千里の外も殘りなき心地する、今更めきたり。潮風のいとこちたく吹き來るを聞しめして、

訪れる。○海小舟　漁する小舟。○しるべ　故郷を指示す案内。○ながめ過ぐさせ給ふ　物思ひに沈み、打ちまもりながら、日を送られる。○それまでと　或期限を切つて、それまでの間と。○明日知らぬ世　明日はどうなるか分らない、無常の人生。○うしろめたさ　心もとなさ。氣がかりなこと。○まいて　況して○何時を果とか　何時が終だと云つて。○雲の涙・煙の波　雲煙漂渺として非常に遠く隔たれること。○世を盡し給ふ　一生を終り給ふ。

●海づら　海面、海。○山陰にかたそへて　山陰の方へ片寄せて。○大きやか　大きな樣を表はす語。○けし

我こそは新島守（にひじまもり）よ隱岐の海の
あらき浪風こゝろして吹け

同じ世にまたすみのえの月や見む
今日こそ外（よそ）におきの島守

【柴のいほりのたゞしばし】新古今集（雜）の歌に「何處にも住まれずばたゞ住まであらむ柴のいほりのしばしなる世に」（西行）とあるによつた語。歌の意は、この果敢ない人生のことであるから、安樂に住む所がなければ、何も强ひて住まうとするには及ばない、住まなくてもよいう柴のいほりは下の「しばし」のシバと相應するのである。

【水無瀬殿おぼし出づるも云々】かつて水無瀬殿で榮耀榮華を盡して遊びなのみ事としたことなどを思ふと、まるで夢のやうである。

【二千里の外も】白樂天の「三五夜中新月色。二千里外故人心」（白氏文集卷十四）といふ句を取つたのである。但しこゝは只二千里も遠い所までもよく見えるの意。

【我こそは新島守よ云々】自分は今新に此の隱岐の島に島守として來た

のであるぞ。されば隱岐の海の荒い浪風も、注意してひどくは吹くな。

【同じ世にまたすみのえの云々】「同じ世」は同じ一生の間。「すみのえ」は住吉。月の澄む意をかけた語。一首の意は、自分は今やうして遠い隱岐の國に島守となつて居る身分であるが、同じ一生の中に、復あの住吉の月を見ることがあらうか、恐らくあるまい。

年もかへりぬ。所々浦々あはれなる事をのみおぼし歎く。

佐渡院(順德)、あけくれ御行をのみし給ひつゝ、猶ほさりともとおぼさる。隱岐(後鳥羽)には、浦よりをちの遙々と霞みわたれる空を眺め入りて、過ぎにし方かきつくしおもほし出づるに、行方なき御涙のみぞとゞまらぬ。

うらやまし長き日影の春にあひて
汐くむ海人も袖やほすらむ

併し又再び都に歸ることもあらうかとの意。○をち　遠方。○過ぎにし方　過去のこと。○かきつくし　いろ〳〵となどの意。**カキ**は接頭語。○行方なき御涙　拂へど〳〵止まらぬ御涙。○處せき　狹苦しい。○様かはりて　一風變つて。○しどろに　打ち亂れて。○露けさまさる　「露けさ」はしめつぽいこと。草葉の上にも袖の上（涙）にも露がおいて、秋は總てが何となうしめつぽくなるをいふ。○おぼし亂る　いろ〳〵と思ひ亂れられる。

夏になりて、茅葺の軒端に、五月雨の雫いと處せきも、御覽じ馴れぬ御心地に、様變りて珍しくおぼさる。

菖蒲葺く茅が軒端に風すぎて
しどろに落つるむら雨の露

世の中いとゞ物悲しく、露けさまさるに、

初秋風のたちて、
いはむ方なくおぼしみだる。

故郷を別路に生ふる葛の葉の
秋はくれどもかへる世もなし

【うらやまし長き日影の云々】汐くむ海人は年中袖をぬらして居るわけであるが、日の永い長閑な春には、その汐たれた袖をもほすであらうに、涙にぬれた自分の袖は乾く間もない。あゝ實に海人こそ羨しい次第だの意。（これは春）

【菖蒲葺く茅が軒端に云々】「菖蒲葺く」は五月端午の節句に、菖蒲を以

●たとしへなく　たとへやうなく。實に何ともいへないほど。○ながめしをれ　憂に沈むをいふ。○消息　たより。○墨染の御衣　僧衣。○夜の御衾　夜具。○夜寒　晩秋の夜など、何處となく寒く感ずること。○七條院　上皇の御妻君。○いとといみじく　甚だしく。○御胸もせきあぐる　悲しみの爲に胸がつまるをいふ。○あさましくも　思ひがけなくも。○かくて月日經にけり事　かうして遠く離れて月日を經たことよの意。○今日明日とも知らぬ命　今日死ぬか明日死ぬかも分らぬ命。○見奉りてしがな　御目にかかりたいものである。**ガナ**は希望を表す助辭。○かくながらは　このまゝでは。○死出の山路　死んでから辿りゆくといふ山路。死ぬことをいふ　○越えやるべくも　「越えやるべく」の音便。○いと多く　いろ〳〵の事を澤山。○垂

て軒端を葺き飾るをいふ。一首の意は、粗末な茅葺の家であるが、五月となれば、矢張り世間の眞似をして菖蒲などを葺いて居る。ところがサット風が吹き過ぎると、その軒から五月雨の雫がポタリ〳〵と亂れ散つて來る。むら雨は五月雨のことを強くいつたのである。(これは夏)

【故郷を別路に生ふる云々】　故郷を別れて來た路に生えて居る葛の葉は秋となれば、風に吹かれて裏返るが、自分のみは秋となつても、遂に都に歸る時がないの意。葛の葉は裏が白く、風が吹くと、その裏返るのが特につくものであるから、それを「歸る」の緣語とし、「くれども」のクルは、秋が「來る」に葛の葉を「くる」意をかけたのである。但し上句は序としておいたものである。(これは秋)

たとしへなくながめしをれさせ給へる夕暮に、沖の方に、いと小さき木の葉の浮べると見えて、漕ぎ來るを、蜑の釣舟かと御覽ずるほどに、都よりの御消息なりけり。墨染の御衣・夜の御ふすまなど、都の夜寒に思ひやり聞えさせ給

ひて、七條院(殖子)よりまゐれる御文、ひきあけさせ給ふより、いといみじく御胸もせきあぐる心地すれば、やゝためらひて見給ふに、「あさましくも、かくて月日經にける事、今日・明日とも知らぬ命のうちに、今一度いかで見奉りてしがな。かくながらは、死出の山路も越えやるべうも侍らでなむ」など、いと多く亂れ書き給へるを、御顏(後鳥羽)におしあてて、

垂乳根の消えやらで待つ露の身を
　風より先にいかで訪はまし

八百萬神もあはれめたらちねの
　われ待ち得むと絕えぬ玉の緒

【墨染の御衣云々】　都の夜寒につけても、隱岐にまします上皇の僧衣や夜具を、どんなに寒からうかと思ひやり給うて、御母七條院より寄越

乳根　「母」の枕詞。轉じて母の意にいふ。○玉の緒　命。

●初雁　秋になつて始めて來る雁。○いみじき　甚しい。○御涙の催し　御涙の種。○疾じく召し使ひし人　院が親しく召しつかはれた人。○夜晝戀ひ聞ゆる事限りなし　家隆が上皇を。○かくやとおぼ

された御文を開かれると。

【いかで見奉りてしがな】　どうかしてお目にかゝりたいものです。**ガナ**は希望を表す助辭で、その上には常に**モ**とか**テシ**とかいふやうな助詞がつく。但しこの**テシ**には過去の意はない。

【垂乳根の消えやらで待つ云々】　何時消えるかも分らない露のやうな老の身を、ヤツと長らへて、自分に逢はうと待つて居られるのであるから、その露を吹き散らす風より先に、卽ち死なれる前に、何とかしてお目にかゝりたいの意。

【八百萬神もあはれめ云々】　母君は、もう何時死ぬかも分らぬ身を、只自分に逢はうが爲に、ヤツと生き長らへて居られるのである。どうか神々もこの心をあはれんで、逢はせ給へとの意。

初雁（はつかり）の翼につけつゝ、此處彼處より哀（あはれ）なる御消息のみ、常は奉るを御覽ずるにつけても、あさましういみじき御涙の催しなり。家隆の二位は、新古今の撰者にも召し加へられ、大方、歌の道につけて、睦じく召し使ひし人なれば、夜晝

ゆるまで　こんなであつたかと思はれるほど。○卷き重ねて　紙を幾枚も卷き重ねて○和歌所の昔の面影　昔後鳥羽院の全盛時代に、和歌所で撰集の事などあつた當時の樣子。○數々　いろ〳〵。○忘れがたう　「忘れがたく」の音便。○つらき命　死ぬにも死なれず、已むを得ず長らへて居る命。○えもいはず　あはれ多くて　何ともいへない程あはれな事が澤山書いてあつて○寢覺　夜中など偶ゝ眠りの覺めること。○わびし　心寂しい。○いみじとおぼして　痛切な歌だと思はれて。○濱びさし　濱邊の家。○柚山　材木など伐り取る山。

戀ひ聞ゆる事限りなし。かの伊勢より　須磨にまゐりけむも、かくやとおぼゆるまで、卷き重ねて書きつらねまゐらせたる、和歌所（わかどころ）の昔の面影、數々に忘れがたうなど申して、つらき命の今日まで侍る事の恨めしきよしなど、えもいはずあはれ多くて、

寢覺して聞かぬを聞きてわびしきは
　あら磯（いそ）なみのあかつきの聲

とあるを、法皇（後鳥羽）もいみじとおぼして、御袖いたくしぼらせたまふ。

波間（なんま）なきおきの小島の濱びさし
　久しくなりぬ都隔てて

木枯（こがらし）のおきの柚山（たまやま）吹きしをり

あらくしをれて物おもふ頃

【初雁の翼につけつゝ】 前漢の蘇武が書を雁に託したといふ故事（漢書）により、便りのあることをいふ。

【かの伊勢より須磨に云々】 源氏物語（須磨）に、六條御息所が伊勢から須磨に居る源氏の許へ、しきりに手紙を寄越すことを記して、「物なあはれと思しけるまゝに、うちおき〳〵書き給へる、白き唐紙（からのかみ）四五枚ばかりを巻き續けて、墨つきなど見どころあり」とあるを取つたのである。

【寝覚して聞かぬを聞きて云々】 都では荒磯浪の音は聞かぬが、ふと寝覚をして、院の御上を思ひやり奉れば、丁度荒磯浪の暁の聲を聞くやうな氣持がして、實にわびしいことである。

【浪間なきおきの小島の云々】 「浪間なき」は絶えずはげしい浪音の聞えること。都を離れて、浪音絶えぬ隱岐の小島の濱邊の家に住むやうになつてから、あゝもう隨分長くなつた。都の方が戀しいの意。「濱びさしは「久しく」をいふための語で、上句は序である。

【木枯のおきの杣山云々】 木枯が隱岐の杣山の草木を吹きたわめたやうに、自分も此の頃はすつかり打ちしをれて、物思ひに沈んで居るの意。これも上句は序で、「しなり」と「しをれ」と、韻の同じ語を使つたのである。

折々よませ給へる御歌どもを書き集めて、修明門院（重子）へ奉らせ給ふ。その中に、

水無瀬山我がふる里は荒れぬらむ
　離は野らと人も通はで

かざし折る人もあらばや言（こと）とはむ
　おきのみ山に杉は見ゆれど

限りあればさても堪へける身の憂さよ
　民の藁屋に軒（のき）をならべて

かや（尾）うのたぐひ、すべて多く聞ゆれど、さのみは年のつもり　年のよつたこと。

●かざし　木の枝などを髪にさして飾とするもの。○すべて多く聞ゆれど　こんな歌などは澤山あるが。○年のつもり

りにえなむ。今又思ひいでば、ついでもとめてとて。

【水無瀬山我がふる里は云々】かうして久しく遠島にあるから、故郷なる水無瀬殿も、今では最早や訪ふ人もなく、籬は破れて、野原のやうに荒れたことであらう。

【かざし折る云々】隱岐の山には杉があるが、之を折り髮さうとするやうな風流男もない。あゝもし之を折つて、かざしとするやうな人でもあればよいが、自分も話をして心を慰めようになどの意。

【限りあればさても堪へける云々】「限り」は定命。民の藥屋に軒を竝べて、つらい思ひをするよりは、いつそ死んでしまつた方がましだと思ふが、何分定命といふものがあつて、さうも行かないから、かうして辛抱して居る身のつらさよなどの意。

【年のつもりにえなむ】「えなむ」は「えなむおぼえぬ」などの意。ナムはゾなどと同じ助辭、それに下に來る語が略されて居るのである。

【ついでもとめてとて】「又序があつたら、申しませう」などの意で、こは又、元の尼の詞に還つて、一寸それを入れたのである。最後を「とて」で止めたのは、餘韻を殘す爲である。

●かずまへられ給はぬ　人數の中にも入れられない、卽ち眼中に置かれない。○ふる宮　年長けた皇子。○第二の御子　增鏡の原本には「第三の御子」とあるが、他の諸書は皆二子とあるから、之によつて改めた。○このかみ　兄。○思へば云々　考へて見れば尊い方だが。○御孫の宮たち　御孫の宮たちの中から天子とすべき人を擇ばれたこと。一四頁を見よ。○人目稀なれば　滅多に人も訪れて來ぬから。○八重葎　生茂つた雜草をいふ。○さし固めたる

第三　ふぢ衣

その頃いとかずまへられ給はぬふる宮おはしけり。守貞親王とぞ聞えける。高倉院第二の御子なり。隱岐の法皇（後鳥羽）の御このかみなれば、思へばやむごとなけれど、昔後白河の法皇、安德院の筑紫へおはしまして後に、見奉らせ給ひける御孫の宮だちえりの時、泣き給ひしにより、位にも卽かせ給はざりしかば、世の中もの恨めしきやうにて過し給ふ。寂しく人目稀なれば、年を經て、荒れまさりつゝ、草深く、八重葎のみさし固めたる宮の中に、いと心細くながめおはするに、建保の頃、宮の中の女房の夢に、冠したるもの數多まゐりて、「劒璽を入れ奉るべきに、各〻用意して

雜草が生ひ茂つて、丁度それで門を閉ぢたやうにあるをいふ。○ながめおはする　物思ひに沈みながら、つくづくと物を見つめて居られる。○建保　順徳天皇の朝。○宮の中　親王の御殿の中。○女房　女官。○冠したる　冠を被つた。○劔璽　三種の神器の中、草薙劔と八坂瓊曲玉。但し三種の神器の意に用ふ。○用意して候はれよ　用意して居られよ。○いかでかさほどの事あらむ　どうしてそんな事があらうか。即ち帝位に即くやうな事はあるまいの意。○思しもよらで　帝位に即かうなどとは思ひも寄らないで。○御髪をさへおろし給ひて　僧にさへなられて。○この世の御望　浮世の榮華を望むこと。こゝは帝位に即くことをいふのであらう。○物し給へるに　居られたのに。○この亂れ　承久の亂。○御族　御一族。○小きなど　幼少の皇子。○殘り給へる　都に。○世にさし放たれて　世間から疎外されて。○さりぬべき君　帝位に即くべき然るべき方。○東　關東。即ち北條氏。○おきて　さしづ。○入道親王　親王にして佛門に入られた人。○太上天皇になし奉りて　後堀河天皇立ち、その九月この尊號を上り、後高倉院と申した。○橫ざまの御幸　僥倖。

●孫王　皇子でなく、天皇よりは孫に當る方。○位　天子のころ世にかすまへられ給はぬ故宮おはしけり」とあるを、そのまゝに取つたのである。

【劔璽を入れ奉るべきに云々】　皇位の御しるしたる三種の神器を入れ奉るによつて、その用意せよとの意で、つまり皇位に即かれることをいつたのである。

候はれよ」といふと見てければ、いとあやしうおぼえて、宮(貞)に語り聞えければ、「いかでかさほどの事あらむ」と、思しもよらで、遂に御髪をさへおろし給ひて、この世の御望は、斷ち果てぬる心地して物し給へるに、この亂れ出で來て、一院(後鳥羽)の御族は、皆さまざまにさすらへ給ひぬれば、おのづから小きなど殘り給へるも、世にさし放たれて、さりぬべき君もおはしまさぬにより、東よりのおきてにて、かの入道親王(守貞)の御子後堀河院の御事の、十になり給ふを、承久三年七月九日、俄かに御位につけたてまつる。父の宮(守貞)をば太上天皇になし奉りて、法皇ときこゆ。いとめでたく、橫ざまの御幸おはしける宮なり。

【いとかすまへられ給はぬふる宮】　源氏物語「橋姫」の巻の最初に「そ

孫王(そんわう)にて位に即かせ給へるためし、光仁天皇より後は、絶えて久しかりつるに、珍しくめでたし。その十二月(しはす)に御即位、明くる年貞應元年正月三日、御元服し給ふ。御諱(おんいみな)茂仁(ゆたひと)と申す。御貌(おんかたち)もなまめかしく、あてにぞおはします。御母基家(もといへ)中納言の女(むすめ)、北白川院と申しき。家實(いへざね)の大臣(おとど)又攝政になりかへらせ給ひて、よろづおきてのたまふも、さまざまに引きかへしたる世なりかし。又の年五月の頃、法皇(後高倉)かくれさせ給ひぬれば、天下皆黒みわたりぬ。上(後堀河)も御服

の位。○十二月　一日。○光仁天皇　天智天皇の御孫。施基(しき)皇子の第六子、稱德天皇崩御の後卽位○なまめかし　優雅。○あて　貴く上品なこと。○基家中納言　藤原眞經の子。正二位內大臣となる。○北白川院　名陳(のぶ)子。○家實　藤原基通の子。攝政關白太政大臣に至り、三宮に准ぜらる。仁治三年薨ず。○おきてのたまふ　指圖なせられる。○引きかへしたる世　前とは打つて變つた世の中。○又の年　貞應二年。○五月　十四日のこと。○黑みわたりぬ　諒闇となつたこと。人々が皆黑い喪服を著るよりいふ。○上　天皇。○御服たてまつる　喪服を著られたてまつる。きびはなる御程に、いといみじう哀なる御事なめり。

【孫王にて位に卽かせ云々】　今度後堀河帝は孫王の御身分で天位に卽かれたが、かういふ事は滅多にないので、以前光仁帝がさうされてから以來は絶えて久しくなかつたの意。

前の御門(仲恭)は、四にて廢せられ給ひて、尊號などの沙汰だになし。御母后東一條院も山里の御住ひにて、いと心細くあはれなる世を、盡きせず思し歎く。この宮(東一條院)は故攝政殿後京極眞經の姫君にてものし給へば、歌の道にも、いとかしこう渡らせ給へど、大方奥深う、しめやかに重き御本性にて、はかなき事をも、たやすくもらさせ給はず、御琴などもかなき音を彈きとり給へれど、をさ〳〵かきたてさせ給ふ世もなく、餘りなるまで埋れたる御もてなしを、佐渡の院(順德)

た。○きびは　幼少。●尊號　太上天皇の尊號。○沙汰　命令。○御母后　藤原立子。眞壁の女。承久の亂後は山莊に屛居し、寬治元年崩ず。○いとかしこう　甚だ勝れて。○奥深う　淺はかでなく。○しめやかに重き御本性　落著いて重々しい御性質。○はかなき事　一寸した事。○限りなき音を彈きとり　此の上なく上手に彈奏せられる。○をさ〳〵　餘り。大方。○かきたてさせ給ふ世もなく　琴を彈き鳴らされる時もなく。○餘りなるまで　餘り。○埋れたる御もてなし　陰鬱な御態度。○限りなき御志の中に　此の上なく御寵愛になつても、限りなき御志の中に、飽かずなむ思ひ聞えさせ給ひける。かの遠き御別れの後は、いみじう物をのみ思し碎けつつ、愈〻沈みふしておはしますに、古く仕うまつりける女房の、里に籠り居たりける許より、あはれなる御消息を聞えて、十月一日の頃、御衣がへの御衣を奉りたりける御返事に、

思出るころもはかなし我も人も
　見しにはあらずたどらるゝ世に

又御手習のついでに、辛うじて沒れけるにや、

消えかぬる命ぞつらき同じ世に
　あるも賴みはかけぬちぎりを

さこそは實に思し亂れけめ。おろかなる契だに、かゝる筋

のあはれは淺くやは侍る。いかばかりの御心の中にて過し給ふらむと、いとかたじけなし。

【前の御門】仲恭天皇のこと。建保六年太子となり、承久三年四月受禪。在位僅かに七十餘日で廢せられ、文暦元年五月、御年十七で崩ぜられた。本文に記す通り尊號などの沙汰もなく、只世に「九條廢帝」と申して居るのみであつたが、明治三年七月、改めて仲恭天皇と諡せられた。

【思ひ出ころもはかなし云々】「ころも」は「頃も」に「衣」をかけた語、「はかなし」は頼みにならぬ。「我も人も」は私も院も。「見しには あらず」は昔の樂しかつた頃のやうではなくて。かつて院と共に樂しい世を送つた事もあるが、其等は總て昔の夢で、今は行先さへたど〳〵しく、どうなることやら分らぬ身の上であるから、かうして更衣をするにつけて、思ひ出づるも、その甲斐なく、果敢ないことだの意。

【消えかぬる命ぞつらき云々】「ちぎり」は宿世の緣。院も自分も同じこの世に在りながら、かく互に遠く隔たつて居て、何時逢ふといふ頼みもない果敢ない契であると思へば、却つて何時までも、かうして長命へ居る御心の中にも。○飽かずなむ云々　その態度を不滿に思つて居られた。○かの遠き御別れ　順德院の佐渡へ御遷りになつたことをいふ。○思し淨けつゝ　思ひわづらふ。○沈みふして　打沈んで。○里に籠り　暇を取つて親許などに居ることをいふ。○衣がへ　季節に應じて衣類を改めること。四月朔日と十月朔日とに行ふ。○御返事　その女房の所から御衣を上つた、それについての御返事。○手ならひのついでに云々　御手習をなさるついでに詠まれたのが僅かに洩れ聞えたのであらうの意。○辛うじて　纔かに。○さこそは實に思し亂れめ　この御歌にも見える通り、實際そんなに思ひ亂れられたのであらうの意。○おろかなる契　かりそめの契。○かゝる筋　かういふ風に遠く離れて居ること。○淺くやは侍る　淺くやはないの意。○いかばかりの御心の中にて云々　御心の中ではどんなに思ひ亂れながら月日を過し給ふかと。○かたじけなし　恐れ多い。勿體ない。

●はかなく明け暮れて　是といつて、とりとめた事もなく月日が過ぎて。○この御女　この頃。○この御女　この道家の女。藤原蹲子（よしこ）。四條天皇の御母。藻璧門院と號す。○三條の太政大臣　藤原公房（きんふさ）で、經宗の子、建保六年太政大臣に任じ、淨土寺とかやに引き籠りて、御消息のみ日に千度（ちたび）といふばかり通ひなどして、世の中すさまじく思されながら、さすがに后だちはありつるを、父の殿（漢）攝籙（せつろく）かはり給ひて、今の峰（みね）殿道家、東山殿と申

はかなく明け暮れて、貞應もうち過ぎ、元仁・嘉祿・安貞などいふ年も、程なく變りて、寛喜元年になりぬ。このほどは、光明峰寺殿道家また關白にておはす。この御女、女御にまゐり給ふ。世の中めでたく花やかなり。これより先に、三條の太政大臣公房の姫君まゐり給ひて、后だちあり。いみじう時めき給ひしをおしのけて、前の殿實家の御女（漢）未だ稚くておはするを、參り給ひにき。これ（漢）はいたく御おぼえもなくて、三條の后宮（漢）の、淨土寺とかやに引き籠りて渡らせ給ふに、御消息のみ日に千度といふばかり通ひなどして、世の中すさまじく思されながら、さすがに后だちはありつるを、父の殿（漢）攝籙かはり給ひて、今の峰殿道家、東山殿と申

土寺殿と號す。建長元年薨ず。○姫君　藤原有子（ありこ）。安喜門院と號す。○后だち　立后の儀式。○いみじう時めき給ひし　時を得て非常に榮えた。○おしのけて　安喜門院が寵を專らにして居たのにそれをおしのけて。○前の殿の御女　家實の女。長子（ながこ）。鷹司院と號す。○稚くておはする云々　まだお小さかつたが、その人が參られたの意。この時、實に九歳であつた。○御おぼえ　御寵愛。○淨土寺　山城愛宕郡淨土寺村にあつた寺。○御消息　御堀河天皇より。○日に千度非常に度多きをいふ。○世の中すさまじく云々　この世を面白くなく思はれながらも。

しなりかへり給ひぬれば、又この姫君（子）入内ありて、もとの中宮（孫）はまかで給ひぬ。珍しきが參り給へばとて、などかかうしもあながちならむ。唐土には、三千人なども候ひ給ひけるとこそ傳へ聞くにも、品々しからぬ心地すれど、いかなるにかあらむ、後には、各〻院號ありて、三條殿の后（子）は安喜門院、中の度參り給ひし殿の女御（子）は、鷹司院とぞ聞えける。今の女御（子）も、やがて后だちあり。藤壺わたり、今めかしく住みなし給へり。御同胞の姫君（子）も貌よくおはするに、ひきこめがたしとて、内侍のかみになし奉り給ふ。

【三條の后宮淨土寺とかやに云々】　長子は從來寵のあつた有子を押しのけて入内したが、これはさつぱり寵がなく、却つて淨土寺に引籠つて

○さすがに后だちは　長子の○攝籙　セツロクともいふ。攝政のこと。こゝは家實が攝政をやめたをいふ。○なりかへり給ひ　再び元の如く攝政となられた。○入内　皇后・中宮等の册立の前に先づ式を具して禁中に入り給ふこと。○まかで給ひぬ　長子は一度中宮となつて居られたが、又宮中を退がれた。○あながち　無理。○品々しからぬ　上品でない。○いかなるにかあらむ　どういふわけなのだらうか。○院號　安喜門院などいふ號。○中の度參り給ひし第二番目に來られた方の意。○やがて　間もなく。○藤壺　わたり　藤壺は大内裏五舍の一、飛香舍（ひぎやうしや）

居る有子の方へ毎日千度といふほど御使りがあり、帝には世の中が面白からず思はれて居たが、流石に長子の后立はあつた。

【珍らしきが參り給へばとて云々】　珍らしい方が參られたからとて、どうしてまアこんなに無理なことをなされるのだらう。

【唐土には三千人などとも云々】　白樂天の長恨歌に「後宮佳麗三千人。三千寵愛在二一身一。」などある如く、支那では後宮の美人が三千人もあつたといふのである。「聞くにも」は「聞くにつけても」などの意。

同じき三年七月、關白をば御太郎敎實のおとゞに讓り聞え給ひて、我が御身（攝家）は、大殿とて、后宮（姫）の御親なれば、思ひなしもやむごとなきに、御子どもさへ、いみじう榮え給ふ樣、例なきほどなり。あづまの將軍（將軍）・山の座主（僧）・三井寺の長吏（僧）・山階寺の別當（僧）・仁和寺の御室（法親王）、皆この殿の君だちにておはすれば、天下はさながらまじる人少う見えたり。いとよそほしく重々しげにて、内の御宿直所

(5)

といひ、後涼殿の有、凝華舎の前にあるもの、「わたり」は邊の意。藤壺に御部屋を賜はつて住まれたをいふ。○今めかしく　當世風に花やかに。○ひきこめ難し　内に引つこめて置くことが出來ない。○内侍のかみ　内侍司の長官。

●七月　五日。○御太郎のおとゞ　御禮領の意。即ち道家の長子教實の事。この後、四條天皇の時攝政となり、嘉禎元年辭職し、尋で薨ず。○大殿　攝政關白を子に持つ人の尊稱。○思ひなしも　他から推し測り考へても。○御子ども　上に擧げた外、下にいふ人々を指す。○山の座主　比叡山延暦寺の長。○三井寺の長吏　園城寺の長。○山階寺の別當　山階寺は奈良の興福寺、その長。○仁和寺の御室　仁和寺はニンナジと發音す。御室はこの寺の長、代々親王が承け繼がれる。○君だち　子息たち。○さながらまるで。○よそほしく　いかめしく。おごそかで。○内の御宿直所　禁中の詰所。○立ちかはり　皆の子どもが入れかはり立ちかはり。○御前に　絶えず天子の御前に出て。○北の方　道家の奥方。

●例ならず　病氣になられたをいふ。○御髪おろさせ　佛門に歸せられしをいふ。○ここら　多くの意。いろ〳〵と○隱岐の小島にも　後鳥羽院

も聞しめし歎く。承明門院（在子）は、さまざまの憂き事を見盡して、猶ほながらふる命のうとましきに、又かく同じ世をだに去り給ひぬる御歎のいはむ方なさに、「なと先立たぬ」と、口惜しう思しこがるゝさま、理りにも過ぎたり。彼處にて召し使ひける御調度、何くれ、はかなき御手箱やうのものを、都へ人のまゐらせたりける中に、たまさかに通ひける隱岐よりの御文、女院（承明門院）の御消息などを一つにとりしたゝめられたる、いみじうあはれにて、御目もきりふたがる心地し給ふ。家隆の二位の女小宰相と聞えしは、自らけちかく御覽じなれけるにや、人より殊に思ひ沈みて、御服など黒う染めけり。

憂しと見しあり別れは藤衣

などに、常はうちとけ候ひ給へば、關白殿（實教）、次々の御子どもも、大臣などにて、立ちかはり御前に絶えずものし給ひて、世の政事など聞え給ふ。北の方は公經のおとゞの御女なれば、ましてや世の重くなびき奉るさま、いとやむごとなし。

【天下はさながらまじろ人少う見えたり】　天下の政路は總て道家一家の者が立つて、殆と他の者は入れないといふ有樣であつた。

まことや、その年（寛喜三年）十一月十一日、阿波の院（上御門）かくれさせ給ひぬ。いとあはれに、はかなき御事かな。例ならず（上御門）思されければ、御髪おろさせ給ひにけり。こゝら物をのみおぼして、今年は三十七にぞならせたまひける。今一度都をも御覽ぜずなりぬる、いみじうかなしきを、隱岐の小島に

も。○憂き事　つらい事。○見盡して　いろ〳〵のつらい事にあつての意。○ながらふ　生きのびる。○うとまし　面白からず思ふ。嫌に思ふ。○同じ世　この世。同様に住んで居る世の意。○など先立たぬ　何故帝よりも自分が先に死ななかつたのであらう。さうすればこんな悲しみはなからうものをの意。○思しこがる　非常に思ひわづらふ。○理りにも過ぎたり　普通の道理を越えて、實に甚だしいの意。○彼處　阿波の配所をいふ。○御調度　御道具類。○何くれ　何やかや。○はかなき　かりそめの。ちよつとした。○手箱　手まはりの小道具を入れる箱。○隱岐より

やがて著るべき門出なりけり

【今一度都をも云々】無事で居て、今一度都に還られゝば、よかつたのだが、それも出來ず、遂にこんな所で崩ぜられたのを、隱岐でも後鳥羽院が歎かれたの意。

【など先立たぬ】玉葉集（雜）に「とまる身はありてかひなき別路になど先立たぬ命なりけむ」（安嘉門院四條）とある歌によつた語。

【彼處にて召し使ひける御調度云々】土御門院が配所で使つて居られた道具類とか或は何やかや一すじた手箱風の物を、或人が都へ送つた。ところが其の中に、後鳥羽院の御手紙や自分の書かれた御手紙などが一つにまとめてあつたので、それを見て非常に泣かれたの意。

【憂しと見しありし別れは云々】かつて阿波へ流され給ふ時、つらいと思つたあの昔の別れは、卽ち此の世の別れで、喪服を著るべき門出であつたのであるわいの意。「やがて」は漢字の「卽」に當り、取りも直さずの意。意味からいへば「やがて藤衣を著るべき」とすべき所である。

今年も、はかなく暮れて、貞永元年になりぬ。定家中納言承

の　後鳥羽院からの。○一つに取りしたゝめられたる　一つに取り纏められたのは。○きりふたがる　涙の爲に目がかすんで見えぬをいふ。○けぢかく　ケは發語。御側近くの意。○御覺じ驚れける　始終召使はれて居たの意。○人よりも殊に思ひ沈みて　他の人よりも一倍勝れて悲しんだ。○御服など黒う染めける　服は喪服。黒い喪服を著るをいふ。○ありし別れ　かつての別れ。○藤衣　喪服をいふ。

●承りて　勅命をうけて。○撰集の沙汰　沙汰は處置すること。勅撰集編纂のことの意。○奏せられける　撰集を完成して奏上するをいふ。○一年の内に云々　勅命を受けて、撰集の沙汰ありつるを、この程、御門（後堀河）おりさせ給ふべきよし聞ゆればにや、いと疾く十月二日奏せられける。一年の内に奏せられたる、いとありがたくこそ。「新勅撰」と聞ゆ。元久に「新古今」いできて後、程なく世の中もひきかへぬるに、又、「新」の字うち續きたる、心よからぬ事など、さゝめく人も侍りけるとかや。

【元久の新古今いできて後云々】元久に新古今が出來たが、其の後間もなく世の中の樣が變つて、土御門院の御讓位、承久の亂などが起つた。ところが今度又同じく「新」といふ字のついた撰集が出來たので、是は又何か不吉な事が起る前兆だらうと、世の中の人が云つたの意。

さて同じき四日、（後堀河）おり居させ給ふ。御惱重きによりてなりけり。去年の二月、后の宮（邦子）の御腹に、一の御子（四條）いでき給へりしかば、やがて太子に立たせ給ひしぞかし。例の

てから一年以内に奏覽したのは。○ありがたく　珍しい。○ひきかへぬる　打つて變つた有樣となつた。○さゝめく　さゝやく。コソ〳〵と話す

●御惱　御病氣。○一の御子　第一皇子。四條天皇。御諱秀仁。寬喜三年二月十二日降誕。同年十月二十八日立太子貞永元年十二月五日卽位。仁治三年一月九日崩御。御年十二。○例の　「例の人」とは續かず。「例の通り」の意。○口さがなき　口の惡いこと。○坊　春宮坊。○不用　都合が惡いこと。○尊號あり　太上天皇となられたをいふ。○天變しきり　大風・雷・日蝕・彗星など天上の異變がしきりに起るをいふ。○さとし　天の

人の口さがなさは、かの承久の廢帝(仲恭)の、生れさせ給ふと等しく、坊に居給へりしは、いと不用なりしをなどいふめり。うへ(後嵯峨)は下りさせ給ひて、その七日、やがて尊號あり。御惱なほおこたらず。大かた世も靜かならず、この三年ばかりは、天變しきり、地震ふりなどして、さとししげく、御愼重きやうなれば、いかゞおはしまさむと、御心どもも騷ぐべし。今上(四條)は二歲にぞならせ給ふ。あさましき程の御いわけなさにて、いつくしき十善の主に定り給ふ事、いとゆゝしきまで、前の世ゆかしき御有樣なり。昔近衞院三歲、六條院二歲にて位に卽き給へりし、いづれもいと心ゆかぬためしなり。閑院殿の淸涼殿にて、先づ御袴奉る。十二月五日、御卽位は、ことなく果てぬれば、めでたくて、年も

改め。所謂天變地異の類をいふ。○あさましき程　あきれるほど。○いわけなき　幼少なこと。○いつくしき　いかめしい。○十善の主　天子のこと。○ゆゝしきまで　驚くほども。○前の世ゆかしき　前世にどんな善業を積まれたか、それが知りたいと思ふほどの。○近衞院　鳥羽天皇の御子。保延五年五月十八日降誕。同年八月立太子。永治元年十二月三歲で卽位。在位十四年、久壽二年七月崩御。御年十七。○六條院　二條天皇の御子。長寬二年十一月十四日降誕。永萬二年六月二十五日立太子。卽夜受禪。同年七月二十七日卽位。在位三年、仁安三年二月位を高倉天皇にかはりぬ。

【かの承久の廢帝の云々】　仲恭天皇は建保六年十月十日に御降誕、その十一月二十六日には、もう太子となられた。「生れさせ給ふと等しく」とは直の意である。そして卽位後は前記の通り(一一四頁參照)僅か七十餘日で廢せられ給ふなど、實に不幸な方であつた。ところが今度又四條帝が早く太子となられたので、亦あんな事ではなからうかと思つたのである。

【御愼み重きやうなれば云々】　天變地異は天子の政が惡い爲に天がさとしをするのだと當時は信ぜられて居たから、此の時も陰陽師などより、重く御謹愼あるべしなどと奏したので、院には、どうしたものかと心を惱まされたといふのである。

【十善の主】　天子のこと。前世に於て十惡を犯さなかつた、卽ちよく十善を修めた報いで天子と生れるといふ佛者の說によつた語である。さて十惡とは殺生・偸盜・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・邪見の十種。

【いと心ゆかぬためし】　近衞・六條御二方とも極めて早く御卽位になつ

譲り、安元二年七月崩御。御年十三。○心ゆかぬ　面白からぬ。○閑院殿　閑院の内裏に同じ。○祷奉る　始めて御祷を著用せられるをいふ。●物怪　怪霊、生霊など人に祟るもの。○あつしう　あつし（形、ク）。病が重い。○はれまなく　御心の晴れる間もなく。○四月の頃　四月十五日改元。○同じ頃　四月三日のこと。○位去り給ひて　中宮の位を去つて佛門に入られたをいふ。○例ならず　惱ませ給へば「例ならず」は普通の健康情態でない意。所謂「つはり」て惱まれるをいふ。○祭祓　安産を祈る爲陰陽師のする祭や祓。○何くれと　何やかやと。○夥しく　たいさうに。○まだきより　早くから。○のゝしる　言ひ騒ぐ。（罵倒の意ではない）。○その程　出産の期。○安き空なく　心の安まる折なく。○山々寺々　諸寺の意。○御物怪が剛情で。○いみじうあさまし　實に驚くべきことである。○その程のいみじさ　御かくれになつた頃の大變な騒ぎ。○清らつきりとして美しいこと。○時の間の露　「時の間」は極暫くの間。おいて直又消えるはかない露の如くの意。○いはむ方なし　いはむ方なく悲しの意。○うへ　奥方。○けぢかう　御側近く。

ひぬ。その程のいみじさ、推し測りぬべし。今年二十五ならせたまふ。若く清らにうつくしげにて、盛りなる花の御姿、時の間の露と消えはて給ひぬるは、いはむ方なし。殿（邸家）・うへ、思し惑ふさま、悲しともいへば更なり。院（後堀河）に候ふ民部卿典侍と聞ゆるは、定家中納言の女なり。この宮（藻壁門院）の御方にも、けぢかうつかうまつる人なりけり。限りなく思ひ沈みて、頭おろしぬ。いみじうあはれなる事なり。人の問へる返事に、

悲しさはうき世のとがと背けども
　只戀しさのなぐさめぞなき

【めでたき御事の數添はせ云々】皇子御誕生であらうといふので、世の中が皆祝しあつたをいふ。

たが、近衞は在位十四年、政務は悉く法皇に出て、自らは何の權力もなく、遂に十七歳でおかくれになり、二條は在位僅かに三年、未だ元服を加ふるに至らずして太上天皇となり、十三歳で崩御になつた。そして共に皇子といふものがなかつた。いづれも目出たからぬ例である。

中宮（予）も、御物怪（もののけ）に惱ませ給ひて、常はあつしうおはしますを、院（後堀河）は、いとゞはれまなく思し歎く。四月（うづき）の頃、年號改まる。「天福」といふなるべし。その同じ頃、中宮（予）も位去り給ひて、藻壁門院とぞ聞ゆなる。今年も亦、例ならず惱ませ給へば、めでたき御事の數添はせ給ふべきにこそと、世の中めでたく聞ゆ。祭（つゐはらへ）・祓何くれと、夥（おびただ）しく、まだきよりのゝしる。まして、その程近くなりては、天の下安き空なく、山々（やまやま）・寺々（てらでら）・社々（やしろやしろ）、御祈（おんいのり）響き騒げども、御物怪こはくて、いみじうあさまし。遂に九月十八日にかくれさせ給

●當代の御母后にて云々　藻壁門院は。○御母后　皇太后　○一つ墨染にやつれぬ　總ての人々が喪服を著たの意。やつる」は樣がたちの惡くなること。○沈みまさらせ給ひて　益〻沈鬱になられて。○うち絶えて　全く。○御湯など

【悲しさはうき世のとがと云々】「とが」は罪。卽ち浮世にながらへて居る罪の意。一首の意は、人に後れて悲しみに堪へないのは、この浮世に長らへて居る罪だから、自分はかうして剃髮し、佛の道に入つた。隨つて悲しみは盡ぼえないが、如何せむ只戀しさは慰めようもない、實に戀しくて〳〵たまらないの意。卽ち悲しみの代りに戀しさの語を以て、その情の痛切なことをいつたのである。○この歌、續後撰集（羇旅）に「藻壁門院御はての日、誰ともなくて、民部卿典侍の局にしおかせける、正三位宗衡―この秋も變らぬ野べの露の色に苔の袂を思ひこそやれ」とある、その返しである。

當代の御母后にておはしつれば、天下、皆、一つ墨染にやつれぬ。この御歎きに、愈〻院（後堀河）は沈みまさらせ給ひて、うち絶えて、御湯などをだに、御覽じいる〻事なくて、月日つもらせ給へば、御修法（みずほふ）ども、いとこちたく、山々・寺々、殘りなく勤めの〻しる。醫師（くすし）・陰陽師（おんやうじ）・祭祓など、天の下騷

なだに御覽じいる〻事なくて「湯」は湯藥。葛湯など。葛根湯の樣なものさへも、おぼりにならないで。○月日つもらせ給へば　月日を經給へば。○御修法　佛法の祈　○こちたく　煩しいほど。○勤めの〻しる　御祈禱をして喧しく言ひ騷ぐ。○陰陽師　オンミヨウジとよむ。占ひ・祈禱などをするもの。○年號變りぬ　天福二年十一月五日改元。○いとほしう　かはいさうに。○あたらしき　惜しい○さしつぎの宮　次の宮。卽ち順德院の皇子。仲恭帝の御弟なる善統親王。

●いひしろふ　噂し合ふ。當

ぎ滿ちたり。又年號變りぬ。文曆元年といふ。承久の廢帝（仲恭）十七になり給へるも、五月廿日に失せ給ひぬ。いと若き御程に、いとほしう、あたらしき御年なりかし。隱岐（後鳥羽）にも、うち續きあはれなる事どもを、聞し召し歎くべし。佐渡（順德）には、まして心憂くあさましとおぼさる。この御さしつぎの宮、猶ほおはしますは、修明門院（順德母子）養ひ奉らせ給ふめり。

【隱岐にもうち續きあはれなる事ども云々】後鳥羽院は御自らは元より第一皇子なる土御門院、御三皇子なる順德院等も共に流され給うた上、土御門院は既に崩ぜられ、今又御孫に當る仲恭帝が崩ぜられたので、打ち續く不幸を歎き悲しまれる。まして順德院は皇子仲恭帝の御不幸を痛切に感ぜられたの意。

かくいひしろふほどに、院（後堀河）の御惱、日々に重くならせ

給ひて、八月六日、いとあさましうならせ給ひぬ。世のおもしにておはしますべきことの、かくあへなき御有樣、口惜しなど聞ゆるも、なのめなり。大方御本性もなごやかに、らう〳〵しく、御貌も、まほに美しうとゝのほりて、二十に三つばかりや餘らせ給ふらむ。若う盛りの御程に、御才など、大嘗會などの、いとゞ延びぬ。只こゝもかしこも、高きも

時世間の人々が前記の事柄について、いろ〳〵と噂しあつたをいふ。○あさましうならせ給ひぬ　「あさましう」は情なく。崩ぜられたの意。○世のおもし　天下の抑へなどの意。○あへなき　輕み甲斐のない。○なのめ　普通。口惜しいなどと言つたところで、それは普通一通りのこと、中中それどころの話ではない。○なごやか　おだやか。○らう〳〵しく　物事に巧者で。○まほ　端正。○とゝのほり　完全で。缺點なく。○たど〳〵しからず　暗くない。よく通じて居るの意。○あたらしうおはしませば　惜しいほどであられたから。○くれまどへる　途方にくれる。○御

(12)

はて　一周忌。○まが〳〵しく　不吉で。○ゆゝし　忌々しい。○御契　夫婦間の因緣。○ありがたく　珍しく。○高きも下れるも　上下萬民の意。○遠きも　都から遠く離れた邊鄙な地方も。

●うち續き　土御門・仲恭・後堀河・藻壁門院と次々つゞいて崩ぜられたをいふ。○かくのみ　只かうして。○しきり　しきりに起り。○あわたゞし　落著かない。○年號變り

下れるも、都も、遠きも、島々も、涙にうき沈みてぞ過し給ひける。

【後堀河院とぞ申しける】「この崩ぜられた方を……」と前にかへつて云つた話である。

【とり重れて諒闇の三年までに云々】　去年九月から藻壁門院の諒闇となり、それがまだ終らぬに、今又後堀河院が崩ぜられたので、更に明年八月まで諒闇となる。卽ち足掛三年の諒闇となるわけである。

【御契の程のあはれさ】　藻壁門院と後堀河院とが一年足らずの間に打ち續いて、なくなつたので、それをお夫婦の因緣深からぬといつたのである。

うち續き、かくのみ世の中騷がしく、天變もしきり、いとあわたゞしきやうなれば、又、年號變りて、嘉禎元年といふ。まことや、三月の末つ方より、攝政殿（教實）重くわづらひ給ふ。故院（後堀河）の御位の程より、大殿（家通）の御讓りにて、關

て　九月十九日改元。○三月の末つ方より　嘉禎元年、即ち文暦二年の三月末から。但しなくなつたのは三月二十八日のことである。○御譲り　關白を譲られたをいふ。○めでたく　立派で。○かなしくし給ふ　最愛の。○ものし給ふ　おありなさる。○はぐくみ聞え　御養育申し上げる。○大殿たちかへり　道家が再びの意。○北の政所　攝政・關白の奥方をいふ。○かの殿　公經と道家と一緒になつて。○御色ども改り　諒闇明けて、黒き喪服を脱ぎかへるをいふ。○御覆大嘗會　御禊は十月二十日に、大嘗會は十一月二十日に行はれた。

白と聞えしが、御門(後四條)稚くおはしませば、この頃は、攝政殿と申すなるべし。御かたちも御心ばへも、めでたくおはしましつるに、いとあへなく失せ給ひぬれば、大殿(道家)の御歎、たとへむかたなし。二十六にぞなり給ひける。いとかなしくし給ふ姫君(竴子)・若君(家嗣)などものし給ふをも、今は峰殿(道家)のみ偏にはぐくみ聞え給ひけり。攝政にも、大殿(道家)たちかへりなり給ひぬ。かくて三度政事を治め給ひぬるにや。北の政所の御父は公經のおとゞなれば、かの殿と一つにて、世は愈〻御心のまゝなるべし。今年ぞ御色ども改りぬれば、冬になりて、御禊・大嘗會行はる。

【三度政事を治め給ひ】道家が三度攝關の重職についたをいふ。攝關補任次第に「東山殿道家。承久三四二十攝政。安貞二十二二十四關白。

●あさましの年の積りや　情ない年月の積つたことだ。やは感動の助辭。○御齢にそへても　年のつもるにつけても。○御歎き草　草は物事を生ずるたれ又はもとなどの意。但し歎き草は只歎きといふだけのこと。草といふから、下は「繁ろ」といつたのである。○おぼし馴れにしことにて　御手馴れの事であるから。○御心をのべける　氣を晴らされた。○あはれに忘れがたく云云　都にあつて院を戀ひ奉ふ人々の意。○つれづれ　爲す事もなく退屈なこと。○判じて　歌の巧拙を批判して。○今まで生ける思出に　今までさまざまめでたくもあはれにも、いろ〳〵なる都の事どもを、ほのかに傳へ聞し召して、隱岐(後鳥羽)には、あさましの年の積りやと、慰(なぐさめ)にそへても、盡きせぬ御歎き草のみ繁りそふ。御齢(よはひ)にそへても、おぼし馴れにしことにて、敷島の道にのみぞ、御心をのべける。都へも、便りにつけつゝ、題をつかはし、歌を召せば、あはれに忘れがたく戀ひ聞ゆる昔の人人、我も〳〵と奉れるを、つれづれにおぼさるゝ餘りに、自ら判じて御覽ぜられけり。家隆の二位も、今まで生ける思ひ出に、これをだにと、あはれにかたじけなくて、こと人々の歌をも、こゝよりぞ、とり集めてまゐらせける。昔の秀能は、ありし亂の後、頭おろして、深く籠りゐたり。

嘉禎元三二十八更攝政」とある。

存命して居たしるしに。○これをだにせめて和歌なりとも奉らうの意。○かたじけなく勿體ない。恐れ多い。○こと人々　他の人々。○こゝよりぞ　家隆から。○まねらせける。後鳥羽院へ。○ありし亂　件の變亂。卽ち承久の亂。○そのかみの事　その當時の事。○例の數々はいかでかこゝも特に尼の語を擧げたので、例の通り澤山は列擧しがたいがの意。

如願（にょぐわん）とぞいひける。それもこの度の御歌合にめせば、今更に、そのかみの事、さこそは思ひいづらめ。例の數々はいかでか、只片端（かたはし）をだにとて、

【御齡にそへても云々】年と共に只悲しみのみの增すについては、只平生おだしなみの和歌を唯一の慰藉とせられたの意。

【昔の秀能はありし亂の後云々】「昔の秀能」とは「おどろのしだ」（四四頁）に見えた記事によつて特に「あの折あゝいふ事をした」などの意である。その秀能は承久の亂後は遁世して如願と號し、世を避けて深く籠つて居たが、今度の歌合には特に召されたので、さぞあの折（おどろの下に見えること）の事を思ひ出して、今昔の感に堪へないことであらうの意。

【この度の御歌合】今「遠島御歌合」といつて殘つて居るもの。かうしてわざ〳〵京都から取り寄せて、嘉禎二年七月、判の詞を加へられたものである。

左、御製

●御製　後鳥羽院の。○山とし高く　山の如く高くの意。シは意を強める助辭。特別の意味はない。○わたの原　海○ゝるべ　案內。

人ごころうつりはてぬる花のいろに
むかしながらの山の名もうし

右、家隆の二位、

なぞもかく思ひ初めけむ櫻花
山とし高くなりはつるまで

秀　能、

わたの原八十島かけてしるべせよ
遙かに通ふ沖の釣舟

「山家」といふ題にて、また、左、御製、

軒端荒れて誰かみなせの宿の月
すみこしまゝの色やさびしき

右、家隆、

寂しさはまだ見ぬ島の山里を
思ひやるにも住むこゝちして

【人心移りはてぬる云々】人の心は花と共にもうすつかり變り果てて居るのに、昔ながらに花の咲くといふ「ながら山」の名は却つて物憂く感ぜられるの意。「移りはてぬる」は人の心の變るに花の色のうつろふをかけ、「ながら」は昔ながらといふ接尾語に近江滋賀郡なる長良山をかけたのである。

【なぞもかく思ひ初めけむ云々】「なぞもかく」はどうしてこんなに。思ひが積んで山のやうに高くなつてしまふまで、どうしてまあかう櫻の花のことを思ひ始めたのであらう。

【わたの原八十島かけて云々】「八十島」は多くの島々。「かけて」は亘つて。沖の方を遠く通ふ海人の釣舟よ、海上遠く列つて居る多くの島島に亘つて、君のおはす所にゆく船路を教へよの意。○古今集（羇旅）に「わたの原八十島かけて漕ぎ出ぬと人には告げよあまの釣舟」（小野篁）とあるによつたのである。

【軒端荒れて誰かみなせの云々】水無瀬殿は住む人もなくなつて、軒

●判の詞　勝負を定める批評の詞。○吾が御歌を云々　後鳥羽院が自分で自分の歌を勝とせられたの意。○はかなしごと　とりとめもない事。歌合を指す。○阿彌陀佛の御勤　念佛をいふ。○紛はして　胸の歎きを。○面變り　年がよつて顔付の變ること。○みらく　見ること。

端も荒れ果てたことであらう。そして其處には昔に變らぬ色に月影が冴んで居らうが、どんなに寂しいことであらうの意。「誰かみなせ」は誰か見ると水無瀬となかけたのである。

【寂しさはまだ見ぬ島の云々】御住ひの樣はまだ見ませんが、その寂しさを思ひやるだけでも、何だか實際自分がそこに住んで居るやうな氣がして、たまりませんの意。

法皇（後鳥羽）御自ら判の詞を書かせ給へるに、「まだ見ぬ島を思ひやるらむよりは、年久しく住みて、思ひ出でむは、今少し志深くや」とて、我が御歌を勝とつけさせ給へる、いとあはれにやさしき御事なめり。かやうのはかなしごと、又は、阿彌陀佛の御勤などに、紛はしてぞおはします。又、御手習のついでに、

我ながらうとみはてぬる身の上に

ふる里は入りぬる磯の草よたゞ　夕潮滿ちてみらくすくなき

涙ばかりぞ面變りせぬ

【まだ見ぬ島を思ひやらむよりは云々】家隆の歌に、「まだ見ぬ島の山里を思ひやる」とあるのは、只想像だから、御製の「すみこしまゝの色やさびしき」といふ實際を追懷した方が感情が深いといふので、自分の御歌を勝とせられた。

【吾ながらうとみ果てぬる云々】自分の身はもう自分ながら愛憎の盡き果てたものであるが、只涙ばかりは昔のまゝに少しも變らず流れ落ちるの意。

【ふる里は入りぬる磯の云々】故郷は丁度夕潮が滿ちて、其の中にかくれてしまつた磯の草のやうなもので、さつぱり見えないの意。「入りぬる」は水の中にかくれてしまつたこと。「みらくすくなき」は滅多に見ないの意であるが、是れは「見らく少く戀ふらくの多き」などの句から來た語であるから、こゝの意としては、矢張り全く見えないことと

●この浦　隱岐を指す。○空しく　希望を遂げ給ふこともなく。○今更心憂し　世の中のはかない事はもとより分つて居るが、之を聞いては、又今更のやうに感ずるの意。○近き山　隱岐の島で、その住んで居られた所の近くにある山。即ち菊田山。○例の作法　火葬をいふ。○むげに　格別。○人少な　葬ひの人が少いをいふ。○能茂　藤原。○北面　北面の武士。○入道して　佛門に入つて。○御供に候ひしぞ　御供して居た人が○大原の法華堂　山城愛宕郡○御莊　御領の莊園。○三昧料　三味は心を一事に集注す

見た方がよからう。

この浦に住ませ給ひて、十九年ばかりにやありけむ。延應元年といふ二月二十二日、六十にてかくれさせ給ひぬ。今一度都へ歸らむの御志深かりしかど、遂に空しくて止み給ひにし事、いと辱く、あはれに情なき世も、今更心憂し。近き山にて、例の作法になし奉るも、むげに人少なに、心細き御有樣、いとあはれになむ。御骨をば、能茂といひし北面の、入道して御供に候ひしぞ、頸にかけ奉りて、都に上りける。さて大原の法華堂とて、今も、昔の御莊の所々、三昧料に寄せられたるにて、勤め絶えず。かの法華堂には、修明門院（藻）の御沙汰にて、故院（羽）わきて御心とゞめたりし水無瀨殿をわたされけり。今はの際まで持たせ給ひけ

るきりの御數珠なども、彼處に未だ侍るこそ、哀にかたじけなく、拜み奉るついでのありしか。初めは顯德院と定め申されたりけれど、おはしましゝ世の御あらましなりける とて、仁治の頃ぞ、後鳥羽院とは、更に聞え直されけると なむ。

【能茂といひし北面の云々】　もと能茂といふ北面の武士であつたが、後佛門に入つて、隱岐へも御供して行つて居た男が頸にかけて、都へ上つた。

【拜みたてまつるついでのありしが】　シカは上のコソに對する結である から、只「あつた」の意。卽ちその御數珠を拜觀する機會があつたの意である。

ること。一心に法華經を讀誦する爲のもとで。○寄せられ　寄附せられ。○勤め　法華經讀誦の勤行。○御沙汰　御命令。○わきて　特に。○水無瀨殿　わたされけり　水無瀨殿を法華堂に移し建てられた。仁治二年二月のこと。それまで御骨は大原西林院になさめてあつた。○今はの際　臨終の際。○かしこ　かの法華堂。○御あらまし　豫め定めおく意で、御遺言をいふ。○聞え直され　稱し直され。

●源大納言通方の預り奉られし　九〇頁を見よ。○阿波院の宮　阿波の院の御子。○おとなび給ふ　成人せられる。○警策　聰明なこと。もと詩文の佳句を稱するより轉じた語である。○うるはしく　端正に。○やむごとなき　尊い　總て。一般に。○なべて　○あたらしき　惜しい。○曆仁の頃失せにし　曆仁元年十二月二十八日のこと。○何を待つとしもなく　將來に對し別に何の希望を持つといふこともなく。○かゝづらひて　ぐづ〳〵として。○人わろく

第四　三神山

さても源大納言通方の預り奉られし阿波院（土御門）の宮（後鳥羽）の頃失せにしかば、愈〻眞心に仕うまつる人は、おとなび給ふまゝに、御心ばへもいと警策に、御貌もいとうるはしく、けだかく、やむごとなき御有樣なれば、なべて（方通）さへ、曆仁の頃失せにしかば、愈〻眞心に仕うまつる人もなく、心細げにて、何を待つとしもなく、かゝづらひておはしますも、人わろく、あぢきなう思さるべし。御母（予通）は土御門の內大臣通親の御子に、宰相の中將通宗とて、若くて失せにし人の御女なり。それさへかくれ給ひにしかば、宰相の同胞の姬君ぞ、御乳母のやうにて、瞿曇彌の、釋迦佛

外聞惡く。○あぢきなう　面白くもなく。○それさへ　通子さへ。○宰相の同胞の姫君　通宗と同じ腹の姫君。○瞿曇彌　釋迦の姨に當る人。釋迦の母摩耶夫人の歿後、之に代つて釋迦を愛育した。○二にて父御門には別れ奉り　土御門院の阿波に遷られた時をいふ。○御面影だにおぼえ給はねど　父帝の御容貌さへ御記憶ないが。○自らあひ見奉るやうもやなど　自然御面會の機もあらうかなどと。○思しくんじ　「くんず」(サ變)は屈す。物思ひに沈み氣のふさぐをいふ。○まめだちて　氣が浮かない。面白さうに笑ひなどせぬをいふ。

養ひ奉りけむ心地しておはしける。二にて父御門(土御門)には別れ奉り給ひしかば、御面影だにおぼえ給はねど、猶ほこの世の中におはすと思されしまでは、自らあひ見奉るやうもやなど、人知れず、幼き御心にかゝりて思しわたりけるに、十二の御年かとよ、かくれさせ給ひぬと、傳へ聞き給ひし後は、愈〻世の憂さを思しくんじつゝ、いとまめだちてのみおはしますを、承明門院(在子)は、心苦しう悲しと見奉り給ふ。

【猶ほこの世の中におはすと云々】　二つの時別れて、御顔も知らない位だが、それでも猶ほ此の世の中に生きて居られると思ふと、又何かの機會で御面會するやうなことがあるかも知れぬと、一縷の望を抱いて居られたが、十二の年、愈〻父帝がおかくれになつたと聞いては、もうがつかりして、打ち沈んでばかり居られた。

●十二月　十三日のこと。○洞院故攝政殿　藤原教實。道家の長子。○居立ちて　世話をやいて。○よそほしく　美しく立派に。○あらまほしき樣にひゞきて　「あらまほしき樣」はかくありたいと思ふ樣。「ひゞく」は世に聞える。實に理想的だと世間で評判すること。○女御まゐり給ふ　彦子が女御として參られたの意。○よろづ飽かぬことなく　何不足なく。○きびは　幼少。○雛遊　小さい人形に小さい調度類を添へて弄ぶこと。今は三月の節句(上巳)に行はれる。御二方とも小さいので、雛のやうだといつたのである。○いとゆゝしくなむ　威勢の盛んなことである。

はかなく明け暮れて、仁治二年にもなりにけり。御門(四條)は今年十一にて、正月五日御元服し給ふ。御諱秀仁と聞ゆ。その年の十二月に、洞院故攝政殿(教實)の姫君(彦子)、九になり給ふを、祖父(道家)の大殿・御伯父の殿原(良實實勝)など居立ちて、いとよそほしく、あらまほしき樣にひゞきて、女御まゐり給ふ。父の殿(教實)ひとりこそものし給はねど、大方の儀式、よろづ飽かぬことなく、めでたし。上(四條)も、きびはなる御程に、女御も、まだかく小さうおはすれば、雛遊のやうにぞ見えさせ給ひける。天の下は、さながら大殿(道家)の御心のまゝなれば、いとゆゝしくなむ。

【九になり給ふ】　百錬抄(卷一四)には「仁治二年十二月十三日丙寅。今夜女御入内也。(故攝政御女。母儀入道相國女。左府爲ニ猶子一。行年十四)。

同三相府已下扈從。とあり、又女院小傳には「宣仁門院（藤彦子）。四條后。云々。仁治二十二一（二年十二月一日の意）叙二従三位一。（十五）。十七爲二女御一。」とある。

【父の殿ひとりこそものし給はねど】　父教實だけは居られないが。○教實は文暦二年三月二十八日に薨じたのである。

土御門殿の宮（後堀）は、二十に餘り給ひぬれど、御冠の沙汰もなし。城興寺の宮僧正眞性と聞ゆる御弟子にと、かたらひ申し給ひければ、さやうにもとおぼして、女院（承明門院）にも語らひ申し、相談。○さやうにもと　御弟子にしようと。○ほのめかし　それとなく知らせる。○いとあるまじき事　決してそんな事があつてはならぬ。○いたう忍びて　非常に隱れて。○石清水の社　山城綴喜郡。所謂男山八幡宮　○念誦　念佛誦經。（當時は神

(3)

●土御門殿の宮　土御門天皇の皇子。○御冠の沙汰　御元服の儀。○城興寺の宮　以仁王の子。天台座主、大僧正。書寫宮又城興寺宮と稱す。○語らひ申し　相談。○さやうにもと　御弟子にしようと。○ほのめかし　それとなく知らせる。○いとあるまじき事　決してそんな事があつてはならぬ。○いたう忍びて　非常に隱れて。○石清水の社　山城綴喜郡。所謂男山八幡宮　○念誦　念佛誦經。（當時は神

佛混淆であるから、寺と社とは同じである）。○のどかに　靜かにゆつたりと。○まどろませ　一寸眠る。○あざやかに　ハツキリと。○うち誦じ給ふ　「ずんず」（サ變）は「誦（ず）す」の音便。歌ふ。○御覽じあげたれば　見上げられると。○けざやか　ケは發語。さやか。明か。○神さびたり　神々（かう〳〵）しい　○いかに見えつる御夢ならむ　どういふ意味の夢であらうか。○とまれかくまれ　「ともあれかくもあれ」の約。吉凶はまあどうでもよいと。

●年もかへりぬ　仁治三年となつたをいふ。○おしなべて　ふと聞きて、御覽じあげたれば、明方の空澄みわたれるに、星の光もけざやかにて、いと神さびたり。いかに見えつる御夢ならむと、怪しくおぼさるれど、人にものたまはず、とまれかくまれと、愈、御學問をぞせさせ給ふ。

【城興寺の宮僧正眞性と聞ゆる御弟子にと云々】　城興寺の宮眞性と申す方の弟子の意。

【椿葉の影二たび改まる】　新撰朗詠集（帝王）に「德是北辰。椿葉之影再改。尊猶南面。松花之色十廻。」（大江朝綱）とある句をいふ。「北辰」は北極星を天子の德に比し、「南面」は天子の位をいふ。「椿葉（椿はツバキとよむが、我が國のツバキとは別のものである。）松花」は共に歳月の久しきにわたる譬。即ち聖德四海にあまねく、永遠に榮え給ふべしとの神のお告である。

年もかへりぬ。春の初めは、おしなべて、ほど〳〵につけたる家々の身の祝など、心ゆき、ほこらしげなるに、正月の

(4)

一般に。○ほど〳〵につけたる　身分相應の。○心ゆきほこらしげなる　滿足に得意らしい。○例ならぬ御事にて　御病氣の爲。○七日の節會　白馬（あをうま）の節會。天皇左右の馬寮より引き出す白馬を見給ひ、庶民にも見せ給ふ儀式。此の日白馬を見れば、年中邪氣を拂ふといふ。○御帳にもつかせ給はねば　御帳は御帳臺で、御座を設けその四方に帳を垂れたもの。玉座にも御出ましにならなかつたので。○さうざうし　寂寂（さびさび）しの音便。寂しく物足らぬ。○おぼしあへる　人々が皆思つて居られた。○のゝしりあへる　人々が喧しくいひ騷ぐ。○あさましと

五日より、内（後四條）の上、例ならぬ御事にて、七日の節會にも、御帳にもつかせ給はねば、いとさうざうしく、人々思しあへるに、九日の曉、かくれさせ給ひぬとて、のゝしりあへる、いとあさましともいふばかりなし。皆人あきれまどひて、なか〳〵涙だに出で來ず。女御（承明門院）も未だ童遊の御樣にて、何心なくむつれ聞えさせ給へるに、いとうたていみじければ、うちしめりくんじて居給へる、いとをさなげにらうたし。大殿（家基）の御心の中思ひやるべし。御兄左大臣の忠家若君も殿上し給へる、只御門（後四條）の同じ御程にて、騷がしきまでの御遊のみにて、明し暮させ給ひけるに、かいひそみて群り居つゝ、鼻うちかみ、うち泣く人より外はなし。かくのみあさましき御事どものうち續きぬるは、いかにも、

もいふばかりなし　あさましいとも何ともいひやうがない。「あさまし」は意外なことに驚き呆れる。○なか〳〵　却つて。○童遊　子供同志で遊び戲れること。○むつび聞えさせ　睦び親しみ給ふこと。○いとうたていみじければ　實に情ない悲しいことであるからの意。○うちしめりうちしをれ　○くんじてふさぎこんで。○らうたし　いたはしい。○御門の同じ御程　御門と同じ御程。御門と同年配位。○かいひそみて　打ち靜まつて。○鼻うちかみ　啜泣くこと。○かくのみあさましき御事ども　藻壁門院後堀河帝の崩御、又今度の四條帝の崩御など。○遠き浦々

かの遠き浦々にて沈み果てさせ給ひにし、御歎きどものつもりにやとぞ、世の人もさゝめきける。御惱のはじめも、なべてのすぢにはあらず。徐りいわけたる御遊より、そこなはれ給ひにけるとぞ。未だ御つぎもおはしまさず、又御同胞の宮なども渡らせ給はねば、世の中いかになりゆかむずるにかと、たどりあへる樣なり。さてしもやはにて、あづまへぞ告げやりける。

【餘りいわけたる御遊より云々】五代帝王物語に「扨是も利口にてや侍らめども、まさしくありしことなりとて、語り侍りし。主上あどなくわたらせ給ひて、近習の人・女房などを倒して笑はむとて、弘御所に滑石の粉を板數に塗りおかれたりけるに、主上あしくして御顚倒ありけるを、御犬の立ちまはり〳〵如法に吠えまゐらせけるこそ、前表にてありけれ。やがて御惱つかせ御座して、取りあへず御大事に及びけり。併し天竇の所爲なり」。

將軍(頼嗣)は、大殿(道家)の御子、今は大納言と聞ゆ。御後見は、承久に上りたりし泰時朝臣なり。時房朝臣と一所にて、小弓射させ、酒宴などして、心解けたる程なりけるに、京よりのはしり馬といへば、何事ならむと驚きながら、使召し寄せて聞くに、いとあさまし。さりとてあるべきならねば、その席より、やがて神事始めて、若宮の社にて、鬮をぞ取りける。

【時房朝臣と一所にて】吾妻鑑及び北條九代記によれば、時房は仁治元年正月二十四日に死んで居るから、この記事は誤である。

【若宮の社にて鬮をぞ取りける】五代帝王物語に「さて關東へ早馬立てて、物はいはず、衝立・障子ハタと立てて内へ入りて、こはいかにせむずる、泰時運既に極みたり。此の事を計らひ申さずして、京都の御沙汰あらば、散々の事出で來ぬべし。計らひ申さむとせば、小量の身、

にて沈み果てさせ云々　後鳥羽・土御門兩院の隱岐・阿波などの遠い海邊で崩ぜられたをいふ。○御歎どものつもり　御怨のがつもつて祟ること。○さゝめきけり　ひそかに噂をした。○御惱　御病氣。○なべてのすぢにはあらず　普通の事で起つたのではない。○いわけたる「いわく」(自カ下二)は頗是ない。あどけない。○御つぎ　御世繼。○渡らせ給はれば　あらせられぬから。○なりゆかむずるにかと「ゆかむずる」は**ユカントスル**の約。どうなることかと。○たどりあへる樣　どうすればよいかと思ひ惑ひあつて居る樣子。○さてしもやはにて　そのまゝでも捨てて置

かれないといふので。●御後見　執權職をいふ。○承久に上りたりし　承久の亂に兵を率ゐて都に上つた。○時房朝臣と一所にて　泰時が時房と一緒に。○心解けたる程なりけるに　打ち解けて面白くして居たところが。○はしり馬　早馬。急使の馬。○いとあさまし　實に案外な驚くべきことである。○さりとて云々　さればとて猶豫も出來ないから。○その席より　其の場から直。○やがて　直に。○若宮の社　鶴岡八幡宮○鬮　神鬮によつて繼體の君を定めるをいふ。●その程　その頃。○浮びたる事　浮說流言。○心のひきびき　勝手に。○いひしろふ

あるべき事にもあらず。進退谷まつたりとて、三日三夜寢食を忘れて案じけるが、何ともあれ、土御門院の御末をこそとは心中に思ひけれども所詮神明の御計らひに任すべしとて、若宮へ參りて、孔子(鬮の當字)を採りたりけるに、土御門院の宮ととりたれば、さればこそ愚意の所案相違なしと思ひて、やがて城介義景を使にて其の由を申しける」。

その程、都には、いと浮びたる事ども、心のひきびきいひしろふ。佐渡院(順德)の宮だちにやなど聞えければ、修明門院(藤原重子)にも、御心ときめきして、内々その御用意などし給ふ。承明門院(土御門院母在子)も、もしやなど、さまざま御祈し給ふ。あづまの使、都に入るよし聞えける日は、兩女院より、白川に人を立てて、いづかたへか參ると見せられけるぞ、ことわりに、げに今見ゆべき事なれども、物の心もとなきは、さおぼゆるわざぞかしと、例の口すげみてほゝゑむ。

【いづかたへか參ると見せられけるぞ云々】何方へ參るかと使をやつて

噂しあふ。○佐渡院の宮だちにや　順徳院の皇子が卽位せられるのであらうか。○心ときめき　胸さわぎで。○その御用意　皇子御卽位の用意。○もしや　萬一土御門院の皇子に定まることもあらうかで。○あづまの使　泰時から來た使。○あづまの使都に入るよし聞えける日　正月十九日。○兩女院　修明門院と承明門院。○白川に人を立てて　白川は京都の東郊。そこへ人をやつて。○いづかたへか參るとどちらの女院の御殿へ參るかと。○心もとなき　待遠く氣になる。○さおぼゆるさう思はれる。○例の口すげみてほゝゑむ　かういつて例の通り尼が口すげみてほゝゑんだと、尼の樣子をいつたのである。

●日ぐらし　終日。○待たれて　使者が。○城介　秋田城介。出羽秋田城を守る官。出羽介の兼任である。○義景　盛景の子。松下禪尼の兄に當る。○靑侍　年若く物に馴れぬ侍。○あやしげなるにしも　身分の賤しさうなものに。

シモは意味を強める助辭。○現ともおぼえず　本當と思はれない。夢のやうだ。○しかじかと　斯樣々々と。○土御門殿　承明門院の御殿。○葎つよくかため　雜草が生ひ茂つて門をとざして居る如きをいふ。○柱根　柱の土臺。○郎等　使者の家來。○とかくせさせて　いろ〳〵とさせて見せられたのは、尤もなことで、實際今直分ることではあるが、特遠しく氣になることは、誰でもさう思ふものだ。

日ぐらし待たれて、城介義景といふもの、三條河原にうち出でて、「承明門院のおはしますなる院はいづくぞ」と、かの院より立てられたる靑侍の、いとあやしげなるにしも問ひければ、聞く心地現ともおぼえず。しかじかと申すまゝに、土御門殿へ參りたれど、門は葎つよくかため、扉も錆びつき、柱根朽ちて、あかざりけるを、郎等どもに、とかくせさせて、內に參りて見廻せば、庭には草深く、靑き苔のみ生して、松風より外は答ふるものもなく、人の通へる跡もなし。故通宗宰相中將の御弟を子にし給へりし、定通のおとゞばかりぞ、何となく、自らの事もやと思ひて、

なえばめる烏帽子直衣にて候ひ給ひけるが、中門に出でて對面し給ふ。義景は、切戸のわきに、かしこまりてぞ侍りける。「阿波の院の御子、御位に」と申して出でぬ。仁治三年正月十九日の事なり。

【故通宗宰相中將の御弟を云々】定通は通宗の弟であるか、養はれて、兄の子となつて居た。その定通がの意。

世の人の心地皆驚きあわてて、おしかへし、こなた（土御門殿）に參り集ふ馬・車の響き騷ぐ世のおとなひを、四辻殿には、あさましう、なか〳〵物思しまさるべし。又の日、やがて、御元服せさせ給ふ。引入には左大臣實參り給ふ。理髮、頭辨定嗣仕うまつりけり。御諱邦仁、御年二十三。その夜、

○自らの事もやと　自然何か事があるかも知れないと思つて。○なえばめる　古びて萎えた。○中門　寢殿造りの中廻廊の中程にある門。後の玄關に當るもの。○切戸　中門の側にある小さい開き門。○物にぞあたり惑ひける　餘り意外な事に狼狽して、物に突きあたるをいふ。

●おしかへし　今までとは反對に。○世のおとなひ　世間のさわぎ。○四辻殿　修明門院の御所。○あさましう　豫期とは反して。○なか〳〵　却つて。○又の日　翌日。○やがて　直に。○引入　加冠ともいふ。元服の時、冠を被らせる役。○理髮　櫛を以て鬢を理め整へる役。○頭辨

やがて、冷泉萬里小路殿へ移らせ給ひて、閑院殿より、劔璽など渡さる。踐祚の儀式いとめづらし。その後こそ、閑院殿には、追號のさだめ、御わざの事など沙汰ありけれ。廿五日に、東山の泉涌寺とかやいふほとりにをさめ奉る。四條の院と申すなるべし。やがて、かの寺に、御莊など寄せて、今に御菩提を祈り奉るも、前の世のゆゑありけるにや。この御門(四條)未だ物などもはかばかしくの給はぬほどの御齡なりける時、誰とかや、前の世はいかなる人にておはしましけむと、只何となく聞えたりけるに、かの泉涌寺の開山のひじりの名(俊芳)をぞ、たしかに仰せられたりける。又、人の夢にも、この御門(四條)かくれさせ給ひて後、かの上人(俊芳)「われ速かに成佛すべかりしを、よしなき妄念を起し

辨官で藏人頭を兼ねた人。○冷泉萬里小路殿　四條大納言隆親の邸。○踐祚　先帝崩御又は讓位の爲、新帝の御位をつがれること。卽位は其の後改めて行はれる大禮。○その後　踐祚の後。○閑院殿　四條天皇の皇居、隨つて四條天皇をいふ。○御わざの事　御葬儀の事。○泉涌寺　山城愛宕郡。○をさめ奉る　埋葬し奉つた。○御莊など寄せ　御料の莊園を寄附せられた。○菩提を祈り　死者の佛果を得ることを祈る。○前の世のゆゑありけるにや　前世からの因緣があつたのであらうか。(この寺に葬り奉るのは)。○はかばかしく　ハツキリと。○聞えたりける　申し上げた。

て、今一度人界の生をうけて、帝王の位に至りて、かへりて我が寺(泉涌寺)を助けむと思ひしに、果してかくなむ」とぞ見えける。まことに、その餘執の通りけるしるしにや、御莊どもも寄りけむとぞ覺え侍る。

【冷泉萬里小路殿へ移らせ云々】　五代帝王物語に「今日冷泉萬里小路の御所へ入らせ給ひて、賢所・劔璽など渡しまゐらせて、踐祚の儀あり。此の御所は四條大納言隆親卿の家なり。閑院ふたがりぬる上は、清涼殿造替の程、さりぬべき所なきによりて、此の家を御所とす」。

さて、仁治三年三月十八日御卽位、よろづあるべき限り、めでたくて過ぎもてゆく。嘉禎三年よりは、岡屋の大臣(兼經)攝政にていませしかば、そのまゝに、今の御代のはじめも、關白と聞えつれど、三月廿五日、左の大臣(良實、二條殿の御家のはじめなり)にわたりぬ。この殿も光明峯寺殿(道家)の御二郎君なり。神無

○開山のひじり　開山は始めて寺を興した人。「ひじり」は僧。此僧、名を俊芿（しゅんじょう）といふ。建久十年宋に入り、在留十餘年。後鳥羽院も其の德を慕はれ、菩薩戒を受けられたことがある。嘉禎三年寂、年六十二。○成佛　死者の佛果を得ること。○よしなき　いはれのない。つまらない。○妄念　迷ひの執念。○人界の生をうけて人間の世の中に生れて。○餘執　この世に殘した執念。○通りけるしるしにや　思ひ通りになつた證據であらうか。○御莊ども云々　かうして泉涌寺に御莊を寄附せられたのは、つまりかの俊芿の餘執が望を達した結果なのであらう

月になりぬれば、御禊（ごけい）とて、世の中ひしめきたつも、思ひよりし事かはと、めでたし。大嘗會（だいじやうゑ）の悠紀方（ゆきがた）の御屏風、三神山（みかみやま）、菅宰相（くわんさいしやう）爲長（ためなが）つかうまつられける。

古へに名をのみ聞きてもとめけむ
三神（みかみ）の山はこれぞその山

圭基方（すきがた）風俗の歌、經光の中納言にめされたり。

末遠き千世の陰こそ久しけれ
まだ二葉（ふたば）なる石崎（いはさき）の松

【古へに名をのみ聞きて云々】　昔、只その名ばかりを聞いて搜し索めたあの三神山といふのは此の山であるの意。蓋し山の名のミガミ（三上）に支那の傳說なるサンシンザン（三神山）の字を當てはめて、昔の人が空しく搜し索めた仙境は實にこゝだといつたのである。三神山のことは史記（封禪書）に「自ニ威宣燕昭一使ニ人入ニ海求ニ蓬萊・方丈・瀛洲一

かの意。

●よろづあるべき限り　萬事萬端。○過ぎもてゆく　過ぎゆく。日が過ぎてゆく。○岡屋の大臣　藤原兼經。家實の子。○そのまゝに云々　そのまゝズツと攝政であるが、今上は御成年であるから、關白といつたの意。○左の大臣　藤原良實。普光院と稱し、家を二條といふ。○わたりぬ　關白職が良實に移つた。○御二郎君　御次男。○御禊とて　御禊といふので。○ひしめきたつ　騷ぎ立つ。○思ひよりし事かは　思ひもかけぬ事であるの意。○三神山　近江野洲郡三上山。○風俗歌　大嘗會の時　悠紀・主基兩國の風俗に關する歌を奉る。それ此三神山者其傳在ニ渤海中一。去レ人不レ遠。患且レ至則船風引而去。蓋嘗有ニ至者一。諸僊人及不死之藥皆在焉。其物禽獸盡白。而黃金銀爲ニ宮闕一。未レ至望レ之。如レ雲。及レ到。三神山反居ニ水下一。臨レ之風輒引去。終莫ニ能至一云。

末遠き千世の陰こそ久しけれ　まだ二葉なる石崎の松が、これからおひおひと榮えて行つて、千年の齡を重ね、生ひ茂る陰をなすは、誠に末遠いことであるの意。

當代（後堀河）かくめでたくおはしませば、通宗宰相も左大臣從一位を贈られ給ふ。御女（子）も后の位を贈り申されし、いとめでたしや。まことや、この頃右大臣と聞ゆるは、實氏のまゝ。其の御女（綸子）十八になり給ふを、女御に立て奉り給ふ。其の御女（子）十八になり給ふを、女御に立て奉り給ふ。其の御女（綸

をいふ。○爲長　菅原長守の子。文章博士。侍讀となり、參議兼勘解由長官となる。宰相は參議の異稱。○經光　藤原頼資の子。正二位中納言となる。○石崎　備中下道郡。

●通宗　後嵯峨帝は自分の女通子の生んだ方であるから帝には祖父にあたる。○めでたしや　ヤは感動の助辭。○になく　似るものなく。○清らを盡されたり　善美を盡された。○母北方　姞子の母、卽ち實氏の奥方。○隆衡　藤原隆房の子。正二位大納言となる。○さゝやかに　小さく。○愛敬づきて　愛敬があつて。○めでたくものゝ給へば　御立派な方であつたから。○御おぼえ　御寵愛。○かひがひしく　すぐれて厚く。○よろづうちあひ　萬事都合よく。○思ふさまなる世のけしき　思ひのまゝの世の有樣。○飽かぬ事なし　何不足もない。○無品親王　位階のない親王。○あやしう　身分の高からぬをいふ。○たはぶれにも　かりそめにも。○人の口安からず　例の通り口さがなくの意。○さは　さういふ風に。○とかく　いろ〳〵と。何とかかとか。○聞ゆべし　申すであらう。

ぼえいとかひがひしく、よろづうちあひ、思ふさまなる世のけしき、飽かぬ事なし。同じ年八月九日后に立ち給ふ。そのほどのめでたさ、いへば更なり。源大納言(方通)の家に、無品親王とて、あやしう心細げなりし御程には、たはぶれにも、思ひより聞え給はざりけむと、めでたきにつけても、人の口やすからず、さはとかく聞ゆべし。

【源大納言の家に無品親王とて云々】　後嵯峨天皇はもと通方の所にあづけられて居た方である。(九〇頁參照)。その頃には勿論將來帝位に上られようなどとは思ひもかけられなかつたらうと、めでたければ、めてたいで、又何とかかとか噂をするの意。

●前にも聞えつる　前にも申した。○そのかみ　以前。○源氏の中將　光源氏のこと。下註を見よ。○わらはやみ　瘧病。普通「おこり」といふ。隔日又は毎日、時間を定めて始は寒く、後には發熱するもの。○世に知らず　聞いたこともない程。○ゆゝしき　たいした。宏壯な。○この所　この北山のほとり。○伯三位資仲　伯は神祇官の長官。白川顯廣王の子。但し資仲とあるは仲資の誤であらう。○領　所領。○松枝　尾張葉栗郡黒田村。今、木曾川停車場のある邊。○莊　莊園。○換へ給ひてけり　この土地は仲資の有であつたのを自分所有の松枝と交換したの意。○ひた

第五　內野の雪（大內山）

今后(子倍)の御父は、前にも聞えつる右大臣(公經)のおとゞ、その父故公經の太政大臣、そのかみ夢み給へることありて、源氏の中將わらはやみまじなひ給ひし、北山のほとりに、世に知らずゆゝしき御堂を建てて、名をば西園寺といふめり。この所は、伯三位資仲の領なりしを、尾張の國松枝といふ莊に換へ給ひてけり。もとは田畑など多くて、ひたぶるに田舍めきたりしを、更にうちかへしくづして、艶なる園に作りなし、山のたゝずまひ木深く、池の心ゆたかに、わたつみをたゝへ、峯より落つる瀧の響も、げに涙催しぬべく、心ばせ深き處の樣なり。本堂は西園寺、本尊の如來

ぶるに　全く。○うちかへしくづして　土地を作りかへるをいふ。○艶なる　優美な。○山のたゝずまひ　山の様子。○池の心ゆたかに　只「池の水ゆたかに」といふだけの意。○わたつみなたゝへ　海の如く漫々たる水を湛へ。○涙催しぬべく　人の涙を誘ふ程趣が深い。○心ばせ深き　趣深き。○本尊　寺で主とする佛像。○如来　佛。○妙　巧みに優れたる。○生身もかくやと　如来の御本體もかうであらうかと。○いつくしう　莊嚴に。○せんしやく院　一本「ぜんみやく院」。善積院かといふ。○うち奉りて　著給ひて。○サシ　は接頭語、歩いて。○おはしたりき　お出でになつた。○寶藏　寶〻を入れる藏。○こめて　をさめて。○五大堂　不動・降三世（がうさんぜ）・軍多利（ぐんだり）・大威德・金剛夜叉の五大尊を安置した堂。○愛染王の座　さまざまぬ愛染王は明王の一。身色日光の如く、三目怒視し、六臂に杵（しよ）・鈴（りやう）・弓・箭・蓮華を持ち、火燄の中に住するもの。愛染王を本尊とする修法を僧座の冷える暇のない程連日絶えず行ふをいふ。○供僧　御修法を勤める僧。○紅梅　濃い桃色。○同じ色　其紅梅の衣と同様の色。○來迎のけしき　來迎の様子。來迎は念佛行者の臨終の際、阿彌陀佛が西方極樂淨土から迎へに來ること。○彌陀如來　阿彌陀佛。阿彌陀は無量光明又は、誠に妙なる御姿、生身もかくやと、いつくしう顯され給へり。又せんしやく院は藥師、功德藏院は地藏菩薩にておはす。池のほとりに妙音堂、瀧のもとには不動尊、この不動は、津の國より、生身の明王、蓑・笠うち奉りて、さし歩みておはしたりき。その蓑・笠は、寶藏にこめて、三十三年に一度出さるとぞ承る。石橋の上には五大堂、成就心院といふは愛染王の座さまざまぬ祕法とり行はせらる。供僧も、紅梅の衣、袈裟・數珠の絲まで、同じ色にて侍るめり。又法水院、化水院、無量光院とかやとて、來迎のけしき、彌陀如來、廿五の菩薩、虛空に顯じ給へる御姿も侍るめり。北の寢殿にぞ、おとゞ（殿）は住み給ふ。廻れる山の常緣樹どもいと古りたるに、懷しき程の若木の櫻など、植ゑ渡すとて、

大臣（おとど）（殿）うそぶき給ひけり。

山櫻峯にも尾にも植ゑおかむ
見ぬ世の春を人やしのぶと

【源氏の中將云々】源氏物語若紫の巻に「瘧病（わらはやみ）にわづらひ給ひて、よろづにまじなひ加持などまゐらせ給へど、驗（しるし）なくて、あまたたび起り給ひければ、或人、『北山になむ某寺といふ處に賢き行人（ぎやうにん）侍る。去年の夏も世におこりて、人々まじなひわづらひしを、やがてとぶむる類數多侍りき。疾くこそ試みさせ給はめ』など聞ゆれば、云々、（中略）供に睡じき四五人ばかりして、まだ曉におはす」とある。これが指したのである。

【山櫻峯にも尾にも云々】「見ぬ世」は自分の死後。自分の死後もこゝの春景色を人がなつかしみ思ふことがあるかも知れぬと思ふから、山櫻を峯にも尾にも澤山植ゑておかうの意。

かの法成寺（ほふじやうじ）をのみこそ、いみじき例（ためし）に世繼（よつぎ）もいひためれど、

無量壽命の意。○二十五の菩薩　觀音・勢至・藥王・藥上・普賢・法自在・獅子吼・陁羅尼・虛空藏・德藏・寶藏・金光藏・金剛藏・光明王・山海惠・華嚴王・衆寶王・月光王・日照王・三昧王・定自在王・大自在王・白象王・大威德王・邊身王をいふ。○虛空　空中。○顯じ　あらはれる。○寢殿　正殿。○なつかしき程の　愛すべき。○植ゑ渡す　ズラリと植ゑる。○うそぶき　口ずさむ。○尾山の裾の延びた處。又單に麓をもいふ。

●法成寺　藤原道長が奈良の東大寺に擬し、近衞の北京極の東に建立したもの。莊嚴美麗を極めたが、近古以來は跡形もない。○いみじき例に

これは猶ほ、山のけしきさへ面白く、都離れて、眺望添ひたれば、いはむ方なくめでたし。峯殿(道家)の御舅(公經)、吾妻の將軍(頼經)の御祖父にて、よろづ世の中御心のまゝに、飽かぬ事なく、ゆゝしくなむおはしける。今の右の大臣(實氏)をさをさ劣り給はず、世のおもしにて、いとやむごとなくおはするに、女御(姞子)さへ御おぼえめでたく、いつしかたゞならずおはすると聞ゆる、奥ゆかしき御程なるべし。

京には、さまざまめでたき事のみ多かるに、かの佐渡の島(頼德)には、御惱と聞えし、程なく九月十二日、かくれさせ給ひぬ。世の中の改りしきざみ、若しやなど、思しよる事どもありしも、空しう隔たりのみ果てぬる世を、いと心細う聞し召しけるに、そこはかとなく、御惱など重るやうにて、失

立派なものの例として。○世繼　大鏡。○いひためれど　いひたるめれど。○これは今度の西園寺は。○眺望添ひたれば　眺望が殊によいから　○めでたし　結構である。○峰殿の御舅云々　七六頁を見よ。○飽かぬ事なく　何不足なく。○ゆゝしく　威勢よく　○をさ〳〵　大方。○世のおもし　世の重鎭。○御おぼえめでたく　陛下の御寵愛が厚く。○たゞならず　普通でない、卽ち姙娠をいふ。○奥ゆかしき　實氏の幸運が。

●御惱　御病。○きざみ　際　○空しう　徒らに。○隔たりのみ果てぬる　世間とはすつかりかけ離れてしまつた。○そこはかとなく　何とはなし

せ給ひけるとぞ聞えし。四十六にぞならせ給ひける。いとあはれなる世の中なるべし。

【世の中の改りしきざみ云々】　四條天皇崩御の際、順德院は若しや自分の皇子でも位を繼いだらなどと思はれたが、愈〻後嵯峨天皇が卽位せられたので、失望せられたをいふ。

かくて年かはりぬれば、寛元元年と聞ゆ。五月廿六日より、最勝講始めて行はる。關白(實實)を始め、上達部・殿上人殘りなく參り給ふ。左右大將(忠家實基)の車、陣にたつるとて、爭ひのゝしりて、いみじう恐ろし。右は上首、左は下﨟にておはしければ、御前ども、かたみに犇めきて、あさましかりけり。されども、相對へて立てて後ぞ、しづまりにける。又の日は、久我の前内大臣(通光)鳥羽の御家にて、八講し給ふとて、上達部多く彼處に集ひ給ふ。おとゞは更にもいはず、

は。

●最勝講　五月中、吉日を選び、僧侶を召して、五日間清涼殿で、最勝王經を講ぜしめられること。○忠家　藤原教實の子。一音院、又九條關白といつた人。○實基　藤原公繼の子。德大寺太政大臣、又永本太政大臣といつた人。○陣　近衞の陣。○上首　上級。○御前　前驅の隨身。○かたみに　互に。○爭めきて　押しあひ爭つて。○あさましかりけり　ひどい有樣であつた。○相對へて　上下の區別を立てず向ひあはせて。○通光　源通親の子。○八講　法華八講會。法華經の問答について八座の論議ある法會。一日に二回行ひ、四日間に八卷全部を終る。○宰相中將　參議で近衞中將を兼ねた人。○檳榔毛　牛車の一種。檳榔の葉を葺いて屋上を飾つたもの。公卿の乘用。○多く　それらの人々が澤山。○高欄につき給ふ　欄干の所に居並ばれた。○ほと〳〵　殆んど。○内　内裏。○數知らず　非常に多い。○雅通　通光の祖父。内大臣正二位。○書きおき給へるもの　子孫の爲に書き遺しておいた敎訓書。○公務の日　公事勤務の日。○暇を申して　暇を戴いて。○あふべし　參會せよ。○おほやけ事の折節　朝廷に公事儀式のある時にも。○さし合せて　繰合せて。○いぶかし　疑はしい。○最勝講五卷の日

堀川大納言具實・御子の通忠の大納言・土御門の大納言顯定・通宗の三位中將・通行の宰相中將など、すべて一門の人々、檳榔毛にておはして、多く高欄につき給ふ。ほと〳〵内の御八講にも劣らず見えたり。殿上人は、まして數知らず。雅通のおとゞの書きおき給へるものに、「公務の日なりとも、暇を申して、この八講にあふべし」とかや侍るなるに、誠にかかるおほやけ事の折節も、猶ほさし合せておはし集ふ、いとやむごとなきわざなめり。猶ほ末の代には、いかゞあらむといぶかし。廿八日は、内の最勝講五卷の日にて、又人々數を盡して參り給ふ。廿九日には、法性寺の淨光明院にて、普賢寺殿（通基）の御忌日の法事あり。この御堂の莊嚴のめでたさ限りなし。まことの淨土思ひやらるゝ樣なり。此處も彼處も、この程は、尊き事のみ多く、耳ぞ多くほしかりける。

【右は上首云々】　忠家と實基とは共に正二位大納言であつたが、實基の方が先任であるから、上席でなければならぬ。然るに近衞府では、忠家は左大將で、上席でなければならぬ。隨つて席次が定まらず、爭つたのである。

【猶ほ末の代にはいかゞ云々】　かうして公務をさしおいても、公卿が參集する程の勢であるが、併しこれが末の代までも續くかどうかはおぼつかないの意。

まことや、去年より、中宮（章子）はいつしかたゞならずおはしますと。六月になりて、その程近ければ、十三社の奉幣勅使立てらる。日頃の御祈にうちそへ、世の中ゆすりさわぐ。六日より、七佛藥師・五壇の御修法など始まる。中壇は、櫻井の宮（仁覺）後鳥羽院の御子勤めさせ給ふ。今出川のおとゞにおはし

法華經の第五卷を講ずる日で第三日にあたる。○數を盡して　あらむ限りの意。非常に多きをいふ。○法性寺　鴨川の東九條、藤原忠平の建立したもの。○忌日　命日。○莊嚴　尊くおごそかなこと。○めでたき　立派さ。○淨土　極樂淨土。この穢土に對し、佛のまします清淨の國土をいふ。○この程は　此の頃は。○耳そ多くほしがりける　餘り彼方や此方で、いろ〳〵の事があるので、一つの身では足りないの意。

●たゞならず　懷姙をいふ。○その程　分娩期。○十三社　伊勢・加茂、其の他主要なる大社十三。○奉幣勅使　勅命を受けて神社へ幣帛を奉りにませば、御家の殿ばら絶えず候ひ給ふ。十日の曙より、その御氣色あれば、殿の内たち騷ぐ。白き御裝に改めて、母屋に移らせ給ふ。天下のゝしりたちて、馬・車走り違ふさま、いとこちたし。内よりも御使隙なし。寮の御馬にて、雨の脚よりも繁く走りきほふ。さらでだに、いと暑き頃を、汗におしひたしたる人々のけしき、いとわりなし。后の宮（嬉子）、いと苦しげにし給ひて、日たけゆくに、いろ〳〵の御物の怪ども名乘り出でて、いみじうかしがまし。大臣（氏實）・北方、いかさまにと、御心惑ひて、思し歎くさま、あはれにかなし。かやうのきざみは、高きも下れるも、おろかなるやはある。なべて皆かくこそはあれど、げにさしあたりたる世のけしきを取り具して、いみじうおばさるべし。内

ゆく使者。○日頃　平生。○うちそへ　加へて。○ゆすりさわぐ　大騷ぎをする。○七佛藥師　善稱名吉祥王如來・寶月智嚴音自在王如來・金色寶光妙行成就如來・無憂最勝吉祥如來・法海雷音如來・法海慧遊戲神通如來・藥師瑠璃光如來、但しこゝは七佛藥師法といつて、この七佛に安產を祈ること。○五壇の御修法　中壇に不動、東壇に降三世、西壇に大威德、南壇に軍荼利夜叉、北壇に金剛夜叉を勤請して、これに祈禱すること。○今出川のおとゞ　中宮御里第、卽ち實氏の邸。「おとゞ」は御殿の意。○おはしませば　中宮はそこに居られるからの意。四月八日からこゝに來（後嵯峨）の御乳母大納言二位殿、おとな〳〵しき內侍の典侍などゝ、さるべき限り參り給へり。今日も猶ほ心もとなくて暮れぬれば、いと恐ろしうおぼす。伊勢のみてぐらづかひなど立てらる。諸社の神馬、所々の御誦經の使、四位・五位數をつくして鞭をあぐるさま、いはずともおしはかるべし。大臣（氏實）、とりわき、春日の社へ拜して、御馬・宮（嬉子）の御衣など奉らる。

【十日の曙よりその御氣色あれば云々】　百練抄（第一五）には左の通りある。「十日乙卯。時々雨降。自二去夜一有二中宮御產氣一。宮主陰陽師等勤二御祓一。諸社有二御誦經一。又被レ進二神馬一。午後皇子降誕。禁裏無二御混合一儀一。櫻井宮（覺仁親王）常住院僧正眞尊被レ引二御馬一。醫師施藥院使經長朝臣賜二御衣一云々。入レ夜左衞門督（顯親）被レ行二御卜奏一」

內（後嵯峨）には、更衣腹に、若宮二所（宗尊・円助）おはしませど、この

られて居る。○御家の殿ばら　實氏の家の人たち。○その御氣色　御産の樣子。○白き御裝ひ　御産の時は白裝束に改めること。○母屋　寢殿の中央の間。○のゝしりたちて　喧しく言ひ騷いで。○こちたし　仰山である。事々しい。○内　禁中。○御使なまし　御使であらう。○寮の御馬　右馬寮にある馬。○雨の脚よりも　繁き樣子。○きほふきそふ　一所懸命で走るをいふ。○さらでだに　さうでなくてさへ。○汗におしひたしたる　汗に濡れ通つた。○けしき　樣子。○わりなし　如何ともし難い有樣である。○日たけゆく　日が高くなる。○物の怪　死靈・生靈など。

御事を待ち聞え給ふとて、坊定まり給はぬ程なり。たとひ平かにおはしますとも、もし女御子ならばと、まが〳〵しきあらましは、かねて思ふだに、胸つぶれて口惜し。且は、我が御身の宿世見ゆべき際ぞかしとおぼして、大臣もいみじう念じ給ふに、未のくだり程に、既に事成りぬ。先づ何にかと、心騷ぐに、宮の御兄公相の大納言、「皇子御誕生ぞや」と、いとあざやかにのたまふを、聞く人々の心地、夜の明けたらむやうなり。父おとゞ「まことか」との給ふまゝに、喜の御涙ぞ落ちぬる。あはれなる御氣色と、見奉る人も、ことといみしあへず。公相・公基・實雄、大納言三人、權大夫實藤・大宮中納言公持、皆御ゆかりの殿ばら、うへのきぬにて候ひ給ふ。御修法ども、やがて結願すべしとて、僧ど

○名乘出でて　物怪が人によつて自分の名をいふこと。○かしがまし　喧しい。○いかさまにと　どうなることかと。○きざみ　時。場合。○高きも下れるも　身分の高い者も低い者も。○おろかなるやはある　容易な事ではないの意。○なべて　すべて。○かくこそはあれ　こんなものだ。○さしあたりたる世のけしきを取り具して　「さしあたりたる」は今目のあたり見る、世のけしき」は世の中の有樣。即ちこの御産の事。「取り具す」は取り集める、取り揃へるなどの意で、こゝは身に實驗するをいふ。今現に自分が其の衝に當つて見ての意。○いみじうおぼさる　痛切に感ぜら

も法師ばらまで、したり顏に、汗おし拭ひつゝ、いそがしげに歩くさへぞめでたき。月次の御神事なる上、今日、日ついで心やましき事とかやにて、わざと奏し給はねど、御驗者櫻井の宮の僧正　覺仁法親王　を始め奉りて、次々皆祿賜ふ。法親王には、宮の御衣、大夫とりて奉り給ふ。宇治の前の僧正には公基の大納言、房意法印には權大夫公持かづけ給ふ。御馬は、各〻本坊に送られけり。又の日、月次の祭果てて、御佩刀まゐる。勅使隆良なりき。

【更衣腹に若宮云々】　既に更衣の腹に皇子が二人あるが、中宮が御懷姙遊ばしたので、若しその御子が皇子であつたら、皇太子に立てようといふので、まだ立坊の御沙汰がなかつたの意。

十二日、三夜の儀式、本宮の御沙汰にて、いとめでたし。やがて御湯殿の事あれば、弦打、五位十人、六位十人なら

れる。○おとなゝしき　老練な。○さるべき限り　相當なものは皆。○心もとなく　待遠に思ふ。○みてぐらづかひ　奉幣使。○御誦經の使　御讀經の事を諸寺に仰せつける使者。○とりわき　殊に。○春日の社　藤原氏の氏神であるから。○宮の御衣　安産を祈る爲に中宮の御衣を奉るのである。

●内　天子。○更衣腹　更衣は女御に次ぐ女官。更衣の腹に出來た子の意。○二所　御二人。○この御事　御産を指す。○坊　東宮のこと。○平かに　安産ないふ。○まがまがしきあらまし　不吉な豫想。○かれて　豫め。○胸つぶれ驚き悲しむをいふ。○且は

びたつ。御書の博士光兼朝臣・右衞門權佐資定・大外記師光など、寢殿の南面の庭に立ちて、孝經の天子の章をぞ讀む。上達部簀子にさぶらひ給ふ。朝の御湯果てて皆まかでて後、又、夕の御湯殿の儀式、前のまゝにて果てぬる後、寢殿の東南の間に、白き袖口どもおし出さる。白繪の五尺の屏風立てわたして、上達部より、すべて、饗ども据ゑわたす。公卿の座に、人々二行につきあまるほどなり。右大將實基・大夫公相・公基・實雄、以上大納言。中納言に、左衞門督顯親・權大夫實藤・公持・侍從宰相資季・別當公光・左大辨宰相經光・新宰相定嗣・右兵衞督有資・新宰相中將通行などつきたり。その座の末に、紫緣の疊に、殿上人中將實直朝臣を始めて、數知らず參れり。御前のものども、殿上の

一方には又、○宿世　前世よりの因緣、運のよしあしなどの意。○きは　場合。吾が運のよしあしの分る時だの意。○念じ　心中に祈る。○未のくだり　未の下刻、今の午後三時。○既に　全く。○事成りぬ　安産があつたの意。○何にかと　皇子か皇女かどちらかと。○皇子　後に後深草天皇と申した方。○夜の明けたらむやう　ホット一息つく樣子をいふ。○まいに　と共に。○ことといみしあへず　めでたい時に涙は忌むべきことであるが、餘りの嬉しさにこらへきれない。○ゆかりの殿ばら　因戚の人達。○うへのきぬ　袍(はう)のこと。正禮束帶の時、用ひる表衣。文武

四位運ぶ。兒御子の御衣の案二脚、階隱の間にかき立つ。御かはらけ二めぐりの後、大夫公相、朗詠「嘉辰令月」とある。御聲々宿德に、あらまほしうめでたし。かやうにて明けぬ。

【嘉辰令月】　和漢朗詠集(祝)に「嘉辰令月歡無レ極。萬歲千秋樂未レ央。」(謝偃)とあるものを指す。

【昭王】　新撰朗詠集(帝王)に「隆周之昭王穆王曆數永。吾君又曆數永。本朝之延曆延喜胤子多。吾君亦胤子多。」(藤原伊周)とあるもの。

十四日に、五夜の儀式前の如し。今宵は御遊あり。實基の大將殿德大寺拍子とり給ふ。笙宗基、笛二位中納言良教、篳篥兼敎朝臣、琵琶大夫公相、箏の琴大夫實藤、和琴有資、末の拍手も同じ人(有資)なりしにや。安名尊・鳥の破・蘇田・伊勢

官により多少製を異にし、文官のは縫腋(ほうえき)、武官のは闕腋(けつてき)といふ。○結願　滿願。○したり顏に得意げに。○月次の御神事　月次祭。六月・十二月の十一日、神今食(じんこんしき)の前に行はれる神事。○日ついで心やまし　日取りが惡い。○奏し　御安産の由を。○驗者　加持祈禱をする人。○祿引出物。○宇治の前の僧正　眞尊。眞經の子。道家の弟。眞尊には公基が取り次いで賜はつたの意。○かづけ　祝儀として與へる。○御馬　布施の御寮馬。○本坊　祈禱を依頼された寺社をいふ。○御佩刀まゐる　御護刀を皇子に渡された。○隆眞　藤原隆親の

海・萬歲樂・三臺の急、例の事なり。數々めでたし。

十六日、七夜の御産養、內よりの御沙汰なれば、今少し儀式ことにて、いかめし。關白殿(眞實)・右のおとゞ(實氏)・右大將具實・大納言定雅・公相・公基・實雄。中納言には、例の人々、顯親・實藤・公持・資季・公光・經光・定嗣・三位中將通成・殿上人頭中將繼より始めて、殘るは少し。勅使藏人侍從宗基、目錄持ちてまゐれり。大夫(公相)對面し給ひて、白き御衣かづけ給ふ。本宮の者どもにも、內より祿賜ふ。內膳司參りて、うるはしき作法にて、南殿より御膳まゐるさま、日頃のには似ず、けだかうめでたし。その後、御遊始まる。人々の所作、さのみは珍しげなくてとゞめつ。

【安名尊】　催馬樂呂の歌。「あなたふと、〳〵、今日の尊さや、古へも、

子。

●三夜の儀式　產後三日目の產養(うぶやしなひ)、卽ち出產祝の宴。○本宮　中宮。○沙汰　催し。○御湯殿の事　御產湯をいふ。朝夕二回行はれる。○弦打　寃物などを拂ふため、矢をつがへず、只弦を引張つて音を立てること。こゝはそれを行ふ人で、御產湯の間に行ふのである。○御書の博士　御湯を使はれる間本を讀みあげる役。○簀子緣側。○まかでて　退出して。○前のまゝにて　朝の時と同樣にして。○白き袖口云々　女房達が白裝束の袖口を簾の下から出すをいふ。○白繪の五尺の屏風　胡粉(ごふん)で繪をかいた屏風。五尺はその

ハレ、古へも、かくやありけむ、今日の尊さ」。

【鳥の破】「鳥」は左樂の童舞の一種。「破」とは拍子の緩急により、曲を序・破・急の三に分つた中の一。序は始めて聲を作すこと、破は破碎で、曲の漸く繁聲に至ること、急は流蕩。○次の「三臺の急」の急といふも是れである。

【席田】　催馬樂呂の歌「席田のや、席田の、伊津貫川にや、住む鵜の、伊津貫川にや、住む鵜の、住む鵜のや、住む鵜の、千歲ありてぞ、遊びあへる」。

【伊勢海】　催馬樂律の歌。「伊勢の海の、〳〵、清き渚の潮間に、莫鳴榮貝や拾はむ、玉や拾はむ」。

【萬歲樂】　唐樂。平調。歌舞音樂略史(上)に「隋の煬帝、大樂令白明達をして作らしむ。傳來詳ならず。一說に、則天皇后の作る所の鳥歌萬歲樂なりとあれど、これは盤涉調なれば、別曲たること明らけし」。

【三臺】　唐樂。平調。同書にいふ「又名天壽樂。則天皇后の作にして、大上是成此の朝に傳來す、といへり。按ずるに、漢の世に三臺曲あること、

高さをいふ。○饗　饗宴の膳部。○二行　二列。○つきあまる　座につききれない。○紫縁の疊　紫の絹で縁をした疊。四位・五位・殿上人から地下まですべて用ひるもの。○御前のものども　皇子の御膳部。○殿上の四位　昇殿を聽された四位の人。○御衣の案　御衣をのせる臺。○階隱の間　寢殿造で、階の雨にぬれぬ爲、その上に設けた廂を階隱といひ、その階段を上つた所、廂の中央部を階隱の間ともいふ。又日隱の間ともいふ。○かき立つ　カキは接頭語。たゝ「立てた」の意。○かはらけ　盃。○二めぐり　二回まはる。○朗詠　詩文中の佳句に節を附けて歌ふこと。○嘉事物起原に見え、宋の太宗の時、百官の宴に三臺曲を作ると文獻通考に見ゆ。本朝傳ふる所、多くは唐の世の樂なれば、今傳ふる所の三臺は、則天皇后の作といふものなるべし」。（「急」は「破」の所を見よ）。

九夜は承明門院（在子）よりの御沙汰なれば、それもいかめしき事どもありしかど、うるさくてなむ。こゝらの年頃、おぼしむすぼほれつる女院（承明門院）の御心の中、名殘なく胸あきて、めでたく思さるゝ事限りなし。閑院殿修理せらるゝほどとて、十五日に、御門（後堀）、承明門院へ行幸なれば、いとゞしげうさへ見奉らせ給ふに、御心ゆく事多く、げにいみじき老の御榮えなりかし。覺子内親王とて、御傍におはしましつる御孫、これも土御門院の姫宮さへ、この廿六日かとよ、院になし奉らせ給へり。正親町の院と聞ゆ。上（後堀）の同じ御腹におはすれば、よろづ定通の大臣事行ひ給ふ。院

長令月　元三・上巳・端午等めでたい時節。○樂未央　歡樂の盡きないこと。○幣加へらる　之に和して歌はれた。○おし重れて出さる　重れて歌ひ出された。○宿德　おちついて重々しいこと。○あらまほしう　理想的などの意。○かやうにて明けぬ　かういふ風で夜が明けた。

❽五夜の儀式　産後五日目の夜の產養。○御遊　管絃の御遊。○拍子　長さ一尺二寸、笏に似た木片。之れを兩手に持ち、拍つて音樂の調子をとる。○笙篳篥　笙は樂器の名。匏（今は桐材）を切つて、其の中に十三又は十七、或は十九の管を立て並べ、吹いて鳴らすもの。「篳は宗基が吹號のさだめ侍るまゝに、陣より、上達部、皆引き連れて、承明門院へまゐる。大臣（定通）は、御簾のうちにて、女房の事どもなど、忍びやかにおきての給ひけり。

【覺子内親王とて云々】覺子内親王といつて、承明門院の御側に居られる方があつた。これは承明門院の御孫、卽ち土御門院の姫宮であつたが、この方さへ、この二十六日であつたか、院になし奉られたの意。女院小傳に「寛元元年四月二十七日爲二内親王一。（是以前御出家）。同日准三宮。六月二十六日院號。」とある。○萬事定通の取行つたわけは、左の如き關係になるからである。

通親
- 定通
- 承明門院―土御門―後嵯峨
- 正親町院

その夜また兵衞内侍の御腹の若宮（宗尊親王の御事なり）御五十日の儀式この院（承明門院）にて沙汰あり。后腹の御子ほどこそおはせねど、これも、御門（後堀）、わたくしものに、いといとほしう

きしの意。以下の語同樣。○簫笛　笛の一種。表に七孔、裏に七孔あり、葦の葉を上端にさし入れて縱に吹くもの。○箏の琴　十三絃のもの。即ち今日の所謂コト。○和琴　六絃のもの。○末の拍子　樂曲を前後の二部に分ち、後の部を末といふ。○例の事なり　いつもの通りである。

●内　朝廷。○いかめし　嚴蕭。○殘るは少し　大抵の人が皆出たの意。○目錄　賜ふ祿の目錄。○對面　宗基に。○かづけ給ふ　使者に。○本宮の者ども　中宮方の人々。○內膳司　宮內省に屬し、供御のことを司る職。○うるはしき作法にて　作法正しく。○南殿　紫宸殿。○日頃のにおぼす事なれば、御氣色に隨ひて、上達部・殿上人、いみじう參り集ふ。關白殿(實)參り給ひて、くゝめ奉り給ふ。陪膳通成三位中將、役送家定朝臣仕うまつりける。人々の勸盃・饗などはなし。建久に、土御門院の御五十日きこしめしける例とぞ。

【后腹の御子ほどこそ云々】「后腹」は皇后の御腹から生れた御子。即ち常に愛せられたからの意。

かくて中宮(子)の若宮(後深草)は、その二十八日に、親王の宣旨あり。さて七月二十八日に、中宮(子)も、今宮(後深草)も、內に參り給ふ。例の事なれば、彼方此方の供奉、上達部・殿上人、數を盡して、古き例も、いと稀なるほどにぞ聞えける。宮(宮)は御輿、御子(後深草)は靑絲毛の御車、近衞大將・檢非違

す　內裏よりのであるから、又格別で。○けだかう　「けだかく」の音便。○所作　しわざ。○さのみは云々　また例の尼の語。珍しくもないから、さう一々くはしくいふのは止めるの意。

●承明門院　土御門院の御母今上の御祖母。新皇子には曾祖母に當られる。○うるさくてなむ　煩はしいから省略すると、例の尼の語。○こゝらの年頃　長年の間。○おぼしむすぼほれつる　御氣の晴れなかつた。即ち土御門院御讓位以來、氣のムシヤクシヤして居られた。○名殘なくスツキリと。○胸あきて　氣が晴れて。○閑院殿　當時の皇居。○ほど　間。○承明門

使の別當をはじめて、ゆゝしき人々仕うまつらる。こよなき見物にてぞ侍りける。後の七月二日、內にて皇子の御五十日きこしめす。藏司より、事ども調じてまゐる。御膳の物・屯食・折櫃の物、何くれ、心ことなり。時なりて、上(後嵯峨)此方に渡らせ給ふ。御供に關白殿(實)、堀川大納言具實・大夫公相・左大將忠家・關白の御子の三位中將(通)參り給ふ。上くくめ奉らせ給ふさま、いとゝくめでたし。同じ事のやうなれば、こまかには書かず。

かくて八月十日、すがやかに太子にたち給ひぬ。後の深草院の御事なり　おとゞ(兵實)御心おちゐて、涼しくめでたう思す、理りなり。「大方かのいみじかりし世のひゞきに、女御子にておはせましかば、いかにしほ〳〵と、口惜しからまし。いときら〳〵

院へ　こゝは承明門院の御殿なり。○しげう　「しげく」の音便。度々。○見奉らせ　後嵯峨帝に對面あらせられる。○心ゆく　滿足する。○覺子内親王　後嵯峨帝の同母姉。早く出家して法名を眞如覺といつたが、後嵯峨御位後内親王となり、三宮に准ぜられた。弘安八年薨ず、年七十三。○同じ御腹　同じ母より生れること。○定通　後嵯峨帝には大伯父にあたる人である。下註參照。○院號のさだめ云々　その正親町院の院號を議定する爲。○陣　陣座（ぢんのざ）。朝廷で神事・節會・任官叙位等の公事を行はれる所。○皆引き連れて　皆うち揃つて。○女房　正親町院に奉仕すべき女官。○おきて　おきつ（タ、下二）。定める。

●兵衛内侍　左中辨平棟範（むねのり）の女。○御五十日の儀式　産後五十日目の御祝。○沙汰あり　催された。○わたくしもの　特に大切に思ふもの。○いとほしう　かはゆく。○御氣色に隨ひて　帝の御機嫌を伺つて。○いみじう　澤山。○くゝめ奉り　くゝむ（他、マ下二）は口中に含めて食はせる。供御を御口に含めて奉るをいふ。○陪膳　供御を奉る時伺候する人。即ち給仕人。○役送　膳部を陪膳に取り次ぐ役。○勸盃　盃をさして酒をすゝめること。○饗應　○土御門院の御五十日　土御門院の御降誕は建久六

しうて、さし出で給へりし嬉しさを思ひ出づれば、見奉る毎に、涙ぐまれて、忝けなう覺え給ふ」とぞ、年たくるまで、常はおとゝ（兵實）、人にもの給ひける。中頃はさのみしもおはせざりし御家の、近くよりは、殊の外に、世にも重く、やむごとなう物し給ひつるに、この后の宮（子）參り給ひ、春宮（皇儲）生れさせ給ひなどして、愈榮えまさり給ふ。行末推し量られて、いとめでたし。父の入道殿（公）さへ御命長くて、かゝる御末ども見給ふも、さこそは御心ゆくらめと、推し量るもしるく、その年の十月七日かとよ、都を立ちて、熊野に詣で給ふ。作法のゆゝしさ、昔の古き御代の御幸どもにも、稍たちまさる程にぞ侍りし。御子・孫ひき具し給ふ。大納言に實雄御子・公相御孫・公基、前藤大納言・とありしは、

爲家の事にや。坊門前大納言（忠）も、追從（つゐしよう）に、京出は扈從（こしよう）せられたり。大宮中納言公持・左宰相の中將實任・右兵衛督有實、殿上人は三十餘人侍りけり。いといみじかりし事どもなり。

【中頃はさのみしも云々】四圓寺家（一五五頁參照）は九條右大臣師輔の十男、太政大臣公季の支孫、三條權大納言公實の四男、大宮權中納言通季より出たもの。系圖の示す通り公通までは皆中納言、大納言で、大臣になつたのは實宗が始めてである。そして公經に至つて、遂に太政大臣となり、その子の實氏も同じく太政大臣となつた。それをいつたのである。

- 公季（閑院家祖・太政大臣）
  - 實成（中納言）
    - 公成（權中納言）
      - 實季（大納言）
- 公實（大納言）
  - 通季（中納言）
    - 公通（大納言）
      - 實宗（內大臣）
- 公經（太政大臣）
  - 實氏（太政大臣）
    - 公相（太政大臣）
      - 實兼（太政大臣）

年十二月二日であるから、御五十日は翌年一月のことである。●親王の宣旨　親王の稱號を許されるみことのりの下ること。○内　禁中。○供奉　お供。○古き例も云々　從來にも殆ど例のないほど盛んであつたの意。○青絲毛の御車　青い絲で蓋から葺き下した車　皇后・中宮・東宮・准后・攝政・關白等の乘用。○ゆゝしき人　歷々の人。○仕うまつらる　御供せられた。○こよなき　格別な。○後の七月　閏があつたので、七月が二つ續きその第二の七月、卽ち閏七月をいふ。○きこしめす　籠される。○藏司　内藏寮（くられう）のこと。中務省に屬し御服・御膳の事など掌る所。

かくて、同じき十一月十一日は、土御門の院の御十三年とて、おほやけより御法事行はるゝも、いとめでたし。金原にて御八講あるべければ、承明門院も、かねてより渡らせ給ふ。上達部・殿上人參り集ふ樣もこよなし。

十二月一日は、石清水の社に行幸あり。當代には始めたる度なれば、よろづ淸らをつくさる。文治・建久の例をまねばる。關白殿（實）御馬にて仕うまつり給ふ。瀧口十二人、馬ぞへに具し給ふ。いろ〳〵の綾錦、目もかゞやくばかり立ち重ねたり。左右の大將（忠家實基）の番長、又心も詞も及ばずいどみつくしたり。左大將（忠）のは馬にて前行、右大將（基）のは張綱にて、うつしの馬を引かせけるとぞ。左大將（忠）は、紅梅の二重織物の半臂・下襲、萌黃の織物の表袴、右大將（基）は、

○事ども　御膳部をいふ。○調じ　作りとゝのへる。○屯食　下々のものに賜ふ握飯のやうなもの。○折櫃の物　折櫃は檜の片木（へぎ）を折りまげて作つたもの。菓子などを入れる。物はその中に入れた物である。○心ことなり　格別である。○時なりて　時刻となつて。○同じ事のやう云云　記者の言。●すがやかに　滯りなく。○心おちゐて　心が落ちついて。○涼しく　心中さつぱりとして。○理りなり　尤もなことである。○いみじかりし世のひゞき　御產の時、世間で喧しく評判したをいふ。○しほ〳〵と　張合ひなく。○きら〳〵しう　光り輝

裏山吹の半臂・下襲、左衞門督（實）は、梅襲の浮織物の半臂・下襲・浮紋の表袴、殿上人は、花山院の中將通雅の君ばかりぞ、萌黃の表袴、裏山吹の半臂・下襲著給へりける。その外は異なるも見えず。御社にての片舞は、例の上達部も立たれけり。笛二位中納言（教）、拍子左衞門督（親）など勤めら れけり。數々めでたくて、又の日午の時ばかりにぞ、歸らせ給ひける。

同じ五日、やがて賀茂の社に行幸し給ふ。關白殿（實）、今日も御馬なり。上達部・殿上人、先にいたく變らず。別當通成いみじうきらめかれたり。けさうじ給へるをぞ、「若き人なれども、檢非違使の別當、白きものつくる事やある」など、古き人うちさゝめきけるとかや。春宮大夫（公相）馬添八人具

くやうに。卽ち玉のやうな皇子の生れ給ふをいふ。○さし出で　生れられる。○見奉る　皇子を。○忝う　勿體なく。○年たくろ　年がよる。○さのみしも　それほどにも。官位の高からぬをいふ。シモは只強めるだけで、特別の意味はない。○御命長くて　公經この時七十三歳。○御心ゆくらめ　御滿足であらう。○推し測るもしるく　「しるく」は著しく。他から推し測ることも下の熊野詣のことでよく分るの意。○熊野　紀伊牟婁郡。○作法のゆゝしさ　旅立の樣の立派なこと。○御幸　上皇のみゆき。但しこゝはその熊野詣でを指すのであらう。○ひき具し　ひき連れ。大納言

し給ひけり。權大納言實雄・土御門大納言顯定・權中納言公親・同顯親・左衞門督實藤など、いづれも清らにめでたし。殿上人、中將には實久の朝臣・爲氏・實春・經定・顯良・基雅・通雅・通定・定平・實直・師繼・雅繼・輔通・雅家・雅忠、少將には隆兼・公直・季實・爲敎・忠繼・輔時・顯方・惟繼・公爲・資平朝臣・信通など、我劣らじと、華族も下﨟も、心ばかりはいどみつくしたり。申の時に、先づ下の宮に行幸、暮れ果て、上の社に詣でさせ給ふ。賞行はれなどして、還御は明方にぞなりにける。霜いと白きに、たてあかしけざやかにて、舞人の袖かへる程も、いと面白くぞ侍りける。

【若き人なれども檢非違使の別當云々】通成は中院通方の子。この時丁度二十であつた。併し檢非違使の別當は今日の警視總監のやうなもの

に實雄云々　その連れて行かれた人の中、大納言にはこれこれの人があるの意。○前藤大納言　藤原氏の人で、前に大納言であつた人の意。○爲家　藤原定家の子。仁治二年權大納言に任ず。續後撰集及び續古今集の撰者。○追從に　機嫌取りの爲に。○京出　京の町を出ること。○扈從つき從ふこと。○いみじかりし事　盛んな事。

●十三年　十三回忌。○おほやけ　朝廷。○金原　山城乙訓郡。土御門院の御納骨の法華堂がある所。○八講　法華八講。○かれてより　隱れ。○當代　この御代。後嵯峨の御代を指す。○始めての　行幸。○清ら　善

であるから、それが白粉などをつけてめかすのは、以ての外だと諷つたのである。但し當時は若い者の白粉つけるのは、普通のことであつた。只檢非違使別當であるから、特に非難したのであらう。

この行幸過ぎぬれば、天下の騷ぎ、少しのどまりぬべきにやと見えつるに、明くる日十二月六日又仁和寺御室(守覺法親王)准后觀音寺にて灌頂し給ふとて、世の中のゝしるさま、いとはしからぬまで響きあひたり。この御室をば、代々、親王こそ傳へ給ふめれど、峯殿(道覺)世を御心に任せたりし頃より渡り給ひて、母上の西園寺入道殿(公經)の御女に准后をさへ讓り給ふとか聞えて、いとゆゝしき御人がらなれば、受法の儀式までぞ世に珍らかなりける。入道殿下(公經)先づ渡り給ひて、佛母院におはす。關白殿(實氏)は御兄なれば、ましておはします。右大臣殿(實雅)・左大將(家忠)、心ことにて參り給ふ。時な

美。○文治建久の例　後鳥羽天皇文治三年と建久七年との石清水行幸を指す。○仕うまつり給ふ　御供せられた。○瀧口　藏人所に屬し、禁中を護る武士。○馬ぞへ　乘馬の人につきそうてゆく從者。**ウマゾヒ**ともいふ。○左右の大將　左近衞右近衞の大將。○番長　隨身の長。○心も詞も及ばず　この上なく。○いどみつくしたり　華美を競うて居る。○左大將のは　左大將の番長は。○張網　手綱で馬の口を左右へ引張つて行くこと。○うつし馬　移鞍（うつしぐら）を置いた馬。移鞍は唐鞍を寫す意ともいふも又御幸鞍を寫す意ともいふ。兎に角一種の飾鞍である。○

りて、大阿闍梨二品法親王（道深）輿にて渡り給ふ。喜多院の南の門より、上達部・殿上人步み續きて、そこら參り集ふ。吉田中納言（經長）・二條の中納言（忠高）・侍從宰相季（資）・藤宰相（經）・左宰相中將（實任）・左大辨（經光）・新宰相（經定）、皆列をひき、受者（勝法）も砌に下り立ち給へる、いと若う美しうて、地藏菩薩に似給へるを、入道殿（經）いとかなしと見奉り給ふ。紫の袈裟に、香爐持ちて渡り給へば、もとより並び立てる上達部、皆禮を致す氣色、やむごとなく見ゆ。關白（實）・左大將殿（忠）などの御隨身ども、えもいはずきらめきて、階のもとに、たてあかし白くして、並み居たるけしき、めだたく面白し。傳法の樣は、人見ぬ事なれば知らず。敎授は良惠僧正つとめられけり。かくて事果てぬれば、後朝の儀式尙ほいみじ。法親

紅梅の二重織物　紅梅は桃色の濃いもの。その織物に縫取したるをいふ。○半臂　袖の幅極めて狹く、丈の短い衣。束帶の時、袍と下襲（したがさね）との間に著るもの。○下襲　半臂の下に著るもの。後に引きする長い裾がついて居る。○表袴　大口の上に著する袴。○裏山吹　表黃、裏濃き山吹。又一說表黃、裏紅。○梅襲　表濃き紅、裏紅梅。○浮織物　細かい模樣な地の上に浮かせて織つたもの。○浮紋　緯絲に經絲をからませず、浮かせて織つた綾。○異なる。特にいひたてる程の服裝。○片舞　東遊（あづまあそび）で、求子（もとめこ）と駿河舞とを合せて諸舞（もろ

王（覺）の御布施、被物（かづけもの）五かさね（このうち一つは織物）・御法服（ほふふく）一具・鈍色（どんじき）一具、包物（つつみもの）は絹十疋・綿一包、關白殿（實）とりて奉り給ふ。次々の衆僧には、大中納言程々に隨ふべし。導師の布施（ふせ）、久安・仁安など、又、建曆・寬喜などの度（たび）は、別當とりたりけれども、今日はその人まゐらねば、忠高の中納言とりたり。殿上人は廿餘人參る。萬の事、人がらと見えて、いとめでたし。かやうの事どもにて、今年も暮れぬ。

【灌頂】加持した法水を頭上に灌ぐ式。密法を授ける時行ふもの。もと印度の諸王が國事を太子に委する時、四大海の瀉水を、その世子の頂に灌いだ事に由つたものだといふ。

【母上の西園寺入道殿の云々】母上、卽ち西園寺入道公經の御女でおはする人が、この法助にその淮后を讓られたといふことでの意。「御女におはするが」などの略語と見るか、さうでなければ衍と見るより外なからう。何にしても分り

にくい句である。○淮后　三宮、即ち太皇太后・皇太后・皇后の年給と等しき年官（掾一人、目一人、内官一人）年爵（五位一人）を給はるもの。即ち三后の待遇を賜はるもの。淮三宮（じゆさんぐう）といふ。

【傳法の様は人見ぬことなれば知らず】　かうしていろ〳〵くはしく書いてあるが、傳法の様だけは見ないから分らないと、これも一寸尼の語を挿んだのである。

【道師の布施久安・仁安など云々】　近衛天皇久安三年四月十日、覺性法親王、六條天皇仁安三年四月十二日、守覺法親王、順德天皇建暦二年十二月六日、道助法親王、後堀河天皇寛喜二年十二月九日、道順法親王、いづれも仁和寺觀音院で御灌頂があつた。それを指す。

又の年寛元二年、あづまの大納言頼經の君、一年二歳にて下り給ひし峯殿（道家）の御子ぞかし、惱み給ふよし聞えしが、御子の六になり給ふに譲りて、都へ御還りと聞ゆ。若君は、その日、やがて將軍の宣旨下され、少將になり給ふ。頼嗣

まひ）といひ、求子だけ舞ふを片舞といふ。○立たれけり　立つて舞はれた。○午の時ばかり　正午頃。

●やがて　直又。○いみじうきらめかれたり　大變裝ひ飾つて居られた。○けさうじ　化粧ず（サ變）。紅・白粉などつけること。○白きもの　おしろい。○さゝめき　さゝやく。○殿上人云々　殿上人の中、中將には誰々、少將には誰々などの意。○華族　攝家につぐ家柄。大臣大將を兼れ、太政大臣まで進み得るもの。清華ともいふ。○下臈　身分の低いもの。○心ばかりは　外は兎に角、心中では。○申の時　今の午後四時。○下の宮　所謂下賀茂。今、山

城愛宕郡賀茂村糺森にある官幣大社。○上の社　上賀茂、鴨山麓にあるもの。○賞　人人に位階を賜ふこと。○たてあかし　松明（たいまつ）。○けざやかに　明かに。○舞人　東遊を舞ふ人。○袖かへる程　舞ふ樣。

●天下の騒ぎ　行幸など人々の騒ぎ立てる事柄をいふ。○のどまりぬべきにや　靜まり落ちつくであらうか。○御室　仁和寺の長。法助は道家の五男。母は太政大臣公經の女○觀音寺　仁和寺の内にあるもの。觀音院といふ。○のゝしる　喧しく言ひ騒ぐ。○けしからぬまで　怪しきまで。驚くばかり。○響きあひたり　騒ぎ立てた。○世な御心に

と名のり給ふ。泰時朝臣も、一昨年入道して、孫の時頼の朝臣に世をば譲りにしかば、この頃は、天の下の御後見は、この相模守時頼の朝臣仕うまつれり。いみじうかしこきものなれば、めでたき聞えのみありて、兵士も靡き從ひ、大方世も靜かに、治まりすましたり。

【あづまの大納言頼經の君云々】　關東の將軍頼經、即ち或年二歳で彼方へ下られた、あの道家の御子だ。それが病氣にならられたといふ話なのその意。

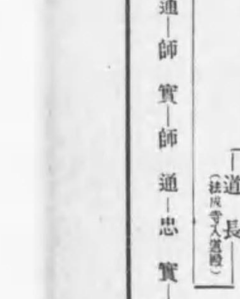
かくて寛元も四年になりぬ。正月廿八日、春宮（後深草）に御位を譲り申させ給ふ。この御門（後深草）も、亦四にぞならせ給ふ。めでたき御例どもなれば、行末も推し測られ給ふ。光明峯寺殿（道家）御三郎君、左大臣實經の大臣、御年二十四にて攝政し

任せ　世の中の事を總て自分の思ひ通りに處理する。○渡り給ひ　この寺へ來て。○暦仁元年四月入室。○ゆゝしき　一通りならぬ。○受法の儀式　弟子が師匠から密法を授かる時の儀式。○佛母院　仁和寺の中にあるもの。○心ことにて　心持も格別で。○時なりて　時刻となつて。○大阿闍梨　「阿闍梨」は梵語Ācārya の略。軌範師又は正行と譯す。灌頂を授くる師僧をいふ。○二品法親王　二品は親王の位階の第二。法親王は、出家後、親王宣下のあつた方。○道深　高倉帝第二皇子。○喜多院　仁和寺の中にあるもの。○そこら　澤山。

給ふ、いとめでたし。御兄の福光園院殿(實)、もと關白にておはしつる、恨みてしぶ〳〵におはしけれど力なし。御同胞三人まで攝籙し給へるためし、古くは謙徳公(伊尹)・忠義公(兼通)・東三條大入道殿(兼家)、その又御子ども中關白殿(道隆)・粟田殿(道兼)・法成寺入道殿(道長)、これ一度なり。近くは法性寺殿(忠通)の御子ども、六條殿(基實)・松殿(基房)・月輪殿(兼實)、これぞやがて今の峰殿(家通)の御祖父よ。かやうの事、いとたま〳〵あれど、粟田殿も、宣旨かうぶり給へりしばかりにて、七日にて失せ給ひにしかば、天下執行し給ふに及ばず。松殿の御子師家の大臣、夢のやうにて、而も一代にて止み給ひにき。いづれも御末まではおはせざりしに、この三所の御後のみ、今に絶えず。御流れ久しき藤なみにて、立ち榮え給へるこそ、類ひなきやむごとなさなめれ。末の世にもありがたくや侍らむ。今の攝政殿(實經)をば、後には圓明寺殿とぞ聞ゆめりし。一條殿の御家のはじめなり。攝政にて二年ばかりおはしき。

【めでたき御例ども云々】後鳥羽・土御門兩帝とも四つで卽位せられ、めでたく榮えられたから、この後深草も矢張り彼の兩帝と同じく榮えるであらうと、思はれるの意。

【謙徳公・忠義公云々】系圖で示せば左の如くなる。



○列をひき　列をつくつて。○砌　軒下又は階下の石だたみの所。○いと若う　法助この時十七歳。○地藏菩薩に似給へる　端正柔和な容貌をいふ。○かなし　かはゆし。○氣色　樣子。○やむごとなく　尊く。○御隨身　護衛の爲官より給はる兵士。○きらめきて　美しく飾りたてて。○たてあかし白くして　松明を明るくともして。○めだたくめだたし(形)。目立つて見える。○傳法　灌頂して密法を授けること。○教授　教授師。又教授阿闍梨といふ。受戒者に戒法を授くる人。○東惠僧正　關白兼實の子。○後朝の儀式　翌日行はれる儀式。○いみじ　盛んである。○布

施　僧に贈る物。法親王への御布施はの意。○被物　祝儀として與へる物。○五かされ「かされ」は衣服など、たゝんだものを數へる語。○法服袍裳(はうも)のこと。正しくは袍服(法服は Hōfuku 袍服は Hōhaku)と書く。僧服の一種。俗の束帶に當るといふ。○一具　一揃。○鈍色　僧服の一種。灰色のもの。俗の狩衣に當るともいひ(海人藻介)、又直衣に當るともいふ(法中裝束抄)。○疋　布帛二段を單位として數ふる語。○大中納言　大中納言が取つて授けたの意。○程々に隨ふべし　その人の身分によつて、それぞれ被物があつたの意。○道師　敎授を指す。○別當　檢非違使別當。○人がらと見えて　何でもその人柄によつて趣の異なるものと見えての意。

●一年　或年。○惱み給ふ　病氣になる。○讓り　將軍の職を。○やがて　そのまゝ直○入道して　佛門に入つて。○天の下の御後見　執權職をいふ。○めでたき聞え　よい評判。○治まりすましたり　よく治まつたの意。

●恨みてしぶ〳〵に云々　自分が攝政にならうとして、なれなかつたのをいふ。○攝籙攝政。○これ二度なり　兄弟三人揃つて攝關たりしは古くは伊尹等、次に道隆等で、これその第二回であるの意。○これぞやがて　これ卽ち。

【謙德公】藤原伊尹。師輔の子。攝政太政大臣正二位に進み、天祿三年薨ず、年四十九。正一位を贈らる。

【忠義公】弟兼家と攝關を爭ひ、遂に天皇に强奏して伊尹に代る。又病となつては、わざと左大臣藤原賴忠(賴實の子)をすゝめて關白とし、兼家の望を絶たうとした。貞元二年薨ず、年五十三。

【東三條大入道殿】早くより兄兼通と權を爭ひ、一時は振はなかつたが兼通の薨後、遂に志を得て、淮三宮關白となり、その東三條の邸宅は實に清涼殿に擬したものである。正曆元年薨ず、年六十二。

【中關白殿】兼家の子。正曆元年兼家が病のため罷めたので、代つて關白となり、尋で攝政となる。長德元年薨ず、年四十三。

【粟田殿】華山天皇を欺いて位を去らしめ、一條天皇を立てて、自ら攝政となり、後又關白となる。正曆五年薨ず、年三十五。

【法成寺入道殿】一條・三條・後一條・後朱雀の四朝に歷仕し、攝政・關白、太政大臣となり、榮華を極めた。萬壽四年薨ず、年六十二。世に法成寺入道又御堂關白といふは法成寺を造營したからである。

【法性寺殿】忠實の子。元永二年關白となつた後、四世に歷仕して、或は攝政となり、或は關白となり、或は太政大臣となる。長寬二年薨ず、年六十八。

【六條殿】二條帝卽位の時、關白氏長者となる。時に年十六。其の後永萬元年攝政となり、翌仁安元年薨ず、年二十四。

【松殿】仁安元年基實の薨後、攝政氏長者となり、尋で太政大臣に任じ、關白となる。寬喜二年薨ず、年八十七。

【月輪殿】文治二年攝政、尋で太政大臣、建久二年關白となる。承元元年薨ず、年六十。

【師家の大臣夢のやうにて云々】百練妙(第十)によれば、「壽永二年十

一月二十一日。權大納言師家卿（年十一）任二内大臣一。可レ爲二攝政藤氏長者一之由宣下。とあり、次に又「三年（元暦元年）正月二十二日壬子。攝政（師家）停二止氏長者一。如レ元以二基通一可レ爲二攝政一者。」とあるから、攝政たる間の極めて短かつたのないつたのであらう。○師家　八歳權中納言、十二歳内大臣。攝政氏長者となり、暦仁元年薨ず、年六十九。

【御流れ久しき藤なみにて】「藤なみ」は「藤波」にて、その蔓のしなひなびくより云ひいふ語。字は古くより「藤浪」と書くが、本來は浪の意はなく、只藤の花のことである。併しこゝは「浪」の字の意から「流」「立つ」と二つの縁語を用ひたのである。

女院（後嵯峨院中宮）の御父（實氏）も、太政大臣になり給ひて、牛車ゆり給ふ。さるべき事といひながら、いとめでたし。その頃、北山の花の盛りに院（後嵯峨）に奏し給ふ。その花につけて、

朽ち果つる老木に咲ける花櫻
身によそへても今日はかざさむ

○宣旨かうぶり給へりしばかりにて　關白の宣旨を蒙つたばかりで七日で死んだ。で世に七日關白といふ。○天下執行し給ふに及ばず　天下の政を執るまでに至らなかつた。○御流れ久しき藤なみ　藤原氏の末長く榮えるをいふ。○やむごとなき　尊き。○なめれ　メレは助動詞メリの已然形。であらうの意。○末の世にも云々　末の世にも珍しいことであらう。○今の攝政殿　實經。道家の子。弘安七年薨ず、年六十二。圓明寺と號し、家を一條といふ。一條家の始祖である。

●牛車ゆり給ふ　「ゆる」は許さる。牛車で參内することを許される。寛元四年三月のこと。○さるべき事といひながら　當然の事とはいふものの　○北山　西園寺殿。○院に奏し給ふ　實氏が。○身によそへても　「よそふ」（ハ、四）は「寄す」の延言。なぞらふ。くらぶ。我が身に寄せ比べても の意。○御返し　院の返歌。○口惜しけれ　尼の語。

●御即位御禊　寛元四年三月十一日御即位、同年十月二十四日御禊。○大嘗會　同年十一月二十四日のこと。○信實朝臣　信實朝臣といひし云々　といふ歌人の女で、少將内侍と呼ばれる人がの意。○大内　禁中。○女工所　大嘗會の時、悠紀・主基兩方に臨時に設けられる司。○日頃　數日來の意。○いかめしう　盛ん

御返しを忘れたるこそ口惜しけれ。

【牛車ゆり給ふ】門室有職抄「牛車宣旨事」の條に「乍レ駕レ車自二上東門一入。二町西行。土御門と壬生との角にて下車云々。已上宣旨は攝政關白被レ許レ之。或親王宿老之大臣又許レ之云々」。とある。

【朽ち果つる老木に咲ける云々】朽ち果てた老木の櫻も、春となつては花が咲くが、その如く、自分も老の身となつて、「太政大臣となり、牛車の宣旨をさへ蒙つた。實に光榮の至りであるから、今日はこの老木の櫻を我が身になぞらへてかざしにしようの意。

大嘗會の頃、信實の朝臣といひし歌よみの女の少將内侍、大内の女工所にさぶらふに、

雪いみじう日頃降りて、いかめしう積りたる曉、太政大臣實氏のたまひつかはしける。

九重の大内山のいかならむ
限りも知らず積る雪かな

に。○九重の　九重は天に九天あるに擬して、天子には九門ありといふより、禁中のことをいふ。但しこゝは下に「大内山」とあるから、九重の雲深きなどいふと同じく、物深く神々しきをいつたのであらう。○大内山　禁中のこと。○内野　禁中のこと。

●しげう　「しげく」の音便。度々あること。○今めかしき　樣　當世風。○御あるじ　饗應。○いかめしかりき　鄭重であつた。○いはずとも思ひやるべし　其の樣を一々くはしくいはなくても略〻分らうの意。○代々の御手本　代代の天皇の書き給へる御筆蹟　○奉らる　實氏より院へ。

●位去り給ひて　寶治二年六

御返し、少將の内侍、

こゝのへの内野の雪に跡つけて
遙かに千代の道を見るかな

【九重の大内山の云々】限りもなく雪が積つた。九重の大内山はどうであらうかの意。

【こゝのへの内野の雪に云々】「跡つけて」は足跡をつけて。九重の内野の雪に足跡をつけて、遙かにあなたの千代の榮えを祈りますの意。「跡をつけて」とあるから、「道を見る」といつたのである。

後嵯峨の院の上は、いつしか所々に御幸しげう、御遊など、めでたく、今めかしき樣に好ませ給ふ。西園寺に始めて御幸なりし樣こそ、いとめづらかなる見物にて侍りしか。太政大臣(兵實)御あるじ申されし樣いかめしかりき。いはずとも思ひやるべし。御贈物に、代々の御手本奉らるとて、おとゝ(兵實)

月十八日。○一つ御車　後嵯峨院と。○たゞ人　普通の人○あらまほしき御有樣　理想的の御樣子。○日比　數日の意。○さるべき事　さうあるべき筈の事。當然の事。○いみじう　盛んなことで。○御心　後嵯峨の。○一年の事　御卽位前石清水に參籠せられたこと。一四二頁參照。○殊にかしこまり聞えさせ　御禮を申されることであらう。○あそばして　御作りになつて

●寶治の頃　寶治二年十月二十一日。○字治　山城久世郡京都の南方。○狩衣　闕腋で袖口に括緒(くゝりを)のあるもの。狩獵・旅行などに著る。○菊　染色の名。葉菊・白菊・黃菊など種々あるといふ。○

傳へ聞くひじりの代々の跡を見て
古きをうつす道ならはなむ

御返し、御製、

知らざりし昔に今やかへりなむ
かしこき代々の跡ならひなば

【傳へ聞くひじりの代々の云々】聞き傳へて居る所の代々の聖天子の御筆跡を見て、古き面影を今の世にうつし、昔の尊い道を習はうの意。

【知らざりし昔に今や云々】すぐれた代々の聖天子の御筆跡を習ふならば、今の世も知らぬ昔の聖代にかへるであらうの意。○「跡」は兩者とも筆跡に治績の意を兼ねたのである。

中宮(禧子)も位去り給ひて、大宮女院とぞ聞ゆる。安らかに、常は、一つ御車などにて、たゞ人のやうに、花やかなる事どものみ隙なく、よろづあらまほしき御有樣なり。院の上

紅葉　是れも染色の名。青紅葉・黄紅葉・紅紅葉など種々ある。○縫物　ぬひとりなしたもの。○世になき　極めて珍しい。○清ら　華美。○橋の小島　宇治川の中の小島。○物の音　樂器の音。○水の底にも耳立てつべく　水の底にも耳をそばだてて聞くものがあるかと思ふ程微妙（二〇一頁參照）といふ意。つまり水底まで響き渡ること。○そゝろ思はず。○折知り顔に　時知り顔に。丁度その時にあつて興を添へるをいふ。○うちしぐれて　小雨を催して。○槇の山風　宇治の西北約十丁ばかりの所に宇治川に沿うて槇島村がある。そこの山から吹き下す風をいつたのであらう。○あらまし　荒い（形）。○散りまがふ　散り亂れる。○袖口　著物の袖口。當時は特に之を美しくして、車に乘る時なども簾の下から出し、一種の裝飾としたものである。○九の江　蜀江を指していつたのであらう。○平等院　宇治町の東北。もと源融の別莊、次で陽成帝の行宮となり、後又藤原道長の山莊となり、道長より子の頼道に傳へたのを永承七年寺としたものである。○中一日　三日間の中の一日。○渡らせ給ひて　お出でになつて。○網代　竹や木を編み並べて川にかけ、魚を捕るもの。○氷魚　白魚（しらうを）に似た小魚。秋の末から冬にかけて多く捕れる。宇治川の

世の人殘りなく仕うまつれり。さるべき事とはいひながら、猶ほいみじう、御心にも、一年の事思しいでられて、殊にかしこまり聞えさせ給ふべし。御歌數多あそばして、

寶殿にこめさせ給ひし中に、

石清水木がくれたりし古へを

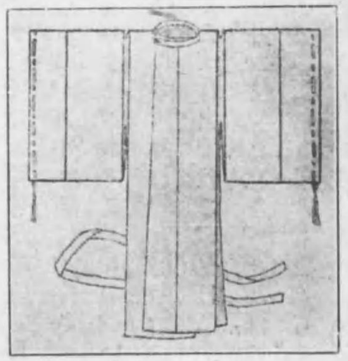
思ひ出づればすむ心かな

【石清水木がくれたりし云々】「木がくれたりし」はまだ皇子であられた頃のことを木の間がくれの石清水（岩間の清水）に譬へた語で、一首の意は、まだ皇子であつた頃、石清水に參籠して祈請し奉つた昔を思ひ出づるに、當時の願は既にかなつて、天子となり、今又太上天皇となつて、かうしてこゝに參籠する。それにつけても神のめぐみのありがたく、我が心も清々しくなるといふこと。「すむ」は石清水の縁語である。

寶治の頃、神無月二十日餘りなりしにや、紅葉御覽じに、

宇治に御幸し給ふ。上達部・殿上人、思ひ〳〵いろ〳〵の狩衣、菊・紅葉の濃き薄き、縫物・織物・綾錦、すべて世になき清らをつくし騒ぐ。いみじき見物なり。殿上人の船に、樂器を設けたり。橘の小島に御船さしとめて、物の音どもも吹きたてたる程、水の底も耳立てぬべく、そゝろ寒きほどなるに、折知り顔に、空さへうちしぐれて、槇の山風あらましきに、木の葉どもの、いろ〳〵散りまがふけしき、いひしらず面白し。女房の船に、いろ〳〵の袖口、わざとなくこぼれ出でたる、夕日にかゞやきあひて、錦を洗ふ九の江かと見えたり。平等院に、中一日渡らせ給ひて、さまざまの面白き事ども數知らず、網代に氷魚の、よるもさながらのゝしり明して、かへらせ給ふ。

名物。○よるも　氷魚が「寄るしと「夜」とをかけた語。○さながら　そのまゝ。○のゝしり明して　喧しく言ひ騒ぎながら夜を明す。



狩衣

【女房の船にいろ〳〵の袖口云云】女房の船には、いろ〳〵美しい袖口が、わざと出したのではないが、自然外に現はれて、折柄の夕日に輝いて居る。それは丁度かの錦を濯ふといふ蜀江のやうだといつたのである。○蜀江の錦は白氏六帖に「蜀成都有二濯錦之江一」などあり、我が國のものにも屢〻いはれて居る。

御覽じがてら　御覽になるついでに。○をかのや殿　岡屋殿　藤原兼經。家實の長子。○御程　御時。○かれてより　豫め。前以て。○世のいとなみ　世の中の人が支度すること。○烏帽子直衣　直衣を著て烏帽子をかぶつた裝。ここは院の御裝である。○薄色　經紫、綠白のもの。○浮織物　綾の類に細かい模樣を地の上に浮かせて織つたもの。○指貫　袴の一種。裾を絲でしめるもの。○衣冠・直衣・狩衣　などの時に用ひる。○網代廂の車　網代車の一種。屋形は唐車のやうで、底あるもの。○たてまつる　お乘りになる。○中將爲氏云々　中將爲氏は浮線綾の狩衣を著用の意。以

第六　烟の末々

寶治二年十一月二十日頃、紅葉御覽じがてら、（後嵯峨）宇治に御幸し給ふ。をかのや殿の攝政の御程なり上達部・殿上人、思ひ〳〵いろ〳〵の狩衣、菊・紅葉の濃き薄き、縫物・織物・綾錦、かねてより世のいとなみなり。二十一日の朝ぼらけに出でさせ給ふ。御烏帽子直衣、薄色の浮織物の御指貫、網代廂の御車にたてまつる。上人、下﨟より前行す。中將爲氏、浮線綾の狩衣、右馬頭房名・基具、菊の唐織物、內藏頭隆行・顯方、白菊の狩衣、皇后宮權の亮通世・右中辨時繼、薄青の固織物・紫の衣、前の兵衞の佐朝經、赤色の狩衣、衞門の佐親繼、二藍の狩衣、成俊、檜皮、具氏・左兵衞の佐親朝は、結

[illegible]樣。○浮絲綾　浮織の綾のこと。○唐織物　支那から來た織物。○白菊　表白、裏蘇芳。○薄青　經白、緯青のもの。○固織物　浮織物に對し、絲を浮べず固くして織つたもの。○衣　衣冠・直衣狩衣などの下に著るもの。仕立は大體小袖に同じく、袖を廣袖に縫ひ、兩脇は袖下以下をふさがない。○赤色　黄櫨に茜を混じた色。○二藍　紅花(べにばな)と藍とで染めた色。○檜皮　檜皮色の狩衣のこと。檜皮色は蘇芳の黑みあるもの。○結狩衣　絲で種々の模樣を結びつけた狩衣。○菊をおきものにして　菊の花の模樣をつけたるをいふ。○紫裾濃　下部を濃い紫にし

狩衣に、菊をおきものにして、紫裾濃の指貫、菊を縫ひたり。上達部は、堀川の大納言具實、直衣、皇后宮大夫隆親、直衣、花山院の大納言定雅・權大納言實雄・花田の織物の狩衣、から野の衣・土御門の大納言顯定・左衞門の督實藤、薄青、衞門の督通成、かれ野の織物の狩衣、別當定嗣、直衣、雜色に野劒を持たせたり。皇后宮の權大夫師繼、萌黄の浮線綾の狩衣・浮織物の指貫・紅の衣、土御門の宰相の中將雅家、香の織物の狩衣、御隨身・居飼・御厩舍人まで、いかにせむと、いろいろを盡す。院(後嵯峨)の御車の後に、權大納言公相、緋紺の狩衣・紅の衣・白き單にて、えもいはぬ樣して仕うまつり給ふ。檢非違使・北面などまで、思ひ〳〵に、いかで珍しき樣にと好みたるは、ゆゝしき見物にぞ侍りし。衞府の上達部は、狩

上ほど薄く、遂に白くしたもの。○菊を縫ひたり　その上に菊の模樣を縫ひにしてある。○花田　藍色の薄いもの綵。○から野　枯野と書く。香(かう)色、卽ち薄赤く黄ばんだ色であらうといふ。○かれ野　枯野。襲の色目の名としては表黄、裏薄青のもの。○雜色　藏人所の雜役に服するもの。○野劒　太刀の一種飾なきもの。○香の織物　經香色、緯白きもの。○居飼　院の御厩の役人。牛馬を飼ふもの。○御厩舍人　同じく院の御厩の役人。居飼よりは上の役。○いかにせむと　どうしたら立派に見えるかと。○緋紺　經青黑、緯黄。○單袒(あこめ)の下に著る裏のな

衣の隨身に、弓・胡籙を持たせたり。人だまひ二輛、一の車に、いろ〳〵の紅葉を、濃く薄く、いかなる龍田姫か、かかる色を染め出でけむと、めづらかなり。二の車は、菊を出されたるも、なべての色ならむやは。その外、院(後嵯峨)の御乳母大納言二位殿、いとよそほしげにて、諸大夫・侍、清げなる召し具して參り給ふ。宰相三位殿(懷子)と聞ゆるは、かの若宮(宗尊)の御母、兵衞の內侍殿といひし、この頃は三位し給へり。今一きはめでたく、ゆゝしげにて、北面の下﨟三人、諸大夫二人、心ことにひきつくろひたる樣なり。建久に、後鳥羽院宇治の御幸の時、修明門院(藤子)、その頃、二條の君とて、參り給へりし例をまねばるゝとぞ聞えける。又大納言の典侍とは、藤大納言爲家の女、それも別にひき

い衣。○えもいはぬ樣　何ともいへぬ立派な裝。○いかで珍しき樣にと　何とかして珍しい風をしようと。○ゆゝしき見物　たいした見物。○衛府の上達部　兵衛督・衛門督。○胡籙　矢を入れて背に負ふ器。○人だまひ　副車。女房など乘るためのもの。○龍田姫　秋を司る女神。○めづらか　珍しい。○なべての色ならむやは　なみ〳〵の色ではないの意。○よそほしげにて　飾り立てて。○諸大夫　攝政・關白・大臣の家に祇候し、恪勤の功によつて殿上を許され大中納言まで昇り得る家柄の人。○侍　親王・攝家・大臣等の家人。○清げなる　美しい人々を。○召し具して　召

さがりて、いたく用意ことにて參らる。宇治川の東の岸に、御舟設けられたれば、御車より奉り移るほど、夕つ方になりぬ。御船さしいろ〳〵の狩襖にて、八人づつ、さまざまなり。基具の中將、院(後嵯峨)の御佩刀持たる。顯朝御榻まゐらす。平等院の釣殿に、御船寄せて下りさせ給ふ。本堂にて御誦經あり。御導師まかでて後、阿彌陀堂・御經藏・懺法堂まで、悉く御覽じわたす。川の左右の岸に、篝白くたかせて、鵜飼ども召す。院(後嵯峨)の御前より始めて、御臺ども參る。しろがねの□錦の打敷など、いと清らに設けられたり。陪膳權大納言公相、役送は殿上人なり。上達部には御臺四本、殿上人には二なり。女房の中にも、いろ〳〵さまざまの風流の果物・衝重など、よしある樣に、なめまか

し連れて。○聞ゆるは　申す方は。○兵衛の内侍殿といひし云々　もと兵衛内侍殿といつた方で、この頃は三位になつて居られるの意。○今一きは云々　この方は大納言二位殿よりは今一層すぐれて立派で。○北面の下臈　下北面の武士。○心ことに　格別に。○ひきつくろひたる　裝ひ立てた。○藤大納言　藤は藤原の略語。○ひきさがりて　後列にあつて。○いたく用意ことにて　格別裝ひを凝らして○奉り移る　乘り移る。○御船さし　船を漕ぐ人。○狩襖　kari-ao　と發音する。狩衣のこと。○榻　床几。牛車の牛を取り放した時、轅の軛を支へ、又乘降りの踏臺とする

しうしなして、もて續きたる、こまかにうつくし。院(後嵯峨)の上、梅壺の放出に入らせ給ふ。攝政殿(兼經)、左の大臣(兼平)、皆御供にさぶらひ給ふ。

【宇治に御幸し給ふ】この事は既に「内野の雪」に「寶治の頃神無月二十日餘りなりしにや云々」として一度出て居る事である。隨つて以下の記事には前と重複がある。

【いろ〳〵の紅葉を濃く薄く云々】出車といつて、車の簾の下から女房がその美しい衣の袖口などを押し出して、一種の裝飾とする。こゝもそれで、その美しい衣裳の色を、一體まアこの美しい紅葉の色は、どういふ龍田姫が染め出したのだらうか、實に珍しい色だと、ほめたたへたのである。

もの。○釣殿　池に臨んだ殿。○まかで　退出する。○懺法堂　法華經を讀誦して懺悔の作法を行ふ堂。○篝白く　篝火を明るく。○鵜飼　鵜を放つて魚を捕ることを業とするもの。○御輩　御膳。○しろがれの　この下脫文があるのであらう。○打敷　臺盤に敷く物。○陪膳　一七五頁參照。○役送　同上。○風流の菓物　意匠を凝らした菓子。○衝重　食物を載せる器。三方の穴のないもの。○よしある樣に　いかにも趣のあるらしく。○なまめかしく　優美に。○梅壺　平等院の中、内庭に梅のある所。○放出　別棟の建物。

寢殿造の圖

（圖は大辭典による）

平安朝時代、搢紳の邸宅として用ひられた建築樣式。その主なる建物を寢殿といふより寢殿造といふ。寢殿とは正殿の義である。そしてこれより對屋・泉殿・釣殿等へは總て廊によつて通ふやうになつて居る。（圖は前方が南である）。

●橫の島・梅の島・橘の小島　いづれも宇治川の中にある島　○御遊　管絃の遊。○世に知らず　たとへやうのない程面白い。○優婆塞　梵語（upāsaka）。近事男、近善男、勤策男など譯す。有髮のまゝで佛道を修する男子。○をちの白浪　遠方に立つ白浪。○艷なる趣ある。○よろづ折柄にやかういふ折であるから、何もかも特に面白いのであらうの意。

又の日の暮つ方、又御船にて、橫の島・梅の島・橘の小島などを御覽ぜらる。御遊始まる。船のうちに樂器ども設けられたれば、吹き立てたる物の音、世に知らず。所がらは、まして面白う聞ゆるに、水の底にも耳とむるものやと、そゝろ寒きほどなり。かの優婆塞の宮の、「へだてて見ゆる」との給ひけむ「をちの白浪」も、艷なる音を添へたるは、よろづ折柄にや。

【所がらはまして面白う聞ゆるに】　場所柄も實に景色のよい所であるから、隨つて音樂も一層面白く聞えるの意。

【かの優婆塞の宮の云々】　源氏物語（椎本）に優婆塞の宮、卽ち八宮（桐壺帝第八皇子）が宇治で宰相中將の君に贈つた歌「山風に霞吹きとく聲はあれど隔てて見ゆるをちの白浪」（笛の音は隔てないが、心の隔てがつらいの意）を引いたので、こゝの意は、かの優婆塞の宮は「隔てて見ゆる遠の白浪」と云はれたが、その白浪も今は面白い響をたてて、此

●御贈物　主人役の兼經から院へ。○けはひことにて　樣子が格別よく。○ほうだう　本堂(ほんだう)の音便。○引き出で　その馬を。○うけとる　その馬を。○おり給ひて　階下に。○一品し給ふ　從一位になられた。○遊びのゝしらせ給ひ　遊びさわぐ。○還らせ　院が。○家司　ケシの音便。今の家令に當るもの　○四品許させ給ふ　四位に昇された。○いとこよなし　實に此上ない事である。○從下の四品　從四位下。○今の御有樣　兼平のことをいふ。○古き例　良經や兼實のこと。

方の音樂に和して聞える。かうして見るもの聞くもの一として面白からざるなきは、時候もよく、又めでたい御幸の時であるからであらう。

廿三日還御の日ぞ、御贈物ども奉り給ふ。御手本・和琴・御馬二疋まゐらせらる。院(後嵯峨)よりも、主のおとゞ(兼經)に御馬奉り給ふ。院の御隨身ども、けはひことにて、ほうだうの前の庭に引き出でたれば、衞門の佐親朝・親繼、二人うけとる。殿(兼經)おり給ひて拜し給ふ。岡屋殿兼經のおとゞの御事なりその後、賞行はる。左の大臣(兼平)一品し給ふべきよし、院の上(後嵯峨)自らのたまはすれば、又立ち出でて、直衣を奉りながら、拜舞し給ふ。よろづ御心ゆくかぎり遊びのゝしらせ給ひて、還らせ給ふまゝに、左大臣殿兼平從一位し給ふ。殿(兼實)の家司季頼四品許させ給ふ、いとこよなし。寛治には、良經正四位下、保元に、

○皆具　一切揃つたもの。○平包　風呂敷包のやうなもの　○長櫃　長持の類。○曹司　部屋。○建久には　建久九年七月後鳥羽院宇治御幸の時。○單重　單衣を二つ端を縫ひ捻り重ねたもの。

月輪殿(兼實)從下の四品をぞし給ひける。今の御有樣は、かの古き例にも越えたり。いとめでたく面白し。還御の當日に、女房の裝束皆具、いろ〳〵にいと清らなる十具、各〻平包に長櫃にて、大納言二位の曹子におくらる。又宰相三位の許へも、別に遣されけり。建久には、夏なりしかば、單重廿具ありけるを思し出でけるにや。さまざまゆゝしき事どもにて過ぎぬ。

【直衣を奉りながら云々】　從一位に上せてやると、院御自身が云はれたので、嬉しさの餘り、兼平は著て居る直衣のまゝで、拜舞せられた。

○「拜舞」は物を賜はつた時する喜びの舞である。

【寛治には良經云々】　「寛治」は百練抄(第五)に「寛治元年五月十九日。太上天皇(白河)臨二幸平等院一。二十一日還御。有レ賞」とあるもの。「保元」は同書(第七)に「保元三年十月十七日。上皇(後白河)臨二幸宇治一。

(4)

●この御留守のほど　字治へ行かれて御留守の間に。〇二條油小路　二條と油小路との相交叉する邊。(地圖を見よ)。〇閑院殿　當時内裏であつた。〇築墻　ツキガキの音便。築地(ついぢ)ともいふ。土塀のこと。〇内膳屋　内膳司の中供御を調進する所。(火事は二十二日のこと)。〇失せにけり　永觀元年十月盜まれたをいふ。〇神祇官　天神地祇を祭祀し、諸國の神社・神官を總管する所。〇陰陽寮　天文曆數等の事を掌る所。〇みづのとの祭　毎月癸の吉日を擇び、陰陽寮で行ふ祭。〇かの祭　癸の祭。〇忌火といふにては　忌火といふ釜を以てはの意。〇六月十二月の御神事　所謂月次(つきなみ)・神今食(じんこんじき)をいふ。尙ほ下註を見よ。〇常の御膳　普通の御膳部。〇つかうまつる　作り整へる。〇たいだいしき事　おこたりがましいこと。釜がないので自然御膳も調ぜられぬをいふ。〇古きを云々　古い釜の損じた所だけを直す。

有二勳賞一。とあるもの。

【女房の裝束云々】　女房の裝束の一揃へになつたもの、それからいろいろ美しいものを十重ね、それ等を各〻風呂敷のやうな物で包んで、長櫃に入れ、大納言二位の所へ送られた。

この御留守のほどに、二條油小路に火出で來て、閑院殿の築墻のうちなれば、内膳屋焼けて、神代より傳はれる御釜も、焼けそこなはれけるをぞ、いとあさましき事には申し侍りし。かの釜、昔は三ありけるを、一をば「平野」、一をば「忌火」、一をば「庭火」と申しけるを、圓融院の御代、永觀の頃、二は失せにけり。今一殘りたるに、かゝる事の出できぬるは、いとよろしからぬわざなりとて、神祇官にたづねられ、古き事ども考へらる。「平野」といひけるを、陰陽寮にする〻、みづのとの祭といふ事に用ひけれど、中頃より、かの祭は絶えぬ。「忌火」といふにては、六月・十二月の御神事の御膳をば調じけり。「庭火」にて、常の御膳をばつかうまつる。かゝれば、いとたいだいしき事にて、初めは鑄物師に仰せらるべきかとも申す。古きを、損はれたる所ばかりを、直さるべきかとも、いろ〳〵に定めかねられたり。入道太政大臣(實氏)などぞ、古きを直さるべしと申さるとぞ聞えける。

【六月十二月の御神事】　月次祭は毎年六月及び十二月の十一日に、神祇官に於て全國三百四座の神を祭ること。神今食はその日の夜に行はれ、その儀式は大體新嘗祭と同じであるが、神今食には舊穀を供へらるだけが違ふ。場所は普通中和院の神嘉殿であるが、場合によつては神祇官でも行はれたことがある。

【入道太政大臣なども古きを直さるべしと云々】　かくて遂に鑄改めることとなつたと見えて、百練抄(第十六)には「閏十二月二十二日乙丑。

●御書始　御讀書始。始めて御註孝經をお授け申す式。○文章の博士　大學寮の被管。紀傳道及び詩文を掌るもの。○序奉らる　詩の序を作つて奉るをいふ。○例のごとく　いつもの通り。○文臺　机の一種。書籍・短册等を載せるもの。○披講　詩をよみあげること。○保延　崇徳朝の年號

●思ひなしさへ云々　思ひやるさへめでたいのに。○院　上皇の御所。○内　内裏。○拜禮　公卿・殿上人等が上皇・女院・攝關等に祭首の賀を申すこと。○大宮院にもあり　拜禮が。○隆親　藤原隆衡の子で、寔氏の妻の兄。○院のおはしませば　その隆親の家に。○兩貫首　藏人頭をいふ（二人）で當時は源基具・藤原公藤で。○常の年々に越えて　例年よりも多く。○參りこみ　澤山こみあふ。○人々立ち並み　拜禮の人が官位の次第によつて、澤山庭中に立ち並んで居るをいふ。○右　右大臣○右もまたその同じつら　左大臣と同列。○大納言も同じつら　内大臣と。○院の御前に仰せられて　院が仰せられ

被レ定下内膳御竈可二鑄改一日時上。定二來二十八日一云々。とある。

その頃、宰相の三位の若宮宗尊親王の御事なり御書始とて、人々參り集ひ給ふ。七になら せ給ふべし。關白殿（攝）をはじめ、大臣・上達部殘りなし。十二月の二十五日なり。文章の博士序奉らる。管絃の具召されて、人々例のごと吹きあはせ給ふ。その後、文臺召して、詩の披講ありき。勸盃の儀式、何事も、保延のためしとぞ承りし。

【保延のためし】　今鏡（大内わたり）に「當時の院（後白河）は鳥羽院の第四の皇子。云々。保延三年十二月御書始に式部大輔敦光といひし博士御侍讀には參ると承りしに、上達部・殿上人參りて、詩など奉られけり。近くはさることも聞え侍らぬに、この御書始にしも、しか侍りけむ、よき例にこそせられ侍らむずらめ。

かくて年明けぬれば、寶治も三年になりぬ。春たちかへる

朝の空の光は、思ひなしさへいみじきを、院・内の氣色、誠にめでたし。攝政殿（攝）にも拜禮行はる。院の御前（後嵯）は更にもいはず、大宮院（子）にもあり。先づ、冷泉萬里小路殿（後嵯）のおはしませば、拜禮に人々參り給ふ。攝政殿（攝）・左大臣兼平・右大臣忠家・内大臣實基、大納言には公相・實雄・顯定・道良、中納言に爲經・良教・資季・冬忠・實藤・公光・通成・定嗣、宰相に通行・師繼・顯朝、殿上人は、兩貫首をはじめ、數知らず。常の年々に越えて、この春は參りこみ給へり。人々立ち竝み給へる時、左の大臣（攝）は、攝政（攝）の御子なれば、引き退きて立ち給へり。右（忠家）もまた、その同じつらに立たれたるに、内の大臣（實基）進み出で給へり。それに次ぎて、大納言

ての意。○さたがまし　彼れ此れと非難すること。○貞應元年　後堀河帝の時。○故野宮左大臣今の内の大臣の御親の云々　故野宮左大臣、卽ち今の内大臣の親公繼が當時は右大臣での意。○小朝拜　正月元日、關白・大臣以下殿上人等が清涼殿の東庭に整列し、天皇を拜して歲首の賀を申し上げること。○節會　元日の節會。天皇紫宸殿に御して、宴を群臣百官に賜ふこと。○困じ　疲勞する。

も同じつらなり。良敎・公光・師繼・顯朝、また退きて立ちたれば、出入して屏風に似たり。この事見にくしと、後さまざま院の御前（後堀）に仰せられて、攝政（經）殿に尋ね申され、さたがましく侍りけるを、貞應元年のためしなど出で來て、故野宮左大臣（公繼）、今の内の大臣（基寶）の御親の、右大臣にて退きたるつらに立たれたりけるを、その時の記錄など、見給はざりけるにやとて、内の大臣（基寶）の御振舞、心得ずとぞ沙汰ありける。院の拜禮果てて、内の小朝拜・節會などに、皆人々困じ給へるに、又大宮院（子）の拜禮めでたくぞ侍りける。

【人々立ち並み給へる云々】　禮拜などの時、位の次第によつて整列すること。之れを「異位重行」といふ。卽ち貴い者を前にし卑しい者を後にして、重なり立つ義である。例へば、朝賀には、東方最前に太政大臣、次に左大臣、次に大納言、次に中納言、と竝び、三位の參議、王の四位の參議、次に王の四位・五位、臣の四位・五位・六位・七位・八位・初位・無位。又西方最前には親王、次に右大臣、非參議の一位・二位、次に三位……といふ風に列ぶのである。

【左の大臣は攝政の御子なれば云々】　兼平は雅經の子であるから、親に遠慮して、後へ退いて立つて居たの意。○こゝに兼平を雅經の子といつてあるのは誤、兼平は雅經の弟である。（父は家實）。

【出入して屏風に似たり】　竝び方がデコボコになつて、丁度屏風を立てたやうだといふのである。卽ち屏風が／＼＼＼＼かういふ風になつて居るのに似て居るといつたのである。

【貞應元年のためし云々】　貞應元年の例などが引張り出された。卽ち此の時は實基の父なる公繼が右大臣で、退いた列に立つて居たのに、其の時の記錄などを見なかつたのであらうか、實基は出しやばつた事をしたと非難されたといふこと。○貞應元年正月には、攝政は家實、左

大臣は家通であつた。そして家通が家實より少し退いて立つて居たので、右大臣たる公繼も之れに倣つて退いて居たのであらう。

【人々困じ給へるに云々】 院の拜禮・小朝拜・節會と、いろ〳〵の事で皆疲れきつて居たが、それでも大宮院の拜禮は立派に行はれたの意。

四日は承明門院(在子)へ御幸はじめ、院(後嵯峨)の御樣の、つきせずめでたく見えさせ給ふを、あく世なう、いみじと見奉らせ給ふ。浮織物の薄色の御指貫、紅の御衣たてまつれり。攝政殿(鷹司兼平)上達部・殿上人、直衣、うへの衣、思ひ〳〵なり。攝政殿も參り給ふ。夜に入りて、歸らせ給ひぬれば、やがて〳〵又、大宮院(姞子)・內へ御幸はじめ、これも上達部・殿上人、ありつる限り殘りなし。網代廂にたてまつる。皇后宮の御方の東向きへ御車よせて、宮(姞子)御對面、いとめでたし。上(後醍醐)は、まだいとわけなき御程にて、かくいつくしき萬

●院の御樣　院の御風采などをいふ。○あく世なう　いつまでも見飽きすることなく。○いみじ　立派。○見奉らせ給ふ　承明門院が。○たてまつれり　院が著て居られる。○うへの衣　袍(はう)のこと　○束帶の表衣。○やがて〳〵又　直又。○大宮院・內へ　大宮院や內裏へ。○網代廂の車に乘られた。○皇后宮　土御門帝の御女曦子內親王。後嵯峨帝の準母。寶治二年尊んで皇后といひ、建長三年號を上つて仙

華門院といふ。○東向き　東方。○いわけなき　幼少。○いつくしき　尊嚴。○萬乘の主　天子のこと。○院の御このかみ　院の姉上。○位におはしましゝ時　後嵯峨が。○母代　母に代つて萬事世話する人。○いとゞまして　猶ほ更いふまでもなく。○內にのみ　曦子は後深草の世話のため始終內裏に居られるをいふ　○御事　御方。

●圓滿院の法親王　圓滿院はもと洛東岡崎にあつたもの。後天文中圖城寺域內に移る。仁助は土御門帝の皇子。圓助には叔父に當る。○わたり給ふ　圓滿院へ行かれた。(承明門院で用意されたのである)。○車　牛馬。○いとよ

乘の主(あるじ)にそなはり給へる御有樣を、女院(姞子)も、いとやむごとなく、かたじけなしと見奉り給ふ。皇后宮と聞ゆるは、これも院(後嵯峨)の御このかみにて、位におはしましゝ時も、御母代(はゝしろ)など聞えさせ給ひしを、この御門(後深草)幼くわたらせ給へば、今は、いとゞまして、內にのみおはしまして、去年の八月より、皇后宮ときこゆる、後には、仙華門院と聞えし御事なるべし。

院(後嵯峨)の若宮(圓助)十三にならせ給ふは、公宗(きんむね)の中將といひし人の女の御腹なり。圓滿院の法親王(性助)の御弟子にならせ給ふべしとて、正月二十八日に、その御用意あり、承明門院よりわたり給ふ。院の網代廂の御車にて、上達部は車、具實の大納言を上首にて六人、殿上人十六人、馬にて、い

そほしう　非常に飾り立てて　○やがて　直。○御髪おろして　剃髪して。○うつくしげさ　美しげに見えること。美しさ。○佛などの心地して　地藏に譬へたと同じく、その容貌をほめたゝへた語。○院の宮達　院の御子たち。○御兄にて　この圓助は。○いとほし　氣の毒。○御匣殿　公房の女をいふ。○法親王がれ　將來法親王となり給ふべき人。○ものし給はめ　あらうの意。○らうたく　かはゆく

ろ〳〵にいとよそほしう、めでたくておはしましぬ。その夜、やがて御髪おろして、御法名圓助と聞ゆ。いとうつくしげさ、佛などの心地して、あはれに見え給ふ。院（後堀）の宮達の御中には、御兄にてものし給へど、御外戚の弱きは、今も昔もかゝるこそ、いといとほしきわざなりけれ。御匣殿の若宮（三）も三にならせ給へる、承明門院にて、御魚味きこしめしなどすべし。これも法親王がれにてこそは給へれば、院（後堀）もいとらうたく思ひ聞えさせ給ひけり。

【公宗の中將といひし人の女の御腹】

皇胤紹運錄には

圓助法親王（二品天王寺別當。牛車。圓滿院。母左衞門督中納言能保卿女）

●九重の宮の內　禁中。○子

諸門跡譜にも

圓助法親王（二品。寺長吏。天王寺別當。號金龍寺。後嵯峨院第七皇子。土御門院孫。母中納言能保卿女）。

とあろ。又公宗は實雄の子で、實雄は文永十年、五十七歳で死んで居るから、この寶治三年には三十三歳である。さればその子の公宗に、子を生む程の女がある筈はない。隨つて、こゝの記事は誤に違ひない。

【院の宮達の御中には云々】　この圓助は後嵯峨の皇子の中では上であるけれども、何分外戚に權威がないから、かうして佛門に入られたのである。これは古今同一轍で仕方がない。此の外御匣殿の御腹の若宮もあるが、これも早晩法親王になられるのだらうなどの意。

【御匣殿】　御匣殿別當の略稱。天皇の御服を裁縫することを掌るもの。但し一條帝以後は御寢に侍し、遂んで女御となつたものがある。こゝも其の一例であろ。

【御魚味きこしめし】　魚味は魚味祝。又眞菜始ともいひ、生後始めて食物を含ましめる儀式。之れを承明門院で行はれたのである。

かくいふ程に、二月一日の夜、常よりも、九重の宮の內、

の時ばかり　午后十二時頃。○二條表　二條の大通りに面する方。即ち北方。○對　對屋（たいのや）の略語。寢殿造の圖を見よ。○棟燃え落つる程にぞ云々　棟が燃え落ちる頃に始めて氣がついた。○あさましともなのめなる　あさましといふも一通りのこと、實に大變な事であつた。○何のたどりもなく　どうしようといふあてもなく。あわて騒ぐなり。○うつし心　正氣。○車の陣なるを召して　陣は近衛・衛門等武衛の官人の詰所。そこにある車を召して。○御匣殿　これは前記公房の女とは別の人であらう。○宮もたてまつる　皇后宮も共に車に乗られた。○取り具して　持つて。○とばかりありて　暫くして。○そのほど　其時分。○春日　公相の邸を指す。○方憚り　方角の忌。方角の悪いこと。○内　内裏。○世あがりての事云々　上代の事は別として。○村上　村上帝天德四年九月二十三日に内裏焼亡。○さばかり　あれほど。○聖の御代にしも　この村上の如き聖天子の御代にさへ。○かゝる事　内裏焼亡。○承元　土御門帝承元二年十一月二十七日のこと。○御釜焼け損じ　二〇四頁を見よ。○傾き申す　怪しみ雜ずる。

人すくなにて、大方夜も靜かなるに、子の時ばかりに、閑院殿の二條表より、火出で來て、棟燃え落つる程にぞ、始めて見つけたる。あさましともなのめなる。何のたどりもなく、只あわてさわぎ、我も人もうつし心なければ、公直の中將の御宿直に候ひけるが、車の陣なるを召して、皇后宮（子）の御方へ寄す。內の上（後鳥羽）をば、御匣殿抱き奉らせ給ひて、宮（子）もたてまつる。劍璽ばかり取り具して、門を急ぎ出でさせ給ふ。とばかりありて、權中納言實雄の參り給へりける車に召し移りて、春日富小路に公相の大納言のおはする家に行幸なる。そのほどにぞ、攝政殿（實）をはじめ、前の太政大臣（實氏）・左大臣（基）・內大臣（實）より下殘り なく、人々參り集ひ給ふ。院（後鳥羽）も御車引き出でて見奉らせ給ふ。かゝるほどに、閑院殿より、春日には、方憚りありとて、院（後鳥羽）のおはします萬里小路殿へひきかへして行幸あり。夜明け果てて後、又前の太政大臣實氏の冷泉富小路へ行幸なりて、しばし內裏になりぬ。內の燒くることは、これを初にもあらず。世あがりての事はさしおきぬ。天德四年、村上のさばかりめでたかりし御代よりこのかた、既に二十餘度になりぬるにや。聖の御代にしも、かゝる事は侍りしかど、承元に燒けにし後は、久しくこの四十四年はなかりつるに、去年の冬、御釜燒け損じて、又かくうち續きぬるを、いとあさましうおぼす。何よりも御門の御車に奉りて出でさせ給へるを、いたく例なき事とかやとて、人々傾き申す。院（後鳥羽）も驚きおぼされて、古き事ども廣く尋ねられ

●院も内も云々　後嵯峨院の萬里小路殿と假皇居なる富小路殿とは、非常に近く、這ひながら通へる位だの意。○日比より　平生よりも多く。○參り集ひて　禁中に。○御旅の雲井なれど　假の皇居ではあるが。○なか〳〵　却つて。○顯證　晴々しい。○北の對　富小路殿の。○つま　端。きは。○艶になよびたる　美しく、しなやかな。○薄樣　鳥の子紙を薄くすいたもの（今日數き寫しに使ふものとは別）。○なのめ　平凡。○今出川　實氏の邸。○それも忘れ云々　例の尼の語。○憂きもの　いやなもの。○侍るや　ヤは只意味を強める爲に添へたもの、疑問の意はない。

などすべし。

【冷泉富小路殿へ行幸なりて、しばし內裏になりぬ】　五代帝王物語に「閑院は寶治三年（建長元）二月一日炎上ありしかば、富小路殿（冷泉富小路）內裏になる。此の御所は小川の右衞門督入道親雅が家にてありしを、北山大相國の殿成りて、今皇居とはなれり」。

【何よりも御門の御車に奉りて出られたことは、先例のないことだといふので、非難したの意。○天子は風儀若しくは腰輿に召されることになつて居る。

院も內も、這ひわたるほどの近さなれば、御宿直の人々など、日比より、參り集ひて、御旅の雲井なれど、なか〳〵いと顯證なり。北の對のつまなる紅梅の、いと面白く咲きたるが、院の御前より御覽じやらるゝほどなれば、雅家の宰相の中將して、いと艶になよびたる薄樣に書かせ給ひて、院の上、

色も香もかさねてにほへ梅の花

九重になる宿のしるしに

とて、かの梅に結びつけさせらる。御かへし辨の內侍うけたまはりて、申すべしと聞き侍りしを、なのめなりといふ事にて、おとゝ（實氏）今出川より申されけるとかや。それも忘れ侍りぬるこそ口をしけれ。老はかく憂きものにぞ侍るや。

【色も香もかさねてにほへ云々】　梅の花よ、富小路殿が皇居となるしるしに、幾重にも咲き匂へよの意。「かさねて」は「九重」の緣語。「九重」は皇居の意である。

【なのめなりといふ事にて云々】　辨の內侍が返歌をする筈だつたが、それがまづかつたので、その代りに實氏がしたといふ意。○辨內侍日記には、自分が「色も香もさこそ重れて匂ふらめ九重になる宿の梅が枝」とよんで奉つたとある。

●おぴたゞし　甚だし。○寛元四年の六月　後嵯峨帝寛元四年六月六日、四條坊門より五條坊門邊まで燒けたこと。○あさみける　あきれた。○蓮華王院　今下京區五町、三十三間堂と稱するもの。長寛二年、後白河院創建。今日殘れるは建長三年再建したものである。○御幸　蓮華王院へ。○さながら　全く。○御車に參り給へり　牛車に乘つて行かれた。○千體の千手　千手觀音の像千體の意。○たゞひ　同じやうになる。卽ち燒け失せる。○北斗堂　妙見菩薩を祀る。○寶藏　寶物藏。○鎭守　その土地を鎭め護る神○さばかり御志深う云々　あれほど大願を起されて。○鐘樓　鐘撞堂。○僧坊　僧の居る所。○辻風　旋風。○また朝　翌朝。○雙林寺　洛東靈山長樂寺の西南。傳教大師開基。○わたり　邊。○某の姫君　鳥羽院の皇女。下註を見よ。○御もと　御邸。○岡崎　今、岡崎町といふ所。○二むら三むら　「むら」は群。二ヶ所三ヶ所などの意。○ただ事にあらず　普通の事ではない。天のいましめか何かではあるまいかなどの意。○御占　うらなひ。○山々　寺々

世の中兎角騷がしとて、年號變る。三月十八日、建長になりぬれど、猶ほ火災しづまらで、二十三日、また〳〵姉小路室町、唐橋の大納言雅親の家の側より、火出で來て、百餘町燒けたり。おびたゞしともいふ方なし。

寛元四年の六月にも恐ろしき火侍りしかど、この度は、猶ほそれよりも越えたり。かの雅親の大納言の家ばかり、四方は皆燒けたるに殘れる、いと〳〵不思議なりとぞ、見る人毎にあさみける。曉より出で來たる火、夜に入るまで消えず。未の時ばかりに、蓮華王院の御堂に燃えつきければ、俄かに院（後嵯峨）も御幸なる。御道すがらも、さながら煙を分けさせ給ふ。いと珍らかにあさまし。攝政殿（一條實經）も御車に參り給へり。三十三間の御堂の千體の千手、一時の烟に

たゞひ給へば、不動堂・北斗堂も殘らず。寶藏・鎭守ばかりぞ、辛うじてうち消ちにける。後白河院の、さばかり御志深うおもほしたちて、長寛二年供養ありし後は、やむごとなき御寺なりつるに、あさましなどいふもおろかなり。又今熊野の鐘樓・僧坊など多く燒けぬ。辻風さへ吹きまじり〳〵、烟の飛ぶこと鳥の如し。またの朝まで燃えけり。その晝つ方、前の火燃え盡きて後、雙林寺といふわたりに、火出で來て、某の姫君の御もと、古き昔の跡、皆烟になりぬ。その火消えて後、又夕つ方岡崎わたりに火出で來て、攝政殿（一條實經）の御もと、少々燒けけり。又承明門院の近き程にも、火出で來て、人々參り集ふ。中御門より二條まで、又火出で來て、十八町燒けぬ。すべて二十三日より晦日に及ぶま

(12)

で、日を經、時を經て、或は一日に二三度、二むら三むらに分けて燃えあがる。かゝる程に、都は既に三分の二燒けぬ。いと〳〵めづらかなりし事なり。たゞ事にあらずとて、院（後堀）の御前に、陰陽師七人召して、御占行はる。重き御愼みと申せば、御修法どもはじめ、山々にも、御祈仕う奉るべきよし、殊更に仰せらる。

【二十三日また〳〵云々】　百練抄（第十六）に「二十三日乙未。午剋許炎上起二姉小路室町一。于レ時風吹二散四方一。煙充二滿九重一。三條以南八條以北。西洞院以東京極以西（五條以南及二河原一）。餘熖遙飛。付二蓮花王院一。御堂以下此日悉燒亡」。

【某の姫君】　今鏡（腹々の御子）に「光清法師とか鳥羽院の宮は云々、その同じ腹（光清法師の女）にあや御前と聞えさせ給ふ、御髮下して、雙林寺といふ所にぞおはしますなる」とある方である。

院の上（後堀）の御有樣の、よろづにめでたくおはしますを思ふには、何の御愼みも、なでふ事かあらむとぞ覺え侍る。

(13)

ふ○位　天子の位。○年を經て　年々長らく。○その中に　籠つて居る中に。○五部の大乘經　華嚴經（六十卷）・大集經（五十卷）・大品般若經（三十卷）・法華經（十卷）・大般若涅槃經（四十卷）。○下向　石清水より還御のこと。○平野　山城葛野郡。今官幣大社。○北野　今、京都市上京區馬喰町祭神菅原道眞。官幣中社。○法輪　法輪寺。葛野郡。嵯峨渡月橋の南、嵐山の東部。眞言宗。○太秦　廣隆寺のこと　葛野郡太秦寺。聖德太子開基　法輪寺はこれに屬して居る。○寺司　寺の事務を勤めて居る僧。○法師ばら　法師達。○かづけ　祝儀として與へる。

●池邊松　歌の題。○講ぜら

ふには、何の御愼みも、なでふ事かあらむとぞ覺え侍る。位おりさせ給ひにし後は、年を經て、春の中に、必ず先づ石清水に七日御籠り、その中に、五部の大乘經供養せさせ給ふ。御下向の後は、やがて賀茂に御幸、平野・北野などにも、定まれる御事なり。寺には嵯峨の清涼寺・法輪・太秦などに御幸ありて、寺司に賞行はれ、法師ばらに物かづけ、すべて神を敬ひ、佛を尊びさせ給ふこと、來し方も行末も、例あらじとぞ、世の人申しあひける。

【よろづにめでたく云々】　かうして萬事にすぐれ、立派にあらせられることを思ふと、どんな重い愼みがあつたところで、何の事もあるまいの意。

鳥羽殿も、近頃はいたう荒れて、池も水草がちにうもれたりつるを、いみじう修理し磨かせ給ひて、始めて御幸なり

し時、「池邊松」といふこと講ぜられしに、太政大臣(忠)序を書き給へりき。「夫鳥羽、仙洞三五累聖、離宮一百餘載」とかや。又御身のいみじき事には、「蓬の髪霜寒くて七代に傳へたりと侍りしこそめでたけれ。

祝ひおく初めと今日を松が枝の
千とせのかげにすめる池水

院(後鳥羽)の御製、

影うつす松にも千世の色見えて
今日すみそむるやどの池水

大納言典侍と聞えしは、爲家の民部卿の女なりしにや。

色かへぬときはの松のかげそへて
千代に八千代にすめる池水

れ　所謂披講、卽ち歌會で歌をよみあげるをいふ。○序、その歌をよんだ由來を書いたもの。○御身のいみじき事　御身は實氏のこと。「いみじき事」はすぐれて居ること。○ずんながるめりしかど　三三頁を見よ。○そり橋　中央の所特に高く、そつたやうに作つた橋。○龍頭鷁首　天子の御座船をいふ。二隻を一對とし、一隻の舳には龍の頭、他には鷁(ふうてう)の首の彫物がある。こゝは之れに樂人を乘せたのである。○かやうの事　こゝに記したやうな遊○常の御遊　普通の管絃の遊○いとしげかりき　度々あつた。

ずんながるめりしかど、例のうるさければなむ。御前の御遊始まるほど、そり橋のもとに、龍頭鷁首寄せて、いと面白く吹き合せたり。かやうの事、常の御遊いとしげかりき。

【夫鳥羽云々】「仙洞」は院の御所で、こゝは院その人を指す。「三五累聖」は聖代を重ねること十五(三五、十五)代の意。但し實際は白河院より後嵯峨院まで十七代。「離宮一百餘載」は離宮たること一百餘年の意。これも實際は寛治元年より百六十年餘りとなる。いづれも句の都合上大體をいつたのである。(これは其の中の文句である)。

【蓬の髪云々】「蓬の髪」は梳らず亂れた髪。「霜寒く」は白髪をいふ。七代(後鳥羽・土御門・順德・後堀河・四條・後嵯峨・後深草)に歷仕して、年も漸く老い、頭も白くなつたとの意。但し實氏この時は五十六歳である。

【祝ひおく初めと今日を云々】　今日を祝ひおく初めとして、千年を經るといふ松の木蔭に池水が清く澄み湛へて居るの意。始めての御幸であるから、「今日を初め」といひ、「すめる」は「澄む」と「住む」とをかけた

●吹田　攝津三島郡。大阪市の東北約二里。今東海道線停車場のある所。○山莊　山にある別莊。○おはしまさせて　お出でを願つて。○いかにせむと云々　この上はどうもてなさうかと工夫を凝すをいふ。○川　神崎川。○月の盛り　仲秋など月のよい時。○艷ありて　優美な趣があつて　○門田　門外の田。○妻どふのである。

【影うつす松にも千世の云々】　下の水に影を寫す松にも千世の榮えの影が見えて、宿の池水は今日澄み始めたの意。こゝの「すむ」も「澄む」と「住む」とをかけたのである。

【色かへぬときはの松の云々】　いつまでも色を變へない常緑の松の影を添へて、池水は千代に八千代に清く澄むの意。

また太政大臣(兼實)の津の國吹田の山莊にも、いと屢〻おはしまさせて、さまざまの御遊、數をつくし、いかにせむと、もてはやし申さる。川に臨める家なれば、秋深き月の盛りなどは、殊に艷ありて、門田の稻の風に靡くけしき・妻どふ鹿の聲・衣うつ砧の音・峰の秋風・野邊の松蟲、ゝとりあつめ、あはれそひたる所のさまに、鵜飼などおろさせて、篝火どもともしたる川の面、いと珍しう、をかしと御覽ず。日比

鹿　牝鹿を戀ひ慕うて鳴く牡鹿。○とりあつめ云々　いろいろの景色を一つに集めて、興趣を添へた。○鵜飼などおろさせ　鵜を川に放つて魚を捕ること。○をかし　面白い趣がある。○日比　しばらく數日間。○おはしまして　御滯在になつて。○歌召されし　人々に作つて出させられた。○講じ上げたる　讀みあげた。○興じ給ふ　面白がられた。○面目　名譽。○さる事　當然な事。○ほこらし　鼻が高い。

おはしまして、人々に十首の歌召されしついでに、院(後堀河)の御製、

川舟のさして何處か我がならぬ
　旅とはいはじ宿と定めむ

と講じ上げたるほど、主のおとゞ(實氏)、いみじう興じ給ふ。「(實氏)この家の面目今日に侍る」とぞのたまはする、げにさる事ほこらしくなむ。

【川舟のさして云々】　「川舟の」は所の景色を寫すと同時に、下の「さして」をいふ爲の序。「さして何處か我がならぬ」は何處と指して、それが自分の物でない所があらうか、普天の下率土の濱、總て皆我が物であるの意。一首の意は、天下到る處、總て皆自分の有であるから、かういふ勝地を宿と定めて、旅とはいふまい。卽ち實によい所であるから、旅のやうな氣がせぬといふことを強く云つたのである。

●さだ過ぎ　「さだ」は壯齢。年なとる。○愛敬づき　愛敬がある。○めでたく　立派で○時のおとな　當時の重臣。○何わざをせむと云々　どうしたらよいかと、院の御氣に召すやうなことばかりを工夫しつゝ。○いかで珍しからむと云々　何とかして珍しいことを御覽に入れようと。○もてさわぎ　騷ぎ立てる。一心になるをいふ。○はえばえしき　花やかに盛んである。○稚く　時に九歳。○はかなき云云　一寸した御遊事より外には何もなさる事がない。○攝政殿さへ若く　時に二十九歳○さぶらひ給ひて　御側に侍して居て。○亂碁　碁石ですする遊び。石彈の類。○貝おほ

おりゐ給へる太上天皇など聞ゆるは、思ひやりこそ、おとなび、さだ過ぎ給へる心地すれど、未だ三十にだに滿たせ給はねば、よろづ若う、愛敬づき、めでたくおはするに、時のおとなにて、重々しかるべきおほきおとゞ(兵實)さへ、何わざをせむと、御心にかなふべき御事をのみ、思ひまはしつゝ、いかで珍しからむと、もてさわぎ聞え給へば、いみじうはえばえしき頃なり。御門(後深草)まして稚くおはしませば、はかなき御遊わざより外の御いとなみなし。攝政殿(鷹實)さへ若くものし給へば、夜晝さぶらひ給ひて、女房の中にまじりつゝ、亂碁・貝おほひ・手球・偏突などやうの事どもを、思ひ〳〵にしつゝ、日を暮し給へば、さぶらふ人々も、うちとけにくゝ、心づかひすめり。

ひ　貝あはせのこと。貝殻を兩方に分ち、一方を地貝(ぢがひ)、他を出貝(だしがひ)と稱し、出貝を、俯向けた地貝に合せて、多く合せたものを勝とするもの。○偏突　詩句などの字の旁(つくり)だけを見せ、その偏(へん)をあてさせること。

●節會　朝廷に於ける恒例の宴會。元日・白馬・踏歌の類。○臨時の祭　加茂・石清水などの祭。○公事　宮中の儀式○女房にまれば　女官どもに其の眞似をさせて遊ばれるをいふ。○笏　束帶の時、右手に持つもの。木(柾・櫟・櫻・柊など)又は象牙で作る。長さ一尺二寸、天子のは上が一文字、臣下のは稍〻圓い。○

【おりゐ給へる太上天皇云々】　太上天皇といふから、想像すると、年よりのやうだが、まだ三十未滿の方だの意。○實際はこの時三十二歳である。

【さぶらふ人もうちとけにくゝ云々】　實經が餘りお側に居り過ぎるので、おつきの女房などは、うち解けることも出來ず、心づかひをするだらう。

節會・臨時の祭、何くれの公事どもを、女房にまねばせて、御覽ずれば、太政大臣(實兼)興じ申し給ひて、殊更小さき笏などを造らせて、數多奉り給へば、上(後深草)も喜びおぼす。入道太政大臣(西園寺公經)の御女、大納言三位殿といふを關白になさる。按察の典侍・隆衡の女・大納言典侍・中納言典侍・勾當內侍・辨內侍・少將內侍、かやうの人々、皆男のつかさにあてて、その役をつとむ。いとからい事とて、わびあへるもをかし。

中納言の典侍を權大納言實雄の君になさるゝに、襪（したうづ）はく事、いかにも叶ふまじとて、曹司（ざうし）におるゝに、上（後深草）もいみじう笑はせ給ふ。辨内侍、葦の葉にかきて、かの局（つぼね）にさしおかせける。

津の國のあしの下根のいかなれば
浪にしをれて亂れ顏なる

かへし、

津の國のあしの下根（したね）の亂れわび
心もなみに浮きてふるかな

【中納言の典侍を權大納言實雄の君に云々】各女官を當時の官人にあてはめて、中納言典侍を實雄にあてられたのである。

【襪はく事いかにも叶ふまじ云々】襪なんか穿くことは、とても出來ないからといふので、逃げたのである。

關白になさる　遊戯の時、假に關白となされるのである。○男のつかさ　關白など男子のなる役。○からい事　カラキコトの音便。つらい事。○わびあへる　皆が迷惑がる。○襪　東帶の時、はく足袋。○曹司　部屋。○おるゝ　引き退く。○かの局　中納言典侍の部屋。○さしおかせける　おかせた。

五月五日、所々より、御冑（かぶと）の花・藥玉（くすだま）など、いろ〳〵に多くまゐれり。朝餉（あさがれひ）にて、人々これかれ引きまさぐりなどするに、三條大納言公親（きんちか）の奉れる根に、露おきたる蓬（よもぎ）の中に、「ふかき」といふ文字を結びたる、絲の樣もなよびかに、いと艶（えん）ありて見ゆるを、上（後深草）も御目とゞめて、「何とまれ言へかし」との給ふを、人々も、およすけて見奉るを、辨内侍、

【津の國のあしの下根のいかなれば云々】「津の國の」はアシに冠する枕詞。「あし」は葦と足とをかけた語。「いかなれば」はどうして。襪をはきかれて、どうしてまアそんなに萎れて居られるのですかなどの意。「み」とをかけた語。襪をはきかれて困つた爲に、心まで浮々と亂れましたの意。

【心もなみの云々】「心もなみの」ナミは「浪」と「無」

●冑の花　紙で冑の形を作りそれに花の形をつけたり、紙人形を据ゑたりするもの。○藥玉　種々の香料を錦の袋に入れ、絲で飾つて、造花をつけ、五色の絲を垂れ、麝や柱にかけるもの。邪氣をはらふといふ。○朝餉　朝餉の間。清涼殿の一部。天子の供御を召しあがる所。○引きまさぐり　引張り弄ぶ。○公親　藤原實親の子、○根　菖蒲

の根。○なよびか　なよなよとして居ること。○何とまれ言へかし　その根について、何とか一つ歌を詠んで見よの意。○およすけて　ませて。○ありつる使　件の使者。○藏人　禁中の近習の職。秘密の文書及び諸訴を掌り、又天皇の御衣・御膳の事から儀奏其の他殿上一切の事を掌るもの。○返り「かへし」に同じ。返歌。

あやめ草そこしらぬまの長き根に
　深きといふや蓬生の露
と、ありつる使、早やかへりにければ、藏人を召して、殿上より遣しけり。御返り、公親、
あやめ草そこしらぬまの長き根を
　ふかき心にいかゞくらべむ

【露おきたる蓬の中に云々】端午の節句には菖蒲と蓬とを用ひるので、この時も公親が菖蒲と蓬とを奉つた。ところがその菖蒲の根に添へてある蓬には、美しい露がかゝつて居て、それに又「ふかき」といふ字を書いたものが練絲で結びつけてある。その樣がいかにも艶麗である。それがお目にとまつたのである。

【あやめ草そこしらぬまの長き根に云々】底も知れぬ程深い沼で取つた長い菖蒲の根だといふので、それにつけて、あなたは心が深いと仰つしやるかも知れませんが、私にはまだあなたの御心の底は分りません、それがお目にとまつたものであるかの意。共に戀の意に取りなしたのである。

●その頃　建長五年の三月。○天王寺　今、大阪市南區にあるもの。聖徳太子の創建。但し現今のは文化九年の建築にかゝる。○住吉　攝津東成郡住吉村住吉神社。今、官幣大社。○參り　住吉へ。○出車　車の簾の下から女房の美しい袖口を出して乘れるをいふ。○いどみつくされたり　美を競へるをいふ。○狩襖　狩衣のこと。○裾濃の袴　上を薄くし、下を次第に濃く

よもやそんな事はありますまいの意。「しらぬま」は「知らぬ」と「沼」とをかけ、「蓬生」に「よもや」の意をかけたのである。

【あやめ草そこしらぬまの長き根を云々】上旬は辨内侍の句をそのまゝ受け、その根が長いと云つたところで、どうして此の私の心の深さに比べられませうの意。共に戀の意に取りなしたのである。

又その頃、天王寺に院（後堀河）の詣でさせ給ふついでに、住吉へも御幸あり。「神はうれし」と、後三條院仰せられけむためし、思ひ出でられ侍りき。大宮院（姞子）も御參りなれば、出車どもく、いろ〳〵の袖口ども、春秋の花紅葉を、一度にならべて見る心地して、いと美しく、目も耀くばかり、いどみつくされたり。上達部・若き殿上人などは、例の狩襖・裾濃の袴など、珍しき姿どもを、心々にうちまぜたり。釣殿の簀子に、人々さぶらひて、數多聞えしかど、さのみはい

して染めた指貫。○心々にうちまぜたり　銘々がいろ〳〵な服裝をして居るをいふ。○簀子　縁。○數多聞えし云々　詠んだ歌が澤山あつたが、すつかりはとても言へない。

●ぬし　氏などいふと同意。○四條院　四條帝の宮。○忍び〳〵云々　内々御寵愛になるをいふ。○おしけたれて　おし退けられて。○光り出で　お生れになる。○思ひ絶えぬる御契のほど　とても帝位には卽かれぬと斷念せられたこと。○私物　特に愛するもの。○源氏にや云々　源氏の姓を賜うて臣下に列せられること。○猶ほ飽かねば　それでも猶ほ思ふやうでないから○只御子にて云々　只親王として關東の將軍にしようと。○御冠　元服。○ほと〳〵殆ど。○藏司　内藏寮（くられう）のこと。中務省の被官禁中の調度・寶物等を掌るもの。

かでか。太政大臣實氏

今日や又更に千歳を契るらむ

むかしにかへる住吉の松

【神はうれしと云々】延久五年十二月二十五日、後三條帝住吉行幸の時の御製「住吉の神もうれし（又あはれ）と思ふらむ空しき船をさして來つれば」とあるを指す。

【今日や又更に千歳を云々】住吉の松は嘗て後三條帝に對して千歳の榮えを契つたが、今又昔に立ち還つて、同じく千歳を契るであらうの意。

さても、院（後嵯峨）の第一の御子（宗尊）は、右中辨平の棟範のぬしの女（棟子）、四條の院に兵衞内侍とて候ひしが、劒璽につきて渡り參れりしを、忍び〳〵御覽じけるほどに、その御腹にいでものし給へりしかど、當代（後深草）生れさせ給ひにし後は、おしけたれておはしますに、又建長元年、后腹（大宮院）に、二の宮（龜山）さへ、さし續き光り出で給へれば、愈〻今は思ひ絶えぬる御契のほどを、私物に、いとあはれと思ひ聞えさせ給ふ。源氏にやなし奉らましなどおぼすに、猶ほ飽かねば、只御子にて、あづまのあるじになし聞えてむとおぼして、建長四年正月八日、院（後嵯峨）の御前にて御冠し給ふ。御門（後深草）の御元服にも、ほと〳〵劣らず、藏司、何くれ、きよらを盡し給ふ。やがて三品の位たまはり給ふ。御年十一なるべし。中務卿宗尊親王と申すめり。

【右中辨平の棟範の女云々】帝王編年記・皇胤紹運錄・吾妻鏡等によると、棟子の系圖は左の如くなる。

範家―棟範―棟基―棟子

卽ち本書は孫とすべきを誤つて子としたのであらう。

【劒璽につきて云々】この兵衞内侍は、もと四條帝の宮に居て、兵衞内

侍と呼ばれて居た人であつたが、その後、後嵯峨帝卽位の際、劻勷について參られた。所が、それを內々御寵愛になつて居る程に、宗尊親王が出來たのである。併し後深草や龜山が生れられては、自然この方は帝位の御望も斷念せられねばならなかつたが、それでも後嵯峨院は非常にこの方を愛して居られたので、遂に將軍とせられたのである。○棟子の寵が衰へたのではない。左に便宜の爲、大日本史（卷八十三）を引く。「帝卽レ位。寵幸日遲。寬元三年二月爲二典侍一後叙二三位一稱二宰相三位一。宗尊爲二征夷大將軍一。棟子方叙二從二位一稱二大納言二位局一。尋並二從一位一。準二三宮一。」

同じ二月十九日に都を出で給ふ。その日、將軍の宣旨（せんじ）かうぶり給ふ。かゝるためしは、未だ侍らぬにや。上下珍しく、面白き事にいひ騷ぐべし。御迎へに、あづまの武士（もの）どども數多上り、六波羅（ろくはら）よりも、名あるもの十人、御送りに下る。上達部・殿上人・女房など、數多參るも、「院中の奉公にひとしかるべし。彼處に候ふとも、限りあらむ官冠（つかさかうぶり）などは障りあるまじ」とぞ仰せられける。何事も、只人柄による と見えたり。際（きは）ことによそほしげなり。誠に、おほやけとなり給はずば、是れより勝ること何事かあらむ。にぎはゝしく、花やかさは、ならぶ方なし。院の上（後嵯峨）も、しのびて、粟田口（あはたぐち）のほとりに御車立てて、御覽じ送りけるこそ、あはれにかたじけなく侍れ。きびはに美しげにて、遙々とおはしますを、御母の內侍（子樣）も、あはれにかたじけなしと、思ひ聞ゆべし。かゝれば、もとの將軍賴嗣三位中將は、その四月に、都へ上り給ひぬ。いとほしげにぞ見え給ひけり。さて、今下（くだ）り給へる（宗尊）を、もて崇（あが）め奉る樣、いはむ方なし。宮の中のしつらひ、御設の事など、限りあれば、善

●かゝるためし　皇子の將軍となられたこと。○御迎へに　鎌倉より宗尊を。○上り　京都へ。○六波羅　鎌倉幕府の出張所のやうなもの。檢斷の居る所。今、京都下京區六波羅蜜寺・方廣寺の邊。○院中の奉公に云々　鎌倉へ行つても、院で仕へて居るのと同じだらうの意。○彼處　鎌倉。○限りあらむ　定まつた○官冠　官位。○障り　差支その爲に昇進のおくれることはないの意。○際ことに　格別に。○よそほしげなり　立派である。（親王の樣子）。○おほやけ　天子。○是れより　將軍となるより。○しのびて　コツソリと。○粟田口　山城愛宕郡。京都と關東との通路にあたる。○御車立てて　御車を止めて。○きびは　幼少。○いとほし　いたはし○宮　鎌倉の御殿。○しつらひ　裝飾。○設　設備。○限りあれば　最上至極であるから。

見天の珠妙の莊嚴（しやうごん）もかくやとぞ覺えける。かやうにて今年は暮れぬ。

【もとの將軍頼嗣三位中將は云々】保暦間記に「建長四年三月二十日、頼嗣將軍上洛し給ふ。其の故は佐々木氏信怪しき事ありければ、了行法師を召捕へて是れを進ず。尋ね問ふ處に、先將軍（頼經）京都にて世を亂らんとある由聞えければ、彼御一族僧俗太多敷勘を蒙り給ひき。然る間、當將軍をも上せ奉りけりと云々。同四月一日、後嵯峨院四の宮、中務卿宗尊親王と申すを請下し奉り、征夷將軍とす。宮の將軍にて下らせ給ふ始なり」。

【善見天の珠妙の莊嚴】第四禪天の中に「善見天」といふのがあるが、こゝは多分忉利天の「善見城」のことであらう。忉利天は三十三天と譯し、須彌山の頂にあるもの、善見城はこゝにあつて、帝釋天王の居る所である。そして其の中央に殊勝殿（皮禪延多或は毗闍延といふ）といふものがある。長さ五百由旬、廣さ二百五十由旬、七萬七百の部屋があつて、その一々に七人の天女が居るといふ。本文に「珠妙」とあるのは、この殿を誤つたのであらう。

明くる年は、建長五年なり。正月十三日、御門（後嵯）御冠（かうぶり）給ふ。御年十一、御諱久仁と申す。いとあてにおはしませど、餘りさゝやかにて、又御腰などの、あやしく渡らせ給ふぞ、口惜しかりける。いわけなかりし御程は、尚ほいとあさましうおはしましけるを、閑院の内裏焼けにまぎれより、うるはしく立たせ給ひたりければ、内の焼けたるあさましさは何ならず。この御腰の直りたる喜（よろこび）をのみぞ上下おぼしける。

【正月十三日】百練抄（第十六）に「建長五年正月三日壬午。主上御元服儀也（御年十一）。云々。四日癸未。御元服後宴也」。とある。帝王編年記の如きも同様であるから、本文の記事は誤であらう。

●あて　貴くみやびやかなこと。○さゝやか　小さい。○御腰などの云々　腰が悪くてヨボ〳〵されるをいふ。○いわけなかりし　幼少。○あさましう　御病氣がひどく。○まぎれ　混雑。○閑院の内裏焼けける　寛治三年二月のこと、二一四頁を見よ。○うるはしく　完全に。立派に。○内　内裏。○何ならず　どうでもよい。○上下　上も下も

●神無月　十月。建長二年十月十三日。○朝覲の行幸　天皇が上皇・皇太后の宮に行幸して拜し給ふこと。○仕うまつる　御供した。○菊紅葉裝束の染色。○女院もおはしませば　鳥羽殿に。○拜し奉り給ふ　後深草が。○人わろきほどなる　人に見られて、きまりが悪い程出た。○大方の世　世間普通のこと。○我が御末　我が子孫。○高麗唐土の綾錦云々　特にすぐれた服裝をいふ。○たちかさねたり「裁(た)ち重ぬ」に「襲(かさ)ぬ」をかけた語。○ねび　年が行つて居る。○著給へるしも　シモは只強める助辭。○なまめかし　優美。○唐のよそひ　支那風の艤裝。

院の上(後嵯峨)、鳥羽殿におはします頃、神無月の十日頃、朝覲の行幸し給ふ。世にある限りの上達部・殿上人仕うまつる。いろ〳〵の菊・紅葉をこきまぜて、いみじう面白し。女院(子)もおはしませば、拜し奉り給ふを、太政大臣(兼實)見奉り給ふに、喜の涙ぞ、人わろきほどなる。

例なき我が身よいかに年たけて
かゝるみゆきに今日仕へつる

實に大方の世につけてだに、めでたくあらまほしき事どもを、我が御末と見給ふおとゞ(兼實)の心地、いかばかりなりけむ。來し方も例なきまで、高麗・唐土の綾錦をたちかさねたり。太政大臣(兼實)ばかりぞねび給へれば、裏表白き綾の下襲を着給へるしも、いとめでたくなまめかし。池には、

○のゝしり　喧しくいひさわぐ。○ひゞき　騒ぎ。○ゆゝしさ　甚だしさ。○御心ゆきて　愉快に。滿足に。

●その頃ほひ　建長二年十一月十一日。○棧敷　見物の時設ける假床。○いどみかはす　互に競爭する。○車は立てぬ云々　車を路傍に立てて拜觀することはさせない筈であ

美はしく、唐のよそひしたる御船二艘漕ぎ寄せて、御遊さまざまの事ども、めでたくのゝしりて、歸らせ給ふひゞきのゆゝしさを、女院(子)も御心ゆきてきこしめす。

【例なき我が身よいかに云々】　年老いて、今日かういふめでたい行幸に逢ひ奉るとは、まア何といふ幸福な我が身であらうの意。「例なき我が身」は例なき幸福なる我が身の意。

【實に大方の世に云々】　位人臣を極めた自分は、只これだけでも世間普通の人のめでたくあらまほしき事であるのに、まして女院を女(むすめ)に持ち、帝を孫に持ち奉る實氏の心の中は、どうであらうの意。

その頃ほひ、熊野の御幸(ごかう)侍りしにも、よき上達部、數多仕うまつらせ給ふ。都出でさせ給ふ日、例の棧敷(さじき)など、心ことにいどみかはすべし。車は立てぬ事なりしかど、大宮院(子)ばかり、それも、出車(いだしぐるま)はなくて、只一輛にて見奉り給

つたが。○出車はなくて　供の女房の車などはなかつたないふ。出車は二三一頁を見よ。○やむごとなさ　尊いこと。○竹柏　梛とも書く。一位科暖地自生の常緑樹。○かしこさに　恐れ多いために。○本宮　紀伊東牟婁郡。熊野川の左岸。新宮を距ること水程九里、陸路七里。今、國幣中社熊野坐神社がある。○新宮　今、新宮町といふ所。同郡。熊野川の末七里濱の南部。○さし渡す　川が狹いほど、卽ち川一杯に船のつゞくないふ。○瀨切　早瀨。○杉船　杉で造つた船。○邊浪　船のへりに打ちかゝる波。○御幸　同じく熊野へ。百練抄に建長七年三月八日出發　四月一日還御の記事がある。是かも知れない。○なか〳〵にこそ　却つて煩はしからうから、いふまいの意。尼の語。

ひしこそ、やむごとなさも、面白く侍りけれ。辨の內侍、

折りかざす竹柏（なぎ）の葉風のかしこさに
　ひとり道ある小車のあと

御幸、熊野の本宮（ほんぐう）につかせ給ひて、それより、新宮（しんぐう）の川船に奉りて、さし渡すほど、川の面、所せきまで續きたるも、御覽じ馴れぬ樣なれば、院の上（後鳥羽）、

熊野川瀨切に渡す杉船の
　邊浪（なみ）に袖のぬれにけるかな

その後も、又程なく御幸ありしかば、女院（坦子）も參り給ひけり。皆人しろしめしたらむ事、なか〳〵にこそ。

【折りかざす竹柏の葉風の云々】「竹柏」は熊野山に多くある樹。よつて之れを折りかざすとは、熊野に詣でること。「ひとり道ある小車のあと」は女院の只ひとり見物に行かれたことをいふ。さて、熊野に詣で給ふに、神威を恐れて、物見車などを禁ぜられたところが、女院は只ひとり御供もなくて御見物になつた。實にやむごとないことであるの意。

【熊野川瀨切に渡す云々】熊野川の早瀨を杉船で渡るに、船のへりに打ちかゝる波の爲に袖がぬれた。

(1)

●夏たけ　夏が盛りを過ぎる（夏去りの意に使つたのである）。○女御に參り給ふ　後深草の。○過ぐし給へる程　帝は十四であるから、年齢の長じ給へるをいふ。○豐明　豐明の節會（せちゑ）。十一月新嘗祭の翌日、天子の新穀を聞召す儀式。○内わたり　禁中「わたり」はあたり。○いとゞ打ち添へて　豐明の上に又女御入内の儀が添はつたので一入。○今めかしう　當世風に花やかで。○御消息　天皇より女御へ。○關白書かせ給へり　帝の代筆をされた。○紅の匂　上を濃い紅とし、下を薄くぼかした薄様。○薄もなき　金銀の箔を押さぬをいふ。○八重に重ねたるを云々　幾重にも折り重ねたのを結んで其の上を又他の紙で包むをいふ。

第七　おりゐる雲

春すぎ夏たけて、年さり年きたれば、康元元年にもなりにけり。太政大臣（實氏）の第二の御女（東二條院公子）女御に參り給ふ。女院（嬉子）の御同胞なれば、過ぐし給へる程なれど、かゝる例は數多侍るべし。十一月十七日、豐明の頃なれば、内わたり花やかなるに、いとゞ打ち添へて、今めかしう、めでたく、その日、御消息を聞え給ふ。

夕ぐれにまつぞ久しき千歳まで
かはらぬ色のけふのためしを

關白（兼平）書かせ給ひけり。紅の匂の薄もなき、八重に重ねたるを、結びて包まれたり。

(1)

(2)

●時なりぬとて　時刻となつたといふので。○裏濃き蘇芳　五衣の色目。蘇芳は紅の稍〻紫がかつたもの。下註參照。○七　七領を重ねる意。○濃き單　濃き紅の單。五衣の下に著るもの。○表著　五衣の上に著る。○唐衣　表著の上に著る。○濃き袴　濃き紅の袴。○皆紅の八　表裏共に紅の五衣を八領重ねること。○御童　附添の童女。○下仕　下女。○はした　はしたものの略。召使の女。下仕よりは稍〻上のもの。○雜仕　雜役

【夕ぐれにまつぞ久しき云々】　千歳まで變らぬ松の色のやうな、めでたい今日の入内を待遠しく思ふの意。「まつ」は「待つ」と「松」とをかけた語。「夕ぐれに」は入内が夜であるから、いつたのである。

時なりぬとて、人々參上り集まる。女御の君（公子）裏濃き蘇芳七・濃き單・蘇芳の表著・赤色の唐衣・濃き袴奉れり。准后（貞子）そひてまゐり給ふ。皆紅の八・萌黄の表著・赤色の唐衣着給ふ。出車十輛、皆二人づつ乘るべし。一の車、左に一條殿（大殿のむすめ）、右に二條殿（公としの大納言のむすめ）、二の左按察君（隆衡の女）、右に中納言の君（實たふの女）、三の左に民部卿殿、右別當殿、その次次、くだ〳〵しければ、止めつ。御童・下仕・御はした・雜仕・御樋洗などいふものまで、貌よきをえりとゝのへられたる、いみじう見所あるべし。御兄の殿ばら、右大臣（公相）・内大

(2)

臣公基參り給ふ。限りなくよそほしげなり。院(後堀河)の御子にさへしたてまつらせ給へれば、いよ〳〵いつかれ給ふさま、いはむ方なし。待賢門院(子)の、白河院の御子とて、鳥羽殿にまゐり給へりしためしにやとぞ、心あてにはおぼえ侍りし。御門の一つ御腹の姫君(子)、この頃、皇后宮とて、その御方の内侍ぞ、御使にまゐる。參上り給ふほども、女御(公子)は、いとはづかしく、似げなき事に思したれば、とみにはえ動かれ給はぬを、人々そゝのかし申し給ふ。御太刀一條殿、御儿帳按察使殿、御火取中納言持たれたり。上(後堀河)は、十四になり給ふに、女御(公子)は二十五にぞおはしける。御門(後深草)きびはなる御程を、なか〳〵あなづらはしき方に、思ひなし聞え給ひぬべかりつるに、いとざされて、つゝましげを勤める身分の卑いもの。○樋洗　便器の掃除をするもの　○えりとゝのへ　選び整へる　○見所　見ばえ。○院の御子に云々　この女御を後嵯峨院の猶子とし給へるをいふ。○いつかれ　大切にされる。○心あて　推量。○一つ御腹　同腹。○皇后宮とて　此の頃は皇后宮と呼ばれて居られるが、そこからの意。○參上り云々　入内し給ふ時。○似げなき事　似つかはしからぬこと。あまり年の違ふをいふ。○とみに　直に。○そゝのかし　すゝめる。○御太刀一條殿　御太刀は一條殿が持たれたの意。○几帳　臺に柱があつて帷をかけるやうにしたもの。座側に立てて内外を遮るもの。○火取　香をたく薫爐　○なか〳〵　却つて。下の「いとざされて」にかゝる。○あなづらはしき方に云々　帝がお小さいので、女御が侮られるやうであつたところが。○ざされて　戯れて。○つゝましげならず　恥しげもなく。○聞えかゝり給ふ　話しかけられる。○衾　夜具。○うつくし　愛らし。○紅の打　打は砧で打つて光澤を出した絹。○八四方　「八の(幅)」の誤かといふこのまゝでは分らない。○上刺の組　組絲で碁盤の目のやうに刺し縫ひ、飾としたもの　○きよら　美しい。○例の事なれば　先例のあることなれば。○奉り給ふ　衾を覆ふをいふ。○勸盃　酒をすゝならず聞えかゝり給ふを、准后(子)は、うつくしと見奉らせ給ふ。御衾(ふすま)は、紅の打八四方なるに、上(うは)には上刺(うはざし)の組(くみ)あり、絲の色など、きよらにめでたし。例の事なれば、准后(子)奉り給ふ。太政大臣(兵實)も、三日が程は候ひ給ふ。上達部に勸盃(くわんぱい)あり。

【裏濃き蘇芳】　五衣(いつゝぎぬ)は平安朝時代の貴婦人又は女官の正裝。五衣とはいふが、必ずしも五重には限らない。そして普通は同色のものを重ねる。その著方は、下のもの程少しづつゆきが長く、著てしまへば、重なつて見えるやうにし、その上に表著(別色)を著し、更に唐衣を著するのである。

【待賢門院の白河院の御子とて云々】　愚管抄(卷四)に「白河院はかの公實(大納言藤原公實)の女をとりて、御子にして持たせ給へりけるを、鳥羽院に入内立后しておはします。待賢門院と申す是なり」。

【御門の一つ御腹の姫君】　「仙華門院」のこと。女院小傳に左の如くある。

めること。酒宴。

女の正裝

（國史大辭典による）

●また御消息まゐる　後朝（きぬぎぬ）の使といつて、結婚の翌朝、男の方から手紙を贈る。それをいふ。○こたみ　此度。○御手　筆跡。○鷹司殿の云々　鷹司家（今公爵）は攝平から始まるの意。○女の裝束云々　女の裝束一具に細長を添へて祝儀とせられたの意。○細長　桂（うちき）の類、大領（おほくび）なきもの女の著用。

仙華門院（曦子）。土御門第二女。今上御妹云々。母中納言有雅女。寛元二十二十六（二年十二月十六日）爲二内親王一云々。寶治二八八爲二皇后宮一」

すると、この「御門」は後嵯峨のことであるから、隨つて「院」とすべき所である。又後嵯峨の母は「贈皇后宮通子。贈左大臣通宗女」（皇胤紹運錄）であるから同腹でもない。こゝの記事は誤であらう。

二十三日、また御消息まゐる。御使頭中將通世（とうのちうじやうみちよ）、こたみも、殿（攝平）書かせ給ふめり。この頃、殿と聞ゆるは、太政大臣攝平のおとゞ、岡屋殿（攝）の御弟ぞかし。後には稱念院殿と申しけり。御手勝（てすぐ）れて、めでたく書かせ給ひしよ。鷹司殿の御家のはじめなるべし。

朝日影今日よりしるき雲の上の
空にぞ千世の色も見えける

●おしなべたらぬ　なみ〳〵ならぬ。歴々の。○もちひの使　三日の餅として、餅を持つて女の所へ行く使。○夜の御殿　御寝室。○取り入れ給ふ　その餅を。○御心の中云々　父たる實氏の心中の喜は、さぞかしと推測られる。○祿　祝儀として下さるもの。○紅梅の匂　襲の色目の名。紅梅に薄紅梅を重ねたもの。○蒲萄染　紫の薄いもの。○腰差　祿に賜はる卷絹。腰に差して退出するよりいふ。○しなじな　身分階級。○けぢめ　等差。

●正月　正嘉元年正月二十九日のこと。○たゞ人　攝關ならぬ人。○國母　天子の母。（今日、皇后ないふは誤）。○立ち續き　大宮院は國母、公子は中宮である。○御子二人云々　公相は右大臣、公基は內大臣。○大將にも云々〳〵左近衞大將、右近衞大將であつ

御返し、太政大臣（實氏）聞え給ふ。

朝日影あらはれそむる雲の上に
　ゆくする遠き契をぞしる

女の裝束、細長添へてかづけ給ふ。

【朝日影今日よりしろき云々】「しろき」は明かなる。但し「しろく見えける」とかゝると見た方がよからう。千世の契を結ぶべき氣色は、雲の上高く差上る朝日影にも今日から明かに見えるの意。「雲の上」は文字通りの意の外に、禁中の意をかけたのである。

【朝日影あらはれそむる云々】朝日が差上る長閑な空の氣色によつて、行末長き契なることを知るの意。「雲の上」には前と同じく禁中の意がかゝつて居る。

今日始めて內の上（後深草）、女御（公子）の御方にわたらせ給ふ。御供に關白殿（兼平）・右大臣（公相）・內大臣（公基）・四條大納言隆親・權大納言實雄・良敎・通成・左大將基平など、おしなべたらぬ人々參り給

ふ。もちひの使、頭中將隆顯仕うまつる。太政大臣（實氏）夜の御殿（おとど）より取り入れ給ふ。御心の中の祝、いかばかりかとおしはからる。人々の祿、紅梅（こうばい）の匂・萌黄（もえぎ）の表著（うはぎ）・蒲萄染（えびぞめ）の唐衣・袿（うちき）・細長（ほそなが）・腰差など、しなじなに隨ひて、けぢめあるべし。

かくて、今年は暮れぬ。正月いつしか后（きさき）に立ち給ふ。たゞ人の御殿（おとど）の、かく后、國母（こくも）にて、立ち續き候ひ給へる、例（ためし）稀にやあらむ。おとゞ（實氏）の御榮なめり。御子二人、大臣にておはす。公相・公基とて、大將にも、左右にならびておはせしぞかし。これも例いと數多は聞えぬ事なるべし。我が御身（實氏）太政大臣にて、二人の大將（公相・公基）を引き具して、最勝講なりしかとよ、參り給へりし御勢のめでたさは、珍

たないふ。○引き具して　引き連れて。○最勝講なりしかとよ　最勝講であつたか、そこへ參つた。○御勢のめでたさ　御威勢の盛んなこと。○うつはものに云々　うつはものに云々　うつはものは器量。十分それだけの器量はあるの意。○下野君　信濃日吉禰宜元仲の女。後鳥羽院に仕へて居た人。○さる世の古き人にて　後鳥羽院に仕へた程の古い人だが。○自らも　實氏自ら。

らかなる程にぞ侍りし。后(子)・國母(子)の御親(おや)、御門(後嵯峨)の御祖父(おほぢ)にて、誠に、そのうつはものに足りぬと見え給へり。昔、後鳥羽院に候ひし下野の君は、さる世の古き人にて、おとゝ(資氏)に聞えける。

藤なみのかげさしならぶ三笠山
　人に越えたるこずゑとぞ見る

かへし、おとゝ(資氏)、

思ひやれ三笠の山の藤の花
　咲(さ)きならべつゝ見つるこゝろを

かゝる御家(おほえ)の榮を、自らもやむごとなしと思(おぼ)し續けて、よみ給ひける。

春雨は四方(よも)の草木をわかねども
　しげきめぐみは我身なりけり

【今日始めて云々】　所謂露顯(ところあらはし)のこと。今日の披露式に相當するものである。但し女の方で行ふので、大抵は結婚後三日或は四五日位の所でする。そして、この日、三日の餅といふものを持つて行くのである。

【藤なみのかげさしならぶ云々】　「藤なみ」は藤氏の意「三笠山」は大將・中將・少將の異名。但しこゝは大將の意で、公相・公基の兩大將を指す。

【思ひやれ三笠の山の云々】　二人の子を大將として並べ見る私の心の喜を察せよの意。

【春雨は四方の草木を云々】　春の雨は四方の草木に分け隔てなく、すべてにわたつて注ぐ如く、君のめぐみは天下の人すべてに廣く行きわたつて居るが、その中でも、私は殊に深い惠を受けて居るの意。

●御惱　御病氣。○何かと

正嘉元年の春の頃より、承明門院(子)御惱おもらせ給へば、

院（後堀河）もいみじう驚かせ給ひて、御修法何かと聞えつれど、遂に七月五日、御年八十七にて、かくれさせ給ひぬ。理りのお年のほどなれど、昔の御名殘と、あはれに、いとほしう、いたづき奉らせ給ひつるに、あへなくて、御法事など、ねんごろにおきての給はする、いとめでたき御身なりかし。明くる年八月七日、二の御子亀山の院坊に居給ひぬ。御年十なり。よろづ定りぬる世の中、めでたく、心のどかにおぼさるべし。

その又の年、正嘉三年三月廿日なりしにや、高野御幸こそ、又來し方・行末も例あらじと見ゆるまで、世のいとなみ、天の下のさわぎには侍りしか。關白殿（鷹司）・左右大臣（公相・公基）・内大臣（實雄）・左右の大將（基平・公親）、檢非違使の別當（隆行）をはじめて、

何やかやと。○聞えつれど行はれたが。○理りの御年のほどなれど　御老年のことであるから、御年には不足はないがの意。○昔の御名殘と　御鳥羽院の后で、昔の古いお方であるからといふので。○いとほしう　御氣の毒で。○いたづき　介抱。○あへなくて　その甲斐もなく。（崩御になつたのでの意を含む）。○ねんごろに　鄭重に。○おきての給はする　「おきつ」（タ、下ニ）は定め營む。營まれたことはの意。○めでたき御身　結構な御身。承明門院を指していふ。○坊　春宮坊。○よろづ定りぬる　最早皇太子も定り、萬事よく定り整つた。○おぼさるべし　後嵯峨院が

殘るは少し。馬・鞍、隨身・舍人・雜色・童の髪かたち・たけ・すがたまで、かたほなるなくえりとゝのへ、心を盡したるよそほひども、數々は筆にも及びがたし。かゝる色もありけりと、珍しく驚かるゝほどになむ。白銀・黄金を延べ、二重・三重の織物・縫物、唐・大和の綾錦・紅梅の直衣・櫻の唐衣、思ひ〳〵の衣を出だせり。いかなる立田姫の錦も、かゝるたぐひは、ありがたくこそ見え侍りけれ。かたみに語らふ人はあらざりけめど、同じ紋も色も侍らざりけるぞ不思議なる。餘りに染めつくして、某の中將とかや、紺叢濃の指貫をさへぞ着たりける。それしも珍らかにて、賤しくも見え侍らざりけるとかや。院（後堀河）の御樣貌・事柄は、い

●高野　紀伊伊都郡。○世のいとなみ　世の中の大事件。○舍人　牛車の口取。○童　召使の子供。○髪かたち　髪のゆひかた。○たけ　身長。○すがた　容貌。○かたほなるなく　「かたほ」は不完全。不揃で見苦しいやうなことなく。○えりとゝのへ　選び整へ。○數々は　一々は。○かゝる色も云々　こんな立派な色もあつたものかと、珍らしさに、驚かれるほどである。○白銀黄金を延べ　金銀を延べ打つて裝飾とする。○二重三重の織物　二重は紋のある織物の上に縫をしたもの。三重は二重織物の上に更に飾を施したものであらう。○縫物　縫取したもの。○紅梅　染

色の名。桃色の濃きもの。○櫻の唐の綺　唐の綺は薄い唐綾で、いろ〳〵の絲を以て紋を織り出したもの。櫻は、その地を白にして、之れに赤（又蘇芳など）の裏をつけたもの。○浮線綾　紋の絲を浮せて織つた綾。○表衣　袍。○立田姫の錦　紅葉をいふ。○ありがたく　珍しい。○かたみに　互に。○語らふ　相談する　○餘りに染めつくして　餘り色々と染方を考へ、遂に染方がなくなつて。○紺叢濃　紺で所々或は濃く或は薄く、むらに染めたもの。○それしも　それも。○光を添へて　光彩を添へて。○さりぬべく　然るべしと、よからう、などの意。○除目の夜　任官の公事のあつた日の夜。○殿　定通の家。○心づかひ　心配。○心もとなく　待遠しく。○引きたがへて　相違して。○先に聞えつる　前にいつた。○公基のおとゞ云々・あの公基のおとゞであつたらうかの意。○なり給ひ　大將に。○いとほしく　ふびんに。○あへなし　氣の毒。○かの室　顯定の籠つて居る所。○かの庵　顯定の居る所。○砂子　砂。○我が身　顯定。○桂の葉室の山莊　山城葛野郡衣笠山東麓、もと藤原光賴の居た所。○見えじ　顯定が院に。○からい　「からき」の音便、無情な。○御心ゆく事ひまなく　始終愉快に遊びまはられるをいと光を添へて、めでたく見え給ふ。後土御門の內大臣定通の御子の顯定の大納言、大將望み給ひしを院（後嵯峨）もさりぬべく仰せられければ、除目の夜、殿の內のものどもも、心づかひして侍るを、心もとなく思ひあへるに引きたがへて、先に聞えつる公基のおとゞにておはせしやらむ、なり給ひしかば、怨に堪へず、頭おろして、この高野に籠り居給へるを、いとほしく、あへなしと思されければ、今日の御幸のついでに、かの室を尋ねさせ給ひて、御對面あるべく仰せられつかはしたるに、昨日までおはしけるが、夜の間に、かの庵をかき拂ひ、跡もなくしなして、いと清げに、白き砂子ばかりを、殊更に散らしたりと見えて、人もなし。我が身は、桂の葉室の山莊へ逃げのぼり給ひにけり。その由を奏しければ、「（後嵯峨）今更に見えじとなり、いとからい心かな」とぞその給はせける。

【後土御門の內大臣定通の御子云々】　こゝは只顯定の院に見えずに逃げたことをいふ爲に、その以前のことから說起したのであるが、少し句の長い爲に分りにくい。で便宜の爲簡潔な大日本史の文を引くこととする。「定通正二位內大臣。子顯定。建長中爲二正二位權大納言一。顯定欲レ兼二近衞大將一。請二之後嵯峨上皇一。上皇頗許レ之。既而藤原公基兼二大將一。顯定慙恨。削髮隱二高野一。後上皇幸二高野一。欲レ見二顯定一。使二人往復一。則室中無レ人。唯散二白砂一耳。上皇不レ懌。世稱二高野入道一。」（卷百五十九）

かくのみ、所々に御幸しげう、御心ゆく事ひまなくて、いかも思し結ぼるゝ事もなく、めでたき御有樣なれば、さゝかまつる人々までも、思ふ事なき世なり。吉田の院にて仕うまつる人々までも、常は御歌合などし給ふ。鳥羽院には、いと久しくおは

ふ。○愚し結ぼる　屈託する。○愚ふ事なき　心配のない。○吉田の院　洛東。今、吉田町と呼ぶ邊。○鳥羽院　鳥羽殿に同じ。○御鞠に立たせ　蹴鞠をされること。○内の女房　禁中の女官。○風流の破子　破子は中に隔をつけた辨當箱。意匠を凝した破子。○引出物　祝儀にやる物。○こちたき　たいさうな。○嵯峨の龜山　山城葛野郡嵯峨。小倉山の東南尾。西南大井川に臨み、嵐山に對して居る。御殿（龜山殿といふ）はその東面にある。○ゆゝしき　すばらしい。○戸灘瀉　大井川の上流にある一灘。但し今はない。○さながら　そのまま。全く。○わざとつくろはぬ　自然のまゝにして殊更手入しない。○情　風情。趣。○いみじき繪師　すぐれた畫家。○寢殿　正殿。○乾　西北。○橘の大后　嵯峨帝の皇后。橘嘉智子。清友の子。嘉祥三年五月崩、年六十五。世に檀林皇后といふ。○長老　住職。語の本義は智德ありて尊ぶべき人。○金堂　本堂。○持佛　常に護持して、朝夕祈念する佛像。○すゑ奉らせ　その大多勝院に。○いかめしく　おごそかに。○三葉四葉に云々　宮殿の棟の幾重にも重なつて莊嚴な有樣をいふ。

しますに折のみあり。春の頃、御幸ありしには、御門（後深草）も、御鞠に立たせ給へり。二條の關白（良實）上鞠し給ひき。内の女房など召して、池の御船に乘せて、物の音ども吹きあはせ、さまざまの風流の破子・引出物など、こちたき事どもも、しげかりき。又、嵯峨の龜山の麓、大井河の北の岸にあたりて、ゆゝしき院をぞ造らせ給へる。小倉の山の木ずゑ、戸灘瀉の瀧も、さながら御垣の内に見えて、わざとつくろはぬ前栽も、自ら情を加へたる所がら、いみじき繪師といふとも、筆及びがたし。寢殿のならびに、乾にあたりて、西に藥草院、東に如來壽量院などいふもあり。橘の大后の、昔建てられたりし檀林寺といひし、今は破壞して、礎ばかりになりたれば、其の跡に、淨金剛院といふ御堂を建てさせ給へるに、道覺上人を長老になされて、淨土宗をおかる。天王寺の金堂移させ給ひて、多寶院とかや建てられたる。川に臨みて棧敷殿造らる。大多勝院と聞ゆるは、寢殿のつゞき、御持佛すゑ奉らせ給へり。かやうの引き離れたる道は、廊・渡殿・反橋などを遙かにして、すべていかめしう、三葉四葉に磨きたてられたる、いとめでたし。

【上鞠】蹴鞠は圖の如く四角な場所でするので、八人の場合をいへば、先づ8が立つて行つて、中央にある鞠を蹴ると、7が進み出て之を受ける。そして今度は1（軒といふ）に蹴る。それより2・3と順次に蹴つて、遂に8にもどり、8より又1に渡す。この時1は上鞠といふことをする。それからは皆隨意に蹴り、最後に又上鞠をした者が鞠を取つて中央に轉がし、遊戲は終る。遊庭祕抄に「この役は隨分然るべき人勤仕すべきなり。口傳庭

●西園寺　一五五頁を見よ。○一切經供養　一切經は佛教に關する經・律・論等すべてを網羅しての名、大藏經ともいふ。之れ（但し實際は全部ではない）を書寫し、大寺に寄附した時、行ふ法會。○おぼしおきてける　御計畫のあつた。（一切經書寫のこと）。○いたくしろしめさぬ　院もよ

訓一事ならず大事なり。或は普代の人、或は堪能の人、又はやむごとなき上臈、鞠足のわざなるべし。云々。高からず蹴あげて落す。木の枝に掛くべからず、鞠を人に蹴あつべからず、鞠の高さ目より下といふ說侍れど、それよりは高かるべきか。云々」。

【三葉四葉に】　催馬樂に「この殿は、うべも富みけり、さきくさの、あはれ、さきくさの、三葉四葉の中に殿造せり、や、殿造りせり、や。」（古今集には、「三葉四葉に殿造せり」）。

正元元年三月五日、西園寺の花盛りに、大宮院（姞子）、一切經供養せさせ給ふ。年頃おぼしおきてけるをも、いたくしろしめさぬに、女の御願にて、いとかしこくありがたき御事なれば、院（後嵯峨）も同じ御心に、ゐたちのたまふ。樂屋のものども、地下も殿上も、なべてならぬをえりとゝのへらる。その日になりて、行幸あり。春宮（恒仁）も同じく行啓なる。

くは御存じなかつた。○かしこく　畏れ多く。○同じ御心　大宮院と。○ゐたちのたまふ　供養の事に世話をやかれる。○樂屋　音樂を奏する所　○地下　殿上人に對し、五位以下の昇殿を許されぬもの。○殿上　殿上人。○なべてならぬ　なみ〳〵ならぬもの。特にすぐれたもの。○その日　供養の日。○行啓　皇后・皇太子のみゆきにいふ語。○上のきぬ　袍。○御階の間　寢殿の正面にあたる間。○まねびがたし　筆にも言葉にも表はし難しの意。○御前の御遊　御前で催す音樂會。○角髮　髮を左右に分けて結んだもの。子供の結方。○まほ　端正。○雲井を響かし　空ま

大臣・上達部、皆上のきぬにて、左右に分れて、御階の間の高欄につき給ふ。法會の儀式、いみじくめでたき事ども、まねびがたし。又の日、御前の御遊始まる。御門（後草院）御琵琶、春宮（恒仁）御笛、まだいと小さき御程に、角髮ゆひて、御貌まほに美しげにて、吹きたて給へる音の、雲井を響かして、あまり恐しき程なれば、天つ少女もかくやとおぼえて、太政大臣（實氏）こといみもし給はず、目おし拭ひつゝ、ためらひかね給へるを、理りに、老いしらへる大臣・上達部など、皆御袖どもうるほひわたりぬ。女院（姞子）の御心の中、ましておき所なく思さるらむかし。前の世に、いかばかり功德の御身にて、かくおぼすさまに、めでたき御榮を見給ふらむと、思ひやり聞ゆるも、ゆゝしきまでぞ侍りし。

御遊果てし後、文臺召さる。院(後嵯)の御製、

いろ〳〵に枝を連ねて咲きにけり
　花も我が世も今さかりかも

あたりをはらひて、きはなくめでたく聞ゆるに、あるじの
おとゞ(実氏)歌さへぞかけあひて侍りしにや、

いろ〳〵にさかえて匂へ櫻花
　わがきみぎみの千世のかざしに

末まで多かりしかど、例のさのみはにて、とゞめつ。いか
めしうひゞきて歸らせ給ひぬる、またのあした、無量光院
の花のもとにて、おとゞ(実氏)昨日の名殘おぼし出づるも、
いみじうて、

この春ぞ心の色はひらけぬる

樣で還御せられた。○またのあした　翌朝。○無量光院　西園寺の中にあるもの。○昨日の名殘　昨日の事の猶ほ忘られず心中に殘つて居ること

●ほのめき聞ゆる　うす〳〵洩れ聞える。後嵯峨院が東宮を位につけようとせられる噂○あかず　讓位のことを物足らず。○夜居の間　夜寢ずに起きて居る間。○內侍所の御

六十あまりの花は見しかど

【前の世にいかばかり云々】　前世に、どんな功德を積まれた爲に、かうまで、すぐれた榮華にあはれるのであらうかと、想像し奉つても、恐ろしい程ありがたいことである。

【いろ〳〵に枝を連れて云々】　いろ〳〵に枝を連れて咲き匂つて居る花も我が世も今が丁度眞盛りである。但し「枝を連れ」には後深草と東宮とが兄弟であられる意がこもつて居る。

【いろ〳〵にさかえて匂へ云々】　御門や東宮の千世のかざしにし給ふ爲に、櫻の花よ、いろ〳〵に榮えて匂へとの意。

【この春ぞ心の色は云々】　私はこれまで六十年餘りも、花を見たが、この春ほど、本當に氣が晴々として、樂しく思つたことはない。

その年の八月二十八日、春宮十一にて御元服し給ふ。御諱恒仁と聞ゆ。世の中に、やう〳〵ほのめき聞ゆる事あれば、御門(後深草)は、あかず心細うおぼされて、夜居の間の靜かなる御物語のついでに、內侍所の御拜の數を數へられければ、

拝　内侍所は温明殿で、神鏡の安置してある所。それを清涼殿石灰の壇で遙拝せられること。毎朝一回必ず行はれるものである。○うけたまはりて　辨内侍が。

●おりゐさせ　御譲位。○伊勢の御　字多帝の更衣。○おぼしまうけ　覺悟。○剣璽の出でさせ給ふほど　三種の神器の次の天子へ移る時は。○御身を離れざりつる　三種の神器が。○ならひ　習慣であつたから。

五千七十四日なりけるを、うけたまはりて、辨内侍、

千世といへば五つかさねて七十に

あまる日かずを神は忘れじ

【内侍所の御拝の數を數ふれば云々】　内侍所の御拝は一日一回であるから、その回數は卽ち日數と同じものである。ところで、寛元四年正月受禪の時から、この正元元年八九月頃まで(十四年にわたる)の日數を數へてみると、丁度五千七十四日になるといふのである。

【千世といへば五つかさねて云々】　五千七十餘日の間も祈られた御心の中は、神も忘れず、守り奉るであらうの意。

かくて、十一月二十六日、おりゐさせ給ふ夜、空の氣色さへあはれに、雨うちそゝぎて、物悲しく見えければ、伊勢の御が、「あひも思はぬ百敷を」といひけむ故事さへ、今の心地して、心細くおぼゆ。上(後鳥羽)もおぼしまうけ給べれど、

剣璽の出でさせ給ふほど、常の御幸に御身を離れざりつるならひ、十三年の御名殘、ひきわかるゝは、猶ほいとあはれに、忍びがたき御氣色を、悲しと見奉りて、辨内侍、

今はとておりゐる雲のしぐるれば

心のうちぞかきくらしける

【あひも思はぬ百數を】　大和物語に「亭子院の帝、今はおり居給ひなむとする頃、弘徽殿の壁に、伊勢の御の書きつけける。別るれどあひもしまぬ百數を見ざらむことの何か悲しき。とありければ、帝御覽じて、その傍に書きつけさせ給うける。身一つにあらぬばかりをおしなべて行きめぐりても何か見ざらむ。」

【今はとておりゐる雲の云々】　今はもうこれまでであるといふので、心ならずも、御位を下り給ふ帝の涙にくれさせ給ふ御樣を見奉つては、私の心も涙にかきくらしますの意。

第八　山のもみぢ葉

正元元年十一月二十六日、讓位の儀式常の如し。十二月二十八日御卽位、よろづめでたく、あるべき限りにて、年もかへりぬ。おりゐの御門（後深草）は、十二月の二日、太上天皇の尊號ありて、新院ときこゆ。本院（後嵯峨）と、常は一つに渡らせ給ひて、御遊しげう、心やりて、なか〳〵いとのどやかに、めやすき御有樣に、おぼし慰むやうなり。中宮（公子）も、院號の後は、東二條院ときこゆ。二條富小路にぞ渡らせ給ふ。太政大臣（實氏）も入道し給ひぬ。常磐井とて、大炊御門京極にぞ、折々住み給ふ。この入道殿（實氏）の御弟に、その頃、右大臣實雄と聞ゆる、姫君あまた持ち給へる中に、すぐ

(1)

●讓位　後深草の。○御卽位　龜山の。○あるべき限りにて　すべてがうまく行つて。○おりゐの御門　上皇のこと。○一つに渡らせ給ひて　同じ所に居られて。○心やりて　心をはらして。○なか〳〵　御在位當時よりは却つて。○めやすき　氣樂な。○院號　正元元年十二月十九日のこと。○渡らせ給ふ　居られた。○入道　佛門に入ること。○常磐井　場所の名。世に常磐井入道といふは、こゝに邸のあつたからである。○すぐれたる　容貌の勝れたこと。信子のこと。○らうたきものに云云　可愛いものとして大切にせられた。○女御代　大嘗會御契の時、臨時に女御の代りとして行幸に供奉するもの。○やがて　そのまゝ。○そのついで　女御代に立たれた序に。○おぼしおきてたり　定められた。○御氣色たまはり給ふ　御同意の意を漏らされた。○聞え　噂。○さしもやは　そんな事があるべきことか。○出したち　その女を女御に出された。

(2)

●ものし給ふ　あられる。○

れたる（信子）を、らうたきものに思しかしづく。今上（龜山）の女御代に出で給ふべきを、やがて、そのついで、文應元年、入内あるべくおぼしおきてたり。【院（後嵯峨）にも、御氣色たまはり給ふ。入道殿（實氏）の御孫の姫君（子）も、參り給ふべき聞えはあれど、さしもやはと、出したち給ふ。いと猛き御心なるべし。

【この入道殿の御弟に云々】　この實氏の弟に實雄といふ人があつた。女を澤山持つて居たが、その中でも最も美しい信子を特に可愛がつて居たが、龜山帝の大嘗會の際、女御代を勤め、それから直又入内させようとし、後嵯峨院も同意の意を漏らされた。ところが一方、兄の孫姫の嬉子が入内するといふ噂もあつた。併し自分の方がもうチヤンときまつて居るのだ。そんな馬鹿な事があるものかと、憚らず入内させた。

この姫君（子）、御兄數多ものし給ふ中の長兄にて、中納言公

(2)

したたく煙　下からたく煙でまだ火の燃えあがらぬをいふ　○くゆりわび　煙にくすぼり惱む。やるせない戀に惱むをいふ。○さるは　さういふ事は。○思ひはなつ　斷念する　○急ぎ　支度。入内の準備。○われかの氣色　我か人か、卽ちボンヤリして居ること。○ほれすぐし　ボンヤリして日を過す。○けしきだちて　樣子に現はれる。吹きさうな模樣となる。○艶なる　趣ある。○薄色　薄紫。○女郎花　表經青緯黃色、裏青のもの　○ひきかされて　引き重ねて著て。○少しはづれて　几帳に全く隱れずにあること。○あて　高貴。○匂ひみちて　美しい樣。○らうたく　愛ら

宗と聞ゆる、いかなる御心かありけむ、したたく烟にくゆりわび給ふぞ、いとほしかりける。さるは、いとあるまじき事と、思ひはなつにしも隨はぬ心の苦しさを、起き臥し、葦の、ねなきがちにて、御急ぎの近づくにつけても、われかの氣色にてのみ、ほれすぐし給ふを、大臣(實雄)は、又いかさまにかと、苦しうおぼす。

初秋風けしきだちて、艶なる夕ぐれに、大臣(實雄)わたり給ひて見たまへば、姫君(信子)、薄色に女郎花などひきかさねて、几帳に少しはづれて居給へる樣貌、常よりも、いふよしなく、あてに匂ひみちて、らうたく見え給ふ。御髮いとこちたく、五重の扇とかやを廣げたらむ樣して、少し色なる方にぞ見え給へど、筋細やかに、額より裾まで、まがふ筋

しく。○御髮いとこちたく　髮が非常に多い。○色なる方　赤味を帶びた意であらう。○筋　毛筋。○額より云々　髮が少しも長短なく額の所から後へ垂れ、裾まで長くとゞいて居るをいふ。○たゞ人には云々　普通の人の妻とするは惜しい。○わざとなく　わざとらしくはなく、自然に。○こち　此方へ來よ。(公宗に)。○しめやかに　おちついて。○心の底ゆかしう　心の中が奥ゆかしい。○そゞろに云々　何となく氣がおける　○こまやかに　信實らしく。○すみたる樣　すました樣子　○もてしづめて　心をおちつけて。○念じ　こらへしのぶ　○用意　胸中の熱情の外に現

なく美し。たゞ人には、げに惜しかりぬべき人柄にぞおはする。几帳おしやりて、わざとなく、拍子うちならして、御箏彈かせ奉り給ふ。折しも、中納言(公宗)參り給へり。「こち(實氏)」とのたまへば、うちかしこまりて、御簾の内に候ひ給ふ。樣貌、この君(公宗)しもぞ、又いとめでたく、飽くまでしめやかに、心の底ゆかしう、そゞろに、心づかひせらるゝやうにて、こまやかになまめかしう、すみたる樣して、あてにうつくし。いとゞもてしづめて、騷ぐ御胸を念じつゝ、用意を加へ給へり。笛少し吹きなどし給へば、雲井にすみのぼりて、いと面白し。御箏の音の、ほのかにらうたげなる、かきあはせの程、なか〳〵聞きもとめられず、涙うきぬべきを、つれ(信子)なくもてなし給ふ。撫子の露もさながらきらめ

きたる小袿に、御髪はこぼれかゝりて、少し傾きかゝり給へるかたはらめ、まめやかに、光を放つとは、かゝるをやと見え給ふ。よろしきをだに、人の親は、いかゞは見なす、まして、かく類なき御有樣どもなめれば、世に知らぬ心の闇に惑ひ給ふも理りなるべし。

【御兄數多ものし給ふ中の長兄云々】 佶子には澤山の兄があつたが、その中一番兄の公宗といふ人は、どういふわけだか、妹の佶子を戀して、煩悶して居られたのは、氣の毒なことである。○兄妹でも、腹さへ違へば、戀しあふは、當時にあつては、珍しいことではない。

【起き臥し葦のねなきがちにて】 起き臥しにつけ、始終涙勝ちでの意。「葦のね」は根(根、音)といふための語。兼ねて起し臥し(節)の緣語ともなる。

【五重の扇】 檜扇の一種。兩端の板を薄樣で五重に包み(真丈は板を重ねるのだと云つて居る)、色々の絲で綴ぢ飾つたもの。ともいひ(河海抄)、又普通は板の幅、一枚一寸五分づつに開くものを、三分づつ開くやうにしたもの、即ち一枚の代りに五枚重なるからの名だともいふ(井底雜記)。

【撫子の露もさながら云々】 「小袿」は女の服。表は浮織物で、裏は平絹、廣袖のもの。唐衣・裳などを著けない時に著る。○「撫子の露」はそれにある繪の模樣で、その露がキラ〳〵と美しく光るのである。

【よろしきをだに人は云々】 特にすぐれた女でなくても、可愛いと思ふのが親たるものの人情である。ましてこんな美人であつては、子を思ふ親心の、何もかも忘れてしまふも無理はない。○「心の闇」は後撰集(雜)に「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」(平兼盛)

はれぬ用意。○雲井に云々 空まで響いて。○かけあはせ 筆と笛との合奏。○聞きもとめられず 餘り調子がよく合ふので、氣がウツトリして却つてよく聞きとれない。○つれなくもてなし 強ひて平氣をよそほふ。○傾きかゝり 身體を斜にした。○かたはらめ 側で見る樣子。○まめやかに 眞實に。○よろしき 普通のもの。

●參り給ふ 入內。○大宮殿 それは卽ち二位の中將云々と續く。○くだ〳〵し くどい。○むづかし うるさい。一々は面倒だから書かぬの意○雜仕 雜役を勤める身分の

十月廿二日、參り給ふ儀式、これもいとめでたし。出車十輛、一の車の左は大宮殿、二位の中將基輔の女とぞ聞えし。二の左は春日、三位の中將實平の女。右は新大納言。この新大納言は、爲家の大納言の女とかや聞えしにや。そ

低い女房。○青柳　女房の名　以下三つとも同様。○忍びて　御覽じて　内々御寵愛になつて。○北の政所　奥方。○萬の事よりも　何よりも先づ。○おぼしつきにたり　寵愛されるやうになつた。○おとなしく　大人らしく。○およずけ　ませて。○めやすき　似つかはしい。○忍び果つ　忍びおほせる。○后立　立后の儀式。○心ゆきて云々　何の心配もなくなつたの意。

れより下は、くだ〳〵しければ、むづかし。御雜仕、青柳・梅枝・高砂・貫川といひし、この貫川を、御門(帝)、忍びて御覽じて、姫宮一所いでものし給ひき。その姫宮は、末に近衛關白家基の北の政所になり給ひにき。萬の事よりも、女御(子)の御樣貌のめでたくおはしませば、上(帝)も、おぼしつきにたり。女御(子)は十六にぞなり給ふ。御門(帝)は十二の御年なれど、いとおとなしくおよずけ給へれば、めやすきほどなりけり。かの下くゆる心地にも、いと嬉しきものから、心は心として、胸のみ苦しき樣なれば、忍び果つべき心地し給はぬぞ、遂にいかになり給はむと、いとほしき程もなく、后立ありしかば、大臣(實)、心ゆきて思さるゝ事限りなし。

●西園寺の女御　公相の女。二六五頁參照。○いかさま云云　嬉子が來ては、佶子はどうなることかと。○さしもあらず　それほどでもない。○離れぬ御中　叔姪の切つても切れぬ間柄。○挑み軋び　競爭軋轢する。○はえある　花しい。○すくよか　無風流花流の競

【十月廿二日】　女院小傳には、「文應元十二十一爲二女御代一。（十六）。十二月七日叙二從三位一。廿五爲二女御一。」弘長元二八爲二中宮一。（十七）一代要記には、「十二月二十六日入内」とある。

【かの下くゆる心地にも云々】　かの内々煩悶して居る兄公宗の心にも流石に嬉しいけれども、表面の心は別として、矢張り煩悶して居る樣子で、とてもこらへきれさうにもないから、遂には、どうなることかと、氣の毒に思つて居たが、その中、立后の儀式があつたので、父も胸を撫で下した。

西園寺の女御も、さし續きて參り給ふを、いかさまならむと、御胸つぶれておぼせど、さしもあらず。これも九にぞなり給ひける。冷泉の大臣公相の御女なり。大宮院の御子にし給ふとぞ聞えし。いづれも離れぬ御中に、挑み軋び給ふ程、聞きにくき事もあるべし。宮仕へのならひ、かかるこそ、昔人は面白く、はえある事にし給ひけれど、今

の世の人の御心どもは、あまりすくよかにて、みやびをかはす事のおはせぬなるべし。これ(嬉子)も后に立ち給へば、もとの中宮(信子)は、あがりて、皇后宮とぞ聞え給ふ。今后(いまぎさき)(嬉子)は、遊にのみ心入れ給ひて、しめやかにも見え奉らせ給はねば、御おぼえ劣りざまに聞ゆるを、思はずなる事に、世の人もいひさたしけり。父おとゞ(公相)も、心やましくおぼせど、さりとも、ねびゆき給はばと、只今は、うらみ所なく思しのどめ給ふ。

【大宮院の御子に云々】　信子は實氏の女。龜山帝との關係も左の表を見れば分る。

爭する。○あがりて　昇進して。○しめやか　おちつく。○御おぼえ　御寵愛。○思はずなる事　案外な事。○いひさた　噂。○心やましく　心配して。○さりとも　それでも。○ねびゆき云々　成長されたら御寵愛もあらうかと。○うらみ所なく　誰を怨みやうもなく。○思しのどめ　思ひ慰める。

【かゝるこそ昔人は云々】　宮仕へについては、昔から隨分競爭もあつたが、かういふことも、昔の人は風流に、花々しくやつて、卑劣な事などはなかつたものだ。然るに、今の人は兎角無風流で、風流な所がないと、この競爭をけなしたのである。

かくて弘長三年二月(きさらぎ)の頃、大方の世の氣色(けしき)も、うらゝかに霞みわたるに、春風ぬるく吹きて、龜山殿の御前の櫻ほころび初むるけしき、常よりも異なれば、行幸あるべくおぼしおきつ。關白(三條殿良實)この三年(とせ)ばかり、又かへりなり給へば、御隨身(みずゐじん)ども花を折りて、行幸よりも先に參り設け給ふ。その外の上達部も、例のきら〳〵しき限り、殘るは少し。新院(後深草)も、兩女院(大宮東二條院)も渡らせたまふ。御前の汀(みぎは)に、船

●常よりも異なれば　特にすぐれて居たをいふ。○花を折りて　花を折りかざして。花やかなる樣をいふ。○設け　設備をするをいふ。○きらきらしき限り　華美を盡して。○殘るは　宮中に殘るは。○をかしきさまなる　面白い裝をして居る。○になく　似るものなく。○遐年　遙かなる年、即ち千代八千代などの意。○かやうの方　歌よむこと。

○めでたく　すぐれて。○延喜の御手本　醍醐天皇の御手蹟。○老のつもり　年が寄つた爲にの意。○うたて　あまりに。

ども浮べて、をかしき樣なる童、四位の若きほど乘せて、花の木蔭より漕ぎ出でたるほど、になく面白し。舞樂さまざま曲など手をつくされけり。御遊の後、人々歌たてまつる。「花契二遐年一」といふ題なりしにや。內の上(一條)の御製、

たづねきてあかぬ心にまかせなば
千年や花のかげにすごさむ

かやうの方までも、いとめでたくおはしますとぞ、古き人申すめりし。還らせ給ふ日、御贈物ども、いとさまざまなる中に、延喜の御手本を、鶯のゐたる梅の造枝につけて、院の上(後嵯峨)に奉らせ給ふとて、

梅が枝に代々のむかしの春かけて
かはらずきゐる鶯のこゑ

御返しを忘れたるこそ、老のつもり、うたて口をしけれ。

【この三年ばかり又かへりなり給へば】寛元四年正月二十八日關白をやめ、弘長元年四月二十九日再び關白となつたをいふ。

【をかしき樣なる童云々】面白い裝をした童や四位の者て若い連中を乘せて。

【たづねきてあかぬ心に云々】訪れて來てその花の面白さの爲、立去るのが厭だといふ自分の心に任すならば、何時までも、この蔭に過さうの意。

【鶯のゐたる梅の造枝云々】平安朝時代などには、よくしたことで、梅の造花を拵へ、その枝に鶯の形をつけたのである。

【梅が枝に代々の昔の云々】梅の枝には昔からズツと變らず幾春も〳〵同じく來て鳴いて居る鶯の聲がするの意。

その年(弘長三年)にや、五月の頃、本院(後嵯峨)、龜山殿にて、如法經書かせ給ふ。いとありがたく、めでたき御事ならむかし。後白河院こそ、かゝる御事はせさせ給ひけれ。それも御髮

●如法經　法華經を書寫すること。○ありがたく　珍しい。○かゝる御事　法華寫經の事。○男　僧でない人。○やごとなき　やむごとなき。○顯密

おろして後の事なり。いとかく思し立たせ給へる、いみじき御願なるべし。さるは、あまたたび侍りしぞかし。男は、花山院の中納言師繼一人さぶらひ給ひける。やごとなき顯密の學士どもを召しけり。昔上東門院(彰子)も、行はせ給ひたりしためしにや。大宮の院(彰子)同じく書かせおはしますとぞ承りし。十種供養果てて後は、淨金剛院へ、御自ら納めさせ給へば、關白・大臣・上達部、歩み續きて、御供仕うまつられけるも、さまざま珍しく、面白くなむ。

【さるは、あまたたび侍りしぞかし】「さるは」は然る事は。さういふ事は何度もあった。

その年(弘長三年)九月十三夜、龜山殿の棧敷殿にて、御歌合せさせ給ふ。かやうの事は、白河殿にても、鳥羽殿にても、い

の學士　天台・眞言に通じた學者。○上東門院　藤原道長の女。一條帝の中宮、後一條・後朱雀二帝の御母。承保元年崩。○十種供養　華・香・燈塗・抹香・塗香・燒香・繒蓋・幢幡・衣服・伎樂・合掌の十種を以て諸佛を供養すること。○淨金剛院　龜山院の内にあるもの。

○棧敷殿　眺望の爲、川などに臨んで構へた家。○いかでか云々　さう一々は擧げられないので。○心ことに　格別に。○みがかせ　練練。○右方。三〇眞參照。○院の御前にて　院自ら御覽になる。○かへりならせ　再び攝政になる。○院の御方　左方。○この道。歌道。○數だて　歌合などの勝つた度數を計算する爲に用ひる數取の串を差しておくもの。○風流の　趣味ある。意匠を凝した。○洲濱　臺の上に濱邊の形を作つた物。○沈　香木の名。○數　數だて。○讀師　歌を讀みあげる役。○左具氏　左方の讀師は。○披講　歌を讀みあげること。○御簾の内にも　東の御方・刑部卿、其の他女房等○東の御方　玄輝門院藤原愔子(よしこ)。實雄の女。○則

としげかりしかど、いかでかさのみはにて、皆漏しぬ。この度は心ことにみがかせ給ふ。右は關白殿(實經)にて、歌どもえりとゝのへらる。左は院(後嵯峨)の御前にて御覽ぜられける。このほど「殿」と申すは、圓明寺殿(順徳)又一條殿の御事なり。新院(後深草)の御位の初つ方、攝政にていまさせしが、又この一年ばかり、かへりならせ給へり。前の關白殿(實氏)は、院の御方にさぶらはせ給ふ。その外勝れたる限り、右は關白殿(實經)・今出川の太政大臣(兼公)・皇后宮(子)の御父の左大臣殿(通實)より下、皆この道の上手どもなり。左は大殿(實氏)より、數だて作りて、風流の洲濱、沈にて造れる上に、銀の船二に、いろ〳〵の色紙を書き重ねて積まれたり。數も沈にて造りて、船に入れらる。左右の讀師、一度に御前に參りて讀

詠　朗詠集の詩歌を吟ずること。○川涙　殿の前の大堰川の波。○嵐の山　嵐山。○たぐひて　和して。○かはらけ　素焼の盃。○打ち亂れたる　酔がまはつたこと。

みあぐ。左具氏中將、右行家なり。「山の紅葉」、本院（後堀河）の御製、

外よりは時雨もいかゞ染めざらむ
我うゑて見る山のもみぢ葉

終に左御勝の數まさりぬ。披講果てて、夜更けゆくほどに、御遊はじまる。笛は花山院中納言長雅・茂通の中將、箜は公顯の中將にておはせしにや。篳篥は忠輔の中將、琵琶は太政大臣公相、具氏の中將も彈き給ひけるとぞ。御簾の内にも、御箏どもかきあはせらる。東の御方（春宮）と聞えしは、新院（後鳥羽院）の若宮（見仁）の御母君にや。刑部卿の君もひかれけり。樂のひまびまに太政大臣（公相）・土御門大納言通成など、朗詠し給ふ。忠輔・公顯、聲加へたるほど面白し。川浪も更けゆく

まゝに凄う、月は氷をしける心地するに、嵐の山の紅葉、夜の錦とは、誰かいひけむ、吹きおろす松風にたぐひて、御前の簀子にて、御酒まゐるかはらけの中などに散りかゝる、わざと艶なる事のつまにもしつべし。若き人々は、身にしむばかり思へり。打ち亂れたるさまに、各、御かはらけども、あまた度くだる。明けゆく空も、名殘多かるべし。

【その年九月十三夜】「外よりは時雨もいかゞ」の歌の續古今集（秋）の詞書には「文永二年九月十三夜」とある。

【數だて作りて風流の洲濱云々】意匠を凝した洲濱を香木の沈で作り、その上に銀製の船を二つ置いた。そしてそれに歌を書いた色々の色紙を積み、又數取も沈で作つて、かの船の中に入れられた。○最初の「數だて作りて」は次の句との續き工合が少し悪いやうであるが、全體の意味は茲に記した通りである。

【外よりは時雨もいかゞ云々】自分が植ゑた山の紅葉は、他所よりは時

●ひろまるべし　發表せられ流布すること。○元久のためし　二五頁を見よ。○光添ひたる玉　傑作。○年月にそへて年月を經るに隨ひ。○あづまの　鎌倉の將軍なる。○名のり　實名。○新古今云々

雨も心して美しく染めるであらうの意。

【夜の錦とは誰かいひけむ】「夜の錦」は史記項羽本紀に「富貴不レ歸ニ故鄕一。如ニ衣レ繡夜行一。」誰知レ之者。」とあるが元で、古今集（秋）に「見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」などある。併しこの意は夜の錦とは誰がいつたことであらう。なるほど夜では美しさも見えないけれども、風に散つて盃の中に入るなどは面白いといふやうな事であらう。

【わざと艶なる事のつまにもしつべし】「つま」は緣、ゆかりなどの意。その散つて來た紅葉をわざと花やかな事のゆかりにしよう。即ち美を添へるものと見ようの意。

まことや、この年頃、前内大臣（基家）・爲家の大納言入道・侍從二位行家・光俊の辨入道などうけたまはりて、撰歌の沙汰（稲古今集）ありつる、只今日明日ひろまるべしと聞ゆる、面白うめでたし。かの元久のためしとて、一院（後嵯峨）自らみがかせ

三二頁を見よ。

給へば、心ことに光そひたる玉どもにぞ侍るべき。年月にそへては、いよ〳〵外ざまに分くる方なく、榮えのみまさらせ給ふ御有樣のいみじきに、この集の序にも「やまと島根はこれ我が世なり、春風に德を仰がむとねがひ、和歌の浦もまた我が國なり、秋の月に道をあきらめむ」とかや書かせ給へりける。げにぞめでたきや。金葉集ならでは、御子の御名のあらはれぬも侍らねど、この度は、かのあづまの中務宮（宗尊親王）の御名のりぞ書かれ給はざりける。いとやむごとなし。新古今の時ありしかばにや、竟宴といふこと行はせ給ふ。いと面白かりき。この集をば、「續古今」と申すなり。

【いよ〳〵外ざまに分くる方なく云々】皇位繼承は全く後嵯峨院の御系

●あわたゞし落ちつかない。○後見　執権をいふ。○したゝめ直し　整理する。さばきをつけろ。○引きかへたる　うつて変つた。○年月の習ひに　これまで長く賑やかな暮しをした習慣のために。○さうざうし　物寂し。○あづまの聞え　関東の評判。○つゝませつゝしむ。○やがては　直には。○御使に下されて　鎌倉へ。○ひゞき　評判。○日頃　ながらく。○ことごとしからぬ　一寸した。○さしもやはと　まさかと。○あやなく　心頼みの甲斐もなく。○こと方。○御服にて云々　父の喪去の服の爲、宮中を出られた。

続ばかりで、他の方の御立ちになることなく、益〻御榮えになる。

【やまと島根は云々】「やまと島根」は日本。「和歌の浦」は紀伊の地名と歌道とをかけた語。「道」は歌道。この日本國は我がものである。臣民が帝徳を仰がむことは春風の如く、又秋月の曇りなきが如く、和歌の道をも明らめむの意。

【金葉集ならでは云々】金葉集に輔仁親王の御名のりを書いて問題になつたことは、「おどろのした」(二七頁)にあつたが、今度も宗尊親王とせず、中務卿親王と書いたのである。

又の年文永三、あづまに心よからぬこと出で來て、中務の御子(宗尊)都へのぼらせ給ふ。何となく、あわたゞしきやうなり。御後見、なほ時頼朝臣なれば、例のごと、心かしこうしたため直してければ、聞えし程の恐ろしきことなどはなけれど、宮(宗尊)は、御子の惟康の親王に、將軍をゆづりて、文永三年七月八日、上らせ給ひぬ。御下りの折、六波羅に建てたりし檜皮屋一つあり。そこにぞはじめはわたらせ給ふ。いとしめやかに、引きかへたる御有様を、年月のならひに、さうざうしう、物心細うおぼされけるにや。

虎とのみ用ひられしは昔にて
今は鼠のあなう世の中

あづまの聞えをつゝませ給ひて、やがては御對面もなく、いと心苦しく、思ひ聞えさせ給ひけり。經任の大納言、未だ下﨟なりしほど、御使に下されて、何事か仰せられなどして後ぞ、苦しからぬ事になりて、宮(宗尊)も、土御門殿、承明門院の御跡へ入らせ給ひけり。院(後嵯峨)へも常に御參りなどありて、人々も仕うまつる。御遊などもし給ふ。雪のいみじう降りたる朝ぼらけに、右近の馬場の方

御覽じにおはして、御心のうちに、

なほたのむ北野の雪の朝ぼらけ
跡なきことにうづもるゝ身は

世をみだらむなど思ひよりける武士の、この御子の御歌すぐれてよませ給ふにより、夜晝いとむつまじく仕うまつりけるほどに、自ら同じ心なるものなど多くなりて、宮の御氣色あるやうにいひなしけるとかや。さやうのことどものひゞきにこそ。日頃長雨降りて、少し晴間見ゆるほど、空のけしきしめやかなるに、二條富小路殿に、本院（後嵯峨）・新院（後深草）一つに渡らせ給ふ頃、ことごとしからぬ程の御遊ありけり。大宮院（姞子）・東二條院（公子）も、御儿帳ばかり隔ててておはしま

す。御前に、太政大臣公相・常磐井入道實氏・前の左の大臣實雄・久我大納言雅忠など、むつまじき限りさぶらひ給ひて、御酒まゐる。あまた下り流れて、上下少しうち亂れ給へるに、太政大臣（公相）本院（後嵯峨）の御盃たまはりて、持ちながら、とばかりやすらひて、「公相、官位ともにきはめ侍りぬ。中宮（遵子）さておはしませば、もし皇子降誕もあらば、家門の榮華、愈〻衰ふべからず。實兼も、けしうは侍らぬ男なり、うしろめたくも思ひ侍らぬを、一つの憂へ、心の底になむ侍る」と申し給へば、人々「何事にか」と、おぼつかなく思ふ。左のおとゞ（實通）は、中宮（遵子）の御事かくのたまふを、いでやと耳とまりて、心のうち安げなし。一院（後嵯峨）は、「いかなる憂へにか」との給ふに、「いかにも、入道相國（實兼）に先立ちぬ

べき心地なむし侍る。『恨みのいたりて恨めしきは、さかりにて、親に先立つ恨み、悲しびの切に悲しきは、老いて、子に後るゝ悲しびには過ぎず』などこそ、澄明におくれたる願文にも、書きて侍りしか」など聞えて、うちしほたれ給へば、皆いとあはれとおぼさる。入道殿(氏實)は、まいて、墨染の御袖しぼるばかりに見え給ふ。さてその後、いくほどなく、なやみ給ふよし聞ゆれば、さしもやはとおぼえしに、いとあやなく失せ給ひぬ。冷泉太政大臣(公相)と申し侍りしことなり。入道殿(氏實)の御心の中、さこそはおはしけめ。中宮(予通)も御服(おく)にてまかで給ひぬ。

【又の年あづまに云々】これより以下は、次章「北野の雪」と記事が重複し、殊に「中宮も御服にてまがで給ひぬ」までは殆ど同じことである

●御おぼえ　御寵愛。○いでものし　生れられた。○その御氣色　御懐姙の樣子。○山寺々　寺々の意。○こちたくのゝしる　大變な騒きで祈をする。○安きいもね給はず　安眠も出來ぬ。○程近く出產の期近く。○土御門殿の承明門院の御跡　土御門萬里小路にある承明門院の御所の跡○世の中ひゞきて　世の中が大騒ぎをして。○司ある程のは　苟も官吏たる者は。○ひしめきたつ　ひし／＼とつめかける。○殿　實雄の邸。○心も心ならず　氣が氣でない。忙しい。○かの御調度　后

から、次章を正とし、本章の方は術として、こゝには次章に見えぬ文句だけを註釋することとした。

皇后宮(子倍)は、日にそへて、御おぼえめでたくなり給ひぬ。姫宮(子猷)・若宮(仁)などいでものし給ひしかど、やがて失せ給へるを、御門(山邑)をはじめ奉りて、誰も〳〵おぼし歎きつるに、今年(文永四年)又その御氣色あれば、いかゞとおぼし騒ぎつゝ、山々寺々に、御祈こちたくのゝしる。「此度だに、實にいかさまにせむ」と、大臣(實通)・母北方(子榮)も、又うち外してはいかさまにせむ」と、安きいもね給はず、おぼし惑ふ事限りなし。程近くなり給ひぬとて、土御門殿の承明門院の御跡へ移らせ給ふ。世の中ひゞきて、天下の人、高きも下れるも、司ある程のは、參りこみてひしめきたつに、殿の内の人々は、まして心も

の御道具類。○それには　その願文には。○御末までは云々　次々の御子孫まではなくとも。○叫びとよむ　喧しく叫び立てる。○しるし　效。○限りなき御志　皇后を御寵愛あると。○おぼすさまに　思ひ通りになつて。○御胸あきて　胸中が清々して。○心おち　ねおちつく。○うけばり　少しも他に遠慮せず思ひ通りにすること。○聞し召し消つ　電きをおかぬ。○きはことに　格別に。○おぼしむすぼほれ　心にわだかまりがある。○すさまじ　面白からず。

心ならず、あわたゞしし。大臣（道實）限りなき願どもを立て給ひ、賀茂の社にも、かの御調度どもの中に、勝れて御寶とおぼさるゝ御手箱に、后の宮（子信）自ら書かせ給へる願文入れて、神殿にこめられけり。それには、「たとひ御末まではなくとも、皇子一人」とかや侍りけるとぞ承りし。まことにや侍りけむ。かくいふは、文永四年十二月一日なり。例の御物怪ども顯れて、叫びとよむさま、いと恐ろし。されども、御祈りのしるしにや、えもいはずめでたき玉の男御子（後宇多）生れ給ひぬ。そのほどの儀式、いはずとも推し測るべし。上（山陵）も限りなき御志にそへて、愈、おぼすさまに、嬉しと聞し召す。大臣（道實）も、今ぞ御胸あきて、心おちゐ給ひける。新院（後深草）の若宮伏見院も、この殿（道實）の御孫ながら、それは、東二條院（子公）の御心の中おしはかられ、大方も又うけばり、やむごとなき方にはあらねば、よろづ聞し召し消つ様なりつれど、この今宮（後宇多）をば、本院（後嵯峨）も、大宮院（子信）も、きはことに、もてはやしかしづき奉らせ給ふ。これも中宮（子公）の御爲、いとほしからぬにはあらねど、いかでが、さのみはあらむと、西園寺ざまにぞ、一方ならずおぼしむすぼほれ、すさまじう聞き給ひける。

【此度だに實に又うち外しては云々】　今度また〳〵やり損つては、大變だ。

【例の御物怪ども顯はれて云々】　物怪は死靈或は生靈などいふもので、それが産婦につき、産婦をして、いろ〳〵なことを云はせると思つたのである。つまり難産（當時には隨分多かつたらしい）の時、いろ〳〵の事を口走るのを、物のたゝりと思つたので、さういふ場合には、只もう一心に祈禱したのである。

【新院の若宮も云々】 先づ系圖から記すと、

- 公經
  - 實氏
    - 大宮院姞子（後嵯峨）
      - 後深草
      - 龜山
    - 公相（龜山）
      - 今出川院嬉子（或ハ瑄子）
    - 東二條院公子（後深草）
      - 皇子ナシ
  - 實雄
    - 公宗
    - 京極院佶子（龜山）
      - 後宇多
    - 玄輝門院愔子（後深草）
      - 伏見

後深草の若宮、卽ち伏見も實雄の孫にあたるが、一面からいふと、中宮たる東二條院には皇子がないから、女院の御心の中も氣の毒にあり、又世間一般から見ても、これは后腹でないから、勢力もなく、後嵯峨院始め、皆があまり持てはやさなかつたが、今度出來た後宇多は非常に大切にせられた。

【これも中宮の御爲云々】 ところが、かうして後宇多ばかりを大切にせ

られると、又嬉子（是れは初から餘り寵がなく、皇子もなかつた）の爲にも氣の毒でない事はない。で西園寺、卽ち公相の親戚方でも、どうしてまあああんなに一方ばかりを愛されるのだらうと、面白からず思つて居た。

●赤色　黄櫨に茜を混ぜたもの。○うへの御衣　袍。○青色　萌黄の黄ばんだもの。麴塵。○たてまつれり　著て居られる。○人だまひ　供の女房の乘る副車。(それに乘つて居る人は)。○尻　後。○上臈だつ人　貴婦人らしい人。○藤の表著　表薄青、裏青の袿。○上首　上席。○山吹　表薄朽葉、裏黄。○居飼御厩の舍人　一九七頁を見よ。○きらめきたり　華美を盡して居る。○午の時　正午。○花橘　表朽葉、裏青。○同じ色　花橘。○松重　表青、裏紫。○念なし　氣がきかぬ。○沙汰　評判。○將曹　近衞府のサクワン。舞人・樂人・舍人より任ずるもの。○織り盡したる

第九　北野の雪

文永も三年になりぬ。卯月に、蓮華王院の供養に御幸あり。一院(後醍醐)は、赤色のうへの御衣、新院(後醍醐)は、青色の御袍たてまつれり。女院大宮の御車に、平准后(樓子)もまゐりたまふ。人だまひ三輛は、綿入れる五衣なり。御車の尻に仕うまつられたる、上臈だつ人のにや。袷の五衣・藤の表著、袖口出ださる。御幸には、上達部は、皇后大夫師繼を上首にて十人、殿上人十二人、御隨身ども、藤・山吹をつけたり。居飼・御厩舍人まで、世になくきらめきたり。常の見物に過ぎたるべし。行幸(龜山)は、當日の午の時ばかりなるに、諸司百官殘るなし。左右の大臣(基平基忠)、薄色・蘇芳などなり。

いろ〳〵の色の衣裳をつけて居るのはの意。○妻戸　兩方へ開く戸。○院司　院の役人。但し通成は別當であつた。○事のよし　事の次第。○亂聲　笛・鼓などを以て盛んに合奏すること。○ありし法勝寺云々　昔(承暦元年十二月)法勝寺で行はれたのに劣らず莊嚴であつた。○導師　法會の時、首席の僧。○聖基　東大寺別當。○御方々の　諸所から贈られた。○ゆゝしう　驚く程澤山で。○萬歲樂　唐樂の名。雙調。○地久　高麗樂。雙調。○賞仰せらる　その舞人を賞して位階など進められること。○祿　かづけもの。○平絹　文(あや)のない絹布。今の羽二重のこと。

右大將通雅、花橘の下襲、權中納言公藤、同じ色、左大將家經、蘇芳の下襲、萌黄の上の袴、侍從中納言爲氏・權中納言通基・左衞門督通頼・衣笠宰相中將經平、これらは皆、蘇芳の下襲、萌黄の上の袴なり。別當高定・宰相中將通持・三位中將實兼・右衞門督師親。殿上人には、頭中將具氏・忠秀、この人々は、松重の下襲、藤の上の袴、同じ色なる、念なしとぞ沙汰ありける。具氏は、花橘の下襲を着給へりしと、申す人も侍りしは、いづれかまことなりけむ。近衞の將曹廿四人、とりどりいろ〳〵に織り盡したる、めでたかりけり。關白殿(實經)御車にて參り給ふ。先づ女院(皆子)の御車、東の廂の北の妻戸へ、左右大臣(基平基忠)寄せらる。院司の大納言通成、事のよしを奏せられて、樂屋の亂聲など常の

○願文　供養の趣旨を書いたもの。○經朝　行成の裔。世尊寺行能の子。能書を以て知られた人。○料紙　それに用ひる紙。○紫の色紙　色紙は今日歌を書くものとは違ひ、一定したものではない。○長覧　二條天皇朝の年號。下註を見よ。○教長　藤原忠教の子。歌をよくし、又書をよくす。

如し。御寺の儀式、ありし法勝寺に變らず。御導師は聖基僧正、御方々の引出物ども、いとゆゝしう、法師ばらの丈と等しき程に積み重ねたり。萬歳樂・地久など、賞仰せらる。人々の祿、關白殿には、織物の袿一かさね、藏人頭とりてたてまつる。大臣には綾の袿、納言は平絹なり。御門(山島)新院(後鳥羽)御對面の儀式など、定めて　男の記錄に侍らむかし。御願文の清書は經朝の三位、料紙は紫の色紙、額は、かの建て始められし長寛に、教長書きたりけるが、燒けざりければ、この度も、それをぞ用ひられける。

【蓮華王院の供養】　寶治三年燒亡(二一八頁參照)の後、再建して、こゝに供養を行はれたのである。

【念なしとぞ沙汰ありける】　同じ色を用ひたのは、氣がきかないといふ評判であつた。

●煩しき事　面倒な事。○かれては　以前には。○又なく　此の上なく。○思ひかけぬほどに　思ひがけぬ時に。○怪しき御有樣　武士に警護せられなどして、思ひがけない有樣をして。○御下りの折　建長四年三月、鎌倉へ下られる時。○檜皮屋　檜の皮で屋根を葺いた家。(下向の折建てられた、そこへ今度落ちつか

【男の記錄に侍らむかし】　土佐日記に著者の貫之が、わざ〳〵「男もすなる日記といふものを、女もして見むとて」と斷つて居るやうに、當時は、假名文を女のもの、漢文を男のものと定めて居たから、こゝも其の意で、漢文の記錄にあらうといつたのである。

【かの建て始められし長寛に云々】　長寛二年創建(二一八頁參照)の時、教長の書いた額が、例の火事にも燒けなかつたので、今度もそれを用ひられた。

かくて少し人々の心のどかに、うち靜まりて思さるゝに、東に、何事にか、煩しき事いできにたりとて、將軍宗尊親王七月八日、俄かなるやうにて、御上りありけり。かねては、始めて御上りあらむ時の儀式など、になくめでたかるべきよしをのみ聞きしに、思ひがけぬほどに、いと怪しき御有樣にて、御上りの折、六波羅の北方に建てられたりし檜皮屋に、落ちつかせおはしましぬ。この頃、東

れたのである)。○東に世の中云々　鎌倉で天下を取り治める主、即ち執權職。○ありし義時の四郎　かの義時の四男○兩六波羅　南は今の方廣寺博物館附近。北は建仁寺の西あたり。この兩所に探題が居る。(時輔は南、時茂は北)。原文には「南六波羅」とある。「兩」或は「南北」の誤であらう。○四品したまふ　四品になられた。○御うつろひ　御移り。○苦しからぬ御事云々　最早や差支へがないといふので。○さるべき人々　然るべき人人。○參り仕うまつり　伺候。○世の常の有樣　普通の情態。○ゆゝしかりつる　たいした。○右近の馬場　一條京極の東。○歌の聖　特に歌にすぐれた人。○人の口に侍るべし　世間によく知られて居る。○めでのゝしる　ほめさわぐ。○同じ心　謀反を企てると。○御氣色あるやう　さういふ御心のあるやうに。

に世の中おきてはからふ主は、相模守時宗と、左京權大夫政村朝臣なり。時宗といふは、時賴朝臣の嫡子、政村とは、ありし義時の四郎なり。時宗といふは、時賴朝臣の嫡子、政村とは、義時の四郎かの義時の四男部大輔時輔とぞ聞ゆる。中務の御子(宗尊)御上りの代りに、かの御子の、三になり給ふ若君達(惟康)、近衞殿(基嗣)の姫君の御腹ぞかし。七月廿七日に、將軍の宣旨かうぶらせ給ひて、やがて四品し給ふ。經任の中納言を御使にて、東へ下され

などして、苦しからぬ御事になりぬとて、十月ばかりに、故承明門院の御跡、土御門萬里小路殿へ御うつろひありて後ぞ、院のうへ(後堀河)、御母准后(後鳥羽子)なども參り、始めて御對面あり。さるべき人々も、參り仕うまつりなどして、世の常の御有樣にはなりにけれど、建長四年、十一にて御下

りありし後、今まで十五年がほど、にぎはゝしく、いみじうもて崇められさせ給ひて、ゆゝしかりつる御住居にひきかへて、物寂しく心細うなど、思さるゝ折々もありけるにや、

虎とのみもてなされしは昔にて
今はねずみのあなう世の中

又雪のいみじう降りたる朝、右近の馬場の方御覽じにおはしまして、よませ給ひける、

跡なきことにうづもるゝ身は
なほたのむ北野の雪の朝ぼらけ

など聞えき。大方、この御子(宗尊)の、歌の聖にておはしますす事、皆人の口に侍るべし。「枯野の眞葛霜とけて」などを、

人毎にめでゝしる御歌なるべし。されば、世を亂らむなど、思ひよりける武士の、この御子(尊)の、御歌すぐれてよませ給ふを、夜晝いとむつまじく仕うまつりける程に、自ら同じ心なる者など多くなりて、宮(尊)の御氣色あるやうに、いひなしけるとかや。

【何事にか煩しき事】鎌倉て眞基等の北條氏を滅さうとして謀の洩れたこと。大日本史(卷百八十三)に「六月。僧正眞基・法印嚴慧等素親二近宗尊。寵與二其黨一謀レ滅二北條氏一。宗尊不二之知一。至レ是事漏。眞基奔二高野山一。絕レ食而死。嚴慧亡命。時宗・政村送二還宗尊于京師一。」

【經任の中納言を御使にて云々】帝に於ても關東を憚つて、容易に御對面がなかつたが、やがて其の間の取りなしをする爲、經任が使者となつて關東へ下つた。その結果、親王は別に惡いことがないといふので、始めて承明門院の御跡へ移られたのである。

【虎とのみもてなされしは云々】將軍として虎のやうに恐れもてなされ

●五日の御八講　五日間行はれる御八講。○才賢き　才能すぐれた。○結緣灌頂　佛緣を結ぶ爲行ふ灌頂。○昔の御北方　兼平の母をいふ。○いかめしき事ども　おごそかな儀式。○余五將軍　平維茂(これもち)のこと。兼忠の子、貞

たのも、昔のことで、今は寃罪の爲、まるで鼠の穴に住んで居るやうなもの、あゝ何といふ物憂き世の中であらう。「あな」は「穴」と「あゝ」の意の「あな」とをかけたのである。

【なほたのむ北野の雪の云々】寃罪の爲、かうして世から埋れ、寂しい生活をして居る身は、再び元の青天白日の身になることを、この雪の朝、北野の神に御願ひ申すの意。北野の神は菅公であるから、寃罪と も關係があり、又「跡なき」「うづもる」二語共に雪の緣語である。

【枯野の眞葛霜とけて】「日影さす枯野の眞葛霜とけて過ぎにし秋にかへる露かな」(續古今集)。

又の年二月には、龜山殿の淨金剛院にて、十五日、涅槃の儀式をうつし行はせ給ふ。それより、五日の御八講に、人人才賢き限りを選び召しけり。大殿(實)二條殿にも、西八條にて、故東山殿(基)の御爲に、八講行はせ給ふ。關白殿(實)も、光明峰寺にて、結緣灌頂とり行はる。鷹司殿(平)には、昔

盛の養子。鎭守府將軍となる余五は十五男の義。○臨終佛　臨終の際、現はれた阿彌陀佛。○惠心　延暦寺横川の僧源信。○常の御樣　普通の阿彌陀像。○化佛　本佛の御光の間に刻んだ小佛。○劫濁　汚れた末の世、所謂五濁の一。○男　俗人。○あかれ〳〵　別々に。○大饗　七四頁を見よ。○尊者　同上。○その頃　文永四年三月十日頃。○さのみはにて　餘り長々しくなつてはならぬから。

の御北方の十三年の法事とて、大宮殿にていかめしき事ども營ませ給ふ。中に繪像の阿彌陀、余五將軍の臨終佛なりけるを、惠心の僧都傳へられたりけるを、持たせ給ひて、供養し給ふ。常の佛の御樣にはかはり給ひて、化佛の御光など、めでたくおはしましけり。こゝもかしこも、尊き事のみ耳に滿ちて、劫濁とはいひがたし、安嘉門院(邦子)も、御法事行はる。男も法師もいとまなく、あかれ〳〵まゐり仕うまつらる。佛法の盛りとぞ見えたる。その頃、殿の大將(家嗣)、内大臣になり給ひぬ。節會果つるまゝに、大饗行はる。尊者には、新大納言爲氏參られけり。御遊など、例の事ども面白くなむ。今出川中納言實兼も、琵琶彈き給ふ。春の曙の艶なるに、物の音もてはやさるべし。その頃、又東二條

●十種供養の御經　法華經のこと。法華經を書寫すれば、十種の供養をなすといふによる○淨土の三部經　大無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經。○齋會　法會。○いみじ　嚴か。○しつらひ　設備裝飾。○玉の帳瑠璃の天蓋　玉・瑠璃は

院(公子)熊野へ御參り、めでたかりし事どもも、あまりになれば、さのみはにて漏しつ。

【涅槃の儀式をうつし行はせ給ふ】「涅槃」は梵語 Nervâna 寂滅、圓寂、滅度、無爲など譯す。但し「涅槃に入る」といへば、普通死ぬことで、その儀式とは、釋迦入滅の時の有樣をいふ。卽ちそれを模し行ふので、つまり、二月十五日、釋迦入滅の日に之を行ふ佛事を行ふこと。

【春の曙の艶なるに云々】折柄春の曙の、優美なるに、樂の音も一人興があるであらう。

かくて四月廿三日より、院の上(後嵯峨)は、又龜山殿にて御如法經遊ばす。女院(遊子)も書かせおはしましけり。五月廿三日、十種供養の御經二部、淨土の三部經も書かせ給へり。齋會の御有樣は、いつよりもなほいみじ。時なりて、寢殿の御しつらひ、淨土の莊嚴も、かばかりにこそと見えて、

玉の幡・瑠璃の天蓋、天に光を輝かし、金銀の飾、地を照らせる様、筆も及びがたし。上達部左右につき給ふ。左大臣基平・内大臣家經・大納言は良教・資季・通成・師繼・通雅。中納言は公藤・長雅・通敎・經俊。宰相は時繼・資平・宗雅・雅言・具氏などさぶらはる。盤渉調の調子を吹きて、天童二人、玉の幡をさゝげて、傳供ども、次第に奉るほど、鳥向樂を吹き出したり。中島に樂屋は飾られたれば、橋の上を、樂人つらねて參る程、院の上(後鳥羽)も出でさせ給ひて、傳供に立ち加らせおはします御樣、いとかたじけなく、めでたし。關白殿(實氏)・太政大臣(兼平)・左大臣(基平)・内大臣(經家)、皆傳供に從はせ給ふ。宗明樂・秋風樂を奏して、繰り返したる程、面白き事、身の毛も立つばかりなり。御前の御遊には、笙

共に美しい形容。○盤渉調 音樂の調子。輕いもの。○天童 天人の裝ひをした童子。○傳供 供物を次第に手渡して供壇に供へるもの。○鳥向樂 唐土傳來の樂。一名青海波。○中島 池の中に作つた島。○つらねて 列を作つて。○宗明樂秋風樂 これも盤渉調。○身の毛も立つばかり ゾッとするほど。○召人 寵妾。○小納言・新兵衛 共に女。○彌勒菩薩 この時そこに安置してあつたものであらう。○横川 延暦寺三塔の一。○同じ御心 大宮院と後嵯峨院と。○ありがたく 珍しく。

は公藤・通頼・房名・宗雅、笛は長雅・師親・相保、篳篥は實成朝臣・光顯・御琵琶は、新院(後深草)・今出川中納言實兼・富小路三位公成、箏は大納言の二位殿、院の上(後嵯峨)この頃又なき御召人、故入道相國(公經)の御女とぞ聞えし。又刑部卿中宮の・御母少納言・新兵衛、男には、良敎の大納言などぞ彈かれける。勝れたる上手どもの、手を盡し給ひけむは、彌勒菩薩も、いかばかり笑みを含み給ひけむ。御經一部は、北野の社へ御奉納あり。今一部と三部經は、八幡へ御幸ありて、籠め奉らせ給ふ。女院(土御門)の書かせおはしましたるは、横川にぞ籠められける。かく同じ御心に、佛法の御營みも、やむごとなくのみおはしますこそ、聖武天皇・光明皇后の御ためしにやと、ありがたく承りしか。

【箏は大納言の二位殿云々】　箏は大納言二位殿・刑部卿などが彈かれた。この大納言二位殿といふのは、故公經の女で、此の頃、後嵯峨院が非常に御寵愛になつて居る人である。

【聖武天皇・光明皇后の御ためし】　光明皇后は藤原不比等の女、聖武天皇の皇后である。聖武天皇は有名な佛教信者で、東大寺を建立して、自ら「三寶の奴」と云はれた方、皇后も亦同じく佛教に凝つた方で、東大寺の建立なども其の御勸めによつたのである。

今年、五月雨（さみだれ）、常よりも晴間（はれま）なくて、伊勢の宮河（みやがは）も岸を浸して、齋宮（斎子）の御參りも御船なり。祭主（祐隆）も別の船にて、御供仕うまつる。道すがら、歌うたひ、絲竹（しちく）のしらべなど、面白く遊びくらす。御下りの後、四年になりぬ。古き例にまかせて、淮后（じゅこう）の宣旨（せんじ）まゐる。御使に中院の少將爲

●常よりも　例年よりも。○宮河　度會（わたらひ）川。○齋宮　歴代毎に未婚の皇女又は女王を遣して、大神宮に奉仕せしめるもの。この時は後嵯峨院の皇女愷子。○祭主　大神宮の神官の長。○絲竹　琴の類・笛の類。樂器の總稱

定朝臣下（くだ）りて、事のよし申す。殿上に召して、裳（も）・唐衣（からぎぬ）・祿（ろく）たまふ。舞踏（ぶたう）して後、都の物語など、さるべきおとなだつ人々に、少し聞えかはす。艷（えん）なる心地して、たゞの宮腹（みやばら）ならば、はかなし事などを聞えぬべけれど、神々（かうがう）しく、けどほき御有樣なれば、すくよかにてまかでぬ。

【古き例にまかせて云々】　この文意では、四年になつたから、淮后の宣旨が下つたやうに聞えるけれども、古い例をしらべるに、必ずしもさうではない。又この宣旨の下つた方は極めて少い。そして又四年とも定まつて居ない。例へば媞子内親王（郁芳門院）は承暦二年（三歳）三月淮后の宣旨があり、その八月に齋宮になつて居られる。ろだが、何分儉し難い所があるので、それどころではない、恐縮して引退つたのである。

【たゞの宮腹ならば云々】　普通の姫宮なら、ツカリ冗談でもいふとこ

その年九月の頃、左の大臣近衛（基平）殿の日野の山莊へ、一院

○御下り　伊勢に行かれたこと。○御使　その宣旨を持つてゆく使。○殿上　齋宮の御所。○舞踏　物を戴いた時、御前で袖を左右に振り、舞ひなどつて謝禮の意を表すること。○さるべき　然るべき。○おとなだつ人々　おもだつた女房たち。○聞えかはす　話しあふ。○艷なる心地　ローマンチックな心持。○宮腹　皇女の御腹から生れた人。○神々し　けだかい。○けどほき　近づき難い。○すくよかにてまかでぬ　まじめ。

●日野の山莊　山城宇治郡醍

（後堀）・新院（草）・大宮院（子）御幸あり。世になききよらを
つくさる。銀・金の御皿ども、螺鈿の御臺・打敷、目馴れ
ぬ程の事どもなり。院（後堀）の御分、御小直衣皆具・夜の御
衾・白御太刀・御馬二疋・唐綾・魚綾などにて、二階造られて、
御草子箱、御硯は、世々を經て、重き寶の石なり。管絃の御
厨子・樂器、いろ〳〵の綾錦などにて、造りて置かる。女院
（子）の御方・新院（後堀）の御分なども同じやうなり。大納言
二位殿にも、裝束・守りの筥まで、いとなまめかしう、清
らなる物どもぞありける。上達部・殿上人にも、馬・牛引か
る。銀のかたみを五つ組ませて、松茸入れらる。山へ皆入
らせおはしましして、御覽の後、御かはらけ、幾返となくき
こしめせば、人々も醉ひ亂れ、さまざまにて過ぎぬ。

●安嘉門院　後高倉帝第二皇女。後堀河帝の准母。○天の橋立　丹後與謝郡。日本三景の一。○城崎　但馬城崎郡。○いでゆ　温泉。○童舞　子供のする舞樂。○白拍子　遊女の烏帽子・水干をつけて舞ふもの。男舞ともいふ。○田樂　鼓・さゝら・銅鈸子などに合せて歌舞するもの。もと農事の慰勞として舞踊したものに起る。○さぶらふ人　御側について居る人。○うちとけず　ゆつくりくつろぎ休むこともなく。○あざやかにはで

【二階造られて云々】「二階」は棚の二段になつた厨子。それを造つて、そこに御草子箱や御硯を置かれた。その硯は代々傳へて來た貴重な石で作つたものであるの意。○太刀や馬で二階を造られたやうに聞えるが、さうではない。

その同じ頃、安嘉門院（邦）、丹後の天の橋立御覽じにとて、
おはします。それより、但馬の城崎のいでゆめしに、下ら
せ給ふ。爲家の大納言・光成の三位など、御供仕うまつら
る。この女院（邦）の御有樣ぞ、又いといみじう、來し方行く
末のためしにもなりぬべく、萬の事、御心のまゝに、この
ましくものし給ひける。童舞・白拍子・田樂などいふ事好ま
せ給ひて、古への郁芳門院（媞）にも、やゝ勝りてぞおはしま
す。さぶらふ人々も、常にうちとけず、衣の色あざやかに、
はなばなと、今めかしき院の内なり。又安養壽院といひて、

（7）

やか。○はなばなと　花々しく。○観法　観心の法、即ち悟道の行を修すること。○鳴子　今日も田舎で鳥を追ふに用ひるもの。今日の呼給のやうにしたのである。

●日頃　毎日續いて。○所せかりしに　窮陶しかつたところが。○雲間　雨雲の晴間。○一つ御方　同じ所。○うとからぬ人々　姻戚の人々。○下り流れて　盃が廻つて。○

山の峰なる御堂には、常にたてこもらせ給ひて、御観法(ごんぽふ)などあるには、人の參る事もたやすくなし。鳴子(なるこ)をかけて、引かせ給ひてぞ、自ら(みづから)人をも召しける。

【古への郁芳門院にもや〳〵勝りてぞ云々】「勝り」は、その好きさ加減が一層上であつたの意。郁芳門院の田樂好であつたことは、左の文で明かである。「永長(堀河)元年の夏、洛陽大有二田樂之事一云々。一城之人皆如レ狂焉。蓋靈狐之所レ爲也。其裝束盡レ善盡レ美。如レ影如レ塚。以二錦繡一爲レ衣。以二金銀一爲レ餝。富者傾二産業一。貧者岐面及レ之。郁芳門院殊催二叡感一。姑射之中此觀尤盛。」(洛陽田樂記)これによると、田樂と華美とは、既に此の時から相伴つて居たと見える。

又、その頃にや、秋の雨、日頃降りて、いと所せかりしに、たま〳〵雲間見えて、空のけしき物すごき程に、一院(後鳥羽)・新院(後鳥羽)・大宮院(姞子)・東二條院(公子)など、皆一つ御方におはします。御前に太政大臣(公相)・常盤井入道殿(實氏)も候ひ給ふ。

とばかり　暫く。○官位共に云々　所謂位人臣を極めるの意。従一位太政大臣であつたから。○さておはしませば　中宮として、さうして居られれば。○實兼　公相の子。○けしうは侍らぬ男　つまらぬ男ではない。即ち相當に器量があるの意。○うしろめたく氣にかゝる。○一つのうれへ　一つの心配。○おぼつかなく　不安に。○澄明　歎に沈む。○うちしほたれ　尤もである。

前の左の大臣(實雄)・久我大納言(雅忠)など、うとからぬ人々ばかりにて、大御酒(おほみき)まゐる。あまた下(くだ)り流れて、上下、少しうち亂れ給へるに、太政大臣(公相)、本院(後嵯峨)の御盃(さかづき)を賜はりて、持ちながら、とばかりやすらひて、「公相(きんすけ)、官位(くわんゐ)共に極(きは)め侍りぬ。中宮今出川院(嬉子)さておはしませば、若し皇子(わうじ)降誕(たん)もあらば、家門の榮華衰ふべからず。實兼も、けしうは侍らぬ男(をのこ)なり。うしろめたくも思ひ侍らぬに、一の憂へ、つゆになむ侍る」と申し給へば、人々、何事にかと、おぼつかなくなむ思ひあはる。左のおとゞ實雄公は、中宮(嬉子)のらむかし。一院(後嵯峨)、「何事にか」とのたまふに、しばしありて、「入道相國(實氏)に、いかにも先立ちぬべき心地なむし

侍る。『恨みの至りて恨めしきは、さかりにて親に先だつ恨み、悲びの至りて悲しきは、老いて子に後るゝには過ぎず』とこそ、澄明におくれたる願文にも、書きて侍りしか」など申し給ひて、うちしほたれ給へば、皆いとあはれに聞きおぼす。入道殿(寶氏)は、まして、墨染の御袖ぬらし給ひける。理りなりかし。

【中宮の御事かくのたまふを云々】 公相が中宮(嬉子)の事をいふので、さあ、我が女の佶子の身の上にかゝる事かと氣にかゝるの意。猶ほ二九〇頁の系圖を見よ。

【入道相國に云々】 何だか親(寶氏)よりも先に死ぬやうな氣がしてならぬ。それが悲しい。

【恨みの至りて恨めしきは云々】 本朝文粹(卷一四)大江朝綱「爲亡息澄明四十九日願文」に「悲之又悲。莫レ悲二於老後一子。恨而更恨。莫レ恨二於少先レ親。」とあるものを指す。

●その頃　文永三年八月。○明堂殿　典藥寮の寶物明堂圖を納めおいた所。○まろびぬ　倒壞した。○この内　明堂殿の内。○目をあてては云々　見れば目がつぶれると、いひならはして居るからである。○陰陽寮の守護神　陰陽寮に祀れる神。○山の文殊樓　比叡山延曆寺東塔にあるもの。慈覺大師の創建。○稻荷の中の宮　山城紀伊郡。所謂伏見稻荷。中社は倉稻魂神を祀る。○吹き損ひて　吹きこはして。○ためしありがたき　類稀なる。○さながら　そのまゝ。○おびたゞしき　ひどい。○御占　うらなひ。○重き人の云々　帝王・大臣などの重く謹愼あるべきこと。○なやま

又その頃大風吹きて、人々の家々、損はれ失する事數知らぬ中に、明堂殿もまろびぬ。この内には、木にて人形を作りて、宮殿を金にて造りて、入れたる寶あり。眼をあてては見ぬものなり。自らもあやまりて見つる人は、目のつぶれけるぞ恐ろしき。陰陽寮の守護神の社もまろびぬ。山の文殊樓・稻荷の中の宮なども、吹き損ひて、すべて來し方行く末も、ためしあり難き風なり。西國の方には、人の家をさながら吹き上げゝれば、内なる人は、塵のやうに落ちて、死に失せなどしけるぞ、珍らかなる。偖りにかくおびたゞしき風なれば、御占行はれけるにも、重き人　御愼み、輕からぬ」など奏しけり。果してその頃、西園寺の太政大臣公相なやましくし給ふとて、山々寺々、修法・讀經・祭祓な

ど、かしがましくひゞきのゝしりつれど、それもかひなくて、十月十二日失せたまひぬ。入道殿(實氏)をはじめ、おばしなげく人々數しらず。中宮(禧子)も、御服にて出で給ひぬ。北方は、德大寺の太政大臣實基の御女なれど、この御腹には、更に御子もなし。中宮(禧子)をも、少納言とて召し使ふ女房の、生み聞えたれど、北方の御子になして、男公達も、腹々にあまたおはすれど、いづれをも、北方の御子になされけり。この大臣(公相)、入道殿(實氏)よりは、少し情おくれ、いちはやくなどおはしければ、心の底には、さのみ歎く人もなかりけるとかや。御わざの夜、御棺に入れ給へる御頭を、人の盜みとりけるぞめづらかなる。御顏の下短にて、半ばほどに、御目のおはしましければ、外法とかや祭るに、かゝ

し　病氣。○かしがましく　喧しく。○御服にて出で給ひぬ　服の爲に宮中を出られた。○北方　公相の。○腹々に　多くの女に出來たこと。○情おくれ　冷酷。○いちはやく　はげしい。○心の底には云云　誰も本當に悲しむ者はなかつた。○御わざの夜　葬式の夜。○外法　靈神を祭ること。○かういふ人相の。○ひじり　僧。○沙汰がましく云々　問題になつた。○ありし一事　公相の院の御前で言つたこと。

る生首のいる事にて、某のひじりとかや、東山のほとりなりける人、取りてけるとて、後に、沙汰がましく聞えき。中宮(禧子)の御事などを、深く思さるめりしかば、いとはしく、あたらしきわざにぞ、世の人も思ひ申しける。ありし一事をおぼしいでつゝ、誰もあはれに悲しくて、女院(禧子)の御方々も、それをのみのたまはせけり。

【北の方は云々】　公相の奥方は實基の女であるが、この方には一人も子がない。嬉子と實は少納言といふ女房の生んだのを奥方の子とされたのだし、其の他いろ〳〵の女に澤山男の子もあつたが、それも皆奥方の子といふことにされた。

【御顏の下短にて云々】　公相の顏は、額が廣く、顎の方が短いので、目が丁度顏の眞中邊にあつた。かういふ顏は外法の祈禱に要るといふので、東山邊に居た某法師が盜んで行つたのである。

【中宮の御事など云々】　公相がかれがれから嬉子の事を深く氣にかけて居たやうだから、世間の人も氣の毒な、惜しいことだと思つた。

●御幸　産所なる土御門殿へ　○内　禁中。○さながらとゞめつ　そのまゝ省略する。○攝籙渡りぬ　關白となつた。○御太郎君　長男。○御悅申に云々　任官の御禮に參つた時、馬を賜はつた。

十二月(文永四年)一日頃、皇后宮(信子)、又御産とて、天下騷ぐに、えもいはぬ玉の男御子(後宇多院)生れ給ひぬ。大臣(實雄)・北方(榮子)の御心の中、思ひやるべし。今ぞ夜の明けぬる心地したまふ。院(後嵯峨)も急ぎ御幸ありて、もてはやし奉らせ給ふ。内(龜山)より御佩刀(はかせ)まゐる。例の夜を經ての事ども、さながらとゞめつ。近衞の左大臣殿(基平)へ、その頃、攝籙(せふろく)渡りぬ。廿二にぞなり給ふ。いとめでたき樣なり。岡の屋殿(兼經)の御太郎君ぞかし。御悅申(よろこびまうし)に、兩院より御馬引かる。大宮院(信子)御琴(こと)、東二條院(公子)は御笛(ふえ)など、贈物ども、いつものことなるべし。西谷殿(基平)とも申し、深心院の關白とも申しき。

【例の夜を經ての事ども】　初夜以下、三夜・五夜等の御産養や御湯殿の儀などをいふ。

●御五十日　五十日目の産養　○後の二十日　閏正月二十日　○冷泉院　大炊御門の南、堀川の西。○いそぎ　準備。○樂所始　樂所は宮中桂芳坊にあり、音樂を奏する所。そこの役所開き。○試樂　音樂の下調べする儀式。○つとめて　翌朝早く。○御階の間　寢殿の正面、階のある通りの室。○二つ御衣　二つぎぬ。同色の袿を二枚重ねたもの。○聖護院　京都上京區聖護院町。智證大師開基。天台宗三井門跡。○覺助　後嵯峨の皇子。圓助・性助・最助皆同樣。○梶井　山城愛宕郡大原三千

第十　あすか川

隙(ひま)ゆく駒の脚にまかせて、文永も五年になりぬ。正月二十日、本院(後嵯峨)のおはします富小路殿にて、今上(龜山)の若宮(後宇多)御五十日(いか)きこしめす。いみじう清(きよ)らを盡さるべし。今年正月に閏(うるふ)あり。後の二十日あまりの程に、冷泉院にて舞(まひ)御覽(ごらん)あり。明けむ年(文永六年)、一院(後嵯峨)、五十(いそぢ)に滿たせ給ふべければ、御賀あるべしとて、今より世のいそぎに聞ゆ。樂所始(がくしよ)の儀式は、内裏(たいり)にてぞありける。試樂(しがく)廿三日と聞えしを、雨降りて、明くる日つとめて、人々まゐりつどふ。新院(後深草)は、かねてより渡らせ給へり。寢殿(しんでん)の御階(みはし)の間(ま)に、一院(後嵯峨)の御座(おまし)設けたり。その西によりて、新院(後深草)の御座(ましし)を設く。

院、圓融院又圓融坊ともいふ。延暦寺の別處。○月華門院　後嵯峨の皇女。○花山院淮后　實氏の奥方。大宮院・東二條院の御母。○心ことにて云々　美しい袖口を特別目立たせて簾の下から出して居られる。○大納言の二位殿　後嵯峨院の御乳母。公經の女。○中門の廊　對屋より泉殿・釣殿に通ずる廊下。寢殿造の圖參照。○透渡殿　兩側には只柱だけがあつて、勾欄を設け簾を垂れた廊下。透廊(すいらう)。○打橋　通路の爲、假に板をかけ渡したもの。○著き餘れり　坐りきれずに其の邊までも並んで居る。○櫻　白の赤ばんだもの。○きにて櫻を「き」は恐らく衍字であらう。

東は大宮院(皇)・東二條院(公)、皆白き御袴に二つ御衣奉れり。聖護院の法親王(僧)・圓滿院僧正(僧)などまゐり給ふ。土御門の中務の宮(宗尊)もまゐり給ふ。上達部・殿上人數多御供し給へり。仁和寺御室(性助)・梶井の法親王(尊助)なども、すべて殘りなく集ひ給ふ。月華門院(孫)・花山院淮后(孫)などは、大宮院(孫)のおはします御座に、御几帳おしのけて、渡らせ給ふ。寢殿の第四の間に、袖口ども、心ことにておし出さる。大納言の二位殿・南の御方など、やむごとなき上臈は、院(孫)のおはします御簾の中に、ひきさがりて候ひ給ふ。いづれも白き袴に、二衣なり。東の隅の一間には、大宮院(孫)の女房ども參り集ふ。西の二間には、新准后(孫)さぶらひ給ふ。御前の簀子には、關白殿(基)をはじめて、右大臣(基)・内大臣(家)・兵部卿隆親・二條大納言眞教・源大納言通成・花山院大納言長雅・左衛門督通頼・中宮權大夫隆顯・大炊御門中納言信嗣・前源宰相有賢・衣笠宰相中將經平・左大辨宰相中將具氏・別當公孝・堀川三位中將具守・富小路三位中將公雄、皆、御階の東に著き給ふ。西の第二の間より、又前左大臣實雄・二條大納言經輔・前源大納言雅家・中宮大夫雅忠・藤大納言爲氏・皇后宮大夫實定・四條大納言隆行・帥中納言經任、この外の上達部、西東の中門の廊、それよりいろ〳〵の衣重ね給へり。時なりて、舞人どもまゐる。實冬の中將、唐織物の櫻の狩衣、紫の濃き薄き、きにて櫻を織れり。赤地の錦のうはぎ・紅の匂の三衣・同じ單・しゃらの下がさね・青き表着、いづれも劣らず、いとうつくしげなり。

○しゃら　練絹の縮んだもの　○薄色　薄紫。○人よりは少し云々　年よりは少し地味だが、實に美しい。○先のにかはらず　實冬と同樣。○魚綾　綾織物の一種。○山吹　表薄朽葉、裏黄。○打衣　絹を砧で打つて光澤を出したもの　○だみがへして　だむ(マ、四)は彩る。幾度も〳〵染め出す　○三重の單　三重織物、即ち三重の綵絲で模樣を織出したもので作つた單。○結狩衣　絲でいろ〳〵の模樣を結びつけた狩衣。○金の文　金屬を彫つて模樣につけたもの。○櫻萌黄　表萌黄、裏赤花。但し異説がある。○例の云々　指貫のことをいふ。

の薄色の指貫、人よりは少しねびたりしも、あな清げと見えたり。大炊御門中將冬すけといひしにや、裝束先のにかはらず、狩衣は、唐織物なりき。花山院中將家長右大將の御子魚綾の山吹の狩衣、柳櫻をぬひものにしたり。紅の打衣を輝くばかり、だみかへして、萌黄の匂の三衣・紅の三重の單・浮織物の紫の指貫に、櫻をぬひものにしたる、珍しく美しく見ゆ。花山院少將忠季諸繩の御子なりは、櫻の結狩衣、白き絲にて水を隙なく結びたる上に、櫻柳を、それも結びて附けたる、なまめかしく艶なり。赤地の錦の表著、金の文をおく。紅の二衣・同じ單・紫の指貫、これも柳櫻をぬひものに、いろ〳〵の絲にてしたり。中宮權亮少將公重實藤の大納言の子唐織物の狩衣・紅の打衣・紫の匂の三衣・紅の單・指貫、例

●柳だすき　柳の枝を交叉したやうな模樣。○だみつけ　染めつけ。○輪違　二つの輪を半ば重なる程に打違へた形○匂躑躅　蘇芳をぼかしたもの。○箔散らす　金銀などの箔を處々につけること。○朱櫻　表蘇芳、裏赤花。(異説がある)。○綠苔　浮紋ある織物○玉のくゝり　狩衣の袖くゝりの絲に玉を飾つたもの。○

の紫に櫻を白くぬひたり。

【隙ゆく駒の脚にまかせて】光陰の經過早くの意。莊子(知北遊)に「人生二天地之間一若二白駒之過一郤。忽然而已」。郤は隙、白い馬が通るのをふ。壁の隙間からチラと見るといふ意で、アッと思ふ中に過ぎ去るをいひ

堀川の少將基俊基具の大納言の子唐織物・裏山吹・三重の狩衣、柳だすきを青く繊れる中に、櫻をいろ〳〵に繊れり。萌黄の打衣、櫻をだみつけにして、輪違を細く金の文にして、いろいろの玉をつく。匂躑躅の三衣・紅の三重の單、是も箔散らす。二條中將經良頁教の大納言の御子なり　これも唐織物の櫻萌黄・紅の衣、同じ單なり。皇后宮權亮中將實守、これも同じ色の朱櫻の三衣・紅梅の三重の單。馬頭隆良隆親の子にや　綠苔の赤色の

おきもの　金銀の箔をおいたもの。○地久　高麗樂、雙調。○輪臺　西域の樂、盤渉調。○青海波　一名鳥向樂。天竺の樂、盤渉調。○太平樂　一名武將破陣樂、武昌樂、又巾舞。楚の項莊・項伯が鴻門の會の劍舞を摸すといふ。大食調。○落蹲　高麗樂、壹越調。○春鶯轉　唐樂、壹越調。○古鳥蘇　高麗樂、壹越調。○後參　新古鳥蘇などの舞人の入りぎはに奏する舞。○賀殿　唐樂、壹越調。○半尻　狩衣に似て、後ろ一尺許り短く袖口に組紐をあはび結にして附けたもの。童の著るもの。○笏木　笏を作るに用ひる木さくぎ。○皆彫骨　扇のどの骨にも彫刻のしてあるもの。

狩衣、玉のくゝりを入れ、青き魚綾の表著・紅梅の三衣・同じ二重の單・薄色の指貫、少將實繼松重の狩衣・紅の打衣・紫の二衣、これもいろ〳〵のぬひもの・おきものなど、いと細かに、なまめかしくしなしたり。陵王の童に、四條大納言(隆)の子、裝束常のまゝなれど、紫の綠苔の半尻・金の文・赤地の錦の狩衣・青き魚綾の袴、笏木の皆彫骨、紅の紙にはりて持ちたる用意けしき、いみじくもてつけて、めでたく見え侍りけり。笛茂通・隆康、笙公顯・宗實、篳篥兼行、大鼓敎藤、鞨鼓あきなり、三つの鼓のりより、左萬歲樂、右地久・陵王・輪臺・靑海波・太平樂、入綾實冬いみじく舞ひすまされたり。右落蹲、左春鶯囀、右古鳥蘇・後參・賀殿の入綾も實冬舞ひ給ひしにや。暮れかゝる

○もてつけて　とりつくろうて。○鞨鼓　鼓のやうなものを臺の上に載せ、之を左右の桴(ばち)で打つもの。○あきなり　人名。○三つの鼓　鼓の一種。○のりより　人名。○舞ひすまされたり　滯りなく舞ひおほせた。○あやめ　黑白など書く。差別。すぢみち。○あかれ　別れ。

程に、何のあやめも見えずなりにき。御方々・宮だち、あかれ給ひぬ。

【綾王の童に云々】　綾王は四條大納言の子が舞つた。その服裝は云々の意で。○「綾王」は蘭陵王又羅陵王といふ。沙陀調。北齊の蘭陵王長恭といふもの、常に假面を著けて、敵軍に對して居たが、周の軍を擊つた時に、齊人がその勇武をたゝへ、この舞を作つて、其の樣にならひ、之を蘭陵王入陣の曲と謂つたといふ。

【笏木の皆彫骨、紅の紙にはりて】　隆行の子の持つて居た扇子の樣で、それは笏の木で骨を作り、それに皆彫刻がある。そして紅の紙がはつてある。

【左萬歲樂】　一體舞樂は左右に分つて奏するもので、左を唐樂、右を高麗樂といふことになつて居る。そしてこの左右を組合せて舞樂幾番と稱するのである。○「萬歲樂」は一六九頁を見よ。

【入綾】　入舞ともいふ。舞樂の舞がすんで、將に入らむとする時、更に舞ふこと、又舞ひながら入ること。こゝは實冬がうまく入綾を舞つて入つたといふ意である。

●二月十七日　實は閏正月十七日(深心院關白記)。○忍び渡らせ給ふ　コッソリ行かれた。○日たけてなる　日が高く上つてから行はれた。○這ひわたる程　非常に近いこと　○今日の裝束　御賀の日の裝束。○廂の御車　廂車。○花を折り錦をたち重れて　裝束の華麗なこと。○御前云々　前行の隨身が花やかな聲で先を追つて行くこと。○近く候ひつる　御車に近くついて居る。○になく　似るものなく　○御袴きはにて「きはは」はきはだつて美しく見えること。○中門　對屋より釣殿又は泉殿へ通ふ中途にある門。○二重織物　織物の上に縫物したもの。○唯子　几帳に用ひた

同じ二月十七日に、又新院(重祚)、富小路殿にて舞御覽、その朝、大宮院(姞子)先づ忍びて渡らせ給ふ。一院(後嵯峨)の御幸は、日たけてなる。冷泉殿より、只這ひわたる程なれば、舞人・樂人、今日の裝束にて、御隨身十二人、花を折り、錦をたち重ねて、聲々御前花やかに追ひのゝしりて、近く候ひつる、になく面白し。新院(重祚)は御烏帽子直衣、御袴きはにて、中門にて待ち聞えさせ給ひつるほど、いと艶にめでたし。御車中門に寄せて、關白殿(一條)御佩刀とりて、御匣殿に傳へ給ふ。二重織物の萌黄の御几帳の帷子を出されて、いろ〳〵の平紋の衣ども、物具はなくておし出だされる。今日は正親町院(姞子)も、御堂の角の間より御覽ぜらる。

絹。○平紋　紋を種々の色で彩つたもの。約文の意。

●ありしに變らず　前日と同樣。○洩れたるはなし　昨日居た人で、今日居ない人はない。○花田裏山吹　表縹、裏山吹。○二重うち萌黄　ウチはウラの誤で、表二重織物、裏萌黄の狩衣のことであらうといふ。○先には皆引きかへて云々　前とはすつかり變つて、いろ〳〵華美を盡して居る。○やりつき　術字であらう。○けうら　キヨラ(清)の轉訛。美しく。○日ぐらし　終日。○のゝしりて　喧しくいひ騷いで。○奉らせ給ふ　【中門にて待ち聞えさせ】　後嵯峨院のお出でを後深草院が待つて居られるのである。

【二重織物の萌黄の御几帳云々】　この記事は分りにくいが、多分御匣殿(誰か分らぬ)の居られる所の押出の樣であらう。

大臣・上達部、ありしに變らず。洩れたるはなし。實冬、今日は、花田裏山吹の狩衣、二重うち萌黄など、思ひ〳〵心々に、さきには皆引きかへて、さまざまつくしたり。基俊の少將、この度は、櫻萌黄の五重の狩衣・紅の匂の五衣、打衣は〔やりつき〕山吹の匂、浮織物の三重の單・紫の綾の指貫、中にすぐれてけうらに見え給へり。この度は、多く、綠苔の衣を著たり。萬歲樂を吹きて、樂人・舞人まゐる。池の汀に桙を立つ。春鶯囀・古鳥蘇・後參・輪臺・靑海波・落蹲などあり。日ぐらし面白

新院より一院へ。○刑部卿の君　覺助法親王の御母。刑部卿季時の女。○御簾の内より出さる　その御贈物を。○けしきばみ給ふ　新院より奉られる由を樣子で知らせる。○別して　特別に。○忠茂　多（おほの）忠方の曾孫。忠成の子。

くのゝしりて、歸らせ給ふ程に、赤地の錦の袋に御琵琶入れて、奉らせ給ふ。刑部卿の君、御簾の内より出さる。右大將（通親）とりて、院（後堀河）の御前にけしきばみ給ふ。胡飲酒の舞は、實俊（さねとし）の中將と、かねては聞えしを、父おとゞ（公相）の事にとゞまりにしかば、近衞前關白殿（攝政）の御子三位中將（忠良）ときこゆる、いまだ童にて舞ひ給ふ。別して、この試樂（しがく）より前（さき）なりしにや、内々白河殿にて試みありしに、父の殿（攝政）も、御簾の内より見給ふ。若君（忠良）いと美しう舞ひ給へば、院（後堀河）めでさせ給ひて、舞の師忠茂（ただもち）、祿（ろく）たまはりなどしけり。

【胡飲酒の舞は實俊の中將云々】　胡飲酒の舞は實俊が舞ふといふ豫定になつて居たが、父公相の服中（三一二頁參照）なので、止めになつて、

●むくり　蒙古。○うちさましたるやうにて　何事も興がさめたやうで。○御修法　敵國調伏の爲。○公家・武家　朝廷・幕府。

兼平の子の兼忠といふが、まだ子供だが、舞ふことになつた。それで先づ豫習をさせる爲に、この試樂よりも前であつたか、内所で白河殿で舞はせて見たことがある。

かやうに聞ゆる程に、むくりの軍といふ事起りて、御賀どまりぬ。人々口惜しく、本意なしとおぼす事限りなし。何事もうちさましたるやうにて、御修法や何やと、公家・武家、たゞ此の騒ぎなり。されども程なく鎭まりて、いとめでたし。

【むくりの軍といふ事起りて】　蒙古襲來の事は後にもあるが、こゝは文永五年正月、高麗王禎が蒙古に迫られ、その臣起居舍人潘阜を遣はし、太宰府に來て、國書・方物、並に蒙古の書を上つた時の事である。太宰府からは之を幕府に進め、幕府（時宗）からは又朝廷に申上げた。朝廷では評議を開いて、遂に反譯せざることに決し、一方諸國の神社・佛閣に使者を派して、國難鎭定の祈禱をせしめ、又幕府では沿岸の警備を

益〻嚴にすることとした。

かくて今上(山邊)の若宮(後宇)、六月廿六日親王の宣旨ありて、同じき(文永五年)八月廿五日坊に居給ひぬ。かく花やかなるにつけても、入道殿(實)は、あさましくおぼさる。故大臣(相公)の先立ち給ひし歎きに沈みてのみものし給へど、かゝる世のけしきを、かしこく見給はぬよと思し慰む。中宮(禧子)は、御服の後も參り給はす、萬ひきかへ、物うらめしげなる世の中なり。

【かく花やかなるにつけても云々】實雄の系統が益〻榮えて來るので、實氏の方は益〻不快に思ふのである。

【かゝる世のけしきを云々】こんな世の有樣を公相が見すに亡くなつたので、却つて仕合だの意。

一院(後堀)は、御本意遂げ給はむことを、漸うおぼす。その

●坊　春宮坊。○御服　父公相の薨去に對する。○參り給はす　宮中へ。○よろづひきかへ　萬事うつて變つて。

●御本意　御出家の素志。○

年の九月十三夜、白河殿にて月御覽ずるに、上達部・殿上人、例の多く參り集ふ。御歌合ありしかば、內の女房どもも召されて、いろ〳〵の引物、源氏五十四帖の心、さまざまの風流にして、上達部・殿上人まで分ち給はす。院(後堀)の御製、

われのみや影もかはらむあすか川
　同じ淵瀬に月はすむとも

かねてより袖もしぐれて墨染の
　ゆふべ色ます峰のもみぢ葉

この御歌にてぞ、御本意の事おぼし定めけりと、皆人袖をしぼりて、聲も變りけり。あはれにこそ。民部卿入道(爲家)判せさせられけるにも、一身(判詞)をせめ心をくだきて、かきやる方

內の女房　禁中の女官。○引物　引出物。○分ち給はす　分け與へられた。○おぼし定めけり　正しくは「定めける」。○聲もかはりけり　涙に咽ぶをいふ。○判せさせ　歌の批判。○身をせめ云々　身につまされて。○かきやる方も云云　かきやる(掻遣)は拂ひのける。斷腸の思に堪へすなどの意。

も侍らず」とかや奏しけり。

【源氏五十四帖の心云々】源氏物語五十四帖巻々の意味をいろ〳〵意匠を凝した引出物として賜はるの意。

【われのみや影もかはらむ云々】昔から淵瀬常ならぬを以て知られて居る飛鳥川の、同じ淵瀬に月はすんでも、自分だけは形も變つて法體となるであらうの意。

【かれてより袖もしぐれて云々】やがて出家しようと思ふと、流石浮世の名殘惜しさに、まだ墨染に變へない中から、もう袖は涙にぬれるの意。「袖もしぐれて」は涙に袖のぬれるを、次の紅葉の關係で「しぐる」といひ、「墨染の」は「夕」にかゝる枕詞を僧衣の意にかけて使つたのである。

かくて神無月の五日、龜山殿へ御幸なる。今日を限りの御旅なれば、心ことに整へさせ給ふ。新院（後深草）も例のおはします。大宮（公子）・東二條院（公子）、一つ御車にて、同じく渡らせ給ふ。大宮女院は白菊の御衣、東二條院は青紅葉の八、菊の御小袿たてまつる。まづ北野・平野の社へ御參りあれば、御隨身どもも、花を折りつくし、今日を限りと、樣あしきまでさうぞきあへり。兩社にて馬上げさせられけり。神もいかに名殘多く見給ひけむ。空さへうちしぐれて、木の葉誘ふ嵐も、折しりがほに物悲しう、涙あらそふ心地し給ふ人多かるべし。中務の御子（宗尊）、「今日の袂さぞしぐるらむ」とのたまひし、御返し、中將（實冬）、

袖ぬらす今日をいつかと思ふにも
しぐれてつらき神無月かな

やがて、その夜、御髮おろしたまひぬ。御戒の師には、青蓮院の法親王（尊助）まゐりたまふ。その頃、やがて御逆修始め

●今日を限りの御旅　在俗最後の御幸。○整へさせ　行列等を。○例のおはします　例の通り御同行遊ばす。○一つ御車　同じ車。○白菊　表白裏蘇芳。○青紅葉　表青、裏黄。（異説がある）。○八　五衣を八領重ねること。○菊　表白、裏青。○花を折りつくし　華美の限りを盡し。○今日を限りと　今日が最後と。○樣あしきまで　飾り過ぎて醜いほども。○さうぞきあへり　互に飾りたてて居る。○馬上げさせられ　馬を献ぜられた。○名殘多く　これが最後であるから。○今日の袂さぞしぐるらむ　院の出家を悲しむ歌の一部であるが、全部は未詳。○御戒の師　授戒の導師。○青蓮院の法親王　土御門帝第一皇子。天台座主。○逆修　生前に像め佛事を營み、冥福を祈ること。○法の道を云々　專ら佛道の修行をせら

れた。○止觀の談義　止觀は内心の散亂を靜め、心を靜寂にして、智慧を明かにし、諸法を識別すること。その理を衆に解說講談すること。但しこゝは次の眞言に對し、天台の教理をいふ。(天台三大部の一に摩訶止觀といふものがある)。○深き沙汰　深き道理。○よろづに御心通ひ　萬事に通曉。○暗からず　よく通じて明かに。○今行末　未來。(現今及び將來の意ではない)

●限りなく思ひ聞えさせ　非

させ給へば、そのほど、女院(陰子)、いろ〳〵の御捧物ども奉り給ふ。今はいよ〳〵法の道をのみもてなさせ給ひつゝ、或時は止觀の談義、或時は眞言の深き沙汰、淨土の宗旨などをも尋ねさせ給ひつゝ、よろづに御心通ひ、暗からずものし給へば、何事も、前の世よりかしこくおはしましける程あらはれて、今行末も實にたのもしく、めでたき御有樣なり。

【釉ぬらす今日をいつかと云々】　釉ぬらす時雨の降るこのつらい十月五日を、どういふ日かと思ふにつけても、涙が流れて止まぬの意。「いつかし」は五日と何時かとをかけたのである。

【何事も前の世より云々】　萬事前世から勝れて居られたことが分り、延いては未來も實にたのもしいことだの意。

かくて今年も暮れぬ。又の年(文永六年)三月の朔日、月華門院(琮

常に寵愛して居られた。○さるはまことにや云々　次にいふ事柄を指していふ。○とかく聞ゆる　いろ〳〵と噂する(次の彦仁中將の話など)。○彦仁の中將　順德天皇の皇子忠成王の御子。源姓を賜はる。○基顯　藤原基氏の子。○さめく　私語する。○さまではあらじと云々　それほどの事もあるまいと思ひますが、どうでせうか。(尼の語)。

俄かにかくれさせ給ひぬ。法皇(後堀河)も女院(陰子)も限りなく思ひ聞えさせ給ひつるに、いとあさまし。さるはまことにやあらむ、又人違へにや、とかく聞ゆる御事どもぞ、いと口惜しき。四辻の彦仁の中將、忍びて參り給ひけるを、基顯の中將、かの御眞似をして、又參り加はりける程に、あさましき御事さへありて、それ故かくれさせ給へるなど、さめく人も侍りけり。なほ、さまではあらじとぞ思ひ給ふれど、いかゞありけむ。

【四辻の彦仁の中將云々】　月華門院の所へ彦仁が人知れず通つて居た。ところが基顯がそれを嗅ぎ出して、あの人が行くなら、自分も一つ行つてやらうと、同じやうに通ひ出した。その中とんでもない事が起つて、幾ぜられた。こんな事を世間では云つて居たの意。○この時御年は二十三であつた。この「御事」を一本には「御血おろし」とある。然ら

●御入講　法華入講。〇世の中の人　在朝の人をいふ。〇渡り給へり　亀山離宮へお出でになつた。〇おぼいたる「おぼしたる」の音便。〇いでやと云々　「いでやしはいやもう。法皇の御意に反ぜられるやうな事なきをいふ。〇第二日　八講の第二日。〇五の巻の日　法華経第五巻を講ずる日、即ち中日〇。捧物　そなへ物。〇まれびつくしがたし　その盛んな有様は筆紙に盡し難しの意。〇紙屋紙　漉き返しの紙　色稍〻薄黒きもの。宣旨などにも用ひられた。〇柳宮　三角形の細い白木を並べ、机のやうな形にしたもの物を載せる臺である。〇そなたざまの宮司　その各宮などに仕へて居る官人。〇もて續きたり　捧物を。〇いどみつくして　競争して。〇をかしき　趣味ある。〇絲鞋　絲で編んだ沓、靴の上にはく。〇鳩の杖　二頁を見よ。〇やがて　そのまゝ。〇捧物にと云云　捧物にしようといふのであつた。〇ひたうち　杖全體を銀の延打にしてあること。〇結願の日　八講最終の日。

ば墮胎である。何かそんな事でもあつて、突然亡くなられたのかも知れない。(少し妙な話だけれども)。

法皇(後廐)は、又文永七年神無月の頃、御手づから書かせ給へる法華經一部供養せさせ給ふ。御八講、名高く才勝れて、かしこき僧どもを召しけり。世の中の人殘りなく仕うまつる。新院(後嵯峨)かねてより渡り給へり。さるべき御事とは申しながら、何につけても、御心ばへのうるはしく、なつかしうおはしまして、院(後嵯峨)のおぼいたる筋の事は、必ず同じ御心に仕うまつり、いさゝかも、いでやと、うち思さるゝ一節もなく物し給ふを、法皇(後嵯峨)も、いとうつくしう、かたじけなしと思されけり。第二日の夜に入りて、行幸(山階)もなる。五の巻の日の御捧物ども參り集ふ。さまざまねびつくしがたし。内(山階)の御捧物は、紙屋紙に金を包みて、柳宮にするゑて、頭辨(資宣)ぞ持たる。次に新院(後嵯峨)・女院(昭子)だち、宮々・御かたがた、皆そなたざまの宮司・殿上人など、もてつゞきたり。關白(基忠)・大臣などは座に著き給ふ。大中納言・參議・四位・五位などは、自らの捧物を持ちて渡る。各〻心々にいどみつくして、様々をかしき中に、兵部卿隆親は、絲鞋をはきて、鳩の杖をつきて出でたり。この杖を、やがて捧物にとなりけり。銀にてひたうちにして、先は金にて鳩をするゑたりけり。結願の日は、舞樂など、いみじく面白くて過ぎぬ。

【さるべき御事とは申しながら云々】　さうあるべき事とはいふものの、後深草の常に御心だて優しく、何事につけても、父上の思召立たれる

●御方わかち　雙方に分れて勝負を爭ふこと。○勝むかひ　負けた方が勝つた方の人を迎へて御馳走すること。○五節の眞似　大嘗會又は新嘗祭の時行はれる五節の舞の眞似。○厚褄　衣の褄の厚いこと。○ひきつくろひて　裝ひ飾つて。○幾かへりとなく云々　幾回となく盃の廻ること。○一つがひ　一對。○伏籠　火取の上に伏せて、衣をかける籠のやうなもの。かうして衣にたきものの香をうつす。○麝香の臍　麝香のこと。○ことごとしき　たいさうらしい○こたみ　此度。○おとなび

事は同じやうにせられて、假初にも御意に背かれるやうな事のないのを、後嵯峨も非常に可愛い、ありがたいと思つて居られた。

又の年（文永八年）正月に、しのびて新院（後嵯峨）と御方わかちの事し給ふ。初は、法皇（後嵯峨）御負なれば、御勝むかひに、上達部、皆五節の眞似をして、いろ〳〵の衣、厚褄にて、「思の津に船の寄れかし」と、はやしてまゐる。新院（後嵯峨）ひきつくろひて渡り給ふ。御酒幾かへりとなく聞し召さる。一つづつの御引出物、伊勢物語の心とぞ聞えし。金の地の盤に、銀の伏籠に薫物くゆらして、「山は不盡のねいつとなく」と、又、銀の船に、麝香の臍にて、蓑著たる男つくりがひづつの御引出物、伊勢物語の心とぞ聞えし。金の地の盤に、銀の伏籠に薫物くゆらして、「山は不盡のねいつとなく」と、又、銀の船に、麝香の臍にて、蓑著たる男つくりて、「いざことゝはむ都鳥」など、さまざま、いとなまめかしく、をかしくせられけり。わざと、ことごとしき樣には

分別のある。○きやう〳〵　輕々しい。○唐めいたる　支那風の。○金剛子　印度などに産する田麻（からすのごま）科植物の實。むくれんじのやうなもので、數珠に用ふ。○五葉　五葉の松。○黑方　たきものの名。○さゝやかなる事　一寸した思附の意。○男　男房（なんばう）のこと。藏人をいふ。○強ひかはして　酒などを互に強ひすゝめるあらざりけり。こたみは、新院（後鳥羽）よりこそ、仙人の眞似をして、「法皇（後嵯峨）の御迎にまゐる。上達部のおとなび給へるなどは、少しきやう〳〵にや見えけむと、おしはからる。この度は、源氏の物語の意にやありけむ、唐めいたる箱に、金剛子の數珠入れて、五葉の枝につけたり。又、齋院より、の黑方、梅の散りすぎたる枝につけなど、これも、いとさゝやかなる事どもになむありける。男・女房、亂りがはしく強ひかはして、御箏ども召し、拍子うちならしなどして明けぬ。

【思の津に船の寄れかし】代始和抄大嘗會五節舞の條に「御前の試といふは、寅の日の事なり。是は五人の舞姫を、御殿の庇へ召されて御覽

ずるなり。云々。露臺の亂舞といふ事あり。渡廊に殿上人立並びて、藏人頭、脇戸の内にて袖をかへす事などあり。御前の召しに、今樣の物まれなどいひて、をかしき事どもあるなり。所々の推參は、院の御所を始めて、郢曲の殿上人など參りて、朗詠・今樣・亂舞などあり。思の津といふ事を歌ひて、殿上より御前に參上する事あり」。つまり之れをまれたので、その歌は、「思の津に舟の寄れかし星のまぎれにおして參らうとやれことう。」これは負けた方が、かうして滑稽な風をして勝つた方へ囃しながら迎へに行くのである。そして行けば又、それぞれ趣向を凝した引出物が出る。

【伊勢物語の心とぞ聞えし】前(八二八頁)に源氏の心とあつたのと同じく、伊勢物語の意味によつて意匠を凝したのである。

【山は不盡のれいつとなく】伊勢物語に「時知らぬ山は不盡のれ何時とてか鹿子(かのこ)まだらに雪の降るらむ」とあるをいふので、その銀の伏籠に煙の出るのを富士山に見たてたのである。

【いざこととはむ都鳥】これも伊勢物語に「名にしおはばいざこととはむ都鳥吾が思ふ人はありやなしやと。」これも蓑著た旅人を業平と見たてての事であるが、麝香の臍で拵へたとは、この人形が芳香を放つといふ工夫ででもあらうか、よくは分らない。

【煩惱は首にのる云々】はやしの語。當時流行の歌であらうが、全部は分らぬ。

【唐めいたる箱に云々】これは源氏物語(若紫)に「聖(ひじり)、御守に獨鈷(どこ)奉る。見給ひて、僧都、聖德太子の百濟より得給へりける金剛子の數珠の玉の裝束したる、やがて其の國より入れたる筥の唐めいたるを、透きたる袋に入れて、五葉の枝につけて、紺瑠璃の壺どもに御藥ども入れて、藤・櫻などにつけて、所につけたる御贈物ども捧げ奉り給ふ。」とあるもの。

●心やりて　氣を晴らす。○たゞにもおはしまさざりつる　御懷好をいふ。○その御氣色　御產の樣子。○せさせ給へば　產を。○大法秘法　大法は眞言密教の修法中、最も

かやうの事にのみ心やりて、明し暮させ給ふ程に、又の年(文永九年)の秋になりぬ。東二條院(公子)、日頃たゞにもおはしまさざりつるが、その御氣色(けしき)ありとて、世の中騷ぐ。院の内にてせさせ給へば、いよ〳〵人參り集(つど)ふ。大法(たいほふ)・祕法(ひほふ)殘りなく

秘重せられるもの、秘法は之に次ぐもの。○七佛藥師　七佛藥師の爲に各一壇づつの壇を築いて、息災・安産等を祈る修法。七佛藥師法といふ。○普賢延命　普賢菩薩に對して延命を祈る修法。之も普賢延命法といふ。○金剛童子　金剛童子を本尊とした修法。○如法愛染　如法は法式の通りの義。如法に愛染明王を本尊として祈る修法。○驗者　加持祈禱する僧。○常住院僧正　藤原兼基の子。三井寺僧正　○既にかと　もう御出産かと　○ある限り云々　そこに居る人は皆生きた心地がない。○大阿闍梨　修法壇の主たる僧　○枕上　枕べ。○あつかひ聞え　看護し給ふ。○おろかな

行はる。七佛藥師・五壇の御修法・普賢延命・金剛童子、如法愛染など、すべて數知らず。御驗者には常住院僧正(眞瑜)參り給ふ。八月二十日宵の事なり。既にかと見えさせ給ひつゝも、二日・三日になりぬれば、ある限り、物覺ゆる人もなし。いと苦しげにし給へば、仁和寺の御室(性助)の如法愛染の大阿闍梨にて候ひ給ふを、御枕上に近く入れ奉らせ給ひて、「(後深草)いと弱う見え侍るは、いかなるべきにか」と、院(後深草)もそひおはしまして、あつかひ聞え給ふ樣おろかならねば、(性助)あはれと見奉り給ひて、「(性助)さりとも、けしうはおはしまさじ、定業の亦能轉は、菩薩のちかひなり。今更妄語あらじ」とて、御心を致して念じ給ふに、驗者の僧正(眞瑜)も、「一ちひみつ」とて、念珠おしもみたるほど、げにたのもしく聞ゆ。

られば　おろそかならねば。○けしうはあらじ　惡くはなからう。○御心を致して　一心に。○一ちひみつ　呪文の語。一致祕密か。○念珠　數珠。○げにたのもしく聞ゆ　いかにも驗がありさうである　○御誦經のもの　誦經の時のお布施。○こちたきまで　邪魔になるほど多く。○奉行　修法について萬事世話して居る人。○あかれ〳〵に　別々に。○分ちつかはす　その衣などを。○そこらの　多くの　○巫女　神樂を奏し、神おろしなどするもの。○千度の御祓　中臣の祓を千度繰り返してよむこと。○神馬をぞ引く　神馬を奉ること。○御氣色　御樣子。○さとしぐれわたる

御誦經のものども運び出で、女房のきぬなど、こちたきまでおしいだせば、奉行取りて、殿上人・北面の上下、あかれあかれに分ちつかはす。そこらの上達部は、階の間の左右に著きて、皇子誕生を待つ氣色なり。陰陽師・巫女、立ちこみて、千度の御祓つとむ。御隨身・北面の下﨟などは、神馬をぞ引くめる。院(後深草)拜し給ひて、廿一社にたてまつらせ給ふ。すべて、上下内外、のゝしりみちたるに、御氣色、只弱りに弱らせ給へば、今一しほ心惑ひして、さとしぐれわたる袖の上も、いとゆゝし。院(後深草)もかきくらし、悲しく思されて、御心のうちには、石清水の方を念じ給ひつゝ、御手をとらへて泣き給ふに、候ふ限りの人、皆え心づよからず。いみじき願どもを立てさせ給ふしるしにや、七佛の

阿闍梨參りて、「見者歡喜」と、うちあげたるほどに、幸うじて生れ給ひぬ。何といふ事も聞えぬは、姫宮なりけりと、いと口惜しけれど、むげになき人と見え給へるに、平らかにおはするを喜びにて、いかゞはせむと思し慰む。人々の祿など、常のごとし。法皇（後嵯峨）も、なか〳〵いたはしく、やむごとなき事に思して、いみじくもてはやし奉らせ給ふ。いでやと、口惜しく思へる人々多かり。かゝるにしも、實雄の大臣の御宿世（おんすくせ）あらはれて、片つ方には、心おちゐ給ふも、世のならひなれば、理りなるべし。五夜・七夜など、殊に花やかなる事にて過ぎもてゆく。

【定業の亦能轉は云々】「定業」は前世の宿緣によつて現世の運命の決定して居ること。これはどうしても改轉することは出來ないけれども、

若し衆生の懺悔力が深厚ならば、之を轉することが出來るといふのは、菩薩の誓ふ所である。まさか虛言ではあるまいの意。法華文句に「若其機感厚。定業亦能轉。」

【廿一社】伊勢・石清水・賀茂・松尾・平野・稻荷・春日・大原野・大神・石上・大和・廣瀨・住吉・日吉・梅宮・吉田・廣田・祇園・北野・丹生・貴船（貴布禰）。○右の二十一に龍田を加へて二十二社といふ。これは今日の官幣社などのやうなもので、朝廷より奉幣のある主立つた神社である。そして二十二社といふ語は醍醐帝時代から見えて居るが、時代によつて、十六社となり、十九社となるなど、多少變化がある。併し白河天皇永保元年、二十二社の制が定まつたから、こゝも或は二十二社の誤かも知れない。

【見者歡喜】七佛經に「或有女人。臨當產時。受於極苦。若能至心。稱名禮讚。恭敬供養。七佛如來。衆苦皆除。所生之兒。顏貌端正。見者歡喜。」

【かゝるにしも實雄の大臣の云々】姫宮であつた爲に、實氏の方では悲觀したが、それにつけても、之と競爭して居る中宮の父實雄の方は、

●御惱　御病氣。○怠らせ快方に向ふ。○年もかへりぬ　文永九年。○かいしめりて　うちしめつて。○これや限りと　これが最後かと。○一つ御車　同じ御車で。○尻車の後。○道にて參るべき途中でのまれる。○御煎物　煎じ藥。○したゝめて　調合して。○内野　京都市上京區の西南及び朱雀野村の東北附近。もと大内裏のあつた所。治承元年大内裏炎上後、野となつたのである。○露程もなし　少しもない。○御臆病添

却つて大に安心した。併しこれも世間のならひで、尤もなことであらう。「御宿世があらはれる」とは、前世で善をなした報があらはれて、現世で幸福を得るといふこと、卽ち實氏の方に皇子が出來なければ、先づ一安心だからである。

その頃ほひより、法皇（後嵯峨）時々御惱あり。世の大事なれば、御修法どもいかめしく始まる。何くれと騷ぎあひたれど、怠らせ給はで、年もかへりぬ。正月の初も、院の内かいしめりて、いみじく物思ひ歎きあへり。十七日、龜山殿へ御幸なる。これや限りと、上下心細し。法皇（後嵯峨）は御輿なり。兩女院（大宮東二條院）は、例の一つ御車にたてまつる。尻に御匣殿さぶらひ給ふ。道にて參るべき御煎物を、胤成・師成といふ醫師ども、御前にてしたゝめて、銀の水瓶に入れて、隆良の中納言うけたまはりて、北面の信友といふに持たせたりけ

ひて　弱い心が出て來て。○大井川　大堰川に同じ。保津川の下流、嵯峨嵐山等の邊を過ぎて、桂川となる。○隙なく　しきりに。○男女房　男房・女房。○今のほど云々　只今の容態如何。○いぶせがらせ　氣遣ふ。○正月もたちぬ　正月もすんだ。○壽量院　龜山殿の内にあるもの。○おぼろげの人　普通の人。○南松院　三井寺の内。○淨金剛院　龜山殿の内。○六波羅北南　所謂兩六波羅の探題。この時は、北義宗、南時輔。○御とぶらひ　御見舞。○例の奏し給ふ　例の通り奏上した

るを、内野のほどにて、參らせむとて召したるに、この瓶に露ほどもなし。いとめづらかなるわざなり。さほどの大事のものを、惡しく持ちて、うちこぼすやうは、いかでかあらむ。法皇（後嵯峨）も、いとゞ御臆病添ひて、心細く思されけり。新院（後深草）は、大井川の方におはしまして、隙なく、男女房上下となく、今のほど、いかに〳〵と聞えさせ給ふ。御使の行きかへるほどを、猶ほいぶせがらせ給ふに、正月もたちぬ。いかさまにおはしますべきにかと、誰も〳〵思し惑ふこと限りなし。かねてより、かやうの爲と思しおきてける壽量院へ、二月七日渡り給ふ。こゝへは、おぼろげの人は參らず。南松院の僧正（實伊）・淨金剛院の長老覺道上人などのみ御前にて、法の道ならでは、のたまふ事なし。六

●中一日云々　行つて其の翌日は滞留せられたこと。○とのほりて　行き届いて。○うしろめたからず　不安心なことなく。○善智識　高僧。○ゆゝしき事ども　往生極楽の非常に尊い事など。○酉の時　午後六時。(帝王編年記には卯刻とある)。○くれふたがりて　眞暗になつたやうで　○薬草院　亀山殿の内。○世

波羅北南、御とぶらひに參れり。西園寺の大納言兼實、例の奏し給ふ。

【かれてかやうの爲と云々】　譯て、かういふ病氣の時の用意にと思つて建てられた。

【法の道ならでは云々】　後生安樂の佛の道の外は、一切何も云はれない。

十一日行幸(亀山)あり。中一日わたらせ給へば、泣く〳〵(後嵯峨)、萬の事を聞えおかせ給ふ。新院(後深草)も御對面あり。御門(亀山)は、御本性いと花やかにかしこく、御才なども昔にはぢず、何事も、とゝのほりてめでたくおはします。世を治めさせ給はむ事も、うしろめたからずおぼせば、聞え給ふ筋異なるべし。十七日の朝より、御氣色變るとて、善智識めさる。經

海僧正・往生院の聖などまゐりて、ゆゝしき事ども聞え知

をしたゝめさせ　世を治められ。○動きなく　よく定まつて。○外ざまに分る　他の系統に分れる。○おぼしおくべき云々　心殘りは少しもない　○なき御跡　崩御の後。

らすべし。遂にその日の酉の時に、御年五十三にてかくれさせ給ひぬ。後嵯峨院とぞ申すめる。今年は文永九年なり。院の中くれふたがりて、闇に迷ふ心地すべし。十八日に、薬草院(後深草)・御門(亀山)・春宮(後宇多)、動きなく、又外ざまに分るべき事もなければ、おぼしおくべき一ふしもなし。なき御跡まで、人の靡き仕うまつれる樣、來し方もためしなき程な

【聞え給ふ筋異なるべし】　亀山帝は立派な方であるから、天下を治める

●くろみわたりぬ　喪服をつけたるをいふ。○しめやかにひつそりと。○けしき　有様。○さる事にて　尤もだが○御おぼえ　御寵愛。○年も若かられば　時に四十。○なよらかに　なよ〳〵として柔い。○思ひの外　出家するだらうと思つた人がしなかつたので。○公雄　實雄の子。○はやうより　早くより。以前から。○らうたがらせ　可愛がる。○限りある道　死をいふ。○おくらかし　此の世に殘し置く。○西の對　西の對屋。○夜さり云々　夜對面した時に何事も申上げよう。○御いとほしみの人　御寵愛の人。○日ぐらし　終日。○齢もさかり　壯年。○世おぼえ　世間から重んぜられること。○思ひなし　世間の人の推し量り思ふこと。○捨てはつる　浮世を捨てて佛門に入る。○いとほしう　氣の毒。○いひあつかふ　噂する。○經任の中納言には云々　經任に比べれば、實に此上ない感すべき心だてであらう。○うちそへて　院の崩御を歎く上に又子の出家を。

事などについては、別に御心配もないから、遺命せられたのは、何か外の事であらう。○この時のことを梅松論には、次のやうに記して居る。「爰に後嵯峨院、寛元年中に崩後の刻、遺勅に宣く、一の御子御深草院御即位あるべし。おりゐの後は、長講堂領百八十ヶ所を御領として、御子孫永く在位の望を停めらるべし。次に二の御子龜山院御即位ありて、御治世は累代敢て斷絶あるべからず。子細あるにより下なり御遺命あり。」

廿三日御初七日に、大宮院(子)御髪おろさる。その程、いみじく悲しき事多かり。天の下おしなべてくろみわたりぬ。萬(よろづ)しめやかに、哀なる世のけしきに、心あるも心なきも、涙催さぬはなし。院(後嵯峨)・内(龜山)の御歎きはさる事にて、朝夕むつまじく仕う奉りし人々の思ひ沈みあへる樣、理りにも過ぎたり。その中に、經任の中納言は、人より殊に御おぼえありき。年も若からねば、定めて頭(かしら)おろしなむと、皆人思へるに、なよらかなる狩衣にて、御骨の御壺持ちまゐらせて參れるを、思ひの外にもと、見る人思へり。權中納言公雄と聞ゆるは、皇后宮(子)の御兄(せうと)なり。はやうより、故院(龜)、いみじくくらうたがらせ給ひて、夜晝御傍去らず侍らひて、明暮(あけくれ)仕うまつらせ給ひしかば、限りある道にも、おくらかし給へることを、若きほどに、やる方なく悲しと思ひ入りたまへり。西の對(たい)の前なる紅梅の、いと美しきを折りて、具氏(ともうぢ)の宰相中將、かの中納言(公雄)に消息(せうそこ)きこゆ。

梅の花春は春にもあらぬ世を
いつと知りてか咲き匂ふらむ

かへし、

心あらばころもうき世の梅の花

をり忘れずばにほはざらまし

「夜(公雄)さり對面(たいめ)に何事も聞えむ」といへるを、この中將(兵具)も、故院(後嵯峨)の御いとほしみの人にて、同じ心なる友におぼえければ、いとあはれにて、悲しき事も語りあはせむと、日ぐらし待ちゐたるに、終(つひ)に見えず。あやしと思ふに、早やその夜、頭(公雄)おろしてけり。齡もさかりに、今も皇后宮(信子)の御兄(せうと)、春宮(後宇多)の御伯父なれば、世おぼえ劣るべくもあらず、思ひなしもたのもしく、ほこりかなるべき身にて、かく捨てはつるほど、いみじくあはれなれば、皆人いとほしう悲しき事に、いひあつかふめり。經任の中納言には、こよなき心ばへにや。父おとゞ(實雄)も、院(後嵯峨)の御事を盡きせず歎き給ふに、うちそへて、いみじとおぼす。

●かひなき物思ひ　かの人知れず妹を戀したこと。○つもり　だん〳〵ひどくなつたこと。結果。○はかなくなり　死ぬ。○かくものし給ひ　出家したこと。○春宮の御代　春宮の天子となられること。○え待ちいづまじき　それまで命が續くまい。

【梅の花春は春にも云々】春とはいひ乍ら、天下皆悲しみに沈んで、春とも思はれぬに、梅の花は、今を何時と心得て咲き匂ふのであらう。

【心あらばころもうき世の云々】丁度諒闇の憂き時であるから、もし梅の花に心があつて、時節を知つて居るならば、匂はないであらうものを、何と心なき花であらう。

公宗の中納言も、かひなき物思ひのつもりにや、はかなくなり給ひぬ。又この中納言(公雄)さへ、かくものし給ひぬるを、さまざまにつけて、心細(實雄)くおぼすに、いく程なく、皇后宮(信子)さへ、また失(う)せ給ひぬ。いよ〳〵臥し沈みてのみおはするほどに、いと弱うなりまさり給ふ。春宮(後宇多)の御代をもえ待ちいづまじきなめりと、あはれに心細うおぼしつゞけて、

はかなくも麻生(をふ)の浦梨君が代に

●御日數　四十九日。○引きうつして　ひきかへて。○さぞあらむ　故院の時のやうにさぞよく治まらう。○長講堂領　長講堂はもと六條西洞院今は下寺町通五條下る東側にある。壽永二年後白河院創建其後何度も燒けて建て直したその堂領をいふ。○播磨の國播磨國衙の領。○熱田の社　これも其の社領。○御處分　新院へ讓られたも。○いづれの年なりしか　まだ後嵯峨御在世の頃。○神輿遣ひの行幸　六月（十四日又は十五日）祇園の御靈會（ごりやうゑ）の際、若し皇居の方位、又は神幸路に禁忌あれば、他所に行幸あること。○御對面　新院と龜山帝と、○朝覲　天皇の太上天皇・皇太后を拜し給ふこと。○御方内方と云々　兩派に分れるをいふ。○うちつけ事　思ひがけぬ事。○人一人　後嵯峨院を指す。○朝の御守　朝廷守護の寶劍。○田

ならばと身をも頼みける哉

歎きに堪へず、遂に失せ給ひにけり。物思ひには、げに命も盡くるわざなりけり。

【はかなくも麻生の浦梨云々】一首の意は、東宮の御代ともなつたら、外戚として御後見申上げようなどと、心頼みにして居たが、今となつては、實にはかない頼みであつた。○「麻生の浦」は伊勢にあつて、梨の名所、下句の「ならば」といふ爲である。古今集大歌所の歌に「をふの浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならずも寢て語らはむ」とあるによつたのである。

あはれに悲しといひつゝも、とまらぬ月日なれば、故院（後嵯峨）の御日數も程なう過ぎ給ひぬ。世の中は、新院（後深草）かくておはしませば、法皇（後嵯峨）の御代りに、引きうつして、さぞあらむと、世の人も思ひ聞えけるに、當代（龜山）の御一つ筋に

てあるべき樣の御おきてなり。長講堂領、又播磨の國・尾張の熱田の社などをぞ御處分ありける。いづれの年なりしにか、新院（後深草）、六條殿にわたらせ給ひし頃、祇園の神輿遣ひの行幸ありし時、御對面のやうを、故院（後嵯峨）へ尋ね申されたりしにも、「我とひとしかるべき御事なれば、朝覲になぞらへらるべし」と申されけり。一つ御腹の御兄にてもおはしますに、かたがた理りなるべき世を、思ひの外にもと、思ふ人々も多かるべし。「いでや、位におはしますにつきて、きしあたりの御政事などは理りなり。新院（後深草）にも、若宮（見伏）おはしませば、行末の一ふしは、などかは」などいひしろふ。かゝれば、いつしか、院方（後深草）・内方（龜山）と、人の心も引き別るやうに、うちつけ事どもいできけり。人一人

おはしまさぬあとは、いみじき物にぞありける。朝の御守とて、田村の將軍より傳はりまゐりける御佩刀などをも、かの御氣色(みけしき)の、しかおはしましけるにや、御かくれの後、やがて內裏(だいり)へ奉らせ給ひにしかば、それなどをぞ、女院(予)のうらめしき御事には、院(後深草)も思ひ聞えさせ給ひける。さてしもやはなれば、このよしをも、關の東へぞの給ひつかはしける。內(亀山)には花山院の太政大臣(通雅)、後院(ごゐん)の別當(べたう)になされて、世の中、自らしたゝめさせ給ふ。もとより、いと花やかに、今めかしき所おはする君にて、よろづかど〳〵しうなむ。

【當代の御一つ筋にてあるべき云々】　後深草院が後嵯峨院同樣、院中にあつて政を執られることと思つたところが、案に違うて、院の御遺詔

村の將軍　坂上田村麿。○かの御氣色の云々　後嵯峨院の遺詔のあつた爲であらうか。○御かくれ　後嵯峨院崩御。○さてしもやは云々　遺詔だからとて、さうばかりもして居られないから。○關の東　鎌倉。○後院　天皇在位中に譲め御讓位後の御居所と定められた離宮。別當はその長官。○自らしたゝめさせ　天皇自ら政を執られる。○かど〳〵しう　才氣ある。

は、亀山帝の御一系で長く天下を治めらるべしとのことであつた。そして御深草院の方へは長講堂領以下の領を與へて、皇位の方は斷念せしめようといふのである。(三六四頁參照)。○この事は、後の所謂兩統迭立に關することとする。後深草は、後嵯峨院の第二子、亀山はその第三子で、共に大宮院の御腹であるが、後深草は幼より虛弱で、在位十三年、まだ皇子がない(皇代略記・正統記等にはあつたやうにあるが)。そこで、後嵯峨は天變などを機として、位を亀山に讓らせられた。但し後嵯峨は猶ほ引きつゞき院政を聽いて居られる。そして、文永五年後深草の皇子熙仁(文永二年降誕、後に伏見帝となる)をさし措いて亀山の皇子世仁(文永四年降誕)を皇太子と定められた。かれてから不滿であつた後深草は、是に於て益〻不滿となり、遂に所謂持明院流(後深草の派)と大覺寺流(亀山の派)との紛爭となつたのである。○なほ此の遺詔の件については、史家の間にいろ〳〵の說があるが、煩しいから、こゝには略する。

【一つ御腹の御兄にても云々】　後深草は亀山と同じ腹の御兄上であるか

ら、その子孫の皇位に卽かれるのは、尤もであるのに、御遺詔は案外なことだと思ふ人が多かつた。

【いでや位におはしますにつきて云々】　いやもう、龜山帝が天子の位についてゐられるからには、御親政あるは尤ものことであるが、新院にも熙仁といふ御子があるから、將來皇位御繼承の一事だけは、どうしてないことがあらう。

【それなどをぞ女院のうらめしき御事には云々】　かういふ偏頗な處置については、後深草も、御母大宮院をうらめしく思はれた。

皇后宮(禧)かくれさせ給ひにし後は、盡きせぬ御歎き、さめがたうて、所せき御有樣もよだけう、いかで本意をも遂げてばやなどまでおぼされけり。故院(後嵯峨)の御はても過ぎさせ給へば、世の中、色改まりて、花やかに、人々の御歎きの色も、うすらぎゆくしも、あはれなるならひなりかし。その夏、春宮(後宇多)例にもおはしまさで日頃經れば、內の上

●所せき御有樣　天子たること。○よだけう　よだけし(形)ことごとしい。仰山らしい。○本意　御讓位の御志。○御はて　一周忌。○色改まりて　喪服を脫ぎかへて。●例にもおはしまさで　御病氣。○御胸つぶれて　驚かれて。○和氣・丹波　兩氏とも醫師の家。○氏成・春成　共に

和氣氏。○つと　始終。○この御方　東宮の方。○虎子　しびん。病人などの尿をとる器。○黃皮の色　尿の黃なるをいふ。○などかばかりの事云々　どうしてこれほどの容態を知つて居て云はないか。○まが〳〵しき　不吉なこと。死。○未だ例なき事　東宮灸治の例はない。○位にては云々　主上御灸治の例は只一度だけある。○思し定む　灸治することに。○さらでだに　幼少だから、病氣でなくても。○まめやかに云々　實に苦しいと思はれた。○大夫　春宮大夫。○せさせ奉らせ　灸治を。○いぶかしう　氣遣ふけれど。○をさ〳〵　少しも。○むづかしう　苦しく

(山)御胸つぶれて、御修法や何やと騷がせ給ふ。和氣・丹波の醫師(くすし)ども　氏成、春成、夜晝さぶらひて、御藥の事いろ〳〵に仕うまつれど、たゞ同じ樣(さま)にのみおはす。いかなるべき御事にかと、いとあさましうて、上(山)も、つとこの御方に渡らせ給ひて、見奉らせ給ふに、御目のうち、大かた御身の色(はた)など も、ことの外に黃に見えければ、いとあやしうて、御虎子(つぼ)を召しよせて御覽ぜらる。紙を浸して見せらるゝに、いみじう濃く出でたる黃皮(はだ)の色なり。いとあさましく、などかばかりの事を知り聞えざらむとて、御氣色あしければ、醫師(くすし)ども、いたう畏(かしこ)り、色を失ふ。かばかりになりては、御灸治(やいと)なくては、まが〳〵しき御事出でくべしと、おの〳〵おどろき騷ぐ。未だ例なき事は、いかゞあるべきと、定め

かねらる。位にては、只一度ためしありけり。春宮にては、未ださる例なかりけれど、いかゝはせむとて思し定む。七になら せ給へば、さらでだに心苦しき御程なるに、まめやかにいみじとおぼす。醫師と大夫寅の君一人召し入れて、又人もまゐらず。御門(山)の御前にて、五所ぞせさせ奉らせ給ひける。御乳母ども、いと悲しと思ひて、いぶかしうすれど、をさ〳〵ゆるさせ給はず、宮(後宇多)いと熱くむづかしうおぼせど、大夫につといだかれ給ひて、上(山)の御手をとらへ、よろづに慰め聞えさせ給ふ御氣色のあはれにかたじけなさを、稚き御心におぼし知るにや、いとおとなしく念じ給ふ。かくて後、程なくおこたらせ給ひぬれば、めでたく御心おちゐ給ひぬ。

○つといだかれ　ぢツと抱かれて。○御氣色　父帝の。○念に給ふ　こらへられる。○おこたらせ　平癒。○御心おちゐ　安心。

大方今年は、地震しげくふり、世の中さわがしきやうなれば、つゝしみおぼされて、十月十五日より、圓滿院の二品親王(尊助)、内に候ひ給ひて、尊星王の御修法つとめ給ふに、二十日の宵、二の對より火いできたり。あさましともいはむ方なし。上下立ち騒ぎのゝしるさま、思ひやるべし、大宮院(姞子)も内におはしましける頃にて、急ぎ出でさせ給ふ。御車の棟木にも、既に火燃えつきけるを、又さしよせて、春宮(後宇多)奉らせけり。その夜しも、勾當の内侍、里へ出でたりければ、塗籠の鍵をさへもとめ失ひて、いみじき大事なりけるを、上(山)聞し召して、荒らかに踏ませ給ひたりければ、さばかり強き戸の、まろびて開きたりけるぞおそろしき。さなくばいとゆゝしき事どもぞあるべかりける。

●つゝしみおぼされて　天子御謹愼。○内　宮中。○尊星王の御修法　北斗星を勸請して息災延命を祈る。○二の對　西の對。○さしよせて　御車を。○勾當の内侍　内侍司の掌侍の首班。○里　自分の家。○塗籠　周圍を壁で塗り、開戸をつけたもの、今の土藏にあたる。○ゆゝしき事　大變な事。○故院の御處分　故院のお持ちになる莊園のことなど書いたもの。○ことゆゑなく　何のさしさはりもなく。○御かもん　勘文か、或は冠の誤か。○腰輿　輿の一種。肩輿に對し、兩手を腰の邊にさげて、舁くもの。○修法の強き故に云々　餘り烈しい修法の結果、遂に火を發し

故院（後嵯峨）の御處分の入りたる御小唐櫃、何くれの御寶、こ
とゆゑなく取り出されぬ。それだにも、あまりさわぎて、
御かもん、御産衣などの入りたるものは、燒けにけり。上
（後嵯峨）は腰輿にて、押小路殿へ行幸なりぬ。法親王（覺助）は「修
法の強き故に、かゝる事はあるなり」とぞ、の給はせける。
この四月に、御わたましありつるに、幾程なうかゝるは、
げにいみじきわざなれど、昔も三條院位の御時かとよ、大
内つくりたてられて、御わたましの夜こそ、やがて火出で
きて、燒けにし事もあれば、これより重き大事もあるべか
りけるに、夜かはりたらむはいかゞはせむ。
かくて、今年（文永十年）もくれぬ。上（後嵯峨）は、いよ〳〵世の中心あ
わたゞしう思されて、下りゐなむの御心づかひすめり。位

た。○御わたまし　御移轉。○幾程なうかゝるは　直こんな事になつたのは。○夜かはりたらむは云々　この時は、その夜でなく、大分經つてからであるから、まア仕方がないの意。

●あわたゞしう　天變地異など穩かならぬをいふ。○下りゐなむ　讓位。○三十にも遙かに足らぬ　時に御年二十六

におはしましては、十五年ばかりにやなりぬらむ。いまだ三十にも、遙かに足らぬほどの御齡なれば、今ぞさかりに、若う清らかなる御ほどなめる。

【三條院の御時かとよ云々】三條院の時、内裏の燒けたことは、百練抄（卷四）に「長和三年二月九日。内裏燒亡。天皇御二朝所一、次遷二御松下曹司一、又「同四年九月廿日。自二枇杷第一遷二幸新造内裏一云々。十一月十七日、内裏燒亡。天皇御二松下曹司一、去九月所二遷幸一也。世謂天下滅亡之秋也。十九日。行二幸枇杷第一」この二回である。ここにあるのは、多分第二の方であらうが、本文に、その夜とあるのは、おぼえ違ひであらうと思ふ。

(1)

●二條内裏　二條の南、押小路の北、高倉の西東洞院の東二條高倉殿ともいふ。○殊更に　わざと。○渡されけり　三種の神器を移された。○引直衣　天皇・上皇の御常用服。臣下は用ひず。○打御衣　打絹の御衣。○張袴　張つた絹の袴。○奉れる　御著用○おとなく〳〵しう　大人らしく。○扶持　世話。○おはせましかば　もし御存命であつたら。○拝　拝謁。○朝餉　朝餉の間。清涼殿の中。○末端の方。○いづれとなく　くないふ。○いづれとなくどの女房も皆美しい。○内侍

第十一　草まくら

文永十一年正月廿六日春宮（亀山）（後宇多）に位譲り申させ給ふ。廿五日夜、先づ内侍所（亀山）・劔・璽ひき具して、押小路殿へ行幸なりて、又の日、殊更に二條内裏へ渡されけり。九條の攝政殿忠家まゐり給ひて、藏人召して、禁色おほせらる。上（後宇多）は、八にならせ給へば、いと小く美しげにて、角髪ゆひて、御引直衣・打御衣・張袴奉れる御けしき、おとなく〳〵しう、めでたくおはするを、花山院内大臣（師継）扶持し申さるゝを、故皇后宮（昭訓門院）（子）の御兄公守の君などは、あはれに見給ひつゝ、故大臣（通雅）・宮（子）などのおはせましかばとおぼしいづ。殿上に人々多く參り集り給ひて、御膳まゐる。その後、上達部

(1)

所の御拝　二六一頁を見よ。

●御幸始　譲位後始めて御幸せられること。○家へなる　家へ御幸遊ばされた。○唐廂の御車　屋根を唐様の博風（はふ）に作つたもの。上皇・皇后・東宮・准后・親王・攝關などの乗用。○菊の網代廂の御車　網代廂の車に菊の紋をつけたもの。○奉り始む　乗り始められる。○御烏帽子直衣

の拝あり。女房は朝餉より末まで、内大臣公親の女をはじめにて、三十餘人並み居たり。いづれとなく、とりどりに清げなり。廿八日よりぞ、内侍所の御拝始められける。

【禁色おほせらる】藏人を呼んで禁色の宣旨を下されたないふ。「禁色」とは、位階によつて一定の色を用ひ、他のものを著用するを禁ぜられること、又有紋の綺織物を著用するを禁ぜられることをいふ。但しこは後者の方で、その禁を聽されるのを禁色の宣旨といふ。

かくて新院（亀山）、二月七日、御幸始せさせ給ふ。大宮院（後宇多）のおはします中御門京極實俊の中將の家へなる。御直衣、唐廂の御車、上達部・殿上人殘りなく、うへの衣にて仕うまつらる。同じ十日、やがて菊の網代廂の御車奉り始む。この度は、御烏帽子直衣、同じ院へまゐり給ふ。同廿日、布衣の御幸始、北白河殿へ入らせ給ふ。八葉の御車、萌木の御

(2)

狩衣・山吹の二御衣・紅の御單・薄色の織物の御指貫たてまつる。

本院（後深草）は、故院（後嵯峨）の御第三年の事おぼし入りて、正月の末つ方より、六條殿の長講堂にて、あはれに貴く行はせ給ふ。御指の血を出して、御手づから法華經など書かせ給ふ。乘僧も、十餘人がほど召しおきて、懺法など讀ませらる。御おきての思はずなりしつらさをも、おぼし知らぬにはあらねど、それもさるべきにこそはあらめと、いよ〳〵御心を致して、懇ろに孝じ申させ給ふ樣、いとあはれなり。

【御おきての思はずなりしつらさ云々】後嵯峨院の御遺詔が思ひがけないことであつた事を悲しく思はれないことはないが。卽ち御自分の御子樣が皇統を御繼ぎにならぬといふことを悲しく思はれるが、それでも恨みもせず、只管孝養を盡されるとの意。

烏帽子直衣での意。○布衣の御幸始　狩衣を著て始めて御幸せられること。○北白河殿　愛宕郡。新院の御母代、安嘉門院邦子内親王の御所。○八葉の御車　車箱に八葉の紋をつけたもの。○山吹の二御衣　山吹襲の二衣の小袖。○薄色　薄紫。

●御第三年　三四忌。○御指の血を出して　血で書かれたのである。○懺法　法華三昧懺儀（略して法華懺法）といふもの。故人の滅罪の爲によむ懺悔の文。○それもさるべきにこそは云々　それも然るべき宿緣であらう。○御心を致して　心をこめて。○孝じ　孝養を盡す。

●いかめしう　嚴かに。○嵯峨殿　葛野郡嵯峨村。後嵯峨院の御陵。○過ぎもてゆく　月日が經過する。○官廳　太政官廳。○女御代　二六五頁を見よ。○絲毛の車　牛車の一種。美しい色の絲で葺き飾つたもの。青絲毛・紫絲毛など。○五節　大嘗祭の後、豐明節會に行はれる童女の舞。五人で行ふ。○蒙古おこるとて云云　蒙古來襲との事で止めになつた。○廻立殿　大嘗祭の時、天皇の御湯浴の上、御祭服に召し替へられる所。悠基殿で御供饌を行はれて後、復こゝにもどつて御湯浴の上、又主基殿に渡らせられる。○清暑堂　豐樂院九堂の一。大嘗祭の後、こゝで神樂を行はし。

新院（山蔭）もいかめしう御佛事、嵯峨殿にて行はる。三月廿六日は、御卽位（後宇多）めでたく過ぎもてゆく。十月二十二日御禊なり。十九日官廳へ行幸あり。女御代花山院（師繼）より出さる。絲毛の車、寢殿の階の間に、左大臣殿（師忠）・大納言長雅寄せらる。皆紅の五衣、同じき單、車の尻より出ださる。

十一月十九日、又官廳へ行幸、二十日より五節始まるべく聞えしを、蒙古おこるとて、とまりぬ。廿二日大嘗會、廻立殿の行幸、節會ばかり行はれて、清暑堂の御神樂もなし。

新院（山蔭）は世をしろしめす事變らねば、よろづ御心のまゝに、日頃ゆかしくおぼしめされし所々、いつしか御幸しげう、花やかにて過させ給ふ。いとあらまほしげなり。本院

れる。
●世をしろしめす事變られば　讓位後も院政を行はれるをいふ。○ゆかしく　一度遊んで見たいと思はれる所。○あらまほしげ　かくありたいと思ふやうな。理想的。○すさまじう　面白からず。○世を背かむのまうけ　出家の用意　○尊號をも云々　太上天皇の尊號をも辭された。○兵仗をもとどめむ　護衛の隨身をも止めよう。○內外の人々　院中の人も、院外の人も。○うるひ　うるふ（ハ、四）。うるほふに同じ。○さこそは云云　あんなに惜しんだ。○東の御方　後深草の妃。伏見の御母。○後れ聞えじ　後れず出家しようと。○さならぬ（取捨）は、猶ほいとあやしかりける御身の宿世を、人の思ふらむ事もすさまじう、おぼしむすぼほれて、世を背かむのまうけにて、尊號をもかへし奉らせ給へば、兵仗をもとどめむとて、御隨身ども召して、祿かづけ、暇たまはするほど、いと心細しと思ひあへり。大方の有樣うち思ひめぐつかまつる人、三四人ばかり、御供つかまつるべき用意す

別にさうせねばならぬといふことはない。○とりわき　特に。○御供つかまつる　出家の。○ほど〳〵につけて　身の程に應じて。○私　公に對し、其等の人の家をいふ。○陣のさだめ　朝廷の陣の座の評定。

●世の中はからふ主　世の中を治める人、卽ち執權。○あなぐり　探りしらべる。○あやしの宿り　賤しい宿所。○理りある愁　道理のある訴訟めれば、ほど〳〵につけて、私も物心細う、思ひ歎く家々あるべし。かゝる事ども、あづまにも聞え驚きて、例の陣のさだめなどやうに、これかれ數多、武士ども、寄りあひ〳〵、評定しけり。

【本院は猶ほいとあやしかりける御身の宿世を云々】　後深草院は、御自分の末が皇位繼承の權利のないといふ思ひもかけぬ宿緣の身でありながら、何時までも、かうして太上天皇としてあらせられては、世人のおもはくもどうであらうかと、面白からず思はれて。

【大方の有樣云々】　院中の有樣、其の他いろ〳〵思ひめぐらすに、實に氣の毒で堪らない事が多くて、內外の人々、皆袖をぬらした。

この頃は、ありし時賴朝臣の子時宗、相模守といふぞ、世の中はからふ主なりける。故時賴朝臣は、康元元年に、頭おろして後、忍びて諸國を修行し歩きけり。それも、國々

の有樣・人の愁(うれへ)など、委(くは)しくあなぐり見聞かむの謀にてありける。あやしの宿りに立ち寄りては、その家ぬしが有樣を問ひ聞き、理りある愁(うれへ)などの、うづもれたるを聞き開きては、「(時賴)我は、あやしき身なれど、昔よろしき主(しう)をもち奉り し、未だ世にやおはすると、消息(せうそこ)奉らむ、もて詣でて聞え給へ」などいへば、「なでふ事なき修行者(すぎやうざ)の、何ばかりかは」とは思ひながら、いひあはせて、その文をもちて、あづまへ行きて、しかじかと、敎へしまゝにいひて見れば、入道殿(時賴)の御消息なりけり。「あなかま〳〵」とて、永く愁(うれへ)なきやうに、はからひつ。佛神などのあらはれ給へるかとて、皆額(ぬか)をつきて悅(よろこ)びけり。かやうの事、すべて數知らずありしほどに、國々も心づかひをのみしけり。最明寺の入道とぞ

○うづもれたる　姦吏などに妨げられて、公平な處置を受けずに居る。○あやしき身　賤しい身。○なでふ事なき　何といふこともない、つまらぬ。○修行者　佛法修行の人　○何ばかりかは　何の役にも立つまい。○その文　時賴のくれた書面、即ちかの消息。○敎へしまゝに　時賴の敎へた通り。○あなかま〳〵　あゝ喧しい〳〵。役人が訴訟人を制止しながら、事を處理するさま。○國々　諸國の守護地頭等をいふ。○心づかひ　政に對して注意。

●めでたきもの　勝れた人。○世をおぼし捨てむずる　**ズル**は**トスル**の約。出家しようとせられる。○かたじけなく　畏れ多い。○やうこそあらめ　深い仔細もあらうけれど○そこらの御このかみ　多くの御子達の兄君。○させるたいした。○名殘なくは云々　御子孫の天位に卽き給ふことが絶え果てるべきではない○たいだいしき　あるまじき○彼方此方　後深草・龜山兩方の間を。○なだめ　平和に取りはからふ。○坊　春宮坊

いひける。

【我はあやしき身なれど云々】　自分は賤しい者だが、もとは或よい主に仕へて居たものである。その方は、猶ほ世に居られるだらうと思ふから、手紙を差上げる、之を持つて訴へにお出でなさい。

それが子なればにや、今の時宗朝臣も、いとめでたきものにて、「本院(後深草)の、かく世をおぼし捨てむずる、いとかたじけなく、あはれなる御事なり。故院(後嵯峨)の御おきては、やうこそあらめなれど、そこらの御このかみにて、させる御あやまりもおはしまさざらむ、いかでかは、忽ちに夕殘なくはものし給ふべき、いとたいだいしきわざなり」とて、新院(龜山)へも奏し、彼方・此方なだめ申して、東の御方(子)の若宮(伏見)を、坊に立て奉りぬ。十一月五日、節會行はれて、いとめでたし。かゝれば、少し御心(後深草)なぐさめて、このきは

は、強ひて背かせ給ふべき御道心にもあらねば、おぼしとどまりぬ。これぞあるべき事と、あいなう世人も思ひいふべし。御門（後宇多）よりは、今二ばかりの御兄（このかみ）なり。まうけの君御年まされるためし、遠き昔はさておきぬ。近頃は三條院・小一條院・高倉院などやおはしましけむ。高倉院の御末ぞ、今もかく榮（さか）えさせおはしませば、かしこきためしなめり。古への天智天皇と天武天皇とは、同じ御腹の御はらからなり。その御末、しばしばうちかはり、世をしろしめししたためしなどをも、思ひや出でけむ。御二流（ふたながれ）にて、位にもおはしまさなむと、思ひ申しけり。新院（亀山）は、御心ゆくとしもなくやありけめど、大方の人目には、御仲いとよくなりて、御消息（せうそこ）も常に通ひ、上達部なども、彼方（かなた）・此方

○節會　立太子の節會。○このきは　この度。出家のことをいふ。○背かせ　世に背き出家する。○道心　菩提心。佛道に歸依する心。○おぼしとどまりぬ　出家を。○あいなう　分別なく。うちつけに　○二ばかり御兄　御宇多七、伏見十一。○まうけの君　皇太子。○かしこきためし　めでたい例。○二流　後深草と亀山との二筋の御血統。○御心ゆくとしも云々　關東の處置を快くは思はれなかつたであらうが。○御仲　後深草と亀山と。○めやすく　心安く

參り仕うまつれば、大宮院（子）も、めやすくおぼさるべし。

【このきはは強ひて背かせ給ふべき云々】今度出家されようといふのは、實はその動機が眞の菩提心ではないから、御自分の御子が代に即かれれば、出家も思ひ止まられたの意。

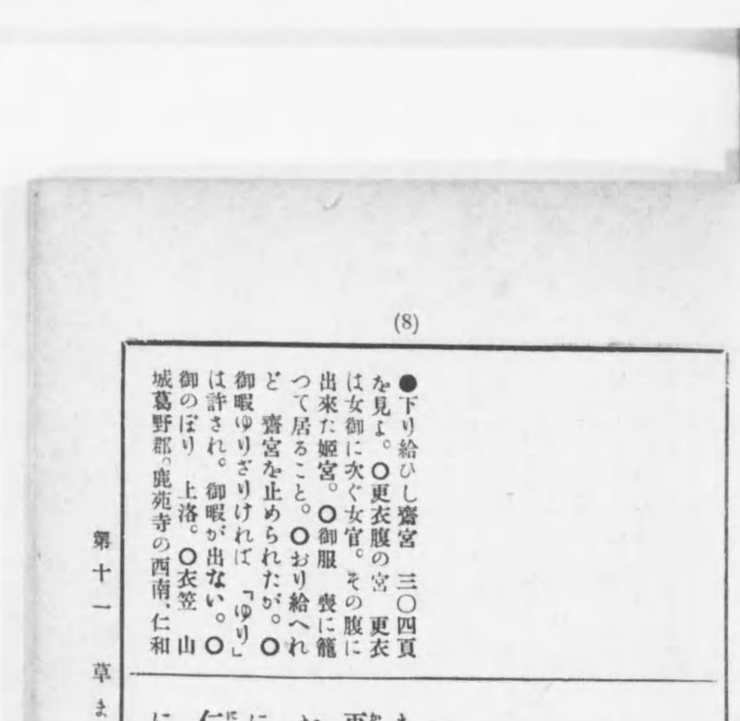
【これぞあるべき事と云々】勿論本心からの希望でないから、かうなるのも當然なことだと、世間の人も、いふだらうの意。

【まうけの君御年まされるためし云々】三條帝は、一條帝寛和二年七月東宮とならられたが、この時、天皇（踐祚はこの年六月である）は御年七、帝長和五年正月、立つて東宮となられた。この時、天皇は九、東宮は二十一である。小一條院は三條帝の長子敦明親王のこと。後一條十三である。但しこの親王は、關白道長が一條帝の皇子敦良親王（後朱雀、道長の女彰子の腹）を立てようとする意志あるを知り、自ら東宮の位を辭された。依て院號を小一條院と賜ひ、上皇に準ぜられた。次に高倉院は六條帝仁安元年十月立坊、この時、天皇は三、東宮は六であある。

【高倉院の御末ぞ今もかく榮えさせおはしませば】

【天智天皇と天武天皇とは同じ御腹の御はらからなり】天智（中大兄皇子）・天武（大海人皇子）は共に舒明帝の皇子、御母も同じく皇極帝である。そして大海人皇子は初め天智の東宮となつて居られたが、併し天智は元來、その皇子大友皇子を愛して居られるので、天皇崩御に先だち、大海人皇子は東宮の位を辭して、暫く吉野に隱れられた。是が爲、大友皇子は立つて東宮となり、やがて天智の崩後、立つて天子となられた。これを弘文天皇といふ。ところが一時吉野に隱れて居られた大海人皇子は此に至つて兵を擧げ（壬申の亂）、遂に天皇の軍を破つて、自ら天子の位につかれた、これ卽ち天武である。この二流がかはるがはる天子となられたことは左の表の示す如くである。

●下り給ひし齋宮　三〇四頁を見よ。○更衣腹の宮　更衣は女御に次ぐ女官。その腹に出來た姫宮。○御服　喪に籠つて居ること。○おり給へれど　齋宮を止められたが。○御暇ゆりざりければ　「ゆり」は許され。御暇が出ない。○御のぼり　上洛。○衣笠山　城葛野郡、鹿苑寺の西南、仁和



【御二流にて位にもおはしまさなむと思ひ申しけり】「おはしまさなむ」は願望を表はす。關東より兩統迭立の議を奏したるをいふ。

まことや、**文永**の初つ方下り給ひし齋宮（瓊子）は、後嵯峨院の**更衣**（かうい）腹の宮ぞかし。院（後嵯峨）かくれさせ給ひて後、御服（おく）にており給へれど、猶ほ御暇（いとま）ゆりざりければ、三年まで、伊勢におはしましししが、この秋（元年）の末つ方、御のぼりにて、**仁和寺**（にんなじ）に、**衣笠**（きぬがさ）といふ所に住み給ふ。月華門院（瓊子）の御次には、いとらうたく思ひ聞え給へりし昔の御心おきてを、

寺の東北にあたる。○心おきて　心に思ひ定めること。御心中の意。○とぶらひ　訪ねる。○龜山殿におはします　當時大宮院は龜山殿に居られた。○わたし奉り　龜山殿へ御移し申す。○のどやかに　靜かに。○夕つけて　夕方になつて。○衣笠殿へ御迎ひに　愷子を。○忍びたる樣にて　コツソリと。○しとね　座蒲團。○引きつくろひて　整へて。○御對面　大宮院が愷子と。○御簾の中　愷子の居られる所。○香の薄匂　香色（淡紅に黄を帶びたもの）をぼかしたもの。○香染　香色○紅梅の匂　紅梅に薄紅梅を重ねたもの。○葡萄染　薄紫○あて　尊くみやびやかなこ

あはれにおぼし出でて、大宮院（後深草）いとねんごろにとぶらひ奉り給ふ。龜山殿におはします。十月ばかり、齋宮（後深草）をもわたし奉り給はむとて、本院（後深草）にも入らせ給ふべきよし、御消息あれば、珍しくて、御幸あり。その夜は、女院（後深草）の御前にて、昔・今の御物語など、のどやかに聞え給ふ。又の日、夕つけて、衣笠殿へ御迎ひに、忍びたる樣にて、殿上人一二人、御車二つばかり奉らせ給ふ。寢殿の南面に、御しとねども引きつくろひて、御對面あり。とばかりして、院（龜山）の御方へ御消息聞え給へれば、やがてわたり給ふ。女房に御佩刀もたせて、御簾の中に入り給ふ。女院（後深草）は、香の薄匂の御衣・香染などたてまつれば、齋宮（後深草）、紅梅の匂に、葡萄染の御小袿なり。御髮いとめでたく、さかりにて、

と。○地楡亂れ織りたる　地楡は山地自生の薔薇科の草。地楡の亂れた樣に織つた。○枯野　表黄、裏青。○薄色　薄紫。○紫苑色　表薄色、裏青。○なつかしき程なるを　ゆかしく美しい樣をいふ。○たきしめて香をたいて薰をしませる。○えならず　一通ならず。○紫の匂五　表紫、裏薄紫の五衣。○裳ばかり　表著も唐衣も著ず、裳だけを。○聞え給へば　申上げられると。○いぶせからぬ程に　いぶせし（形）はおぼつかない。不明瞭ではない位に。○ほのかに　かすかに。○らうたげ　可愛らしい。○をかしき樣なる　趣ある。○强飯　釜で煮ず、蒸して作つた飯。昔の

二十に一つ二つや餘り給ふらむと見ゆ。花といはば霞の間の朱櫻も、なほにほひ劣りぬべく、いひしらずあてにうつくしう、あたりも薰る御樣して、めづらかに見えさせ給ふ。院（龜山）は、地楡亂れ織りたる枯野の御狩衣・薄色の御衣・紫苑色の御指貫、なつかしき程なるを、いたくたきしめて、えならず薰りみちて、わたり給へり。上﨟だつ女房、紫の匂五に、裳ばかり引きかけて、宮（後深草）の御車にまゐり給へり。神代の御物語など、よき程にて、故院（後嵯峨）のいまはの頃の御事など、あはれになつかしく聞え給へば、御いらへも、つゝましげなるものから、いぶせからぬほどに、ほのかに物うちのたまへる御樣なども、いとらうたげなり。をかしき樣なる御酒・御菓物・强飯などにて、今宵は果てぬ。

本式の飯である。（今日の赤飯ではない。）

●まどろませ給はず　かトカトとも眠られぬ。○ありつる御面影　齋宮に御對面の時の御面影。○心にかゝりておぼえ給ふ　なつかしく思はれるをいふ。○わりなき　仕樣のないことだ。○さしはへて　わざ〳〵。○うと〳〵しく　云々　餘り親しくはして居られなかつた。○つゝましき御

【月華門院の御次には云々】「月華門院」のことは既に三三一頁にある。後嵯峨院が、かの月華門院の次に此の愷子を非常に可愛がつて居らたので、そのことを思ひ出して、大宮院が懇ろに訪れて行かれた。

【花といはば霞の間の朱櫻も云々】齋宮の美しさを花にたとへていふならば、霞の隙に爛漫と咲き匂へる朱櫻も見劣りする程である。

【神代の御物語など、よき程にて云々】「神代の御物語」は神宮に奉仕當時の話。齋宮が伊勢の話を大體されると、今度は後嵯峨院の御臨終の話が出たの意。

院（龜山）も、我が御方に還りて、うち休ませ給へれど、まどろませ給はず。ありつる御面影、心にかゝりておぼえ給ふぞいとわりなき。「さしはへて聞えむも、人よろしかるまじ。いかゞはせむ」と、思しみだる。御はらからといへど、年月外（よそ）にて生ひ立ち給へれば、うと〳〵しくならひ給へるまゝに、つゝましき御思ひも薄くやありけむ。猶ほひたぶるに、い

思ひ　恥かしいと思ふこと。○ひたぶるに　只管に。○いぶせくて云々　氣が晴れず、物思ひに沈みながら、打ち捨てておくのは、殘念だと。○けしからぬ　不道理な。○御本性なりや　ヤは感動の助辭○さるべきゆかりありて　何か然るべき緣故があつて。○參り馴るゝ　齋宮に。○まめだちて　まぢめになつて。○いかゞたばかりけむ　どう工夫したか知らぬが。○夢現ともなく　何時どうしたともなく。○あえかに　かよわく。○消えまどひ　ピク〳〵してどうしてよいか分らぬなど。○らうたく　可愛らしく。○なよ〳〵として　姿え靡く樣○あはれなるけはひ　心ある

ぶせくて已みなむは、あかず口惜しと思す。けしからぬ御本性（ほんじやう）なりや。某の大納言の女、御身近く召しつかふ人、かの齋宮（子）にも、さるべきゆかりありて、むつまじく參り馴（な）るゝを召しよせて、「（龜山）なれ〳〵しきまでは思ひよらず、只少しけぢかきほどにて、思ふ心の片端を聞えむ。かくをりよき事も、いと難かるべし」と、切（せち）にまめだちての給へば、いかゞたばかりけむ、夢現（ゆめうつゝ）ともなく、近づき聞えさせ給へれば、いと心うしとおぼせど、あえかに、消えまどひなどはし給はず。らうたく、なよ〳〵として、あはれなるけはひなり。鳥もしばし〳〵驚かすに、心あわたゞしう、さすがに、人の御名のいとほしければ、夜深くまぎれ出で給ひぬ。日たくるほどに、（龜山）おほとのごもり大殿籠り起きて、御文たてまつり給ふ。

様子。○日たくるほど　日が高く昇つてから。○大殿籠り起きて　御目ざめになつて。○御文　齋宮への。○大方なるやうにて　普通の消息のやうで。○ならはぬ御旅寢　大宮院の龜山殿で假寢せられたこと。○すくよかに　心強く○なやましとて　病氣といふので。○強ひて聞えむも云々　病氣だといはれるのに、強ひて、文をやるのも、よくないから。○なだらかに　穩かに。○もてかくして　戀の心は外に表はさず。○おこたらせ給へ　御平癒あれ。

うはべは、只大方なるやうにて、ならはぬ御旅寢（たびね）も、いかになどやうに、すくよかに見せて、中に小く、

夢とだにさだかにもなきかり臥の
草のまくらに露ぞこぼるゝ

「いとつれなき御氣色の聞えむ方なさに」とぞあめる。（雲子）なやましとて、御覽じもいれず。強ひて聞えむもうたてあれば、なだらかにもてかくして、「おこたらせ給へ」など、聞えしらすべし。

【さしはへて聞えむも云々】戀しくてたまらないが、さればとてわざわざさう云ひ出すのも、人聞が惡いだらう。どうしたものだらうか。

【御はらからといへど】龜山院の御母は月華門院と同じく大宮院であるが、齋宮の御母は二條局である。隨つて異母兄妹となるわけである。殊にこれは遠く離れて居られたのだから、全く他人同樣で、前にもいふ如く、當時にあつては、かういふ間柄に、戀愛關係の生ずるのは珍しいことではない。

【某の大納言の女云々】或大納言の女で、院が平生御身近く召し使つて居られる人があるが、この人は、かの齋宮にも、何か或緣故があつて、親しく參り馴れて居た。でこの人を召し寄せられた。

【鳥もしば〳〵驚かすに云々】その夜、院は御宿りになつて、その翌朝のことである。曉を告げる鷄が頻りに鳴くので、院は御心もソワ〳〵する。又流石に愛する人が他から彼れ此れ言はれるのも氣の毒なので、まだ明けきらない闇にまぎれて、其處を出て行かれた。

【うはべは只大方なる云々】表面は只普通の御消息のやうで、ならはぬ御旅寢も如何などいふやうに、心強さうに見せてあるが、奥の方に小さく、こんな歌が書いてあるの意。

【夢とだにさだかにもなき云々】夢は極めてボンヤリしたものであるが、その夢程にも明かならぬ、本當に逢つたのやら逢はなかつたのやら、分らぬほどの假寢の床の果敢ない契りに、我が思ひは愈〻まさつて、只涙にくれて居るの意。「かりね」に刈をかけて草につゞけ、草よ

●御方々　大宮院・亀山院・齋宮など。○御臺まゐりて　供御をおあがりになつて。○わりなく　何とも仕方なく。○いかで見え奉らむずらむ　何とかして院に御目にかゝらぬやうにしたいの意。○おぼしやすらへど　躊躇されたが。○聞えかへさひ給ふべき　「かへさひ」(かへさふ)はカヘシの延。申返す、即ち断ること。○大どか　大やう。○けいめい　經營。設け營むこと。御馳走などの準備をいふ。○檜破子　檜で拵へた破子。食物を入れる器。○清らに　立派に。○調じて　とゝのへて○三めぐり　酒三獻。○各〻別にまゐる　各自分の盃で飲まれた。○あいなう　面白みがない。○かたじけなけれど　畏れ多いが。○勿體ないが。○昔ざまに云々　昔皇子であつた頃の隔てのない樣に思ひくらべられて。○免させ給ひてむや　大宮院から盃を賜はりたしの意。○御氣色とり給へば　御意中を伺はれると。○齋宮まゐる　齋宮が飲まれる。○長押　敷居の下に別に横に長くわたした木。(今日いふ長押とは別)。○簀子　緣側。○流れくだりて　盃がめぐつて。○そぼれがち　そぼる(ラ、下ニ)は戯れる。戯れが

り更に露につゞけたのである。

【いとつれなき御氣色の云々】實にすげない御樣子だが、さればとて、何とも申しやうがないので、獨り心を痛めて居りますなどの意。これも院の御言葉である。

さて御方々、御臺などまゐりて、晝つ方、又御對面どもあり。宮(子)は、いとはづかしう、わりなく思されて、いかで見え奉らむずらむと、おぼしやすらへど、女院(子)などの御氣色のいとなつかしきに、聞えかへさひ給ふべきやうもなければ、たゞ大どかにておはす。今日は院(山)の御けいめいにて、善勝寺の大納言隆顯、檜破子やうのもの、いろ〳〵に、いと清らに調じてまゐらせたり。三めぐりばかりは、各〻別にまゐる。その後、「(山)あまりあいなう侍れば、かたじけなけれど、昔ざまにおぼしなすらへ、免させ給ひてむや」

と、御氣色とり給へば、女院(子)の御かはらけを、齋宮(子)まゐる。その後、院(山)きこしめす。御几帳ばかりを隔てて、長押の下へ、西園寺大納言實兼・善勝寺大納言隆顯召さる。簀子に、ながすけ・爲方・兼行・資行などさぶらふ。あまた度流れくだりて、人々そぼれがちなり。「(山)故院(後堀河)の御事の後は、かやうの事も、かき絶えて侍りつるに、今宵はめづらしくなむ。心とけてあそばせ給へ」などうち亂れ聞え給へば、女房召して、御箏ども掻き合せらる。院(山)の御前に御琵琶、西園寺(實)もひき給ふ。兼行篳篥、神樂うたひなどして、ことごとしからぬしも、おもしろし。此度は、先づ齋宮(子)の御前に、院(山)みづから御銚子をとりて聞え給ふに、宮(子)いと苦しう おぼされて、とみにもえ動き給は

ち。○故院の御事の後　後嵯峨崩御の後。○うちみだれ　酔はれた様をいふ。○ことごとしからぬしも云々　表立つた場合のやうに仰山らしくない所が、却つて両白い。○銚子　酒の入れもの。○とみ直。○え動き給はれば　手を出しかれて居られるをいふ。○宮きこしめして後　齋宮が飲まれてから。○さうなる御事「さらなる御事」の誤であらう。然らば、勿論のことなどの意。○めをくはせつゝ　めくはせしつゝ。○つきじろふ　膝などをつゝきあふ。○せれうの里　今様であらう。○歌未詳。○出だす　歌ひ出す。○らうがはしき　騒がしい。○苦しかりつる名殘に云々　酒宴の疲れで、直寝入つた。

ねば、女院(後嵯峨)、「この御かはらけの、いと心もとなく見え侍るめるに、こゆるぎの磯ならぬ、御さかなやあるべからむ」と、のたまへば、「賣炭の翁(亀山)はあはれなり、おのが衣は薄けれど」といふ今様をうたはせ給ふ。御聲いとおもしろし。宮(後宇多)きこしめして後、女院(後宇多)御盃をとり給ふとて、「天子(後宇多)には父母なしと申すなれど、十善の床をふみ給ふも、賤しき身の宮づかへなりき。一言報い給ふべうや」との給へば、「さうなる御事なりや」と、人々(後宇多)めをくはせつゝ、忍びてつきじろふ。「御前(後宇多)の池なる龜岡に鶴こそむれゐてあそぶなれ」と、うたひ給ふ。その後、院(亀山)きこしめす。善勝寺(隆顕)、「せれうの里」を出だす。人々聲加へなどして、らうがはしきほどになりぬ。かくていたう更けぬれば、女院(後宇多)も、我が御方に入らせ給ひぬ。かくてそのまゝのおましながら、かりそめなるやうにて、よりふし給へば、人々も少し退きて、苦しかりつる名殘に、程なく寝入りぬ。

【さて御方々御臺などまゐりて云々】　亀山院が齋宮の所で宿られた翌日のことである。居られる所は離れて居るが、矢張り同じ亀山殿の中に居られるのである。

【この御かはらけのいと心もとなく云々】　愚子は、どうも御酒の方は行けさうにも見えないから、何か一つ御酒ならぬ御肴でもお出しになれば、ようございませうの意。「こゆるぎの磯」とは、古今集(雑)に、寛平の御時に、上のさぶらひに侍りける男どもに瓶をもたせて、后の宮の御方に、大御酒の下し(金子氏古今和歌集評釋にいふ、このあたり誤字あるべし、顚註には、きこひにとあり、きはを文字の誤字にて、大御酒のおろしをこひにとありけるなるべし)と聞えに奉りたりけるを、藏人どもが笑ひて、瓶を御前にもて出でて、ともかくもいはずなりにければ、使の歸り來て、さなむありつると言ひければ、藏人の中に送りけ

る。玉だれの小瓶（をかめ）やいづらこよろぎの磯の涙わけ沖に出でにけり」（敏行朝臣）とあるによつて、酒のことをいつたのである。○「玉だれの」は、あの小瓶にかゝる枕詞。「こよろぎ」は相模中郡にある小淘（こゆるぎ）の磯。一首の意わけて遠い沖へ出てしまつた。卽ち思ひがけなく后の宮の御前へ出たのを、沖といつたのである。但しこの歌は、風俗の謠物に「たまだれの小瓶（をかめ）の小瓶を中にすゑて、主（ぬし）はもや、着まきに、着とりに、こゆるぎの磯のわかめがりあけに」とあるより來たもの、そして小瓶と小龜とをかけたのである。

【賣炭の翁はあはれなり云々】　今樣の文句であるが、全體は詳かでない。但し賣炭翁は白氏文集（卷四）の賣炭翁をよんだものであらう。それは「賣炭翁伐レ薪。燒レ炭南山中。滿面塵灰煙火色。兩鬢蒼々十指黑。賣レ炭何所レ營。身上衣裳口中食。可レ憐身上衣正單。心憂二炭賤一願二天寒一」

【天子には父母なしと申すなれど云々】　天子には父母なしといふが、龜山院が天子となられたのも、つまり私が賤しい身を以て故院に宮仕へした爲である。さればこそ院も私を母とおぼして、願ひ通り今樣を歌はれたのである。だからあなたも之が報酬として、一言お歌ひなさいの意。○「天子に父母なし」とは、天子はこの上ないえらいもので、きたない人物の腹などから生れたものではないといふ意。北史に「清河王曰。天子無レ父。」

【御前の池なる龜岡に云々】　佛御前が清盛に召された時に歌つたもの（平家物語）。「君を始めて見る時は、千代も經ぬべし姫小松、御前の池なる龜岡に、鶴こそ群れ居て遊ぶなれ。」

【かくてそのまゝのおましながら云々】　大宮院もその席を去られたので、その御對面の御座のまゝ、齋宮は院によりそひ御寢になつた。

明日（あす）は、宮（齋子）も御かへりと聞ゆれば、今宵ばかりの草枕、なほ結ばまほしき御心の沈めがたくて、いとさゝやかにおはする人の、御衣（ぞ）など、さる心して、なよらかなるを、まぎらはしすべしつゝ、忍びやかにふるまひ給へば、驚く人もなし。何やかやと、なつかしう語らひ聞え給ふに、雁く

●御かへり　衣笠殿へ。○今宵（ばかりの草枕云々　假の旅寢も今夜限りであるから、今一度逢ひたいの意。○すべしつゝ　すべす（サ、四）。ソツと衣服を脫ぐ。○やはらかなる御樣　こはごはしからぬ態度。○おぼしほれたる　カツ

トリとした。○よそなりつる程の云々　逢見るまでに戀ひ惑うた程にはないが。○らうたく　かはゆく。○長き夜十月であるから。○あかぬ心地　物足らぬ心地。○きぬぎぬ　男女の相逢うた翌朝の別れ。○聞え動がし　挑まれること。○さしはへて　わざわざ。○間遠　間の隔たること。院の度々來られぬをいふ。○忍びて參り給ひける　忍子の御殿へ。○まめ〳〵しく　誠實。○れんごろに　親切に。○御母代の人　忍子の母として後見する人。○いかがはせむにて　院はもうお出でにもならぬから、どうとも仕樣がないといふので。○たのみかはし　實兼にたよるをとはなけれども、たゞいみじう大どかに、やはらかなる御樣して、おぼしほれたる御けしきを、外なりつる程の御心まどひまではなけれど、らうたくいとほしと、思ひ聞え給ひけり。長き夜なれど、更けにしかばにや、程なう明けぬる夢の名殘は、いとあかぬ心地しながら、きぬぎぬになり給ふほど、女宮も、心苦しげにぞ見え給ひける。その後も、折々は聞え動かし給へど、さしはへてあるべき御事ならねば、いと間遠にのみなむ。「まくるならひ」までは、あらずやおはしましけむ、あさましとのみ、盡せずおぼしわたるに、西園寺大納言忍びて參り給ひけるを、人がらもまめ〳〵しく、いとねんごろに思ひ聞え給へれば、御母代の人などもも、いかゞはせむにて、やう〳〵頼みかはし給へ

いふ。○內より云々　內裏より退出の序に必ず立寄る。○たのめ聞え　たのみにさせる。○その心して　宮の方では、そのつもりで。○忍びて歩き給ふ　人に隱れて歩く。女の所へでも行くのであらう。○扈從　供人。○あまたして　澤山連れて。○きら〳〵しげ　嚴かに美しい。○行きあひ　師忠に出逢つた。○むつかし　面倒だ。○ことごとしたいさうな。○門の下にやりよせて　自分の車を宮の門の下へ寄せて。○烏帽子直衣　直衣に立烏帽子をつけた裝。○なよらか　服裝のなよ〳〵と柔いこと。○下り給ひぬ　車から。○內　齋宮の內。○對のつま　對屋の端。○あやしと　不思議に。○內より　內裏から。○門より　門から。○おり給ひぬ　車から降りられた。○たそかれ　夕暮。○ほのぐらき程に　薄暗い程に。○大納言　實兼。○參り來む　參上しよう。○ほのぐらき程に　薄暗い程に。○大納言　實兼。○參り來む　參上しよう。○ほのぐらき程に　薄暗い程に。○大納言　實兼。○參り來む　參上しよう。

ば、或夕つ方、「內よりまかでむついでに、又必ず參り來む」と、たのめ聞え給へりければ、その心して、誰も待ち給ふ程に、二條の師忠のおとゞ、いと忍びて歩き給ふ道に、かの大納言實兼の參り給へるとおぼして、扈從などあまたして、いときら〳〵しげにて、行きあひ給へれば、むつかしと思して、この齋宮の御門開きたりけるに、女宮の御もとなれば、ことごとしかるべき事もなしと思して、しばし、かの大納言實兼の車やりすぐしてむに、出でむよとおぼして、門の下にやりよせて、おとゞ師忠烏帽子直衣の、なよらかなるにて下り給ひぬ。內には、大納言實兼の參り給へるとおぼして、例は忍びたる事なれば、門の內へ車を引き入れて、對のつまよりおりて參り給ふに、門より師忠おり給ひぬ。あやしとは思ひながら、たそ

しと云々　突然來たのに、變だなと思ひながら。○たそがれ時のたど〳〵しき程で、ハッキリ物の見えぬ時。○何のあやめも云々　何の差別も分らない。○妻戸を外して云々　宮の方では、待ちまうけて居るのであるから、戸をあけ、人の樣子が見える。○例の馴れたる事にて　實雖が來るので皆馴れて居る。○をかしき程の　可愛らしい。○けしきばかりを云々　只一寸愚子の意中をほのめかすをいふ。○ものから　ものながら。ものの。○こはいかに　事の意外な意。誰か外に待つ人があつたのだなと氣づいたので。○つきづきしう云々　其の場に相應するやう、平生から戀して居たやうな事を。○いとあさましう云々　愚子が思ひがけない事で物思ひするをいふ。○この宮をさして　齋宮を目的に。○例ならず　平生に似ず。○あるやうあらむ　何か仔細があらう。○そのわたり　その邊。○さりげなくてをあれ　知らぬ顏で居れ。樣子を探るやうな風をせずに居れ。ヲは意味を強める助辭。○心おこらぬ御旅寢　別になつかしいといふ氣も起らぬ假寢。○人の御氣色を見給ふも　女の樣子を見て考へても。○ありつるかのごとく　なるほど、この宮へ來たのだなどの意。○すきすきしきわざ　人の女の所へ來るとは好色めいたこと。

がれ時のたど〳〵しき程、何のあやめも見えわかで、妻戸を外して、人の氣色見ゆれば、何(愚)となくいぶかしき心地し給ひて、中門の廊に上り給へれば、例の馴れたる事にて、をかしき程の童・女房歩み出でて、けしきばかりを聞ゆるを、大臣(實雖)は覺えなきものから、をかしとおぼして、後につきて入り給ふ程に、宮(愚子)も待ち聞え給ふとおぼしく、御几帳にかくれて、何心なくうちむかひ聞え給へるに、大臣(實雖)も、「こはいかに」とはおぼせど、何くれと、つきづきしう、日頃の志ありつるよし、聞えなし給ひて、いとあさましう、一方ならぬ御思ひ加はり給ひにけり。大納言(源實)は、この宮をさして、かくまもり給ひけるに、例ならず、ましう、一方ならぬ御思ひ加はり給ひにけり。大納言(源實)は、この宮をさして、かくまもり給ひけるに、例ならず、男の車よりおるゝ氣色見えければ、あるやうあらむとおぼして、御隨身一人、そのわたりに、さりげなくてをあれとて、留めて歸り給ひにけり。男君(愚)は、いと思ひの外に、心おこらぬ御旅寢なれど、人の御氣色を見給ふも、ありつる大納言(源實)の車などおぼしあはせて、「いかにも、この宮にやうあるなめり」と、心得給ふに、いとすきすきしきわざなり、よしなしとおぼせば、更かさで出で給ひにけり。かの殘し置き給へりし隨身、この樣よく見てければ、「しかじか」と聞えけるに、いと心憂しとおぼえて、「日頃もかゝるにこそはありけめ。いとをこがましう、かのおとゞ(愚)のいかにぞや」と、かず〳〵おぼし亂れて、かきたえ、久しく音づれ給はぬをも、この宮(愚子)には、かう殘りなく、見顯されけむとも、しろしめさねば、あやしながら、

とだ。○よしなし　つまらない。○更がさで　夜の更けぬ間に。○しかじか　かく〳〵のかくかくである。○なこがましう　馬鹿らしい。○かすか〳〵　いろ〳〵。○かきたえ　打ち絶えて。○音づれ　齋宮を。○かう殘りなく　こんなにすつかり。○あやしながら　變だと思ひながら。○たゞならぬ御氣色　懷姙。○一筋にしもおぼされれば　一所懸命慥子のことばかり思つて居るのでもないから。○心やましう　厭はしく。○わりなき　仕方がない。○さすがおぼしわく事や云々「おぼしわく」は思ひ定める。それは自分の子だと思はれたこと。○その御程の事　御産の事。○とぶらひ聞えさせ給ひけり。異御腹の姫宮をさへ、過ぎもて行くほどに、たゞならぬ御氣色にさへ惱み給ふをも、大納言殿（經實）は、一筋にしもおぼされねば、いと心やましう、思ひ聞え給ひけるぞわりなき。されども、さすがおぼしわく事やありけむ、その御程の事どもも、いとねんごろに、とぶらひ聞えさせ給ひけり。異御腹の姫宮をさへ、御子になどし給ふ。御處分もありけるとぞ。幾程なくて、弘安七年二月十五日に、宮（子）かくれさせ給ひにしをも、大納言殿（經實）、いみじう歎き給ひけるとかや。

【いとさゝやかにおはする人の云々】「さゝやか」は宮の御身體の小さいことをいふ。小さい方が、衣服なども、注意して、柔いのな、人に分らぬやうまぎらかして、ソッと脱ぎつゝ、コッソリと振舞はれるので、誰も氣がつかずに居た。

【廢くとはなけれども云々】宮はスッカリ院に身をまかせてしまつたと

らひ　見舞。

●新陽明門院　母少將通能女

いふではないが、非常に大やうで、此方のいふやうになり、何だかウツトリとして氣も遠くなつたやうな風で居られる。勿論院も、今では、かの逢ふまでに思ひ惑はれた程ではないが、かういふ樣子を見られては、流石にかはゆく、いとしいと思はれた。

【まくるならひまでは云々】伊勢物語に、「思ふには忍ぶることぞまけにける逢ふにしかへばさもあらばあれ」とある歌によつた語。○この歌の意は、君を戀ひ慕ふ思ひの烈しさに、こらへ忍ぶといふ力は負けてしまつた。今はもう、君に逢ふ嬉しさと取りかへる我が身ならば、たとひ身を滅しても、何を厭はう、一身などはどうでもよい。

【日頃もかゝるにこそはありけめ云々】平生もかうして師忠が通つて來るのだらう。實に馬鹿らしい。この上、自分が行くならば、師忠だつて、どう思ふか知れやしない。

【異御腹の姫君をさへ云々】異腹の姫君をさへ、この宮の御子にされて、財産も分けてやられたといふことである。

まことや、新院（山處）には、一年（とせ）、近衞の大殿基平の姫君（位子）、

女御にまゐり給ひにしぞかし。女御と聞えつるを、このほど院號あり。新陽明門院とぞ聞ゆめる。建治二年の冬の頃、近衞殿にて、若宮(二皇)生れさせ給ひにしかば、めでたく、きら〳〵しうて、三夜・五夜・七夜・九夜など、いかめしくきこえて、御子(二皇)もやがて、親王の宣下などありき。

【女御と聞えつるを云々】初め、女御と申して居たが、此頃院號の定めがあつて、新陽明門院と申すやうだ。

文永十二年二月女御(年十四)同三月院號。○きら〳〵しう美しく。○三夜云々　皆御産養。○いかめしくきこえておごそかに行はれて。

(1)

●御冠　御元服。○ひきいれ　一五〇頁を見よ。○兼平　この時攝政。○理髮　一五〇頁を見よ。○基顯　實は左大臣師忠が勤めた。○あげまき　小兒の髮の結び方であるが、こゝは元服の時であるから、髮をそぎ理することであらう。○玄象　琵琶の名。○鈴鹿　和琴の名。○箏のこと　十三絃の琴。○屯食　一七七頁を見よ。

(2)

●朝覲の行幸　二三八頁を見よ。○龜山殿　龜山院の御所。○なりしかば　行幸せられるをいふ。○打物　槌で打つて光澤を出した絹物。○ゆゝし

第十二　老のなみ

建治三年正月三日、內の上(後宇多)御冠し給ふ。十一にぞならせ給ふらむかし。御諱世仁ときこゆ。ひきいれは關白太政大臣殿(兼平)、理髮頭中將基顯、御あげまき大炊御門大納言信嗣の君仕う奉られけり。御遊はじまる。琵琶(玄象)、今出川大納言實兼、和琴(鈴鹿)、信嗣大納言、箏のこと、殿の大納言(兼忠)の君おはせしなめり。屯食・祿などの事常の如し。

(1)

(2)

●朝覲の行幸　二三八頁を見よ。○龜山殿　龜山院の御所。○なりしかば　行幸せられるをいふ。○打物　槌で打つて光澤を出した絹物。○ゆゝし

廿二日朝覲(行幸)の行幸、龜山殿へなりしかば、上達部・殿上人、例のいろ〳〵の襟・下襲・織物・打物、めでたくゆゝしかりき。御前の大井川に、龍頭鷁首浮べらる。夜に入りて、鵜飼ども召して、篝火ともして乘せらる。御前の御遊・地下

かりき　大變立派であつた。○龍頭鷁首　二二二頁を見よ　○鵜飼　鵜を放つて魚を捕るもの。○地下の舞　地下は五位以下の昇殿を許されぬもの其等の人の舞。○三月二十六日　四年三月十三日の誤。○四月十九日　これも四年。

●内裏　二條内裏。○廂　寢殿造の母屋(もや)の四周にある細長い間。○倚子　形四角四脚があつて、左右に手すりを設け、後に倚りかゝるやうにしたもの。(こゝは東宮、御門に御對面の用意である)。○になく　似るものなく。非常に。○東の御方　東宮の御生母。○召次　院中の雜事を

の舞など、さまざまの面白き事ども、例の事なれば、うるさくて、さのみもえ書かず。同三月廿六日、石清水(いはしみづ)の社へ行幸、四月十九日、賀茂の社へ行幸、いづれもめでたかりき。人々定めて記しおき給へらむと、讓りてとめ侍りぬ。

【人々定めて記しおき給へらむと云々】それらの事はお供の人々が定めし委しく記しておかれたであらうと思ふから、それに讓つて、こゝには書かない。

春宮(伏見)の御元服、八月ときこえしを、奈良の興福寺の火の事により、延びて、十二月十九日にぞせさせ給ひける。十六日に、先づ内裏へ行啓なる。清涼殿の東の廂(ひさし)に倚子(いし)をたてらる。御門(後宇多)も倚子につかせ給ふ。ひきいれは左大臣師忠、理髪春宮權大夫具守つとめらる。御諱熙仁と申しき。持明院殿(後深草)より、女房、になく清らにしたてて、十二人まゐる。

務め、時を奏する役。○しほたれがちに　始終歎きに沈む　○思し忘るゝ　故皇后の事を　○これかれ云々　院の御心を慰める爲に、いろ〳〵の女を參らせるが。○をさ〳〵　大方。○なずらへなるもなし　比べものになる程のものもない。○新陽明門院　三九〇頁を見よ。○御おぼえ　御寵愛　○かれがれ　寵衰へて、そこへ御通ひになることも稀なるをいふ。○中の君　次女。左大臣實雄の女、信子の同母妹。○御面影や通ひたらむと　容貌が似て居るかも知れぬと。○忍びて云々　院が内々懇望せられたので。○いとしもなくて　格別の事もなく。○とりいで　生まれた。○か

東の御方(信子)も、院(後深草)の御車にて、殿上人・北面(ほくめん)・召次(めしつぎ)など、いと美々(びび)しうて參り給へり。御門(後宇多)・春宮(伏見)いづれも、いと美しき御有樣なめり。新院(龜山)は、盡きせず皇后宮(信子)のおはしまさましかばとのみ、しほたれがちに、思し忘るる世なき御心や慰むと、これかれ參らすれど、をさ〳〵なずらへなるもなし。新陽明門院(位子)も、初は御おぼえあるやうなりしかど、次第にかれがれなる御事にて、御獨寢がちなり。故皇后宮(信子)の御はらからの中の君(嬉子)も、御面かげや通ひたらむと、なつかしさに、忍びて、ねんごろにの給ひしかば、參らせ奉り給へれど、いとしもなくて、姫宮(理子)一所ばかり、とり出で給へりしまゝにて止みにき。姫宮(理子)をば、大宮院(信子)の御傍にぞ、かしづき聞え給ふ。

【奈良の興福寺の火の事】一代要記に「建治三年七月二十六日。興福寺爲二雷火一燒失。金堂・講堂・廻廊・僧坊・鐘樓・大門等悉燒了」。

【新院は靈きながらへて居られたら、と思ひ、始終歎きに沈んで居られた。】亀山院は、何時までも、皇后宮が猶ほこの世に生きながらへて居られたら、と思ひ、始終歎きに沈んで居られた。

かくて弘安元年になりぬ。十月ばかり、又二條内裏に火出で來て、いみじうあさまし。萬里小路殿は、ありし火の後、又造られて、今年の八月に、御わたましありて、新院(亀山)住ませ給へれど、内裏焼けぬれば、この院、又内裏になりぬ。うちつゞき火のしげさ、いとおそろし。

その頃、大宮院(后)いと久しく惱ませ給へば、本院(後深草)も新院(亀山)も、常にわたり給ひて、夜などもおはしませば、異御腹の法親王・姫宮だちなども、絶えず御とぶらひにまうでさせ給ふ中に、故院(後嵯峨)の位の御時、勾當の内侍といひしが

原孝時の女刑部卿局をいふ。○姫宮　後嵯峨三女。この時十七。○宮の御程　只の姫宮で、まだ後宮に參られぬをいふ。○切にかくれ奉り　憚子の亀山院を避けて隱れられたをいふ。○あながちに　無暗と。○人目をつゝむ　祕密にする。○誰が御腹といふ事もなく　誰のお生みになつたといふことも知らせず。○里宮仕への者の我が家をいふ。○稚き御心にも　その出來た姫君の少し大きくなられた頃の事をいふ。○いはぬ事　それはいはれぬ事だの意。○あくがる　心がおちつかず浮かれる。○腹々の宮達　いろいろの女に出來た宮達。○十三の年より　亀山院の早くから

腹に出でものし給へりし姫宮(子)、後には五條院と聞えし、未だ宮の御程なりしにや、いと盛りにうつくしげにて、切にかくれ奉り給ふを、新院(亀山)あながちに御心にかけて、うかがひ聞え給ふほどに、この御惱の頃、いかゞありけむ、いみじう思ひの外に、あさましとおぼしなげく。かの草枕よりはまことしう、にが〳〵しき御事にて、姫宮までいできませ給ひにき。限りなく人目をつゝむ事なれば、あやしう誰が御腹といふ事もなくて、院(亀山)の御乳母の按察の二位の里にわたし奉り給へり。稚き御心にも、いかゞ心得給ひけむ、「宮の御母君をば、誰とか申す」と、人の問ひ聞ゆれば、「いはぬ事」とのみぞ、いらへさせ給ひける。御心のあくがるゝまゝに、御覽じすぐす人なく、亂りがはしきまで、たはれ

しづき　愛育。

(4)

●十月ばかり　十月頃。十三日のこと。○ありし火　以前の火事。三五七頁を見よ。○わたまし　新殿へ移られること。

(5)

●なやませ　病氣。○わたり給ひて　お出でになつて。○異御腹　大宮院でない他の后のお生みになつた。○御とぶらひ　御見舞。○勾當の内侍　三五六頁を見よ。こゝは藤

ら子を作られたをいふ。○らうがはし　亂りがはし。○御雜仕　雜役を勤める者。○貫川　二七〇頁參照。○御靈　八所御靈宮上下二社のこと。上は京極西出雲寺北、下は京極大炊御門北。崇道天皇・伊豫親王・吉備大臣・藤原廣繼等を祀る。（祇園御靈會とは別）。○位の御程　龜山院在位の間　○かしづきぐさ　養育の材料　養育するもの。○まゐらせ　かの姫宮が成長して嫁がれたをいふ。○もとおはせし北政所　もとから居られた奥方。兼平の女。○すさめ　棄てる　○かひがひしく　まめ〳〵しく。○中將ばかり　中將位。○よくせずば　惡くすると。○おしのけぬべう　ベウは

させ給ふ程に、腹々の宮達、數知らず出で來給ふ。大方、十三の御年より、宮はいできそめさせ給ひしが、年々に多くのみなり給へば、いとらうがはしきまでぞあるべき。故皇后宮（俗子）の御雜仕（ざふし）にて、貫川（ぬきがは）といひし、御靈（ごりやう）とかや聞ゆる社の神子（みこ）にてぞありける。先にも聞えしやうに、位の御程に、度々召されて、姫宮生れ給へりしを、それも御乳母の按察の二位殿の里に、かの五條院（俗子）の御腹のと二所、同じ御かしづきぐさにておはせし程に、近衞殿（家基）へまゐらせ給へれば、殿（家基）は、もとおはせし北政所（きたのまんどころ）をもすさめ給ひて、この宮を、たぐひなく思ひ聞えさせ給ふ程に、かひがひしく若君（左大臣經平）いで來給へるをも、いみじうかしづきいたはり給ひて、前の北政所の御腹の太郎君（家平）、中將ばかりに

ベク。兄をもおしのけて相續しようとするをいふ。○いとほしき　ふびん。○御家もたもたせ云々　家の職たる關白にはならなかつた。○北白川殿の女院　後高倉院二女。○曹司　部屋。○田樂　三〇七頁を見よ。○あやしの　賤しい。○御幸　龜山院が女院の所へ。○御覽じそめ　院が下野を。○殊の外に云々　院に寵せられて、下野の時めいたことをいふ。○この院　龜山院の御所。○廊の御方　下野が院へ參つて後の呼名。○景房　西園寺公相の侍。大膳大夫。○いみじうおぼいて「おぼいて」は「おぼして」の音便。大に御寵愛になつて、○二品の加階　從二位に叙せられる

て物し給ふをも、よくせずば、おしのけぬべう、もてなし奉り給ひけるを、新院（龜山）聞かせ給ひて、「いといとほしき事なり。これはいまだ兒（ちご）なり。ちとおとなしうなり給へるをば、いかでか引き違ふるやうはあらむ」と、のたまはせて、その弟君（諸平）は、遂に、御家も、たもたせ給はざりしなり。また北白川殿の女院（安嘉門院）に、大納言の君とて候ひし人の曹司（ざうし）に、下野（しもつけ）といひしものは、田樂（でんがく）とかやいふ事する、あやしの法師（ほふし）の、名をば玄駒といふが女なりき。かの女院（安嘉門院）は、新院（龜山）の御母代（ほふしろ）にて、常に御幸もなりにしかば、自ら御覽じそめけるにや、殊の外に時めきいでて、この院に召しわたされて、花山院の太政大臣（通雅）の御子になされ、廊（らう）の御方とぞつけさせ給ふ。その御腹にも宮（兼良）生れ給ひ

ぬ。大宮女院(嬉子)に、讃岐(壽子)とてさぶらひしは、西園寺の御家のもの、景房といひしが女なりしを、いみじうおぼいて、これも召しとりて、西園寺大臣(公相)の御子になして、二品の加階たまはる。これも若宮(定眞)生れ給ひにき。帥の中納言爲經の女の、帥典侍殿といひしが御腹にも、宮だちあまた生れ給ふ。九條殿(師教)の北政所、又梨本(覺雲)・青蓮院法親王(眞助)など、大納言典侍の御腹、昭慶門院(喜子)は中納言典侍(雅子)、十樂院慈道法親王は帥典侍殿の腹、かやうにすべて多くものし給ふ。昔の嵯峨天皇こそ、八十餘人まで御子もち給へりけると、承り傳へたるにも、ほと〳〵劣り給ふまじかめり。

【この御惱の頃、いかゞありけむ云々】　この大宮院が御病氣の時、遂に見つけられて、契を結び、實に案外な、ひどいことだと五條院は思し歎かれた。

【かの草枕よりは云々】　「かの草枕」は愷子内親王のこと（三七五頁參照）。あの折は只かりそめの事であつたが、今度は姫宮まで生れられて、實に苦々しいことだの意。

【御心のあくがるゝ程に云々】　龜山院は、御心が有頂天になられると、誰彼の差別なく、少しも見逃さず、たはれられて、いろ〳〵の女に澤山の御子を生ませられた。

【これは兒なり云々】　これ(經平)はまだ子供だ。大きくなつて居る方(家平)を、どうして後にするやうな、そんな反對な事をすることがあらう。卽ち弟を繼嗣とするやうな、逆なことはするものでないの意。

【北白川殿の女院に云々】　安嘉門院の所に大納言の君といふ女官があつて、その下に又下野といふ女があつた。これは賤しい田樂法師の玄駒といふものの女である。

【花山院の太政大臣の御子になされ】　親が賤しいものであるから、名義上通雅の子といふことにしたのである。

【九條殿の北政所云々】　九條殿の奥方や覺雲・眞助兩法親王などは、大納言典侍の御腹に出來た子、昭慶門院は、中納言典侍の御腹に出來た子云々の意。

内（後字多）には、なか〳〵女御・更衣も候ひ給はず。いとさうざうしき雲の上なり。西園寺より、女御參り給ふべしと聞えながら、いかなるにか、すが〳〵ともおぼしたゝぬは、思ふ心おはするなめりとぞ、世の人もさゝめきける。新院（山邊）の御位の時、參り給へりし西園寺の中宮（鎮子）は、院號ありて、今出川院ときこゆなり。かの御おぼえなどの、いと口惜しかりしより、この院の御方ざまを、つらく思ひ聞え給ふなめりなどぞ、いひなす人も侍りけるとぞ。

（弘安二年）彌生の末つ方、持明院殿の花ざかりに、新院（山邊）わたり給ふ。鞠のかゝり御覽ぜむとなりければ、御前の花は、梢も

●なか〳〵　却つて（龜山院の多きに比して）。○女御更衣　共に天皇の侍妾。但し女御の方が上。○さうざうしき　物足らず寂しい。○西園寺　實氏の一族をいふ。○すがすがと　滯りなく。○思ふ心云云　何か思ふ所があるのだらうと。○さゝめき　私語する。○院號　文永五年十二月のこと。時に十五歳。○おぼえ　寵愛。○つらく　つれないと。●持明院殿　京都上立賣の北新町の西。もと藤原基家の邸後仙洞となる。○わたり給ふ　お出でになつた。○鞠のかゝり　蹴鞠の場所。（二五七頁參照）。○梢も庭も　樹に咲いて居るのも庭に散つたのも。○跡つけがたう　むざむざと踏んで、跡をつけることは出來ないやうに。○きらめきて　華美な裝をして。○わざとならぬ袖口　わざと出したのではなく、袖口の自然に出て居ること。○對座に　後深草院と龜山院との御座を相對して設けたこと。○引きさげさせ　御自分の御座を引きさげさせられる。（長押は三七九頁を見よ）。○異樣　「風變り」。○うべ〳〵しき　尤もらしい。○鹿爪らしい。○花の興　花見の樂しみ。○御かはらけなど云々　酒宴の興の漸く進んでから。○かゝり

庭もさかりなるに、よその櫻をさへ召して、散らし添へられたり。いと深う積りたる花の白雪、跡つけがたう見ゆ。上達部・殿上人、いと多く參り集まり、御隨身も北面の下﨟などゝ、いみじうきらめきて候ひあへり。わざとならぬ袖口どもおし出されて、心ことに引きつくろはる。寢殿の母屋に、御座對座に設けられたるを、新院（山邊）入らせ給ひて、「故院（後深草）の御時、定めおかれし上は、今更にやは」とて、長押の下へ引きさげさせ給ふ程に、本院（後深草）出で給ひて、「朱雀院の行幸には、あるじの座をこそなほされ侍りけるに、今日の御幸には、御座をおろさるゝ、いと異樣に侍り」などゝ、聞え給ふほど、いと面白し。うべ〳〵しき御物語は少しにて、花の興に移りぬ。御かはらけなど、よきほどの後、

の下に云々　「かゝり」は蹴鞠の庭に立てた樹。その下へ出た。卽ち蹴鞠を行はうとするをいふ。○まらうど　客人。○のぼり　蹴鞠の場から上にあがる。○別當の君　女房の呼名。○上臈だつ　上臈らしい。○朱櫻の七　表蘇芳、裏赤色（異説あり）の七重襲の衣。○生絹　練絹に對し、生絲織の薄い絹布をいふ。○柳筥　三三二頁を見よ。○提子　酒を盛つて盃に注ぐ器。○柿ひたし　干柿を摺り水を入れて汁としたもの。又酒に浸したものともいふ。○はかなき御たはぶれ　とりとめもない戯。○ゆゑある木陰　趣ある木陰。○なよびか　しなやか。○けしきばかり　少し

春宮伏見院おはしまして、かゝりの下に、皆立ち出で給ふ。兩院・春宮立たせ給ふ。半過ぐるほどに、まらうどの院（山）のぼり給ひて、御裝束などなほさるゝほどに、女房別當の君、また上臈だつ久我の太政大臣（通光）の孫とかや、朱櫻の七・紅の打衣・山吹のうはぎ・赤色の唐衣・生絹の袴にて、白銀の提子にて、同じ提子にて、柿ひたしまゐらすれば、はかなき御たはぶれなどの給ふ。暮れかゝる程、風少しうち吹きて、花もみだりがはしく散りまがふに、御鞠數多くあがる。人々の心地いと艶なり。ゆゑある木陰に、立ちやすらひ給へる院（山）の御かたち、いと清らにめでたし。春宮（伏見）も、いと若う、うつくしげにて、濃き紫の浮織物の御指貫、なよびかに、けしきばかり引きあげ給へれば、

ばかり。○引きあげ　指貫を○夕ばえ　夕日の映つた樣をいふ。○らうがはしい。○さうどき　騒ぎ立てる

花のいと白く散りかゝりて、紋のやうに見えたるをかし。御覽じあげて、　枝おし折り給へるほど、繪に書かまほしき夕ばえどもなり。その後も、御酒など、らうがはしきまで、きこしめし、さうどきつゝ、夜更けて歸らせたまふ。

【かのおぼえなどの云々】　西園寺家では、かの今出川院が龜山院の寵を得なかつたので、之を遺恨に思ひ、龜山院の御系統（後宇多は龜山の御子）をつらく思ひ、その爲、今度も女御を參らせ澁るのだらうと噂する人もあつたといふことである。

【故院の御時定めおかれし云々】　あすか川の卷に「新院（後深草）六條殿にわたらせ給ひし頃、祇園の神輿違ひの行幸ありし時、御對面のやうを故院（後嵯峨）へ尋ね申されしにも、我と等しかるべき御事なれば、朝覲になぞらへらるべしと申されけり」（三五一頁）とあるを指したのであらう。「今更にやは」は今更改めるには及ぶまいの意。

【朱雀院の行幸には云々】　「朱雀院」は三條の南、朱雀の西。累代の後院

(三五二頁參照)となつた所。朱雀院へ行幸のあつた時には、主人の方が座を直されたのに、今日は却つて、お客樣の方が御座をおろされるとは、普通と違つたやり方だの意。卽ちそんな餘計な御遠慮には及ばないと、いはれたのである。但し、この朱雀院の行幸は何時の事を指していはれたのか分らない。

六條殿の長講堂も、燒けにしを造られて、その頃、御わたましし給ふ。四月の初つ方より、院の上(後深草)廂の御車にて、上達部・殿上人・御隨身、えもいはず清らなり。女院(東二條院)の御車に、姫宮(伊勢齋院)もたてまつる。出車あまた、皆白きあはせの五ぎぬ・濃き袴・同じ單にて、三日過ぎてぞ、いろ〳〵の衣ども、藤・躑躅・撫子など着かへられける。しばし、この院にわたらせ給へば、人々絶えず參りつどふ。西園寺の殿原なども、日毎に參り給ふ。御壺分たせ給ひて、前栽合

●長講堂　三五〇頁參照。燒亡は文永十一年十月。○御わたまし　御移轉。建治元年四月。○廂の御車　綱代廂の車　○三日過ぎてぞ　わたましの時は三日間謹愼し、衣服なども著かへないからである。○藤　表薄紫、裏青。○躑躅　表蘇芳、裏青。○撫子　表紅梅、裏青。○御壺　中庭。○前栽合　人數を左右に分つて庭の草木の有樣などの優劣を競爭し、歌をよみなどするもの。○槇の島　宇治川にある　○宇治川の橋云々　宇治川の景色を作つて、それに橋が作つてあつた。それを盜んで、自分の方で使つたのである。○わがつくろひたる方　自分の拵へた方。

●供花　佛前に花を供へること。○やがてうち續き　前栽合の時から直又引續いて行はれた。○閼伽　佛前に供へる水。○御堂のかをり　新しい御堂の美しさをいふ。○いづれも　何處の寺も。○年に二度　五月と九月の二回。○昔よりの事にて　昔からの習慣で。○いみじう經營し給へば　盛んに催されるから。○なありにしも、をかしうめづらしき事ども多かりき。某の朝臣の、槇の島のけしきを造りて侍りけるを、平大納言經親、いまだ下﨟にて、兵衞佐などいひけるほどにや、その宇治川の橋を盜みて、わがつくろひたる方に渡して侍りける、いと恐ろしく、心賢くぞ侍りける。

五月の供花、やがてうち續きければ、女院だち・宮々などの、夜の御時に閼伽奉らせ給へば、御堂のかをり・名香の香も、外には多くまさりて、いと染み深う、なまめかしう面白し。大方、いづれも、年に二度は、昔よりの事にて、いみじう經營し給へば、世の人のなびき仕う奉るさま限りなし。日に二たび、院(後深草)の出で居させ給ふに、關白・大臣以下、やむごとなき人々、絶えずさぶらひ給ふ。大中納言・

二位・三位・非参議・四位・五位などは、まして數知らず、すべて前の司・道々の人々などもまゐる事なれば、時ならぬ院の御前ともなく、いみじう花やかに、面白う尊し。昔の後二條關白師通と聞えしは、「おりゐの御門の門に、車の立つべき事なし」と、そしり給ひけるに、今の世を見給はばと、思ひ出でらるる。九月の供花には、新院（山蔭）さへわたりものし給へば、いよ〳〵女房の袖口、心ことに用意加へ給ふ。

【時ならぬ院の御前ともなく云々】 御譲位の後は、百官の參り集ふこともなく、院御所は自然寂しい筈であるのに、今日は普通の有樣に似ず、非常に花やかで、尊い。○「時ならぬ」の意は下の「いみじう花やか云云」にかゝると見るべきであらう。

【おりゐの御門の門に云々】 今鏡（紅葉の御狩）に「後二條のおとゞこ

びき仕う奉る　心を寄せて仕へまつる。○日に二たび　供花は朝夕二度行はれる。○前の司　官を止め、位ばかりで居る人。○非參議　四位以上で無官のもの。○道々の人々　紀傳・明經・陰陽など、さういふ道の家柄の人。○時ならぬ　その時節でなく。思ひがけない時に。○師通　藤原師實の子。學才あり、絲竹に巧であつた。康和元年薨ず。○おりゐの御門　上皇。○今の世を見給はば云々　こんな有樣を見たら、どんなに誹ることだらうの意。

●御花　供花。○伏見殿　山城紀伊郡伏見。○おしあはせて　多人數押しあふやうにして。○菊紅葉　狩衣の色。○色づき　紅葉するをいふ。○田面につゞく　黄金色になつた廣い田圃に續いて、川の涙の見えるをいふ。○物忌　天一神（なかがみ）太白神（ひとひめぐり）などを避けて、一日或は幾日かの間、外出せず愼しんで居ること。○五葉　五葉の松。

そ、おりゐのみかどの門に車たつる樣やはあるなど、のたまはせける」とあるもの。上皇の御機嫌を伺ふ者を誹つたのである。蓋し當時白河院が院政をとつて、勢力のあつたに對して、いつたのである。

御花果つれば、兩院（後深草龜山）一つ御車にて、伏見殿へ御幸な。る。秋山の景色、御覽せさせむとなりけり。上達部・殿上人、彼方此方おしあはせて、いろ〳〵の狩衣すがた、菊・紅葉こきまぜて、うちむれたる、見所多かるべし。野山のけしき色づきわたるに、伏見山、田面につゞく宇治の川浪、遙遙と見わたされたるほど、いと艶なるを、若き人々などは、身にしむばかり思へり。鷹司殿の大殿（兼平）も、參り給ふべしと聞えけるを、御物忌とて、とまり給へれば、五葉の枝につけて奏せられける、

●伏見の津　淀川の上流。○鵜船　鵜飼の船。○兩院の家司　兩院は後深草と龜山。家司は院の別當以下、庶務にあづかるもの。○いかめしき事

伏見山いくよろづ代も枝そへて
　　榮えむ松のするぞ久しき

御かへし、

榮ゆべきほどぞ久しき伏見山
　　生ひそふ松の枝をつらねて

【伏見山いくよろづ代も云々】「松」を上皇にたとへ、それが兩院竝び居られるより、「枝そへて」といふ。伏見山の松が互に枝をつらねて、幾萬代も榮えるやうに、兩院の御榮えは限りないの意。

【榮ゆべきほどぞ久しき云々】伏見山に枝をつらねて生ひそふ松のやうに、我等兩院は幾久しく榮えることであらうの意。

又の日は、伏見の津に出でさせ給ひて、鵜船御覽じ、白拍子御船に召し入れて、歌うたはせなどせさせ給ふ。二三日おはしませば、兩院の家司ども、我劣らじと、いかめしき

ども調じて云々　皆がいろいろ奇拔な作り物を拵へて奉つたをいふ。○兼行　藤原親忠の子。從二位に叙せられた。○ひわりご　三七八頁を見よ○心ばせありて仕う奉れる　心を用ひて作つた。○かれはいかゞ見る　あれはどういふ意味と思ふか。○定家の中納言云々　藤原定家の書いた源氏物語。○御中　兩院の。○はかなき御遊わざ　一寸した遊事。○いどましき樣　互に競爭するやうな樣子。○めやすき　見るも氣持のよい。○負わざ　勝負に負けた方から酒肴など出して、勝つた方をもてなすこと。○童の鞠蹴たる云々　童の蹴鞠するに擬して女房を仕立てたこと。○水

事ども調じてまゐらせあへる中に、楊梅の二位兼行、ひわりごどもの、心ばせありて仕う奉れるに、雲雀といふ小鳥を、荻の枝につけたり。源氏の松風の卷を思へるにやありけむ。爲兼朝臣を召して、本院(後深草)、「かれはいかゞ見る」と仰せらるれば、「いと心得侍らず」とぞ申してける。誠に定家の中納言入道が書きて侍る源氏の本には、荻とは見え侍らぬとぞうけたまはりし。かやうに御中いとよくて、はかなき御遊わざなども、いどましき樣に聞えかはし給ふを、めやすき事に、なべて世の人も思ひ申しけり。或時は御小弓射させ給ひて、御負わざには、院の内にさぶらふ限りの女房を見せさせ給へと、新院(龜山)のたまひければ、童の鞠蹴たるよしをつくりなして、女房どもに水干着せて出され

干　狩衣を簡略にしたもの。○賭物　勝負の時かける賞品。○童　召使の子供。○下仕　下ざまの事を勤める女房。○直衣に衣出しつゝ　直衣の下に花やかな衣（きぬ）の裾を出して著ること。出衣（いだしぎぬ）といふ。○露臺の亂舞　露臺は、紫宸殿の北廂と仁壽殿の南廣廂との間にある板敷。亂舞は、新嘗會五節の時、殿上人が直衣或は衣冠で色々の出衣をし、朗詠・今樣などを謳つて舞ふこと。○御前の召し　御前の試。寅の日、五人の舞姫を召して舞を御覽ずること。○北の陣　朔平門のこと。內裏の北方で警護の陣のある所。寅の日、殿上人打連れて、清涼殿からこゝを經て

たる事も侍りけり。新院（山邊）の御賭物には、龜山殿にも、五節のまねに童・下仕までを舞姫になされけり。上達部直衣に衣出して、露臺の亂舞・御前の召し・北の陣・推參まで盡され侍りとぞ承りし。

【源氏の松風の卷を思へるにやありけむ】源氏物語松風の卷に「某の朝臣の、小鷹にかゝづらひて、たちおくれ侍りぬる、いかゞなりぬらむなどいふ。今日なほ桂殿にとて、そなたざまにおはしましぬ。餓かなる御鷹しさわぎて、鵜飼ども召したるに、海士のさへづり思し出でらるゝ。野にとまりぬる君達、小鳥しるしばかり引き付けさせたる、荻の枝など、つとにして參れり云々」とあるをいふ。卽ち雜行が荻の枝に雲雀をつけたのを、この松風の卷の意味を思つて探へたのだらうといつたのである。

【定家の中納言入道云々】　こゝは記者の言。定家の書いた源氏物語の本には、荻とは書いてないさうだの意。

【新院の御賭物には云々】　後深草院の方は、女房に鼠鞭の眞似をさせて

五節所に向ふ。○推參　北の陣などを廻つて、それから歌曲などを謳ひながら、所々を騷ぎ廻ること。

●この十二月　弘安元年。○ひきうつし　全體に。○おぼろげ　おぼろげならずの略。一通りならぬこと。勝れて居ること。○立ちならび難く　比較にならぬ。劣つて居る。

●新陽明門院　龜山院の妃。○たゞならず　御懷姙のこと。○御氣色　御出產の樣子。○珍しうおぼす　龜山院が。○出されたに對し、龜山院の方は、童・下仕までを舞姫として、五節の眞似をさせて見せられた。

この御代にもまた、勅撰の沙汰、一昨年（總拾二年）ばかりより侍りし、爲氏大納言撰ばれつる、この十二月にぞ奏せられける。「續拾遺集」ときこゆ。「たましひある樣には、いたく侍らざめれど、艷には見ゆる」と、時の人々申し侍りけり。續古今の、ひきうつし、おぼろげの事は、立ちならび難くぞ侍るべき。

【たましひある樣には云々】　この續拾遺の歌は、とんと精神のあるやうには見えぬが、優美ではあるやうだ。

かくて年もかはりぬ。その頃、新陽明門院（子）、又たゞならずおはしますと聞えし。五月ばかり、御氣色あれば、珍しうおぼす。內々殿にてせさせ給へば、天下の人々參りつど

殿　女院の御所。○せさせ給へば　御産の支度を。○啓仁　弘安元年十二月九日薨。○又かくものし給へば　かうして御懐姙になつて居るから。○思ふさまなる御事　希望通り皇子御降誕あること。○おぼしかしづく　大切にせられる。○かひがひしう　甲斐あるさまに。○若宮生れさせ　弘安二年六月二十八日。○ありきぞめ　御誕生後始めて他所へ行かれること。○唐廂の御車　三六一頁を見よ。○更衣腹の姫君　更衣の生み奉つた姫君。但しこゝの更衣は刑部卿孝時の女。○あえもの　あやかりもの。○菊の網代のひさし　三六一頁を見よ。○よそほしく　飾り立てて美し

ふ。前の度生れさせ給へる若宮(啓仁)は、かくれさせ給ひにしを、新院(龜山)本意なしとおぼされけるに、又かくものし給へば、めでたう、思ふさまなる御事もあらばと、今よりおぼしかしづくに、いとかひがひしう、若宮(龜山)生れさせ給へれば、限りなくおぼさる。八月御子(龜山)の御ありきぞめとて、萬里小路殿に渡らせ給ふ。唐廂の御車に、後嵯峨院の更衣腹の姫宮、聖護院の法親王(覺助)の一つの御腹とかや、御母代にて添ひ奉り給ふ。又三條の内大臣公親の御女、内の上(後宇多)の御乳母なりしも、めでたき御あえものとて、御車に二人乗りたまふ。女院(位子)は、院の上(龜山)一つ御車に、菊の網代のひさしにたてまつる。宮(龜山)の御車にやりつゞけて、よそほしくめでたき御事なり。その頃、儉約行はる

いと。○下簾　車の前後の簾の内にかけた絹布。簾の下から長く外へ垂れて居る。○小金物　飾の爲につけた金具。○物見車　見物に出て居る車。○召次　舍人又は隨身の類。院中の雜事を掌り、時を奏するもの。

●後の堀河院の御女　後堀河第二皇女。○おろかならずかしづき　大切に養育する。○おはしましける程に　この姫宮が。○乳母子　乳母の生ん

とかや聞えし程にて、下簾短くなされ、小金物拔かれけり。物見車どものも、召次寄りて、切りなどしけるをぞ、「時しもや、かゝるめでたき御事の折節」など、つぶやく人もありけるとかや。この宮(龜山)も親王の宣旨ありて、いとめでたく聞えしほどに、明くる年(弘安三年)九月、又かくれさせ給ひにし、いと口惜しかりし御事なり。

【時しもや、かゝるめでたき云々】　當時は儉約の沙汰があつて、牛車の裝飾なども制限された。そしてこの時も、物見車の下簾を切られた。その切られた連中がいふには、「時もあらうに、かういふめでたい御歩初拜觀の時に切るとは、ひどい」と。

弘安も四年になりぬ。夏頃、後嵯峨院の姫宮かくれさせ給ひぬ。後の堀河院の御女にて、神仙門院(曇子)と聞えし女院の御腹なれば、故院(後嵯峨)もいとおろかならず、かしづき奉ら

せ給ひけり。御かたちも、たぐひなく美しうおはしまして、「人の國より、女の本をたづねむには、この宮の似繪をやらむ」などぞ、父の御門（後堀）もおほせられける。御乳母隆行の家におはしましける程に、御乳母子隆康、忍びて參りける故に、あさましき御事さへいできて、これも御うみながしにて、俄かに失せさせ給ひけりとぞ聞えし。

【人の國より女の本を云々】外國から女の姿の標本を求めに來たら、この姫宮の肖像をやらう。

その頃、蒙古起るとかやいひて、世の中さわぎたちぬ。いろ〳〵さまざまに恐ろしう聞ゆれば、本院（後深草）・新院（亀山）は、あづまへ御下りあるべし、内（後宇多）・春宮（恩仁）は、京にわたらせ給ひて、東の武士ども上り候ふべしなど、沙汰ありて、

山々寺々、御祈り數知らず。伊勢の勅使に經任大納言まゐる。新院（亀山）も八幡へ御幸なりて、西大寺の長老（叡尊）召されて、眞讀の大般若供養せらる。大神宮へ御願に、「我（亀山）が御代にしも、かゝる亂出できて、誠にこの日本のそこなはるべくは、御命を召すべき」よし、御手づから書かせ給ひけるを、大宮院（後堀）、「いとあさましき御事なり」と、猶ほ諫め聞えさせ給ふぞ、ことわりにあはれなる。東にも、いひしらぬ祈りどもし、こちたくのゝしる。故院（後嵯）の御代にも、御賀の試樂の頃、かゝる大事ありしかど、程なくこそしづまりにしを、この度は、いとにが〳〵しう、牒狀とかや持ちて參れる人などありて、わづらはしう聞ゆれば、上下思ひまどふ事かぎりなし。されども、七月一日、おびたゞしき大風

だ子。○忍びて參りける　人知れず通じたこと。○あさましき御事　懷姙をいふ。○うみながし　流産。

●蒙古起る　蒙古軍の攻め來るをいふ。○あづま　鎌倉。○沙汰　評判。○伊勢の勅使　伊勢大廟へ外　調伏を祈願にゆく勅使。○八幡　石清水八幡宮。○西大寺　奈良。○眞讀の大般若　大般若經を文句の省略なく、丁寧に讀誦すること。○ことわり　尤も。○いひしらぬ　大變な。○こちたくのゝしる　喧しくいひ騷ぐ。○故院の御代にも云々　三二五頁を見よ。○牒狀　國書をいふ。○わづらはしう　面倒に。○七月一日　閏七月のこと。○おのづから　たま〳〵。○はぎたる　矢の羽をつけた。○あらた　あらたか。神佛の靈驗著しきこと。○おちぬて　おちついて。○異國の御門　忽必烈をいふ。

吹きて、異國の船六萬艘、兵乘りて筑紫へよりたる、皆吹き破られぬれば、或は水に沈み、おのづから殘れるも、泣く〳〵本國へ歸りにけり。石清水の社にて、大般若供養說法いみじかりける刻限に、晴れたる空に、黒雲一むら、俄かに見えてたなびく。かの雲の中より、白き羽にてはぎたる鏑矢の大なる、西をさして飛び出でて、鳴る音おびただしかりければ、彼處には、大風の吹き來ると、兵の耳には聞えて、浪荒くたち、海の上あさましくなりて、皆沈みにけるとぞ。猶ほ吾が國に神のおはします事、あらたに侍りけるにこそ。さて爲氏の大納言、伊勢の勅使にて、のぼる道より申しおくりける勅をしていのるしるしの神風に

かくてしづまりぬれば、京にも東にも、御心どもおちゐて、めでたき限りなし。かの異國の御門、心憂しとおぼして、湯水をもめさず、「われいかにもして、この度日本の帝王に生れて、かの國を亡す身とならむ」とぞ、ちかひて死に給ひけるとぞ、聞き侍りし。まことにやありけむ。

よせくる浪ぞかつくだけつゝ

【蒙古おこる】是より先、鎌倉では、遠慮なく元の使者を斬つたので、忽必烈の怒は益〻激しく、この年卽ち弘安四年五月、朝鮮の兵を合せて、總軍十數萬、軸艫相銜んで、我が國を襲うて來た。太宰府は之を壹岐・對馬に防いだけれども、衆寡敵せず、とても容易に追ひ拂ふことは出來ない。京都では又、敗聞頻りに至るに、人心恟々、龜山院は、長くも御身を以て國難に代らむとさへお祈りになり、諸國の神社佛閣は亦一心不亂に戰勝の祈禱をした。やがて六月、賊は五龍山及び能古・志賀二島に據つて、平戸に迫つて來た。是に於て、防備の將士は益〻

●御輿は都へ　例の强訴である。○けしきばかり　樣子だけ。一寸だけは。○まめやか　眞實。○ふりすて　衆徒が神輿を置いたまゝで歸つてしまふこと。○山法師　比叡山延曆寺の衆徒。○のぼりぬ　叡山に歸り上つた。○柏ばさ

死力を盡し、寡兵を以てよく敵の衆に當り、屢〻敵膽を寒からしめた。かくて、賊軍が稍〻利を失ふに至つた時、恰も閏七月一日、突如西北より襲ひ來つた大暴風は、賊船を木の葉の如く吹き散らし吹き破つて、十萬の兵、或は魚腹に葬られ、或は捕虜となつて斬られ、總指令官范文虎さへ、纔かに身を以て逃れ歸るといふ樣であつた。

【勅をしていのるしるしの云々】　勅使を遣して、祈つたしるしがあつて、吹き起つた神風の爲、襲ひ來つた蒙古の兵船は悉く破壞したの意。「寄せくる浪」は蒙古の兵船のことをいひ、自ら寄せて且つ破れるといつたのである。

同じ六年正月六日、日吉の社の訴訟勅裁なしとて、御輿は都へ入らせ給ふ。六波羅の武士ども、けしきばかり防ぎ奉りけれど、まめやかには、神に向ひ奉りて、弓射る者もなければ、紫宸殿・清涼殿などにふりすてまゐらせて、山法師はのぼりぬ。御門（後宇多）は急ぎ對屋にいでさせ給ひて、腰輿

み　冠の纓の端を上になるやう撓め疊んで、白木の挾木で止めること。非常の場合に文官がする。○七日の節會　白馬（あをうま）の節會。一四四頁を見よ。○まほ　完全。○四足　四足門。扉のついた柱の前後に、四本の添柱あるもの。○この家　近衞殿。○石清水の若宮　若宮は本宮の祭神の御子を祭つた祠。石清水のは仁德天皇。○いはひまゐらせたる　祀つた。○瀧口　一八〇頁を見よ。○過ちたりける御とがめ　その狐に對して、何か過をした罰。○わづらはしく　面倒。○神々しき　尊く嚴かな。（狐がたゝつて何かアタンなどするをいふ）。

にて、近衞殿へ行幸なる。殿上人ども、柏ばさみして仕うまつりけり。七日の節會も、まほには行はれず。【それより三條坊門萬里小路の云々】　こゝの文意によると、次の「この家」は、この萬里小路でなければならぬが、續史愚抄（卷六、弘安六年）によると、「二月二十五日庚戌。主上自二近衞殿一（內大臣家基第也。怪殿に遷幸萬里小路里內一」とあるから、これは矢張り近衞異連續故云）。還

ばし內裏になりし時、萬里小路おもての四足は建てられ侍りき。」かゝりし程に、この家に、石清水の若宮をいはひまゐらせたる社おはしますに、狐多く侍りけるを、瀧口の某とかや、過ちたりける御とがめにて、よろづわづらはしく、神々しき事どもありければ、萬里小路殿へ歸らせ給ひにき。

(17)

●ねび　成長。○才　學問。○はかばかしき　これといふ立派な。○新陽明門院　龜山院の妃。○東の御方　後、西華門院といふ。○忍び〳〵御覽じける　内々寵愛せられる○二月ばかり　皇代記・帝王編年記等は二月二日、皇年代略記・皇胤紹運錄等は三月一日としてある。○宿世　前世の因緣。

●かしがましく　喧しく。○ひゞきあひたり　人々が評判し騷ぐ。○かくのゝしるは　かく喧しく言立てるのは。○安元の御賀　高倉帝安元二年

(18)

辰。今夕遷二幸三條坊門萬里小路内府禪門第一。暫可レ爲二皇居一。云々。四足門俄被レ立レ之。」とある。此等から推して、「それより」以下「建てられ侍りき」までは、攙入したものであらうと思はれる。

この御門（後宇多）は、ねび給ふまゝに、いとかしこく、御才（ざえ）なども勝（すぐ）れさせ給へれば、なべて世の人も、めでたき事に思ひきこゆ。はかばかしき女御・后なども候ひ給はで、いとつれづれなるに、新陽明門院（位子）の御かたに、堀河の大納言（具守）の御女、東の御方（基子）とてさぶらひ給ふを、忍び〳〵御覽じけるほどに、弘安八年二月ばかり、若宮（後二條）いでものし給へり。いとやむごとなき御宿世（すぐせ）なるべし。

今年（弘安八年）北山の准后（貞子）九十に滿ち給へば、御賀の事、大宮院（姞子）思し急ぐ。世の大事にて、天下かしがましくひゞき

(17)

(18)

三月、後白河院五十の御賀を行はれたこと。○このにほひ　その系統を引いて居ること○ありがたく　珍しい。○國母　天皇の御生母（今日皇后の意に用ひるは誤）。○過ぎ給ひぬれど　あらせられたが○取り集め　種々の幸福を一身にとり集める。○御位の初より　後嵯峨帝踐祚間もなく○きしろふ　競爭する。○三千の寵愛　一一七頁を見よ。○出でものし　生れられる。○たひらか　平安。○二代の國母　後深草及び龜山の御生母なること。○基經　藤原長良の子。叔父良房に養はれ、陽成帝の時、太政大臣となる。文德實錄の撰者。○延喜　醍醐朝の年號。○大后宮　皇后

あひたり。かくのゝしるは、安元の御賀に、青海波（せいがいは）舞ひたりし隆房大納言の孫なめり。鷲尾の大納言隆衡の女ぞかし。大宮院（姞子）・東二條院（公子）の御母なれば、兩院（後深草龜山）の御祖母（おほは）、太政大臣（おほきおとど）（實氏）の北方にて、天の下、皆このにほひならぬ人はなし。いとやむごとなかりける御幸なり。昔御堂殿（道長）の北方、鷹司殿（倫子）と聞えしにも劣り給はず。大方この大宮院の御宿世（すぐせ）、いとありがたくおはします。すべて古へより今まで、后・國母（きさきこくも）多く過ぎ給ひぬれど、かくばかり取り集め、いみじきためしは、未だ聞き及び侍らず。御位の初より、選ばれまゐり給ひて、爭ひきしろふ人もなく、三千の寵愛。一人にをさめ給ふ。兩院（後深草龜山）うち續き出でものし給へり。いづれもたひらかに、思ひの如く、二代の國母（こくも）

名穠(しげ)子。醍醐帝后。朱雀・村上兩帝御母。○かなしう　可愛がる。○前坊　前の皇太子。延長元年三月、御年二十一で薨去。文彦太子といふ。○おくれ聞え　先に死なれて。○御命の中は　死ぬまで。○師輔　藤原忠平の子。朱雀・村上の二朝に仕へ、天暦元年右大臣となる。天徳四年薨ず、年五十三。○さかさまの御歎　子に先だたれた御悲歎。○絶ゆる世なく　絶ゆる時なく。○なか〳〵　却つて。○一の人　攝政關白。但しこゝは、一の人の子孫の意。○世の親　國母。○樣をかへて　事柄は變るが。○ただ人　攝關ならぬ家柄の人。○公實　藤原實季の子。○讃岐の院の云々　崇德院の御子重仁親王は出家せられて、御子孫がない。○今のやうに　大宮院のやうに。○三代　後深草・龜山・後宇多。○春日大明神　藤原氏の氏神。○佛陀ほとけ。

にて、今は既に御孫(後宇多)の位をさへ見給ふまで、いさゝかも御心にあはず、おぼしむすぼるゝ一ふしもなく、めでたくおはしますべき樣、來し方も類なく、行末にも稀にやあらむ。古への基經の大臣の御女(仁明)、延喜(醍醐)の御代の大后宮、朱雀・村上二代の國母にておはせしも、始め出でき給ひて、殊にかなしうし給ひし前坊(明保)におくれ聞え給ひて、御命の中は、絶えぬ御歎つきせざりき。九條の大臣師輔の御女(安子)、天曆(村上)の后にておはせし、冷泉・圓融兩代の御母なりしかど、めでたき御代をも見奉り給はず、御門(村上)にも先だち給ひて、失せ給ひにき。御堂(長家)の御女上東門院(彰子)、後一條・後朱雀の御母にて、御孫後冷泉・後三條まで見奉り給ひしかども、皆先立たせ給ひしかば、さかさまの御歎絶ゆる世なく、御命餘り長くて、なか〳〵人目を恥づる思ひ、深くおはしましき。これも皆一の人にて、世の親となり給へりしだに、樣をかへて、さまざまの御身の憂はありき。たゞ人には、大納言公實の御女(璋子)こそ、待賢門院とて、崇德・後白河の御母にておはせしかど、それも後白河の御世をば御覽ぜず、讃岐の院(崇德)の御末もおはしまさず。されば、今のやうに、たゞ人の御身にて、三代國のおもしといつかれ、兩院(後深草・龜山)とこしなへに仰ぎ捧げ奉らせ給へば、前の世も、いかばかりの功德おはしまし、この世にも、春日大明神をはじめ、よろづの神明・佛陀の擁護、厚くものし給ふにこそ。ありがたくぞ推し量られ給ふ。

【九條の大臣師輔の御女云々】村上帝は康保四年五月二十五日崩御、皇

●二月三十日頃　舊曆であるから、二月にも三十日はある　○遊義門院　後深草皇女、後字多の后。○北山　一五五頁參照。○雅樂寮　治部省の被管。舞樂のことを掌る所。○院司　院の役人(大宮院の)。○中門　寢殿造の圖を見よ。○寄ぜらる　車を。○傅　東宮輔導の職。○御車に參り給

后は同元年四月二十九日、御年三十八で崩御あらせられた。隨つて、御子なる冷泉・圓融の御代を見給ふことは出來なかつた。

【御堂の御女上東門院云々】　後一條は長元九年四月、二十九歳で崩御、後朱雀は寛德二年正月、【御年三十七で崩御、又後冷泉は治暦四年四月、四十四、後三條院は延久五年五月、四十で崩御、而して上東門院は、その後、白河帝承保元年十月、御年八十七で崩ぜられた。

【大納言公實の御女こそ云々】　近衞帝久安元年八月、御年四十五で崩御になり、後白河の踐祚は其の後十二年、保元元年である。

かくて御賀は、二月三十日頃なり。本院(堀河)・新院(鳥)・東二條院(公子)・遊義門院(後深草)・いまだ姫宮と申す皆かねてより北山に渡らせ給ふ。新陽明門院(位子)も、新院(鳥)の一つ御車にておはしますす。廿九日の夜、先づ行幸(後宇多)あり。雅樂寮樂を奏す。院司左衞門督公衡、事のよし申して後、中門に寄せらる。その後、春宮(伏見)行啓、中門よりおりさせ給ふ。傅のおとゞ、二條

へり　御車に陪乘するをいふ　○その日　三十日。○取り拂ひて　母屋や廂にかけてある簾を取り去つて。○道場　僧侶の心靜かに道を修する場所　○二合　合は箱類などを數へる語。○金泥　金箔の粉を膠で溶かしたもの。これでお經などを書寫する。○名香云々　柳の模樣を織り出した上に藤の花を縫ひにしたものに名香を包んで。○繧繝　繧繝緣(うげんべり)の疊。繧繝は白地に色々の絲で模樣を織つたもの。天皇・上皇の用。○二帖疊二疊。○茵　座蒲團。○大文の高麗　高麗は高麗緣白地に黑い紋樣を織り出した綾。大文は紋柄の大きなこと。親王・大臣の用。○纐纈

殿(師)御車に參り給へり。その日になりぬれば、寢殿の東面の母屋(もや)・廂(ひさし)まで取り拂ひて、釋迦如來の繪像(えざう)懸け奉る。道場のかざり、まことの淨土の莊嚴(しやうごん)もかくこそと、めでたく清らをつくされたり。御經の筥(はこ)二合、金泥(こんでい)の壽命經九十卷・法華經入れらる。名香、柳の織物に藤をぬひたるにて包(つゝ)みて、御經の机によせかく。御簾の內に、西の一間(ま)に繧繝(うげん)二帖、唐錦の茵敷きて、內のうへ(後宇多)の御座とす。同じ御座の北に大文(だいもん)の高麗(かうらい)一帖敷きて、春宮(伏見)渡らせ給ふ。西の廂に、これも屏風をそへて、繧繝二帖、錦のしとねに、准后(二條子)居給へり。同じ廂に、東二條院(公子)渡らせたまふ。はるばると、纐纈(かうけち)の几帳の帷(かたびら)を出して、いろ〳〵の袖口ども、御方ぐちめわかれて、おし出でたるほど、龍田姫(たつたひめ)も、かゝる

くくり染。○帷　すべて裏をつけぬ單(ひとへ)の絹。こゝは纐纈の帷をかけた几帳の意。(女房の居る所としたのである)。○御方々　大宮院・東二條院・姫宮・准后などの女房。○けぢめわかれて　それぞれ區別があつて。○おし出でたる　袖口を。○事なりぬるにや　準備整ひ、時刻となつたと見えて。○うちつゞき　下に「出でさせられ」など加へて見る。○所せう　廣い所も狹く思はれる程。○公守　兼忠の誤か。○集會の鐘　集會を報ずる鐘。○階　正面の階。○引直衣　天皇・上皇の常の御服。○青鈍　縹色に青みあるもの。○櫻　表白、裏濃紫○霰に窠の紋　霰は霰地といつて、霰のやうな小紋を織り出したもの、窠(kwa, kwan)は瓜を輪切にした形(一説、蜂の巣の形)。霰に窠の紋ある紫の指貫の意。○三御衣　衣を三領重ねること。○櫻の八　櫻襲の五衣を八領襲ねること。○ひねりあはせ　單を二枚重ねて、端をひねつたもの○おはしますらむとおもほす　遊義門院がお出でになると思はれるの意。○御眦たゞならず云々　平生とは違つた御目附で遊義門院の方を御覽になるをいふ。○鳥向樂　青海波の別名。○鷄婁　鼓の一種徑六寸、甕のやうな形。頸にかけて鳴す。○亂聲　音樂に笛・鼓を盛んに合はすこと。○壹越調　十二律の一。○安

錦の色は、いかでかはと、いみじう好ましげなり。事なりぬるにや、兩院(後深草 龜山)・御門(後宇多)・春宮(伏見)・大宮院(信子)・東二條院(公子)・今出川院(禧子)・春宮大夫(實兼)など、うちつゞき、誦經の鐘のひゞきも、耳驚くばかり、所せう聞ゆ。衆僧集會の鐘うちて後、上達部御前の座に着く。階より東に關白(兼平)・左大臣(師忠)・內大臣(家基)・花山院大納言(長雅)・源大納言(通頼)・大炊御門大納言(信嗣)・右大將(通基)・春宮大夫(實兼)・左大將(公守)・三條中納言(實重)・花山院中納言家教・左衞門督公衡など候ひたまふ。階より西に四條前權大納言(隆親)・春宮權大夫(具守)・權中納言(宗冬)・四條宰相隆保・右衞門督爲世など祗候せられたり。內の上(後宇多)御引直衣・生絹の御袴、本院(後深草)御烏帽子直衣・青鈍の御指貫、新院(龜山)御直衣・綾の指貫、春宮(伏見)櫻の御直衣、霰に窠の紋の紫の御指貫、いひしらずなまめかしう見え給ふ。今日は、皆御簾の中におはします。大宮女院、白き綾の三御衣、東二條院、唐織物の櫻の八、紅梅のひねりあはせの御單、かばざくらの御小袿奉れり。姫宮(遊義門院)、紅の匂の十・紅梅の御小袿・萌黃の御單・赤色の御唐衣・生絹の御袴たてまつれる、常よりも、殊に美しうぞ見えたまふ。おはしますらむとおもほす間のとほりに、內のうへ(後宇多)、常に御眥たゞならず、御心づかひして、御目とゞめたまふ。樂人・舞人、鳥向樂を奏す。鷄婁を先だてて、亂聲、左右桙を振る。その後、壹越調の調子を吹きて、樂人・舞人・衆僧集會の所に向ひて、安樂鹽を吹く。衆僧左右にわかれてまゐる。階の間より上りて座につく。講師法印憲實、讀師僧正守助、

導師高座に上りぬれば、堂童子花籠をわかつ。杖とりの使公敦朝臣、杖を退けて舞を奏するほど、けしきばかりうちそゝぎたる春の雨、「青柳の絲に玉ぬく」かと見えたり。一の舞、久助といふもの、少しねびて、いとよし〳〵しう、おももち・あしぶみ、神さびて面白し。萬歳樂・賀殿・陵王、右地久・延喜樂・納曾利、久忠、二のものにて、勅錄の手といふ事仕うまつる時、右の大臣(忠教)座を立ちて、賞仰せらるれば、うけ(久忠)たまはりて拜し奉るほど、いと艶なり。久助・正秋などいふものどもも、賞うけたまはりて、笛をもちながら、おきふし拜するさまも、つきづきしう、ゆゑありて見ゆ。講讃のことば、めでたう、いみじ。今の世には、富樓那尊者の如くいはるゝものなれば、心とゞめて、人々聞き給ふに、涙止めがたき事どもをいひ續く。高座果てて後、樂人酒胡子を奏す。その程に、僧の祿をたまふ。頭中將公敦より始めて、思ひ〳〵の姿にて祿をとる。或は闕腋に平胡簶、もとほしの袍に、革緒の劒など、心々なり。俊定・經繼などは、巡方の帶をさしたり。衆僧まかづる程に、廻忽・長慶子奏して、樂人・舞人も退きぬる後、大宮院(子)・准后(貞子)の御臺まゐる。陪膳權中納言、役送は實時・實冬・實躬・信輔・俊光など仕うまつる。

【龍田姫もかゝる錦の色はいかでかは】紅葉を染める秋の神なる龍田姫も、かういふ美しい錦の色は、とても染められまい。

【青柳の絲に玉ぬく】古今集(春)に「淺みどり絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」とあるものを取つた語。句の意は、雨の雫が柳の枝について居るのを、青柳の絲で玉をつゞつたといつたのである。

樂鹽　沙陀調。○講師　法會の時、高座に上つて講說するもの。○讀師　經名及び經文を讀みあげるもの。○導師　法會の首座たるもの。○高座　說法などの時、僧の上り著く座。○堂童子　法會の時、花籠を配るもの。大抵は俗の少年、水干を著て出る。○花籠　佛前に散花する花を入れる籠。○杖とりの使　天皇から、高齡の臣下に杖を賜ふ時の使。○舞を奏す　舞をまふ。○けしきばかり　只少し。○一の舞　舞人を左右に分ち、その中の上首を一の者といひその者の舞ふ舞。○ねびて　年が行つて居る。○よし〳〵しう　いはれありげ。○おももち　顏つき。○あしぶみ　足拍子。○神さびて　古雅で。○二の物　上首の次に位するもの。○勅錄の手　胡飮酒の舞かといふ。○おきふし拜する樣　拜舞すること。○つきづきしう　似つかはしく。○ゆゑありて　よしありげに。○講讃　講師の講說。○高座果てて　講說が終つて。○酒胡子　壹越調、舞なきもの。○僧の祿　僧へのかづけもの。○闕腋　武官の著る袍。○平胡簶　胡簶の一種。十五筋の矢を扇を開いたやうに平たく竝べて差すもの。○もとほしの袍　文官の著る縫腋の袍。○マツハシノキヌの說　革緒の劒(のだち)。衛府の太刀ともいふ。武官警衛の爲帶するもの。○巡方の帶

【萬歳樂・賀殿云々】「地久」の上に「右」とあるから、之に對し、「萬歳」の上には「左」とあるべきである。

【富樓那尊者の如く云々】富樓那は釋尊十大弟子の一人。辯舌を以て聞えた人。卽ち當時富樓那のやうに雄辯を以て聞えて居たの意。

かくて、又の日は、三月の一日なり。寢殿のよそひ、昨日のまゝなり。舞臺・樂屋ばかりを取りのけて、母屋の四方に、壁代をかく。兩院(後深草・龜山)・內の上(後宇多)の御簾の役、關白(兼平)さぶらひたまふ。春宮(伏見)のは、傅(西園寺實兼)遲くまゐり給へば、大夫實兼つとめ給ふ。內のうへ(後宇多)、今日は、例の御直衣・紅の打ちたる綿厚き御衣・織物の御指貫、いとめでたき御にほひなり。本院(後深草)、固織物の薄色の御指貫・少し薄らかなる御直衣、新院(龜山)、雲に鶴の浮織物の御直衣、同じ御指貫、紅の今少し色かはれるを奉れり。あらまほ

しき程にねびとゝのほり、宿德に、もの〳〵しき御さまかたち、あな淸げ、今ぞ盛に見えたまふ。春宮(伏見)は、色濃き御直衣・浮線綾の御指貫・紅の打ちたる袷を奉れり。とりどりにめでたく淸らにおはします。御かたちどもの、いづれとなく、あなうつくしと、うち見奉る人の心地さへ、そゞろに笑ましく。大宮院(後嵯峨)などは、まして何事をかはおぼさるらむと、おしはからられ給ふ。彼方・此方の御隨身ども、近く候ひつるを、院出でさせ給ひぬれば、退きて、御階の西に並みゐたる、裝束ども、いろ〳〵の花をつけ、高麗・唐土のあやにしき、金・銀をのべたるさま、いとあまりうたてある程にぞ見ゆる。

【大宮院などは、まして何事をかは云々】殊に大宮院などは、あらむ限

束帶の時用ひる石帶の、玉石の方形なるもの。○まかづる　退出する。○長慶子　大食調、舞なきもの。○御臺食　物を載せる臺。○陪膳　一七五頁を見よ。○役送　同上。●よそひ　裝飾。○壁代　間と間との隔に、壁の代りとして垂れる帷。○御簾の役　御簾を捲き上げる役。○御にほひ　美しい御樣子。○あらまほしき程に　理想的などの意。○宿德　一七一頁を見よ。○もの〳〵しき　勿體らしい。○そゞろに　何となく。○笑ましく　笑むべくあり。ほゝゑまれる。○此方彼方の御隨身　院や大臣など方々の御隨身。○うたて　尋常ならず怪しく。異樣などの意。

●柯亭　笛の名。○牧馬　琵琶の名。○公孝　此時實は權大納言。○いろ〳〵の衣を出す　出衣（四一〇頁參照）のこと。○管絃の具をわかつ　御遊果てて樂器を撤すること。○かうぶりたまはり給ふ　位階を進められること。○道々の師　音樂の師をいふ。○加階たまはる　位階を進められること。○和歌の披講　和歌をよみあげること。○もとほしの袍　四二九頁を見よ。○壺　壺胡籙。筒のやうに細長い形をしたもの。○懷紙　詠進の和歌を書く紙。檀紙又は杉原紙。○文臺　短册を載せ

りの幸福を身に集めて居られるから、何の思ふ所もおありなさるまいと、おしはかられる。

今日は、内（後宇多）・東宮（伏見）・兩院（後深草龜山）、御膳まゐる。陪膳花山院大納言（長雅）・役送四條宰相（隆康）・三條宰相中將（公實）、本院（後深草）の陪膳、大炊御門大納言信嗣、新院（龜山）のは、春宮大夫（實兼）など勤めらる。その後御遊はじまる。内（後宇多）のうへ御笛、柯亭といふものとかや、御筥に入れたるを、忠世もちてまゐれるを、關白（實兼）とりて御前に奉らる。東宮（伏見）御琵琶牧馬、宮權亮親定もちて參りたるを、大夫（實兼）御前におかる。上達部の笛の箱、別にあり。笛、兵部卿（良教）・花山院大納言（長雅）、笙、源大納言（通頼）・左衞門督（公衡）、篳篥、兼行朝臣、琵琶、春宮大夫（實兼）、琴、洞院左大將（兼忠）・三位中將（實泰）、和琴、大炊御門

る臺。○圓座　藁・藺などを渦のやうに圓く平たく組んで作つた座蒲團。○披講のほど　披講の頃。○内宴　正月二十一日、仁壽殿で行はれる宮中内々の節會。文人を召し、題を賜うて、詩を賦せしめ、之を御前で披講する。○魚綾　綾の一種。○むづかし　面倒。○うけばりて　獨りおし張りて。

大納言（信嗣）、拍子、德大寺中納言（公孝）、末拍子、實冬、皆人々、直衣にいろ〳〵の衣を出す。例の安名尊・席田・鳥破急、律、青柳・萬歲樂・三臺急、御遊果てぬれば、殿上の五位ども參りて、管絃の具をわかつ。御方々かうぶりたまはり給ふ。道々の師ども加階たまはる。その後、和歌の披講はじまる。爲道朝臣もとほしの袍に、壺負ひて、弓に懷紙をとり具して、上達部の座の前を通りて、階の間より入りて、文臺の上におく。その外の殿上人どもの歌は、一にとり集めて、信輔一度に文臺におく。文臺の東に圓座を敷きて、春宮（伏見）披講のほど渡らせ給ふ。内宴などいふ事にぞ、かくはありけると、古き例も面白くこそ。上達部、皆いろ〳〵の衣を出す。右大將（通基）、魚綾の山吹の衣著たまへり。笏に

歌を持ち具したまふ。内のうへ（後宇多）の御歌は、殿（兼平）ぞ書き給ひける。

行末をなほ長き世とちぎるかな
　やよひに移る今日の春日に

新院（龜山）の御製は、内大臣（家基）書きたまふ。

百色と今や鳴くらむうぐひすも
　こゝのかへりの君が春經て

春宮（伏見）のは、左大將（兼忠）に書かせらる。

かぎりなき齡はいまだ九十（こゝのそぢ）
　なほ千世遠き春にもあるかな

製に應ずと、上文字載せられたるも、内宴のためしとかや。

次々（尼）例の多けれど、むつかしくて、洩らしつ。春宮大夫（實兼）

こそ、いとうけばりて、めでたく侍りしか。

代々の跡に猶ほ立ちのぼる老の波
　よりけむ年は今日のためかも

【行末をなほ長き世と云々】「やよひに移る今日の春日」は三月一日のこと。この長閑な春の彌生の初に、九十の賀をして、なほ行末長く、ながらへ榮えることを契る、實にめでたいことであるの意。

【百色と今や鳴くらむ云々】「百色」は「百年」の誤であらう。「こゝのかへり」は、十づつ九度くりかへる意で、九十のこと。「君が春經て」は、「鶯も君が九十の春を經て」の意。一首の意は、かうして九十の春を迎へたについては、更に又春を迎へて、百年の齡を重ねることであらうと、鶯も祝ひ鳴くことであらう。

【かぎりなき齡はいまだ云々】君が齡は限りなきものであるのに、まだやつと九十になつたばかりであるから、なほ千世までは遠いことであるの意。「春」は丁度その時が春であり、又一年の初めで、望ゆたかな時であるから、いつたのである。

●鞠のかゝり　蹴鞠の場所。○紫の匂　上紫に薄紫を重ねたもの。○山吹　表薄朽葉、裏黄。○青鈍　表裏共に濃き縹。○柑子　表裏共に濃き朽葉。○紅梅　表紅梅、裏蘇芳の打（異説あり）。○櫻萌黄　表萌黄、裏赤花。（異説あり）。○女院の御あかれ　女院の御方の意。即ち女院の御方の女房はかうであつたの意。○内の御方　禁中ら女房。○松がされ　表萌黄、裏紫（異説あり）。○白格子　白地に格子、即ち碁盤の目のやうな形を織り出した絹。○裏山吹　表黄、裏紅。○葡萄染に白筋　薄紫に白の筋あるもの。○柳　表白裏薄青。○目もあやなる　目もきらめくばかり。○蓮花王院　二一八頁を見よ。○貫首　藏人頭。○藤　表薄紫、裏青、中べ薄青。○念なき事　殊念なこと。○おしこみて　こみあつて。○いづれともなく云々　どの人にといふことなく、彼の人にも此の人にも目が移り、見迷ふをいふ。○かたちもけしきも　容貌も様子も。○めやすく　見苦しからず。○もてつけたり　とりも色もまじらず。心々にかはりて、いみじうぞ侍りける。後嵯峨院、蓮花王院御幸ありし時、兩貫首（具兵・忠方）同じやうに、藤の下重・山吹のうへの袴なりしをば、いと念なき事に、世の人もいひ侍りしにや。御方々の女房ども、八十餘人おしこみて候はるゝ、いづれともなく目移りして、いみじう、かたちもけしきも、めやすくもてつけたり。後鳥羽院建仁の例とて、新院（山）御上鞠三足ばかり立たせ給ひて、落されぬ。内の上（後宇）御直衣・紺地の御袴、初は御草鞋を奉りけれど、後には、御沓・片足變りの御鞾、藍白地竹・紫白地桐の紋、紫革の御結緒なり。春宮（見）御直衣・紫の御指貫・同じ色革の御襪、新院（山）、織物の御直衣・御指貫・紋なき紫の御襪、關白殿（鏡）紋なき燻革、内の大臣（基）紫革に

【製に應ずと云々】東宮の御歌に、「應製」と書き、御名の下に「上」とあつたのも、内宴の例だとかいふことだ。○「製に應ず」は、所謂「應制」で、天子の命により、詩歌を詠進することをいふ。

【代々の跡に猶ほ立ちのぼる云々】古來長壽の人も多いが、それらの人にも立ちこえて、かく長壽を保たれたのは、今日のめでたい日の爲であらうの意。○新後撰集には、この「立ちのぼる」を「立ちこゆる」とある。波の縁語としては、その方がよからう。「寄る」も波の縁語である。

その後、東向の鞠のかゝりある方へ渡らせ給ふ。御方々の女房、いろ〳〵の衣、昨日には引きかへて、珍しき袖口を、思ひ〳〵に押し出でたり。紫の匂・山吹・青鈍・柑子・紅梅・櫻萌黄などは、女院の御あかれ、内（後宇）の御方は、内侍典侍より下、皆松がされ、白格子・裏山吹、院の御方、葡萄染に白筋・樺櫻の青筋、春宮（見伏）の女房、うへ紫格子・柳など、さまざまに、目もあやなる清らを盡されたり。同じ紋

なして居る。○御上鞘三足ばかり云々　上鞘は二五七頁を見よ。新院が上鞘の役を三度勤められた。○草鞋　天子御料の香。木履（きぐつ）の一種插鞋とも書く。○香　鼠鞘の爲の香。○片足變りの御襪　左右半分づつ模樣の變つた襪襪は香の下に穿くもの。○藍白地竹　白地の革に藍色で（若しくは其の反對）竹の模樣なつけたもの（襪の模樣）で。○紫白地桐の紋　白地の革に紫で桐の紋をつけたもの。○結緒　襪を結ぶ紐。○燻革　松葉の烟で燻べて色づけた革。○錦皮　紫地の革に白の紋を出したもの。○各〻けぢめ云云　その染方で各〻區別がつくであらう。○はなれぬ中

菊をぬひたり。藤大納言爲氏無紋の燻革、その外、いろ〳〵の錦皮・藍皮・藍白地、各〻けぢめわかるべし。爲兼とは、爲氏の大納言の弟、兵衞督爲教といひしが子なり。爲道は大納言（爲繼）の孫、爲世の太郎なり。はなれぬ中にて、いといたくいどみかはしたり。內の上（後宇多）は、白骨の御扇、左の御手に持たせ給ひて、花のいみじく面白き木蔭に、立ちやすらひ給へる御かたち、いとゆゝしきまで、清らに見え給ふ。飽かず名殘多く思さるれど、春の司召・御燈などいふ事どもあれば、行幸は今宵歸らせ給ふ。御贈物に御本まゐる。

【後鳥羽院建仁の例】後鳥羽院は鼠鞘を好まれたと見え、之に關して書かれた「後鳥羽院御記」などいふものもあるが、こゝにいふ「建仁の例」は何時の時か分らない。併し「承元御鞘記」といふものがあつて、それには、「承元二年四月十三日壬子、天晴時屬二清和一、世樂二靜謐一、太上天皇

親疏の關係あるをいふ。○いどみかはし　競爭。○白骨の御扇　骨に漆を塗らず、白いまゝにした扇。○春の司召　春に行はれる京官の除目。○御燈　三月三日、天子の北斗をまつり燈明を奉られる儀式。●午の時　正午。○篷道　道に篷を敷くこと。○御くゝり　あげて「くゝり」は指貫の裾につけた緒。之を踵の上で結ぶをいふ。○堂々　西園寺の中にある處々の佛堂。○もたまへり　持ち給へり。○妙音堂　一五六頁を見よ。○遲き櫻　普通の櫻よりも後れて咲くもの。○皆渡らせ給ふ　本院以下著座された。○御遊の具　樂器。○採桑老　もと巴陵三江口の商客の謠つた三州

（後鳥羽）饗務の餘閑に、前大相國（賴實）郁芳里第に臨幸し給ひて、鼠鞘の宴あり」とある。或は是れの事かも知れない。

明くる日（三月）午の時ばかり、寢殿より西園寺まで篷道敷きて、兩院（後深草・龜山）御烏帽子直衣、春宮（伏見）御くゝりあげて、堂々拜ませたまふ。左衞門督（公衡）、新院（龜山）の御佩刀もたまへり。妙音堂に御參りあるに、遲き櫻一木ほころびそめて、今日の御幸を待ち顏なり。佛の御前に、かりそめの御座ながら、皆渡らせ給ふ。廂に上達部つきて、御遊の具召す。笛花山院大納言（雅長）、笙左衞門督（公衡）、篳篥兼行、春宮（伏見）御琵琶、大夫（實）筝、太鼓具顯、鞨鼓範藤、盤涉調にしらべとゝのへて、採桑老・蘇合・白柱・千秋樂など、いみじう面白し。うるはしき事よりも、なか〳〵艷なり。兼行、「花は上苑に明か

歌の曲によつて作つた舞。○蘇合　蘇合香。印度の樂。○白柱・千秋樂　共に舞なき樂。○うるはしき事より云々　端嚴といふよりは、寧ろ優艷である。○もてはやされて　その朗詠の爲に管絃の音が一層はえて。○そゞろ寒きまで　ゾッとして身にしむほど。○歸らせ給ひても　妙音堂から寢殿へ。○御船に奉りて　寢殿の前にある池に浮べた船　寢殿の圖參照。○橋につけられたり　橋の下につなぐ。○ありつる妙音堂の調子　前に妙音堂で奏せられた盤涉調。○五帖　帖は樂の遍數をいふ。○變態繽紛　出所不明。○水の底も云々　水の底にも聲があらかと思ふばかり、身の毛もよだち、ゾッとするほどである。○中島　池の中にある島。○舊苔　古い苔。○いとくらがりたる　松の蔭になつて薄暗く見えること。○遠きさかひ　人離れた仙境などをいふ。○瀧つ岩根　瀧の所にある岩。○仙人の洞　仙人の住んで居る洞穴。○たちぬ起居。但し波といふより「立つ」といふ。

なり」と、打ち出したるに、いとゞ物の音もてはやされて、面白し。兼行「山又山」など、うち誦じたるに、「變態繽紛たえもいはず聞ゆ。具顯・範藤など、「羅綺の重衣」と、二返ばかりいへるに、「情なき事を機婦にねたみ」と、本院（土御門）加へ給へば、新院（龜山）御聲たすけ給ふほど、そゞろ寒きまで艷なり。歸らせ給ひても、また昨日の花の蔭にて、舞御覽ぜられつゝ、それよりやがて、御船に奉りておし出でたれば、遙かなる海づらに、漕ぎ離れたらむ心地して、いとをかし。小き船に上達部乘りて、橋につけられたり。ありつる同じ人々つかうまつる。堂の調子をうつされて、ありつる妙音春宮（見伏）また御琵琶、箏の琴は右衞門督といふ女房、御船にまゐれるに彈かせらる。船の中のしらべは、いと艷なり。蘇合の五帖・輪臺・青海波・竹林樂・越殿樂など、幾返ともなく

「二千里の外の心地こそすれ」などの給ひて、新院（龜山）、
　雲の波烟の浪をわけてけり
誰にかあらむ、女房の中より、
　ゆくすゑ遠き君が御代とて
みて見渡さるゝほど、仙人の洞も、かくやとぞおぼゆる。
ひに臨める心地するに、めぐれる山の瀧つ岩根、遙かに霞
小鳥ども、みだれ飛ぶけしき、何となくをかし。遠きさか
くらがりたる松が枝さしかはせる岩のたゝずまひ、いと
舊苔年古りたる松が枝さしかはせる岩のたゝずまひ、いと
で、身の毛立ちぬべく聞ゆ。中島に御船さしとめて見れば、
り」と、兩院（後深草龜山）おそばしたるに、水の底もあやしきま

春宮大夫(實維)、
　昔にもなほたちこゆる御調物
具顯の中將、
　くもらぬかげも神のまに〳〵
春宮(見伏)、
　九十になほもかさぬる老のなみ
本院(後深草)、
　たちゐ苦しき世のならひかな

【花は上苑に明かなり】和漢朗詠集(花)に「花明二上苑一。輕軒馳二九陌之塵一。猿叫二空山一。斜月瑩二千巖之路一。」(張讀)とあるもの。「上苑」は漢の武帝の開いた上林苑。「輕軒」は輕く走りゆく車。

【羅綺の重衣】同書(管絃)に「羅綺之爲二重衣一。妬二無情於機婦一。管絃之在二長曲一。怒二不閑於伶人一。」(菅原道長)とあるもの。「羅綺」はウスギヌとアヤギヌ。「重衣」は重い衣。

【情なき事を機婦にねたみ】前項に引用したもの。卽ち具顯等に和して歌はれたのである。

【山又山】同書(山水)に「山復山。何工削成青巖之形。水復水。誰家染出碧潭之色」。(大江澄明)

【二千里の外の心地】白氏文集(卷一四)「三五夜中新月色、二千里外故人心。」

【雲の波烟の涙をわけてけり】連歌の發句。次の「ゆくすゑ云々」は、この雲烟萬里を隔つる意より「行末遠き」といひ、次は又、この盛んな君が代といふより「昔にも猶ほ立ち勝つた」といふ。以下かうして皆前の句の意味又は語調から續く。但し全體を通じての意味はない。

暮れはつる程に、釣殿(つりどの)へ御船寄せて、おりさせ給ひぬ。春宮(見伏)今宵(こよひ)かへらせ給へば、御贈物に和琴(わごん)一奉(たてまつ)らせたまふ。まことや、准后(三貞)にも、惠果和尚の三衣(さんえ)、紺地の錦に

●御贈物　大宮院より東宮への。○惠果和尚　唐の青龍寺の僧。弘法大師の師。○三衣　僧の著る大衣・七條・五條の袈裟の總稱。○掃部寮　宮中

の鋪設・洒掃等の事を掌るもの。併し火をともすは主殿寮（とのもづかさ）の職であるから、こゝは誤であらう。○火しげう　「火しげく」の音便。火を澤山。○この御賀　この九十の御賀。○かたくな　愚か。

●待遠に　東宮（伏見）の踐祚を。但し東宮は後深草の皇子である。○いとほしく　氣の毒に。○東　鎌倉。○一めぐりの佛事　一周忌の佛事。○いかめしう　嚴かに。○檜扇　檜の薄板を絲で綴ぢて作つた扇。○つま　端。

包みて、白銀の箱に入れてまゐらせらる。いづれも、大宮院（後宇多）位に卽かせ給ひて、十三年ばかりにやなりぬらむ。本院（後深草）待遠におぼさるらむと、いとほしく推し量り奉るに

居たる樣も、なまめかしう、みやびかなり。こゝにもかしこにも、この御賀の事ども、書きつけ記す人のみぞ多かめれば、片端だに、いとかたくならむと、あさまし。

【こゝにもかしこにも、この御賀の事ども云々】　この御賀の事について、こゝにもかしこにも書き記す人が澤山ある樣子だから、私などは申さなくてもよいのであるが、只少しだけ申しました。併しその少しの事さへ、かたくなな事だらうと思へば淺ましい。

何となく過ぎ行くほどに、弘安も十年になりぬ。この御門

や、例の東（あづま）より奏する事あるべし。新院（龜山）の御方ざまには、心細うきこえたるを、院（龜山）御覽じて、返しにのたまふ。

の二位殿失せにしかば、一めぐりの佛事に、龜山殿へおはしまして、いかめしう八講（はっかう）行はせたまふ日、雪いたう降りければ、九條三位隆博、檜扇（ひあふぎ）のつまを折りて、

跡とめてとはるゝ御代の光をや
　雪の中にもおもひいづらむ

女房の中にきこえたるを、院（龜山）御覽じて、返しにのたまふ。

なき人のかさねし罪も消えねとて
　雪のうちにも跡をとふかな

【本院待遠に云々】　後深草が伏見の御踐祚を待遠しく思はれるだらうと、鎌倉の方で、推し量り奉つてか、例の通り天皇御讓位の事を奏上

●十月　二十一日。〇もとのうへ　先帝。この語一本なし　〇うるはしく　端正。〇のどめたる樣　ゆつたりとした風「おぼして」は「おはして」の誤であらう。〇すくよか　しつかり。〇あへなく　はりあひなく。〇すげなく　つれなく　〇天下　天下の權。〇世の中おしわかれて　天下の勢力が御深草と龜山と二つに分れること。

【跡とめてとはゝ〳〵御代の云々】かうしてわざ〳〵訪れて來て、菩提をとぶらはせ給ふ院の御恩を、雪の下の靈も有りがたく思ふことであらう。「跡とめて」は、跡を尋れて。雪の緣語である。

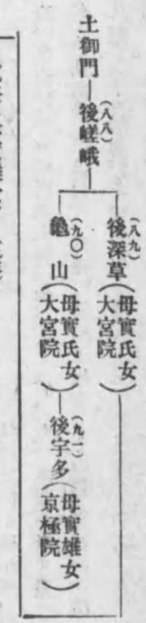
【なき人のかされし罪も云々】亡き人の罪障消滅の爲、かうして雪の降り積む中にも、法事をして、菩提をとぶらふ事である。「消ゆ」も雪の緣語。

よろづ飽かず思さるゝほどなれど、その年の十月におりゐさせ給ふ。もとのうへ（後宇多）は、廿一にぞならせ給ひける。御本性（ほんじやう）もいとうるはしく、のどめたる樣におぼして、すくよかに、御才（ざえ）もかしこう、めでたうおはしませば、御政事なども、やう〳〵（龜山）ゆづりや聞えましなど思されつるに、いとあへなくうつろひぬる世を、すげなく新院（龜山）は思さるべし。春宮（伏見）位に卽き給ひぬれば、天下本院（後深草）におしうつりぬ。世の中おしわかれて、人の心どもも、かゝるきはにぞあらはれける。今の御門（伏見）も、故山階（やましな）の大臣（實雄）の御孫（うまご）にてわたらせ給へば、かの殿ばらのみぞ、いづ方にも、すさめぬ人にておはしける。

【御政事なども、やう〳〵ゆづりや云々】後宇多帝は、かく立派な方であるから、當時院政を執つて居られた龜山院も、やがてその政權を讓らうかとも思つて居られたところが、かうして俄かに張合なく移り變つた世の中の有樣をすげなく思はれるだらう。

【今の御門も故山階の大臣の御孫にて云々】後深草院の流が所謂持明院流、龜山院の流が所謂大覺寺流であるが、左の系圖の示す通り、後宇多・伏見兩帝とも實雄の外孫に當つて居る。この爲、實雄の一門は何方に對しても勢力があつたのである。

〇かゝるきはに　かういふ場合に。〇かの殿ばら　實雄の後深草一族。〇いづ方にも　後深草派にも龜山派にも。〇すさめぬ　見捨てられない。



●官廳　太政官の正廳。○かへりなり給ひき　關白に。○しげう　度々。○太上天皇三人　後深草・龜山・後宇多。○いと珍しく　太上天皇が同時に三人も居られるのは。○その御はらからの姫君　愔子の妹。卽ち御門には叔母に當る。○御傍　愔子の。○いと忍びたる御むつび　ひそかに寵愛せられること。○さゝめく　ひそかに噂する。○さばかりうけばりては　そんなに押しきつては。○えしもやおはせざらむ　さうは、ようせられないであらう。○かしづき

第十三　今日の日影

正應元年三月十五日、官廳(くわんのちやう)にて御卽位(伏見)あり。このほどは香園院(かうをんゐん)の左の大臣(師忠)、關白にておはしき。その後、近衞殿(家基)、又九條左大臣殿(忠教)、その後又近衞殿かへりなり給ひき。猶ほ後に歡喜園院(兼忠)など、いとしげうかはり給ふ。おりゐの御門(後宇多)を、今は新院と聞ゆれば、太上天皇三人世におはします頃なり。いと珍しく侍るにや。御門(伏見)の御母(愔子)三位したまふ。その御はらからの姫君(季子)　御傍にさぶらひ給ふを、上(伏見)いと忍びたる御むつびあるべし。東二條院(公子)の御例にやなど、さゝめく人もあれど、さばかりうけばりては、えしもやおはせざらむ。三位殿(愔子)御兄の公守

大切に養育する。〇外ならぬ御契　一方ならぬ御寵愛。公守の女をも寵愛せられたまいふ。〇この君　公守の女。〇きしろふ　競爭する。〇裳著　女子の成人して始めて裳を著する儀式。男子の元服に當る。〇あらまし　豫定。〇うちつけに　露骨に。〇さぶらふ人々　お供の人々(侍女)。〇おしなべたらぬ限り　並々ならぬ者ばかり。〇大宮院の御まゐり　一五三頁を見よ。〇御腰ゆはせ　裳の腰を結ぶこと。元服の加冠に當る。〇時なりぬれば　時刻となると。〇本所の前驅　里方から附けられた前驅。〇續松　松明。〇つらい事　つらい事。厭な事。〇むづかしくてなむ　面倒だから言はぬの意。〇めやすく　醜からず。〇親うち具し　兩親揃つて。〇少しもかたほなるなく　醜いとか親がないとか、少しでも不完全なやうな事はなく。

の大納言の姫君も、稚くよりかしづきて候ひ給ふ。それも外ならぬ御契なるべし。この君をぞ、父の殿(公守)も、いとうるはしきさまにても、參らせまほしうおぼしつれど、西園寺の大納言實兼の姫君(子)、いつしか參り給へば、きしろふべきにもあらず。その年(正應元)六月二日、入内(母子)あり。その夜まづ御裳著したまふ。先の御代(後深草)にも、あらましは聞えしかど、いかなるにか、さもおはせざりしに、いつしか、かうもありけるは、猶ほおぼす心ありけるなめりとぞ、うちつけに、ひが〳〵しういひなす人も侍りける。この姫君(子)の母北方は、三條坊門通成の内の大臣の女(顯子)なり。さぶらふ人々も、おしなべたらぬ限り、えりとゝのへ、いみじう清らにおぼし急ぐ。よろづ、人の心も、昨日に今日は

まさりのみゆくめれば、いや珍らに、このましうめでたし。大かた大宮院(子)の御まゐりの例を思しなずらふべし。院(後深草)の御子に、これも又なり給ふとて、東二條院(公子)御腰ゆはせ給ひて、時なりぬれば、唐廂の御車にたてまつりて、上達部十人・殿上人十餘人・本所の前驅二十人、續松と もして、御車の左右にさぶらふ。出車十輛、一の左に母北方(子)の御妹一條殿、右に二條殿、實顯の宰相中將の女を、大納言(實雄)子にし給ふとぞ聞えし。二の車の左に久我の大納言雅忠の女、三條とつき給ふを、いとからい事に歎き給へど、皆人先だちてつき給へれば、あきたるまゝとぞ、慰められ給ひける。右に近衞殿、源大納言雅家の女なり。三の左には大納言の君、室町の宰相中將公重の女、右に新大納

言、同じき三位兼行とかやの女なり。四の左には宰相の君、坊門三位基輔の女、右は治部卿兼倫の三位の女なり。それより下は、例のむづかしくてなむ。多くは本所の家司、何くれが女どもなるべし。童・下仕・雜仕・はした物に至るまで、髪かたちめやすく、親うち具し、少しもかたほなるなく、とゝのへられたり。

【東二條院の御例にや】後深草院の東二條院公子を中宮とぜられた例をいふ。左の系圖を見よ。

公經
- 實氏
  - 大宮院姞子（後嵯峨后）
    - 後深草
    - 龜山
  - 東二條院公子（後深草后）
- 實雄
  - 玄輝門院愔子（後深草妃）
    - 伏見
  - 顯親門院季子（伏見妃）

【この君をぞ父の殿も云々】父公守もこの姫君を立派にして參らせようと思つて居たが、實兼の方の女が參つたので、それと競爭するわけにも行かなかつた。

【先の御代にも云々】前代卽ち後宇多の時、入内の豫定であるやうに聞いて居たが、どういふわけか、さうならなかつたのに、いつか又かうして當代に入内あるのは、矢張り當代に心を寄せて居るのだらうと、餘み言ひなす人もあつた。

【よろづ人の心も云々】すべて人の心も日に〳〵只華美になつてゆくやうだから、今度の入内も實に立派なことであつた。

【院の御子にこれも又なり給ふ】鏡子の後深草の猶子とならるゝ事をいふ。

【實顯の宰相中將の女を云々】その二條殿といふのは、實顯の女を實兼が子にして居るのだといふことであつた。

【三條とつき給ふを云々】この雅忠の女は三條といふ呼名であつたが、そんな名は厭だといつた。併しもう一條・二條といふ名はついて、三條といふのがないから、つけたまでだといふ意。

●御消息　天皇よりの御書。○自ら遊ばしけり　自分で書かれた。○包まれためり　包まれたるめり。○包むやう知らず　包み方を知らない。○花山　花山院中納言家教。○心得たる　消息の包み方を知つて居る。○遣はして　花山にとつゞく。卽ち家教に頼んだのである。○この具したる女　序に見えた尼の連れて居る女。○蘇芳のはり　蘇芳色の張つたもの。○一重がさね　女の裝。單を二つ捻り重ねたもの。○濃き裏　濃き紅の裏。○引倍木　柏(おこめ)の裏を取放ち、表許りにしたもの。○地摺　白の地に綠色などで模樣を摺つたもの。○たてまつる　著けて居られる。

その暮つ方、頭中將爲棄朝臣、御消息(みせうそこ)もてまゐれり。內の上(見)自ら遊ばしけり。

雲の上に千代をめぐらむ初めとて
今日の日影もかくや久しき

包まれためり。關白殿(忠)、「包むやう知らず」とかやの給ひけるとて、花山(教)に心得たる女、序に見えた尼の連れて居る女。蘇芳のはり一重がさね・紅の引倍木・濃き裏・蘇芳の御表著・赤き袴・蘇芳の表著・青朽葉の唐衣・薄色の裳、三重だすき、上下同じ樣なり。參り給ひぬれば、藏人左衞門權佐俊光うけたまはりて、手ぐるまの宣旨あり。殿上人參りて、御車引き入れ、御兄の中納言公衡別當兼ね給へり。上(主)の御甥の左衞門督通重、御兄になずらふるよし聞ゆれば、御屏風・御几帳たてらる。晝の御座へ御車寄せらる。御衾、二位殿(子)まゐらせ給ふ。御臺まゐりて、やがて夜のおとゞへまうのぼり給ふ。この御衾は、京極院(子)のめでたかりし例とかや聞えて、公守の大納言沙汰し申されけるとかや承りしは、まことにや侍りけむ。三日の夜の餠も、やがてかの大納言(公守)沙汰し申さる。內(見)の上の、夜のおとゞへ召して入らせ給へる御草鞋(さうがい)をば、二位殿(子)取りて出でさせ給ひて、大納言

○青朽葉　表經青緯黃、裏青。○薄色　薄紫。○三重だすき　三條の斜線を打ちちがへにした模樣。○上下　上臈も下臈も。○手ぐるまの宣旨　螢車に乘つて宮門內に入るを許される宣旨。○別當兼ね給へり　中納言で檢非違使別當を兼ねるをいふ。○晝の御座　清涼殿にある天皇常の御座所。○御衾云々　御衾をおほふをいふ。○御臺　供御。○夜のおとゞ　清涼殿にある天皇の御寢所。○三日の夜の餠　婚禮後三日目に祝の餠を奉ることゝ。○沙汰　取り扱ふ。

殿(實兼)と、二人の御中に、抱きて寢給ふと聞えし。さきざきも、さる事にてこそは侍りけめ。

【雲の上に千代をめぐらむ云々】禁中に千代もめでたくおはしますべき初めといふので、今日の日影も、かく暮れ難く久しいのであらうかの意。「めぐる」は「日影」の緣語。猶ほ日の暮れ難きには、夜の待遠しいといふ意も含んで居るのであらう。

【花山に心得たると云々】家教が、その包み方を知つて居るといふことを聞かれて、そこへ遣はして、包ませられたと聞きましたと、尼が語ると、又その連れて居る女が「何日ぞやは、その時の御使が實教の中將だとおつしやりましたよ」といふ。つまり尼の語を供の女が遮つて、以前の話とは違つて居ると非難したのである。但しこれは、興味を持たせる爲に、わざとかう書いたので、供の女のいふ方が正しいのである。

【手ぐるまの宣旨】女御に對して宣旨があつたのである。そしてそれをお傳へしたのが俊光である。

【上の御甥の左衞門督通重云々】先づ系圖を示すと、

●露顯　三四一頁を見よ。○上渡らせ給へば　女御の所へ○袖口ども心ことにて云々　女房の樣。○二藍　紅花と藍とで染めた物。○女御のは　女御の陪膳は。○唐の羅　支那から渡つた羅。○濃き綾　濃き紅の綾。○ねびとゝのほ

中院通成—通頼—通重
　　—顯子(實兼)—公衡
　　—鐘子

顯子の甥に當る通重は、實は鐘子とは從兄弟の間柄であるが、兄に準ぜられて、御屏風や御几帳を立てられたの意。

【二人の御中に抱きて寢給ふ】聟の沓を舅姑が中に抱いて寢るのが、當時婚姻の習慣であつたのである。

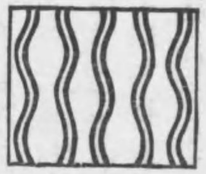
【さきざきもさる事にてこそは侍りけめ】これまでも、さういふ事であつたのであらう。

八日、御露顯(ところあらはし)とて、上(伏見)渡らせ給へば、袖口ども心ことにて、わざとなくおし出さる。今日は、各〻紅の一重がさね・青朽葉の表著・二藍(ふたあゐ)の唐衣なり。大納言殿(實兼)もさぶらはせ給ふ。上(伏見)も御臺(たい)まゐる。二位殿(顯子)御陪膳(はいぜん)、女御(鐘子)のは、一條殿つかうまつり給ふ。女御の君は蘇芳のはり一重がさ

り　年が行つて、何一つ缺點なきこと。（時に十八歳）、○御供　御門の。○打橋　建物から他の建物に渡る廊の土間に假に渡す板橋。○けしきばみ　樣子を作る。○内侍　内侍司の掌侍、○女官　官女の中稍〻身分低き者。○釜殿　**カナイドノ**ともいふ。内膳司の釜殿の御湯を掌る役人。賤しいもの。○下大所　下臺所　食物を調理する所。之を御覽になる儀式があるのであらう　そして其の儀式は「臺盤所の北の御壺云々」の句のやうにあるのであらう。併しこゝの所はよく分らない。更に再考することとする。○此方　女御の所。○萩の經青　表は青を經とし、蘇芳を横として織ね・紅のひへぎ・青朽葉の表著・赤色の唐衣・二重織物・唐の羅の御裳・濃き綾の御袴、御髪いとうるはしくて、盛りにねびとゝのほり給へる、いと見どころおほく、めでたし。御供に參り給へる人々、右大臣（忠教）・内大臣（忠基）・大納言左大將（雅忠）・花山院中納言（家教）・權大夫（公衡）、殿上人ども、あまた、こゝかしこの打橋・渡殿などに、けしきばみつゝ群れ居たるも、艶なる心地すべし。上達部の歡盃果ててのち、内（伏見）の御方御覽ぜらる。やがて東面より、女御（子）も御覽ず。二位殿（子）・一條殿・二條殿をはじめて、上﨟だつ人々、あまた候ひ給ふ。

り、裏は青色のもの。○生絹　練絹に對し、生絲織の綾ざる物。○引直衣　天皇・上皇に限つて著られるもの。○櫺子　菓子などを入れるもの　高坏の形で緣高く、内は朱漆外は黒漆で塗り、蓋あるもの　○得選　御厨子所の女官。○金の御器　金屬製の椀。○片口の銚子　銚子の口の一方にだけついたもの。○かけさせ給ふ　酒をつぐ。○今出川西園寺の邸。○ゆりたまふ　許され給ふ。○縫殿の陣　朔平門のこと。○よそほし　美しい。○勾當内侍　掌司四人中の上席のもの。奏請傳宣の事を掌る。○上人　殿上人、こゝは實教をいふ。○後朝の御使　婚儀の翌朝女の許へ文御簾の外にも、上達部あまたさぶらはる。いとはればれし。十四日、又内の上（伏見）入らせ給ひて、此方にて、始めて御酒きこしめせば、南面へ出でさせ給ふ。女御（子）蘇芳の御ひとへがさね・萩の經青の御表著・朽葉の御小袿、皆二重織物・綾の織物・生絹の御袴、御紋竹立涌を織る。上（伏見）は御引直衣、生絹の御袴、櫺子まゐる。御陪膳は一條殿、今日よりは、うちとけたる心地にて、女房ども、いろ〳〵の一重がさね・唐衣・さまざま珍しき色どもをつくして、生絹の袴に著かへたる、今少し見所そひて、なつかしき樣なり。得選櫺子をもてまゐる。次第に取り次ぎてまゐらす。金の御器、白銀の片口の御銚子、一條殿御陪膳、その後女御殿（子）も、御銚子にて、かけさせ給ふ事侍りけり。今宵二位殿（子）、今

出川へまかで給ひて、輦の宣旨ゆりたまふ。御送りには御子の公衡中納言・御甥の通重の左衞門督など、殿上人ども數多なり。縫殿の陣より出で給ふけしき、いとよそほし。まことや、御入内の夜の御使、勾當の内侍まゐれりし祿に、表著・唐衣をたまはる。御消息の御使にまゐれりし上人も、女の裝束かづきながら、歸りまゐりて、殿上の口に落し捨つ。主殿司ぞ取るならひなりける。後朝の御使には公貫中將なりし。公衡の中納言對面して、歡盃の後、これも女の裝束かづけらる。



立涌

【竹立涌】織模樣の名。圖のやうな波狀の縱線を連接せしめたものを「立涌」といひ、その間に種々の模樣を入れ、その模樣によつて、竹立涌・雲立涌・菊立涌などの名がある。

を遣はす使。○勸盃の後　使者に酒をすゝめた後。

●今出川の御家へまかで　里方へ歸つて居られたこと。○節會の儀式　立后の節會の儀式。○ひきうつし云々　萬事よく整へ設けて、式の日を待つて居られた樣。○今更ならぬ事なれど　今更事新しくいふべき事ではないが。○つひの御位　最後に上るべき位。○すがやかに　滯りなく。○御世のおぼえ　君の御寵愛。○渡りおはしまして　今出川

【女の裝束かづきながら歸りまゐりて云々】御消息の使に參つた實敎も、纏頭として女の裝束を貰つた。それを肩にかけ、捧げ持ちながら歸つて來て、殿上の間の入口の所に置いた。之を主殿司が取つて、又隨身などに渡すのが例である。

【後朝の使には公貫中將なりし云々】後朝の使に參つたのは公貫であつたが、この時は、公衡が對面して、勸盃の後、これにも女の裝束を纏頭として與へられた。

かくて八月二十日后に立ち給ふ。かねてより今出川の御家へまかで給ひて、節會の儀式、ひきうつし待ちとり給ふ樣、いとめでたく、今更ならぬ事なれど、父の殿も、つひの御位はさこそなれど、只今さしあたりては、未だ淺くおはするに、すがやかに后妃の位に定まり給ふ事、限りなき御世のおぼえと、めでたく見ゆ。大宮院・本院・東二條院皆渡りおはしまして、見奉り給ふさへぞ、やむご

となき。今日は紅のはり一重がさね・引倍木・女郎花の表著・二藍の唐衣・薄色の裳、すべて二十人、同じ色のよそひなり。この外、威儀の女房八人、白きはり一重がさね・濃き引倍木・同じはかま・女郎花の衣にてさぶらふ。いづれとなく、かたちども清げに、めやすし。

【つひの御位はさこそなれと云々】立派な家柄であるから、最後に高位に上ることは、いふまでもないが、只今の所では、まだ低い身分で居られるのに、かうして、御女が滞りなく、后妃の位に定まられたといふ事は、これこの上ない君の御寵愛の結果であると、めでたく思はれる。

その年の十一月八日ぞ、后の宮の御父(實)右大將になり給ひぬる。同じき廿五日、正二位したまふ。この程は、大嘗會・五節などのゝしる。前の御世にはひきかへて、中宮(子)・皇

(5)

殿へ來られて。○見奉り給ふ女御を。○女郎花　表經青縛黄に裏青。○すべて二十人女房をいふ。○威儀の女房威儀を整へる爲、居並ぶ女房。

●大嘗會云々　大嘗會だの五節だのといつて騒ぎ立てる。○前の御世　前代。○ひきかへて　違つて。○あかれ〳〵別々に。○推參の所多く

諸所の御殿で御酒宴がある。それらへ參るをいふ。

●朝覲の行幸　三五一頁を見よ。○いみじうみがかれて非常に綺麗に拂ひ清めて。○例のことごとしき唐の御船「ことごとしき」はたいさうな龍頭鷁首の船をいふ。○若宮　正慶元年三月三日降誕。○かしこき御宿世　すぐれてめでたい前世の因緣。○坊になど　東宮にしようかなど。○ひきよきぬる　「よく」(上二)は避けて横へ行く。折角の御

后(坊子)・宮・院だちも、あかれ〳〵に多くおはしませば、殿上人ども、推參の所多く、頭いたきまで、めぐりありく。その年の十二月に、御門の御母三位殿(子)、院號ありき。朝に准后の宣旨ありて、同じき日の夕に玄輝門院と申す。めでたくいみじかりき。

年かへりて、正應も二年になりぬ。よろづめでたき事ども多くて、三月廿三日鳥羽殿へ朝覲の行幸なる。本院(後深草)は、かねてより鳥羽殿におはしまして、池の水草かきはらひ、いみじうみがかれて、例のことごとしき唐の御船浮べられて、廿四日に舞樂ありき。廿六日にぞ歸らせ給ひける。さても去年の三月三日かとよ、經氏の宰相の女(子)の御腹に、若宮(後伏見)いできさせ給へりしを、太子に立て奉らせ給ふ。いと

(6)

希望が違つてしまつたこと。○魚味　二一三頁を見よ。

●紫宸殿の獅子狛犬　紫宸殿の御帳の前に左（獅子）右（狛犬）相對して置いてあるもの。○九日の夜　續史愚抄に「十日癸丑。今曉寅剋」○右衞門の陣　宜秋門。○女孺　掃除・

かしこき御宿世なり。中宮（鎧子）の御子にぞなし奉らせ給ひける。同じうは、まことにておはせましかばとぞ、大將殿（實兼）など思しけむかし。おりゐの御門（後宇多）も、御子あまたおはしませば、坊になどおぼしけるを、ひきよきぬる、いと本意なし。十月二十五日、一院（後深草）の御所にて魚味きこしめす。いとめでたき事ども、のゝしり過ぎもてゆく。

【同じうはまことにておはせましかばとぞ】　經氏の女に出來た若宮を中宮の猶子として、太子に立てられたのであるが、同じ事なら、それが中宮の御實子であつたらと思つたらうの意。

同じき三年三月四日・五日の頃、紫宸殿の獅子・狛犬、中より破れたる、驚きおぼして、御占のあるに、血流るべしとかや申しければ、いかなる事のあるべきにかと、誰も〳〵おぼしさわぐに、その九日の夜、右衞門の陣より、おそろしげ

指油などの雜事に服する女官その局は桂芳坊にあつたといふ。○やゝ　呼びかける聲。○鎧直垂　鎧の下に著る直垂、袖口及び袴の裾に括緒がある。○御よるぞ　寢て居られるか。○いづくぞ　夜の御殿は何處かの意。○南殿　紫宸殿。○春日殿　帝の御母玄輝門院の御所。春日萬里小路○玄象　琵琶の名。○鈴鹿　和琴の名。○常磐井殿　富小路の東、春日の南。御深草院の仙洞。○辛くして　やつと○中宮の御方の侍の長　中宮の御所を護る武士の長。西園寺家の侍である。○ひしめく　揉合ひ爭ふ。○合する聲　此方の鬨の聲に對して敵方の合せる聲。○僅かに聞えけれ

なる武士三四人、馬に乘りながら、九重の中へはせ入りて、上にのぼりて、女孺が局の口に立ちて、「やゝ」といふものを見あげたれば、丈高くおそろしげなる男の、赤地の錦の鎧直垂に、緋縅の鎧著て、只赤鬼などのやうなる面つきにて、「御門はいづくに御よるぞ」と問ふ。「夜のおとゞに」といらふれば、「いづくぞ」とまた問ふ。「南殿より東北の隅」と敎ふれば、南ざまへ歩みゆく間に、女孺内より參りて、權大納言典侍殿・新内侍殿などに語る。上（伏見）は中宮の御方に渡らせ給ひければ、對の屋へ忍びて逃げさせ給ひて、春日殿へ、女房のやうにて、いと怪しき樣をつくりて、入らせ給ふ。内侍、劒璽を取りて出づ。女孺は、玄象・鈴鹿取りて逃げけり。春宮（後伏見）をば、中宮（鎧子）の御方の按察殿抱きまゐらせ

ば　これで人數の少いことが分る。○ひきかなぐりて　荒らかに引きのけて。○かなはじと　敵の方が。○太郎なりける男　淺原の長男。○御帳の内　晝の御座の御帳臺の内。○大床子　清涼殿の母屋の御座所の傍にある臺。脚は高さ二尺許り御膳を聞召す臺である。○そのまゝながら　自害して腸を出したまゝ。○雲の上　禁中。○中宮の晝の御座　中宮の御所の晝の御座所。○腰輿　手で舁く輿。○兵衞の陣　陰明門。○ゆすりさわぐ　騷ぎたてる。○言の葉もなし　いはん方なしの意。

て、常磐井殿へ徒歩にて逃ぐ。その程の心の中ども、いはむ方なし。この男をば、淺原の某とかいひけり。辛くして夜のおとゞへ尋ね參りたれども、大方人もなし。中宮の御方の侍の長景政といふもの、名のり參りて、いみじく戰ひ防ぎければ、疵(淺原)かうぶりなどして、ひしめく。かゝる程に、二條京極の篝屋備後守とかや、五十餘騎にて馳せ參りて鬨をつくるに、合する聲僅かに聞えければ、心安くて内にまゐる。御殿どもの格子ひきかなぐりて亂れ入るに、かなは(淺原)じと思ひて、夜のおとゞの御茵の上にて、淺原自害しぬ。太郎なりける男は、南殿の御帳の内にて自害しぬ。弟の八郎といひて、十九になりけるは、大床子の脚の下に伏して、寄る者の足を切り〳〵しけれども、さすが數多して搦めむ

とすれば、かなはで自害すとて、腸をば皆繰り出して、手にぞもたりける。そのまゝながら、いづれをも六波羅へかき續けて出しけり。ほのぼのと明くる程に、内(伏見)・春宮(後伏見)、御車にて、忍びて歸らせ給ひて、晝つ方ぞ、又更に春日殿へなる。大方雲の上けがれぬれば、いかゞにて、中宮の晝の御座へ腰輿寄せて、兵衞の陣より出でさせ給ふ。春宮(後伏見)は絲毛の御車にて、又常磐井殿へわたらせ給ふ。中宮(鎌子)も春日殿へ行啓なる。世の中ゆすりさわぐさま、言の葉もなし。

【南殿より東北の隅】夜の御殿は清涼殿の北の間であるから、紫宸殿からは西北にあたる。わざと反對の方角を敎へたのであらう。

【篝屋備後守】「篝屋」は當時都警京固の爲においた武士の宿所。常に篝をたいて居たよりいふ。備後守はその守護人の一人。

●尋ね沙汰する　詮議する。○實盛　藤原公泰の子。○鯰尾　形によつてつけた名。○いひあつかふ　噂する。○心合せ　同意。○世をかたぶけ　朝廷を覆す。○なだらかにも云々　もしおだやかにして居られたら、もつとひどい事が起るかも知れません。○いとほしう　氣の毒に。○いかでかさまではあらむ　ナニ、それ程の事はあるまい。○實ならぬ事　眞實ならぬ事。○きびしき事ども　伏見帝よりの嚴重な敕諚。○聞ゆれば　中院及び新院に。○あわたゞしきやうに　危急に迫る。○いかゞはせむにて　何とも仕方がないので。○しろしめさぬよし　今度の事件には關係のない由。

【淺原自害しぬ】　淺原の事については、保暦間記に左の如くある。「同（正應）三年三月十（三イ）日、甲斐の國小笠原一族に源爲頼といふ者あり。（淺原八郎と號す）。所領なんども得替して、强弓大力なりければ、諸國にて惡黨狼藉を致す。何處にても見合はむ所にて誅すべき由諸國へ觸れらる。叶ひ難きによつて、如何なる企にやありけむ、内裏へ參りて、夜半に紫宸殿に籠りけり。

この事、次第に六波羅にて尋ね沙汰するほどに、三條の宰相中將實盛も召し捕られぬ。三條の家に傳はりて、鯰尾（なまづを）とかやいふ刀のありけるを、この中將（實盛）、日頃持たれたりけるにて、かの淺原自害したるなどいふ事ども出できて、中院（山蔭）も、しろしめしたるなどいふ聞えありて、心憂く、いみじきやうに、いひあつかふ。いとあさまし。中宮（予繼）の御兄權大納言公衡、一院（後深草）の御前にて、「（公衡）この事は、猶ほ禪林寺殿（山蔭）の御心合せたるなるべし。後嵯峨院の御處分（そうぶん）を引きたがへ、あづまより、かく當代（伏見）をもする奉り、世をしろしめさする事を、心よからず思すによりて、世をかたぶけ給はむの御本意（ほい）なり。さて、なだらかにもおはしまさば、まさる事や出でまうでこむ。院（山蔭）を先づ六波羅に遷し奉らるべきにこそ」など、かの承久の例も引きいでつべく申し給へば、いといとほしう、あさましと思して、「（後深草）いかでか、さまではあらむ。實（じつ）ならぬ事をも、人はよくいひなすものなりかし。故院（後嵯峨）のなき御影（かげ）にも、思さむ事こそいみじけれ」と、涙ぐみて、のたまふを、心弱くおはしますかなと見奉り給ひて、猶ほ内（伏見）よりの仰など、きびしき事ども聞ゆれば、中の院（山蔭）も、新院（後宇多）もおぼしおどろかせ給ふ。

●禪林寺殿　京都上京區南禪

いとあわたゝしきやうになりぬれば、いかゞはせむにて、しろしめさぬよし誓ひたる御消息など、あづまへ遣されて後ぞ、事しづまりにける。

【三條の家に傳はりて云々】　この三條の家に代々傳へて居る鮫尾といふ刀があつて、實盛も平生は之を持つて居たが、かの淺原が自害した刀が、その鮫尾であつたので、忽ち嫌疑がかゝつたのである。

【中院もしろしめしたるなどいふ聞え】　この淺原の一件は龜山院も與り知られて居るといふ評判があつた。

【かの承久の例も引きいでつゝ云々】　承久の亂に、後鳥羽・土御門・順德の三院を遠流に處したやうに（新島守の章參照）、今度も龜山院を何處かへお流し申さうといふやうな事を公衡が言つたのである。

【故院のなき御影にも云々】　若し龜山院を流すやうな事もあつては、亡き後嵯峨院の御靈も、どんなに歎かれることであらうかの意。

さて九月の初つ方、中の院（山莊）は御髮おろさせ給ふ。いとあはれなる事ども多かるべし。禪林寺殿にて、やがて御如法經など書かせ給ふ。一院（後深草）の世の中恨み思されし時、既にと聞えしは、さもおはしまさで、かくすがやかにせさせ給ひぬる、いと定めなし。しばしは禪僧にならせ給ふとて、綠衫の御衣に、掛落といふ袈裟かけさせ給へり。四十一にぞものし給ひける。御法名金剛覺と申すなり。新陽明門院（位子）を初め奉りて、いろ〳〵の御召人どもも、廊の御方・讃岐の二位殿（尹子）など、寂しき院に殘りて、或は樣かへ、或は里へまかでなど、樣々散々になる程、いと心細し。

【一院の世の中恨み思されし時云々】　後深草院が、思ふやうにならぬ爲、世を恨んで、既に御出家にならうといふ噂があつたのに、それはさうなられず、却つて、この龜山院が、かう未練もなく御髮を下されたとは、實に定めない世の中である。

(9)

寺ないふ。當時龜山院の仙洞御所。○如法經　法華經のこと。○綠衫の御衣　綠色の御衣。○掛落　禪僧の著るもの兩肩を通じて胸間に掛ける方形の小さいもの。○四十一にぞ　龜山院、時に四十一歳。○新陽明門院　龜山院の妃。○御召人　寵妾。○廊の御方　田樂法師玄駒の女（三九七頁參照）。○讃岐の二位殿　同頁を見よ。○樣かへ　剃髮○里へまかで　吾が里方へ退く。

●あざやかならぬ御おぼえ　御寵愛めでたからぬこと。○世を捨てさせ給ふ際　龜山院御出家の際。○とりわきたる御名殘云々　別段名殘惜しいとも思はれなかつたであらう　○禪林寺の上の院　嶋子の御住居。○事にふれて　何かにつけて。○言とひ聞ゆる人　嶋子を訪問する。○源氏の末の君　源通有の末子。六條内大臣と稱した人。○家もやがて　そのわたりにあれば　有房の家が嶋子の御住居の附近にあるをいふ。○さぶらふ人々　嶋子の方に伺候の人々。○あり難くもと　世にも稀なる篤志であると。○いみじき御盛りのほど　丁度年頃で美しい盛りの頃をいふ。○まほに

中務の宮(尊良)の御女(嶋子)は、もとより、いとあざやかならぬ御おぼえなりしかば、世を捨てさせ給ふ際(きは)とても、とりわきたる御名殘(なごり)もなかるべし。禪林寺の上の院の、人離れたる方にする聞えさせ給へれば、事にふれて、いと寂しく、心細き御有樣なるを、自ら(みづから)言(こと)とひ聞ゆる人(有房)もなし。源氏の末の君に、中將なる人(有房)、院(龜山)に親しく仕うまつりなれて、家もやがて、そのわたりにあれば、程近きまゝに、折々この宮(嶋子)の御宿直(とのゐ)など、心にかけてつかまつるを、さぶらふ人も、いとありがたくもと思ふ。宮の御方(嶋子)は、この頃いみじき御盛りのほどにて、まほに美しうおはしますを、侍(はべ)人のなき事と、思ひあへり。七月ばかり、風あらゝかに吹き、電(いなづま)けしからず閃きて、神鳴

少しも非難すべき所なく。○あたらしう　惜しくも。○見奉りはやす　その美貌を見てほめそやす。○けしからず　烈しく。○はかばかしき人　これといふしつかりした宿直の人。○近きあたりにだに云云　嶋子の所は、近所に人の居る樣子もなく。○うとましげ　いやな。○聞めさせ　嶋子が。○そぼちまゐりて　雨にぬれつゝ參つて。○侍めく者　侍らしいもの。○なにがしも三々　私も侍の詰所に居りませう。○おはしします　嶋子の居られる。○薄色　薄紫○うちふくだめるけしき　指貫の裾を括らず、ふくらかにして居る樣。○物語しつゝ　有房が嶋子と。○心づかひし

り騷ぎ、常よりも恐ろしき夜、はかばかしき人もなければ、上下いとあわたゞしく、心細う思しまどふ。法皇(龜山)は龜山殿に、過ぎにし頃よりおはしませば、近きあたりにだに、人のけはひも聞えず、あはれなる程の御有樣にて、墨をすりたらむやうなる空の氣色のうとましげなるを、眺めさせ給ひなどするに、例の中將(有房)、そぼちまゐりて、侍(さぶらひ)めく者一二人、弓など持たせて、「御宿直(おんとのゐ)つかうまつり侍らむ」など申すにぞ、いさゝべし。なにがしも侍の方に侍(はべ)らむ」かたのもしくて、人々慰め給ふ。おはします母屋(もや)にあたれる廂(ひさし)の高欄におしかゝりて、香染(かうぞめ)のなよらかなる狩衣に、薄色の指貫うちふくだめるけしきにて、しめじめと物語しつゝ、いたう更けゆくまで、つくづくと候ひ給へば、御簾

の中にも心づかひして、はかなきいらへなど聞ゆ。曉がたになりぬれば、御几帳ひきよせて、御殿ごもりぬる傍に、いと馴れがほに添ひ臥す男あり。（綸子）夢かやとおぼして御覽じあげたれば、「（有房）年月思ひ聞えつるさま、おほけなく、あるまじき事と思ひかへさひ、こゝら忍ぶるに餘りぬるほど、只少し、かくて胸をだにやすめ侍らむばかり」など、いみじげに聞ゆるは、はやうありつる中將なりけり。いとうたて、心憂のわざやとおぼすに、御涙もこぼれぬ。近き手あたり、御もてなしのなよびかさなど、まして思ひ沈むべうもなければ、いといとほしう、ゆくりなき事とは思ひながら、殘りなうなりぬ。（綸子）身の憂さの、限りなうもあるかなと、前の世もうらめしう、いふかひなき事を思しつゞけて、よゝと泣き給ふさま、いよ〳〵らうたし。見るとしもなき夢の直路を、うち驚かす（綸子）鐘の聲・（有房）おきわかれ行く空の鳥の音も、人やりならぬ心づくしに、え出でやらず。

露よりさきに我やけなまし

出でがてに、やすらひたる面影も、何の御目とまる節もなし。さばかりいみじかりし院（山邑）の御目うつりに、こよなの契の程やと、おぼし知らるゝもつらければ、いらへもしも給はず。あさましう心憂くも、さまざまおぼし亂るゝに、御心地もまめやかに、損はれぬべし。按察の君といふ人、語らひとられけるなめり。忍びて御消息しげう聞ゆるをも、（綸子）いとうたて、心づきなう思されながら、さてしも果て

て　不都合のないやうに注意して。○はかなきいらへ　有房の話に對し、ちよつとした返事をされること。○御殿ごもり　綸子の寢られたこと。○思ひ聞えつるさま　戀ひ慕つて居たこと。○おほけなく　身分不相應。勿體ない。○思ひかへさひ　思ひかへし。○はやうありつる　宵の程から居た。○うたて　厭はしいこと。○心憂の　心苦しい。○手あたり　手ざはり。○御もてなしのなよびかさ　御態度のしなやかなこと。○ゆくりなき事　不意な事。○殘りなうなりぬ　心殘りなくなつた（契を結んだこと）。○らうたし　可憐。○夢の直路　只管、夢路を辿ること。○人やりならぬ　他人からさせたのではなく、吾が心から勝手にしたこと。○心づくし　氣をもむこと。○出でがてに　立ち去りにくい。○やすらひ　ためらふ。○面影　有房のこと。○御目とまる節もなし　少しも御目にはとまらぬの意。○目うつり　見る目の種々の物に轉ずること。○こよなの　此の上ない。○まめやかに　まことに。○按察使の君　綸子の女房であらう。○語らひとられけるなめり　「語らひとる」は言ひくるめて此方のものとする。有房に賴まれて、綸子を取りもつたないふ。○忍びて御消息云々　有房の方から。○心づきなう　氣に食はぬ。心に叶はぬ。○あはれ

なる事　懐姙をいふ。○この世一つには云々　前世よりの宿縁の深いをも推測られる。○世と共に　月日のたつに随つて。○あこがれまさりて　益〻心おちつかず思ひこがれて。○夢の通路云々　夢中になつて通ふこと。○この御氣色　懐姙のこと。○忍びて　ソツと。○御乳母だつ人　乳母のやうにして居る人。○白川わたり　白川附近。○かごやかに　静かに取り圍んだやうな所の意。○をかしき　趣のある。○いでわたし奉り　掄子を其處へ移して。○自ら有房。○つゝましい。○恥かしい。○そこ　白川附近の家。

ぬならひにや、いと又あはれなる事さへものし給ひけり。かゝるにつけても、この世一つには云々　前世よりの宿縁の深いをも推測られる。○世と共に　月日のたつに随つて。○あこがれまさりて　益〻心おちつかず思ひこがれて。○夢の通路云々　夢中になつて通ふこと。○この御氣色　懐姙のこと。○忍びて　ソツと。○御乳母だつ人　乳母のやうにして居る人。○白川わたり　白川附近。○かごやかに　静かに取り圍んだやうな所の意。○をかしき　趣のある。○いでわたし奉り　掄子を其處へ移して。○自ら有房。○つゝましい。○恥かしい。○そこ　白川附近の家。程、淺からずおしはからる。中將き、世と共にあくがれまさりて、夢の通路足も休めずなりゆく。この御氣色も、やう〳〵しるきほどになり給へば、空おそろしとて、忍びて、御乳母だつ人の家などいひなして、白川わたり、かごやかにをかしき所用意して、いでわたし奉りつゝ、猶ほ自らは、さすがに世のつゝましければ、忍びつゝぞ御宿直しける。そこにてこそ、御子も生み給ひけれ。

【こゝら忍ぶるに餘りぬるほど云々】數多の年月、思ひ忍ぶに、遂にこらへきれない程になつたから、只少し、かうして、御側に添うて、この胸の苦しさだけでも休めたいと思ふばかりです。

【身の憂さの限りなうもあるかな云々】さながだに心憂い身を、今又か

●才かしこく。學問のすぐれて居ること　○末の世　後年　○もてなされて　寵遇を得

うして思ひがけない人に戀ひられ、實に限りもない身のつらさである と、前世の宿縁も恨めしく、言つても役に立たぬ事を思ひつゞけて、掄子は泣かれた。ところが、その樣が、所謂梨花の一枝春雨を帶ぶで却つて可憐に見えるの意。

【おきわかれ行く空もなき云々】「空」はそれと差す方。起き別れては、とても行きえぬこの身は、かの道芝におく朝露よりも、前に脆く消えてしまふであらう。卽ち死んでしまふであらうの意。

【さばかりいみじかりし院の御目うつりに云々】龜山院はあゝして、御目にとまる女は、誰彼の差別なく、御寵愛になつて、自分は遂に疎ぜられ、その上かうした目にあふとは、何といふ心憂い身のさだめであらうとなどの意。

【さてしも果てぬならひにや云々】心づきなうは思されながら、流石女心のそのまゝつれなう退けてしまふわけにも行かなかつたのであらうかの意。

この中將(有房)、才かしこくて、末の世には、殊の外にもてなされて、先づ一品して、しばしおはせし頃、百首の歌に、

位山のぼりはてても峯におふる
松に心をなほのこすかな

さて遂に内大臣までのぼられき。

さて元應の頃かとよ、百首歌奉りし中に、

あつめこし窓の螢のひかりもて
思ひしよりも身をてらすかな

とよまれ侍りき。有房と聞えしが、若くての世の事なるべし。

【位山のぼりはてても云々】「位山」は飛騨の名所。歌には多く位の意にとりなしてよむ。「松に心をなほのこす」とは、更に官の高きを望む意。自分は、もう従一位になつて、高い位は極めたが、猶ほ高い官に上りえぬが遺憾である。○有房の従一位になつたのは、文保二年正月十一日。當時は前權大納言。

て。○一品して　従一位になつて。○若くての世の事なるべし　この綸子の一件は。

●放出　本家から突出して設けた部屋。○猿樂　忠房の子。○御房　僧の敬稱。○その姫君　その生れた御子。○歡喜園院の攝政云々　猿忠の末子基敎の奥方になつての意。○上　奥方。○いとほしく　ふびん。○處分　遺産の分配。○猛に　多く。○物いひさがなき罪　口の悪い罪。○さり所　逃れ所。○輕きこと　輕輕しくたはけたこと。○遠き人　昔の人。○何の苦しから

【あつめこし窓の螢の云々】「あつめこし螢」は、晉の車胤の故事より、學問のお薩で、思ひがけない高位高官に昇つたの意。この問をいふ。學歌、續千載集(雜)には、「嘉元御百首歌奉りし時、螢、前大納言有房」とある。○有房の死んだのは、元應元年七月二日(年六十九)で、その六月二十八日に、内大臣に昇進して居る。

新陽明門院(子位)も、禪林寺殿の下の放出に、徒然としておはしますほどに、松殿の宰相中將兼嗣、いかゞしたりけむ、常に參り給ひしほどに、果には、その宰相中將の御子に、世をのがれたる人ありき。その御房(僧坊)におぼしうつりたりしほどに、御子をさへ生み給ひき。て、限りなくおぼしたりしほどに、その姫君は、初は富小路の中納言季雄の北の方にておはせしが、後には歡喜園院の攝政(兼忠)と聞え給ひし末の御子に、基敎の三位の中將と聞えし上になりて、失せ給ふまでおは

む　差支あるまい。○はしたなし　不都合。○いづら　どうです。

しき。故女院（位子）いとほしくし給ひしかば、御處分など、いと〳〵猛にありき。「（尼）さのみかゝる御事どもをさへ聞ゆるこそ、物いひさがなき罪、さり所なけれど、よしや、昔もさる事ありけりと、この頃の人の御有樣も、自ら輕き事あらば、思ひゆるさるゝためしにもなりてむものぞと思へば、遠き人の御事は、今は何の苦しからむぞとて、少しづつ申すなり」と、うち笑ふも、はしたなし。「（尼）いづら、この頃は、誰か惡しくおはする」と問へば、「（尼）否々、それは、そらおそろし」とて、頭をふるも、さすがをかし。

【その宰相中將の御子に云々】兼嗣の子に頓悟房といつて、僧になつて居る人があつたが、新陽明門院が、この人に心を移して、非常に戀ひ慕うて居られだところが、遂に御子が生れたの意。

【さのみかゝる御事どもをさへ云々】これも例の尼の語。この邊、あまり身分ある人の醜聞ばかりを話したので、そのいひわけである。

【よしや昔もさる事ありけりと云々】この頃の人が、何か輕々しい、たはけた事でもした時、昔もそんな事はあつたのだと、大目に見てやる例にもならうと思ふからの意。

●放生會　捕へておいた魚鳥を放つ法會。○受領　地方長官。但しここでは守護・地頭をいふ。○赤橋　八幡宮の前にある反橋（そりはし）のこと。○つかうまつれり　御供して居る。○惟康　二八二頁を見よ。○花を折らせて云々　花やかな裝束をして居ること。○さうぞき　さうぞく（自、カ四）。よそほひ飾る。○都めきて　その華美な樣が都らしく。○流會　放生會。○本社　石清水八幡宮。○舞樂　舞踏を主とした雅樂。○田樂　三〇七頁を見よ。○獅子頭　所謂獅子舞のこと。○所にしつけたる事　鎌倉で常にし馴らして居る事柄。○棧敷　物見の爲に一段高く構へたもの。○いかめしく　おごそかに。○幔幕　幕の一種。今日普通用ひる　幕は横に縫つてあるが、幔は縱に縫ひ、上方に横幅をつけたもの。○相模守　北條貞時。時宗の子。弘安七年執權職を嗣ぐ。應長元年卒。○そこら　多く。○所につけては　鎌倉といふ所柄につけては、此上ない盛んな事のやうに思はれた。

第十四　つげの小櫛

さても岩清水の流を分けて、關の東にも、若宮と聞ゆる社おはしますに、八月十五日、都の放生會をまねびて行ふ。その有樣誠にめでたし。將軍（惟康）も詣で給ふ。位ある兵・諸國の受領どもなど、いろ〳〵の狩衣、思ひ〳〵の衣重ねて出でたちたり。赤橋といふ所に、將軍（惟康）御車とゞめて、おりたまふ。上達部は、上のきぬなるもあり、殿上人など、いと多くつかうまつれり。この將軍（惟康）は、中務の宮（尊良）の御子なり。この頃、權中納言にて、右大將兼ね給へれば、御隨身ども、花を折らせてさうぞきあへるさま、都めきて、おもしろし。法會の有樣も、本社にかはらず、舞樂・田樂・獅

子頭・流鏑馬など、さまざま所にしつけたる事ども面白し。十六日にも猶ほかやうの事なり。棧敷どもいかめしく造りならべて、いろ〳〵の幔幕など引き續けて、將軍の御棧敷の前には、相模守（時頃）をはじめ、そこらの武士ども並み居たるけしき、樣かはりて、このましう、うけばりたる、心地よげに、所につけては、又なく見えたり。

【岩清水の流を分けて云々】山城石清水（男山）八幡宮の分靈を勸請して、鎌倉に建てた若宮八幡宮のこと。但し「若宮」とは、本宮を勸請して祭つた社、卽ち分社の意である。○石清水八幡宮では、八月十五日に放生會が行はれるので、この若宮でも、それをまねて、その日に放生會を行つたのである。

【流鏑馬】鎌倉時代に流行した武士の遊戲。馬を馳せながら、鏑矢を番へて、的を射るもの。

●鎌倉より　鎌倉にの意。○騷がしき事　騷動。○さゞめく　言ひ騷ぐ。○程こそあれ　丁度其頃などの意。○近く仕うまつる　將軍の御側近く○御位などの云々　天皇の御位のかはるなどと同樣心細く思ふの意。○上らせ給ふ　將軍の都へ上る。○あやしげなる　粗末な。○さかさまに寄せて　普通とは前後逆に舁くをいふ。罪人を乘せる法。○まが〳〵しき　不祥な。○うちまかせては　大方は。普通ならば。○御息所　親王の妃をいふ。○近衞大殿と云々　近　大殿と申した方の御女。○天下のかため　天下を守護する人。○いつかれ　大切にされる。○彼等　武士を指

その後幾程なく、鎌倉より騷がしき事出できて、皆人膽をつぶし、さゞめくといふ程こそあれ、將軍(惟康)都へ流され給ふとぞ聞ゆる。珍しき言の葉なりかし。近く仕うまつる男女、いと心細く思ひなげく。たとへば、御位などのかはる氣色に異ならず。さて上らせ給ふ有樣、いとあやしげなる網代の御輿をさかさまに寄せて乘せ奉るも、げにいとまが〳〵しき事の樣なり。うちまかせては、都へ御上りこそ、いと面白くもめでたかるべきわざなれど、かく怪しきは珍らかなり。御母御息所は、近衞大殿(兼經)と聞えし御女なり。父みこ(宗尊)の、將軍にておはしましし時の御息所なり。先に聞えつる禪林寺殿(龜山)の宮の御方(子)も、同じ御腹なるべし。文永三年より、今年(正應三)まで二十四年、將軍にて、天下のかためと

す。○くつがへされて　將軍職を奪はれたこと。○疊紙　タヽミガミの音便。鼻紙。「疊紙の音しげう」は度々鼻うちかみ、涙を拭ふ音のすること

●寄せ重く　後立（うしろだて）が、しつかりして居ること。○受禪の心地云々　將軍になられるのだが、丁度天子の位を讓り受けられるやうに重々しかつたの意。○みがきなす　裝飾する。○御迎へ　新將軍の。○いひぬまの判官

いつかれ給へれば、日の本の兵を從へてぞおはしましつるに、今日は彼等にくつがへされて、かくいとあさましき御有樣にて上り給ふ。いといとほしうあはれなり。道すがらも、おぼし亂るゝにや、御疊紙の音しげう漏れ聞ゆるに、猛き武士も涙おとしけり。

【珍しき言の葉なりかし】「流される」といふ語は、京都から地方へやられることであるのに、今度は「都へ流され給ふ」といふ。實に珍しい言葉であるの意。

さて、この代りには、一院(後深草)の御子(久明)、御母は三條內大臣公親の御女(房子)、御匣殿とて候ひ給ひし御腹なり。當代(伏見)の御はらからにて、今少し寄せ重く、やむごとなき御有樣なれば、只受禪の心地ぞしける。もとの將軍(惟康)おはせし宮をば、造り改めて、いみじうみがきなす。兵の勝れたる七

人、御迎へに上る中に、いひぬまの判官といふもの、前の將軍(惟)の上り給ひし道もまが〳〵しければ、跡をも越えじとて、足柄山をよきて上るなどぞ、餘りなる事にや。親王は十月三日御元服し給ひて、久明親王ときこゆめり。同じき十日の日、院よりやがて六波羅の北方、さきざきも、宮の渡り給ひし所へおはして、それよりぞ、あづまに赴かせ給ふ。同二十五日、鎌倉へ著かせ給ふにも、御關迎とて、ゆゝしき武士ども、うちつれてまゐる。宮(久明)は、菊のとれんじの御輿に、御簾あげて、たのもしく見給ふ。しのぶをみだれ織りたる萌黄の御狩衣・紅の御衣・濃き紫の指貫奉りて、いと細やかに、なまめかし。いひぬまの判官、木賊の狩衣、青毛の馬に、金の金物の鞍

飯沼の判官であらう。鎌倉から迎へに來た武士の一人。○まが〳〵し　不祥。○跡をも越えじ　不吉だから、前將軍の通つた跡は通るまいの意。○よきて　避けて。○餘りなる事にや　餘りひどいやり方ではあるまいか。○十月三日　續史愚抄には「六日」とある。○さきざきも　以前も。○宮の渡り給ひし所　將軍の宮の居られた所。○御關迎　他地方から歸つて來る人を關所まで迎へに出ること。京都では逢坂關までゆく。こゝは之に倣つて、鎌倉から足柄山迄ゆくをいふ。○ゆゝしき武士　立派な武士。○菊のとれんじ　「れんじ」は櫺子・連子等書くもので、窓につけた格子のことであらう。卽ち格子のついた窓のある輿であらうが、トはよく分らぬ、或は戸か。菊はそれについた紋であらう。○えびす　荒々しい武士。○しのぶを云々　忍草の形を亂れ織つた。○細やかに　身體のキャシャなこと。○木賊の狩衣　表黑青、裏白。○青毛　黑に青味を帶びた毛色。○金の金物の鞍　金の金物のついた鞍。○隨兵　お供の兵。○御輿のきは云々　御輿の側に馬で附き隨つて居る。「うつ」は馬に騎ること。○椀飯　饗應の爲に設ける食膳の意より轉じて饗應のこと。こゝは新任將軍歡迎の爲に催す饗應をいふ。○馬御覽　馬を見る儀式。○經營　設け營むこと

おきて、隨兵いかめしく召し具して、御輿のきはにうちたり。都にて譬へば、行幸に、然るべき大臣などの仕うまつり給へるによそへぬべし。三日が程は、椀飯といふ事、又、馬御覽、何くれといかめしき事ども、鎌倉内の經營なり。宮の中の飾り・御調度などは更にもいはず、帝釋の宮殿もかくやと、七寶を集めて磨きたる樣、目もかゞやく心地す。いとあらまほしき御有樣なるべし。關の東を、みやこの外とて、おとしむべくもあらざりけり。都におはしますなま宮だちの、より所なく、たゞよはしげなるには、こよなく勝りて、めでたく、にぎはゝしく見えたり。時宗朝臣といひしも、又頭おろして、法光寺の入道とて、いと尊く行ひて、世にもいろはず、太郎貞時相模の守といふにぞ、よろ

(4)

○帝釋の宮殿　善見城内にあるもの。二三六頁を見よ。○おとしむ　輕蔑する。○なま宮　是といふ程の事もない宮様。○より所なく　賴るべき後立もなく。○たゞよはしげよるべない。○時宗朝臣　北條時宗。○頭おろして　剃髪して。○行ひて　佛道を修する。○世にもいろはず　世間の事に關係せず。

●年月の御本意　年來の御希望。○たゆたひ過し　躊躇して日を過す。○おぼし立ちにし　出家を。○いむ事受けさせ　受戒。

づいひつけける。さても上り給ひにし前大將殿(惟康)は、峨嵯のほとりに、御髪おろして、いとかすかに、寂しくてぞおはしける。

【このかはりには云々】　惟康親王の代りには、後深草院の御子を將軍として鎌倉に下された。これは公親の女で、御匣殿といはれて居た人の腹に出來た御子であるの意。

【都にて譬へば云々】　いひぬまの判官の扈從の樣を都の事にたとへていふと、丁度行幸の際、然るべき大臣などが、御供をして居るやうなものだ。○よそへぬべし　は比すべしの意。

かくて年かはりぬ。その年(正應三)二月の頃、一院(後深草)御髪おろし給ふ。年月の御本意なれど、たゆたひ過し給ひけるに、禪林寺殿(亀山)、去年の秋おぼし立ちにしに、いとゞ驚かされ給ひぬるにやありけむ、二月十一日、亀山殿にて、いむ事

(5)

●節會　元日天皇紫宸殿に御して群臣に宴を賜ふこと。○十二の御衣　五衣を十二領重ねること。○紅のうちたる　紅の打衣。○花山吹　表薄朽葉、裏黄。○けしきばかり　只一寸。○少し薄らぎ　毛の薄いこと。○匂加はりて　花やかさが增して。○地摺　白地に模樣を摺つたもの。○髪うるはしく上げて　髪を美しく束ねて。○かんざし　髪のさま。○樣體　姿有樣。○けしうはあらず　悪くはない。○例のたゞならぬ御事　懷姙のこと。○うちさゝめきがち　小聲がち。○公守　左大臣實

受けさせたまふ。四十八にぞならせ給ふ。御法名素實と申すなり。

正月の朔日、節會など果てて、夕つ方、内の上(伏見)、皇后宮(子)の御方へ渡らせ給へれば、宮(子)は濃き紅梅の十二の御衣に、同じ色の御單・紅のうちたる・萌黄の御表著・蒲萄染の御小袿・花山吹の御唐衣・唐の薄物の御裳、けしきばかりひきかけて、御髪ぞ少し薄らぎ給へれど、いとなよびかに、うつくしげにて、常より殊に匂加はりて見え給ふ。御前に御匣殿・花山院内大臣師繼の女、二藍の七に、紅の單・紅梅の表著・赤色の唐衣・地摺の裳、髪うるはしく上げて候ひたまふ。かんざし・樣體、これもけしうはあらず見ゆ。新しき年の御悦など、少し聞え給ひて、例のたゞならぬ御事ど

雄の子。○曹子　部屋。○花櫻　單に櫻といふもの。表白、裏濃紫。(異說あり)。○あてに　高貴。○こまやかに　しみじみと。○初宮仕　始めて宮仕すると。○思ひあがれる　高くとまつて居る。○今一所の　今一人の。實雄の女季子。後に顯親門　院といふ。○心靜かならねど　落ちつかぬ。○中宮のぼらせ給ふ　上の御局に宿し給ふこと。○ゆゝしき事　盛んな事。○年のつもりに云々　例の尼の語。年が寄つて。○なか〳〵聞えず　却つて申し上げまぜぬ。

(6)

●霜月　十一月。○五節　三六三頁を見よ。○去年をおぼしいでて　去年の五節の頃を思ひ出して。○そのかみ　當時。○つげの小櫛　黃楊(つげ)の木で作つた櫛。

も、うちさゝめきがちにて、これより公守の大納言の女の曹子(さうし)さしのぞかせ給へば、いとさゝやかにて、衣がちにて、花櫻のあはひにほはしきに、山吹(やまぶき)の表著(うはぎ)、裳(も)ひきかけて、寄り臥し給へる、あてに、らうたし。こまやかにうち語らひ聞え給ふ。玄輝門院(雅)の御側にかしづききこえ給ひしならひにや、おしなべての初宮仕(うひ)の樣よりは、思ひあがれる氣色なり。今一所(ところ)(季)の御曹子(さうし)も、近き程なれば、そなたざまに歩みおはして、いとゝ心靜かならねど、この君をば、おしなべてのきはならずおぼすめり。この御腹(季)に、御子達數多おはしましき。かくめぐらせ給ふ程に、いたゞ更けてぞ、中宮(子雄)のぼらせ給ふ。この御代(見伏)にも、いみじき行幸ども、ゆゝしき事多かりしかど、年のつもりに、何事もさだか

ならず、月日などおぼろに侍れば、なか〳〵聞えず。

【いとさゝやかにて衣がちにて云々】身體が小さい上、澤山な衣を重ねて居られるので、殆ど衣ばかりのやうに見える。そして其の人は、花櫻の配合よき五衣に、山吹の表著を著、裳をひきかけて、寄り臥して居られる樣が、けだかく愛らしく見える。○こゝは御門が皇后の宮の所へお出でになつた序に、女の部屋をのぞいて歩かれる所である。

【玄輝門院の御側にかしづき云々】この大納言の女は、もと玄輝門院の所で養育せられて、馴れて居る爲か、普通の初宮仕の樣よりは、何だか高くとまつて居る樣子である。

程なく明け暮れて、永仁も六年になりぬ。七月廿二日、春宮(後伏見)に御位ゆづりて、おり給ひぬ。霜月になりて、五節の頃、去年をおぼしいでて、その折に關白にておはせし兼忠のおとゞに、櫛つかはすとて、新院(後伏見)、少女子がさすや小櫛のそのかみを

共になれにし時ぞわすれぬ

御かへし、歡喜園前攝政殿（兼忠）、

いとゞまた去年（こぞ）の今宵ぞ忍ばるゝ

つげの小櫛を見るにつけても

【少女子がさすや小櫛の云々】「少女子がさすや小櫛の」は「そのかみ（髮に當時の意をかけて）といふ爲の序。そのかみ共に睦じくして居た時のことを忘れぬ、卽ち去年の五節の頃は、自分も帝位にあり、兼忠も關白の職にあつて、共に睦じくして居たが、その頃のことが忘られぬの意。

【いとゞまた去年の今宵ぞ云々】賜はつた黄楊の小櫛を見るにつけても、一層去年の今宵、卽ち新嘗祭の夜が思ひ出される。

堀川の具守（とももり）のおとゞの女（基子）の御腹に、前（さき）の新院（後宇多）の若宮（後二條）生れ給へりし、六月廿七日御元服し給ひて、八月十

●生れ給へりし云々　生れられた、その人が元服しての意。○内よりは　東宮の方が

日春宮に立ち給ひぬ。御諱邦治ときこゆ。これも、内（後伏見）よりは、御年三まさり給へり。今の御門（後伏見）は、十一になり給ふ。御諱胤仁（たねひと）ときこゆ。あてに、なまめかしうおはします。中宮（鏡子）の御腹には、大かた、宮もものし給はねば、この御門（後伏見）をぞ、御子にし奉らせ給ひける。讓位の後は、中宮（鏡子）もおりさせ給ひて、永福門院とさこゆめり。皇后宮（冷子）も、この頃は遊義門院と申すなり。法皇（後深草）の御傍におはしましつるを、中の院（後宇多）、いかなるたよりにか、ほのかに見奉らせ給ひて、いと忍び難くおぼされければ、とかくたばかりて、盜み奉らせ給ひて、冷泉萬里小路殿におはします。またなく思ひ聞えさせ給へる事限りなし。

【法皇の御傍におはしましつるを云々】姈子は御父なる後深草院の御側

天皇よりも三つ年上であつた。○宮もものし給はねば御子もないから。○皇后宮後宇多后。後深草の長女。母は東二條院。○いと忍び難く云々　戀しくてたまらぬ。○とかくたばかりて　いろ〳〵とだまして。

に居られたところが、どうしたはづみか、後宇多院が、一寸見られて、戀慕の餘り、遂に盜み出して、冷泉萬里小路殿におき、非常に寵愛せられた。

正安二年正月三日、御門(後伏見)御元服し給ふ。今年十三になら せ給へば、御行末はるかなるほどなり。又の年正月の頃、内侍所(ないしどころ)の御注連(しめ)のおり給へるは、いかなるべき事にかなど、忍びさゝめく程こそあれ、東(ひむがし)よりの御使のぼるとて、世の中さわぎて、禪林寺殿(亀山)見奉り給ふ世にとや。正月廿一日、春宮(後二條)御位に卽かせたまひぬ。おりゐの御門(後伏見)御年十四にて、太上天皇の尊號(そんがう)あり。いときびはにいたはしき御事なるべし。僅かに三年にておりさせ給へれば、何事のはえもなし。この春は、春日社に行幸などあるべしとて、世の中まだきより、面白き事にいひあへりつる

●御注連のおり給へる　御注連繩の落ちたをいふ。○忍びさゝめく　私語する。○きびは　幼少。○おりさせ　讓位。○何事のはえもなし　是と取り立てていふ程の事は一つもない。○まだきより　早くから。○かいしめりて　うちしめりて。○カイはカキの音便。接頭語。○一所に　亀山と後宇多が同じ所に居られること。○おしかへし　うつて變つて。○一方になびきたる　亀山院の方へなびくをいふ。○さも　實(げ)に。○あぢきなし　面白くもない。

もかいしめりて、いとさうざうし。さてこの君(後伏見)を新院と申せば、父の院(見伏)をば、中院ときこゆ。御門(後二)の御父(後宇多)は一の院と申す。法皇(亀)も、この頃は、一所におはしますなめり。一院(後宇多)世の政事きこしめせば、天下の人、又おしかへし、一方になびきたる程も、さも目の前にうつろひかはる世の中かなと、あぢきなし。

【禪林寺殿見奉り給ふ世に】亀山院が天下の政を見給ふ、卽ち從來は後深草の御系統であつたが、今度は亀山の御系統が立たれて、亀山院が政を見られるやうにならうといふのであらうかの意。

土御門の前の内の大臣(定實)六月に太政大臣になり給ふ。いとめでたし。故大納言入道(顯定)の、本意(ほい)なかりし御面おこし給へる、いとゆゝし。院(亀)の御おぼえの人なる上、才(ざえ)もかしこくおはすれば、世に用ひられ給へり。御子の大

●故大納言入道の云々　二五四頁參照。○本意なかりし御面云々　思ふ通りにならなかつた不面目を挽回したことは。○ゆゝし　えらいなどの意。○院の御おぼえの人云々

納言雅房・中納言親定とて、いづれも才ある人にておはしき。

持明院殿には、世の中すさまじくおぼされて、伏見殿に籠りおはしますべく、の給へれど、二の御子(尊)坊に定まり給へば、又めでたくて、なだらかにておはしますべし。先に聞えつる御母女院(子)の御はらからの姫君(子)、顯親門院と聞えし御腹なり。八月十五日、先づ親王になし奉らせ給ひて、同廿四日に春宮に立ち給ひぬ。

【持明院殿には云々】　今度は又禪林寺殿、即ち大覺寺統の御治世となつたので、持明院統は、面白からずおぼされ、世とかけはなれて、伏見殿に籠つて居られるやうに、いはれて居たが、偶〻伏見院の御二皇子が太子に立たれるやう定まつたので、さういふ不平もなくなり、復めでたく、平穩になつた。

定實は院の御寵愛の厚い人であつた上に。〇才もかしこく學問もすぐれ。

●持明院殿には、後深草院・伏見院を指す。〇すさまじく面白からず。〇なだらか平穩。〇顯親門院と聞えし云云　花園帝は季子、即ち顯親門院と申した方に出來た御子である。

かくて新帝(後二)は十七になり給へば、いと盛りに、うつくしう、御心ばへもあてに、けだかう、すみたる樣して、しめやかにおはします。三月廿四日御即位、この行幸の時、花山院三位中將家定、御劒の役をつとめ給ふとて、さかさまに內侍(ないし)に渡されけるを、今出川の大臣(公)御覽じとがめて、出仕とゞめらるべきよし申されしかど、鷹司の大殿(基忠)、「なか〳〵沙汰がましくて惡しかりなむ。たゞ音(おと)なくてこそ」と、申しとゞめ給へりしこそ、なさけ深く侍りしか。後に思へば、げにあさましき事のしるしにや侍りけむ。十月廿八日御禊(みそぎ)、この度の女御代にも、堀川の大臣(守具)の姫君(子源)いで給へり。今の上(後二)も、源氏(子基)の御腹にて物し給ふ。いと珍しくやむごとなし。されど、うけばりたる樣

●すみたる樣　まじめな樣。〇しめやか　沈著。〇この行幸　御卽位の爲、太政官廳への行幸。〇御劒の役　行幸の時、晝の御座の御劒を取つて內侍に傳へる役。〇沙汰がまし　彼此といひたてるやうになること。〇あさましき事のしるし　不吉な事の前兆。〇女御代　二六五頁を見よ。〇源氏の御腹　源具守の女基子に出來た御子。〇うけばりたる　引き受けて專らにする。勢力のある。〇心もとなかめる　不安心。メルは助動詞メリ。

●乾元元年　正安四年十一月二十一日改元。隨つて、六月はまだ正安である。〇珍しくうつくしと　後二條帝を。〇忠繼の宰相の女　宰相は參議。藤原忠子。內大臣藤原師繼の養女。後、談天門院といふ。〇內親王　後宇多長女。弘安九年降誕。後、達智門院といふ。〇かなしきもの、かはゆいもの。〇かしづき　大切に養育する。〇嘉元元年　拾芥抄には、「嘉元二年十二月十九日奏之」とある。

にはおはせぬぞ、心もとなかめる。

【なか〳〵沙汰がましくて云々】　さういふ事なしては、却つて事を荒立て、大禮の妨になつては悪からう。

【うけばりたる樣には云々】　さうして源氏からあがつて、めでたくはあるが、併し西園寺などに比べると、勢力がないから、不安心なやうに思ふの意。

又の年は乾元元年、六月十六日龜山殿へ行幸あり。法皇(龜山)いと珍しくうつくしと見奉らせ給ふ。曉歸らせ給ひぬる後、法皇(龜山)より、內(後二條)に聞えさせたまふ。

慕はるゝ名殘にたへず月を見れば
　雲の上にぞ影はなりぬる

御かへし、內の上(後二條)、

君はよし千年のよはひたもてれば
　あひ見むことの數も知られず

一院(後宇多)は、忠繼の宰相の女の、中納言典侍(忠子)といふ腹にも、男女御子だち數多ものし給ふ中にも、勝れ給へる內親王(禧子)を、いとかなしきものに、かしづき聞えさせ給ふ。

この御代(後二條)にもまた、爲世の大納言うけたまはりて、撰集あり。「新後撰集」ときこゆ。嘉元元年披露せらる。

【慕はるゝ名殘にたへず云々】　慕はしく、名殘惜しさに堪へかねて、月を見れば、影は雲の上に見えなくなつた。卽ち天子を月にたとへて、禁中に歸られたことを、雲の上に見えなくなつたと、いつたのである。

【君はよし千年のよはひ云々】　法皇には、千年も長壽を保たれるのであるから、今お別れしたとて、今後限りなく逢ひ奉ることであるの意。「よし」は、たとひ多少は不滿足でも、暫くそのまゝにしておくなどの

●今はと　最早や最後と。○失せさせ給ひぬ　正月二十一日。御年七十三。○七十に云云　七十三にもなつて居られるのだから、崩御も尤もの事である。○をさ〳〵　殆ど。○わらはやみ　癒病。○一つに　御同居。○急ぎて外へ行啓　御穢にふれぬ爲。○くづれ出づる法師ばら　御修法の爲に參つて居た法師が、バラバラと出て來ること。○とぢめ果つる世の有樣「とぢめ」は終。萬事終果てた樣な世の中の有樣。○京極おもての門　二條富小路の東門。○床子　床几。○よそほしげ　おごそか。○ゐてわたし　御遺骸を移す。○うちとよみあひたる

意で、たとひ今別れたとての意を含むものと見るべきであらう。

かくて又の年（嘉元二）春の頃より、東二條院（公子）御惱日々に重り給ひて、今はと見えさせ給へば、伏見殿へ出でさせ給ひて、遂に失せさせ給ひぬ。七十にあまらせ給へば、ことわりの御事なり。法皇（後深草）も、その御歎きの後、をさ〳〵物聞召さずなどありしをはじめにて、うち續き心よからず、御わらはやみなど聞ゆる程に、七月十六日、二條富小路殿にて、かくれさせ給ひぬ。六十二にぞならせ給ひける。いとあはれに悲しき事ども、いへば更なり。御孫の春宮（花園）も一つにおはしましつれば、急ぎて外へ行啓なりぬ。御修法の壇ども、こぼ〳〵と毀ちて、くづれ出づる法師ばらのけしきまで、今を限りと、とぢめ果つる世の有樣、いと悲

人々の聲をあげて泣き立てること。○心をさむる　心の落ちついた。○藁履　沓の一種。但し草鞋とは別。送葬の時に用ひる。○奉りて　穿いて。○とみにも　直には。○えのぼらせ給はず　御車にも乘られぬ。○後深草院とぞ云云　今度崩御になつた方を。○御日數の程　御中陰の間。○ひる間もなく　乾く間もなく。

し。宵過ぐるほどに、六波羅の貞顯・憲時二人、御とぶらひに參れり。京極おもての門の前に、床子に尻かけてさぶらふ。隨ふ者ども、左右に並み居たる樣、いとよそほしげなり。又の日、夜に入りて、深草殿へゐてわたし奉る。御車さしよせて、御棺乘せ奉る程、うちとよみあひたる、いと理りに、心をさむる人もなし。院の御前（伏見）・宮だちなど、藁履とかやいふもの奉りて、門まで御送りつかうまつらせ給ひて、とみにも、えのぼらせ給はず、御直衣の袖をおしあてて、遙かに程經てぞ、御車に奉りて、伏見殿への御送りも、せさせ給ひける。院の内ゆゝしきまで泣きあへり。後深草院とぞきこゆめる。御日數の程は、伏見殿に、宮だち・遊義門院（准子）などおはします。秋さへ深くなり行くまゝ

に、よとともの御涙、ひる間なく、おぼしまどふ。遊義門院、

物をのみ思ひねざめにつくづくと
みるも悲しきともし火の色

春著てし霞の衣ほさぬまに
こゝろもくるゝ秋霧の空

【よとともの御涙】古今集(戀)に「よとともに流れてぞゆく涙川冬も凍らぬ水泡なりけり」(貫之)とあるによつた語。盡きぬ涙の意。

【物をのみ思ひねざめに云々】物思に沈みつゝ寢た夜の寢覺には、見る燈火の色も、つくづくと悲しいものだ。

【春著てし霞の衣云々】この春、東二條院の崩御によつて著た喪服の涙は、まだ乾かぬに、今又秋となつて、法皇の崩御にあひ奉り、心もくれまどふの意。カスミに墨染の意を含め、「くるゝ」は思ひ惑ふ意に秋霧の空の暮れゆく意をかけたのである。

●惱み　病氣。○こちたく　仰山に。○さがなさ　不祥。○世を背かせ　出家。○きはだけう「きはだけく」の音便。きはだつて。○ひじりだちて　聖僧らしくして。○ありしよりなほ　御出家以前よりも、もつと。○永福門院　伏見帝の中宮。○兼實の女。○さしつぎの宮　妹君。後、昭訓門院といふ。正安三年法皇宮に入られた時、二十九歳。○かひがひしく　まめ〳〵しく。○かなしきもの　かはゆいもの。○今少しだに云々　今少し成長せられるのをまへ御覽にならず、崩御になつたのを。○いみじうおぼされけり　法皇が。○きてしもあらぬ云々　崩御になつた上は、

年かへりぬれば、嘉元も三年になりぬ。萬里小路殿の法皇(山)、また惱みとて、龜山殿へうつらせ給ふ。いろ〳〵に御修法や、何くれ御祈ども、こちたくせさせ給へるも、驗なくて、九月十五日の曙に、終にかくれさせ給ひぬ。去年・今年の世のさがなさ、うち續きたる人々の御歎きども、いはむ方なし。(龜山)世を背かせ給ひにし初つ方は、いときはだけう、ひじりだちて、女房など御前にだに參らぬ事なりしかど、後には、ありしよりなほたはれさせ給ひし程に、永福門院(子)の御さしつぎの姫君(孫)、早や御盛りも過ぐる程なりしを、この法皇(龜山)にまゐらせ奉らせ給へりしが、かひがひしく「水の白浪」に若やがせ給ひて、やがて院號ありしかば、昭訓門院(子)ときこえつる、その御腹に、一昨年

何時までも、そのまゝではあられぬ習ひであるから。○御わざの事　御葬式の事。○理りといひながら　當代の御祖父君に當られる方であるから、勿論尤もなことではあるが。○袴きはにて　「きは」はきはやか、かひがひしなどの意。○三人の法親王　皆龜山院御子。○上の山　龜の山の上。御茶毘所をいふ。○ひきさがりて　人々の後から○よそほしかりつる　きらびやかに美しかつた。○只今の間の煙にて云々　茶毘一片の煙となつて、果敢なく消え給ふこと。○まかで　退出。○とりわき　殊に。○内よりの御使　御門よりの御使。

ばかり、若宮(復明)生れ給へるを、限りなくかなしきものに思されつるに、今少しだに見奉らせ給はずなりぬるを、いみじうおぼされけり。さてしもあらぬならひなれば、同じ十七日に、御わざの事せさせ給ふ。理りといひながら、いといかめしう人々仕う奉り給ふ。網代廂の御車、前右大臣殿(公衡)寄せさせたまふ。烏帽子直衣、袴きはにて參りたまふ。院の上(後宇多)も庭におりさせ給ふ。山の座主(良助)・聖護院(順助)・十樂院(慈道)、三人の法親王だちなどは、藁履をぞ奉りて、上の山まで御供せさせ給ふ。上達部には前右大臣公衡・西園寺大納言公顯・萬里小路大納言師重・源中納言有房・三條中納言實躬・宗氏の二位・重經の二位・爲雄の宰相・經守・爲行・親氏などなり。殿上人には賴俊朝臣・忠氏・爲藤・國房・經世・泰忠・光忠、皆狩衣の袖をしぼり〳〵參る氣色さへ、あはれを添へたり。院(後宇多)も御供にひきさがりて參り給ふ。花山院權大納言(師信)・西園寺中納言(兼季)・土御門大納言(親定)・御子親實の少將、御太刀持ちて御供せられたり。よそほしかりつる御有樣も、いと程なく、只時の間の煙にてのぼり給ひぬれば、誰も〳〵夢の心地して、ほのぼのと明けゆく程に、各〻まかで給ふ。三條大納言入道公貫・萬里小路大納言師重などは、とりわき御志深くて、御茶毘の果つるまで、墨染の袖を顏におしあてつゝ候ひたまふ。かねてより山道つくられて、木草斬り拂ひなどせられつれど、露けさぞ分けむ方なき。涙の雨の添ふなるべし。内よりの御使に、はじめ長親朝臣・雅行・有忠朝臣など、三度まゐる。

ふるき例なるべし。

【かゝてより山道つくられて云々】 通行の邪魔にならぬ爲、前以て山の草木を斬り拂ひなどして、道を作られて居たが、矢張り草木の露がひどく、掻き分けて行くことが出來ない程であつた。これは大方自然の露に涙の雨が添うた爲、一層露けくなつた爲であらう。

同じき廿八日、院の上(後堀河)御素服たてまつる。おはします殿には、黒き絲にて編みたる簾をかけらる。淺黄縁の御座に、上の御衣は黒く、上の御袴は、裏柑子色、御下襲も黒し。同じ引倍木・淺黄の御檜扇、御臺まゐるも、皆黒き調度どもなり。この御序に、御方々も御素服たてまつる。昭訓門院(藤子)・昭慶門院(寧子)・近衞殿(家基)の北政所・關白殿(鷹司教房)の北政所・良助法親王・覺雲・順助・慈道・性惠・益性・行仁・性融法親王だち、上達部も、御山の御供し給ふ人々、皆洩れ

●素服　喪服。○淺黄縁の御座　疊の縁の淺黄色のもの。○上の御衣は黒く　所謂錫紵(しやくじよ)を召されること。淺黒色卽ち黒の地で、天子が二等親以上の喪に著られるもの。○柑子色　黄色の黒ばんだもの。○引倍木　四五四頁を見よ。○檜扇　檜の薄板を綴ぢて作つた扇。○御臺　供御の臺盤。○御方々　下にいふ人々など指す。後宮及び御子たちのこと。○御山の御

供し給ふ人々　御大葬の時お供した人。○禪院　禪宗の寺院。

●帥の宮　太宰帥の宮。○とりわき　格別に。○御傍さらすならはし云々　いつも御側

す。院(後堀河)の二の御子(後圓)の御母(子忠)も、近頃は、法皇(後鳥羽山)召しとりて、いと時めかせて、准后(じゆごう)など聞えつれば、思ひ歎き給ふべし。昭訓門院(藤子)は、やがて御髪おろし給ふ。法華堂(ほつたう)を建てて、をさめさせ給へば、龜山院とぞ申すべかめる。禪林寺殿をば、おはしましし時より、禪院になされき。南禪院といふは、これなめり。

【院の二の御子の御母も云々】 もと後宇多院の妃であつた忠子も、近頃は、龜山院の所へ引きとられ、准后などといつて、大に時めいて居られたのだから、今度龜山院の崩御については、大に悲歎されるだらう。

院(後宇多)の二の御子(後圓)の御母、忠繼の宰相のむすめ、今は准后(子忠)と聞ゆる御腹におはします、この頃帥(そち)の宮(後圓)と聞

近くおいて、馴れしめられた。○らうたがり　かはいがる。○所がらしも「所柄も」の意を強めた語。○川浪　大井川の。○御日數の程　御中陰の間。○はかなし事　とりとめもない事。○聞えかはして　言ひあつて。

ゆるを、法皇（龜山）とりわき御傍さらずならはし奉り給ひて、いみじうらうたがり聞えさせ給ひしかば、人（後醍醐）より殊におぼし歎くべし。頃さへ、しぐれがちなる空のけしきに、山の木の葉も涙あらそふ心地して、いと悲し。所がらしも、いとゞあはれを添へたり。川浪のひゞき、戸灘瀬の瀧の音までも、とり集めたる御心の中どもなり。御日數のほどは、帥の宮（後醍醐）一つ御腹の内親王（幷子）なども、この院におはしますほど、つれづれなるまゝに、はかなし事など聞えかはして、花・紅葉につけても、むつまじく馴れ聞え給ふべし。

【院の二の御子の御母云々】　後宇多院の第二皇子の御母なる忠繼の女、今は准后と申して居る方の御腹に出來た御子で、この頃師の宮と申した方を龜山院が特に可愛がられたの意。但し「二の御子」と「帥の宮」とは同じ人をいつて居るのであるから、拙い句である。

【頃さへしぐれがちなる云々】　頃は丁度秋の末頃、時雨がちな空の樣子で、落ちる山の木の葉も、落ちる涙と數を爭ふやうな氣がする。

帥の御子（後醍醐）は、大多勝院の西の廂にわたらせ給ふ。御前の松の木に、這ひかゝれる蔦の紅葉の、いたう染めこがしたるを取りて、九月三十日の夕つ方、昭訓門院（英子）の御方へ奉らせたまふ。

（帥宮）あすよりの時雨もまたで染めてけり
袖のなみだや蔦のもみぢ葉

木の葉よりも脆き御涙は、ましていとゞせきかね給へりし。御かへし、

（昭訓門院）よもは皆涙の色にそめてけり

●大多勝院　龜山殿の内。○いたう染めこがしたる　黑い程眞赤に色づいたこと。○名殘もいみじく　亡き法皇の御事が、いとゞ思ひ忍ばれて。○夕ばえの御かたち　夕日の光に照らされた御姿。○ありつる紅葉　かの紅葉。○女院の御兄　公顯は。○しめやかなる　ひつそりとした。

(女子)あはれに見奉らせ給ひつゝ、名殘もいみじくながめられて、高欄(かうらん)におしかゝり給へる夕(ゆふ)ばえの御かたち、いとめでたし。ありつる紅葉を、西園寺大納言公顯の宿直所(とのゐどころ)へつかはす。

(女子)雨とふる涙の色やこれならむ
袖よりほかに染むるもみぢ葉

女院(女子)の御兄(せうと)なれば、しめやかなる御山住みの心苦しさに、さぶらひ給ふなりけり。御返事、

(公顯)いくしほか涙の色の染めつらむ
今日を限りの秋のもみぢ葉

【あすよりの時雨もまだで云々】明日からは、時雨ふる神無月となるのであるが、その時雨も待たず、葛の紅葉を赤く染めた。袖の涙の紅が、染めたのであらうかの意。

【ふもは皆涙の色に云々】空から降る時雨にはまだぬれないのに、四面の紅葉は、皆もう紅の色に染まつた。これは私等の涙の紅の爲であらう。

【雨とふる涙の色や云々】袖ばかりでなく、紅葉の色まで、かうして染めたが、雨と降る涙の色は大方この紅であらう。

【しめやかなる御山すみの云々】この公顯は、女院の兄であるから、女院が、中陰の間、ひつそりとした龜山殿に籠つて居られる心苦しさを思ひやつて、宿直に來て居られるのである。

【いくしほか涙の色の云々】今日を限りに暮れてゆく此の秋の濃い紅葉の色は、幾度も涙の色で染められたのであらう。○「しほ」は染めるを數へいふ語。

●はしたなく　甚だしく。○御殿油　御燈火。○御覽じさしたる　御覽になりかけて居

時雨はしたなく、風あらゝかに吹きて暮れぬれば、宮(後醍醐)は内に入り給ひて、御殿油近くめして、晝御覽じさしたる御

經など、讀み給ふほどに、若殿上人(わかでんじやうびと)どもうちつれて、此方の御宿直にまゐれり。晝の蔦の葉の散りぼひたるを、人々見るに、宮(後醍醐)、「それに各〻歌書きて」とのたまへば、中將爲藤朝臣、

もみぢ葉になくねはたえず空蟬(うつせみ)の
からくれなゐも涙とや見む

清忠朝臣、

山姫の涙の色もこのごろは
わきてや染(そ)むる蔦のもみぢ葉

光忠朝臣、

世の中のなげきの色を知らねばや
去年に變らぬ蔦のもみぢ葉

た。○此方の御宿直　帥の宮の所に宿直すること。○散りぼひたる　散り亂れた。○それに　その葉に。○歌書きて　歌を書いて奉れの意。○北殿　龜山殿の內。

これらを取り集めて、北殿の內親王(孫)の御方へ奉らせ給へれば、

(孫子)
さすがなほ色は木の葉に殘りけり
かたみも悲し秋のわかれ路

【もみぢ葉になくねはたえず云々】私達は毎日々々泣いて居るが、この紅葉葉の唐紅も、その涙の色かと思はれるの意。「なくねはたえず」は次の「空蟬」の緣語、又この「空蟬の」は、その下の「から」にかゝる序である。

【山姫の涙の色も云々】山姫も法皇の崩御を悲しみ、此頃は、とりわけ、その涙の色で、蔦の紅葉を染めるのであらうか。

【世の中のなげきの色を云々】世の中の人は皆悲しみ歎いて、黑い喪服をつけて居るのに、それを知らない爲であらうか、蔦の紅葉は、今年も去年に變らぬ紅の色に染めなして居る。

【さすがなほ色は木の葉に云々】秋は暮れたが、その色は、流石なほ、かうして木の葉に殘り留まつて居る。悲しい形見だ。それを見るにつ

●けはひ　様子。○御殿ごもりぬ　御寢になつた。○あくる　格子を。○さしはさませ　歌を書いた紙をその格子に

けては、過ぎ去つた秋に別れ奉つた法皇の上も忍ばれてならぬの意。

雨うちそゝぎて、けはひあはれなる夜、いたう更けて、帥宮(後醍醐)、例の北殿へ參り給へれば、姫宮(幹子)も御殿ごもりぬ。候ふ人々も、皆しづまりぬるにや、格子などたゝかせ給へど、あくる人もなければ、空しく歸らせ給ふとて、書きて、さしはさませたまふ。

(帥宮)おのづから眺めやすらむとばかりに
　あくがれきつる有明の月

御かへし、またの日、

(幹子)いたづらに待つ宵すぎし村雨は
　思ひぞ絶えしありあけの月

【おのづから眺めやすらむ云々】かういふ晩には、多分あなたも、眠り

●あかれ給ふ　別れたまふ。○昭慶門院　伏見帝皇后、龜山帝皇女。○かなしきものかはゆいもの。○御處分　莊園などの御分配。○こちたし　非常に多い。○土御門室町にありし院　これも昭慶門院の御所。

もやらで物思に沈んで居られることであらうと思つて、かく夜深くも、訪れて來たのに、最早御寢になつて居るので、空しく歸りますの意。但し「有明の月」は夜更けて、訪れて來た御自分のことをいつたのである。

【いたづらに待つ宵すぎし云々】宵には御出でのこともあらうかと思つて、お待ち申して居ましたが、遂に待つ甲斐もなく、お出でにならなかつたので、この村雨には、有明の月も見えないことであらうと、あきらめて、寢たのであります。

月日程なく移りぬれば、院も宮々も、各〻ちりぢりにあかれ給ふほど、今少し、物悲しさまさる御心の中どもは、つきせねど、世のならひなれば、さのみしもはいかゞ。昭慶門院(幹子)は、あまたの宮だちの御中に、勝れてかなしきものに思ひ聞えさせ給ひしかば、御處分なども、いとこちたし。(龜山)

大井河にむかひて、離れたる院のあるをぞ奉らせ給へれ

ば、そこにおはしまししほどに、川端殿の女院など、人は申し侍りし。かの所は臨川寺とぞいふめる。都にも土御門室町にありし院、いづれも、この頃は、寺になりて侍るめりとぞ。めでたくこそあはれなれ。

【世のならひなれば、さのみはいかゞ】人に悲しみは盡きないけれども、中陰がすめば、別れて立ち去るのが世の習ひであるから、さう何日までも、そのまゝ居ることは出來ないの意。

●なか〳〵さるべき女御更衣も云々　却つて然るべき女御更衣もなかつたの意。四〇〇頁參照。○いとよく紛れさせ　コツソリ種々の人を愛せられるを。○いどみ顔なる御方方　互に寵を爭ふ人々。○數そひ　さういふ人が多くなる。○遊義門院の御志　遊義門院を愛せられる御志。○をさ〳〵　殆ど。○おしなべたらぬさまに　一通りならず。○御おぼえ　御寵愛。○御姉宮　瑞子の姉君。龜山の妃。四七二頁參照。○故院にわたらせ云々　龜山院の妃として居られたに比すれば。○おぼ

第十五　うら千鳥

院の上(後宇多)は、御位におはせしほどは、なか〳〵さるべき女御(にようご)・更衣(かうい)も候ひ給はざりしかど、おりさせ給ひて後は、御心のまゝに、いとよく紛(ほぎ)れさせ給ふほどに、この程は、いどみ顔なる御方々、數そひ給ひぬれど、なほ遊義門院(冷子)の御志に、たちならび給ふ人は、をさ〳〵なし。中務の宮(宗尋)の御女(瑞子)も、おしなべたらぬさまに、もてなし聞え給ふ。勝れたる御おぼえにはあらねど、御姉宮(瑞子)の、故院(龜山)にわたらせ給ひしよりは、いと重々しう、おぼしかしづきて、後には院號(ゐんがう)ありて、永嘉門院と申し侍りし御事なり。又一條攝政殿(實經)の姫君(瑞子)も、當代(後二條)堀川の大臣(具守)の

家にわたらせ給ひし頃、上﨟に、十六にて參り給ひて、初つ方は、基俊の大納言、疎からぬ御中にておはせしかど、かの大納言の東下りの後、院（後宇多）に參り給ひしほどに、殊の外にめでたくて、内侍のかみになり給へる、昔おぼえて面白し。加階し給へりし朝、院（後宇多）より、

そのかみに頼めし事のたがはねば
なべて昔の世にやかへらむ

御返し、

契りこし心の末は知らねども
この一ことや變らざるらむ

【一條攝政殿の姫君も云々】實經の女項子も、當代が具守の家にお出でになつた頃、上﨟として參られた。その時御年は十六であつた。この

しかしづきて　院が寵幸せられる。○基俊　具守の弟。○疎からぬ御仲　互に愛しあふこと。○東下り　正應二年十月將軍について鎌倉に下つたこと。○めでたくて　御おぼえめでたく。○内侍のかみ　尚侍。内侍司の長官。○加階し給へりし朝　位階の昇つた竪朝。○内侍のかんの君　カンはカミの音便。

方、初めは具守の弟基俊と相愛の仲であつたが云々の意。○この「當代」の語は、本章の年代より推して考へれば、どうしても後二條帝とせねばならぬ。大日本史には、この文句をそのまゝ譯して「尚侍藤原項子。攝政實經女也。當帝（後二條を指す）御二内大臣具守家一召而幸レ之。嘉元元年三月爲二尚侍一叙二從三位一。及二帝崩一爲レ尼。」とある。ところが女院小傳によれば、項子は「乾元二年（大日本史に嘉元年とあるは、この年八月に改元があつた爲である）三月五日爲二後二條尚侍一三十六。」とある。然らば、十六の年は、弘安六年で、後二條帝降誕の弘安八年よりも前のことになつて、年があはない。若し假に二十六の誤であるとすると、永仁元年となる。然らば、帝九歳の時である。次に項子の愛人基俊が鎌倉に下つたのは、正應二年十月（十六日出發）のことで、基俊二十九、項子（二十六歳といふ假定に從へば）二十二の時である。そして本文の記事によれば、項子が後宇多院に參つたのは、この正應二年以後である。但し「後」といふのは、直後の意か、或はズツと後の意か分らないが、この正應二年から項子の尚侍となつた乾元二年までは、十四年ある。此等の事實を總括して考へて見ると、矢張り

二十六とあるべき所であらう。兎に角、院との關係は、餘程早くからあつたもので、後二條帝の御侍といふも、帝との間には、さういふ關係はないのであらう。或は本文の「當代」も院のことではあるまいか。

【昔おぼえて面白し】昔の事がしのばれて、面白い。○次の歌の意によれば、かつて、内侍のかみにしてやらうなどの御話もあつて、基俊との關係のあつた頃から、既に深い御關係があつたのであらう。

【そのかみに頼めし事の云々】「頼めし」（他、マ下二）は頼みに思はせた。以前約束した事を違へず、今度かうして加階させたのであるから、すべての事も昔にかへり、自分に親しくすることであらう。

【契りこし心の末は云々】以前から御約束になつて居る、あなたの御心が、此の後どう變るかは分りませんが、只今のこの御一言は變りますまい。

露霜かさなりて、程なく德治二年にもなりぬ。遊義門院（後宇多院）のおぼしさわそこはかとなく御惱ときこえしかば、院（後宇多院）

●露霜かさなりて　月日が經つての意。○そこはかとなく　特に何處が惡いといふでもなく。○あへなし　はりあひなし。崩御は同年七月二十四日のこと。○御髮下し　七月二十六日。○ひたぶるに　全く。○聖にぞ云々　聖僧の如くなられた。

●八幡　石清水八幡宮。○東寺　京都下京區九條町。○三七日　二十一日。○加行　受戒・灌頂などの儀式の前に豫め行ふ勤行。○禪助僧正　内大臣通成の子。○密宗　眞言宗。○男ぞおりて云々　女は使はれないので、供御の事なども、男が臺所に下りてした。○御臺　供御の臺盤。○持齋　精進潔齋の行をすること。

ぐ事かぎりなし。よろづに、御祈・祭・祓と、のゝしりしかど、かひなき御事にて、いとあさましく、あへなし。院（後宇多院）も、それゆゑ御髮おろして、ひたぶるに聖にぞならせ給ひぬる。その程、さまざまのあはれ、思ひやるべし。悲しき事ども多かりしかど、皆もらしつ。

明くる年（德治三）の春、八幡の御幸の御歸りざまに、東寺に三七日おはしまして、御灌頂の御加行とぞ聞ゆる。仁和寺の禪助僧正を御師範にて、かの寬平の昔をやおぼすらむ、密宗をぞ學せさせ給ひける。六月には、龜山殿にて、御如法經書かせ給ふ。御髮おろし給ひて後は、大方女房は仕うまつらず。男ぞおりて御臺などは參らせ、よろづにつかうまつる。いつも御持齋にておはします。

●善智識　よく人々を導いて善道を修めしめる佛門の大導師。卽ち高德敎化の僧尼をいふ。○北山の准后・實氏の室大宮院及び東二條院の母。○梵字縫はせ　髮毛で梵字の形を縫ふこと。○かの御手の裏に云々　亡くなられた時、その御掌に法華經の文句を書くこと。○一字三禮　一字を書く毎に三度拜禮すること。○おぼし入りたる程　一心に菩提をとぶらはれること。

いとありがたき善智識にてぞ、故女院(子)はおはしましける。嵯峨の今林殿にて、御佛事なども、日々に怠らずせさせ給ふ。この今林は、北山の准后(子)のおはせし跡なり。遊義門院(子)の御髮にて、梵字縫はせ給へり。かの御手の裏に、法華經一字三禮に書かせ給ひて、攝取院にて供養せらる。大覺寺の覺守僧正御導師なり。故女院(子)の御骨も、今林に法華堂建てられて、置き奉らせ給へれば、月毎の廿四日には、必ず御幸あり。おぼし入りたる程いみじかりき。

【かの寬平の昔をやおぼすらむ】　昔宇多帝の增信を師とし、東寺で灌頂を受けられたことを指す。

【いとありがたき云々】「故女院は、いとありがたき云々」とつゞくべき所。再び還つて女院のことを述べたのである。

●例ならず　御病氣。○五壇・藥師・愛染　一六三頁を見よ。○奉幣神馬　幣帛を奉り神馬を獻ずること。○むげに　一向に。○不覺に　人事不省となられたこと。○御氣色かはる　危篤。○世のひゞき　世の中の騷ぎ。○所もなきまで　人の居る場所もない程。○果てさせ給ひぬ　崩御。御年二十四。○かきくれたる雲の上云云　思ひ惑へる宮中の有樣。○中宮　正安四年八月二十二日入內、二十八日女御。嘉元元年二十四日中宮。○まかで宮中を退出。○御わざの沙汰　御大葬の儀。○御車寄せらる　御棺を載せる爲に。○御素服云々　具守が喪服を著かくて八月の初つ方より、內の上(後二)例ならずおはしますとて、さまざまの御修法・五壇・藥師・愛染、いろ〳〵の祕法ども、諸社の奉幣・神馬、何かとのゝしりさわぎつれど、むげに不覺にならせ給ひて、廿三日御氣色かはるとて、世のひゞきいはむ方なく、馬・車走りちがひ、所もなきまで、人々は參りこみたれど、いとかひなく、廿五日子の時ばかりに、果てさせ給ひぬ。火の消えぬる樣にて、かきくれたる雲の上のけしき、いはずとも推測られなむ。まことや、中宮(予)は、德大寺の公孝の太政大臣の御女ぞかし。珍しくかの御家に、かゝる事のいたくなかりつるに、御おぼえもめでたくて候ひ給へるに、あさましともいはむ方なし。廿八日にまかで給ふ。先帝の御わざの沙汰あり。院號あり

て、後二條院とぞ聞ゆる。堀川右大將具守御車寄せらる。心の中いかばかりかおはしけむ。大將になり給へるも、この御門（後二條）の、西華門院（子基）むつまじうも仕う奉り給へるに、いとほしき御事なり。御素服を著給はざりしをぞ、思はずなる事に、世の人もいひさたしける。内侍のかんの君（子項）も様かはり給ふ。中宮（見仲）も院號ありて、長樂門院と聞ゆ。よろづあはれなる事のみ、書きつくしがたし。

【珍しくかの家に云々】 德大寺家から上つて、中宮となられたのは、實に珍しい事である上、又帝の御寵愛も厚かつたのにの意。

【大將になり給へるも云々】 具守が大將となつたのも、つまり帝が御母なる西華門院（具守長女）に孝養を盡される爲、自然外祖父なる具守にも厚くせられたのであつたが、氣の毒な事であるなどの意であらう。少し言葉が足らぬやうである。

●御日數　中陰のこと。○遊義門院の御事にうちそへて　遊義門院の崩御の上に又後二條の崩御などあつたをいふ。○帥の親王の御事　帥の親王を東宮に立てようといふこと。○相違なしとて　東でも御諒の通りといふので。○御悦申　拜賀。○行幸に參り給ふ　太政官廳の御即位行幸の供奉。○あるべき限りの事ども　御即位式に關する事をいふ。

春宮（花園）は正親町殿へ行啓なりて、劍璽わたさる。八月廿五日踐祚なり。十二にぞならせ給ふ。夢の中の心地しつゝも、程なく過ぎうつる。御日數さへ果てぬれば、盡きせぬあはれ、さむる世なけれど、人々も、おのがちりぢりになる程、今一しほ堪へがたげなり。

持明院殿（伏見）には、何時しか、めでたき事どものみぞ聞ゆる。大覺寺殿（後宇多）には、遊義門院（子禧）の御事にうちそへて、御涙のひる世なくおぼさるべし。帥の親王（後醍醐）の御事を、あづまへの給ひ遣はしたる、相違なしとて、九月十九日立太子の節會（せちゑ）ありて、坊に居給ひぬ。今はと、世をとぢむる心地しつる人々、少しなぐさみぬべし。その年十月大（たい）なりつるを、保元の例とかやとて、十一月朔日に宣下（せんげ）せられたり。あた

●御冠　元服。○引入　加冠の役。○理髪　髪を取り上げる役。○南殿　紫宸殿。○ふしみ　箏の名。○きさぎゑ　笙の名。○後宴　御元服の後群臣に酒祿を賜ふ儀。○なつかしう　親睦。○朝覲の行幸　二三八頁を見よ。○廣義門院　後伏見院の后。花園帝の准母。○國母　天子の御母。

らしき御代にあたりて、月日さへあらたまりにけり。十一月十六日(花園)御即位あり。攝政は後照念院殿(冬平)、今日は御悦申ありて、やがて行幸に參り給ふ。あるべき限りの事ども、古きにかはらで、めでたく過ぎゆく。

【今はと世をとぢむる心地云々】大覺寺派は後宇多院崩御の後、敵派の花園帝が即位せられたので、今はもう世も最後だと思つて居たところが、今度思ひがけなくも、又大覺寺派の帥の親王が東宮となられたので、少しは安心したの意。

【保元の例とかやとて云々】その年の十月は大の月で、三十日の筈であつたが(新暦とは別である)、小の月にかへて、即ち一日飛ばして、その日を十一月一日として、御即位式を行はれた。○保元の例とは、保元元年、十月三十日を十一月朔日とせられたことを指す。

延慶二年十月廿一日御禊、同じ廿四日大嘗會、應長元年正月三日、御年十五にて御冠し給ふ。御諱富仁ときこゆ。引入には殿(冬平)、理髪家平仕うまつり給ふ。南殿の儀式果てて、御裝改めて、更に出でさせ給ふ。清涼殿にて御遊はじまる。攝政殿(冬平)箏ふしみと、いふ名物、右大將公顯琵琶(玄上)、土御門大納言通重笙きさぎゑ、和琴大炊御門中納言冬氏、笛は西園寺中納言兼季、別當季衡笙の笛吹き給ひけり。篳篥公守朝臣、拍子有時、めでたく、さまざまおもしろくて明けぬ。五日には後宴とて、今少しなつかしう面白き事どもありき。この御門(花園)をば、新院(後伏見)の御子になし奉らせ給ひてしかば、朝覲の行幸の御拜なども、この御前にてぞありける。廣義門院(寧子)も、同じく國母の御心地にて、よろづめでたかりき。

【南殿の儀式果てて云々】紫宸殿における御元服の儀式が終ると、帝は御服裝をお改めになり、更に出御ましました。

●さばかり　あれほど。○いみじく　すぐれて。○いかばかりかと云々　どんな立派な事が出來ようかと思はれて居たけれども。○煩　面倒なこと。○今だにと云々　今なりとも撰集をしようと急ぎ思ひたゝれて。○限りなき院の御おぼえの人　非常に院の御寵愛の厚い人。○さはらむやは　妨むる人は多かつたが、そんな事が邪魔にならうや、何の故障もなくやつてのけた。○歌の姿　歌の風調。○御手　御筆蹟。○行成　藤原。道風・佐理と共に日本三蹟といはれた人。○世尊寺流の祖。萬壽四年薨ず。○やさしうも強うも　草體・眞體共に。

【この御門をば新院の御子になし奉らせ云々】　花園帝は、伏見院の御子であるが、後伏見院の猶子とせられたので、朝覲の行幸も、後伏見院へ參られた。

院の上(見伏)、さばかり和歌の道に御名高く、いみじくおはしませば、いかばかりかとおぼされしかども、正應に、撰者どもの事故に煩どもありて、撰集もなかりしかば、いとゞ口惜しうおぼされて、

我が世にはあつめぬ和歌の浦千鳥
むなしき名をや跡に殘さむ

など、よませおはしましたりしを、今だにと、急ぎたゝせ給ひて、爲兼の大納言うけたまはりて、萬葉よりこなたの歌どもを集められき。正和元年三月廿八日奏せらる。「玉葉集」と

ぞいふなる。この爲兼の大納言は、爲氏の大納言の弟に、爲教右兵衞督(かみ)といひしが子なり。限りなき院の御おぼえの人にて、かく撰者にも定まりにけり。それむ人々多かりしかど、さはらむやは。この院の上(見伏)好みよませ給ふ御歌の姿は、前藤大納言爲世の心地には變りてなむありける。御手もいとめでたく、昔の行成大納言にもまさり給へるなど、時の人申しけり。やさしうも強うも、書かせおはしましけるとかや。

【正應に撰者どもの事故に云々】　正應六年八月、爲世・爲兼・雅有等を集めて、撰集に關する會議があつたが、やがて爲兼が謀反の嫌疑で、佐渡に流され、伏見帝も讓位されるやうな事になつたので、遂に沙汰止みとなつたのである。

【我が世にはあつめぬ和歌の云々】　自分の世には、撰集の沙汰もないの

●御本意　御出家の御本意。○賀茂　賀茂の社。○なかしきさまの事　風流な事。○近くさぶらふ　御側近く仕へて居る。○うちしほたれ　院の御出家のことを思うて涙に沈んで居る。○さと時雨わたり　時雨の雨のさつと降つて來るやうに涙の流れるをいふ。○限りの旅　在俗最後の御幸　○ひきつくろはる　裝ひ飾る

で、遂に歌道の爲、何の爲す所もなかつたといふ評判を後世に殘すであらうと。和歌の浦」は歌道のこと、「跡」は千鳥の緣語。

【この爲兼の大納言は云々】この爲兼といふ人は、爲氏の弟の爲教といふ人の子であろ。

正和も二年になりぬ。今年御本意遂げなむとおぼさる。九月の暮つ方、賀茂に忍びて御籠りの程、をかしきさまの事ども侍りけり。近くさぶらふ女房どもも、うちしほたれつつ、晦方の空のけしき、いとものあはれなるに、御製(見伏)、

長月や木の葉もいまだつれなきに
しぐれぬ袖の色やかはらむ

また、

我が身こそあらすなるとも秋の暮

人々も、さと時雨わたり、袖の上、今日を限りの秋の名殘よりも、忍びがたし。大納言爲子、

惜しむ心はいつもかはらじ
一筋に暮れゆく秋を惜しまばや

又誰にか、

あらぬ名殘を思ひそへずて
いかに慕ひいかに惜しまむ年々の
秋にはまさる秋の名殘を

十月十五日、伏見殿へ御幸あり。かぎりの旅とおぼせば、えもいはず引きつくろはる。廂の御車なり。上達部・殿上人數しらず仕うまつり給ふ。

【長月や木の葉もいまだ云々】まだ九月で、木々の木の葉も紅葉せぬ

●伏見殿がち　伏見殿の方にばかり居られること。○そこはかとなく　何といふことなく。○御惱月日經て　病氣が長くつゞいて。○色變らず　人々が喪服を著ない。○御わたまし　御移轉。

に、却つて時雨もせぬ袖の色が涙の爲に紅に變るのであらうか。

【吾が身こそあらずなるとも云々】　吾が身は浮世を捨てて、此の世の外の人となつても、秋の名殘を惜しむ心は何時も變らないであらう。

【一筋に暮れゆく秋を云々】　院の御出家を惜しむ心は別として、只一筋に暮れゆく秋を惜しまうの意。「あらぬ名殘」は出家せられるを惜しむこと。御出家を惜しむ心の悲しさに堪へないから、最早やそれは心の中におくまいと、却つて反對に言つたのである。

【いかに慕ひいかに惜しまむ云々】　いつも秋の名殘は悲しいけれども、今年は院の御出家といふ事があつて、殊に悲しい。この悲しい秋の名殘を、いかに慕ひ、いかに惜しむべきであらうか、自分は遂に、どうしてよいか全く分らぬ。

世の政なども、新院（後伏見）に讓り奉らせ給ひにしかば、御心靜かにのみおぼされて、伏見殿がちにのみぞ、おはしましし程に、そこはかとなく御惱月日經て、文保元年九月三日かくれさせ給ひにき。伏見院と申しき。御母玄輝門院（俗子）・

永福門院（鎌子）などの御歎き思ひやるべし。御門（花園）は、御輕服（きやう）の儀なれば、天下も色かはらず。この院（伏見）、姫君あまたおはしまししかど、院號は章義門院（聖子）・延明門院（延子）ばかりにておはします。二條富小路の昔の院の跡に、東（あづま）より造りて奉る內裏、この頃、御わたましありしなど、いと〳〵面白かりき。近き事は、皆人々御覽ぜしかば、なか〳〵にて、とゞめつ。

【御門は御輕服の儀なれば】　「輕服」は重服に對する語で、父母に對する服を重服といひ、他を輕服といふ。花園院は、實は伏見院の御子であるが、後伏見院の猶子となつて居られるので、御祖父の關係となるからである。

●三十　三十歳。○待遠　卽位を。○都に出でさせ　院政を行ふ爲、嵯峨より都へ。○さる事にて　龜山殿は仙洞であるから、そこに居られることはいふまでもないが。○大覺寺　葛野郡嵯峨村。○密敎　眞言宗。○深き心ばへ　深遠なる敎理。○神さび　寂しい。○引きかへ　打つて變つて。○事しげき世に　政務の繁雜なこと。○行　佛道の修行。○懈怠し　おこたる。○むづかしく　厭はしく。○わゝしく　亂れがはしく。○御輿　天子の御輿。○職事　藏人のこと。○奏しくだし云云　その由を奏して裁可を請うたをいふ。○攝政　攝政關白。○たゞ人　攝關ならぬ人○清暑堂の御神樂　清暑堂は豐樂院九堂の一。大嘗會巳の日の節會の後行はれるもの。○すくよか　無骨。○めくもの　らしいもの。○あやなく　何の理由もなく。無法にも。○大事　大嘗會を指す。○尋れ沙汰ある　取りしらべ。○かい川の三位顯香　紙屋川の三位顯香。顯雄の子。○いどみて　競爭。○道に好ける云々　道に嗜み深いのは感ずべきことだが、こんなことをするのは惡むべきことであるの意。○やさし　優雅。○むくつけし　恐ろしく惡むべきこと。○流されぬ　關東へ。

第十六　秋のみ山

文保二年二月二十六日、御門(花園)おりゐさせ給ふ。春宮(後醍醐)は、既に三十に滿たせ給へば、待遠なりつるに、めでたくおぼさるべし。法皇(後宇多)都に出でさせ給ひて、世の中しろしめさる。龜山殿は、さる事にて、近頃は、大覺寺のほとりに、御堂建てて、籠りおはしましつゝ、いよ〳〵(後宇多)密敎の深き心ばへをのみ、勤め學ばせ給へば、おのづからも、京に出でさせ給ふ事なく、又參り通ふ人も稀なるやうにて、神さびたりつるを、引きかへ、事しげき世に、行も懈怠し(後醍醐)給へば、むづかしくおぼさる。三月廿九日御卽位なり。行幸の當日に、左大將內經・花山院右大將家定、行列を爭ひて、隨身ども、わゝしくのゝしれば、御輿をおさへて、職事奏しくだしなどすめり。左大將(西園寺)の御父君は、內實のおとゞと聞えし、嘉元の頃、俄かにかくれ給ひにしかば、攝籙も、しあへ給はざりしにより、今はたゞ人にてこそいますべければとて、かく爭ふとぞ聞えし。十月二十七日大嘗會、清暑堂の御神樂の拍子の爲に、綾小路の宰相有時といふ人、大內へまゐり侍るとて、車より下りられける程に、いとすくよかなる田舍侍めくもの、太刀を拔きて走り寄るまゝに、あやなく討ちてけり。さばかり立ちこみたる人の中にて、いと珍らかに、あさまし。さて拍子俄かに異人うけたまはる。大事ども果てて後、尋ね沙汰あるほどに、かい川の三位顯香といふ人、この拍手をいどみて、我こそつ

とむべけれと思ひければ、かゝる事をせさせけり。道に好けるほどは、やさしけれども、いとむくつけし。さてかの三位(藤)は流されぬ。

【左大將内經・花山院右大將家定、行列を爭ひて云々】公卿補任(文保二年の條)によると、

權大納言　正二位　藤家定(廿六)（右大將。云々）

同内經(廿八)（左大將。云々）

卽ち二人は共に權大納言であるが、この方では家定の方が上になつて居る。然るに、近衞の大將としては、内經の方が左であるから、上となるわけである。是が爲に爭が起つたのである。

【左大將の御父君は云々】内經の父内實は嘉元の頃、餓かになくなつた爲、攝關に至らなかつた。是が爲にその子たる内經は勢力がない。かういふわけで、班次を爭ふやうなことになつたのである。○内實は嘉元二年、内大臣正二位で死んで居る。年は二十九。公卿補任に「十二月十七日蒙内覽宣旨。依所勞危急也。同日薨。」とある。

かくて今年(文保二)は暮れぬ。まことや、此度(たゞみ)の春宮(とうぐう)には、後二條院の一の御子(尊良親王)定まり給ひぬれば、御門(後醍醐)坊(ぼう)にておはしましし時のまゝに、冷泉萬里小路殿(れいせいまでのこうぢどの)の寢殿(しんでん)に移り住ませ給へるに、二月(きさらぎ)の頃、軒端の櫻盛りに、をかしき夕ばえを御覽じて、内(後醍醐)に奉らせたまふ。かの花につけて、

御返しは、南殿(なでん)の櫻にさしかへたまふ。

なれにける花は心やうつすらむ
　おなじ軒端の春にあへども
（後醍醐）
花はげに思ひいづらむ春をへて
　あかぬ色香にそめし心を

【なれにける花は心や云々】かつて君が春宮であつた此の御所の軒端の

●御門坊にておはしましし云云　邦良親王は東宮になると御醍醐帝が嘗て東宮であらせられた時の御殿、卽ち冷泉萬里小路の寢殿に移られたの意○二月の頃　三月の誤であらう。立坊も三月九日である。○をかしき夕ばえ　櫻花の夕陽に照らされて美しく趣あるをいふ。○南殿の櫻　紫宸殿の前の階下にある櫻。

(3)

●一つ持明院　同じ持明院。京都上立賣の北、新町の西。○御子のよしにて　花園は後伏見を猶子として居られるをいふ。○まいて　まして。○思ふやうなる　理想的の。○そばそばしき　かどだつ。○癖あるならひ　何か非難すべき事があるのが普通である。○御あはひ　御仲。○まめやか　忠實。○おもほしかはしたる　互に思ひあふ。○この度の坊　後醍醐の皇太子。○

櫻は、昔にかはらず今年も咲き匂うて居るが、年々馴れて居た花は、今も君の方へ心を移すことであらうの「春にあへども」は、御自分の東宮となられたことをも含めていつたものである。

【花はげに思ひいづらむ云々】　なるほど幾春もしみじみと其の色香をめでたことをば、花も忘れず、思ひ出すことであらう。

おりゐの御門（花園）は、御兄の本院（後伏見）と、一つ持明院殿に住ませ給ふ。もとより、御子のよしにておはしませば、まいて、一つ院の内にて、いさゝかも隔てなく聞えさせ給ふ。いと思ふやうなる御有樣なり。さるべき御中といへども、昔も今も、御腹などかはりぬるは、いかにぞや、そばそばしき事もうちまじり、癖あるならひにこそあるを、この院の御あはひ、まめやかに、おもほしかはしたる、いとありがたう、めでたし。本院（後伏見）は、廣義門院（寧子）の御腹の一の御子（光厳）を、この度の坊やにとおぼされしかど、ひき過ぎぬれば、いと遙けかるべき世にこそと、さうざうしくおぼさるべし。御歌合のついでなりしにや、

（伏見）いろ〳〵に都は春の時にあへど
　わが住む山は花もひらけず

大覺寺殿には、ひきかへ、馬・車の立ちこみたるを御覽じて、法皇（後宇多）よませたまひける、

　われ住めばさびしくもなし山里も
　朝まつりごとおこたらずして

【さるべき御中といへども云々】　然るべき御間柄、即ち御兄弟などの仲であつても、昔も今も、御腹の違つた間柄では、どういふわけだか、角立つた事などもまじり、非難すべきやうな事の起るのが普通であるが、この御二方の間には、少しもさういふことはなかつた。

ひき過ぎぬれば　今度は邦良親王にさしこえられて、もうすんでしまつたから。○遙けかるべき世　持明院方の立坊は前途遙遠。○さうざうしく　寂しく物足らず。○朝まつりごと　朝政の字の訓譯。○

(3)

●今の上　今上天皇。○はやうより　早くよりの音便。○わく方なき御思ひ　一途に戀ひ慕ふこと。○年にそへて　年と共に益〻。○やむごとなう　甚だしく。○女御の宣旨　文保二年七月二十八日のこと。○八月　七日。○齢の末　老後。時に七十一。○かしこく　勿體なく。○北山にまかで　禧子の北山なる父の所へ退出の時。○行幸　北山へ○名をえたる月　世に名月と稱せられる月。○殊に光なそへたる　行幸にあつて、光が增したの意。○所がら折がら　云々　場所柄もよく、時節も仲秋の名月の頃でよく。○まろ聞えむ　返事は朕がよまうの意。「まろ」は吾といふこと天子も天子ならぬ人もいふ。

【いろ〳〵に都は春の云々】　都の大覺寺殿方では、いろ〳〵めでたいことが打續くが、この持明院方では、少しもめでたいこともないの意。

【われ住めばさびしくもなし云々】　こゝ（大覺寺を指す）は都離れた山里ではあるが、自分が住んで居ると、政務繁く、人々も寄り集うて、少しも寂しくはないの意。○大覺寺へも始終行つて居られたのである。

今の上（後醍醐）は、はやうより、西園寺の入道おとゞ實兼の末の御女（禧子）、兼季の大納言の一つ御腹にものし給ふを、忍びてぬすみ御覽じて、わく方なき御思ひ、年にそへて、やむごとなう おはしつれば、いつしか女御の宣旨などきこゆ。程もなく、やがて八月に后だちあれば、入道殿も、齡の末に、いとかしこく、めでたしとおぼす。北山にまかでる頃、行幸ありき。八月十五日の夜、名をえたる月も、殊に光をそへたる、所がら、折からおもしろく、めでたき事ども花やかなるに、御姉の永福門院より、今の后の御方へ、御消息聞えたまふ。

今宵しも雲井の月も光そふ
　秋のみ山を思ひこそやれ

御返しは、「まろ聞えむ」とのたまはせて、內の上、

昔見し秋のみ山の月かげを
　思ひいでてや思ひやるらむ

【今の上は、はやうより云々】　後醍醐帝は、早くから、實兼の末女で、兼季と同腹の禧子といふのを、人知れず寵愛せられて居た。

【今宵しも雲井の月も云々】　今宵は名月の夜なるに、行幸さへあつて、空の月も愈〻光を添へることであらうと、あなたを懷しく思ひますの意。「雲井の月」は行幸の意をこめ、「秋のみ山」は皇后のことを秋の宮といふにかけて、（ミヤマーミヤ）、中宮の御里方をいつたのである。

【昔見し秋のみ山の云々】　昔あなたは伏見帝の中宮であらせられたが、

●御母　後醍醐の。○時めく　君の寵愛を得て榮える。○二三日こそあれ　二三日位は分らなかつたが。○その人と云々　連れ去つたのは具親だと分つたので。○めざまし　思ひがけもない。○あさまし　○やむごとなき際にはあらねど　ズット家柄のよい人ではないが。○御おぼえの時　寵愛の深い時。○きびしく咎めさせ　具親を。○さすがにて　併しさうまでは出來なくて　○つかさ　官職。○勘ぜさせ　勅勘。○岩倉の山莊　山城愛宕郡。○すけの君　大納言典侍。○つらしとおぼすもの　この一件について、かうして浮名の立つたことを、帝はなさけないとは思はれるものの。○らうたがらせ　寵愛。○さしもあらず　本人はそれほど有難いとも思はず。○正身　本人。○すき心　好色心。浮氣。○すゑざまには　後には。○御心とゆるし云云　帝が御心から御許しになつて、この典侍を公泰に賜はつた。○思ひかはして云々　互に相愛して居られたところが。○彼處　公泰の所。○十一月　元應元年十一月十五日崩、御年五十二。○天下一つに　天下一樣に。○染めたして　墨染となること。○葺籠垂　葺で編んだ籠。諒闇の時かけるもの。○まがはさまほしきまでおぼされけれども、さすがにて、つかさ皆停めて、いみじう勘ぜさせ給へば、かしこまりて、岩倉の山莊に籠り居ぬ。花の盛りに面白きをながめて、

うきことも花にはしばし忘られて
　春の心ぞむかしなりける

すけの君は歸りまゐれるを、つらしとおぼすものから、「うきにまぎれぬ戀しさ」とや、いよ〳〵らうたがらせ給ふを、さしもあらず、正身は、なほすき心ぞ絕えずありけむかし。

たえはつる契りをひとり忘れぬも
　うきも我が身の心なりけり

とて、ひとりごたれける。すゑざまには、公泰の大納言、

當時行幸があつて、めでたい光を添へられたことを思ひ出して、かくは思ひやられるのでございませう。

御門（後醍醐）の同じ御腹の前齋宮（子）も、皇后宮にたゝせたまふ。御母准后（忠子）も、院號ありて、談天門院とぞ聞ゆめる。

よろづ花やかに、めでたき事どもしげう聞ゆ。內（後醍醐）には、萬里小路大納言入道師重といひしが女、大納言の典侍とて、いみじう時めく人あるを、堀川春宮の權大夫具親の君、いと忍びて見そめられけるにや、かの女（侍）かき消ち失せぬとて、もとめたづねさせ給ふ。二三日こそあれ、程なく、その人とあらはれぬれば、上（後醍）いとめざましく、にくしとおぼす。やむごとなき際にはあらねど、御おぼえの時なれば、きびしく咎めさせ給ひて、げに須磨の浦へも遣

まがしき　忌々しい。不吉な
○いみじく　悲しく、うれは
しくなどの意。

いまだ若うおはせし頃、御心とゆるして給はせければ、思ひかはして住まれしほどに、彼處(かしこ)にて失せにき。御門(後醍醐)の御母女院(談天門院)、十一月失せ給ひにしかば、内の上(後醍醐)御服(ぶく)たてまつる。天下一つに染めわたして、葦簾垂(あしすだれ)とか、いとまが〳〵しきものども懸け渡したるも、あはれに、いみじくぞ見ゆる。五節(ごせち)もとまりぬ。若き人々など、さうざうしく思へり。

【皇后宮にたゝせ給ふ】　皇后は天皇と夫婦關係あるべきが普通であるが、堀河帝が皇姉媞子内親王を皇后と稱せられてから後には、偶々一の資格として皇后と稱することがある。これもその一例である。

【げに須磨の浦へも云々】　流罪にも處さうかとまで思はれたがの意。源氏物語に、光源氏が朧月夜の内侍と契つた罪によつて、須磨に流されることを思ひ寄せて書いたのである。○「やむごとなき際にはあらねど」の語も源氏物語の語を借りたのである。

●坊の御時　後醍醐帝のまだ東宮であつた時。○女三の御子　第三女にあたる御子の意○はやう　早く。○集　勅撰集のこと。○玉津島の社　紀伊海部郡。祭神衣通姫。住吉人丸(異説があるが)と共に和歌三神といふ。○歌よむと思へる限り　歌人を以て任ずる限り。○この大納言の風を傳へたる　爲世の歌風を傳へて居るもの。○洩るゝものなし　一人も殘らず皆參つた。○

【うきことも花にはしばし云々】　花を見れば、身の憂さも暫しは忘れる。春の樂しい心だけは、かうした身にも、昔のまゝに變らずに居る。

【うきにまぎれぬ戀しさ】　新續古今集(戀)に「かくばかり思ひ絶えにし年月のうきにまぎれず人の戀しき」(顯朝)とある歌を取つた語である。

當代(後醍醐)もまた、敷島の道をもてなさせ給へば、いつしかと、勅撰の事おほせらる。前藤大納言爲世うけたまはる。玉葉のねたかりし節も、今ぞ胸あきぬらむかし。この大納言(爲世)の女、權大納言の君(爲子)とて、坊(ぼう)の御時、限りなく思されたりし御腹に、一の御子(尊良)・女三の御子(尊子)・法親王(尊澄)など、あまたものし給ふ。かの大納言の君(爲子)は、はやうかくれにしかば、この頃三位贈らせ給ふ。贈從三位爲子とて、集(しゅ)にも、やさしき歌多く侍るべし。さて大納言(爲世)

子ども孫どもなど　爲世の子や孫。○勢ことにひゞきて下る　威勢よく騒ぎ喧しく言ひながら下つた。「下る」は都より地方へゆくこと。○住吉攝津住吉郡。○逍遙しつゝ諸所を悠々と遊び廻りながら○のゝしりて　喧しく言ひ騒ぐ。○思ふ所加へたるぬし　議見のすぐれた人。○心にくき　奥ゆかしい。○沙汰　評判。

は、人々に歌すゝめて、玉津島の社に詣でられけり。大臣・上達部よりはじめて、歌よむと思へる限り、この大納言の風を傳へたるは、漏るゝものなし。子ども、孫どもなど、勢ことにひゞきて下る。先づ住吉へ詣で、逍遙しつゝのゝしりて、九月にぞ、玉津島へ詣でける。歌どもの中に、大納言爲世、

今ぞ知る昔にかへるわが道の
　まことを神も守りけりとは

かくて元應二年四月十九日、勅撰は奏せられけり。「續千載」といふなり。新後撰集と同じ撰者の事なれば、多くは、かの集に變らざるべし。爲藤の中納言、父よりは、少し思ふ所加へたるぬしにて、今少し、この度は心にくき樣なりな

どぞ、時の人々沙汰しける。

【玉葉のれたかりし節も云々】　玉葉集は爲兼の撰で、爲世は關係しなかつた。で嫉み思うて居たが、今度は自分が、かうして勅撰の事を承るに至つたので、始めて胸のムシヤクシヤが霽れたらうの意。○序に當時の歌道について一言しておく。當時、歌道には門閥といふものが出來て、それが互に軋轢した。即ち後成・定家の後は左表の如く三家に分れて、それが互に勢力の競爭をした。

後成―定家―(イ)爲氏―爲世―爲通―爲定
　　　　　―(ロ)爲教―爲兼
　　　　　―(ハ)爲相

但し(イ)は御子左、又後に二條家といひ、(ロ)は冷泉家といふ。この中毘沙門堂の歌は、大に他と趣を異にして、隨分奇拔な歌をよんだ。勿論その中には、優秀なものもあつたが、他の攻撃は隨分はげしく、かの爲兼の撰になる玉葉集の如きは、後世「風體わろきは風雅、歌のわろきは玉葉」などと言はれた位

●しげう「しげく」の音便。○萩の戸　清涼殿の北の間の名。○異なる御遊　特別盛な管絃の御遊。○春日の御榊　春日大明神の神靈の宿ります榊。○遷殿　神社修繕などの時、假に神體を奉遷しておく宮殿。○題たてまつる　題詠の題を奉つた（爲藤が）。○えらせ　選ばせ。○忠守　典藥頭。丹波長有の子。○この道のすきもの　歌道に熱心な人。○名たて　名ぶれ。○安福殿　紫宸殿の西南。永安門の北。○晝の御座　天皇の晝間出御の時ましますところ。清涼殿の内。○上の戸　清涼殿の殿上の東の入口。○無名門　殿上の間から小板敷を下り、紫宸殿に至る土廊にあるもの。○右近の陣　月華門の内。○遣水　庭の面などを流れて居る水。○安福殿の釣殿　里内裏（さとだいり）で、その釣殿を安福殿に擬したのであらう。○床子　机のやうな腰掛。○簀子の高欄に云々　簀子の高欄に背中をあて、母屋の方を向いて坐して居ると○左右の講師　歌合は右と左とに分れるから、講師が二人ある。○うるはしきこと云々

であある。兎に角かうしてお互に相爭つて居たのであつた。

【今ぞ知る昔にかへる云々】　爲家等の爲に邪道に陷れられて居た吾が歌道も、漸く昔の正しい道に還るを得たについて、今や自分は、神も正しい道を護つて下さることを知つた。

【爲藤の中納言父よりは云々】　爲藤は、父よりも少し見識の勝れた人で、それが、たづさはつたのだから、今度の撰集は、多少勝れた所があるなどと、當時の人が評判した。

院（後宇多）にも内（後醍醐）にも、朝政の隙々には、御歌合のみしげう聞えし中に、元亨元年八月十五夜かとよ、常より殊に月面白がりしに、上（後宇多）萩の戸に出でさせ給ひて、異なる御遊なども、あらまほしげなる夜なれど、春日の御榊、遷殿におはします頃にて、絲竹のしらべは、折惡しければ、例の只内々御歌合あるべしとて、侍從の中納言爲藤召されて、俄かに題たてまつる。殿上にさぶらふ限り、左右同じ

ほどの歌よみを、えらせ給ふ。左、内の上（後醍醐）・春宮大夫公賢・左衞門督公敏・侍從中納言爲藤・中宮權大夫師賢・宰相惟繼・昭訓門院（禧子）の春日爲世女、右は藤大納言爲世・富小路大納言實教・洞院中納言季雄・公修・宰相實任・少將内侍爲佐女・忠定朝臣・爲冬・忠守などいふ醫師も、この道のすきものなりとて、召し加へらる。衞士のたく火も、月の名たてにやとて、安福殿へ渡らせたまふ。忠定中將、晝の御座の御佩刀を取りてまゐる。殿上の上の戸を出でさせ給ひて、無名門より、右近の陣の前を過ぎさせ給へば、遣水に月のうつれる、いと面白し。安福殿の釣殿に床子たてて、東面におはします。上達部は、簀子の高欄に背中おしあてつゝ、殿上人は、庭に候ひあへるも、いと艷なり。池の御船さしよせ

端正といふよりは寧ろ艶になまめかしい。○けしきばみて　様子ぶつて。○とみに　直に。○心もとなし　待遠しい。○講じあげたる　よみあげた。○折柄いみじうなむ　丁度折にあつて、一入面白い。○けしうはあらぬ　悪くはない。

て、左右の講師隆資・爲冬乗せらる。御酒などまゐるさまも、うるはしきことよりは、艶になまめかし。人々の歌、いたくけしきばみて、とみにも奉らず。いと心もとなし。照る月なみも、くもりなき池のかゞみに、いはねどしるき秋のなかば、げにいと異なる空のけしきに、月も傾きぬ。明方近うなりにけり。上(後醍)の御製、

鐘の音もかたぶく月にかこたれて

をしと思ふ夜は今宵なりけり

と講じあげたるほど、景陽の鐘も響をそへたる、折柄いみじうなむ。いづれもけしうはあらぬ歌ども多く聞えしかど、御製の「鐘の音」にまされるはなかりしにや。

【衛士のたく火も云々】　衛士のたく火の爲に明るさを増すと思はれては、月の名なれにならうかと思ふ程、月の明いをいふ。

【照る月なみも云々】　源順の「水の上に照る月浪な數ふれば今宵ぞ秋のもなかなりける」（拾遺秋）とあるによつた語。「月なみ」は、月次に浪をそへ、「くもりなき」は池のかゞみにかゝる。月の明かなるによつて、仲秋なることは、いはずして明かである。

【鐘の音もかたぶく月に云々】　一年中で、明ける　のは惜しいと思ふ夜は、實に今宵であるの意。されば月の傾くにつけて、曉告ぐる鐘の音も詫び歎かれる。

【景陽の鐘】　只鐘の音の響いて来たといふだけの意。但し出所は、南史齊武裴皇后傳に「上數遊二幸諸苑囿一載二宮人一從レ車。宮内深隱。不レ聞二端門鼓漏聲一。置二鐘于景陽樓上一。應二五鼓及三鼓一宮人聞二鐘聲一早起飾。」とあるもの。

かくて今年もまた暮れぬ。明くる春元亨正月三日朝覲の行幸あり。法皇(後宇)は御弟の式部卿のみこ(恒明)の御家、大炊御門京極常磐井殿といふにぞおはします。内裏は二條萬里小路な

●二條萬里小路　續史愚抄には富小路とある。○陣の中　常磐井殿は内裏の郭内で、陣の中になつて居るの意。陣は衛府の官人の詰所。○徒歩よ

り　徒歩で。○仕う奉らる　供奉のこと。○この院　常磐井殿。○池のすまひ　池の樣子　○よしある　由緒ある樣に面白く作られて居る。○時ならぬ花の木ずゑ　造花をつけたをいふ。○洲崎　庭の池中にさし出た砂地。○霞の洞　上皇の御所。○棟門　樓門（二階門）に對し、樓なくして、常の屋の棟のやうに作つた門。○御輿をおさへて　天子の乘輿を止めて。○劍璽は云云　劍璽は公泰が持つて御供したのであつたらうの意。○公卿の座　客間。○とばかりありて　暫くして。○香染　淡紅に黄を帶びた色、卽ち茶褐色。○階の間　正面の間。○廂　母屋の周圍の細長い間

れば、陣の中にて、大臣以下、徒歩より仕う奉らる。關白内經・太政大臣通雄・左大臣實泰・右大將兼季・右大將冬教・中宮大夫實衡、中納言には具親・公敏・爲藤・顯實・經定、宰相には實任・冬定・公明・光忠、中將は公泰・資朝、殿上人は頭中將爲定・修理大夫冬方を始めて、殘るは少し。この院も、池のすまひ・山の木だち、もとよりよしあるさまなるに、時ならぬ花の木ずゑをさへ、造りそへられたれば、春の盛りに變らず、咲きこぼれたるに、雪さへいみじく降りて、殘る常磐木もなし。洲崎に立てる鶴のけしきも、千代をこめたる霞の洞は、誠に仙人の宮も、かくやと見えたり。京極おもての棟門に、御輿をおさへて、院司事のよしを奏す。亂聲の後、中門に御輿を寄す。中門の下より出づる遣

○御拜　後宇多院を拜し給ふこと。○内の御乳母　後醍醐帝の御守役。傅。○まみいたう云々「まみ」は目つき。「しぐる」は涙ぐむこと。○そのかみ　帝のまだ小さかつた時分。○もとの道　行かれた時通られた道。○入らせ給ふ　もとの寢殿へ。○茵　綿入の座蒲團。○末の廂　廂の外に更に垂木を出して廂としたもの。孫廂。○うきも我が身の五四三頁を見よ。○さぬき・こいま　共に雜仕の名。（此等の人が一の車の尻に乘つて居る）。○中宮内侍　藤原公廉の女。後、新待賢門院といふ。「准后」云々の語は此人にかゝる。○夏引・いはれ　雜仕の名。○尻　車の尻。○今まゐ

水に、小さく渡されたるそり橋の左右に、兩大將（冬教兼季）ひざまづく。劍璽は、權亮宰相中將公泰つとめられしにや。關白（内經）、公卿の座の妻戸の御簾をもたげて、入り奉らせたまふ。とばかりありて、寢殿の母屋の御簾皆あげわたして、法皇（後宇多）出でさせたまへり。香染の御衣、同じ色の御袈裟なり。御袈裟の箱を御側に置かる。内の上（後醍醐）、公卿の座より高欄を經たまふ。御供に關白（内經）さぶらひたまふ。階の間より出で給ひて、廂に御座奉りたれば、御拜し給ふほど、西東の中門の廊に、上達部多くうち重なりて、見やり奉る中に、内の御乳母の吉田の前大納言定房、まみいたうしぐれたるぞ、あはれに見ゆる。そのかみの事など思ひ出づるに、めでたきよろこびの涙ならむかし。御拜終りぬ

れば、又もとの道を經給ひて、公卿の座に入らせ給ひぬ。法皇（後宇多）も内に入り給ひて、しばしありて、左右の樂屋の調子とゝのほりて後、又御門（後醍醐）入らせ給ふ。法皇も同じ間の内に、御茵ばかりにておはします。末の廂に、内より參れる女房どもさぶらふ。一車に小大納言君師重女、「うきも我が身の」とよみし人の妹なり。帥典侍實茂女・さぬき・こいまとかや。二の左に新兵衛・中宮内侍（實子）、後に准后ときこえにき、夏引・いはねを。三の車に少將内侍・尾張内侍、尻に青柳、今まゐりなどきこゆ。上達部、御前の座に着きて後、御臺まゐる。役送公泰宰相中將、陪膳右大將兼季。その程、舞人ひざまづく。地下の舞は目馴れたる事なれど、折柄にや、今日は殊に、面もち・足ぶみも、めでたく見ゆ。法皇（後宇多）

り　新參者の意。○御臺まゐる　供御を奉る。○地下の舞　昇殿を許されぬ五位以下の者の舞。○折柄にや　かういふ場合であるからか。○面もち　顔つき。○御覺え　寵遇ある人。○かきくらし　烈しく降るないふ。○何のあやめも云々　「あやめ」は筋目・區別などの意。全く何も見えなかつた。○御箱　笛の箱。○末　末拍子。樂曲を前後に分ち、後の方。○御贈物　院よりの。

の御覺えにて、壽王といふ人、松殿の某とかやが子なり、落蹲など舞ふと聞きしかど、夜も更け、雪も殊にかきくらして、何のあやめも見えざりき。その後、御前の御遊はじまる。頭大夫多方、御箱の蓋に御笛入れて、持ちてまゐる。關白（内覽）とりて御前にまゐらせたまふ。右大將（兼季）も笛、中宮大夫（徳實）琵琶、大宮大納言笙、春宮大夫（公賢）琴、右宰相中將（公泰）は和琴、光忠宰相篳篥、兼高も吹きしにや。拍子は左大臣（家實）、末は冬忠の宰相なり。更けゆくまゝに、上（後醍醐）の御笛の音すみのぼりて、いみじくさえたり。左の大臣（家實）の安名尊・伊勢海、限りなくめでたく聞ゆ。事ども果てぬれば、御贈物まゐる。錦の袋に入れたる御笛、箱の蓋にするゑらる。左大臣（家實）とりつぎて、關白（内覽）にたてまつる。御前

●世の中の事ども　當時なほ院政を執つて居られたから、政務に關する事。○御行　佛道の修行。○うるさく　政務の事などは面倒に。○あづまへ遣はさる　鎌倉へやられた　花園院宸記に、元享元年の事とある。○御門に云々　定房を遣はされたのは、政務を後醍醐帝に讓らうといふ御消息であらう。○めざまし　意外なことに驚く。○内　禁中。○なま腹さたなさ　根性の惡いこと。**ナマ**は物のなり整はぬ**ナマ**、但しこゝは殆ど特殊の意はないものと見てよい。○うれはしげに　憂ふべきさまに。○許し申すわざもがな　**ガナ**は希望を表す助辭。○歸りのぼりぬ　都へ歸つた。○御心のまゝ　後醍醐に御讓位の事は、御希望通り。○奏したり　執權が。○院の文殿　院中で訴訟を決斷する所。○議定所　朝廷で政を議定する所。天皇親政の爲院の文殿をこゝに移されたのである。○評定衆　院の文殿に候して政治を議する者。○世をしたためさせ給ふ　天下を治め給ふ。○はしたなう　完全の意　博學なこと。○くもりなかめり　暗き所なかるべしの意。

に御覽ぜさせて、冬方を召してたまはす。次に唐の赤地の錦の袋に、御琵琶入れてまゐる。その後、御馬、殿上人口をとりて、御前にひきいでたり。ほのぼのと明くる程にぞ、歸らせ給ひぬる。

法皇(後宇多)は、動もすれば、大覺寺殿にのみ籠らせおはしますす。人々世の中の事ども奏しに參りつどふ。今は一筋に、御行にのみ御心入れ給へるに、いとうるさくおぼせば、その夏の頃、定房の大納言あづまへ遣はさる。御門(醍醐)に、天の下の事讓り申さむの御消息なるべし。大方は、いとあさましうなり果てたる世にこそあめれ。かばかりの事は、父御門(後宇多)の御心に、いとやすく任せぬべきものをと、めざましけれど、昨日・今日に始まりたるにもあらず、承久より

こなたは、かくのみなりもて來にければなめり。內に近くさぶらふ上達部などの、なま腹ざたなき、わが思ふ事のとどこほりなどするを、なほ法皇(後宇多)をうれはしげに思ひ奉りて、この事いかであづまより許し申すわざもがなと、祈りなどをさへぞしける。かくて大納言(別定)ほどなく歸りのぼりぬ。御心のまゝになるべく奏したりとて、院の文殿、議定所(後醍醐)にうつされ、評定衆など、少々かはるもあり。さて世をしたゝめさせ給ふ事、いとかしこう、あきらかにおはしませば、昔に恥ぢず、いとめでたし。御才もいとはしたなうものし給へば、萬の事くもりなかめり。三史・五經の御論義なども、ひまなし。

【大方はいとあさましう云々】　今度法皇が院政をやめて、大權を後醍醐

帝に譲られるにつき、わざ〳〵鎌倉の意見を聞きにやられたのを、評したのである。

水無月の頃、中殿の作文せさせたまふ。題は式部大輔藤範奉る。「久しかるべきことならねば、もらしつ。上達部・殿上人三十餘人まゐれり。關白殿房實ばかり直衣にて、御几帳の後にさぶらはせたまふ。上（後圓）は御引直衣、御琵琶支上ひかせたまふ。右大將實衡琵琶、春宮大夫公實箏、權大納言親房笙、權中納言氏忠和琴、左宰相中將公泰笙、右衞門督嗣家笛、右宰相中將光忠篳篥、拍子は例の左の大臣實泰、末は冬定なりしにや。上（後圓）の御琵琶の音、いひしらずめでたし。右大將（實衡）は何にかあらむ、心とけても、かきたてられざりき。御遊果てて後、文臺めさ

○三史　史記・前漢書・後漢書　○五經　毛詩・尚書・禮記・周易・左傳。　○論義　人々の集つて互に研究討議すること。　●中殿　清涼殿。　○作文　詩を賦すること。　○女のまねぶべきこと云々　例の尼の語。そんなことは、むつかしいことであるからと謙遜したのである。　○心とけても云々　打ちとけては琵琶を彈かれなかつた。　○かへすがへす　幾回も。　○則詠にせらる　節をつけて吟ずること。　○名のりすてゝ　一聲だけ鳴いてゆくこと。　○まことしき事　まじめな事。作文を指す。　○心づかひ　注意。　○あやまち　失錯。　○かたき題　むつかしい題。　○御覽じわく　賢愚を見

分けられる。　○からい事　つらい事。　○心ゆるびなき世　油斷のならぬ世。

●乞巧奠　七夕祭。　○かれて

る。藏人内記俊基、人々の文を取り集めて、一度に文臺の上におく。披講の終るほどに、短夜も、ほのぼのと明け果てぬ。御製を、左の大臣實泰かへすがへす誦じて、うるはしく朗詠にし給ふ。聲いとうつくし。折節、郭公の一聲名のりすてて過ぎたるは、いみじく艶なり。かやうのまことしき事は、かねて人々も心づかひすれば、あやまちなかるべし。時に臨みて、俄かにかたき題をたまはせて、内々詩をつくらせ、歌をよませて、賢く愚かなると御覽じわくに、いとからい事多く、心ゆるびなき世なり。

【久しかるべきは賢人の德】「可久賢人德」。その時の詩題。易の傳に「可ゝ久則賢人德。可ゝ大則賢人業。」とあるによる。

その七月七日乞巧奠、いつの年よりも御心とゞめて、かね

より　前以て。○歌どもめされ　七夕に關する歌をめされること。○物の音　音樂。○その夜　七夕の夜。○玄象　琶琵の名。○ありし作文　上記の中殿の作文を指す。○鳴板　清涼殿殿上の間より孫廂に通ふ板敷。踏めば鳴るやうにしたもの。見參の板ともいふ。○つかうまつる　奏する。○上の御局　清涼殿の中、夜の御殿の北。弘徽殿の上の御局とある。圖を見よ。○蘇香　蘇合香。盤渉調。○萬秋樂　盤渉調。○めでたあへり　ほめあつた。○さらでだに　さうでなくても。○ことわりにや　さらでだに寒いのに、樂の音が身にしむので、猶更ゾッとするのも尤もだの意。○鵲の橋　陰暦七月七日の夕、牽牛・織女二星の會する時、鵲が翼を並べて天の川に作るといふ橋。天の川と共に七夕の歌によむ。

てより、人々に歌どもめされ、物の音ども試みさせ給ふ。その夜は、例の玄象ひかせたまふ。人々の所作、ありし作文にかはらず。笛・篳篥などは、殿上人ども、鳴板のほどに候ひてつかうまつる。中宮も、上の御局にまうのぼらせ給ふ。御簾の内にも、琴・琵琶あまたありき。播磨の守永定の女、今は左大臣の北方にて、三位殿といふも、箏彈かれけり。宮の御方の播磨の内侍も、同じく琴彈きけるとかや。琵琶は權大納言の三位殿いみじき上手にておはすれば、めでたう面白し。蘇香・萬秋樂、のこる手なく、幾返となくつくされたり。明方は、身にしむばかり、若き人々めでたうあへり。さらでだに、秋の初風は、げにそゝろ寒きならひを、ことわりにや。御遊果てて、文臺めさる。

この度は、和歌の披講なれば、その道の人々、藤大納言爲世、子ども孫ども引きつれてさぶらへば、上の御製、

笛竹のこゑも雲井にきこゆらし
　今宵たむくる秋のしらべは

順ながるめりしかど、いづれも、只、天の川・鵲の橋より外は、めづらしき節は聞えず。まことや、實教の大納言なりしにや、

おなじくは空まで送れたきものの
　にほひをさそふ庭の秋風

げにえならぬ名香の香どもぞ、めでたくかうばしかりし。

【笛竹のこゑも雲井に云々】今宵牽牛・織女にたむける管絃のしらべは、雲井にまでも響いて、星も面白く感ずることであらうの意。

●程なさに　間の短きをいふ　○正仲元年　元亨四年十二月九日改元。但しこゝの三月は元亨四年の三月で、その二十三日のことである。○松がされ　二九二頁を見よ。○鶴の丸を織る　鶴の翼を延した形を圓くした模様。○固紋　綾の紋を絲をしづめて固く織つたもの。○花山吹　表朽葉、裏黄。○にほひやか　艶。○一の人　攝政關白。○聞えめ「いはめ」と同意。○飽かぬ事なく　何一つ不足なきこと。○上臈の若き上達部　年若くして上達部の上位にある人。○家のやう・家風。○いつものまゝ　平生の通りの風　○劔璽の役　劔璽を持つて供奉する役。○綾のはつれ　綾は武官の冠の飾。兩耳の上に菊花を半分つけたやうな形をしたもの。その隙間から、濃い眉などの透いて見えるをいふ。○頭亮　藏人。○藏人頭中宮亮。○職事　藏人。○衛府のすけ　近衛の中少將。○うちこみたれば　澤山立ち込んで居るので。○走下部　檢非違使廳の下吏。罪人の逮捕・押送等をするもの。放免ともいふ。○鶴の丸を黄にみがきたる　下部の衣裳の樣。鶴を圓くした形の模樣をつけたのである。○一の左　舞人を左右に分つて、左の一番。○同じ程　同じ位の年頃。○過したる　花も紅葉も散りはてて、雪つもる日數の程なさに、又年かはりて、正中元年といふ。三月の二十日あまり、石清水の社に行幸し給ふ。關白殿（實房）は御車なり。右大將（實衡）松がさねの下がさね、鶴の丸を織る。蘇芳の固紋の衣、左大將（經忠）櫻萌黄の二重織物の御下がさね、櫻に蝶をいろ〳〵に織る。花山吹の上のはかま、紅のうちたる御衣、人よりことに、めでたく見えたまふ。御貌も、にほひやかに、けだかき樣して、誠に一の人とは、かゝるをこそは聞えめと、飽かぬ事なく見えたまふ。土御門の中納言顯實、花櫻の下がさねなりき。

【おなじくは空まで送れ云々】庭を吹く秋風よ、同じことなら、この名香の香を誘うて、牽牛・織女の所まで吹き送れの意。

花山院中納言經定などぞ、上臈の若き上達部にて、いかにも珍しからむと世人も思へりしかど、家のやうとかや、何とかやとて、たゞいつものまゝなり。公泰宰相中將、劔璽の役つとめらる。櫻萌黄のうへのはかま・櫨櫻の下がさね・山吹の浮織物のきぬ・紅のうちたる單を重ねられたり。白くまろく肥えたる人の、眉いと太くて、綾のはつれ、あなきよげと、たのもしくぞ見えられし。頭亮藤房、櫨櫻の下がさね・蘇芳の浮織物のきぬ、弟の職事季房も、山吹の下がさね・紅の衣、衞府のすけどもは、うちこみたれば、見もわかず。別當左兵衞督資朝は、走下部とかやいふもの八人、太刀は、皆、白銀延べたるにやと見ゆるに、鶴の丸を、黄にみがきたる、このましう、きよげなり。舞人にも、よき

家の子どもを選びとゝのへられたり。一の左に、中院の前の大納言通顯の子通冬少將、まだいと小きに、童なども、同じ程なるを、好みとゝのへて、いと清らにいみじう仕立てて、秦の久俊といふ御隨身をぞ具せられたる。右に久我の少將通宣、いたく過したるほどにて、髭がちに、ねび給へるかたちして、小きに立ちならばれたる、いとたとしへなくぞ見えし。それより次々は、むづかしさに忘れぬ。大將の隨身どもこそ、昔の事は、げには見ねば知らず、いとゆゝしく、誠に花を折るとは、これにやと、めでたう面白かりし。左大將殿(雅)の隨身は、赤地の錦の、色も紋も目なれぬさまに、このましきを、情なきまで、さながらだみて、雛に山吹を、白銀にて打物にして、ひしとつけたり。花の

程、年の行つて居ること○いとたとしへなく、たとへようのない程見苦しい。○むづかしさ　面倒。○花を折る　花やかなこと。○情なきまで　餘りと思ふ迄。○さながらだみて　全部彩つて。○雛に山吹を云々　雛に山吹の花が咲いた形を銀の打物にしてつけてあること。○打物　金屬を打つて作つたもの。○かさなり　花瓣の重なつて居る樣。○露　山吹においた露。○松を結びて　松の模樣を絲で結んでつけること。所謂結狩衣。○匂ひなく　見ばえがない。

色、かさなりなどまで、こまかに美し。露を水晶の玉にておきたる、朝日にかゞやきて、すべていみじうぞ見ゆる。

西園寺(實)の隨身も、同じ錦なれど、松を結びて、鶴の丸を白と黄とにうちてつけたる、山吹よりは、匂なく見ゆ。さまざまの神寶・神馬・幣帛など、夜もすがらのゝしり明して、又の日の暮つ方かへらせ給ひぬ。

同じ四月十七日、賀茂の社に行幸なる。上達部など、多くは、前におなじ。衣がへの下襲ども、けぢめなく涼しげなり。別當(朝貞)の下部、このたびは十二人、褐に、雉の尾を白うううち違へてつけたる、これも揭焉に、このましげなり。明くる日は祭なれば、神館の方、うちつゞき、花やかに面白し。今日の使は、德大寺中將公清なり。春宮大夫公賢の

●前におなじ　前の石清水行幸の時におなじの意。○衣がへ　四月朔日冬の衣裳を夏のものに改めること。○けぢめなく　區別なく皆一樣に。○褐に云々　褐色の衣に雉の尾の形を兩方から打ち違へて、白絲で結びつけたこと。○揭焉　きはやか。○祭　賀茂の祭。四月中の酉の日に行はれ

る。○神館　神事潔齋の時、神官等の參籠する所。○うちつゞき　行幸につゞいて祭のあること。○今日の使　祭の勅使。○御家の紋　德大寺家の紋所。○木瓜　窠の紋。四二七頁を見よ。○時にあひたるもの　君寵を得て勢力ある人。

●任大臣の節會　大臣の親任式ともいふべきもの。○左にうつり　左大臣に昇進すること。○大饗　七四頁を見よ。○尊者　同上。○近衞殿　經

賀にておはすればにや、左大臣(實泰)の大炊御門富小路の御家よりぞ、いでたゝれける。人がらといひ、よろづめでたく見ゆ。萌黄の下襲、御家の紋の木瓜を、いろ〳〵に織りたりしにや、近頃の使には似ず、いといみじくきらめき給へり。中宮の使は、亮藤房なり。この頃、時にあひたるものなれば、いと清げに劣らぬ樣なり。

【春宮大夫公賢の聟にて云々】　左の關係になる。

公清
公賢―女

實泰―公賢　卽ち實泰は公清の外祖父に當るのである。

その二十七日に、任大臣の節會行はる。左大將經忠右大臣にならせ給ふ。內大臣冬教左にうつりたまへば、右大將實衡內大臣になさる。又の日、やがて、右大臣殿(忠雅)大饗行ひ

忠の父。○御惱がち　病氣がち。○申しうけて　借りて。但し借りてするのが故實である。○ひきつれて　主客打ちつれて。○わたり給へり　式部卿のみこの邸へ。○まれ人　客。○經營して　用意して。○かたみに　互に。○けしきとりかはしたる　互に樣子をつくろひあふ。○御前の物膳部。○常の作法に事を添へて　普通の作法よりは一入鄭重に。

給へば、尊者には內大臣(通)、參りたまふ。近衞殿(家)、この頃は、御惱がちにてのみ臥し給へれど、今日の御悅に、珍しく出でゐさせ給へり。法皇(後宇多)は、今は大覺寺殿にのみおはしませば、大炊御門の式部卿のみこ(明)の御家を、內大臣殿(實泰)申しうけ給ひて、同じ日、大饗し給ふ。尊者には右の大臣(忠雅)、やがて、我が御家の大饗果つるまゝに、ひきつれてわたり給へり。あるじも、まれ人も、大將かね給へれば、隨身ども、えならず經營して、かたみにけしきとりかはしたる、いと面白し。あるじのおとゞ(實泰)琵琶、右衞門督兼高篳篥、隆資朝臣笙、室町三位中將公春琴、敎宗朝臣笛、有賴宰相拍子とりて、遊びくらし給ふ。御前の物ども、常の作法に事を添へて、こまかにきよらなり。

●法師の兒のやうに　法師が兒を愛するやうに。(男色を好んだないふ)。○ひとりわたりづつ　ひとりふたりづつの誤であらう。○御おぼえ　御寵愛。○諸大夫　九八頁を見よ。○いみじかりき　厚く寵愛せられたの意。○まとはし給ひ　始終側を放さずに居らせる。○召人　寵愛を蒙つて居る者。○御供仕うまつりけり　共に出家した。○限りになり給へる時　臨終になられた時。○きと　きツと。見返すさま。○諸共にいでゆく云云　もしお前と一緒に冥土へ行けることなら、嬉しいだらうにの意。○御息とまりぬ　死なれた。○いみじき御氣色にて　たゞならぬ御様子で。○後枕も知らず　後枕は頭の方と足の方と。前後知らずの意。○かしこまる　詫び入る。○けしき　様子。○やがて參り侍る　直後から參りますの意。○召しとり給ふめなり　冥土から迎へ取つたのだらう

【あるじもまれ人も云々】　主人實衡は左大將を兼ねて居る。

その後幾程なく、右大臣殿(忠)の御父君前關白殿家平、御惱重くなり給ひて、御髪おろさる。俄かの事なれば、殿の内の人々、いみじう思ひ騒ぎ惑へり。この殿(家平)、若くおはしますし頃は、女にもむつまじくおはしまして、この右大臣殿(忠)などもいでき給ひける。中頃よりは、男をのみ御傍に臥せ給ひて、法師の兒のやうにかたらひ給ひつゝ、ひとりわたりづつ、いと花やかに時めかし給ふ事、けしからざりき。左兵衛督忠朝といふ人も、限りなく御おぼえにて、七八年がほど、いとめでたかりし。時過ぎて、その後は、成定といふ諸大夫いみじかりき。この頃は又、隱岐守賴基

といふもの、童なりし程より、いたくまとはし給ひて、昨日・今日までの御召人なれば、御髪おろすにも、やがて御供仕うまつりけり。病おもらせ給ふほども、夜晝御傍はなたず使はせ給ふ。既に限りになり給へる時、この入道(基通)も、御後にさぶらふに、倚りかゝりながら、きと御覽じ返して、「(家平)おはれ、諸共にいでゆく道ならば、嬉しかりなむ」との給ひも果てぬに、御息とまりぬ。右大臣殿(忠)も、御前にさぶらはせ給ふ。かくいみじき御氣色にて果て給ひぬるを、心憂しとおぼされけり。さてその後、かの賴基入道も病みつきて、後枕も知らず惑ひながら、常は人にかゝこまるけしきにて、衣ひきかけなどしつゝ、「やがて參り侍る〳〵」と、ひとりごちつゝ、程なく失せぬ。粟田の關白(道)のかくれ

給ひにし後、「夢見ず」となげきしものの心地ぞする。故殿(家平)のさばかり思されたりしかば、召しとり給ふなめりとぞ、いみじがりあへりし。

【夢見ずと云々】 榮花物語(見はてぬ夢)に「かの家あるじ、粟田殿に宿直して、唯萬に思ひつゞけ、戀しう思ひ聞えければ、いも寢られで、ひとりごちける。夢ならでまたも逢ふべき君ならば寢られぬいをも歎かざらまし、とよみたるを、五月十一日より心地誠に惡しう覺えたれば、そのつとめて女どもの家に行きて、云々、歸りて、その日やがて心地いみじう煩ふなりけり。さて同じ月の二十九日失せにけり。日頃ありて、女のよみける、夢みずと歎きし君を程もなく又我が夢に見ぬぞ悲しき。」

●とぶらひ 後醍醐が後宇多を見舞はれる。○柏ばさみ 四一八頁を見よ。○遙けき嵯峨野を 內裏から大覺寺へ通ふこと。○寮の御馬 左右馬寮の馬。○むげに 全く。○かなしきもの 可愛いもの。○そこらの 多くの。○御莊 莊園。○御牧 牧場。○寄せ給ふ 大覺寺に寄附せられた。○法のあるじ 法主。性圓を大覺寺の法主とすること。○思しおきてけり 院の遺敕のこと。○見給へざらむあと 院崩御の後をいふ。○うしろめたからぬさま 氣がかりのないやう。○聞えさせ

第十七 春のわかれ

四月の末つ方より、法皇(後宇多)御惱重くならせ給へば、天下の騒ぎ思ひやるべし。御門(後醍醐)もいみじく〳〵おぼしなげき、御修法どもいとこちたく、また〳〵始め加へさせ給へど、驗もなくて、日々におもらせ給へば、夜晝となく、いかにいかにととぶらひ奉らせ給ふ。若き上達部などは、直衣に柏ばさみして、夜中・曉となく、遙けき嵯峨野を、寮の御馬にて、馳せありき給ふめり。今はむげにたのみなきよし聞ゆれば、大覺寺殿へ行幸ありし事おぼしいづ。萬の事ども聞えさせたまふ。上(後醍醐)の一つ御腹の二品法親王性圓と聞ゆるを、いとかなしきものに思ひ聞えさせ給ひて、この大覺

寺に、そこらの御莊・御牧などを寄せ給ふ。法のあるじとしておはしますべく、思しおきてけり。さやうの事など、見給へざらむあと、うしろめたからぬさまなどぞ、聞えさせ給ひける。

【四月の末つ方】 樓史愚抄（巻十八）に「正中元年五月廿九日甲寅。爲二法皇御惱御祈一。於二大覺寺殿一被レ始二行五壇法一。中壇阿闍梨二品性圓法親王。」四月は五月の誤であらう。

【大覺寺殿へ行幸ありし事おぼしいづ】 同書同年の所に「六月十六日庚午。依二法皇御不豫增氣一。主上行二幸大覺寺殿一。爲二御逗留儀一。廿二日丙子。自二大覺寺殿一行幸還御。」日々。春宮行二啓大覺寺殿一直還御云。」「行幸あり」の下、「し事おぼしいづ」の七字は、衍文か、さなくば、「おぼしいづ」の所に何か脱けて居るのであらう。

その後、御孫の春宮（貞邦）行啓あり。世をしろしめさむ時の御心づかひなど、今少しこまやかに聞え知らせ給ふ。宮

院より御門へ。

●世をしろしめさむ時の御心づかひ　天下を治められる時の御心得。○先帝の御代りにも云々　先帝即ち父帝の代りとして出來るだけ法皇に孝養を盡さうと。○あらまし　豫定して。○飽かず　殘り惜しく。○いたう　いたく。○しほたれ　歎きに沈む。○御門の御なからひ　天皇との御仲○まめやかならぬ　眞個に睦じくはない。○大方につけて　一般のことについて。○世にあるべき事ども　世に處する上についての事。○我が御心には　法皇の御心中には。○御心のまゝなる世にもなりなむ時は　御即位あらばの意。○聞え給ひける　法皇が言はれた。○うちこわづくりて　咳拂ひして。○かいしめりたるうちしづんだ。

は、先帝（後二）の御代りにも、いかで心の限り仕うまつらむと、あらましおぼされつるに、飽かず口惜しうて、いたうしほたれさせ給ふ。御門（後醍）の御なからひ、うはべは、いとよけれども、まめやかならぬを、（後宇多）いと心苦しと思さるれど、言に出で給ふべきならねば、只大方につけて、世にあるべき事ども、又、この頃、少し世にうらみあるやうなる人々の、我が御心には、あはれとおぼさるゝなど數多あるをぞ、御心のまゝなる世にもなりなむ時は、必ず御用意あるべくなど聞え給ひける。中御門の大納言經繼・六條の中納言有忠・右衞門督敎定・左衞門佐俊顯など聞えし人々の事にやありけむ。さてその夜はとまり給へるもしろしめさで、夜うち更けて、少し驚かせ給ひて、「春宮（貞邦）は何時か

(3)

●又御服たてまつる　裏服を著られた。「又」とあるは前の談天門院の崩御に對して　○まいて　まして。○一所　御一人の意。○昔の内侍のかんの殿　五一八頁を見よ。○御

へり給ひぬるぞ」との給ふに、(邦貞)うちこわづくりて、近く參り給れへば、「(後宇多)いまだおはしましけるな」とて、いとらうたしと思(おぼ)されたる御氣色(けしき)あはれなり。大方のけしき、院の内のかいしめりたる有樣など、(邦貞)よろづおぼしめぐらすに、いと悲しきこと多かれば、宮(邦貞)うち泣き給ひぬ。御心細う、いみじとのみおぼさるゝに、正中元年六月廿五日、終にかくれさせ給ひぬ。御年五十八にぞならせ給ひける。後宇多院と申すなるべし。

御門(後醍醐)、又、御服(おく)たてまつる。あけくれ、ねんごろに孝(けう)じ奉り給ふさま、いとかたじけなし。御女の皇后宮ときこえし、今は達智門院(禁子)と申すも、まいて一所(ところ)をのみ頼み聞えさせ給へるに、心細ういみじと、思し歎く事限りなし。

蔭にて　保護によつて。○より所なく　院の崩御にあつて頼所なく。○何となくあはれ多かるに　八月はもう秋であるから。○朝霧よりも云々　悲しみの絶えぬをいふ。○御位の時　御在位の時。○その世の古き友　萬秋門院が尚侍で、後二條帝に仕へて居られた頃の友であるから。○同じ心　同じく院の崩御を悲しむこと。○永嘉門院　法皇の妃宗尊親王の女。○西華門院　法皇の妃。後二條帝御母。源具守の女。

昔の内侍のかんの殿(頃子)、近頃院號ありて、萬秋門院ときこゆるも、故院(後宇多)の御蔭にてのみ過し給へれば、より所なく、あはれげなり。御四十九日は、八月(はづき)十日あまりの程なれば、世の氣色、何となくあはれ多かるに、女院(にようゐん)・宮だちの御心のうちども、朝霧よりも霽間(はれま)なし。十五夜の月さへ、かきくもれるに、故院(後宇多)の御位の時に、宰相典侍(すけ)とてさぶらひしは、雅有の宰相のむすめなり。その世の古き友なれば、同じ心ならむと、思しやるも、むつまじくて、萬秋門院(頃子)より、のたまひつかはす。

仰ぎみし月もかくるゝ秋なれば
　ことわりしれと曇る空かな

いとあはれに悲しと見奉りて、御かへし、宰相典侍、

光りなき世はことわりの秋の月
涙そへてやなほくもるらむ

永嘉門院(瑞子)・西華門院(基子)など、いづれもおぼしなげく人人多かり。春宮(邦良)も、いと戀しく、哀とのみ思ひ聞え給ふまゝに、御法事をぞ、まめやかに勤めさせ給ひける。大覺寺にては、性圓法親王とりもちて行はせたまふ。御門(後醍醐)・春宮(邦良)の御法事は、龜山殿の大多勝院にてつとめらる。

【御女の皇后宮ときこえし云々】後宇多院の御女で、かつて皇后宮と申し、今は達智門院と申す方も、かの談天門院崩御の後は、この院ばかりを頼みにして居られたのに。

【仰ぎみし月もかくるゝ云々】法皇が崩御になつて、人々の悲しんで居る秋であるから、その理を知れよといふので、十五夜の空も曇つて居るの意。「仰ぎみし月」は法皇にたとへたのである。

【光りなき世はことわりの云々】光りとたのむ法皇が崩御になつたのであるから、月の光りなきも道理であるが、その上又人々の涙が添はつて、猶更曇るのであらう。

あはれ〳〵といひつゝも、過ぎやすき月日のみ、うつりかはりて、年もかへりぬ。一昨年(をとゞし)ばかりより、又重ねて撰集(せんじふ)の事仰せられしを、爲世の大納言二度(たび)になりぬればにや、爲藤の中納言にゆづりしを、いくほどなく、かの中納言(爲藤)惱みて失せぬ。いといとほしう、あはれなり。故爲道朝臣の失せにし、只年月ふれど、絶えぬうらみなるに、又かくとり重ねたるなげき、大納言(爲世)の心のうち、いはむ方なし。春宮(邦良)より、しば〳〵とぶらはせ給ふ御消息(せうそこ)のついでに、

おくれゐる鶴の心もいかばかり

●年もかへりぬ　正中二年となる。○爲藤　爲世の子。正中元年七月卒、年五十。○爲道　爲世の子。永仁七年五月卒、年二十九。○などかは　何故生きて居なかつたらう。○とりわき　特別に。○子にして　養子として。○沙汰　處置。○このまぎれ　爲藤卒して嗣子のないのに乘じて。○引きや越さまし　爲定を引き越して爲冬に家を嗣がせ、撰集のこともさせようとすること。○山伏　修驗者。○出でたちて　身仕度する。○出で失せぬる　出てしまつた。○いひ沙汰　噂。○もてあつ

かへど　噂すれど。○流石求め出して　爲世も流石後悔して、爲定を探し出した。○おだしく　おだやかに。

御かへし、大納言爲世、

思へたゞ和歌の浦には おくれゐて
老いたる田鶴の歎くこゝろを

世に歌よむとおぼしき人の、あはれがり歎かぬはなし。せめて勅撰のこと撰びはつるまで、などかはとぞ、人々のなげき、いとほしげなり。故爲道の中將の二郎爲定といふを、故中納言(爲兼)、とりわき子にして、何事もいひつけしかば、撰歌の事もうけつぎて、沙汰すべしなどぞ聞ゆる。大納言(爲世)は末の子爲冬の少將といふを、いたくらうたがりて、このまぎれに、引きや越さましと思へるけしきありとて、爲定もうらみ歎きて、山伏すがたに出でたちて、修行に出

●しのゝめ　曉。○四條わたり　四條邊。○世を亂り　北條氏を滅さうとせられること。○いひあつかふ　噂する。○その宣旨なしたる　北條氏追討の宣旨を下した。○いまで失せぬるなど、いひ沙汰すれば、人々いとほしう、あはれになど、もてあつかへど、流石求め出して、元のやうにおだしく定りぬとなむ。

【おくれゐる鶴の心も云々】　子に先だたれて、後に殘つた爲世の心は、どんなに怨めしいことであらうの意。「おくれゐる鶴」は爲世をいひ、鶴の緣で和歌(和歌の浦)といひ、更にうらみ(浦、怨)とつゞけたのである。

【思へたゞ和歌の浦には云々】　かく子におくれて、歎いて居る老人の心を察して下さいの意。

その頃、九月(ながつき)ばかり、まだしのゝめの程に、世の中いみじく騷ぎのゝしる。何事にかと聞けば、美濃國の兵(つはもの)にて、土岐の十郎(頼貞)とかや、また多治見の藏人(國長)などいふ者どもも、忍びのぼりて、四條わたりに立ち宿りたる事ありて、

しむ　禁獄。○いかさまなる事　どんな事。○人の口安からざるべし　誹るをいふ。○淺原といひしさわぎ　四六五頁を見よ。○まれび　まれ。○柿の衣　柿色卽ち濃い代赭色の衣。○綾藺笠　藺を編んで作つた笠。○はやう　早くから。○あなたざま　關東方の武士をいふ。○ゆあみ　湯治。

人にかくれて居りけるを、早う又告げ知らする者ありければ、俄かにその所へ六波羅より押し寄せて、からめ捕るなりけり。あらはれぬとや思ひけむ、かの者どもは、やがて腹切りつ。又別當資朝・藏人內記俊基、同じやうに武家へとられて、きびしく尋ね問ひ、護り騷ぐ。事のおこりは、御門（後醍醐）世を亂り給はむとて、かの武士どもを召したるなりとぞ、いひあつかふめる。さて、その宣旨なしたる人々との二人（資朝俊基）をも、あづまへ下して、いましむべしとて、この二人おはしましし程は、世も長閑ぞ聞ゆる。いかさまなる事の出でくべきにかと、いと恐ろしく、むづかしく、「故院（後宇多）」に、めでたかりしを、いつしか、かやうの事ども出できぬるよ」と、人の口安からざるべし。正應にも、淺原といひ

しさわぎは、後嵯峨院の御處分を、あづまより、ひき違へし御恨とこそは聞えしか。今もその御憤の名殘なるべし。過ぎにし頃、資朝も山伏のまねびして、柿の衣に綾藺笠といふもの著て、あづまの方へ、忍びて下れりしは、少しは怪しかりし事なり。はやうかゝる事どもにつけて、あなたざまにも、宣旨を受くるもののありけるなめり。俊基も、紀伊國へゆあみに下るなどいひなして、田舍歩きしたりしも、今ぞ皆人思ひ合せける。

【後嵯峨院の御處分を云々】後嵯峨院崩御の時、皇位は龜山院の系統で繼承するやうに遺勅があつたのに、當時は、時宗がこの遺勅をひき違へて、兩統迭立の議を建て、伏見帝を帝位につけた。之が爲、龜山院は之を恨み、遂に淺原の亂が起るやうになつたのだといふことであつた。

●さるまゝには　さうして居ては。○いひ知らず聞ゆる事ども　言語道斷な噂。帝を遠島に流さうなどの事であらう。○まだきに　御企の早くもあらはれたことなの意。○おだしくやめむ　穩かにすまさう。○正應にありしやうなる　四七〇頁參照。○古き御世より云々　宣房は、龜山帝より後醍醐帝まで七代に歷仕した。○年もたけたる上　年も行つて居る上。○うべ〳〵しき人　篤實な人。○けざやかハツキリ。○なごみて　心が和いで。○無異　平安。○入道してき　出家した。○あめりあるめり。○おほやけ　天子。○かの人々　貴朝等。○ありしやうには　元のやうに

さるまゝには、いひ知らず聞ゆる事どもあれば、(後醍醐)まだきに、いと口惜しう思されて、この事を、先づおだしくやめむとおぼせば、かの正應にありしやうなる誓ひの御消息(せうそく)をつかはす。宣房の中納言御使にてあづまに下る。大方、古き御世よりつかへきて、年もたけたる上、この頃は、天下に、いさぎよく、うべ〳〵しき人に思はれたる頃なれば、この事、更に御門(後醍醐)のしろしめされぬよしなど、けざやかにいひなすに、荒きえびすどもの心にも、いと忝き事と、なごみて、無異(ぶい)なるべく奏しけり。この御使の賞にや、宣房、大納言になされぬ。いといみじき幸なり。親(宣房)は三位ばかりにて入道してき。子どもなどさへ、いと清げにて、數多あめり。されば、おほやけは、しろしめされぬにても、かの人

は。○いかならむ時とのみ　何時か機會があつたら、事を擧げようとばかり。

●例ならず　病氣。○伊勢大神宮。○あさましくならせ給ひぬ　薨去をいふ。○對の君　呼名。○をさめ難げ　取り鎭めにくいこと。○限り最期。○殘りなき身　餘命幾何もない身。○御覺じ捨てて　見捨てて。○えおはしましやらじ　あの世へは行けますまい。○御供にぬて　御供に

人は、遁るべき方なしとて、別當(前)は佐渡の國へ流されぬ。俊基は、いかにして遁れぬるにか、都へかへりぬれど、ありしやうには出で仕へず、籠り居たるよしなり。かやうにて、事なくしづまりぬれば、いとめでたけれど、上(後醍醐)の御心のうちは、猶ほ安からず、いかならむ時とのみ、おもほしわたるべし。

月日程なく遷りゆきて、嘉曆元年になりぬ。三月の初つ方より、春宮(眞邦)例ならず　おはしまして、日々におもらせ給ふ。さまざまの御修法(ずほふ)どもはじめ、御祈(いのり)、何やかやと、伊勢にも御使たてまつらせ給へど、かひなくて、三月二十日、遂にいとあさましくならせ給ひぬ。宮の內、火を消ちたる心地して、惑ひあへり。御乳母(めのと)の對(たい)の君といふ人、夜晝御

連れて。○宮の内　御殿の内　○とよみ　響き渡る意で、聲を立てて泣くをいふ。○永嘉門院　後宇多妃。○聞えつけさせ　申しつけられ。○一つ院　同じ院。御母代となられたのである。○御息所　東宮の妃。○又なきさまに云々　東宮と御息所の御仲よきをいふ。

傍さらず候ひ馴れたるに、いみじき心惑ひ、誠にをさめ難げなり。限りと見え給ふ御顔にさしよりて、「(劉君)かく殘りなき身を御覽じ捨てては、えおはしましやらじ。今一度、御聲なりとも聞かせ給ひて、いづ方へも、御供にゐておはしましてよ」と、聲も惜しまず泣き入り給へるさま、いとあはれなり。すべて、宮の内とよみ悲しぶさま、いはむかたなし。永嘉門院(瑞子)は、御子もおはしまさねば、年月、この宮(邦良)を、故院(後宇多)聞えつけさせ給ひしかば、今も一つ院におはします。御息所にも、やがて故院(後宇多)の姫宮(禖子)を、女院(瑞子)の御傍にかしづき聞え給ひしを、あはせ奉り給へれば、又なきさまにおぼしかはして、過ぐさせ給へるなど、(禖子)いみじうしづみ入り給へり。

●さてあるべきならねば　さうしても居られないから。○常の行啓のさまにて　御存命の體にしたのである。○土用　四季とも其の中に十八日づつあるもの。春は清明の後、立夏まで。(普通は夏の土用ばかりをいつて居る)。○おはしましし時　御存命の時。○その事はよしなかるべく　院號は無益であると。○仰せられおきし　御遺命があつた　○内　御門。○聞召しすぐしけり　聞いただけで、實施されなかつたこと。○晝の御座

【永嘉門院は云々】　系圖を示すと、

宗尊親王 ─┬ 永嘉門院(後宇多妃)
　　└ 准后掄子(後宇多妃) ─ 禖子(邦良妃)

さてあるべきならねば、常の行啓のさまにて、先帝(後二條)のおはしましし北白川殿へぞ、入れ奉らせ給ひぬる。土用のほどにて、しばし彼處におはしますさへ、いと悲し。院號などの沙汰もあるべくこそ。されど、おはしましし時に、その事はよしなかるべく、仰せられおきしかば、内よりも、聞召しすぐしけり。晝の御座のよそひとりこぼち、火たきやなどかき拂ふ程、猶ほ現ともおぼえず。堀川の女御(廷子)の、「見えし思ひの」などの給ひけむは、この世ながら、御心との御あかれなれば、羨ましくさへおぼゆ。さしあたり

常の御座所。○よそひ　設備。○火たきや　衛士が夜間火をたいて警衛する所。○かき拂ふ　取り拂ふ。○現ともおぼえず　薨去の事は眞實とも思へない。○堀川の女御　小一條院の女御。堀川左大臣顯光の女。○あかれ　別れ。○さしあたりてのあはれ　今目前の悲しみ。○我が身を限りはてぬる　東宮の薨去によつて、我が身の將來もなくなつたと絶望すること。

てのあはれは、さておきて、先帝(後三)の御位ながら失せ給へりしだにあるを、又かく半ばなるやうにて、あさましければ、世の人の思はむ事も心憂く、一方ならぬ歎きに添へたる憂へ、いはむ方なし。大方我が身を限りはてぬると、思ふ人のみ多かりき。

【見えし思ひの】　後拾遺集(雜)に「小一條院東宮と聞えける時、思はずに位おり給ひけるに、火たきやなど、こぼちさわぐを見て、よみ侍りける。雲ゐまで立ちのぼるべき烟かと見えし思ひのほかにもあるかな（堀河女御）」。

【この世ながら御心との御あかれ云々】　この世に生き長らへて居りながら、東宮の位を下りられての別れであるから、今度の薨去に比すれば羨ましい。

【先帝の御位ながら云々】　先帝後二條は、御在位中に崩ぜられたが、今又東宮は、御位のまゝ中途でなくなられたので、世間の人がどう思ふかも知れないと、心配になる。

有忠の中納言、先坊(眞明)の御使にて東に下りにし、いつしかと、思ふさまならむ事をのみ待ち聞えつる、踐祚の御使の都に參らむと、同じやうにのぼらむとて、いまだ彼處にものせられつるに、かくあやなき事の出できぬれば、いみじとも更なり。三月三十日、やがて、彼處にて頭おろす。悲し。

おほかたの春のわかれの外に又
我が世つきぬる今日の暮かな

都にも前の大納言經繼・四條三位隆久・山井の少將敦季・五辻の少將ながとし・公風の少將・左衞門佐俊顯など、皆頭おろしぬ。女房には、御息所の御方(子)・對の君・帥の君・兵衞

●思ふさまならむ事を云々　思ふやうに、この東宮の天子となられる事を待つて居た。○踐祚の御使　東宮の踐祚し給ふべき由を鎌倉から京都へ申しやる使。○同じやうに上らむと　踐祚の使と一緒に都に上らうと。○彼處にものせられつる　鎌倉に居られた。○あやなき事　條理のたゝぬ事。困つた事。東宮の薨去をいふ。○心の中こそはと　心の中こそどんなであらうと。○さまかはりてけり　出家した。○やむごとなき君の御時も　尊い天子の崩御の時も。○いとありがたき　滅多にない。○なごやか　おだやか。○年頃の御名殘　年頃親しく

仕へ奉つて居たことを殘り惜しく思ふこと。○大方の世にもさし放たれて　世間からも疎んぜられて。立身の見込なきをいふ。○やうなき「やくなき」の音便、無益。○厭ひそむく　世を厭うて出家する　○若宮三所　若宮三人。○御息所の御腹にはあらねど　その御子たちは、○いかに知りてか　郭公はこの悲しみを、どうして知つて、かう鳴くのであらうかの意。

督・内侍の君など、すべて男女三十餘人、さまかはりてけり。やむごとなき君の御時も、かくばかりの事は、いとありがたきを、佛などのあらはれ給ひて、殊更に、迷ひ深き衆生を、導き給ふかとまで見えたり。御本性の、いとなごやかにおはしましかば、近う仕うまつる限りの人は、年頃の御名殘を思ふも、いと忍びがたき上、大かたの世にもさし放たれて、身をやうなきものに思ひ捨つるたぐひなど、さまざまにつけて、厭ひそむくなるべし。若宮三所（康仁邦世深守）・姫宮（靖子）などもおはしましけり。御息所（薬子）の御腹にはあらねど、いづれをも、今は昔の御かたみと、あはれに見奉らせたまふ。四月の末つ方、夏木立心よげに茂りわたれるも、羨ましくながめさせ給ふ。曉がた郭公の鳴きわたる

●四季を奏するよし云々　四季の部を撰んで奉つた殘部の意。卽ち戀・雜など。○世にひろまれる　完成して世に出たこと。○師賢うけたまはりて　御門の命を受けて。○い

も、「いかに知りてか」と、御涙（薬子）のもよほしなり。

諸共に聞かましものをほとゝぎす
枕ならべし昔なりせば

【おほかたの春のわかれの云々】　世間一般の春の別れの外、自分には又この夕暮は我が世も限りの時であるの意。「春の別れ」は春宮に別れる意をかけ、「我が世つきぬる」は自分の出家して世を捨てるをいつたのである。

【諸共に聞かましものを云々】　東宮の生きて居られる頃ならば、この杜鵑も、二人一緒に聞くべきものを、今は只一人で聞くのが悲しい。

まことや、例の前に聞ゆべき事を、時違へ侍りにけり。兵衛督爲定、故中納言（爲藤）の跡をうけて撰びつる撰集の事、正中二年十二月の頃、先づ四季を奏するよし聞えし殘り、この程世にひろまれる、いと面白し。御門（後醍醐）殊の外にめで

みじき　すぐれて居ること。○仰せ遺はしたるに　御門の命で師賢から爲定に。○仲よきどち　ドチは接尾語、同志（どうし）などいふにあたる親しい間柄の意。

させ給ひて、「續後拾遺」とぞいふなる。中宮大夫師賢うけたまはりて、この度（たび）の集のいみじきよし、さまざま仰せ遺はしたるに、御返しに、爲定、

今ぞ知るあつむる玉のかず〳〵に
身をてらすべき光ありとは

御返し、内（後醍）の御製、

かず〳〵に集むる玉のくもらねば
これもわが世の光とぞなる

この大夫（實躬）は、もとより中よきどちにて、常に消息（せうそこ）などつかはすに、かく世にほめらるゝを、いとよしと思ひて、兵衞督（爲定）の許へいひやる。

和歌（實躬）の浦の浪も昔にかへりぬと
人よりさきに聞くぞ嬉しき

かへし、

和歌（爲定）の浦や昔にかへる浪ぞとも
かよふ心にまづぞ聞くらむ

【まことや例の前に云々】尼の語。年代の關係上、前に話すべき撰集のことを言ひ洩らして、時代の違つたことをいふ。○【今ぞ知るあつむる玉の云々】御賞詞を戴いたにつけ、撰び集めた玉のやうな立派な歌に、我が身を照す光（光榮）があるとは、今更つくづく感じました。○【かず〳〵に集むる玉の云々】澤山集めた歌が、丁度玉のやうに美しく照り輝いて居るから、これはやがて我が代の　光榮ともなるものである。○【和歌の浦の浪も昔に云々】今度の撰集は、昔のものにも劣らぬ立派なものだといふ仰言を、人より先に聞くのは、親友たる身にとつては、實に嬉しいの意。「かへり」は涙の緣語である。

(11)

●中宮に宣旨にてさぶらふ　宣旨は、中宮・春宮等に仕へる上臈の女房。中宮に宣旨で居たの意。○例の時めかし給ひて　例の如く御寵愛になつて　○めのと　傅育官ともいふべきもの。○宮の内侍　中宮の内侍。公廉の女、公賢の養女　○いと數多　御子が。○藤大納言　大納言爲世の女をいふ　○わたらせ給ふ　行つて居られる。養君とせるをいふ。○きら〳〵しう　御貌の端正なること。○いかで坊にと　それらの御子の中、何とかして

【和歌の浦や昔にかへる云々】　あなたと私とは、同じ歌の道を踏んで、互に心の通ふ親しい間柄であるから、かうして昔に恥ぢぬといはれる仰言をも、先づ聞いたのであらう。

この爲定のはらから、中宮に、宣旨（せんじ）にてさぶらふも、上（後醍醐）、例の時めかし給ひて、若宮（註）いでものし給へり。その宮（註）の御めのとは、師賢の大納言うけたまはりて、いみじうかしづき奉らる。又宮の内侍（子）の御腹にも、次々、いと數多おはします。一の御子（皇）は藤大納言（子）の御腹、吉田の大納言定房の家にわたらせ給ふ。二の御子（皇）も、いときら〳〵しうて、源大納言親房の御あづかりなり。かくさまざまにおはしますを、この度、いかで坊（ぼう）にとおぼしつれど、かねてより、催し仰せられしことなれば、あづまより

(11)

(12)

誰かを東宮にしようと、○催し仰せられし　鎌倉へ催促せられた。○定め申しつ　東宮とした。○けやけく　きはだつて。あんまりなやり方だと。○いかゞはせむ　どうとも仕方がないの意。○皇太子の節會　立太子式。○陣の座より云々　式の行はれた陣の座から引き續いて持明院殿へ參つた。○常の事　普通の事　○俄かに云々　これまで寂しかつたに引きかへて。

●陽德門院　後深草帝三女、御母公相の女。○先坊の宮　前の皇太子の御殿。○鷹司　土御門萬里小路。○世のおぼなひ　世間の樣子。○今更に云々　反對派の榮えを見て、今更悲しみが增す。○棟門

人まゐりて、本院（後伏見）の一の宮（量仁）を定め申しつ。いとけやけくきこしめせど、いかゞはせむにて、七月廿四日に、皇太子の節會（せちゑ）行はる。陣（ぢん）の座（ざ）より引きわたして、持明院殿に人々まゐる。院（後伏見）の殿上にて祿（ろく）などたまはる。常の事なれど、俄かにいとめでたし。

八月になりて、陽德門院（子）の土御門東の洞院殿へ行啓（ぎやうけい）はじめあり。先坊（具仁）の宮は、鷹司なれば、間近きほどに、世のおとなひ聞しめす入道の宮（藏子）・女院（東二條門院）などの御心のうち、今更にいと悲し。本院（後伏見）・新院（花園）、ひとつ御車にたてまつりて、先立ちて入らせ給ふ。行啓は、東の洞院おもての棟門（むねもん）に、御車とゞめて、中門まで簀道（すのこみち）をしきて、歩みいらせたまふ。御角髪（みづら）ゆひて、いときびはに、うつくしげ

(12)

五五二頁を見よ。○遥道　道に錠を數くこと。○宮づかさ　春宮坊の役人。○院の殿上人　持明院の殿上人。○花開けたる心地　持明院方の喜の樣をいふ。五三九頁「いろいろに都は春の云々」參照。○あはれなる世のならひ　時に隨つて移り變る世の人心を評つたのである。

●御かうぶり　御元服。○わたらせ給ふ　行かれる。○正月の十六日の節會　踏歌（たうか）の節會。男女の舞人を召して歌ひ舞はしめる儀式。十五日は男踏歌、十六日は女踏歌。○帥　太宰帥。○七日の節會　白馬の節會（一四四頁を見よ）。○さこそありけれど　節會に皇子が出られたなり。十四ばかりにやおはしますらむ。宮づかさども、院の殿上人など、多くつかうまつれり。花開けたる心地どもすべし。あはれなる世のならひなりかし。

かくて、今年も暮れぬれば、嘉暦も二年になりぬ。一の宮（邦良）御かうぶりし給ひて、中務卿尊良親王と聞ゆ。去年より、内に御宿直所して、わたらせ給ふ。正月十六日の節會に、（踏歌）めづらしく出で給ふ。御門も、德治の頃、帥にて、七日の節に出でさせ給へりしためし、おぼしいづるにや。大方古くは、皆さこそありけれど、近頃は、いたくかやうにはなかりつるを、御子だち、御冠の後は、いづれも、昔おぼえて、さるべき折々、いで仕へさせ給ふめり。今日の節會は、常より殊に、ひきつくろはるゝなるべし。親王

が。○昔おぼえて　昔の樣も思はれて。○今日の節會　踏歌の節會。○ひきつくろはる　盛大に行はれる。○昭慶門院　亀山院女。御母藤原雅平女。○内々　元服前であるが内所で。○上の御衣　袍。○南殿　紫宸殿。○御供にさぶらはせ給ふ　御門の。○れんごろ　親密。○心づかひこと　なる　特に心配する。

は、蘇芳のうへのきぬ奉れり。左大臣冬教・右大臣經忠・内大臣基嗣・右大將公賢・權大納言顯實・藤中納言實任・別當光經・三條中納言實忠・左衞門督公泰・權中納言藤房、宰相には惟繼・親賢・爲定・冬信・國資などまゐれり。二の宮（眞）は、西園寺宰相中將實俊の女の御腹なり。帥の御子世良の親王とぞ。昭慶門院（尊子）とりわき養ひ奉らせ給ふ。この宮（世良）は、御めのと源大納言親房なり。それも内々、上の御衣にて、御門（後醍醐）南殿へ出でさせ給へば、御供にさぶらはせ給ふ。又常磐井の式部卿宮（明尊）は、亀山院の御子なれど、當代（後醍醐）と、いとねんごろなる御中にて、この御子だちと同じやうに、常はうち連れ、御宿直などせさせ給ふ。今日も御まゐりありて、御子だち歩み續かせ給へる、いと面白

●一めぐり　一周忌　○あたらし　惜しい。○北政所　奥方。○様かはり　落飾。○よき人々　高貴の人々。

し。若き女房などは、心づかひことなる頃ならむかし。二月になれば、やう〳〵故宮(邦良)の御一めぐりの事ども、永嘉門院(瑞子)には、いとなませ給ふも、あはれつきせず。鷹司の大殿(冬平)も失せ給ひぬ。この頃の世には、いと重くやむごとなくものし給へるに、いとあたらし。北政所は、中院の内の大臣通重の御はらからなり。それも様變り給ひぬ。近頃、よき人々多く失せ給ひぬるこそ、いと口惜しけれ。

【一の宮御かうぶりし給ひて】　續史愚抄　(卷十八)には、「嘉暦元年二月八日癸未。今上第一皇子尊良親王(十六歳。或作二十五一)於二宮中一被レ加二元服一(或作二六日及翌年一誤矣)」とある。

●竹の園生は繁けれど　皇子は澤山あるがの意。○秋の宮　皇后のこと。○あかず　物足らず。○めづらしき御惱　御懷姙をいふ。○あらまほしき　願ふ所の。○その程　出産の期。○通ひおはします　常磐井殿へ。○陣の内　五五一頁參照。○袴のそばとり　袴の端をとりあげること。忙しく行き通ふさま。○今しばしおはせましかば　今少し長命して居られたら、どんなに喜ばれるだらう。○山　延暦寺。○山科寺　奈良興福寺。○如意輪法　如意輪觀音を本尊とした修法。○如法佛眼

第十八　むら時雨

竹の園生は繁けれど、秋の宮(禧子)の御腹には、たゞ一品内親王(懽子)ばかりものし給ふを、いとあかずおもほしわたるに、この頃、めづらしき御惱のよし聞ゆれば、いとめでたく、あらまほしき御事なるべきにやと、上(後醍醐)もいみじくおぼされて、かねてより、御修法ども、こちたく始めらる。まして、その程近くならせ給ひぬれば、式部卿の宮(重明)の常磐井殿へ出(禧子)でさせ給ひて、上も、二三日へだてず通ひおはします。陣の内なれば、上達部・殿上人、夜晝となく、袴のそばとりて參りちがふ。御兄の兼季の大臣も、絶えず候ひ給ふ。いみじき世のさわぎなり。故入道殿(實兼)、今しばし

おはせましかばと、おぼしいづる人々多かり。山・三井寺・山科寺・仁和寺、すべて、大法・祕法・祭・祓、數をつくして、のゝしるさま、いとたのもし。七佛藥師の法は、青蓮院二品法親王慈道勤めさせ給ふ。金剛童子、常住院の道昭僧正、如意輪法、道意僧正、五壇の御修法の中壇は、座主の法親王（承）行はせたまふ。如法佛眼は、昭訓門院（子）の御志にて、慈勝僧正うけたまはり行ふ。一字金輪は淨經僧正、如法尊勝は桓守僧正、愛染王は賢助僧正、六字法は聖尋僧正、准胝法は達智門院（子）の御沙汰にて、信耀僧正つとめらる。その外、猶ほ本坊にて、さまざまの法ども行はせらる。六月ばかり、いみじう暑き程に、壇ども軒をきしりて、護摩の煙みち〳〵たるさま、いとおどろ〳〵しきまで、けぶたし。社々の神馬は更にもいはず、醫師・陰陽師・巫ども立ちさわぎ、世のひゞくさま、めでたくゆゝしきにも、もし皇子にておはしまさざらむ折、いかにと思ふだに胸つぶるるに、いかなる御事にか、あやしうさるべき程もうち過ぎゆけば、なほしばしは、さこそあれなど、待ち聞ゆれど、更につれなくて、十七・八・廿・卅月にも餘らせ給ふまで、ともかくもおはしまさねば、今はそらごとのやうにぞなりぬる。大かた、上下の人の心地、あさましともいふべきはならず、御うぶやの儀式、あるべき事どもなど、こちたきまで催しおかれ、よろしき家の子ども、二親うち具したる、選ばれしかど、こゝらの月頃には、或は服になり、そのぬしも病して頭おろしなど、すべて、萬あへなく、めづらか

佛眼は眞言宗祕法の一、之を本尊とした修法。○一字金輪　一字金輪を本尊とした修法。安產を祈る時行ふ。○如法尊勝　佛頂尊勝如來を本尊とした修法。○六字法　千手觀音を本尊とし、六觀音の眞言を唱へて修するもの。○准胝法　准胝觀音（息災・延命・求兒等の諸願を叶ふ）を本尊としたもの。○御沙汰　御いひつけ。○本坊　僧の居るところ。○軒をきしりて　驗をあらはさうと、各壇互に競爭するをいふ。○護摩　梵語 Homa 眞言宗祕法の一。火をたいて一切の惡業を燒滅すること。○おどろ〳〵し　驚くべきさま。仰山。○世のひゞくさま　世の中の騷ぎのゝしる樣。

○さるべき程　出產あるべき時。○なほしばしは云々　猶ほ暫くは、そのまゝで待づて見ようの意。○つれなくて「つれなし」は素知らぬ顏で居ること。こんなに騷いでも、少しも御產の氣のないをいふ。○十七八云々　十七日・十八日から三十日といふ風に何時まで待つてもの意。○ともかくもおはしまさねば　何ともないから。○そらごと　うそ。○あさましともいふべききは　ならず　あさましいどころの話ではない。○御うぶやの儀式　御產養。○あるべき事ども　御產に必要な事ども。○こちたきまで　仰山らしいといふ程まで。○催しおかれ　支度しおかれ。○よろしき

家の子ども云々　相當な家の子で、兩親揃つたのを、乳母に選ばれた。○こゝらの月頃には　永い間には。○服になり　親などの死ぬこと。○そのぬし　その本人。○あへなくはりあひなく。

●とまり給へる　東宮に死におくれてこの世に生き殘つて居られる。○入道の宮　佛門に入られた宮の意。五八四頁參照。○參り給へりし　東宮の所へ。○たゞならず　懷姙ないふ。○御氣色　御産の樣子。○ゆく〳〵と　スル〳〵となどの意。○水のみ出でさせ給ひて　兒が生れずに水が出た。○弘徽殿　内裡中の宮殿の一。清涼殿の北にあり、

なれば、いはむ方なし。

【竹の園生】　前漢孝文帝の子孝王、梁に封ぜられて兎園を作り、多く竹を植ゑたより、天子の子孫をいふ。道志に「梁孝王東苑方三百里。卽兎園也。多植ル竹。中有二修竹園一」

【秋の宮】　皇后のこと。後漢書馬皇后記に「永平三年。有司奏立二長秋宮一」もと皇后の御殿をいふより轉じたのである。

前坊（眞邦）のはじめつ方、中院の内の大臣通重の御女まゐり給ひて、十八月にて若宮生れ給へりしかど、やがて、御子も母御息所も失せ給ひにしかば、いみじうあさましき事にいひさわぎし程に、又その後、このとまり給へる入道の宮（子種）參り給へりしも、十七月ばかりにや、たゞならずおはしまして、既に御氣色ありとて、宮の中たちさわぐ程に、只ゆくゆくと水のみ出でさせ給ひて、昔の弘徽殿の女御（子元）の、

皇后・中宮・女御等の御座所。尚ほ下註を見よ。○太秦　山城葛野郡太秦村廣隆寺をいふ場合。○日さがなさ　惡しざまに言ひふらすこと。○おとしめざまに　おとしめるやうに　○いひなやましし　いひ苦しめた。○はしたなく　不都合　○さのみやは云々　さうばかりしても居られないから。○内　宮中。○ありしばかり云云　これまでのやうにはないが。

太秦にてありけむやうにて已みき。折節、賀茂の祭の頃にて、春宮の使もとゞまりなどして、さやうの折々、人の口さがなさ、せめても、先坊（眞邦）の御方ざまの事を、おとしめざまにいひなやましし人々も、この頃ぞ、又かくまさる例もありけりと、はしたなく思ひあはせける。さのみやは、内（眞子）へかへり入らせ給ふにも、いとあさましう珍らかなる事を思し歎くべし。御修法どもも、ありしばかりこそなけれど、猶ほ少しづつは絶えず、いつを限りにかと見えたり。その頃、左の大臣實泰も失せ給ひぬ。世の中いみじく歎きあへり。

【昔弘徽殿の女御の云々】　榮花物語（浦々のわかれ）に「かの承香殿の女御、臨月も過ぎさせ給ひて、いと怪しく、音なければ、萬にせさせ給

へど、思し餘りて、六月ばかりに、太秦に參りて、御修法・藥師經の不斷經などよませさせ給ふ。云々。只事成りぬべき御氣色なれば、さばれ、罪は後に申し思はむと思して、まかせ奉り給ふほどに、御身より只物も覺えぬ水のみさへと流れ出づれば、いと怪しう世づかぬことに人々見奉り給へど、さりとも、あるやうあらむとのみ疊がせ給ふに、水つきもせず出で來て、御腹只しびれにしびれて、例の人の腹よりも、むげにならせ給ひぬ。」○弘徽殿は承香殿を誤つたのであらう。

【折節賀茂の祭の頃にて云々】　この事（水ばかり出たこと）のあつた頃、丁度、賀茂の祭であつたが、產の汚といふので、春宮からの使を止められた。

かくて元德元年にもなりぬ。今年はいかなるにか、しはぶきやみはやりて、人多く失せたまふ中に、伏見院の御母玄輝門院（鏱子）・前坊（眞仁）の御母代の永嘉門院（瑞子）・近衞大北政所など、やむごとなき限り、うち續きかくれ給ひぬれば、こかしこの御法事しげくて、いとあはれなり。かやうの事

●しはぶきやみ　咳の病。○近衞大北政所　大北政所は攝政・關白の母。關白近衞家基の母。龜山院皇女。

どもにて、今年もまた暮れぬ。

明くる春の頃、內には、中殿にて、和歌の披講あり。序は源大納言親房書かれけり。かねてより、いみじう書かせ給へば、人々心づかひすべし。題は「花契二萬春一」とぞきこえし。

御製（後醍醐）、

　時しらぬ花もときはの色に咲け
　　わがこゝのへのよろづ代の春

中務卿尊良親王、

　のどかなる雲井の花の色にこそ
　　よろづ代經べき春は見えけれ

帥御子世良、

●中殿　清涼殿。○かれてよりいみじう書かせ給へば　前以て立派な序を書いて居られるので。○心づかひすべし　歌を作るにも苦心するであらう。○師御子　大宰師であるからいふ。

百敷の御垣の櫻ききにけり
よろづ代までの春のかざしに

つぎ〳〵多かれども、むつかし。

【時しらぬ花もときはの云々】めでたい吾が禁中の春には、四季時知らず咲き匂ふ花も、永久變らぬ色に咲けの意。

【のどかなる雲井の花の云々】長閑な禁中の花の色には、萬代も盡きせぬ春の榮えが見える。

【百敷の御垣の櫻云々】「百敷」は「大宮」にかゝる枕詞より轉じて禁中を「いふかひなし」は花などを頭に挿して飾とするもの。萬代まで變らぬ春のかざしにする爲に、禁中の御垣の櫻の花が咲いた。

彌生の頃、春日の社に行幸し給ふ。例のいみじき見物なれば、棧敷ども、えもいはずいどみつくしたり。その後、日吉の社にも參らせ給ひき。今年も、人多く、にはかやみして死ぬる中に、帥の御子(眞)重くなやませ給ひて、いとあ

(4)

●彌生　三月。○いどみつくしたり　競爭して作るをいふ　○日吉の社　近江滋賀郡坂本村。今官幣大社。○參らせ給ひき　參られた。○にはかやみ　急病。○あへなく　はかなく。○おろかならず　一通りでない。○一の御子より　帥の御子は。○御才　御學問。○警策　すぐれて居ること。○ものし給へば　あらせられたから。○記錄所　諸司・諸國並に諸人の訴訟を裁斷する所。○御供　御門の御供。○議定　政務に關することを議し定めること。○いとあさまし　思ひがけなく失せられたので。○我が世盡きぬる心地　死んでしまふやうな心地。○とりあへず　早速。○親王の御事　親王の薨去。○かたがた　あれやこれやで。○あたらしく　惜しく。

●一度に　同時に。十一月二十四のこと。○勸修寺の殿原　藤原冬嗣の六男良門の子高

へなく失せ給ひぬ。內の上(淺顯)おぼし歎く事おろかならず、一の御子(眞)よりも、御才などもいとかしこく、よろづ警策にものし給へれば、今より　記錄所へも、御供に出でさせたまふ。議定などいふ事にも、參り給ふべしと聞えつるに、いとあさまし。御めのとの源大納言親房、我が世盡きぬる心地して、とりあへず頭おろしぬ。この人(眞)のかいみじく、御門(淺顯)も口惜しくおぼしなげく。世にもいたあたらしく惜みあへり。

同じ年の冬の頃、平野・北野兩社に、一度に行幸なり。勸修寺の殿原、昔より近衞司などにはならぬ事にてありつれど、內(淺顯)の御めのと吉田大納言定房、過ぎし頃從一位し

(5)

藤の齋。高藤勸修寺を創建したよりいふ。その族に吉田・甘露寺・萬里小路・清閑寺などがある。○近衛司　近衛の大・中・少將をいふ。○御めのと傅。○定房　經長の子。その子資房以後、家を清閑寺と號す。○過ぎにし頃從一位して　元徳二年正月十三日のこと。○上﨟と等しきにや　從一位になつたので　大臣などの家柄と同じやうになつたのであらうかの意。○色ゆり　禁色を許されること。三六一頁參照。○北山西園寺の邸。○おもしろかるべい　おもしろかるべきの音便。○樂所　音樂を奏する場所。○おきてのたまふ　定められる。○康保の花の宴のためし　村上帝康保二年三月五日、南殿前の櫻花を賞せられたこと。○聞えしにや　よられたのであらうかなどの意。○琴かき合せて　共に彈くこと。○辰の時　午前八時。○ことはじまろ　宴會の始まろをいふ。○御茵まゐりて　御座蒲團を敷いて。○永福門院　伏見帝后。○昭訓門院　龜山院に仕へた人。五〇三頁參照。○階の東　正面階段より東の方。○前殿　故殿に同じ。○御子左　ミコヒタリ、又ミコザともいふ。道長の六子長家の齋。○その日の事云々　當日の事は見ないから、ハッ

て、いとめづらしくめでたければ、今は上﨟と等しきにや、稚き子の宗房といふも、少將になさる。色ゆりなどして、この平野の行幸の舞人にまゐる。土御門大納言顯實の子に、通房の中將、堀川の大納言具親の子の具雅の中將など、皆よき君だち舞人にさゝれて、いづれも〳〵美しう出でたちて、仕うまつられたり。その外は、くだ〳〵しければ、例のとゞめつ。かやうのめでたきまぎれにて過ぎもてゆく。

又の年(三十德)の春彌生の初つ方、花御覽じに、北山に行幸なる。常よりも殊におもしろかるべい度なれば、かの殿にも、心づかひし給ふ。先づ中宮(子)行啓、またの日行幸、前の右の大臣兼季まゐり給ひて、樂所の事などおきてのたまふ。

康保の花の宴のためしなど聞えしにや。北殿の棧敷にて、內々(うち〳〵)試樂(しがく)めきて、家房朝臣舞はせらる。御簾の內に大納言二位殿・播磨內侍など、琴かき合せて、いと面白し。六日の辰(たつ)の時に、ことはじまる。寢殿(しんでん)の階(はし)の間(ま)に、御茵(しとね)まゐりて、內の上(後堀)おはします。第二の間に后の宮(子)、その次永福門院(遒子)、昭訓門院(子)も渡らせ給ひけるにや。階の東に二條前殿道平・堀河大納言具親・春宮大夫公宗・侍從中納言公明・御子左中納言爲定・中宮權大夫公泰などさぶらはる。右大臣兼季琵琶、春宮權大夫多信笛、源中納言具行笙、治部卿(冬定)篳篥、琴は室町宰相公春、琵琶は園宰相基成など聞えしにや。(尾)「その日の事見給へねば、さだかにはなし。稚き童べなどの、しどけなく語りしまゝなり。この中に、御覽じたる

キリば知らない。○見給へればこの**タマフ**は下二段。見侍られげの意。○しどけなくしまりなく。○この中に尼の話を聽いて居る連中を指す。○御覽じたる人　その實際を見た人。○御簾の内にもこゝから又再び元にかへつての話である。○女藏人　女房の下臈。○兵仗たまはり給ひて　隨身を賜はるをいふ。○太刀佩き給へり　中務省の役人は、文官であるが、太刀を佩く。○さうぞきて　裝ひ飾つて。○所得たるさま　得意げな樣。○十五帖　四四〇頁を見よ。○手をつくしたる　一所懸命に奏する。○青海波を云々　青海波は只一寸形式だけ舞つて止めたのは物足らぬ心地がした。○うつろひて　夕日の光の映するを云ふ。○山の鳥の云々　塒求める山の鳥が、聲を惜しまず鳴く時分。○陵王のかゞやきて出でたる　陵王を舞ふ者が美しい姿で舞ひ出たをいふ。○倚子　腰かけ。○雲井をひゞかす　天迄も響き渡るをいふ。○入綾　三二一頁を見よ。○いみじう盡して　殘る手なく立派に舞ひ終つて。○まかづる　退出。○召しかへして　退出する所を呼びかへして。○紅の打ちたる　紅のうちぎぬ

❀無量光院　西園寺の內。○櫻人　催馬樂呂の歌。下註を見よ。○この曲は云々　この櫻人の曲を習はれた。○花を結びて云々　花の枝を結んで人もおはすらむ。承らまほしくこそ侍れ」といふ。御簾の内にも、大納言二位殿琵琶、播磨の內侍箏、女藏人高砂と云ふも、琴彈くとぞ聞えし。まことにやありけむ。中務の宮(良)もまゐり給へり。兵仗たまはり給ひて、御直衣に、太刀佩き給へり。御隨身ども、いと淸らにざうぞきて、所得たるさまなり。萬歲樂より納蘇利まで、十五帖手をつくしたる、いと見どころ多し。靑海波をけしき計りにてやみぬるぞ、飽かぬ心地しける。暮れかゝるほど、花の木の間に、夕日花やかにうつろひて、山の鳥は聲惜しまぬほどに、陵王のかゞやきて出でたるは、えもいはず、面白し。その程、上(後醍醐)も、御引直衣にて、倚子につかせ給ひて、御笛吹かせたまふ。常より殊に雲井をひゞかすさまなり。

宰相中將顯家、陵王の入綾を、いみじう盡してまかづるを、召しかへして、前關白殿(鷹司冬平)御衣とりてかづけ給ふ。紅梅のうはぎ・二藍の衣なり。左の肩にかけて、いさゝか一曲舞ひてまかでぬ。右の大臣(長通)大鼓うち給ふ。その後、源中納言具行採桑老を舞ふ。これも紅の打ちたる、かづけ給ふ。

【第二の間に后の宮云々】舞御覽記に「東の第二の間、中宮の御方の御所とす。その東の隅の間、永福門院の御座、それより東の二む間、公卿の座かけて、女院の御方の女房の候所とす。」

又の日(七日)は、無量光院の前の花の木蔭に、上達部たちつゞき給ふ。廂に倚子立てて、上(後醍醐)はおはします。御遊はじまる。拍子に治部卿(定)まゐる。上も櫻人うたはせ給ふ。

文臺の代りとせられた。○保安の例　崇德帝保安五年閏二月十二日、白河・堀河兩院の法勝寺に花の宴を催されたこと。○艾安　久安に同じ。治まり安らかなること。○城北宮城の北、卽ち西圍寺の邸ないふ。○宸臨　臨幸。○調樂懸於厥中　邸内で雅樂を奏するも。○六義之言葉　和歌のこと。古今集の序によつていふ。○歙柯　柯は枝。歙株の意。○濃花　色濃き花。○奉楫　擧楫の誤であらう。○雖小風情　たいした趣はないが。○瀝露詠　些か和歌を詠んだの意。「瀝」はシタヽラス露詠といふに對しての語である。○この筋にのみ惑はれて花の御幸ばかりにかゝつて御髀いと若く花やかに、めでたし。去年の秋の頃かとよ、資親の中納言に、この曲は受けさせ給ひて、賞に正二位ゆるさせ給ひしも、今日の爲とにやありけむと、いと艷なり。物の音ども、とゝのほりて、いみじうめでたし。その後、歌どもめきる。花を結びて文臺にせられたるは、保安の例とぞいふめりし。春宮大夫公宗序書かれけり。

海内艾安之世。城北花開之春。我君促二宸臨於此處一。調樂懸二於厥中一。重課二六義之言葉一。屢賞二數柯之濃花一。奉楫疑二出雲之昔一。雲再懸一。滿庭省二廻雪之昨雪猶殘一。雖二小風情一。慾瀝二露詠一。其詞曰。

時を得てみゆきかひある庭の面に
　花もさかりの色やひさしき

御製、

代々の御幸のあとと思へば
この上忘れ侍る、後にも見出してとぞ。中務のみこ（敦慶）、
　代々を經て絶えじとぞ思ふ此宿の
　　花にみゆきの跡をかさねて

誰も〳〵、この筋にのみ惑はれて、花のみゆきの外は、めづらしき節もなければ、さのみも記しがたし。よろづ飽かず、名殘多かれど、さのみはにて、九日に還らせ給ひぬ。

【六義の言葉】古今集の序に「歌のさま六なり」として、そへ歌・かぞへ歌・なずらへ歌・たとへ歌・たゞごと歌・いはひ歌の六種を擧げて居る。但し六義の語は、支那で詩を分類して、風・賦・比・興・雅・頌としたのを借りたので、和歌における分類は、決して當を得たものではないけれども、こゝは矢張りこの分類によつて「六義の言葉」といつたので居ろをいふ。

ある。

【出雲之昔雲】　素盞嗚尊の詠まれた歌をいふ。古事記(上)に「速須佐之男命、宮造るべき所を出雲の國にまぎ給ひき。こゝに須賀の所に到りまして、のりたまはく、吾こゝに來まして、吾御心すがゞしとのりたまひて、そこになも宮造りて、ましゝける。故そこをば今に須賀といふ。この大神初め須賀の宮造らしし時に、そこより雲たち上りき。故御歌よみしたまふ。その御歌は、八雲たつ出雲八重垣妻ごめに八重垣作るその八重垣を」　○嫋漫たる櫻花の樣を雲にたとへ、雜れて和歌のことにも關連せしめたのである。

【廻雪之昨雪】　庭に散り敷いた落花を殘雪に見たのである。文選洛神賦に「飄颻兮如二流風廻一雪」。廻雪の曲といふものがあるより、これも落花をいふと共に舞樂に關連せしめたのである。謠曲羽衣にも「げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる」などある。

【時を得てみゆきかひある云々】　丁度よい時に御幸を辱うした甲斐があつて、庭の面に匂へる花も久しく盛りの色を保つことであらう。

【代々の御幸のあとと思へば】　上旬は「宿がらは花も心にとまるかな」（藤葉和歌集）。「宿がら」は家柄などと同じく、その宿の品格。こゝは代々の御門の行幸あらせられた所であるから、それを思ふと、宿柄のゆかしさに、花も一入めでたいやうに思はれて、心のとまることであるの意。

【代々を經て絶えじとぞ思ふ云々】　花見の爲、この邸へ行幸せられた跡をつぎつゝ、此の後も此處には、代々絶えず行幸のあることであらう。

●例ならず　御病氣の○時しもあれや　丁度その頃、○かの一年捕られたりし後基　五八〇頁を見よ。但しその後放されたのである。○いかに聞ゆる事の云々　どんな事が起つたのか。○内　内裏。○陣のほとり　衞府の陣の邊。○武士ども　六波羅の。○聞きわくまでもなし　「わく」は分ける。聞きたゞす暇もない。

(9)

○あるかぎり　そこに居たもの皆。○物覺え給はぬ御有樣　殆んど人事不省の御樣子。○大殿ごもれる　寢て居られる。○いみじうおぼさる　非常に驚かれた。○ぬて下れりつれて下つた。○御惱おこたらせ給ひて　病氣は同復になつて。○このあらまし　この豫定。北條氏追討のこと。○ひたぶるに　一途に。○その用意　追討の用意。

●御占にあはせ給ひて　齋宮を定めるには、龜卜による。占つて、この內親王がそれに當つたのである。○御きよまはり　ものいみすること。○禊をいふ。

ひあへり。上（後醍醐）も物覺え給はぬ御有樣にて、大殿ごもれるに、かゝるよし奏すれば、いみじうおぼさる。遂に、またの日、六波羅へつかはしたれば、東へ（あづま）ぬて下りぬ。上（後醍醐）は、御惱おこたらせ給ひて、いとゞ安からず思ひまされり。日頃も、御心にかけさせ給へる事なれば、速かにこのあらまし遂げてむと、ひたぶるにおぼしたちて、忍びて、こゝかしこに、その用意すべし。

后の宮（子）の御腹の一品內親王（子）、御占（うら）にあはせ給ひて、去年（こぞ）の冬頃より、御きよまはりありつる、今日・明日、齋宮（さいぐう）に居給ふ。八月二十日、先づ河原へ出でさせたまひて、やがて野の宮に入らせ給ふ。その程の事ども、いみじう淸らなり。

(9)

六一四

(10)

●いそぎ　支度。齋宮の支度○六波羅　六波羅探題。○御勘事　追討せられること。○かれてより云々　以前から勅命に從ひ、御方に參るべき兵○忍びて召す　ひそかに召された。○とりもちて　引受けて。○事行ひけり　軍勢招集の事を行つた。○民部卿三位　源師親の女。○山の前座主　山は比叡山。前の天台座主

【去年の冬頃より御きよまはりありつる云々】　卜定が濟めば、先づ宮城內便宜の所に移らしめる。之を初齋院といふ（本文に齋院に居給ふとあるは是である）。次で城外に地を卜して新宮を造る。之を野の宮といひ、翌年八月初齋院を出て、こゝに入る。但し初齋院に入る時にも野の宮に入る時にも、先づ河水に臨んで禊をする。かくて潔齋三年の後、その九月始めて伊勢に發向せられるのである。

この御いそぎ過ぎぬれば、先づ六波羅を御勘事（ごかうじ）あるべしとて、かねてより宣旨（せんじ）に從へりし兵どもを、忍びて召す。源中納言具行とりもちて事行ひけり。昔龜山院に、御子など產み奉りて候ひし女房、この頃は、后の宮（子）の御方にて、民部卿三位（子）と聞ゆる御腹に、當代（後醍）の御子もいでものし給へりし、山の前座主（さきのざす）にて、今は大塔（たいたふ）の二品法親王尊雲（護良）と聞ゆる、いかで習はせ給ひけるにか、弓ひく道・

(10)

六一五

○いかで習はせ云々　どうして習はれたものか、武藝にも勝れて居られた。○はやりか　氣性の鋭いこと。○この事　追討の事。○同じ御心に云云　御門と御同意で謀を定められた。○かたがた　あれやこれやで。○衆徒　僧兵をいふ。

●つゝむとすれど　祕密にしようとするけれども。○事廣くなりにければ　事が廣まつたので。○さにこそあなれと　そんな事に違ひないと。○九重　宮城。○かたく固め

にもたけく、大かた、御本性はやりかにおはして、この事をも、同じ御心におきての給ふ。又中務の親王(貞登)の一つ御腹に、妙法院の法親王尊澄(貞宗)と聞ゆるは、今の座主にてものし給へば、かたがた比叡の山の衆徒も、御門の御軍に、加はるべきよし奏しけり。

【昔亀山院に御子など産み奉りて云々】　もとは亀山院に仕へて、御子なども生んだ女房の、この頃は、后の宮に仕へて民部卿三位といつて居るものがある。この人に後醍醐帝の御子も生れた。それは前の天台座主で、尊雲法親王といふ人である。

つゝむとすれど、事廣くなりにければ、武家にも早う漏れ聞えて、さにこそあなれと用意す。先づ九重をきびしく固め申すべしなど定めけり。かくいふは、元弘元年八月廿四日なり。雜務の日なれば、記錄所(後醍醐)におはしまして、人の爭

申すべし　嚴重に警固せよ。(六波羅方の評定)。○雜務の日　利錢・出擧・替米・田畠・奴婢等民事に關する雜件の裁判　○爭ひうれふる事　訴訟。○行ひくらさせ　終日訴訟を聽いて。○まかで　退出して。○本殿　清涼殿。○武士ども　北條氏の兵。○雲の上　宮中　○しめやかにもあらず　落著かぬ。○かれて思しまうけぬにはあらねども　以前から覺悟して居られなかつたことではないが。○事のさかさまなるやうに　此方から攻めるつもりなのが、反對に攻められたことをいふ。○うき〳〵と　ソハ〳〵とし落著かぬこと。○忍びてゐてわたらせ給ふ　ソツと持つて行かれた。

ひうれふる事どもを、行ひくらさせ給ひて、人々もまかで、君も本殿にしばしうち休ませ給へるに、今夜既に武士どもきほひ參るべしと、忍びて奏する人ありければ、とりあへず、雲の上を出でさせたまふ。中宮(子)の御方へわたらせ給ひても、しめやかにもあらず、いとあわたゞし。かねて思しまうけぬにはあらねども、事のさかさまなるやうになりぬれば、よろづうき〳〵と、我も人もあきれ居たり。内侍所・神璽・寶劍ばかりをぞ、忍びてゐてわたらせ給ふ。上(後醍醐)は、なよらかなる御直衣たてまつり、北の對より、やつれたる女車のさまにて、しのびて出でさせ給ふ。かの二條院の昔も、かくやと思ひ出でらる。

【かの二條院の昔もかくやと思ひ出でらる】　平治物語(卷一、主上六波

羅行幸の事）に、「さる程に、主上は北の陣に御車をたて、女房の餝をめして、御かつらを奉る。云々。中宮も主上と一つ車にてぞめされける。別當惟方・新大納言經宗、直衣に袴ばさみして供奉し、藻鹽門院より行幸なし奉れば、此門は金子平山固めたり。家忠「如何なる御車ぞ」と申せば、別當「上萬女房達の出でさせ給ふなり。惟方があるぞ。別の仔細あるまじ」とのたまへども、金子なほ怪しみて、弓の筈にて簾かきあげ、松明振り入れて見奉れば、二條の院、御在位の始、御歳十七になり給ふ上、龍顔もとより美しくおはしますに、花やかなる御衣はめされたり、まことに目も迷ふばかりの女房に見えさせ給ふ。中宮はおはします。いかでか見苦め奉らむ。故なく落しまゐらせけり。」

日頃の御用意には、先づ六波羅を攻められむまぎれに、山へ行幸ありて、彼處へ兵どもを召して、山の衆徒をも相具し、君の御かためとせらるべしと定められければ、かの法親王だちも、その御心して、坂本に待ちきこえ給ひけれど、

○なよらかなる　柔い。○やつれたる　體裁の悪い粗末な　○女車　女房の乘る車。

●日頃の御用意には　朝廷における豫ての御用意では。○まぎれ　混雑。○山　比叡山。○相具し　引連れ。○君の御かためと　君の御護り。○かの法親王だち　尊雲・尊澄。○その心して　そのつもりで。○坂本　比叡山の麓。○あへなし　たのみなし。○九條わたり　九條邊。○狩の御衣　狩衣。○やつれ　樣形の悪くなること。○御馬にたてまつる　御馬に乘られる。○こは如何にしつる事ぞと云々　馴れ給はぬ狩衣を著、御馬に召されたので、あまり御身の變り方の甚しいのに驚かされたのである。○あやしい姿　みすぼらしい姿。○我にもあらぬ樣　餘りの事に自分ながら自分でないやうな氣のするをいふ。○丑三つばかり　午前三時頃。○木幡山　山城宇治郡。伏見の邊。○むくつけし　氣味が悪い。○木津　山城相樂郡。奈良の北一里。

今はかやうに事違ひぬれば、あへなしとて、俄かに道をかへて、奈良の京へぞ赴かせ給ふ。中務の宮（尊雲）も、御馬にて追ひて參り給ふ。九條わたりまで御車にて、それより御門（後醍醐）も、狩の御衣にやつれさせ給ひて、御馬にたてまつるほど、こは如何にしつる事ぞと、夢の心地しておぼさる。御供に按察大納言公敏・萬里小路中納言藤房・源中納言具行・四條中納言隆資などまゐれり。いづれも、あやしき姿にまぎらはして、暗き道をたどりおはするほどに、げに「闇のうつゝ」の心地して、我にもあらぬ樣なり。丑三つばかりに、木幡山過ぎさせ給ふ、いとむくつけし。木津といふわたりに、御馬とめて、東南院の僧正（聖尋）の許へ、御消息つかはす。それより御輿を參らせたるに奉りて、奈良へおはし

○東南院　奈良東大寺の中にあるもの。○和東の鷲峯山　山城相樂郡和束鄕鷲峯山金胎寺。○さるべくやなかりけむ　思ふやうにはなかつたのであらう。○笠置寺　相樂郡笠置山。○木丸殿　荒木のまゝで造つた宮殿。

●百敷　禁中。○あさりさわぐ　探し騷ぐ。○曹司　部屋　○おのづから・偶と。○落ち殘りたる　逃げ損つて居る。○おはしまします殿　清涼殿をいふ。○厨子　座側に据ゑて、器具・書籍などを置くもの。○調度　道具類。○さながら　そのまゝ。○宮人　宮仕への人。○樋洗　便所の掃除をする女。○めくらしく見えるの意。○くづれ出づる　ドヤ〳〵と亂れ出る。○氣色　樣子。○目もあやなり　目もくるめくやうだ。○几帳　室内に立てて隔とする帷。○いつかれまし〳〵つる　かしづかれて居た。○あたり〳〵　其處此處。○かき拂ひ　調度など取り拂ふこと。○踏みしだき　踏みにじり、○くらがりて　くらがる(六四)。暗くなる。○えもいはぬ武士　何ともいへぬ恐ろしい武士。○けはひ　樣子。○繪殿・渡殿　共に廊をいふ。

ましつきぬ。こゝに中一日ありて、廿七日、和束の鷲峯山へ行幸ありけれども、其處もさるべくやなかりけむ、笠置寺といふ山寺へ入らせ給ひぬ。所のさま、たやすく人の通ひぬべきやうもなく、よろしかるべしとて、木丸殿の構へを始めらる。これよりぞ、人々少し心地とりしづめて、近き國々の兵どもも召しに遣はす。

【闇のうつゝ】古今集(戀)に「うば玉の闇のうつゝはさやかなる夢にいくらもまさらざりけり」とある歌によつた語。

さて都には、廿四日の夜、六波羅より、常陸守時知馳せ參りて、百敷の中をあさりさわぐ。その程、人の曹司などに、おのづから落ち殘りたる女房の心地、いはむ方なし。おはしまします殿を見れば、近き御厨子・御調度ども、何くれ、硯なども、さながらうち散りて、只今までおはしましける跡と見えながら、宮人などだに一人もなし。女房の曹司々々より、樋洗めく女の童など、我先にと走り出で、調度どもあやなり。錦の几帳の内に、いつかれまし〳〵つる后の宮(藤子)も、何の儀式もなく、忍びてあわて出でさせ給ひぬれば、あたり〳〵かき拂ひ、時の間に、いとあさましく、御簾・几帳など、踏みしだき、ひき落して、火の影もせず。こゝもかしこも、くらがりて、うち荒れたる心地す。今朝まで、九重の深き宮の中に、出入り仕へつる男女、一人とまらず、えもいはぬ武士ども打散り、あら〳〵しげなるけはひに、續松高くさゝげて、細殿・渡殿、何くれ、目陰さし

○目陰さして　目の上に手をかざして見ること。○あさりたるけしき　探しまはる樣子○けうとく　恐ろしく。○心あらむ人　思慮ある人。○やがて　直。○修行の門立　佛門に入つて、修行の道に出で立つこと。○野宮殿　齋宮懺子の居られる所。六一四頁參照。○二郎　次男。

●とりもてゆく樣　捕へ行く樣。○獄卒　地獄で、罪人を苛責する鬼。○とり殘されたる人　捕へられなかつた人。○心と　我が心と。○かき消ち行き　逃げゆくをいふ。

て、あさりたるけしき、けうとく、あさまし。世は憂きものにこそと、時の間に、げに心あらむ人は、やがて修行の門出にもなりぬべくぞ覺ゆる。中宮(秋)は、忍びて、野宮殿の傍にぞおはしましつきにける。宣房の大納言の二郎、季房の宰相ばかり、御宿直にさぶらふ。

【世は憂きものにこそと云々】「實に心あらむ人は、時の間に、世は憂きものにこそと(思ひ)、やがて修行の門出にもなりぬべくぞ覺ゆる」の意。

廿五日の曙に、武士ども滿ち〳〵て、御門の親しく召しつかひし人々の家々へ、押入り〳〵とりもてゆく樣、獄卒とかやの顯れたるかと、いとおそろし。萬里小路大納言宣房・侍從中納言公明・別當實世・平宰相成輔、一度に、皆六波羅へゐて行きぬ。かやうの事を見るに、いとゞ肝心もうせ

●坂本　延曆寺をいふ。○引きたがへ　變更して。○南ざまへ　奈良へ行かれたをいふ。○とまれかくれ　**トモアレカクモアレ**の約。何にせよ。○まことのおはしまし所　實際御門の居られる所。○さうなく　たやすく。○たばかり　謀。○山　比叡山延曆寺。○〻でないて「もてなして」の音便。とりなして。○事行ひ給ひつゝ　指揮されながら。○卯花縅　白と萌黃とで、段々に色を變へてなどしたもの。○大矢　長く大きな矢。○生絹　練らぬ生絲織の絹。○腹卷　鎧の一種、背で合して、自らとり殘されたる人も、心と、皆かき消ち行き、隱るゝほどに、主なき宿のみぞ多かる。

坂本には、行幸を待ち聞え給ひけるに、引きたがへ、南ざまへおはしましぬれば、そのよし衆徒に聞かれなば、惡しかりぬべし。又とまれかくまれ、まことのおはしまし所を、さうなく武家へ知らせじのたばかりにやありけむ、花山院の大納言師賢を山へつかはして、忍びて御門のおはしますよしにもてなして、かの兩法親王(尊良尊澄)事行ひ給ひつつ、六波羅の兵どもの圍みを防がせ給ふ。その日は、大納言(師賢)も、大塔の前座主の宮(尊雲)も、うるはしき武士姿にいでたゝせ給ふ。卯花縅の鎧に、鍬形の兜たてまつりて、大矢負ひてぞおはする。妙法院の宮(尊澄)は、生絹の御衣の下に、

萌黄の御腹巻とかや著給へり。大納言（實師）は、唐の香染の薄物の狩衣に、掲焉に赤き腹巻をすかして、流石に、巻繪の細太刀をぞ佩き給ひける。

【忍びて御門のおはしますよしにもてなして】太平記（巻二）に「尹大納言師賢の卿は云々、大塔の宮よりさまざま仰せられつる仔細あれば、云々、衰龍の御衣を著して、塔奥に乗りかへて、山門の西塔院へ登り給ふ。云々。西塔の釋迦堂を皇居となされ、主上山門を御頼みありて、臨幸なりたる由、披露ありければ、山上・坂本は申すに及ばず、云々、我先にと馳参る。

六波羅より、御門（後醍）こゝにおはしますと心得て、武士ども多く参り圍む。山法師も戰ひなどして、海東とかやいふ兵討たれにけり。事の始に、東失せぬる、めでたしなどぞいふめる。かゝれども、御門笠置におはしますよし、程なく聞えぬれば、謀られ奉りにけるとて、山の衆徒も少々心がはりしぬ。宮々（尊雲尊澄）も逃げ出でたまひて、笠置へぞまうで給ひける。大納言（師賢）は都へまぎれおはすとて、夜ぶかく志賀の浦を過ぎ給ふに、有明の月隈なくすみわたりて、寄せかへる浪の音もさびしきに、松吹く風の身にしみたるさへ、とりあつめ心細し。

思ふ事なくてぞ見ましほのぼのと
ありあけの月の志賀の浦波

その後辛うじてぞ、笠置へは迯り参られける。

【思ふ事なくてぞ見まし云々】憂ある身には、有明月に照らされたこの美しい志賀の浦の景色も、只心細く思はれるが、どうか何の物思ひもなく、この景色を見たいものだ。

謀られ奉りける　だまされた　○まうで給ひける　参られた　○まぎれおはす　敵に氣附かれぬやう、雜人の間に交り隱れて行かれる。○志賀の浦　近江滋賀郡。琵琶湖畔。○有明の月　明方に殘つて居る月　○とりあつめ　月影・浪音・風の聲等いづれも。○迯り　分らぬ道を探りながら行く。

●こゝに　延暦寺を指す。○山法師　延暦寺の僧。○海東　海東左近大夫將監。六波羅勢の大將。○東失せぬる　關東と關係のある東といふ字のついた海東の死んだとは。○

●早馬　馬でゆく急使。六波羅より鎌倉に遣はすもの。○久明親王　後深草帝第六子。正應二年北條貞時に迎へられて、將軍となり、延慶元年廢せられ、嘉暦三年薨ず、年五十三。四八五頁參照。○守邦の親王　延慶元年將軍となる時に七歳。○入道し　佛門に入つて。嘉暦元年（二十六歳）のこと。○世の大事ども云々　天下の政務には關係しないが。○いろはねど　いろふ（ハ四）取扱ふ。○鎌倉のぬし　執權ではないが、鎌倉で最も勢力あるをいふ。○あめり　あるめり。○うつゝなく　狂人じみて居る。○犬くひ　闘犬。○重き武士　威望ある武士。○のぼすべし　都へのぼせる。○けしからず　言語道斷などの意。○承久の昔　新島守の卷を見よ。

●持明院殿　後伏見院の御所。○思の外に云々　大覺寺統の後醍醐帝が、都を出られたので、反對黨たるこの派の御子が、思ひがけなくも、又帝位に即くことが出來るやうになつたけれども。○沙汰　とりきめると。○うべ〳〵しき　しつかりした。○離れおはします　六波羅に遠く離れて居ること。○日にそへて　日に日に。○將軍の御料　將軍御用のもの。二九五頁參照。○

かやうの事ども、例の早馬にて、あづまへ告げやりぬ。只今の將軍は、昔式部卿久明親王とて、下り給へりし將軍の御子なり。守邦の親王とぞ聞ゆる。相模守高時といふは、病によりて、いまだ若けれど、一年入道して、今は世の大事どもいろはねど、鎌倉のぬしにてはあめり。心ばへなどもいかにぞや、うつゝなくて、朝夕好む事とては、犬くひ・田樂などをぞ愛しける。これは最勝園寺入道貞時といひしが子なれば、承久の義時よりは、八代にあたれり。この頃、私の後見には、長崎入道圓基とかいふものあり。世の中の大小事、只この圓基が心のまゝなれば、都の大事、かばかりになりぬるをも、かの入道（基顯）のみぞ、とりもちて、おきて計らひける。重き武士ども多くのぼすべしとき

こゆ。大方京も鎌倉も、さわぎのゝしるさま、けしからず、承久の昔もかくやと、今更に思ひやらる。

【承久の義時よりは八代にあたれり】

義時—泰時—時氏—經時—時頼—時宗—貞時—高時。

持明院殿には、春宮（後光厳）おはしませば、思の外にめでたかるべき事なれど、今日・明日は、いまだ軍のまぎれにて、何の沙汰もなし。御宿直の者のうべ〳〵しきもなくて、離れおはしますも、あぶなき心地すればにや、せめても六波羅近くとて、六條殿へ、本院（後伏見）・新院（圓佐）・春宮（後光厳）、引き續きて遷らせ給ひぬれど、日にそへて、天の下さわぎみち、おそろしき事のみ聞ゆれば、猶ほこれも危しとて、六波羅の北に、代々の將軍の御料とて、造りおける檜皮屋一つあ

ものし　いとはし。○よろしき時　太平の時。○かばかりの際　こんな騒亂の際。

●笠置殿　後醍醐帝のましまする所。○事のはじめ　今度の騒亂の初。○すくよかにしつかりした。○己が館のあたり　河内の國の自分の館のある邊。館は赤坂城。○いかめしくしたゝめて　嚴重に防禦の支度をして。○このおはします所　笠置殿を指す。○行幸なもなし聞えむ　赤坂城へ行幸を願はう。○あづまのえびす　鎌倉の武士なるぶ。○京にある武士　六波羅に居る關東方の武士。○木丸殿　笠置殿を指す。六二〇頁參照。

るに、兩院・春宮入らせ給ふ。大方は、いとものしきやうなれど、よろしき時こそあれ、かばかりの際には、何の儀式もなかるべし。

笠置殿には、大和・河内・伊賀・伊勢などより、兵ども參り集ふ中に、事のはじめより頼み思されたりし楠木兵衛正成といふものあり。心猛く、すくよかなるものにて、河内國に、己が館のあたりを、いかめしくしたゝめて、このおはします所、もし危からむ折は、行幸をもなし聞えむなど、用意しけり。あづまのえびすどもも、やう〳〵攻め上るよし聞ゆ。もとより京にある武士どもも、我先にときほひまゐる。木丸殿には、さこそいへ、むね〳〵しき者もなし。いかになりゆくべきにかと、いと心細くおぼしみだる。我

○さこそいへ　さうはいふものの。兵が集まつたとはいふものの。○むね〳〵しきもの　重だつた者。○いかになりゆくべきにか　どうなることかと。○我が御心もての御事　御門自ら引き起された事。○かこつ方なけれど　恨みようはないが。○故郷の空　都の方。中宮なども居られるから。○仇のきほひたつて襲ひ來るかと。○御身をかへたる心地　一天萬乘の君が、たゞ人に變つたやうな心地。○あぢきなし　情ない。

●雲霞の勢をたなびかし　雲霞の如き大軍を以ての意。「たなびかす」は雲霞の縁語。○

が御心もての御事なれば、かこつ方なけれど、故郷の空も、あはれにおぼしいでらる。秋も深くなりゆくまゝに、山の木の葉のうちしぐれ、谷の嵐のおとづるゝも、仇のきほふかと、肝を消す御すまひ、いつしか御身をかへたる心地し給ふも、あぢきなし。

うかりける身を秋風にさそはれて
　思はぬ山の紅葉をぞ見る

【憂かりける身を秋風に云々】思ふことは成らず、つらいと思つて居る身を、吹く秋風に誘ひ出されて、思ひもかけぬ、この笠置山の紅葉を見るとは、何と悲しいことであらうの意。

既にあづまの武士ども、雲霞の勢をたなびかし上るよし聞ゆれば、笠置にもいみじうおぼしさわぐ。もとよりいと嶮

つゞらなり　折れ曲つた坂路　○木戸　城門。○逆茂木　軒ある木の枝を柵に結ひつけたもの。今日の鐵條網に相當する。○石弓　石を機きやる武器。○したゝめらる　準備せられる。○さりとも「さありとも」の約。たとひ大軍が攻め寄せて來ても。○くづれ參りて　入り亂れて押寄せて來る。○おはしますあたり　御門の居られる邊。○今はいかがせむ　今はどうしようもないの意。○あやしき姿　みすぼらしい姿。○はかなげなる　たのみになりさうにない。○そなたざま　楠木が館へ。○延びさせ給ひ　逃げられる○ならはぬ山路　行き馴れぬ山路。○高天の山　大和南葛

しき山のつゞらをりを、えもいはず、木戸・逆茂木・石弓などいふ事どもしたゝめらる。さりとも、たやすくは破れじと、頼ませ給へるに、後の山より、御敵どもくづれ參りて、木戸ども焼きはらひ、おはしますあたり近く、既に煙もかかりければ、今はいかゞせむにて、あやしき姿にやつれて、たどり出でさせ給ふ。座主の法親王御手をひき奉り給へるも、いとはかなげなる御有樣なり。中務の御子・大塔の宮などは、かねてより、こゝを出でさせ給ひて、楠木が館におはしましけり。行幸もそなたざまにやと思し心ざして、藤房・具行兩中納言・師賢の大納言入道、手をとり木戸・逆茂木・石弓

城郡。○御心地をためらふ　御心を休め靜められること。○參りかゝりて　來て出くはして。○案内聞えたるしも　御歸洛の由を申して、導き奉る。シモは意味な強める助詞○めざましう　餘りのことに驚きあきれるほど。○上達部　藤房等。○思ひやる方なく　心慰む方もなく。何の分別もつかず。○ともかくものたまはすべきやうなければ　何とも申されやうがないから。○御身をまかせぬる　敵の自由にさせる。

●御心にもあらで　心ならずも。○ひかされおはします　眞直に連れられて行かれるを

たづね出でて、君（後醍）ばかりたてまつりぬれど、ならはぬ山路に、御心地もそこなはれて、誠に危く見えさせ給へば、高天の山といふわたりに、しばし御心地をためらふ所に、山城國の民にて、深須の五郎入道とかいふもの、參りかゝりて、案内聞えたるしも、いとめざましう口惜し。上達部思ひやる方なくて、只目を見かはして、いかさまにせむと、あきれたるに、あづまより上れる大將軍にて、陸奥國の守貞直といふもの、大勢にて參れり。今は只、ともかくも、のたまはすべきやうなければ、遂にかひなくて、敵のために、御身をまかせぬる樣なり。

やがて宇治に行幸あるべきよし奏すれば、御心にもあらで、ひかされおはします程に、心憂しといふも、なのめなり。具

いふ。○なのめなり　一通のとである。即ち中々心憂しなどいふ位の話ではないの意。○己が手の者ども　貞直の部下の兵士。○御馬の尻に走りおくれて　笠置おちの際、御門の御馬について歩いて居たが、何時しか走り後れて。○それも見つけられて　その師賢も敵に見つけられて。○事のよし　字治へ入れ奉つた次第。○御逗留　御門字治に○かゝらぬ行幸ならばと　こんなあさましい行幸でなく、普通の行幸であつたならばと○あへなし　思ふも、かひなし。○後冷泉院かとよ云々　治暦三年十月十五日行幸。○上下何事かはと　官位の高い人も低い人も皆何の心配もなく行幸ならばと、あへなし。後冷泉院かとよ、こゝかしこに行幸し給ひて、三四日おはしましける、その世の人の心地、上下何事かはと、うらやましく、あはれにおぼさる。十月三日都へ入らせ給ふも、思ひしに變りて、いとすさまじげなる武士ども、衞府のすけの心地して、御輿近くうちかつたらうと。●すさまじげなる　恐ろしさうな。○衞府のすけ　行幸供奉の兵衞・衞門の佐官。○あやしき　粗末な輿。○六波羅の北なる檜皮屋　六二七頁を見よ。○板屋　板葺の家。○しつらひ設備。○おはしまさする　御門を。○かたじけなし　恐れ多い。○はしたなく　意地悪く。○むら時雨　一むら降りすぎる時雨。

圍みたり。鳳輩にはあらぬ網代輿のあやしきにぞたてまつれる。六波羅の北なる檜皮屋には、もとより兩院（後伏見・花園）・春宮（光厳）おはしませば、南の板屋のいとあやしきに、御しつらひなどしておはしまさするも、いとほしう、かたじけなし。間近きほどに、よろづ聞し召し、御覽じふるゝ事毎につけても、いかでか御心動かぬやうはあらむ。口惜しうぼし亂る。ならはぬ御宿りに、時雨の音さへ、はしたなくて、

まだ馴れぬ板屋の軒のむら時雨
音をきくにもぬるゝ袖かな

【間近きほどによろづ聞しめし云々】六波羅の近くに居られるので、いろ〳〵の事が聞えたり、見えたりする。それらの事毎につけても、ど

●御門のかくならせ給ひ　六波羅に幽閉のこと。○かひなし　仕方がない。○それも尊貴も。○徒然と　獨り物寂しく。○御覽じつきて　愛せられるゝと。○中宮の御匣殿　御匣殿別當（二一三頁を見よ）で中宮に仕へて居たよりいふ。○公顯と聞えし御女　公顯といふ人の女。○思ふまゝなる世をも云々　尊貴親王が帝位につき、心のまゝに世を治められるをいふ。○思しかはしつゝ　思ひあふ。但しこゝは御寵愛になること。

うして御心の動かぬことがあらう。

【まだ馴れぬ板屋の軒の云々】まだ住み馴れぬ板屋の軒に、降るむら時雨の音を聞くにつけても、かういふ境遇にある身の悲しさに、時雨ならぬ涙がこぼれて袖がぬれるの意。

中務の宮（貴尊）は、正成が許におはしましつれど、御門（後醍醐）のかくならせ給ひぬれば、今はかひなしとて、それも都へ入らせ給ひて、佐佐木判官時信といふものの家にわたらせ給ひぬ。徒然と、物思しみだるゝより外の事なし。

世のうさを空にもしるや神無月
ことわりすぎてふる時雨かな

この御子（貴尊）は、藤大納言爲世の御孫にてものし給へば、かの家に、常は住み給ひしほどに、大納言（爲世）の末の女、大納言の典侍と聞ゆるに御寵じつきて、その御腹に、姫宮などふ。○吹きかふ風も云々　御子の居られる時信の家と典侍の居る所とは、風も吹き通ふ程近い所であるが。○おぼつかなさの云々　逢ひえぬ心もとなさを慰める御消息のやうなものさへも自由に通ふことが出來ない。○いぶせう「いぶせく」の音便。面白からず氣の晴れぬこと。○已がちり〳〵別々に諸所へ流され給ふこと。

いできたまへり。又中宮（子尊）の御匣殿は、宮（子尊）の御兄の右大臣公顯と聞えし御女なり。その御腹にも、男みこなどおはします。思ふまゝなる世をも待ちいで給はばと、誰も行末頼もしく思ひ聞えつるに、かく思ひの外に、あさましき事の出できぬるを、深う思ひなげく人々數しらず。御匣殿は失せ給ひしかば、この頃は、たゞこの典侍の君をのみ、またなきものに思しかはしつるに、吹きかふ風も、ま近きほどにはおはすれど、御對面は思ひもよらず。おぼつかなさの慰むばかりなる御消息などだに、通ふこともかなはぬ御有樣を、あはれにいぶせう、思しむすぼほれたり。ひとつ御腹の座主の法親王（尊雅）も、長井の高廣とかやいふ者、あづかりたてまつりぬ。御門（後醍醐）遠く遷らせ給はむほど、御子

●世をつゝしみて　世の中を用心して。○同じ御宿り　同じく六波羅に居られること　○葦垣ばかりを云々　葦垣は葦で作つた垣。只ちよつとした隔ばかりでの意。○主なき院の内　二條富小路殿をいふ　○衞士のたく火　五五〇頁を見よ。○内には　禁中には。○けしかるもの　異樣なもの　妖怪をいふ。○長やかにふみたれて　長く垂れて穿いて居ること。○鬼殿　ばけものやし

達(尋眞尋澄)も、己がちりぢりになり給ふべしなど聞えけり。

【世のうさを空にもしるや云々】　世の憂き事を空にも知るのであらうか、この十月は、道理にも過ぎて、しげく時雨の降ることである。卽ち空も自分の身に同情して涙をこぼすやうに、特に時雨が多く降るのであらうかの意。

春宮(光嚴)は、世をつゝしみて、六波羅に渡らせ給ふ。先帝(後醍醐)は仇(あた)の爲に、同じ御宿り、葦垣(あがき)ばかりを隔にておはしませば、主(ぬし)なき院の内、いと寂しくて、衞士(ゑじ)のたく火も、影だに見えず。内には、いつしか、けしかるものなど住みつきて、或時は、紅(くれなゐ)の袴(はかま)長やかにふみたれて、火ともしたる女、見るまゝに、丈(たけ)は軒とひとしくなりて、後にはがき消ち失するもあり。又いみじう光を放ちて、髮を前にみだしかけたる童なども見えけり。鬼殿(おにどの)などは、かくやありけ

き。○これかれ　何にしても

●參れる　使者として都に上つた。○事のよし　光嚴帝御卽位に關すること。○さるべき御事といひながら　東宮踐祚のことは、當然の事とはいふものの。○ひきつくろひたる　行列の整つたこと。○ひしめきたちぬる世の音なひ　騷ぎ立つ世間の響。○たとしへなく　たとへん方なく。○

むと、おそろし。人住まで年經、荒れぬる所などにこそ、かゝる事も、おのづからありけれ。僅かに一月・二月の中に、かゝるべきにあらぬを、これかれ、いと怪しきわざなるべし。

【春宮は世をつゝしみて云々】　光嚴帝の踐祚は九月二十日で、この時は、もう内裏に居られるわけである。

さて、例のあづまより御使のぼれり。代々の例(ためし)とかやとて、秋田の城(じやう)の介高景・二階堂出羽の入道道雲とかやいふものぞ參れる。西園寺大納言公宗卿に事のよし申して、春宮(光嚴)御位につき給ふ。さるべき御事といひながら、今日明日とは見えざりつるに、いとめでたし。さて六波羅より、この度は、世の常の行啓(ぎやうけい)の儀式にて、持明院殿へ入らせ給

れたく　れたましい。○人わろし　外聞・悪い程である。○もとの内裏　土御門内裏。○おはしまいて　おはしましての音便。○後宇多院の昔　後宇多院も亀山殿から都へ出て院政を執られたことをいふ。

●綸旨　蔵人が勅旨をうけて出す文書。○前の御代の人々　云々　前代に時めいて居た人が、今度は蔵られるのである。○昨日までの云々　昨日までは時代の寵児として榮えて居た人。○つかのま　暫くの間。○一つ御族　持明院の系統をいふ。○わく方なく　他に分れることなく、その系統だけで。○亀山院の御流　亀山院の御系統。○先坊　前の東宮。○一の宮　長子。○今は思ひの絶えぬる云々　邦良薨後は、光厳院が東宮と定まつたので、この御子が東宮となられることは、とても駄目と思はれて居たのに。○入道の宮　邦良妃。後宇多女。五八七頁參照。○あり し後　邦良薨去の後。○おのがさまざま

ふ。兩院（後伏見・花園）もひきつくろひたる御幸のよしなり。ひしめきたちぬる世の音なひを聞しめす先帝（後醍醐）の御心地、たとしへなく、人わろし。もとの内裏へ、新帝（光厳）うつらせ給ふ。上達部殘りなく仕う奉らる。院（後伏見）も常磐井殿へおはしまいて、世の政事聞しめせば、後宇多院の昔思ひ出でられて、あはれなり。

【代々の例とかやとて云々】　これまで代々のしきたりになつて居るとかいふので、今度も、高景等が上洛した。但し九月十八日に京に著いた。○後嵯峨踐祚の時、秋田城介義景の上つたことは、一四八頁にあるが、保暦間記の記事によれば、この時、義景と共に出羽前司行義といふものが上つて居る。そして今度上つた高景はこの義景の曾孫時顕の子、道雲は行義の曾孫行藤の子（貞藤）である。

いつしか十月十二日綸旨下されて、前の御代の人々、大中納言・宰相すべて十人、宣房・公明・藤房・具行・隆資・實世・實治・季房・隆重・忠顕、官やめらるゝよし聞ゆるも、昨日までの時の花と見えし人々、つかのまの夢かと、あはれなり。かゝるにつけては、一つ御族のみ、今はわく方なく定り給ふべきかと、世の人も思ひ聞ゆる程に、亀山院の御流絶ゆべきにはあらずとにや、先坊（邦良）の一の宮を太子に立てまつらる。御乳母の雅藤の宰相の法性寺の家に渡らせ給へるを、土御門高倉の、先坊（邦良）の御跡へ入れ奉りて、十一月八日坊に定り給ふ。今は思ひの絶えぬる心地しつるに、いとめでたし。松が浦島に年經給ひぬる入道の宮も、御親の心地にて　おはしますべければ、太上天皇になすらへて、崇明門院ときこゆ。よろづ斧の柄朽ちにし昔を改めた

る宮の中なり。ありし後、おのがさまざま、まかで散りにし古女房・上達部・殿上人など、世の中屈じいたくて、こゝかしこに籠り居たりしも、いつしかと參りつどふさま、谷の鶯の春待ちつけたる心地して、いとたのもしげなり。傅には、久我の右の大臣長通、大夫は中院大納言通顯なり給ふ。なべて世に、年頃うづもれたりし人々、いつしか、官位さまざまに思ふまゝなる氣色ども、目の前にうつりかはる世のありさま、今更ならねど、いとしるく、揭焉なるも、あぢきなし。かくて年もくれぬ。

【御乳母の雅藤の宰相の云々】先坊の一の宮は、當時御乳母雅藤の法性寺の家に居られたのを、土御門高倉の、先坊の居られた跡へ入れ奉つた。

【松が浦島に年經給ひぬる入道の宮】後撰集（雜）に「西院の后、おほん

銘々勝手に。○まかで散りにし　宮を退き、ちりぢりになつた。○古女房　古くから仕へて居る女房。○屈じいたくて　非常に思ひ屈して。○傅　東宮傅春宮大夫。○うづもれたりし人　時を得ず沈淪して居た人。○今更ならねど　今更驚くことでもないが。○いとしるく　變化が著るしく。○揭焉き　はやか。○あぢきなし　面白くもない。

髮おろさせ給ひて、行はせ給ひける時、かの院の中島の松をけづりて、書きつけ侍る。音に聞く松が浦島今日ぞ見るうべ心あるあまも住みけり（素性）」。松が浦島は陸奥の地名を松のある庭の中島にとり、こゝに流する體を音調上より尼によそへていつたのである。なほ五八七頁參照。

【よろづ斧の柄朽ちにし昔】世の中の有樣の、すつかり變つたことをいふ。列仙傳に「王質晉衢州人也。入レ山伐レ木。至二石室山一見二石室中一有二數童子圍レ棊。質置レ斧觀レ之。云々。童子云。汝來已久可レ還。質取レ斧。柯爛已盡。質歸還レ家。已歷百年。親舊無二復存者一。」

●新しき御代の年の始　元弘元年九月北條高時の光嚴帝（量仁）を御位につけまゐらせてより始めての新年である。○思ひなしさへ　心にそれと思ふさへ。○百敷の内　禁中○何事もかはらず　公事など平常の通り行はれる。○公事　朝廷の儀式。○さらでも　さうでなくても。公事の時などは、普通でも立ち込むのに、院と内とが一所であるから。○院内　仙洞と内裏。○同じ陣の内　同じ衞府の陣の中にある。○見し世の人　見知つて居る人。前代に仕へて居た人。○まじろはず　まじらす。○參りまかづる　參つたり退出したりする。○ゆるらか　ゆるやか。○うれはしき御心地　後醍醐帝の御心中をいふ。○異樣なれど　趣の違つたことだがの意。○思ひよそへらる　思ひくらべられる。○長き日影　二月は今の三月頃に當るから、春で日が永い。○聞え給ひけむ　中宮より御門へ。○いさゝかなる物のはし　ちよつとした紙片か何かをいふ。○四の緒　琵琶。○げにとおぼしめしやるに　實際どんなに歎いて居られるとだらうと思ひやると（御門が）。○玉水　軒端の雫。涙の甚しいさまをいふ

第十九　久米のさら山

元弘二年の春にもなりぬ。新しき御代の年の始には、思ひなしさへ花やかなり。上（光嚴）も若うきよらにおはしませば、よろづめでたく、百敷の内、何事もかはらず。さるべき公事の折々、さらでも、院・内、同じ陣の中なれば、一つに立ちこみたる馬・車、隙なく、賑はしけれど、見し世の人は、ひとりもまじろはず。參りまかづる顔のみぞかはれる。先帝（後醍）は、いまだ六波羅におはします。二月の頃、空の氣色のどやかに霞みわたりて、ゆるらかに吹く春風に、軒の梅なつかしくかをりきて、鶯の聲うらゝかなるも、うれはしき御心地には、ものうかるねにのみ聞し召しなさる。

異樣なれど、上陽人の宮の中思ひよそへらる。長き日影も、いとゞ暮らし難き御慰めにとや聞え給ひけむ、中宮より御琵琶奉らせ給ふついでに、いさゝかなる物のはしに、

思ひやれ塵のみ積る四の緒に
はらひもあへずかゝる涙を

げにとおぼしめしやるに、いと悲しくて、玉水の流るゝやうになむ。御かへし、

かきたてしねを絶ちはてて君戀ふる
涙の玉の緒とぞなりける

【ものうかるねに】懶くある聲に。卽ち氣の進まぬやうな聲での意。古今集（春）に「春たてど花も匂はぬ山里はものうかるねに鶯のなく」とある歌によつた語。

【上陽人の宮の中】「上陽人」は、玄宗皇帝後宮の一人であるが、帝の寵

●承久のためし　後鳥羽・土御門・順徳三上皇を遠島に遷し奉つたこと。八八頁參照。○鎌倉に重き武士　鎌倉で重きをなせる武士。○はじめの七日　七日のこと。十七日を中の七日などいふに對する語。○今はと　今はいよ〳〵

は專ら楊貴妃に注がれたので、是も他の美人と共に別所に置かれ、遂に一度も帝に逢ふことなくして、空しく上陽宮に老い朽ちてしまつたのである。

【思ひやれ塵のみ積る云々】　お別れまゐらせてよりは、一度も彈くことはございませんから、琵琶には只塵ばかりが積つて居ます。そしてその琵琶の上には、拂ひもあへぬ涙がポタ〳〵とかゝります。どうかこの私の心中の悲しさをお思ひやり下さいませ。

【かきたてしれを絶ちはてて云々】　昔かき鳴した琵琶の音は絶えてしまつて、その緒は、今は君を戀ひ忍ぶ涙の玉を貫く緒となつた。

かの承久のためしにとや、東よりの御使には、長井の右馬助高冬といふものなるべし。これは賴朝の大將の時より、鎌倉に重き武士にて、いまだ若けれども、かゝる大事にも、のぼせけるとぞ申しける。遂に隱岐國へ遷し奉るべしとて、三月のはじめの七日に、都を出でさせ給ふ。今はと聞

遷幸と。○御心惑ひ　思ひまどはれること。○いへば更なり　いふまでもない。○所々の歎き　女院・中宮などの御歎き。○おき所なく　身の置き所のないほど。○いとかうしも云々「かうしも」は「かくしも」の音便。こんなに歎き悲しんで居る樣は人に見せまいと。○且は　一方には。○おぼし沈むれど　歎きの心を沈められるが。○あやにくに　意地惡く。○舊りにし事　承久の一件をいふ。○立ちかへり　再び都に還つて。○又世を云々　再び天下を安らかに治めること。○とぢめ　最後。○人やりならず　他人からさうされたのではなく、我が心から。○口惜しき契加は

しめす御心惑ひども、いへば更なり。所々の歎き、近うつかまつりし人々の心地ども、おき所なく悲し。御門(醍醐)も限りなく御心惱むべし。いとかうしも人に見えじと、且はおぼし沈むれど、あやにくに進み出づる御涙を、もてかくしつゝおはします。舊りにし事を思し出づるにも、立ちかへり、また世を安く思さむ事の、いとかたければ、よろづ今をとぢめにこそと、思しめぐらすに、人やりならず、口惜しき契加はりける前の世のみぞ、つきせずうらめしき。

遂にかく沈み果つべき報あらば
上なき身とは何生まれけむ

【遂にかく沈み果つべき云々】　遂にかく沈淪すべき運命であるならば、何故上なき天子の身などには生れたのであらう。

巳の時ばかりに出でさせ給ふ。網代の御車に、御前どもなどは、故院（後堀河）の御世より仕う奉りなれにし者ども、ある限りまゐれり。御車寄に、西園寺中納言公重さぶらひ給ふ。上（後堀河）は、御冠に、世の常の御直衣・指貫・白綾の御衣一かさね奉れり。去年の今日は、北山にて花の宴せさせ給ひしも、あはれにおぼしいでられて、その日の事、かきつらね戀しくおぼさる。人々の祿にこそはたまはせしを、今日は御旅衣にたちかふるも、あはれに、定なき世のならひ、今更こゝろうし。御車にたてまつるとて、日頃おはしましつる傍の障子に、書きつけさせたまふ。

いさしらず尚ほうき方の又もあらば
この宿とても忍ばれやせむ

（3）

りける云々　此の世で、かうして歎き苦しむのは、前世からの約束であるから、その前の世が恨めしいの意。

●巳の時　午前十時。○出でさせ給ふ　隱岐に向けて御出發。○網代の御車　粗末なもの。○御前　前驅。○御車寄　御乘車の際侍する役。○世の常の御直衣　普通の直衣。○去年の今日は　六〇六頁參照。○かきつらね　何もかもの意。○人々の祿　人々に與へるかづけもの。○御旅衣にたちかふる　かつては臣下に賜はつた御衣を、今日は又自ら旅衣として著られるをいふ。「たちかふ」は著變へる意。衣の緣語で「タチ」といつたのであらう。○御車にたてまつる　御車に乘られる。○日頃おはしましつる　平生居られた御座所の。○障子　襖。

（4）

【いさ知らず尚ほうき方の云々】「いさ知らず」は、いや、どうだか分らない。そんなことになるかも知れないなどの意。いや、行末のことは、どうだか知らぬが、今後又これにも増してつらい事でもあるならば、今はつらいと思つて居るこの宿さへも、なつかしいと思ふことがあるかも知れない。

御供には內侍の三位殿（隆子）・大納言君・小宰相など、男には行房の中將・忠顯の少將ばかりつかうまつる。おのがじし、都の名殘ども、いひつくしがたし。六波羅よりの御送りの武士、さながらでも名ある兵ども、千葉介貞胤をはじめとして、おぼえ異なる限り、十人選びてたてまつる。いろ〳〵の綾錦の水干・直垂などいふもの、さまざまに織りつくし、染めつくして、いみじき清らを好みとゝのへたれば、かくしても、世に珍しき見物なり。六波羅より、七條を西へ、

（4）

まつる　御車に乘られる。○日頃おはしましつる　平生居られた御座所の。○障子　襖。

●おのがじし　銘々。○都の名殘　都に殘る親戚故舊などに對して名殘を惜しむこと。○さながらでも　さうでなくても。六波羅からのでなくても。○おぼえ異なる限り　特に寵愛されて居るもの。○いろいろの綾錦　警固の武士の樣。○かくてしも　遷幸のことは悲しむべきであるがの意。○七條を西へ云々　七條の通を西へ進み、大宮の通を南へ折れて。○東寺　下京區九條町

○御車おさへらる　御車をとどめられた。○とばかり　暫く。○念誦　念佛誦經。○物見車　見物の車。○所せきほどなり　一杯立ちこんで居ること。○よろしき女房　相當(上臈などいふよりは稍〻下つた)の女房。○つぼ裝束　市女笠(いちめがさ)に薄絹著た裝束。○徒歩の者ども　これも女房。車に乘らずに來て居るもの。○尼法師　尼。○あやしき山がつ　賤しい樵夫　○竹の林に異ならず、種々のものが隙間なく立込んで居る樣は、藪のやうだの意。○目押し拭ひ云々　遷幸の樣を見て泣いて居るをいふ。○げに憂世のきはめ云々　「きはめ」はキハミに同じ。世の憂きこ

大宮を南へ折れて、東寺の門前に御車おさへらる。とばかり御念誦あるべし。物見車所せきほどなり。よろしき女房も、つぼ裝束などして、徒歩の者どももうちまじれり。若きも老いたるも、尼法師・あやしき山がつまで、立ちこみたるさま、竹の林に異ならず。各〻目押し拭ひ、鼻すゝりあへるけしきども、げに憂世のきはめは、今につくしつる心地ぞする。崇德院の讃岐におはしましけむ程の有樣、後鳥羽院の隱岐にうつらせ給ひけむ時なども、さこそはありけめなれど、つてにのみ聞きて、見ねば知らず。これを始めたる心地ぞする。日頃は、何の御にほひにも觸れず、數ならぬ人、及ばぬ身までも、今日の御別れのあはれさ、なべておき所なげにぞ惑ひあへるかし。君(後醍醐)も、御簾少しか

との限りは、こゝに盡きたと思ふ程悲しいの意。○後鳥羽院の隱岐に云々　八八頁を見よ。○さこそは云々　それらの時も、そんな樣子であつたらうが、話に聞いただけで、見なかつたから、本當のことは知らぬ。○つて　人傳(ひとづて)。話。○これを始めたる心地ぞする　こんな事は今度が始めてのやうな氣がする。○何のにほひにも觸れず　御門の御側に侍るとか、御聲をかけられるとか、さういふ事のないをいふ。○なべて　一般に。○おき所なげに　身のおき所もないやうに。○御簾　御車の御簾。○かきやりて　拂ひのけて。○このもかのも　あちこち。○御目と

きやりて、このもかのも御覽じわたしつゝ、御目とまらぬ草木もあるまじかめり。岩木ならねば、武士の鎧の袖どもも、しほどけげにぞ見ゆる。都の梢をかくるゝまで御覽じ送るも、猶ほ夢かとおぼゆ。鳥羽殿におはしましつきて、御よそひあらため、破子などまゐらせけれど、けしきばかりにて、まゐらず。これより御輿にたてまつれば、留るべき御前どもの、空しき御車を、泣く〳〵やりかへるとて、くれまどひたるけしき、いと堪へがたげなり。

【都の梢をかくるゝまで云々】　大鏡(左大臣時平)に、道眞の流される所を記して、「都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、君がすむ宿の梢をゆく〳〵もかくるゝまでにかへりみしやは」とあるによつた語。

かくて君(後醍醐)は遙かに赴かせたまふ。淀の渡りにて、昔八

まらぬ草木も云々　一々の草木をも名殘惜しげに御覽ぜられること。草木には奉送の民をも含めていつたのであらう。**マジカメリ**は**マジクアルメリ**の約。○岩木ならねば情を知らぬものではないから。○しほどけげ　しほどけきやう。しほどけし(形)は、**シホタル**などいふと同じく、潮水にぬれる意で、涙にぬれるをいふ。○鳥羽殿　二一頁を見よ。○御ふそひ云々　御裝束を改められる。冠直衣を烏帽子狩衣などに改められたのであらう。○破子　食物を容れる器。御晝食をいふ。○けしきばかりにて云々　只一寸箸をつけられただけであがらぬ。○留るべき御前ども

幡(はた)の行幸ありし時、橋渡しの使なりし佐佐木の佐渡の判官(判官)といふもの、今は入道して、今日の御送りつかうまつれるに、その世の事おぼしいでられて、いと忍び難さにたまはせける。

もゝ　しるべする道こそあらすなりぬとも
　　淀の渡りは忘れしもせじ

【しるべする道こそあらす云々】　お前はかつて入幡行幸の時、橋渡しの使で、先導したが、今は又隱岐へ流されてゆく警固をつとめて居る。しるべする道は違つて居るが、こゝは同じ淀の渡りであるから、お前も恐らく昔のことを忘れはすまい。

(6)

(5)

殘り留る前驅のもの。○くれまどひたる　途方にくれる。

●淀の渡り　淀川の渡し。○八幡の行幸　五六二頁參照。○橋渡しの使　浮橋を渡す役。檢非違使之を勤む。○佐佐木の佐渡の判官　宗氏の子。四郎と稱し、佐渡守、檢非違使であつたが、後薙髮して道譽と稱した。もとは高時について居たもの。○入道して　僧となつて。○その世の事　八幡行幸當時のこと。○忍び難さに　懷舊の情に堪へず。●あやしき御宿り　みすぼらしい御宿所。六三四頁參照。○ものし給ふ　居られる。○恐れ多く。○遙かなる世界　土佐をいふ。

(6)

ば、ましてあるじ時信經營(けいめい)しさわぐ。宮(貞登)すでに立たせ給ふとて、瓶(かめ)にさしたる花を折らせ給ひて、

　　花は猶ほとまるあるじに語らへよ
　　われこそ旅にたち別るとも

同じ日、やがて妙法院の座主尊澄法親王も、讃岐國へおはします。

【花は猶ほとまるあるじに云々】　これまでは自分と親しくして居た花よ。自分は今旅に立ち別れるが、どうか自分の代りに、殘り留るこの家の主に親しく語らつてくれ。

先帝(醍醐)は、今日、津の國昆陽野(こやの)の宿といふ所につかせ給ひて、夕月夜(ゆふづくよ)ほのかに、をかしきを、眺めおはします。

(7)

●津の國　攝津。○昆陽野　川邊郡。○夕月夜　夕月の出た暮方。○ほのかに　かすかに。○神崎　川邊郡。今鐵道驛のある所。○難波　今の大阪○住吉　攝津東成郡。○おぼす筋あるべし　住吉を過ぎられる時、住吉神社にお祈願のことがあつたらうの意。○廣田の宮　攝津武庫郡大社村。今官幣大社。○わたり　あたり。○蘆屋　武庫郡。今鐵道驛のある所。○雀の松原　武庫郡。魚崎より深江邊の濱であらうといふ。○布引の瀧　武庫郡。今神戸市の側。○古き御幸　昔後嵯峨院の此邊へ來られたことなどを指すのであらう。○生田の森　今神戸市の中。○訪はで過ぎさせ云云　生田の森には寄らずに行かれたやうである。○湊川の宿　今神戸市の中。○間近く聞き奉らせ給ふ　湊川は、その昆陽野から近いといふことを聞かれる。○福原の島　兵庫の築島。こゝから讃岐へ向はれるのである。○和田の岬　兵庫の南東に出て居るもの○刈藻川　武庫郡。○寳取の邊○うちわたして　渡つて。○須磨の關　武庫郡。神戸市の西南約一里半。○行平　在原業平の兄。中納言、民部卿となり、仁和の初、陸奥・出羽按察使を兼ぬ。寛平五年薨、年七十六。この人の須磨行のことは有名であるが、正史には見えぬ。○浦よりをちなるべ

命あればこやの軒端の月も見つ
　またいかならむゆく末の空

昆陽野より出でさせ給ひて、武庫川・神崎・難波・住吉など過ぎさせ給ふとて、御心のうちに、おぼす筋あるべし。廣田の宮のわたりにても、御輿とゞめて、拜み奉らせ給ふ。蘆屋の里・雀の松原・布引の瀧など御覽じやらるゝも、古き御幸ども思し出でらる。生田の森をば、訪はで過ぎさせたまひぬめり。湊川の宿につかせ給へるに、中務宮は、昆陽の宿におはしますほど、間近く聞き奉らせ給ふも、いみじうあはれに悲し。宮、

いとせめてうき人やりの道ながら
　同じとまりと聞くぞ嬉しき

福原の島より、宮は御船にたてまつる。御門は、和田の岬・刈藻川をうちわたして、須磨の關にかゝらせ給ふ。かの行平の中納言、「關ふきこゆる」といひけむは、浦よりをちなるべし。あはれに御覽じわたさる。源氏の大將の、「なくねにまがふ」とのたまひけむ浦浪、今もげに、御袖にかかる心地するも、さまざま御涙の催しなり。播磨の國への、かせ給ひて、鹽屋・垂水といふ所、をかしきを、問はせ給へば、「名を聞くより、からき道にこそ」とのたまはせて、さしのぞかせ給へる御さまかたち、ふりがたく、なまめかし。けぢかき限りは、あはれにめでたうもと、思ひ開ゆべし。大藏谷といふ所少し過ぐるほどにぞ、人麿の塚はありける。明石の浦を過ぎさせ給ふに、島

し　この浦よりは向うの方であらう。○源氏の大將　光源氏のこと。五四四頁參照。○鹽屋　播磨明石郡。神戸市の西二里餘。今鐵道驛がある。○垂水　鹽屋の西。○をかしき　景色の面白きをいふ。○問はせ給へば　所の名を。○さなむ　かう〳〵と。卽ち鹽屋・垂水など答へたこと。○さしのぞかせ　御輿から。○ふりがたく　今めかしき意。○けぢかき限り　御側近くに候ふ人等。○大藏谷　播磨明石郡。今明石町の中。○人麿　持統・文武二朝に仕へ、後世歌を以て有名な人。傳記は明かでない。こゝにいふ塚も元より信ずるに足らぬが、その神社は今も明石にある。

がくれゆく船ども、ほのかに見えて、あはれなり。

水の泡（あわ）の消えてうき世を渡る身の
うらやましきはあまの釣船

【命あればこや軒端の云々】　生きながらへて居ればこそ、こんな片田舎の昆陽野の宿に假寢して、軒端の月も見たのである。此後なほ生きながらへて居れば、行末又どんな珍しい事にあふかも知れない。思へば悲しいことである。「空」は月の緣語。

【いとせめてうき人やりの云々】　「いとせめて」はいといたくなどの意。「人やりの道」は、我が心からでなく、人から強ひてやられる旅路。實につらい人やりの道ではあるものの、父帝と同じ宿にあると聞いては、流石に嬉しい。

【關ふきこゆる】　續古今集（羇旅）「津の國須磨といふ所に侍りける時、關ふきこゆる須磨の浦風。」旅人は秋涼しくなりにけり關ふきこゆる須磨の浦風。」源氏物語（須磨）に「須磨には　いとゞ心づくしの秋風に、海は少し遠けれども、行平の中納言の、關ふきこゆるといひけむ

浦波、よる〳〵は、げにいと近く聞えて、またなくあはれなるものは、かゝる所の秋なりけり。御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、一人目をさまして、枕をそばだてて、四方の嵐を聞き給ふに、涙只こゝもとに立ちくる心地して、涙おつともおぼえぬに、枕浮くばかりになりにけり。琴を少し掻き鳴し給へるが、吾ながら、いと凄う聞ゆれば、ひきさし給ひて、戀ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふ方より風や吹くらむ。」

【名を聞くよりからき道にこそ】　所の名が「鹽屋」だといふから、名を聞くさへ、からい道だといふ意。但し「からき道」はつらい旅路の意。

【島がくれゆく船】　古今集（羇旅）に「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ」といふ歌があつて、この歌は、或人の曰く、柿本の人麿がなり」としてある。人麿の塚のことをいつたから、序にその歌の語を使つたのである。

【水の泡の消えてうき世を云々】　水の泡の消ゆるが如く、思ひ消えつゝ浮世を渡る今の身には、蜑の釣舟さへ羨ましいの意。「消え」「うき」共に泡の緣語。「あまの釣船」はつまり蜑そのものをいつたのである。

(8)

●野中の清水　播磨明石郡。○二見の浦　播磨加古郡。○高砂の松　加古郡。相生の松といふもの。○かゝらぬ御幸ならば　こんな御幸でないならば。○をかしうも　面白くも。○かきくらす　心の亂れて何もかも分らぬこと。○くんじにけるかな　思ひ屈す。意氣消沈。○白雲をわけゆく心地　花の咲き匂つたのを白雲にたとへたのである。○かずゝ〳〵　いろ〳〵。

野中の清水・二見の浦・高砂の松など、名ある所々御覽じわたさるゝも、かゝらぬ御幸ならば、をかしうもありぬべけれど、よろづかきくらす御みだり心地に、御目とまらぬも、我ながら、いたうくんじにけるかなとおぼさる。いと高き山の峯に、花おもしろく咲きつゞきて、白雲をわけゆく心地するに、都の事、かず〳〵思しいでらる。

花は猶ほうき世もわかず咲きてけり
　都も今や盛りなるらむ

跡見ゆる道のしをりのさくら花
　この山人のなさけをぞ知る

【花は猶ほうき世もわかず云々】心なき花は、このつらい世の中のことをも辨へず、美しく咲いた。都も今は盛りであらう。

(9)

●加古川の宿　加古郡。姫路の東南四里半。○少し違ひたれど　全く同じ道ではなかつたが、逢ふ爲にわざ〳〵來られたのである。○更なることなれど　いふまでもない事だが。○いへばえに　いふにいはれず。

【跡見ゆる道のしをりの云々】「しをり」は山路などで、木の枝を折つておいて、道のしるべとすること。こゝは花を散らして道しるべとしたことをいふ。道に櫻の花を散らして、しるべとした跡を見ては、自分の爲にわざ〳〵かうしてくれた山人の情をありがたく思ふ。但し只花の散つて居るのを見て、假にかういはれたのである。

十二日に、加古川の宿といふ所におはします程に、妙法院宮（尊覚）讃岐へわたらせ給ふとて、同じ道、少し違ひたれど、この川の東野口といふ所まで、參り給へるよし奏せさせ給へば、（後陽成）いとあはれに、相見まほしう思さるれど、御送りの兵ども許し聞えねば、宮（尊覚）空しく歸らせ給ふ。御心のうち、堪へがたく亂れまさるべし。更なる事なれど、かばかりの事だに、御心にまかせずなりぬる世の中、いへばえに、つらく、うらめしからぬ人なし。

●御心地なやましく　御病氣　○物深からで　御座の奥深い所にないこと。○候ふ限りの武士　警固の武士。○けぢかく見奉る　武士どもが御門の御身近く居るをいふ。○あはれにめでたしと　武士どもが御門の御姿を。○おはしますに續きたる　御座所に續いた　○軒のつま　軒の端。

十七日、美作の國におはしましつきぬ。御心地なやましくて、この國に、二三日やすらはせ給ふほど、かりそめの御宿りなれば、物深からで、候ふ限りの武士ども、おのづからけぢかく見奉るを、あはれにめでたしと思ひ聞ゆ。君もおもほしつゝくる事ありて、

あはれとは汝も見るらむ我が民を
思ふこゝろは今もかはらず

おはしますに續きたる軒のつまより、煙の立ちくれば、「庵にたける」と、うち誦せさせ給へるも艶なり。

よそにのみ思ひぞやりし思ひきや
民の竈をかくて見むとは

【あはれとは汝も見るらむ云々】　かういふあさましい身となつても、猶ほ自分の民を思ふ心は變らぬ。お前達も大方之を氣の毒だと見ることであらう。

【庵にたける】　源氏（須磨）に「山がつの庵にたけるしば〳〵も言問ひ來なむ戀ふる里人」とあるもの。○「しば〳〵」は柴に屢〻をかけた語。「來なむ」は來よと願望の意を表はした語である。

【よそにのみ思ひぞやりし云々】　これまでは、只外事として、想像して居た民の竈を、かうして目に近く見ようとは、實に思ひもかけぬことである。

廿一日、雲清寺といふ所にて、いと面白き花を折りて、忠顯少將奏しける。

かはらぬを形見となして咲く花の
都はなほも忍ばれにける

御かへし（後欄）

色も香も變らぬしもぞ憂かりける

●雲清寺　所在不明。○小山の五郎　秀朝。下野の住人。警固の武士の一人。○同じ花をやる　御門に奉つたと同じ花を折つて與へたのである。

又小山の五郎とかいふ武士に、同じ花をやるとて、少將（忠定）

憂きたびとおもひははてじ一枝の
花のなさけのかゝる折には

【かはらぬを形見となして云々】何處も變らず咲き匂うて居る花を、せめて都の花の形見として見るにつけても、都の春は猶更戀かしく思はれます。○單に「花」とあるは、櫻のことである。

【色も香も變らぬしもぞ云々】田舍の花の、色も香も都に變らず匂うて居るのは、却つてつらい思ひをさせる。それを見ては、つひ都のことを思ひ出すから。

【憂き旅とおもひははてじ云々】只一枝の花の情のかゝるにつけても、かういふ場合には、一方ならぬ慰藉を得るから、遂に何時までも、つらい旅とは思はないであらう。○秀朝は、初北條氏に屬し、笠置を攻め、正成を圍んだ人だが、後には却つて義貞の方に屬した人である。この時も、大方何かにつけて御門の御便宜を計つたので、花を贈るに

●猶ほおはしませば　續けて隱岐へ行かれること。○そこはかとなく　何處といふあてどもなく。○日數にそへて　日數のたつにつれて。○日數も山も云々　旅の日數の積ると共に越えゆく山も數を增すないふ。○うつろひまさり　だん〳〵色があせてゆく。○つゞらなり　折れ曲つた坂路。○むら消えたる　所々まだらに消えた。○かたし　むつかしい。○おぼすものから　思はれるものの。○さりともたとひむつかしくはあつても。○たひらかにだに　無事で。○御本意　都に還御のこと。○久米の皿山　美作久米都。○逢坂　東路のは近江につけて、かういつたのであらう。

かくて猶ほおはしませば、來し方は、そこはかとなく霞みわたりて、「（後醍醐）あはれにて、都のいとゞ隔たりはつるも、心細うおぼさる。ほのかに咲きそむと見えし花の梢さへ、日數も山も重るにそへて、うつろひまさりつゝ、上り下るつゞらをりに、いと白く散りつもりて、むら消えたる雪の心地す。

花の春また見むことの難きかな

同じ道をばゆきかへるとも

いとかたしとはおぼすものから、猶ほさりとも、たひらかにだにあらば、自ら御本意遂ぐるやうもありなむなど、御心もてなぐさめおぼすも、はかなし。久米の皿山といふ所

あるもの。こゝのはよく分ちぬ。○三日月の中山　因幡美作の國境なる四十曲峠のことであらうといふ。

越えさせ給ふとて、

聞きおきし久米の皿山越えゆかむ
　道とはかねて思ひやはせし

逢坂といふは、東路ならでもありけりと聞しめして、

立ちかへり越えゆく關と思はばや
　都に聞きしあふ坂の山

三日月の中山にて、昔後鳥羽院の仰せられけむ事、思し出づるさへ、げに憂かりけるためしなり。

傳へきく昔がたりぞうかりける
　その名ふりぬる三日月の森

【花の春また見むことの云々】　たとひ再びこゝを通つて都に還ることはあつても、花咲く春には再び逢ふことは出來まい。況んや還ることは

へ分らぬ身には、一入のあはれを感ずる。

【聞きおきし久米の皿山云々】　久米の皿山といふ名は名所として、かねて聞いて居たけれども、今日その山を實際に越え行かうとは、どうして思はう、實に思ひがけないことである。

【立ちかへり越えゆく關と云々】　逢坂山といふのは、都で聞いた名であるが、それでは、再び立ち歸り、越えて行つて、都の人に逢ふといふ意の關と思ひなしたいものである。

【昔後鳥羽院の仰せられけむ事】　承久記（第六）に、後鳥羽院隱岐へ遷幸のことを記して、「美作と伯耆との境なる中山を越えさせ給ふ時、向うの岸に細き道あり。何處へ通ふ道ぞと御尋ねありければ、都へ通ふ古き道にて侍ると申しければ、都人誰踏みそめて通ひけむむかうの道のなつかしきかな。」

【傳へきく昔がたりぞ云々】　この三日月の森は、古くから名高い所であるが、後鳥羽院の昔の話を聞くと、實に心憂いことであるの意。今御自身もそれと同じ運命にあらせられるのを思ひ合せての歌であらう。

●御道半ば　京都より隠岐までの。○上下　官位の高い者も低い者も。○さうぞきかへたり　裝束を著變へた。○樣異なる御幸　世の常の御幸とは違つて居ること。○道すがらの御まうけ　道中諸所における準備。○かうざまの云々　かういふ異樣な御幸とは思はれない。○さはいへど　さうはいふものの。○いみじう治めさせ　天下を安らかに治められた。○名殘　結果などの意。○古への御幸　後鳥羽院の場合など。

御道半ばになりぬれば、御送りの者ども、上下、都出でしよりも、猶ほ花やかに、今めかしうさうぞきかへたり。大方は、あやしう樣異なる御幸なれど、道すがらの御まうけ、國々に心づかひしたる氣色などは、かうざまの御ありきとは見えず、いとやむごとなくなむ。さはいへど、今まで、國のあるじにて、世をもいみじう治めさせ給へりける名殘にやあらむ、いとねんごろにのみ仕うまつれり。古への御幸どもには、かうはあらざりけりとぞ、古き事知れる人々いひ侍りける。四月一日の頃、百敷の宮の中おぼしいでられて、

（後醍醐）さもこそは月日も知らぬ我ならめ
衣がへせし今日にやはあらぬ

●安來の津　出雲能義郡の湊松江と米子の間。○今一かすみ　一層霞んで都の方のポーツとするをいふ。○二千里の外　九九頁を見よ。○今更めきたり　もとから心細くは感じて居たが、今更殊にシミジミと痛切に感ずる。○かの島　隱岐。○昔の御跡　後鳥羽院の御遺跡。○御身の上は云々　御自分のことは御考へにならないで。○古への事　後鳥羽院のこと。○世をつくし給ひけむ　一生を終られた。○さすらへぬるも　流浪

【さもこそは月日も知らぬ云々】「さもこそは」はそのやうにもなどの意。今日は四月の一日で、都に居れば、更衣をした日である。然るにそれとも心づかず、かうして旅衣も改めず居るとは、實際自分は、月日の經つのも氣がつかずに居るのだらう。

出雲の國安來の津といふ所より、御船にたてまつる。大船二十四艘、小舟どもは、數も知らず續きたり。遙かにおし出すほど、今一かすみ、心細う、あはれにて、誠に、「二千里の外」の心地するも、今更めきたり。かの島におはしましつきぬ。昔の御跡は、それとばかりのしるしだになく、人の住家も稀に、おのづから、蜑の鹽やく里ばかり、はるかにて、いとあはれなるを御覽ずるにも、御身の上はさしおかれて、先づかの古への事思しいづ。かゝる所に、世をつくし給ひけむ御心のうち、いかばかりなりけむと、あはれ

○何により思ひたちし　何の爲に思ひ立つたことであらう　○かの御心の末や云々　かの院の御遺志を果たし遂げようと思つたからである。○苔の下にも　後鳥羽院の靈も。○よろづに云々　萬感交〻胸に湧いて盡くる所がない。○海面よりは云々　海岸よりは少しひつこんだ。○國分寺　隱岐知夫郡別府村。○今はさは　今はそれでは。○おぼしづまる　心がおちつく。○そこら　多く。○まかづれば　京都へ還るをいふ。○かいしめり　ひつそりとして。○おぞましき　恐ろしい。○武家のなびきにてのみ　武家の方にばかり靡き從つて。○公さまの事　朝廷に勤むべき租調に辱くおぼさるゝにも、今はた、更にかくさすらへぬるも、何により思ひたちし事ぞ、かの御心の末や果し遂ぐると、思ひし故なり。苔の下にも、あはれと思さるらむかしと、よろづにかき集め、つきせずなむ。海面よりは少し入りたる國分寺といふ寺を、よろしきさまにとり拂ひて、おはしまし所に定む。今はさは、かくてあるべき御身ぞかしと、おぼしづまるほど、猶ほ夢の心地して、いはむ方なし。そこら參りし兵どもも、まかづれば、かいしめり、のどやかになりぬる、いとゞ心細し。昔こそ、受領どもも、任のほど、その國をしたゝめ行ひしか、この頃は、只名ばかりにて、何處にも、守護といふものゝ、目代よりはおぞましきをするゑたれば、武家のなびきにてのみ、公ざまの事は、よろづおろそかにぞしける。葛城の大君を陸奥國へ遣はしたりけむも、かくやと、あはれなり。

【昔こそ受領ども云々】「受領」は諸國の守、卽ち今日の所謂地方長官である。これはもと任の間、その治めるべき國へ赴いて居たのであるが、後には只名義だけとなつて、自分は行かず、代理として目代といふものを遣はして居た。ところが頼朝以來は又國司の外に武家から守護といふものを遣はし、國司の權は遂にこの方に移つたのである。

【葛城の大名を陸奥國へ云々】萬葉集に、葛城王が陸奥へ行かれた時の事があまり優遇しなかつたので、甚だ不滿らしい顏をせられた。その時、前の采女の某といふものが「安積山影さへ見ゆる山の井の淺き心を我が思はなくに」と、よんだ爲に、王の意も解けたといふ話がある。それを云つたのである。

中務の御子（貞尊）も、土佐におはしましつきて、御送りの武士

課役。○葛城の大君　橘諸兄（もろえ）。

●何かはさのみ云々　尼の語どうしてそんなに長々と申す必要があらう。皆様も聞きた

思ひきやうらめしかりし武士の
名殘を今日は慕ふべしとは

かやうのたぐひ、あまた聞えしかど、何かはさのみ、皆人もゆかしからず思さるらむとてなむ。

【思ひきやうらめしかりし云々】これまでは、うらめしいと思つて居た警固の武士も、さてかうして別れるとなると、又今更に名殘惜しいやうな氣がする。こんなことにならうとは、どうして思ひがけようか、實に思ひもかけぬことである。

都には、三月二十二日御卽位の行幸なれば、世の中めでたくのゝしる。本院（後伏見）・新院（花園）一つにたてまつりて、待賢門のほとりに、御車立てて、見奉らせ給ふ。よろづあるべきさまに、とゝのほりて、めでたし。

まことや、中宮（予陽）は、そのまゝに、御頭もたぐる時もなく、御悲歎の樣子。○いとことわりにまことに尤もで。○御胸のやすき間もなく　始終御門を戀ひ慕はれること。○后の位もとゞめられ　女院となされ給うたこと。五月二十日。○人の上のやうに　他人の事のやうで。○年月は　日頃は。○人笑へ　人の笑ひぐさとなること。○天の下の云々　御産の祈の事で天下中大騷ぎしたこと。五九九頁參照。○御門も苦しき事に云々　御門もそれを心苦しく思つて居られた。○なか〳〵　却つて。○その筋の事　安産の修法のこと。○かきさましぬ　すつかり止んでしまつたをいふ。○御湯なども云々　煎藥の類さへ

く、沈み給へる御有樣、いとことわりに、遠き御別の悲しさにうちそへて、御胸のやすき間もなく、思しこがる。后の位もとゞめられ給ひて、院號のさだめなど、人の上のやうに、ほのかに聞し召すも、うれしからぬ世なり。禮成門院とかや申すなり。年月は、御身の人笑へなる樣にて、天の下の騷がれなりしをこそ思し歎き、御門も苦しき事に思しのたまはせけるに、今はなか〳〵、その筋の事は、かけてもおぼさず、さまざまなりし御修法の壇どもも、跡形なく毀ちはてて、かきさましぬ。ひたすらに、只かゝる世の憂さをのみ、思し惑ふに、日頃ふれど、御湯なども絶えて御覽じいれねば、そこはかとなく、いとゞそこなはれまさりて、ながらふべくも見え給はず。隱岐（後鳥羽）よりは、たま

少しもあがらぬ。○そこはかとなく　何となく。○そこなはれまさりて　病勢の進むこと。○ながらふ　存命。○おぼつかなくいぶせき事　不安心で氣のふさぐ事。○あふせ　逢ふ時。○かくてやとぢめむ　かうしたまゝで命が終るか。○かたみに　互に。

●彼處　隱岐。○御子だち　恒良・成良・義良。○いわけなき　幼少。恒良親王時に九歳。○物思し知りて　物心の分ること。○戀ひ聞え　別れた父帝や母君を。○もとの御後見云々　從來の後見を廢して、新たに公宗を後見としたのである。○北山　西園寺の邸。○庭松綠老云々　歌の序であ

さかの御消息などの通ふばかりにて、おぼつかなくいぶせき事、多く積りゆくも、何時をあふせの限りともなく、定めなき世に、やがて、かくてやとぢめむとすらむと、かたみにいみじう思さる。

【何時をあふせの云々】何時になつたら、逢ふ時が來るといふ際限もなくの意。

彼處に參り給へる內侍三位(子)の御腹にも、御子だち數多おはします。いづれも、いまだいわけなき御程にはあれど、物思し知りて、いみじう戀ひ聞え給ひつゝ、折々は、忍びてうち泣きなどし給ふ。稚うものし給へば、遠き國までは遷し奉らねど、もとの御後見をば改めて、西園寺大納言公宗の家にぞ渡し奉る。八になり給ふぞ御長兄ならむか

る。○はかなく　たよりなく。○うちひそみ　ひつそりとして居る。

し。北山におはするほど、夕暮の空いと心すごう、山風あらゝかに吹きて、常よりも物悲しくおぼされければ、

庭松綠老秋風冷、　薗竹葉繁白雪埋。

つくづくとながめくらして入相の

鐘の音にも君ぞこひしき

稚き御心にも、はかなくうちひそみ給へる、いと哀れなり。こゝもかしこも、盡きせず思し歎く樣、いはずとも、皆推し量るべし。

【八になり給ふぞ御長兄ならむかし】內侍三位の御腹の中では、八つになられたのが、上であらうの意。蓋し恒良親王のことであらう。○太平記(第四)には、「八歲宮御歌事」として、「第九宮は未だ御幼稚におはしませばとて、中御門中納言宣明卿に預けられ、都の內にぞ御座ありける。云々。よろづ物憂き御氣色にて、中門に立たせ給へる折節、遠

●宮の宣旨　冷泉爲定の妹。五九二頁參照。○いたう　いたくの音便。○ときめきて　寵を得て榮える。○師賢の御めのとにて　師賢が傅であつて。○かしづかれ　大切に養育される。○ひき忍びておはします　世間から隱れて居ら

寺の晩鐘幽かに聞えければ、つくづくと思ひ暮らして云々」と、こゝと同じ歌が載せてある。之に就て大日本史（卷九十九）にはいふ、「增鏡內侍准后所レ生皇子皆幼留二京師一。以二八歲一爲レ長。其所レ詠和歌與二太平記一同。而歷代皇紀・神皇正統記・太平記・異本太平記。恒良・成良・義良皆准后所レ生。在二帝之諸子行一。則第六恒良・第七成良・第八義良也。作二此歌一者。爲二恒良一無レ疑。曰二第九宮一誤」。

【つくづくとながめくらして云々】　つくづくと一日を物思ひに沈み暮らして、入相の鐘の響を聞くにつけても、父君・母君が戀ひしいの意。「入相の鐘」は暮方に響く鐘。

宮（みや）の宣旨（せんじ）も、いたうときめきて、三位してき。その御腹の若宮（法仁）は、花山院大納言師賢の御めのとにて、殊の外にかしづかれ給ひしも、この頃は、ひき忍びておはします。母君（宣旨）も、世の憂さに堪へず、樣かへて、心深くうち行ひつつ、涙ばかりを友にて明し暮すに、祖母（おは）北の方さへ失せた

れる。○樣かへて　落飾して。○心深くうち行ひ　一心に佛道の修行をする。○祖母北の方　爲世の室。○いひかはしける　消息を通はして居た。○生女房　さまで上臈ならぬ女房。○程經て後なりければ　北の方の死後、時日がたつてからであつたから。

りと聞きて、時々いひかはしてける生女房（なまにようぼう）のもとより、程經（へ）て後なりければ、

うきに又かさぬる夢を聞きながら
驚かさでもなげき來しかな

かへし、宣旨の三位殿、

うきに又かさなる夢を聞きながら
驚かさではなどなげきけむ

【うきに又かさぬる夢を云々】　帝にお別れになつて、物憂く思つて居られる所へ、又祖母君の亡くなられたといふことを承りながらも、御見舞ひ申しては、却つて御歎きを增させるかと思ひましたので、わざと差控へて、陰ながら歎いて居りましたの意。「驚かさでも」は夢をさますことに、訪ふことをかけたのである。○宣旨の返歌は、この上の句をそのまゝ使つて、何故獨り歎くばかりで、訪れてくれなかつたかと、

●この兄　この宣旨の兄。○前の御代　後醍醐帝の時代。○おぼえ花やか　寵遇を得て榮えること。○いと時なりし　時めく。○しめやかに云々　後醍醐還幸の後は。○院の御氣色云々　御機嫌を伺つて爲定叙免の儀を願つたこと。○不用　事の叶はぬこと。許されなかつたをいふ。○心もとなう　待遠しく。○うけばりたる云々　傳奏を專門とする人ではなかつたの意。○傳奏　親王・攝家・諸社寺・武家等の奏請を天皇又は上皇に執奏する役。○避りがたき　打捨ておかれぬ。師弟の關係があるから、それを奏せずにおくわけに行かぬ。○事のさまも云々　その願ひ事も道理ある事であるから。○引き入れて　この歌を。○折よくて　丁度よい折なので。○思ひ歎くさま　爲世の。○ありつる文　かの歌を書いたもの。○御氣色とり給ふ　御機嫌を伺ふ。○なごやか　おだやか。○まいて　まして。○何ばかり罪ある云々　さして罪ある人でもないから。○勘じおぼすまでは云々　勘當しようと思はれる程ではないが。○武家よりとり申さぬこと　鎌倉から執奏しないこと。○滯る事の早く運ばぬ。○不便　氣の毒。

いつたのである。

この兄の爲定の中納言も、前の御代には、おぼえ花やかにて、いと時なりしにひきかへ、しめやかに、つれづれと籠り居たれば、祖父の大納言爲世、度々院（後伏見）の御氣色たまはられけれど、いと不用なれば、心もとなう思ひわびて、春宮大夫通顯の君して、重ねて奏しける、

和歌の浦に八十あまりの夜の鶴
　子を思ふ聲のなどか聞えぬ

大夫（通顯）は、うけばりたる傳奏などにてはいませざりけれど、この大納言、歌の弟子にて、避りがたき上、事のさまもゆゑあるわざなれば、直衣のふところに引き入れて參り給へりけるに、院の上（後伏見）、のどやかに出で居させ給ひて、世の御物語などおほせらる。折よくて、思ひ歎くさまなど、ねんごろに語り申して、ありつる文引き出でつゝ、御氣色とり給ふ。大方、いとなごやかにおはします君の、まいて、何ばかり罪ある人ならねば、勘じおぼすまではなけれど、いさゝかも、武家よりとり申さぬことを、御心にまかせ給はぬにより、かく滯るなるべし。「いと不便にこそ」とのたまはせて、やがて御かへし、

雲の上に聞えざらめや和歌の浦に
　老いぬる鶴の子をおもふ聲

【和歌の浦に八十あまりの云々】和歌の浦に年久しく住んで居る鶴の、夜子を思うて鳴く聲の、どうして聞え届かぬのであらうか。どうか届いて、あはれと思つて下されたいものであるの意。「和歌の浦」は家の業なる歌道、「八十あまり」は爲世の年。「夜の鶴」は、白氏文集（新樂府）

●祭　賀茂祭。四月中の酉の日。○心づかひ　心を用ひること。○使　社へゆく勅使。○かたみに　互に。○いどみかはす　服裝等の美を競ふこと。○ゆりたる限り　禁色を許された者は皆。○花を折れるさま　華美な樣をいふ。○出車　隨行の女房の出衣（いだしぎれ）して乘つて居る車。○藤　表薄紫、裏青（異說あり）。○つゝじ　表蘇芳裏青（異說あり）。○卯花　表は

に「五絃彈。第一第二絃索々。秋風拂松疎韻落。第三第四絃冷々。夜鶴憶子籠中鳴」などあるもの。

【雲の上に聞えざらめや云々】「雲の上」は禁中をいふ。和歌の浦に子を思うて鳴く老鶴愁訴の聲は、どうして雲の上に聞えないことがあらう。汝が愁訴の意は、よく分つたから、その中何とかしようの意。

今年は、祭の御幸あるべければ、珍しさに、人々常よりも、物見車心づかひして、かねてより、棧敷などもいみじう造れり。使どもも、いかで人にまさらむと、かたみにいどみかはすべし。本院（後伏見）・新院（花園）・廣義門院（寧子）・一品宮（壽子）も、忍びて入らせ給ふなどぞ聞えし。御車寄には、菊亭の右の大臣（兼季）の御子實尹の中納言參りたまへり。殿上人も、よき家の君達ども、色ゆりたる限り、いと淸らに、このましう出でたちつかうまつれり。御隨身なども、花を折れる

皆白、裏は上の二つ白、次黃、次の二つは青の濃淡。○撫子　表紅梅裏青。○かきつばた　表萌黃、裏薄紅梅（異說あり）

●先帝の御供なりし上達部　笠置などへ御供したもの。○忍び過されつる　世にかくれて暮す。○ゆりがたき　許され難き。○具して　秀朝が公敏を連れて。○下野の國へと云々　下野の國へ行つたといふことである。

●うしろみて　警固して。○異腹　他の女の腹。○それまでは　それらの君達までは。○上　北の方。○今は限りの對面　最後の面會。○はるくる方なく　思ひの晴れること

さまなり。出車に、いろ〳〵の藤・つゝじ・卯花・撫子・かきつばたなど、さまざまの袖口こぼれ出でたる、いと艶に、なまめかし。

祭など過ぎて、世の中のどやかになりぬる程に、先帝（後醍醐）の御供なりし上達部ども、罪重きかぎり、遠き國々へつかはしけり。洞院按察大納言公敏、頭おろして、忍び過されつるも、なほゆりがたきにや、小山の判官秀朝とかやいふもの具して、下野の國へときこゆ。

花山院大納言師賢は、千葉介貞胤うしろみて、下總國にくだる。五月十日あまりに、都出でられけり。思ひかけざりし有樣ども、いみじとも更なり。

（師賢）別るとも何かなげかむ君住まで

なく。○人わろし　外聞の悪いほとである。

北方(きたのかた)は、花山院入道右の大臣家定の御女なり。その腹にも、君だち數多おはすれど、それまでは流さ(ことはら)れず。上(うへ)のいみじう思ひ歎き給へるさま、あはれに悲しけれど、今はかぎりの對面(たいめ)だにも許されねば、はるくる方なく口惜しく、よろづに思ひめぐらされて、いと人わろし。

今(北方)はとて命をかぎる別路(わかれぢ)は
後の世ならでいつを頼まむ

【別るとも何か歎かむ云々】　今は君もましまさず、物憂いふるさととなつた都であるから、遠くへ別れて行つたとて、何の歎くことがあらうか。「ふるさと」は昔都のあつた地などをいふ。後醍醐帝を主としていへば、その御門は最早やこゝに居られないからである。

【今はとて命をかぎる云々】　今はこれまでと、遠く別れて行くこの旅路

●ぬて行く・つれて行く。○數多の中に　元弘の亂に關係した多くの公卿の中で。○とりわきて　特に。○重かるべく　罪の。○樣異なる罪　死刑をいふ。尚ほ六一五頁參照○内　禁中。○勾當の内侍　三五六頁を見よ。○むつまじくおぼしめして　御寵愛。○とうで奉り　「とうで」はトリデ(取出)の音便。產むこと。○許し給はせて　勾當内侍を賜はつたこと。○二つなき云云　非常に寵愛すること。○なべてにやは　一方ならず歎き悲むの意。○同じ都に云云　具行が猶ほ自分と同じく

は、つまり再び生きては歸らない別れであるから、來世でなくては、何時を逢ふ日と賴みにすることが出來よう。

源中納言具行も、同じ頃、あづまへ(關東)ゐて行く。數多の中に、とりわきて重かるべく聞ゆるは、樣異(さまこと)なる罪に當るべきにやあらむ。内にさぶらひし勾當(たうたう)の内侍(ないし)は、經朝の三位の女なりき。早うより、御門(關東)むつまじくおぼしめして、姫宮など、とうで奉りしを、その後、この中納言(具行)、いまだ下﨟(げらふ)なりし時より許し給はせて、この年頃、二つなきものに思ひかはして過しつるに、かくさまざまにつけてあさましき世を、なべてにやは、日にそへて歎きしづみながらも、同じ都にありと聞く程は、吹きかふ風のたよりにも、流石ことづてふなぐさめもありつるを、遂にさるべき事とは、人

都の中に居ると聞く間は。○吹きかふ風のたよりにも　公然とはどうも出來ぬが、それとなき風の便りにもの意。○こととふ　樣子を聞尋ねる。○さるべき事　さうなるべき事。流されるをいふ。○人の上　他の人々の身の上。○今はと　今は愈、配流と。○そこら盡きぬと　「そこら」は多い意。非常に泣いて涙も盡きてしまつた意。○身も流れ出でぬべく　涙の多きをいふ。○ものにもがなや　八九頁を見よ。○はしたなき　何ともしようのない。○底　心の底。心中。○人に見えじ　人に見られじ。○つれなくつくりて　平氣をよそほうて。○思ひ入りぬる樣　覺悟して居

の上を見聞くにつけても、思ひまうけながら、猶ほ今はと聞く心々、たとへむ方なし。この春、君(後醍醐)の都別れ給ひしに、そこら盡きぬと思ひし涙も、げに殘りありけりと、今一しほ、身も流れ出でぬべくおぼゆ。中納言(具行)は、「ものにもがなや」と、くやしう、はしたなき事のみぞ、底には千々に碎くめれど、女々しう人に見えじと、思ひかへしつゝ、つれなくつくりて、思ひ入りぬる樣なり。去年の冬頃、あまた聞えし歌の中に、

長らへて身はいたづらにはつ霜の
　おく方しらぬ世にもふる哉
今は早やいかになりぬる憂身ぞと
　同じ世にだにとふ人もなし

る樣子。○去年の冬頃云々　捕はれて後、作つた歌が澤山あるが、その中での意。

●柏原　近江伊香郡。○あづ

佐佐木佐渡判官入道(道譽)伴ひてぞ下りける。逢坂の關にて、

歸るべき時しなければこれやこの
　ゆくをかぎりの逢坂の關

【長らへて身はいたづらに云々】何時まで長らへて居たところで、どうせ遂には徒らに死んでしまふべき身であるものを、かうして身のおき所も知らぬ、あはれな有樣で、世に生き長らへて居るのであるの意。「はつ霜」は初霜に身の果てる意をかけ、「おく」は霜の緣語である。

【今は早やいかになりぬる云々】かうして世に生き長らへて居ても、今は早や、この憂き身のどうなつたかを見舞うてくれる人もない。遠くへ流されたり死んだりしては、恐らくあはれと思ふ人だにあるまい。

【歸るべき時しなければ云々】一旦行つてしまへば、最早二度と歸るべき時はないから、これこそ行くを限りの逢坂の關である。但し蟬丸の「これやこの行くも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の關」(後撰雜)といふ歌にならつて詠んだのである。

柏原といふ所に少時休らひて、あづかりの入道(道譽)、先づあ

かりの入道　警固の役を勤めて居るをいふ。○なさけ〳〵しう　情あるさまに。○何事も云々　何事も皆前世の果報だの意。○御身一つにしも　外に黨類も澤山あつて、御身一人のことでもないから。○たけき家　武士の家をいふ。○かゝづらひ　關係する。○まほならねど　公然とではないが。○ほのめかす　それとなく知らせる。○心得はてられぬ　斬られるといふことが分つた。○隱岐のお送り　後醍醐帝を警固して行つたこと。○御道すがら　隱岐への。○大方の世につけても　世間一般の事につけても。○げにとおぼゆる節々　尤もと思はれるかど〳〵。○己が程には

づまへ人を遣はしたる返事待つなるべし。その程、物語などなさけ〳〵しう、うちいひかはして、「何事も、然るべき前の世の報に侍るべし。御身一つにしもあらぬ身なれば、ましてかひなきわざにこそ。かくたけき家に生れて、弓箭とるわざにかゝづらひ侍るのみ、憂きものに侍りけれ」など、まほならねど、ほのめかすに、心得はてられぬ。隱岐の御送りをもつかまつりしものなれば、御道すがらの事など、語り出でて、「辱なう、いみじうも侍りしかな。まして、朝夕近うつかう奉り馴れ給ひけむ御心ども、さながらなむ、推し量り聞えさせ侍りし。何事も、昔に及び、めでたうおはしましし御事にて、世下り、時衰へぬる末には、あまりたる御有樣にや、かくもおはしますらむとさへ、せめては

云々　身分には過ぎた美酒。○所につけて云々　この柏原は、その場所柄邊鄙な所で、萬事簡粗であるが。○さる方にしなして　然るべきやう取りつくろうて。○しるけれど　明かであるが。○いひ出づる事もなし　その返事の次第を。○且は　又一方には。○心弱しかし　具行の心中を評した語。○その際の心　最期の時の心。○すゞしき方　極樂をいふ。○思ふ心は心として　一面には、さうも斷念めるものの、又一面にはの意。○さすがなる事　さうはいふものの斷念められぬ事。○事のけしき　事の樣子。○行末遠くは云々　遠からず命を失はれるだらうの意。○預　道譽

思ひ給へ寄らるゝ」など、大方の世につけても、げにとおぼゆる節々加へて、のどやかにいひ居るけはひ、己が程には過ぎにたる御酒など、所につけて、ことそぎ、あら〳〵しけれど、さる方にしなして、よきほどにて、下しつる吾妻よりの使、歸り來るけしきしるけれど、殊更に、いひ出づる事もなし。いかならむと、胸うちつぶれて覺ゆるも、且はいと心弱しかし。何處の島守となれらむ人も、あぢきなく、誰も千年の松ならぬ世に、なか〳〵心づくしこそまさらめ。遂に遁るまじき道は、とてもかくても同じ事、その際の心亂れなくだにあらば、すゞしき方にも赴きなむ、と思ふ心は心として、都の方も戀ひしう、あはれに、さすがなる事ぞ多かりける。よろづにつけて、事のけしきを見る

のと。○情ありて云々　同情を以て思ひ知らせてくれるのであるから。○同じうは　同じことなら出家してから失はれよう。○またの日　翌日。○なんでふことかは　何といふこともあるまい。構ふまいの意。○かの事　命を失はれること。○思ひまうけながらも　覺悟はして居ても。○ためしなかりける報　外には例も聞かぬほどの不運。○いかが淺くはおぼえむ　深く思ひ歎くの意。○猶ほも思ふ心の云々　最期になつても、矢張り北條氏を滅さうといふ心があると見える。○今はの際　臨終の際。○さこそ云々　心中には憤怨が滿ちて居たであらうが。○人わろうもなく　外聞の悪いやうな事もなく。○あるべき事とも云々　固より覺悟の前と思つて居るやうに。○樣かへて　落飾して。（内侍は）。○高島　近江高島郡。

に、行末遠くはあるまじかめりと悟りぬ。預がほのめかしも、情ありて思ひ知らすれば、同じうはと思ひて、またの日、「頭おろさむとなむ思ふ」といへば、いとあはれなることにこそ、あづまの聞えやいかゞと思ひ給ふれど、なんでふことかは」とて許しつ。かくいふは水無月の十九日なりし。かの事は今日なめりと、氣色見知りぬ。思ひまうけながらも、猶ほためしなかりける報のほど、いかゞ淺くはおぼえむ。

消えかゝる露の命のはては見つ
さてもあづまの末ぞゆかしき

猶ほも思ふ心のあるなめりと、にくき口つきなりかし。その日の暮つ方、終にそこにて失はれにけり。今はの際も、さこそ心の中はありけめど、いたく人わろうもなく、あるべき事とも思へるさまになむ見えける。内侍の待ちきく心地、いかばかりかはありけむ。やがて樣かへて、近江國高島といふわたりに、昔のゆかりの人々、尊く行ひて住む寺にぞ立ち入りぬる。

【辱なういみじうも侍りしかな云々】　私も御門を隱岐まで御送り申しましたについて、ほんの暫らく御側に居ただけですが、その御有樣を拜しては、實に恐懼に堪へませんでした。ましてあなた方のやうに、朝夕御側近く侍して居られた方の御心中には、さぞかし深くもお感じのことと、全く御推量申しました。「推し量り聞えさせ侍りし」は推量したの意。

【何事も昔に及び云々】　後醍醐帝は萬事につけ非常にすぐれられて、昔の聖帝にも恥ぢぬ御有樣であるから、澆季の世には、却つて御立派すぎて、かくもお成り遊ばしたのであらうかとさへ、強ひて考へついた

やうな次第ですの意。「思ひ給へ寄らるゝ」のタマフは、謙讓の意を表す下二段のタマフである。

【何處の島守となれらむ人云々】何處へ流された人でも、皆面白からぬ月日を送つて居るのだ。誰も千年の松の如くに長壽を保ち得るものはないから、そんなのは、却つて心勞が增すことであらう。どうせ死ぬなら、どうなつたところで、同じ事だ。只死際に心が亂れなければ、極樂往生が出來るであらう。

【消えがてなる露の命の云々】消えがてなる露のやうな果敢ない自分の命の終は見たが、それにしても、彼の暴虐な鎌倉の末は、どうなることやら、見たいものである。

萬里小路中納言藤房は、常陸國につかはさる。父の大納言（宣房）、母おもとなど、老の末に引き別るゝ心地ども、いへば更なり、身にかへて求めまほしう思へど、かひなし。弟の季房の宰相も、頭おろしたりしかど、猶ほ下野國へ流さる。

●母おもと　母君といふに同じ。○身にかへて云々　自分の身を子の代りとして、救しを求めようと思ふが。○あづまへと云々　鎌倉まで連れてゆくといふ話であつたが、そこまで、行かず、駿河の國とかで殺された。

●元亨の亂の初に云々　五八○頁を見よ。○沈みつる　沈淪して居る。○思ひまうけたるよし　それはもう覺悟して居た旨。○頌　偈（げ）に同じ。佛家の詩。○四大　地・水・火・風の四。人體をいふ。○五蘊　蘊は蘊集の義。色（肉體）・受・想・行・識（精神）の五。人の心身の意。

平宰相成輔は、あづまへと聞えしかど、それも駿河の國とかやにてぞ失はれける。

又元亨の亂の初に流されし資朝の中納言をも、いまだ佐渡の島に沈みつるを、この程のついでに、彼處にて失ふべきよし、あづかりの武士に仰せければ、このよしを知らせけるに、思ひまうけたるよしいひて、都にとゞめける子のもとに、あはれなる文書きてあづけけり。既に斬られける時の頌とぞ聞きはべりし。

四大本無レ主。　五蘊本來空。
將レ頭傾二白刃一。　但如レ鑽二夏風一。

【四大本無主云々】人の身體は本より之が主たるものなく、空なるもの

であるから、白刃を以て頭に加ふるも、只夏風を鏃るが如く、何の障る所もないの意。○太平記(巻二)には「五蘊假成ノ形。四大今歸ノ空。將ノ頭當ニ白刃ヲ截斷一陣風」とある。

俊基も同じやうにぞ聞えし。かくのみ、皆さまざまに罪にあたり、遠き世界に放ち棄てらるゝ、各、思ひ歎けども、筆にも及びがたし。大塔の尊雲法親王ばかりは、虎の口を遁れたる御樣にて、こゝかしこ流浪へおはしますも、安き空なく、いかで過し果つべき御身ならむと、心苦しく見えたり。

(後鳥羽)隱岐の小島には、月日經るまゝに、いと忍びがたう思さる事のみぞ數そひける。いかばかりのおこたりにて、かゝる憂目を見るらむと、前の世のみ、つらくおぼし知らるゝ

(28)　(26)

(29)　(28)

●同じやうにぞ聞えし　同樣
斬られたといふことである。
○遠き世界に云々　遠國に流されること。○虎の口を云々　危い所をやつと逃れること

●おこたり　罪業。○いかで　その事をも云々　何とかして其の罪業をも報いようと。○打ち絶えて　事ら。○いもひ　イミの延言。ものいみ。○つとめ　佛の道な。○法のしるし云々　法の功驗(北條氏を滅さうといふ)をも試みかたがた前世の罪障消滅を祈られるないふ。○且は　一方には。○護摩　五九八頁を見よ。○たのもしき事　御願成就の夢などをいふ。○何處をさしてか　その船は何處をさして行くのであらうか。都の方へではあるまいかの意。○いふよしなく　いはむ方なく○れば給ひにたれども。○をかしき　風流な。

にも、いかでその罪をも報いてむとおぼして、打ち絶えて御いもひにて、朝夕つとめ行はせ給ふ法のしるしをも心みがてらと、且はおぼすなるべし。自ら護摩などもたかせ給ふに、いとたのもしき御事、夢にも多くなむありける。徒然におぼさるゝ折々は、廊めぐる所に立ち出でさせたまひて、遙かに浦の方を御覽じやるに、蜑の釣船ほのかに見えて、秋の木の葉の浮べる心地するも、あはれに、「何處をさしてか」とおぼさる。

心ざす方をとはばや浪の上に
　浮きて漂ふ蜑の釣船

「浦漕ぐ船の楫緒たえ」とうち誦じて、御涙のこぼるゝを、何となくまぎらはし給へる、いふよしなく心深げなり。ね

●いそぎ　支度。○内藏寮

び給ひにたれど、なまめかしう、をかしき御様なれば、所につけては、ましてやむごとなきあたらしさを、自らいとかたじけなしと思さる。

【心ざす方をとはばや云々】海上を見ると、涙の上に浮き漂つて居る蜑の釣船がある。何處を志して行くのであらうか、問ひたいものだ。若し都へでも行くのなら、ことづけたい事もあるの意。

【浦漕ぐ船の楫緒たえ】讀古今集(雜)に「須磨の蜑の浦漕ぐ船の楫緒たえよるべなき身ぞ悲しかりける」(小野小町)とあるによる。「楫緒」は艪縄のこと。これが斷れては思ふやうに、船をあやつることが出來ぬより、「よるべなき」をいふ序としたのである。

【所につけては云々】なまめかしう、をかしき御様であるから、かういふひどい所に居られるにつけては、殊に恐れ多く惜しいことと思はれると、記者の想像を事實のやうに言つたのである。

京には、十月になりて(光嚴)、御禊・大嘗嘗などのいそぎに、天の

一七六頁を見よ。○内匠寮　中務省の被管。工匠の事を掌る所。○打殿　裝束などを砧で打つて光澤を出す所。○染殿　布帛を染める所。○かしがましう　喧しく。○片つ方　後醍醐帝の方をいふ。○悠基・主基の御屏風　一六頁を見よ。○人々に召さる　人人に詠んでたてまつらされた。○書くべき者　その歌を屏風に書く程の能書の人。○彼處　隱岐。○行房　六四七頁參照。○まだきに　早くも○夜居の間の云々　夜寢ずに起きて居て四邊のヒッソリして居る時。○都にいふなる事　屏風に書く爲行房を召還すといふこと。○いかゞあらむとすらむ　どうなることだら

下物さわがしう、内藏寮・内匠寮・打殿・染殿、何くれの道々につけて、かしがましう響きあひたるも、片つ方は、涙のもよほしなり。悠紀・主基の御屏風の歌、人々に召さる。書くべき者のなければ、彼處へ參れる行房中將をや召しかへされましなど、定めかね給ふを、まだきに(後醍醐)傳へ聞しめしければ、夜居の間の靜かなるに、御前に殊に人もなく、この朝臣(行房)ばかり候ひて、昔今の御物語のたまふついでに、「(後醍醐)都にいふなる事は、いかゞあらむとすらむ。さもあらば、いとこそ羨ましからめ」と、うち仰せられて、火をつくづくとながめさせ給へる御まみの、忍ぶとすれど、いたうしぐれさせ給へるを見奉るに、中將(行房)も、心強からず、いと悲し。「(行房)いかばかりの道ならば、かゝる御有様を見おき聞え

ながら、憂き故里にはいで歸らむ」と思ふも、え聞えやらず。後夜の御行に、さながらおはしませば、潮風いと高う吹きくるに、霰の音さへ堪へがたく聞えて、いみじう寒き夜の氷をうち叩きて、閼伽たてまつるも、山寺の小法師ばらなどの心地ぞするや。少將(忠經)、この中將(行房)など、樒折りて參れるも、「何時習ひてか」とあはれに御覽ぜらる。

「今一度、いかで世を御心にまかするわざもがな」と、人の心のけぢめわかるゝにつけても、(後嵯峨)深うおぼしまさる事のみ數しらず。

(光厳)都には、十月二十五日御祓の行幸なり。女御代には、大炊御門大納言冬信の女出さると聞ゆ。十一月十一日より五節はじまる。前の御代には、談天門院(子忠)の御忌月にて、とま

う。○さもあらば　若し行房が都に還るやうなことにでもなつたら。○御まみ　御目つき。○いたうしぐれさせ給へる　涙を催されること。○え聞えやらず　心には思つたが言葉には申上げる事が出來なかつた。○後夜の御行　夜半より明方までにする勤行。○さがら云々　其まゝ行かれた。○閼伽　佛にたてまつる水。○小法師ばら　バラは複數の意を表す語。○心地ぞするや　ヤは感歎の助辭。○何時習ひてか　そんな仕業は何時習つたのであらうかの意。○人の心の云々　艱難に際して、誠忠な人の心の自然分るにつけてもの意。「けぢめ」は區別。

◉女御代　二六五頁を見よ。

○五節　三六三頁を見よ。○前の御代　後醍醐の時代。○談天門院　後醍醐御母。○さうざうし　寂しく物足らぬ。○うへ人　殿上人。○心ことに思へり　今度五節のあることを殊に嬉しく思つた。○めのと　傅。○定房　五五三頁を見よ。○五節など奉る　五節の舞姫を奉つた。○宣房　五八二頁を見よ。○さるべき　然るべき。○雜務　雜多の事務。○出で仕へけり　光嚴帝の朝廷に。○前行　行幸の御前に立つて導き奉る役。○清暑堂の御神樂　五三五頁を見よ。

りにしかば、さうざうしかりしに、めづらしくて、若きうへ人どもなど、心ことに思へり。隱岐の御門(後鳥羽)の御めのとなりし吉田の一品定房も、當代(光厳)につかへて、五節など奉る心のうちぞ、あはれにおしはかるゝ。宣房の大納言も、きるべき雜務の事などには、出で仕へけり。春宮大夫(後嵯峨)は、內大臣になりて、大嘗會の時も、高御座の行幸に、前行とかやいふ事などつとめ給ふ。右の大臣兼季も、太政大臣になりて、清暑堂の御神樂に、琵琶つかうまつりなどきこえて、よろづめでたく、あらまほしくて、年も暮れぬ。

【談天門院の御忌月にて云々】談天門院は元應元年十一月十五日崩御になつた。是が爲、後醍醐帝時代には、毎年五節を行はれなかつたのである。

●年の名かはり　改元。四月二十八日。○世を傾けむ　天下を傾けて再び後醍醐帝の御代とするをいふ。○金剛山千早　河内南河内郡。○いかめしき　嚴重な。○令旨　東宮・三宮・中宮・親王の仰せごと。○語らひ　説いて身方に引入れる。○かくろへばみて　隱れたるやうな風で。○大峰　大和吉野郡。○忍び　かくれながら。○さりぬべき隱々　然るべき、即ち隱れるに都合のよささうな所。○隱れ歩いて居て、折々現はれては、烈しく賊を攻められるまことや、この卯月の頃より、年の名かはりにしぞかし。「正慶」とぞいふなる。大塔の法親王(雲雄)・楠木の正成などは、猶ほ同じ心にて、世を傾けむ謀をのみめぐらすべし。正成は、金剛山千早といふ所に、いかめしき城をこしらへて、えもいはず武き者ども、多く籠り居たり。さて大塔の宮の令旨とて、國々の兵を語らひければ、世に恨みあるものなど、此處・彼處にかくろへばみて居る限りは、聚り集ひけり。宮(雲雄)は熊野にもおはしましけるが、大峰を傳ひて、忍び吉野にも、高野にもおはしまし通ひつゝ、さりぬべき隱々には、よく紛れものし給ひて、武き御有樣をのみ顯し給へば、いとかしこき大將軍にていますべしとて、附き隨ひきこゆるもの、いと多くなり行きければ、六波羅にも、

ないふ。○かしこき　勝れた。○附き隨ひきこゆるもの　親王の御方につくもの。○上り重なる　續々上つて來るをいふ。○聖德太子の御墓　天王寺。○軍のその　戰場。○いであひ　敵と戰ふ。○かけひき　戰場における進退。○滿ちひく　滿ちたり干たりすること。○たゞ暮れに云々　全く暮れてしまふの意。○事ども　戰爭。○いひしろふ　噂する。○むづかしう　いとはしく。○心ゆるびなき　油斷のならぬ。

●文保の頃　文保元年六月のこと。○いみじき事　たいしたこと。○時の人　當時の人。○院の執權　院の廳の別當。○又大納言になりぬ　元弘二

あづまにも、いと安からぬ事と、もてさわぎて、猶ほかの千早を攻めくづすべしといへば、兵など、上り重なると聞ゆ。正成は、聖德太子の御墓の前を、軍のそのにして、いであひかけひき、寄せつ返しつ、潮の滿ちひく如くにて、年はたゞ暮れに暮れはてぬれば、春になりて、事どもあるへしなどいひしろふも、いとむづかしう、心ゆるびなき世の有樣なり。

さても日野大納言俊光といひしは、文保の頃、始めて大納言になりにしを、いみじき事に、時の人いひさわぐめりしに、その子、この頃、院の執權にて、資名といふ、又大納言になりぬ。めでたく度をさへ重ぬる、いとゝいみじかめり。前の御代にも、定房一品して、宣房大納言になされなどせ

年十月。○度なさへ重ぬる　親も子も重れて大納言になつたないふ。○定房云々　六〇六頁參照。○一品して　從一位となつたこと。○宣房云々　五八二頁參照。○かうざまにぞ云々　かういふ風に人々が思ひ言つたやうである。

●后がね　將來后となる人。○御おぼえ　御寵愛。○あさやかならぬ　厚からぬ。○三條とて　三條といふ呼名で仕へて居られた、その御腹に。○宮々　興仁親王・彌仁親王。○途のまうけの君　途に東宮となられる方。

しをば、かうざまにぞ、人思ひいふめりし。

内(光厳)には、女御もいまだ候ひ給はぬに、西園寺の故内大臣殿(實宣)の姫君、廣義門院(寧子)の御傍に、今御方とかや聞えて、かしづかれ給ふを、まゐらせ奉り給へれば、これや后がねと、世人も、まだきに、めでたく思へれど、いかなるにか、御おぼえ、いとあざやかならぬぞ口惜しき。三條前大納言公秀の女(房子)、三條とてさぶらはるゝ御腹にぞ、宮數多いでものし給ひぬる、遂のまうけの君にてこそおはしますめれ。

【廣義門院の御傍に云々】實衡の女で、廣義門院（後伏見后）の御傍に、今御方とかいつて、大切に養育せられて居る人がある。それを光嚴帝へ奉られた。

●かの島　隱岐。後醍醐帝をいふ。○浦風さえて　海邊の風の寒く吹くこと。○渚の氷も云々　氷の解けるに心の解けるをかけた語。○年さへ隔りぬる　世から隔たつた上に、年さへ越えたの意。○閏二月あり　普通の二月の外に又閏の二月があること。○後の二月。閏二月。○密教の祕法　眞言祕密の修法。○大殿ごもらぬ　御寢にならぬ。○心ならず　思はず。○ありしながらの御面影　御在世當時のままの御面影。○さやかに　ハッキリ。○聞え知らせ給ふ事　教へ示し給ふ事（將來の事な

かの島には、（元弘二年）春來ても、猶ほ浦風さえて、浪あらく、渚の氷も解けがたき世のけしきに、いとゞおぼしむすぼるゝ事つきせず、かすかに心細き御すまひに、年さへ隔りぬるよと、あさましくおぼさる。候ふ人々も、しばしこそあれ、いみじく屈じにたり。今年は正慶二年といふ。閏二月あり。後の二月の初つ方より、とりわきて、密教の祕法を試みさせ給へば、夜も大殿ごもらぬ日數經て、流石に、いたう困じ給ひにけり。心ならずまどろませ給へる曉方、夢現ともわかぬ程に、後宇多院ありしながらの御面影さやかに見え給ひて、聞え知らせ給ふ事多かりけり。うち驚きて、夢なり

どについて)。○名殘　物事の過去つた後、猶ほその面影などの殘ること。○御涙もせきあへず　御涙も止めあへず　○海人のたよりにつけて　蜑の釣舟に託して。

けりとおぼすほど、いはむ方なく名殘悲し。御涙もせきあへず、「さめざらましを」とおぼすも、かひなし。源氏の大將、須磨の浦にて、父御門見奉りけむ夢の心地し給ふも、いとあはれに、たのもしう、いよ〳〵御心強さまさりて、かの新發意が御迎へのやうなる釣舟も、たよりいできなむやと、待たるゝ心地し給ふに、大塔の宮(尊雲)よりも、海人のたよりにつけて、聞え給ふ事絶えず。

【さめざらましを】古今集(戀)に「思ひつゝ寢ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを」(小野小町)とある歌によつた語。

【源氏の大將須磨の浦にて云々】「源氏の大將」は源氏物語の主人公光源氏のこと(五四四頁參照)。この人が、須磨の配所に居られた時、或夜ふと亡き父帝の御面影が現はれて、「などかく怪しき所にはものするぞ。住吉の神の導き給ふまゝに、早や船出して、この浦を去りね云々」といはれる(明石卷)。それを言つたのである。

●猶ほ世の中靜まりかね云々　まだ南朝の勢力があつて、北朝の天下の鎭まりかねるをいふ。○御垣守にさぶらふ兵　禁中の御門を守る衞士。但しこゝは警固の武士のこと。○御氣色をほの心得て　帝の御心中をほのかに悟つて。○靡き仕うまつらむ　帝につき從はう。○さるべき限り　同心のものども。○語らひ合せて

【かの新發意が御迎へのやうなる云々】これも源氏物語の話。前項の話の續きに、「更に御目もあはで、曉方になりにけり。渚に小やかなる舟よせて、人二三人ばかり、此度の御宿りを指してゆく。何人ならむといへば、明石の浦より、前の守新發意の、御舟よそひて參れるなりけり云々」とある。卽ち新發意が明石から迎へに來たので、それより源氏はその邸にゆき、やがて又都にも還るのである。

都にも、猶ほ世の中靜まりかねたるさまに聞ゆれば、(後醍醐)よろづにおぼしなぐさめて、關守のうち寢るひまをのみうかゞひ給ふに、然るべき時の到れるにや、御垣守にさぶらふ兵どもも、御氣色をほの心得て、靡き仕うまつらむと思ふ心つきにければ、さるべき限りかたらひ合せて、同じ月の廿四日の曙に、いみじくたばかりて、かくろへゐて奉る。いとあやしげなる蜑の釣舟のさまに見せて、夜深き空の暗き

まぎれにおしいだす。折しも、霧いみじう降りて、ゆくさきも見えず、いかさまならむと、あやふけれど、御心をしづめて、念じ給ふに、思ふ方の風さへ吹きすゝみて、その日の申(さる)の時に、出雲の國につかせ給ひぬ。こゝにてぞ、人心地しづめける。

【關守のうち寢ろひまを】伊勢物語に「人知れぬ吾が通路の關守は宵々毎に打ちも寢(ね)ななむ」とある歌によつた語。○「打ちも寢ななむ」は寢(ね)よかしと願望を表はす。但しこゝの本文では、警固の武士の隙間をうかゞはれたことをいつたのである。

同じ廿五日、伯耆國稻津(いなづ)浦といふ所へ遷らせ給へり。この國に奈和の又太郎長年といひて、あやしき民(たみ)なれど、いと猛(たけ)に富めるが、類(るゐ)ひろく、心もさかしく、むね〳〵しき者あり。彼(かれ)が許へ宣旨(せんじ)を遣はし給ひたるに、いと辱(かたじけな)しと思ひて、

相談して。○いみじくたばかりて　うまく計略をめぐらして。○かくろへぬて奉る　隱れてお連れ出し申した。○あやしげなる　みすぼらしい。○いかさまならむと　どうなる事かと。○念じ給ふ　こらへ給ふ。○思ふ方の風　追手の風。○申の時　午後四時。○心地しづめける　落ちついた。

●あやしき民　賤しい民。○いと猛に富める　勢猛けくして富める。○類ひろく　一族の多いこと。○むね〳〵しき　重だつた。○辱し　畏多い。○とりあへず　早速。○勢

軍勢。○都の御社　京都の賀茂社。○船上寺　伯耆東伯郡船上山智積寺のことであらう。○九重の宮になずらふ　禁中に擬した。○比叡山の上へも云々　延暦寺の衆徒へも宣旨を下されたをいふ。

とりあへず、五百餘騎の勢にて、御迎へにまゐれり。又の日、賀茂の社といふ所にたち入らせ給ふ。都の御社(やしろ)思し出でられて、いとたのもし。それより、船上寺といふ所へおはしまさせて、九重(ここのへ)の宮になずらふ。これよりぞ、國々の兵(つはもの)どもに、御敵(おんかたき)を亡すべきよしの宣旨(せんじ)つかはしける。比叡の山へも、のぼせられけり。

【稻津浦といふ所】「稻津浦」は伯耆西伯郡の海岸に違ひないが、よくは分らぬ。海松論には、「御座船は伯耆國奈和庄野津浦といふ所に著き給ふ」とある。太平記には「名和」とある。又「御來屋」ともいふ。いづれも同じ所であらう。

【加茂の社といふ所に云々】名和氏紀事にいふ、「增鏡に、『長年五百餘騎』と見えたれど、御著船より船上山へ行幸の間に、かゝる事などあるべき由なし。他日船上山より御參詣ありけむを誤れる傳なるべし。件の社、今賀茂鄉梶村(西伯郡)にあり。」

●出でさせ給ひにし　帝の遁れられた。○むくつけく　恐ろしく。○こゝにも　船上山でも。○引き返しにけり　追手は。○京にもあづまにも　京の六波羅でも鎌倉でも。○正成が城のかこみに　金剛山攻圍の爲。○そこらの　多くの。○かゝる事さへ　帝の遁れて船上山に籠られたこと。○東よりも云々　關東からも軍勢が上つて來る。

●いみじうのゝしる　喧しく騷ぎたてる。○御幸とて　同じく六波羅へ。○うち込みのゝしりたる　混雜して騷ぎたてる。○かやうに云々　かういふ風に騷ぎかけては、たとひ少し靜まつても、猶ほ油斷が出來

ない爲だらうか。○そのまゝ　六波羅に。○離れ給へる云云　離れて居られるのは、よくないとて。○大方の儀式ばかりにて　傳といふは名義ばかりで。○いまだきびはなる云々　東宮がまだ御小さいので不安心に思ひ。○やがて　そのまゝ。○御修法　兵亂鎭定の。○ほど〳〵に隨ひて　身分に應じて。○兵を召せば　北朝方より兵を奉れと命ぜられると。○おぼ〳〵しき　おぼつかない。○いひしろふ　言ひあふ。

ひ、武士どもの、うち込みのゝしりたる有樣、いと恐ろし。されど、六波羅の軍強くて、その夜は、かの者ども引き返しぬとて、少し靜まれるやうなれど、かやうにいひ立ちぬれば、猶ほ心ゆるびなきにや、そのまゝ、院（後伏見）も御門（光嚴）もおはしませば、春宮（惠仁）も離れ給へる、よろしからぬ事とて、廿六日六波羅へ行啓なる。內の大臣（通顯）御車にまゐり給ふ。傅は久我の右の大臣（通長）にいますれど、大方のぎ式ばかりにて、よろづ、この內大臣嚴（通顯）、御後見つかまつり給へば、いまだきびはなる御程を、うしろめたがりて、宿直にも、やがて候ひ給ふ。御修法の爲に、法親王だちも候はせ給へり。こゝもかしこも軍とのみ聞えて、日數ふるに、院よりの仰とて、上達部・殿上人までも、ほど〳〵に

かくて隱岐の國には、出でさせ給ひにし晝つ方より、騷ぎあひて、隱岐の前の守追ひて參るよし聞ゆれば、いとむくつけくおぼされつれど、こゝにも、その心して、いみじう戰ひければ、引き返しにけり。京にもあづまにも、驚き騷ぐさま思ひやるべし。正成が城のかこみに、そこらの武士ども、兩院（後伏見 花園）も御幸とて、上下たちきわぐ。馬・車走りちがひ、武士どもの、うち込みのゝしりたる有樣、いと恐ろし。されど、六波羅の軍強くて、その夜は、かの者ども引き返しぬとて、少し靜まれるやうなれど、かやうにいひ立ちぬれば、猶ほ心ゆるびなきにや、そのまゝ、院（後伏見）も御門（光嚴）もおはしませば、春宮（惠仁）も離れ給へる、よろしからぬ事とて、廿六日六波羅へ行啓なる。內の大臣（通顯）御車にまゐり給ふ。傅は久我の右の大臣（通長）にいますれど、大方のぎ式ばかりにて、よろづ、この內大臣嚴（通顯）、御後見つかまつり給へば、いまだきびはなる御程を、うしろめたがりて、宿直にも、やがて候ひ給ふ。御修法の爲に、法親王だちも候はせ給へり。こゝもかしこも軍とのみ聞えて、日數ふるに、院よりの仰とて、上達部・殿上人までも、ほど〳〵に

隨ひて、兵を召せば、弓ひく道もおぼ〳〵しき若侍などをさへぞ奉りける。げに臂も折りぬべき世の中なり。かやうにいひしろふ程に、三月もくれぬ。

【臂も折りぬべき世の中】白氏文集(巻三)「新豐折臂翁（戒二邊功一也）」の故事による。曰く、「新豐老翁八十八。頭鬢眉鬚皆似レ雪。玄孫扶向二店前一行。左臂悪レ肩右臂折。問翁臂折來幾年。翁間致レ折何因緣。翁云貫屬新豐縣。生逢二聖代一無二征戰一。慣レ聽二梨園歌管聲一。不レ識二旗旗與一弓箭一。無レ幾天寶大徴レ兵。戸有二三丁一點二一丁一。點得驅將何處去。五月萬里雲南行。聞道雲南有二瀘水一。椒花落時瘴煙起。大軍徒涉水如レ湯。未レ過十人二三死。村南村北哭聲哀。兒別二爺孃一夫別レ妻。皆云前後征蠻者。千萬人行無二一廻一。是時翁年二十四。兵部牒中有二名字一。夜深不二敢使一二人知一。倫二將大石一鎚二折臂一。張レ弓簸レ旗旗俱不レ堪。從レ茲始免レ征二雲南一。骨碎筋傷非レ不レ苦。且圖揀退歸二鄉土一。此臂折來六十年。一肢雖レ廢一身全。至今風雨陰寒夜。直至二天明一痛不レ眠。痛不レ眠終不レ悔。且喜老身今獨在。不レ然當時瀘水頭。身死魂飛骨不レ收。應レ作二雲南望鄉鬼一。萬人塚上

●うしろめたく云々　北條に對して、うしろ暗く、二心のあるやうなことはないと誓つたのである。○おろかならず　疎かならず。○とかく聞ゆる筋　南朝の方へつくのではないかなどいふ噂。○名殘未齊。○本のねざし　先祖。○承久より以後　實朝の薨後（七五頁參照）。○頭さしいだす　頭角をあらはす。○埋もれ　世にあらはれず。○心よせのもの　高氏に心を寄せて居るもの。○下に　ひそかに。○さゝめく　さゝやく。

哭咷々上。云々。

卯月の十日餘り、又あづまより武士多くのぼる中に、一昨年笠置へ向ひたりし足利の治部大輔源高氏のぼれり。院（猛伏）にも、たのもしくきこしめして、かの伯耆の船上へ向ふべきよし、院宣たまはせけり。東を立ちし時も、うしろめたく二心あるまじきよし、おろかならず誓詞文を書きてけれども、底の心やいかゞあらむ、とかく聞ゆる筋もありけり。この高氏は、古への頼義朝臣の名殘なりければ、本のねざしはやむごとなき武士なれど、承久よりこのかた、頭さしいだす源氏もなくて、埋もれ過しながら、類ひろく、勢四方に滿ちて、國々に心よせのもの多かれば、かやうに國の危き折を得て、思ひたつ道もやあらむなど、下にさゝ

●西山大原　山城愛宕郡。○一とまり　一泊。○大宮の木戸　一條の北、大宮通の町はづれにある木戸。○二條より下　京都は北を上といひ、南を下といふ。○雲霞の如く云云　六波羅へ攻入つたとこ。○面を向ふるものなし　抵抗するものがない。○都　北朝方。○梵天の宮の中も　梵天は梵語 Brahma。佛の住める所。天上もの意。なほ二三六頁を見よ。○とよみあひたる　響きわたる。○來しかた行くさき暮れて　途方にくれて。○さかしき　賢明。○絲竹のしらべ　音樂。○うとましいとはし。○武士ども　六波羅勢。○さならぬ殘り　さうでない、卽ち金剛山へ向はなかつた殘り。○今を限りの軍手を盡してのゝしる　一所懸命になつて騷ぎたてる。○まれびやらむ方なし　其騷動の樣は到底眞似るとも出來ない程だ。○一日一夜　七日より入日の朝にかけて。○入りもみ、とよみ明す　喧しく騷ぎたつて夜を明す。○殘る手なく　力の限り。○

めくも、しるくぞ見えし。

【頼義朝臣の名殘】

頼義―義家―義國―義重（新田）……義貞
　　　　　―義康（足利）―義兼―義氏―泰氏―頼氏―家時―貞氏―高氏（尊氏）

伯耆國へ向ふべしといひなして、先づ西山・大原わたりに一とまりして、五月七日、ほのぼのと明くる程より、大宮の木戸どもをおし開きて、二條より下、七條の大路を東ざまに、七手に分れて、旗をさしつゞけて、六波羅をさして、雲霞の如くたなびき入るに、更に面を向ふるものなし。この治部の大輔、早うより、先帝の勅を承りてければ、さかさまに都を亡さむとするなりけり。關つくるとかや

いふ聲は、雷の落ちかゝるやうに、地の底も響き、梵天の宮の中も聞き驚き給ふらむと思ふばかり、とよみあひたるさま、來しかた行くさき暮れて、物覺ゆる人もなし。御門・春宮・院の上・宮だちなど、まして一人さかしきもおはしまさず。絲竹のしらべをのみ、聞し召しならひたる御心どもに、珍らかに、うとましければ、たゞあきれ給へり。武士ども半ばをわけて、金剛山へ向ひたれば、さならぬ殘り、都にある限りは戰をなす。今を限りの軍なれば、手を盡してのゝしる程、まねびやらむ方なし。雨の脚よりもしげく走りちがふ矢にあたりて、目の前に死を受くるもの數を知らず。一日・一夜入りもみ、とよみ明かすに、兩六波羅にも、殘る手なく防ぎつれど、遂に陣の内破られて、

今はかくと　今はこれまでともう駄目だと。○候ひ籠り給へる　帝の御供して六波羅に籠つて居る。○かくかまへけるを云々　高氏のかゝる挙に出ようとは御存じなく（帝が）。○昨日かとよ　實は四月十六日のこと。強めていつたのである。○かくうらがへりぬれば　先帝の方を討つべき筈の者が、かく族を飜したのであるから。

●日ぐらし　終日。○八幡　山城綴喜郡。○山崎　同乙訓郡。○竹田　同紀伊郡。○宇治　同久世郡。○勢多　近江栗多郡。○深草　山城紀伊郡。○法性寺　同愛宕郡。○こゝにも　六波羅にも。○あやしき御姿　みすぼらしい御姿。○まがゝゝし　不祥。○御手を取りかはすと云々　纔かに御手をとりかはすといふ風で御乗物もなく。○袴のそばとりて　袴の端を取上げて。○空を歩む心地　足も地につかぬ心地。○河原　賀茂の河原○御幸も同じさまに　同じく鎌倉の方へ。○御直衣に袙貰云々　直衣を著て指貰を高く括りあげて居る。○しるく見え給ふ　通顯であることが明かに分る。○道の程のわりなきに　途中が危險なので。○折烏帽子　頂を三角に折つた

増鏡新釋

七〇八

今はかくと見えたり。日頃候ひ籠り給へる上達部・殿上人なども、今日と思ひまうけたらむだに、君のおはしまさむ限りは、いかでか退でも散らむ。まして、かねてより、かくかまへけるをも、しろしめさで、昨日かとよ、當代（光厳）の宣旨を賜はりし者の、かくうらがへりぬれば、誰か思ひよらむ。すべて上下となく、一つに立ちこみて、あわて惑ひたり。

【今日と思ひまうけたらむだに云々】　今日は、こんな事にならうと、とひかれてから豫期して居ても、君の籠り居給ふ間は、どうしてこゝを退散することあらう。

日ぐらし、八幡・山崎・竹田・宇治・勢多・深草・法性寺など、燃えあがる煙ども、四方の空にみち〳〵て、日の光も見え

七〇九

ず、墨をすりたるやうにて暮れぬ。こゝにも火かゝりて、いとあさましければ、いみじう固めたりつる後の陣を辛うじて破りて、それより免れて（光厳等）出でさせ給ふ御心地ども、夢路をたどるやうなり。内の上（光厳）も、いとあやしき御姿にて、殊更やつしたてまつる、いとまが〳〵し。両院（後伏見花園）も御手をとりかはすといふばかりにて、人に助けられつゝ、出でさせ給ふ。上達部・大臣たちは、袴のそばとりて、冠などの落ちゆくも知らず、空を歩む心地して、或は河原を西へ東へ、さまざまちりぢりになり給ふ。両六波羅（仲時時盛）東をさして、東へと心がけて落ちければ、御幸も同じさまになし奉りけり。西園寺の大納言公宗は、北山へおはしにけり。右衛門督經顯・左兵衛督隆蔭・資明の宰相などは、御幸の御供にまゐ

烏帽子。○布直垂　布で作つた直垂。○細やか　身體のほつそりとしたこと。○御前どもに云々　父の前驅の中に混じて居た。○火　松明をいふ。○あやめわかれぬ　物の黑白も分らぬ。○いかにもなり給へるにや　どうかなつたのだらうか。○わなゝき　ふるひ

らる。按察の大納言資名は、足を損ひて、東山わたりに、とまりぬなどいひしは、いかゞありけむ。内大臣殿（通顯）は、御子の別當道冬を伴ひ給ひて、八日の曙の、いまだ暗きほどに、我が御家の三條坊門萬里小路におはしつきたるに、歩み入り給ふほども、心もとなくて、北の方門へ走り出でて、平かに歸りおはしたると思ふ嬉しさに、急ぎて見れば、おとゞ（通顯）は御直衣に指貫ひきあげ給へば、しるく見え給ふ。別當（通冬）は、道の程のわりなきに、折烏帽子に布直直といふものうち著て、細やかに若き人の、御前どもにまぎれたれば、頓にも見えず。火なども、わざとなければ、暗きほどのあやめわかれぬに、早ういかにもなり給へるにやと、心地まどひて、北の方は、いかに〳〵と、聲もわな

●伊吹　近江坂田郡。○某の宮　龜山院の皇子。法名覺性五辻の宮といふ。○先帝の御心よせにて　先帝に心を寄せて居られたので。○かやうの方　弓矢の道。○ほの心え　大體は心得て居られた。○待ちうけて　御幸の一行を。○六波羅の北　北六波羅探題。○番馬　近江大津の東南。○手のものども　仲時の部下。○隨ひつきけれど　御門や東宮に。○同じき南　南六波羅

なきて聞えける。いと理りに、いみじうあはれなり。

【歩み入り給ふほどに心もとなくて云々】　通顯と道冬とが歸つて來たが、その門内に歩み入る間も待遠しく、奥方は、門へ走り出て、無事に歸つたと思ふ嬉しさに云々。

さて御幸は、近江國におはしますほどに、伊吹といふほとりにて、某の宮（守良）とかや、法師にていましけるが、先帝（後醍醐）の御心よせにて、かやうの方も、ほの心え侍りけるにや、待ちうけて矢を放ちたまふ。又京よりも追手かゝるなど聞えければ、六波羅の北といひし仲時、内（光嚴）・春宮（康仁）・兩院（後伏見花園）具し奉り、番馬といふ所の山の内に入れ奉りぬ。手のものどもも、なほ殘りて隨ひつきけれども、戰もかなはずやありけむ、遂にこの山にて腹切りにけり。同じ

探題。○これまでも參らず　この番馬までも來なかつた。○守山　近江野州郡。○あやなく　仕方がない。○御所々の御供　諸所をさまよはれる間の御供。○髻切りてけり　剃髮した。○歸り入らせ　都へ。○面々に　花園院・光嚴帝もそれぞれ。

●伯耆の御所　船上山の行宮

き南、時益といひしは、これまでも參らず、守山の邊にて失せにけりとぞ聞えし。あやなくいみじき事の樣なり。御所々の御供には、俊實の大納言・經顯の中納言・賴定の中納言・資明の中納言・宰相隆蔭などぞ殘り候ひける。俊實・資名・賴定などは、やがて、そこにて髻切りてけり。一院（後伏見）は歸り入らせ給ふ。御門（光嚴）に、御文を奉り給ひて、面々に御出家あるべし、などまで申させけれども、思ひもよらぬよしを、かたく申され給ひけるとかやとぞ聞えし。

【御門に御文を奉り給ひて云々】後伏見院より光嚴帝に御文を奉り給ひ、各〻御出家あるべしとまで、御勸めになつたけれども、思ひもよらぬ事だと、固く申されて、御隨ひにならなかつたとかいふことだ。

伯耆の御所へは、人々參り集ふ。上達部・殿上人數しらず。

○東にもかねて云々　關東でも、かねてそのつもりで居たのか。○高氏の末の一族　足利氏は新田氏よりも、はゞなきかして居たので、こゝには末といつたのである。七〇六頁參照。○武藏國より　實は上野國から。○守邦親王　前將軍久明親王の長子。延慶元年北條貞時に迎へられて將軍となる、時に七歳。○御後見　執權。○入道　佛門に入る。○鎌倉をたちて向ふ　新田の軍を討つ爲に。○そこら　多く。○國人　地方の人。田舍漢などの意。○えさらぬ　據ないもの。北條に背くことの出來ないもの。○かくなりぬる事　こんなにまけてしまつたこと。

さる程に、東にも、かねて心えけるにや、高氏の末の一族なる新田小四郎義貞といふもの、今の高氏の子（義詮）四になりけるを、大將軍にして、武藏國より軍を起してけり。この頃の東の將軍は、守邦親王にておはします。御後見つかまつる　高時入道・貞顯入道・城介入道圓明・長崎入道圓基などいふものども、驚きさわぎて、高時入道の弟に四郎左近大夫泰家といひし、今は入道したるをぞ、大將に下しける。五月十四日、鎌倉をたちて向ふ。その勢十萬餘騎、高時入道の一族、附き隨ふもの、そこら滿ちひろごりて、鎌倉はじまりし賴朝の世、時政より今に至るまで、多くの年月をつめり。僅かなる新田などいふ國人に、たやすくいかでかは亡さるべきと覺えしに、程なく十五日に、敵既に鎌倉に

近づくよし聞えて、家々を毀ち騒ぎのゝしる。世の既に滅するにやとおぼえしとぞ、人は語り侍りし。四郎左近大夫入道、軍にうち負けるにや、隨ふ武士ども、殘りなく新田が方へつきぬれば、えさらぬものどもばかり、五六百騎にて、十六日の夜に入りて、鎌倉へ引きかへる。僅かに中一日にてかくなりぬる事、夢かとぞおぼえし。かくて、日々の軍にうち負けければ、同じき廿二日、高時以下腹切りて失せにけり。

【高氏の子四になりけるを云々】梅松論には「扨も關東誅伐の事は、義貞朝臣その功をなす所に、いかゞありけむ、義詮の御所四歳の御時、大將として御輿に召されて、義貞と御同道にて、關東退治以後は、二階堂の別當坊に御座ありしに、諸將悉く四歳の若君に屬し奉りしこそめでたけれ」とある。義貞が義詮を奉じて居たのではあるまい。

●ひしめく　騒きたつこと。○事ども定めらる　儀式・政治などのことを定められた。○重祚　再び天位につき給ふこと。○黒の箱　神璽を入れた箱。○關白を云々　御親政で關白は不要なのである。○氏長者　一族の長たる人。○都の事管領あるべき　京都の事をとりしまるべき。○この御はからひ　天下の事も只この道平がとりはからふ。○ひとつあたり　一族のもの。○内裏　二條富小路殿。○めでたしとも云々　めでたいといふ

【高時入道の一族云々】高時入道の一族は、鎌倉幕府の始まつた賴朝時代の、北條時政以來今日に至るまで、多くの年月を積んで、附き隨ふものも非常に多いの意。

さて都には、伯耆よりの還御（後醍醐）とて、世の中ひしめく。先づ東寺へ入らせ給ひて、事ども定めらる。二條の前の大臣道平召しありて參り給へり。此度内裏へ入らせ給ふべき儀、重祚などにてあるべければ、只遠き行幸の還御の儀式にてあるべきよし定めらる。關白をおかるまじければ、二條の大臣（道平）氏長者を宣下せられて、都の事管領あるべきよしうけたまはる。天の下、只この御はからひなるべしとて、このひとつあたり喜びあへり。六月六日、東寺より、常の行幸のさまにて、内裏へ

にも、いふべき言葉がない程である。○去年の春云々　去年の春は還幸のことで、實に悲しいことであつた。**ハヤ**は感歎の助辭。○たとしへなくたとふるに物のない程悲しい。○ありしよりは　隱岐へ還幸の時よりは。○むくつけき　恐ろしい。○うちつけめなるべし　ふと見た目で、即ち一寸表面だけ見て、かう思はれるのであらう。○世のならひ　世間の習慣として。○時につけて移る心なれば　人の心は時によつて變つてゆく者であるから。○さぞあるらし　自分と同じやうに思ふことであらう。○ゆすり滿ちたる　騷ぎ立つた。○かくもありけるを云々　こんなにめでたい還幸があるのに、去年は、どうしてあさましく歎かれたのであらうか。○前の世のみゆかし　前世の事が知りたく思ふ。○ありし御下り　隱岐へ還幸のこと。

ぞ入らせたまひける。めでたしとも言の葉なし。去年の春いみじかりしはや、と思ひいづるも、たとしへなく、今も御供の武士ども、あり、ありしよりは、なほ幾重ともなく打圍み奉れるは、いとむくつけきさまなれど、此度はうとましくも見えず、たのもしくて、めでたき御護かなと覺ゆるも、うちつけめなるべし。世のならひ、時につけて移る心なれば、皆さぞあるらし。先陣は二條富小路の內裏につかせ給ひぬれど、後陣の兵は、猶ほ東寺の門まで續き控へたりしとぞ聞えしは、まことにやありけむ。正成もつかうまつれり。かの名和の又太郎は、伯耆守になりて、それも衞府のものどもにうちまじりたる、めづらしく、さまかはりて、ゆすり滿ちたる世の氣色、かくもありけるを、などあさましくは歎かせ奉りたりけるにかと、めでたきにつけても、猶ほ前の世のみ、ゆかし。車などたち續きたるさま、ありし御下りには、こよなくまされり。物見る人の中に、

昔だに沈むうらみをおきの海に
　波たちかへる今ぞかしこき

昔の事など思ひあはするにやありけむ。

【昔だに沈むうらみを云々】昔、後鳥羽院は、恨をのんで、遂に隱岐の島にお果てになつたのであるが、吾が後醍醐帝におかせられては、今度めでたく又都にお歸りになる。實にありがたいことである。「おき」は隱岐に置きをかけ、「かへる」は波の緣語である。

●さながら　そのまゝ。○頭を垂れて云々　競うて投降するをいふ。○いにし年　元弘二年八月。○五壇の御修法　一六三頁を見よ。○議定　政

金剛山なりし東の武士どもも、さながら頭を垂れて參りきほふさま、漢の初もかくやと見えたり。禮成門院（前子）も又中宮と聞えさす。六日の夜、やがて內裏へ入らせ給ふ。い

事上の事などを議し定めること。○昔の人々　もと仕へて居た人々。

●男　僧ならぬ人。○ゆゝしげなる　美ましげな。○ほとほと　殆ど。○預　監視者。○東のひしめきのまぎれに　鎌倉滅亡の騒ぎにまぎれて。○胸あかぬ　胸の憂の晴れぬ。○塵を出づる　世を捨てる。○眉をひらく　憂消えて喜にあふ。○男になれらむ　還俗するをいふ。○同じ心なるどち　同じやうに復髪を蓄へようとした同志。○まいて　ぞ　天台座主であつた人さへさうであるから、まして他の者の還俗するのは、いふまでもないの意。

にし年御髪（御子ごし）おろしにき。御惱なほおこたらねば、いつしか五壇の御修法はじめらる。八日より議定行はせたまふ。昔の人々殘りなく參りつどふ。

【漢の初もかくやと云々】　漢の高祖の關中に入つた時、秦の將士が爭つて投降したことをいふ。

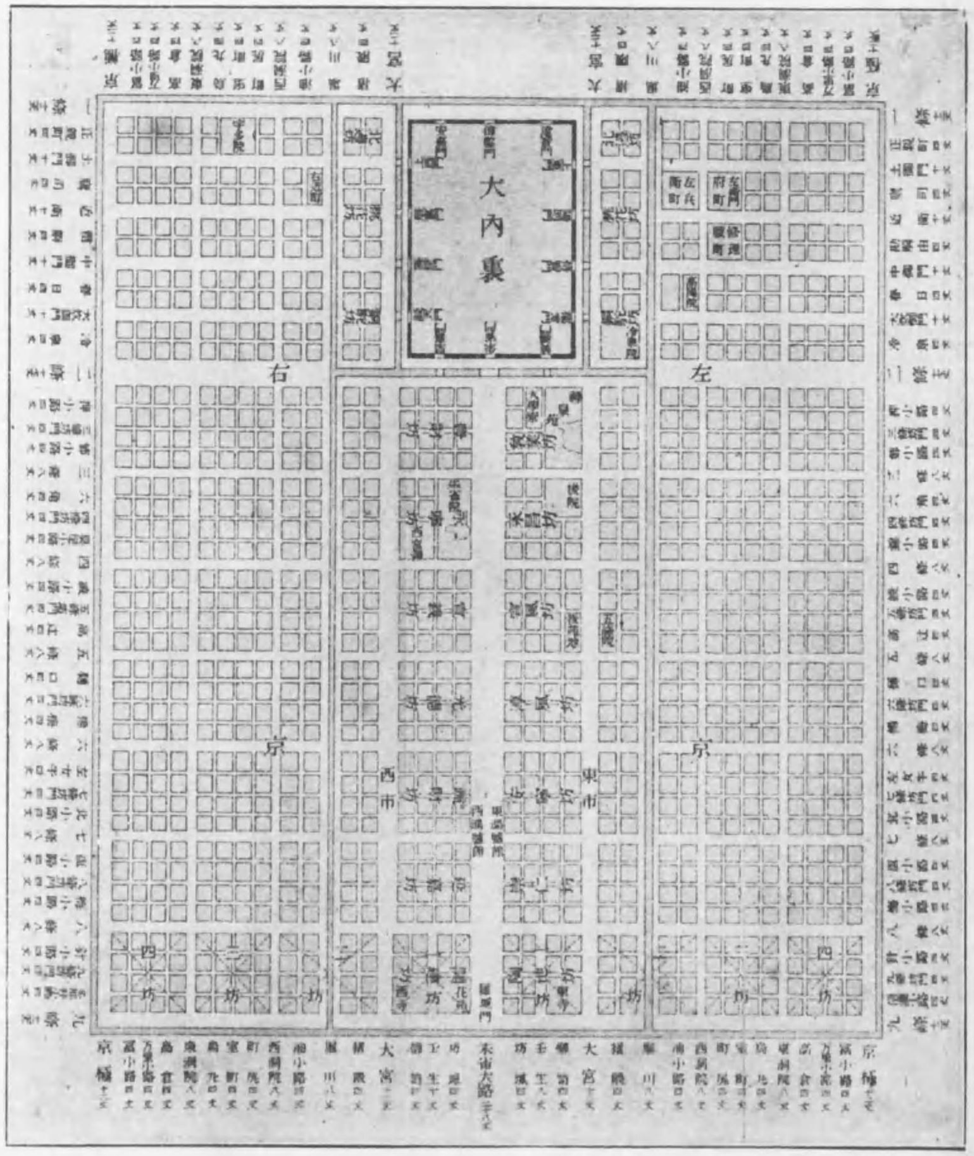
十三日、大塔の法親王（雲林院）都に入り給ふ。この月頃に、御髮生して、えもいはずきよらかなる男になり給へり。唐の赤地の錦の御鎧直垂といふもの奉りて、御馬にてわたり給へば、御供に、ゆゝしげなる武士ども打圍みて、御門（後醍醐）の御供なりしにも、ほと〳〵劣るまじかめり。速かに將軍の宣旨をかうぶり給ひぬ。流されし人々、程なくきほひ上るさま、枯れにし木草の春にあへる心地す。その中に、季房の宰相入道のみぞ、預なりけるものの、情なき心ばへやありけむ、東のひしめきのまぎれに失ひてければ、兄の中納言藤房は歸り上れるにつけても、父の大納言（宣房）・母の尼うへなど、歎きつきせず、胸あかぬ心地してけり。四條中納言隆資といふも、頭おろしたりし、また髮生しぬ。もとより塵を出づるにはあらず、敵の爲に身を隱さむとて、かりそめに剃りしばかりなれば、今はた更に眉をひらく時になりて、男になれらむ、何の憚りかあらむとぞ、同じ心なるどち、いひあはせける。天台座主にていませし法親王（雲林院）だに、かくおはしませば、まいてとぞ。誰にかありけむ、その頃聞きし。

すみぞめの色をもかへつつき草の

増鏡新釋終

【墨染の色をもかへつ云々】昨日までは墨染の衣を著て居た人も、今日は艾花やかな衣に著かへるやうになつたの意。「つき草」は普通露草といふ（月見草とは別）。野原・路傍などに自生し、夏季青い花を開く。その花の色は物にうつり易いので、昔は物を染めるに使つた。よつて「移れば」の序として用ひたのである。

移ればかはる花のころもに



平安京の圖

露光量調整、重複撮影

大正七年四月七日印刷
大正七年四月十一日發行

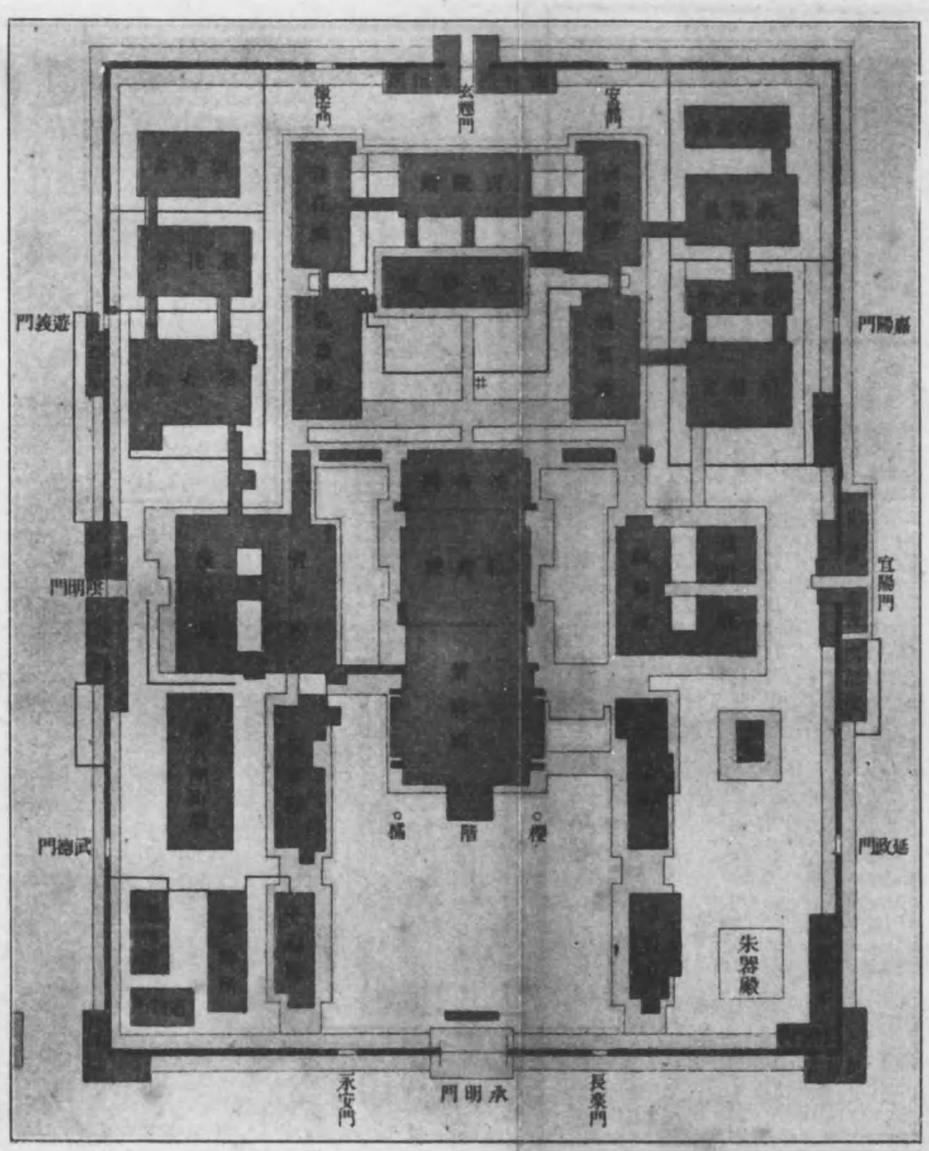
增鏡新釋奥付

定價金壹圓參拾錢

不許複製

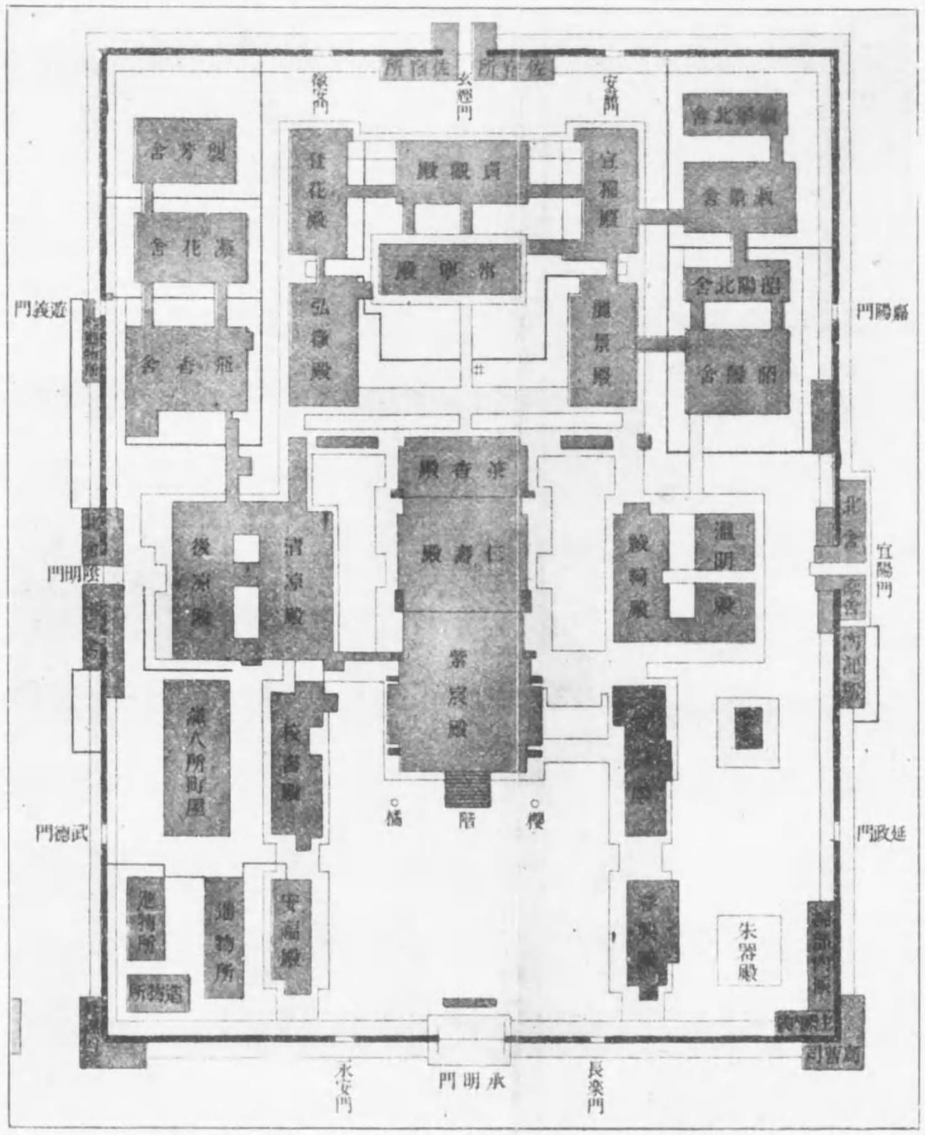
著者　佐野保太郎　東京市神田區表神保町二番地
發行者　山崎清一　東京市神田區表神保町二番地
印刷者　渡邊八太郎　東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社　東京市牛込區榎町七番地

發行所
大賣捌
東京市神田區表神保町二番地　有精堂書店
振替東京二四五〇五番
東京市神田區裏神保町一番地　三省堂書店
（東京）東京堂、目黒分店、北隆館、東海堂、上田屋（大阪）三宅書店（九州）菊竹書店



内裏の圖

露光量調整、重複撮影



内裏の圖

大正七年四月七日印刷
大正七年四月十一日發行

增鏡新釋奧付

定價金壹圓參拾錢

不許複製

著者　佐野保太郎

發行者　東京市神田區表神保町二番地　山崎清一

印刷者　東京市牛込區榎町七番地　渡邊八太郎

印刷所　東京市牛込區榎町七番地　日清印刷株式會社

發行所　東京市神田區表神保町二番地　振替東京二四五〇五番　有精堂書店

東京市神田區裏神保町一番地　三省堂書店

大賣捌　（東京）東京堂、日黒分店、北隆館、東海堂、上田屋（大阪）三宅書店（九州）菊竹書店

▼送費無料 通信販賣▲

▲圖書一切の送料は弊店負擔にて販賣致します
（但し原書、醫書、法律書、教科書は送料の半額弊店負擔の事）

▲御註文書に依り殊に格安に仕入得られしものは特に割引致し其旨御通知申上げ次の御註文の時差引致します

▲著者、書名、發行所は、詳細に御明記下さい

▲御送金は振替貯金最も御便利なるべく且つ安全に費用も少くあります

切手代用は一割增に願ひます

▲弊店が如何に機敏なるか如何に誠實なるか左の御書面を參照せられよ

謹啓小生は山間に鋤鍬を持つ一寒生にて讀書を以て唯一の愉樂と相致し時々帝都の各書肆より購入致居りしが貴堂へ此度び御註文申上候處迅速誠實なるは未だ嘗て他の書肆に見ざる御營業振りと驚嘆仕り感謝と益々御清榮を祈る者に御座候（下略）

東京市神田區表神保町二番地
振替口座東京二四五〇五番

有精堂書店通信販賣部

第一高等學校教授 文學士 青木正先生、陸軍教授 文學士 佐野保太郎先生 共著 〔訂正增補第十版〕

徒然草新釋

洋裝 意匠優美
紙數 六〇〇頁
定價壹圓 送料八錢

徒然草が受驗者必讀の書なるは今更喋々を要せざる所なり然れども試みに左表を見よ思ひ半ばに過ぐるものあらむ。左表は最近僅かに十年間に出たる問題のみ而して徒然草より出でしものは實に此の如く多し

【高校】四五、大三、【女子高師】四二・四三
【廣島高師】大二【機關】大三・大四【士官】四一・大五
【海軍經理】四四・大二・大四【專門】四一・大二【東京高商】大四・大五
【山口高商】大二・大五【熊本高工】一【仙臺醫專】四〇
【新潟醫專】大三【東大農】四四【上田蠶絲】大元・大二
【東北農】大五【京都蠶絲】大五

然らば徒然草を研究せんには如何なる書に依るべきか曰く「徒然草新釋」！本書は實に著者新案の方法により一種獨得の注解を施せるものにして本書一冊を熟讀せば徒然草は固より他の國文書數十冊を研究するに値す。而もたゞに語釋のみならず文法的知識の如きも優に本書によりて之を養ふことを得べし。實に國文注釋界の珍たり。

陸軍教授 文學士 佐野保太郎先生著

三版

方丈記新釋

洋裝意匠頗優美
紙數約二〇〇頁
定價五十錢送料四錢

方丈記は徒然草と共に受驗必讀の書にて著者が雄大なる文筆は最に徒然草新釋の好評忽十版なるを以て證す
本書内容は先づ本文を掲げ篇頭に深切なる通俗文を對照し句々毎に他の語例を引き一々丁寧なる註釋が附し
あり類書の及ばざる痒きに手の届くが如し

文學士 佐野保太郎先生著

最新刊

增鏡新釋

洋裝意匠頗優美
紙數七五〇頁
定價壹圓三十錢
送料十二錢

增鏡は徒然草、方丈記と共に受驗必讀の書なるは今更喋々の要なく内容解釋凡て徒然草 方丈記と順應し註釋
の深切内容の充實は既に世に定評あり增鏡註釋中唯一の好參考書なりと某博士裏書されたり

自明治四十年度至大正六年度

文學士 佐野保太郎先生著

訂正增補

官立學校入學試驗

國語問題新釋

紙數五二〇頁
定價八十錢
送料八錢

若し完全なる書だにあらば時と金との經濟上獨學の師事に勝るや言を俟たず本書は其解說の明快懇切
加ふるに索引を附し出所を擧げて研究者の便を計れる固より類書と同日の論に非す
試驗問題は循環性なり國語漢文に於て殊に然るを見る著者は斯界の泰斗として
研究せらるゝ事一年有半全く類書中無比の模範答案たる事疑なし如何に詳細に
如何に丁寧なる解釋を附するや其眞價は實物に依て見よ

自明治三十九年度至大正六年度

文學士 佐野保太郎先生著

訂正增補

官立學校入學試驗

漢文問題新釋

紙數約五二〇頁
定價八十錢
送料八錢

本書夙に世に現はるゝや多大の歡迎を忝うし重ねるに五版を以てす全編に大々的訂正を施し更に大正
六年度を增加して茲に增訂版を出す希くは國語問題と共に併せ研究あらん事を

好評再版

英文和譯の基礎

第一高等學校教授　文學士　畔柳郁太郎先生校閲

本書特色は諸種の缺點を補ひ說明平易詳細に加ふるに最近十五年間試驗問題を參照す世にありふれたる同種の比にあらず著者は數年の研究に依り最も難解なる最も受驗問題に接觸せる部分を目下の各學校教科書より十課を基準に解釋なし殊に難句には最も深切なる解釋を施し所々に受驗問題を參照講義せる全く類書を拔く事遙に遠し

假裝美本　定價六十五錢　紙數三二〇頁　送料六錢

模範和文英譯法

コロンビア大學文學博士　早稻田大學講師　榊原彌先生著

著者はさきに米國南大學及びコロンビア大學を卒業し、歸國後慶應、早稻田、立教、日本、專修等の諸大學にて英語を敎授し、後再び渡米して日米間區に盡力し其間幾多の諸名士と意見を交換し、歸來主として彼の地一大新聞社の通信員として健筆を振ひつゝあり。其の在米十年間に得たる英文智識の一端は、この書によりて窺ふを得べし

洋裝美本　四六版約四〇〇頁　定價六十五錢送料六錢

文壇巨人　大町桂月先生著

誤れる文字文章

本書は先づ字畫・音訓・語句より進んで文法上幷に文章上知らず識らず陷り易き因襲的誤謬を指摘し何れも一々正誤を對照比較して深切丁寧に說明せられたるを以て最も有益なる作文寶典なりされば文筆を以て世に立たんと欲する者作文の秘訣を悟らんと欲する者國漢文受驗の志望を懷く者は勿論苟も誤りなき文章を作らんと欲する者は必ず本書一部を備へて机上の師友とせざるべからず

好評第八版　菊半截判洋裝美本　紙數四〇〇頁　定價六十錢　送料六錢

正しき用字法

內容　作文用字解・重要熟語・書き誤り易き文字・讀み誤り易き文字・一寸國語假名遣ひ・送り假名法・國字國訓・其他附錄物數稱呼・名乘

本書は既に學生諸君に定評あり出版日ならずして數千部を賣盡せしを以て之を實證す作文研究の參考として必ず一本を備へざるべからざる名寶典なり

好評第四版　菊半截判洋裝美本　紙數六〇〇頁　送料八錢

◉作文の傑文章の完用語の正は本書を備へて初めて成る

讀書作文界の珍

文壇の巨人大町桂月先生著

誤れる文字と文章と 正しき用字法

本書は先に誤れる文字文章、讀書作文用字法として二巻となし出版せしもの賣盡せし如何に有益なる作文寶典なるかは讀書界既に定評あり此度び先生一巻とするを便と思はれ大に訂正を加へ體裁の面目を一新し改めて此に出版せしもの出版日ならず數萬部を數す識らず陥り易き因襲的誤謬を指摘し何れも一々正誤を比較對照し作文用字解異同辯に於ては約二百餘頁に渡り深切丁寧に說明なし重要熟語、書き誤り易き文字、讀み誤り易き文字、一般國語、假名遣ひ、送り假名法、國字國訓、其他物數稱呼名乘等作文に關する一切を網羅せしもの苟しくも誤りなき文章を綴り作文研究の蘊奥を極めんと欲する諸賢は必ず一書を備へざるべからず。

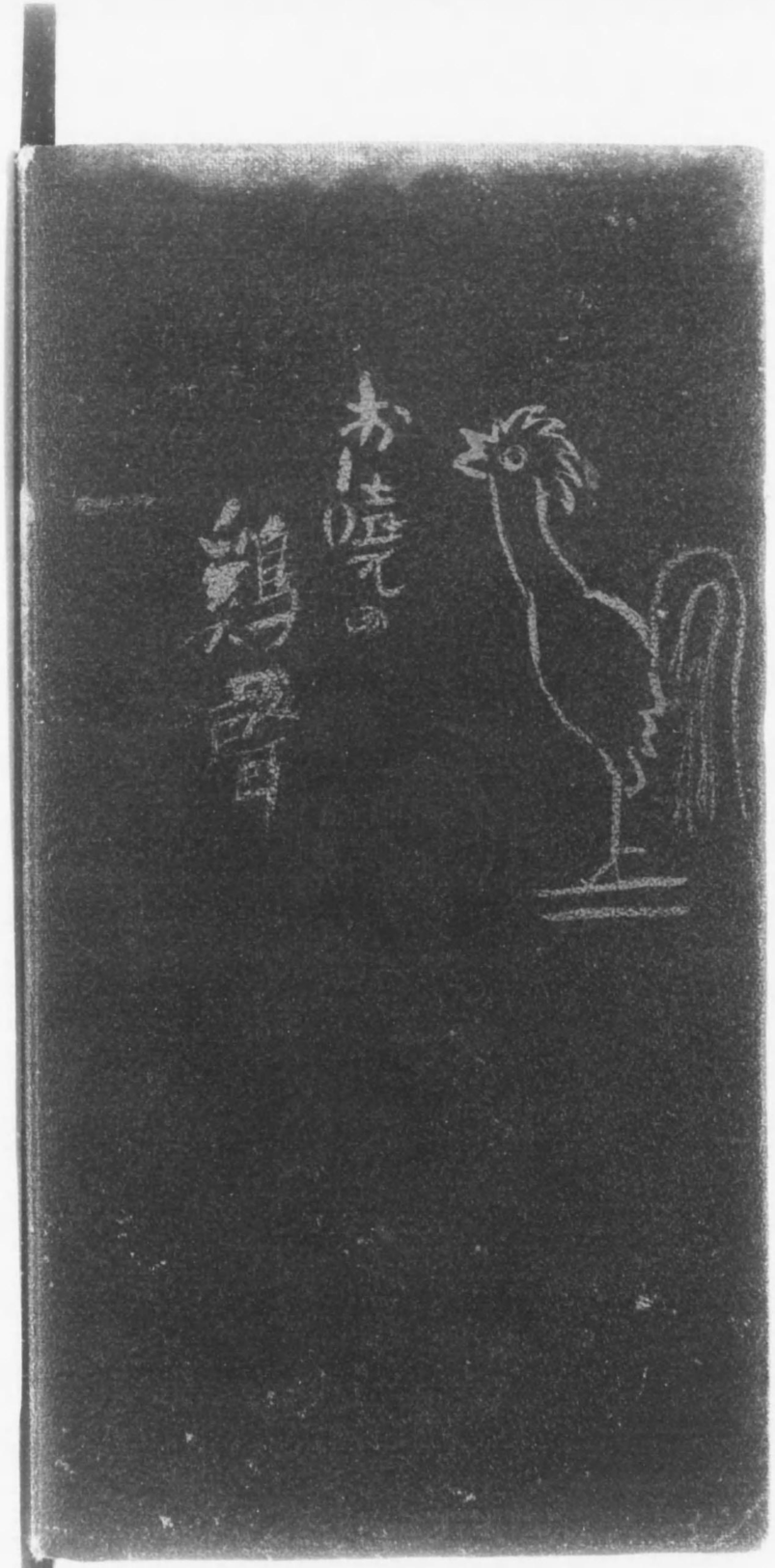
洋裝箱入頗る美本
紙數約一、000頁
定價壹圓三十錢
送料八錢

◉机上にあつて光彩を放ち手に取つて作文の蘊奥を極む

大正九年二月

本科之年

甫 [illegible]



終